

文化財		
地域番号	都道府県	地域協議会名
001	石川県	いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会
002	福井県	小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会
003	長野県	松本市
004	岐阜県	美濃市
005	愛知県	名古屋鉄道株式会社
006	滋賀県	日吉大社
007	熊本県	人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

地域番号	001	協議会名	いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
001-001	石川県立美術館 / 国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）		251～500	WEB
001-002	石川県立美術館 / 国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）		～250	アプリQRコード
001-003	石川県立美術館 / 国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）		251～500	看板
001-004	石川県立美術館 / 重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）		251～500	WEB
001-005	石川県立美術館 / 重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）		～250	アプリQRコード
001-006	石川県立美術館 / 重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）		251～500	看板
001-007	石川県立美術館 / 重要文化財 蒔絵和歌の浦図見台（まきえわかのおうもんからおり）		251～500	WEB
001-008	石川県立美術館 / 重要文化財 蒔絵和歌の浦図見台（まきえわかのおうもんからおり）		～250	アプリQRコード
001-009	石川県立美術館 / 重要文化財 緑地桐鳳凰文唐織 能装束（みどりじきりほうおうもんからおり）		251～500	WEB
001-010	石川県立美術館 / 重要文化財 緑地桐鳳凰文唐織 能装束（みどりじきりほうおうもんからおり）		～250	アプリQRコード
001-011	石川県立美術館 / 重要文化財 西湖図（せいこず）		251～500	WEB
001-012	石川県立美術館 / 重要文化財 西湖図（せいこず）		～250	アプリQRコード
001-013	石川県立美術館 / 重要文化財 色絵梅花図平水指（いろえばいかずひらみずさし）		251～500	WEB
001-014	石川県立美術館 / 重要文化財 色絵梅花図平水指（いろえばいかずひらみずさし）		～250	アプリQRコード
001-015	石川県立美術館 / 重要文化財 四季耕作図（しきこうさくず）		251～500	WEB
001-016	石川県立美術館 / 重要文化財 四季耕作図（しきこうさくず）		～250	アプリQRコード

001-017	石川県立美術館 / 古九谷（こくたに）	251～500	WEB
001-018	石川県立美術館 / 古九谷（こくたに）	～250	アプリQRコード
001-019	石川県立美術館 / 百工比照（ひゃくこうひしょう）	251～500	WEB
001-020	石川県立美術館 / 百工比照（ひゃくこうひしょう）	～250	アプリQRコード
001-021	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（1） 国指定重要無形文化財 工芸技法「陶芸－ 釉裏金彩」（ゆうりきんさい）	251～500	WEB
001-022	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（1） 国指定重要無形文化財 工芸技法「陶芸－ 釉裏金彩」（ゆうりきんさい）	～250	アプリQRコード
001-023	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（2） 国指定重要無形文化財 工芸技法「陶芸－ 彩釉磁器」（さいゆうじき）	251～500	WEB
001-024	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（2） 国指定重要無形文化財 工芸技法「陶芸－ 彩釉磁器」（さいゆうじき）	～250	アプリQRコード
001-025	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（3） 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸－ 蒔絵」（まきえ）	251～500	WEB
001-026	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（3） 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸－ 蒔絵」（まきえ）	～250	アプリQRコード
001-027	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（4） 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸－ 沈金」（ちんきん）	251～500	WEB
001-028	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（4） 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸－ 沈金」（ちんきん）	～250	アプリQRコード
001-029	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（5） 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸－ 髹漆」（きゅうしつ）	251～500	WEB

001-030	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (5) 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸— 髹漆」(きゅうしつ)	～250	アプリQRコード
001-031	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (6) 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸— 螺鈿」(らでん)	251～500	WEB
001-032	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (6) 国指定重要無形文化財 工芸技法「漆芸— 螺鈿」(らでん)	～250	アプリQRコード
001-033	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (7) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 彫金」(ちょうきん)	251～500	WEB
001-034	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (7) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 彫金」(ちょうきん)	～250	アプリQRコード
001-035	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (7) 選 択無形文化財 工芸技法「金工—(彫金) 加賀象嵌」(かがぞうがん)	251～500	WEB
001-036	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (7) 選 択無形文化財 工芸技法「金工—(彫金) 加賀象嵌」(かがぞうがん)	～250	アプリQRコード
001-037	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (8) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 鑄金」(ちゅうきん)	251～500	WEB
001-038	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (8) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 鑄金」(ちゅうきん)	～250	アプリQRコード
001-039	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (9) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 銅鑼」(どら)	251～500	WEB
001-040	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (9) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工— 銅鑼」(どら)	～250	アプリQRコード
001-041	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (10) 国指定重要無形文化財 工芸技法「木竹工 —木工芸」(もっこうげい)	251～500	WEB

001-042	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (10) 国指定重要無形文化財 工芸技法「木竹工—木工芸」(もっこうげい)	～250	アプリQRコード
001-043	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (11) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工—日本刀」(にほんとう)	251～500	WEB
001-044	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (11) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工—日本刀」(にほんとう)	～250	アプリQRコード
001-045	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (12) 国 指定重要無形文化財 工芸技法「金工・截 金」(きりかね)	251～500	WEB
001-046	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (12) 国指定重要無形文化財 工芸技法「金工・ 截金」(きりかね)	～250	アプリQRコード
001-047	石川県立美術館 / 重要無形文化財全般 (工芸部門を中心に) と人間国宝	251～500	WEB
001-048	石川県立美術館 / 重要無形文化財全般 (工芸部門を中心に) と人間国宝	～250	アプリQRコード
001-049	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (13) 加賀蒔絵 (かがまきえ)	251～500	WEB
001-050	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (13) 加賀蒔絵 (かがまきえ)	～250	アプリQRコード
001-051	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (14) 加賀友禅 (かが ゆうぜん)	251～500	WEB
001-052	石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (14) 加賀友禅 (かが ゆうぜん)	～250	アプリQRコード
001-053	石川県立美術館 / 石川県の伝統工芸 歴 史等全般	251～500	WEB
001-054	石川県立美術館 / 石川県の伝統工芸 歴 史等全般	～250	アプリQRコード
001-055	国立工芸館 建物 (旧軍第九師団司令部 庁舎、旧金沢偕行社)	251～500	WEB パンフレット
001-056	石川県立美術館 広坂別館 建物 (旧陸軍 第九師団長官舎)	251～500	WEB パンフレット
001-057	石川県立歴史博物館 赤レンガ建物 (旧陸 軍兵器庫)	251～500	WEB パンフレット

001-058	石川県立美術館	251～500	WEB
001-059	石川県立美術館	～250	アプリQRコード
001-060	石川県立美術館 / 尊経閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）	251～500	WEB
001-061	石川県立美術館 / 尊経閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）	～250	アプリQRコード
001-062	石川県立美術館 / 尊経閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）	251～500	看板
001-063	石川県立美術館 / 加賀藩御細工所（かがはんおさいくしよ）	251～500	WEB
001-064	石川県立美術館 / 加賀藩御細工所（かがはんおさいくしよ）	～250	アプリQRコード
001-065	石川県立美術館 / 前田家と加賀藩の概要	251～500	看板 WEB
001-066	石川県立美術館 / 石川県の伝統工芸 イン トログクシヨ	～250	看板 WEB

001-001

Male Pheasant Incense Burner

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Male Pheasant Incense Burner

This ceramic incense burner in the shape of a male pheasant is one of the museum's most prized pieces. It was crafted in the seventeenth century by renowned ceramic artist Nonomura Ninsei.

Ninsei is known as a master of Kyō ware, a style of painted pottery that arose in Kyoto. Ninsei's elegant pieces were highly sought after by Kyoto's samurai elite for use in *chanoyu*, or tea ceremony. Many surviving examples from Kyō ware's earliest days—like this Male Pheasant Incense Burner—are tea utensils. Typically, the host of a tea gathering places seasonal decorations in the tea room's tokonoma (alcove). Pheasants are traditionally associated with spring, so the burner may have been used at spring gatherings to set a seasonal tone.

Several aspects of this work demonstrate Ninsei's skill. The realistically rendered feathers are a fine example of *iro-e* overglaze enamel, a ground-breaking decorative technique that had just been introduced from China in Ninsei's time. In *iro-e*, the artist paints colored glazes over the surface of a previously glazed and fired piece. The item is then fired again at a lower temperature to fuse the two layers of glaze. Because the paints become fluid and change color during firing, the artist must have a thorough understanding of their behavior at various temperatures to achieve the desired effect.

The shaping of the pheasant is similarly masterful. It has an alert, lifelike bearing conveyed through its slightly cocked head, which Ninsei achieved through a careful layering of clay. Furthermore, the horizontal angle of the pheasant's long tail is

remarkably difficult to achieve, as clay tends to droop under its own weight or fracture during firing. Two small marks on the underside of the tail show that Ninsei used supports to maintain its position during the firing, but such methods alone do not guarantee success.

Ninsei was one of the foremost artisans of his day and among the first famed ceramicists to apply his own potter's mark: a signature-like stamp identifying the creator. This practice denoted a shift in thinking—by signing their works, potters elevated themselves from anonymous laborers to known, individual artists. On the Male Pheasant Incense Burner, Ninsei's mark can be seen on the inside of the lid (next to the smoke vents) and on the bottom of the piece.

The pheasant's skillfully rendered form and Ninsei's masterful application of overglaze enamels led to the piece being designated a National Treasure in 1951. Ninsei's Male Pheasant Incense Burner and its companion piece, the Female Pheasant Incense Burner, are on permanent display at the museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雄雉香炉

当館で最も重要な作品のひとつである雄雉の形をした陶製の香炉。17世紀、高名な陶芸家である野々村仁清によって制作された。

仁清は、京都で生まれた絵付け陶器である京焼の大成者として知られている。仁清の優美な作品は武士階級たちに、茶の湯や茶道具として大いに好まれた。この雄雉香炉のように、今も残っている京焼の初期の作品の多くは茶器である。通常、茶会の席では、亭主が床の間に花や季節の飾りを置くのが一般的である。雉は伝統的に春に関連付けられているため、この香炉は春の集まりで使われ、部屋に香りを漂わせ、季節感を演出したのであろう。

この作品には、仁清の高い技量を示すいくつかの点がある。羽根は、仁清の時代に中国からもたらされたばかりの画期的な装飾技法である「色絵」を用いて、写実的に表現されている。色絵とは、釉薬をかけて焼いた作品の上に、色釉を塗り重ねていく技法である。その後、再び低温で焼成し、2層の釉薬を融合させる。絵の具は流動性を持ち、焼成中に発色ため、陶芸家はさまざまな温度での絵具の挙動を熟知し、目的の効果を達成する必要がある。

雉の造形も見事なものである。わずかに傾いた頭部から生き生きとした佇まいが伝わってくるが、仁清は粘土を丁寧に重ねることでそれを実現した。また、雉の長い尾の水平な角度は、粘土が自重で垂れ下がったり、焼成中に割れたりするため、達成するのが非常に困難だ。尾の裏側にある2つの痕跡は、仁清が焼成中に支えを用いて尾の位置を維持したことを示しているが、このような方法は決して成功を保証するものではない。

仁清は当時の一流の職人のひとりであり、著名な陶芸家として最初に、作者を特定できるサインのような印、「陶印」を作品に施した。これは、陶芸家が無名の労働者から一人の芸術家として認知されるようになったことを意味している。この雄雉香炉では、蓋の内側（煙出しの横）と底に仁清の印が見られる。

巧みに表現された雉の形と、仁清の見事な色絵により、1951年に国宝に指定された。仁清の「雄雉香炉」は、「雌雉香炉」とともに、当館に常設展示されている。

001-002

Male Pheasant Incense Burner

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Male Pheasant Incense Burner

This incense burner in the shape of a male pheasant is one of the museum's most remarkable pieces. It was crafted in the seventeenth century by ceramic artist Nonomura Ninsei, a revered master of Kyō ware. The pheasant is considered exceptional even among Ninsei's many renowned works, and in 1951 it was designated a National Treasure.

Several aspects demonstrate Ninsei's mastery of his craft. For example, the long tail—this horizontal angle is remarkably difficult to achieve, as clay tends to droop under its own weight or fracture during firing. On the underside of the tail are two small marks showing where Ninsei placed supports to maintain its position in the kiln. The finished pose gives the pheasant an alert, vibrant appearance.

The colorful feathers and lifelike eyes are fine examples of *iro-e*, an overglaze enamel technique. *Iro-e* artists paint colored glazes over the surface of a previously glazed and fired piece, then fire it again to fuse the glazes. Each of the pheasant's feathers has been colored in green, blue, or brown, partially filled in with black, and finally outlined in gold.

While some decorative masterworks are purely ornamental, the Male Pheasant Incense Burner shows signs of past use. On the underside of the lid, the area around the vent holes shows discoloration from the smoke of burning incense.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雄雉香炉

当館で最も注目すべき作品の一つが、この雄雉の形をした香炉だ。17世紀、京焼の大成者として知られる陶芸家・野々村仁清が制作したものである。仁清の数ある名品の中でもこの雉は別格とされ、1951年に国宝に指定された。

この雉には、仁清の卓越した技術を示すいくつかの点がある。例えば、長い尾。この水平な角度を再現することは、粘土が自重で垂れ下がったり、焼成中に割れたりするため、達成するのは非常に難しいのだ。尾の裏側には、仁清が窯内での位置を維持するために支柱を立てたことを示す2つの痕跡がある。完成した姿は、生き生きとした活気のある雉を表現している。

カラフルな羽と生き生きとした目は、色絵技法の好例である。釉薬をかけて焼成した作品の表面に色釉を塗り、再度焼成して釉薬を定着させる。雉の羽は、緑、青、茶などの色で彩色され、黒で部分的に塗りつぶされ、最後に金で輪郭が描かれている。

装飾の名品には純粋に観賞用として作られたものもあるが、この雄雉香炉は使用された形跡がある。蓋の裏側には、香を焚いた煙で変色した通気孔の周辺が見られる。

001-003

Ninsei's Pheasants: Treasures of Overglaze Enamel

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
国宝 色絵雉香炉（いろえきじこうろ）
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ninsei's Pheasants: Treasures of Overglaze Enamel

The two pheasant-shaped incense burners in the center of the room are masterworks crafted by seventeenth-century ceramicist Nonomura Ninsei. Modeled after the green pheasant, they portray a mated pair: a brightly colored male and a muted female. They are exceptional even among Ninsei's many celebrated works.

Ninsei was active in Kyoto in the mid- to late seventeenth century. After training at kilns in Kyoto and Seto (in what is now southern Gifu Prefecture), he set up his own kiln near Ninnaji Temple in the foothills of western Kyoto. The techniques he developed there, particularly his use of overglaze enamels, were instrumental in the evolution of the city's distinctive Kyō ware.

Kyō ware was deeply intertwined with both life at court and tea culture. Many of the earliest surviving examples—including these incense burners—are utensils used in *chanoyu*, or tea ceremony. Incense is burned in the tea room to heighten the sense of purity and tranquility for the occasion.

Ninsei became one of the first among famed artisans to apply a personal potter's mark, a signature-like stamp identifying the creator. This practice signified a shift in thinking that elevated potters from anonymous laborers to known, individual artists.

Ninsei was also influential in the development of Kutani ware in Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures). The ruling Maeda family and their retainers deeply admired his style and acquired many of his works, including the male pheasant displayed here.

Plumage and Pigment: The Colorful Male

Ninsei was best known as a master of the potter's wheel, but this piece shows he was also skilled in handbuilding, painting, and glazing.

For example, the pheasant's tail: this long, perfectly horizontal extension from the main body is extremely difficult to produce, as clay tends to droop under its own weight or crack during firing. To counteract this, Ninsei placed supports beneath the tail as it went into the kiln, leaving two small marks on the underside.

Viewed from the front, the bird's head is very slightly cocked, giving it an alert, animated expression. To produce this pose, Ninsei had to account for the way clay shrinks and warps when fired. The ability to anticipate such changes is the mark of a master, and the close fit of the top and bottom halves of the burner are further evidence of Ninsei's skill. Note the continuity of the feather patterns across the split, which help to disguise the small gap.

The male's realistically rendered plumage is a fine example of *iro-e*, an overglaze enamel technique in which the artist paints colored glazes over the surface of a previously glazed and fired piece. The item is then fired again at a lower temperature to fuse the two layers of glaze. Because the paints change color and become fluid during firing, the potter must clearly envisage the desired effect and have a comprehensive understanding of the materials' behavior at various temperatures. Given that the *iro-e* technique had only recently been introduced from China in Ninsei's time, his recreation of the kaleidoscopic plumage of a male pheasant is remarkable.

The Male Pheasant Incense Burner was designated a National Treasure in 1951 under slightly unusual circumstances. Sometime in the late seventeenth or early eighteenth century, the Maeda family gifted it to one of their retainers, whose descendants eventually sold it to the Yamakawa merchant family in the late nineteenth century. The Yamakawas so highly treasured the piece that only a select few were allowed to see it. In fact, when the government wished to designate the work a National Treasure, the Yamakawas refused to bring it to Tokyo for the official exhibition and designation ceremony. As a result, the designation was granted without a public display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

仁清の雉：色絵釉薬の至宝

部屋の中央に置かれた2つの雉香炉は、17世紀の陶芸家、野々村仁清の代表作である。雉をモチーフに、色鮮やかな雄と淡い色の雌のつがいを表現している。この作品は、仁清の数ある代表作の中でも異彩を放つ作品である。

仁清は、17世紀中頃から後半にかけて京都で活躍した。京都や瀬戸（現在の岐阜県の南部）の窯元で修業をした後、京都西部の山麓にある仁和寺の近くに自分の窯を構えた。そこで培った上絵付けの技術は、京焼の発展に大きく貢献した。

京焼は、宮廷の生活や茶の文化と深く結びついていた。この香炉をはじめ、現存する最古の京焼の多くは、茶の湯、または茶道に使われた道具である。茶室で香を焚き、清らかで静かな時間を演出する。

仁清は名工の中でもいち早く、作者を特定するサインのような印、「陶印」を施した職人の一人である。これは、陶工を無名の労働者ではなく、一人の芸術家として位置づける考え方の転換を意味していた。

仁清はまた加賀藩（現石川県、富山県）の九谷焼の発展にも大きな影響を与えた。前田家の殿様やその家臣たちは、仁清の作風を深く理解し、ここに展示されている雄雉をはじめ、多くの作品を手に入れた。

羽毛と色彩：カラフルな雄

仁清は轆轤の名手として知られているが、この作品からは、手捻り、絵付け、釉薬にも長けていることがわかる。

例えば、この雉の尾。この胴体から完全に水平に長く伸びた尾は、粘土が自重で垂れ下がったり、焼成中に割れたりしやすいため、制作は至難の業である。そこで仁清は、尾の下に支柱を立てて窯に入れ、尾の裏側に小さな跡を2つ残している。

正面から見ると、首がわずかに傾いており、生き生きとした活気のある表情をしている。このポーズをとるために、仁清は焼成による粘土の収縮やゆがみを考慮しなければならなかった。このような変化を予測することができるのは匠の技であり、香炉の上下がぴつたりと合っているところも、仁清の腕前を物語っている。羽の模様は分割して連続させ、わずかな隙間を目立たなくしていることにも注目したい。

この雄のリアルに表現された羽毛は、色絵の好例である。この技法は、釉薬をかけて焼成した作品の表面に色釉をかけ、さらに低温で焼成して2層の釉薬を融合させるものだ。絵の具が発色し、焼成中に流動化するため、陶芸家は求める効果を明確にイメージし、さまざまな温度での材料の反応を総合的に理解する必要がある。仁清の時代に、中国から色絵の技法が日本に伝来して間もないことを考えると、万華鏡のような雄雉の羽の再現には目を見張るものがある。

この「雄雉香炉」が国宝に指定されたのは1951年で、少し変わった事情があった。17世紀末から18世紀初頭にかけて、前田家が家臣にこの作品を下賜し、その子孫が19世紀末に商家の山川家に売却した。山川家はこれを非常に大切に、限られた人にしか見ることを許さなかった。国宝に指定しようとしたとき、山川家は東京での公開と指定式を拒否した。その結果、公開されることなく

国宝に指定されたのである。

001-004

Female Pheasant Incense Burner

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Female Pheasant Incense Burner

This ceramic incense burner in the shape of a female pheasant was crafted in the seventeenth century by ceramic artist Nonomura Ninsei. Like its male counterpart, the female displays Ninsei's skillful sculpting and masterful use of overglaze enamel techniques. These talents cemented his renown as a master of Kyō ware, a style of painted pottery that arose in Kyoto and catered to the samurai elite.

Ninsei's elegant ceramics were highly sought after for use in *chanoyu*, or tea ceremony. In fact, many surviving examples from Kyō ware's early days—including the pheasant incense burners—are tea utensils. Typically, the host of a tea gathering places seasonal decorations in the tea room's tokonoma (alcove). Pheasants are traditionally associated with spring, so the burner may have been used at spring gatherings to scent the room and set a seasonal tone.

Female pheasants are less colorful than their male counterparts. Males have evolved flashy colors to attract mates, but evolution favors females whose patterning blends into the ground and helps them avoid predators. For the most part, Ninsei faithfully recreated the female pheasant's sober palette by using silver paints that oxidized in the kiln to achieve gradations of black and brown. On the head, however, Ninsei took some artistic license by adding a touch of color: a red-and-gold wattle and the tiniest slip of blue around the eyelid. He also gave the female feathered ear tufts that project like horns from the back of her head. Both the wattle and the ear tufts are found only on male pheasants, and various theories exist to explain their presence. One is that Ninsei used a male pheasant as a model, and while he knew to change the overall coloration, he did not realize female heads were different. Another conjecture is that

the “female” pheasant is actually a second male—a “nighttime” version that shows the male in shadow.

In the kiln, where clay shrinks and moves, producing complex shapes takes expert skill. The shaping of the pheasant’s body shows a high degree of mastery, with the tail jutting out at a 45-degree angle and the neck turned in a smooth arc toward the back, as if the bird is preening. In East Asian painting, this posture is a common way to represent the female of a pair.

Ninsei’s skill helped make him one of the most in-demand artisans in the country. He was one of the first famed ceramicists to apply a personal potter’s mark—a signature-like stamp to identify his work. This practice signified a shift in thinking that elevated potters from anonymous laborers to known, individual artists. Ninsei’s mark can be found on the base of this piece.

The Female Pheasant Incense Burner was designated an Important Cultural Property in 1960. Along with the Male Pheasant Incense Burner, it is on permanent display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雌雄香炉

この陶器は、17世紀、陶芸家・野々村仁清が制作した雄香の形をした炉である。雌は雄と同様、上絵付けの技法に優れ、造形も巧みである。これらの才能は、京焼の大成者としての名声を確固たるものにした。京焼は京都で生まれ、武家階級を対象とした絵付け陶器の様式である。

仁清の優美な作品は、茶の湯や茶道具として大いに好まれた。実際、今も残っている京焼の初期の作品の多くは、この雄雄香炉を含む茶道具である。通常、茶会の席では、亭主が床の間に季節の飾りを置くのが一般的である。雄は伝統的に春に関連付けられているため、この香炉は春の集まりで使われ、部屋に香りを漂わせ、季節感を演出したのであろう。

雄の雌は、雄に比べ色彩が乏しい。雄は相手を引きつけるために派手な色に進化した一方、雌は捕食者を避けるために地面に溶け込むような模様に進化した。仁清は、窯の中で酸化した銀の絵の具で黒や茶のグラデーションを作り、雌雄の地味な色調を忠実に再現している。しかし、頭部には、赤と金の肉垂と、まぶたのあたりにほんの少し青を入れるなどの工夫がされている。また、雌の方

は後頭部から羽毛のような耳が角のように突き出ている。肉垂も耳も雄の雉にしか見られないため、その存在にはさまざまな説がある。仁清は雄の雉をモデルにし、また雄と雌で全体の色調が変わることは知っていたが、雌の頭部が異なることまでは知らなかったのだろうという説。また、雉の雌は実はもう一羽の雄で、雄が影になっている「夜雉」であるという説もある。

窯の中では、粘土が縮んだり動いたりするので、複雑な形を作るには熟練の技が必要である。尾は45度に突き出し、首は背中に向かって滑らかな弧を描き、まるで羽毛を整えるなど、雉の体の造形は高度な習熟度を示している。東アジアの絵画では、このような姿勢は雌雄を識別するために用いられている。

仁清は、その技術によって、国内でも最も需要のある職人の一人となった。また、仁清は、陶芸家として初めて作者を特定できるサインのような印、「陶印」を作品に施した陶芸家の一人である。このマークは、陶芸家が無名の労働者ではなく、一人の芸術家として認知されるようになったことを意味する。この作品の底面には、仁清の陶印が入っている。

この雌雉香炉は1960年に重要文化財に指定された。この香炉は「雄雉香炉」とともに常設展示されている。

001-005

Female Pheasant Incense Burner

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Female Pheasant Incense Burner

This ceramic incense burner in the shape of a female pheasant was crafted in the seventeenth century by master ceramicist Nonomura Ninsei. Like its male counterpart, the female displays Ninsei's skillful shaping and masterful use of overglaze enamel techniques. This piece was designated an Important Cultural Property in 1960.

Ninsei used silver paints that oxidized in the kiln to create the figure's iridescent brown and gray plumage, achieving gradations that mimic a female pheasant's real-life coloring. On the head, Ninsei took some artistic license by adding a touch of color: a red-and-gold wattle and the tiniest slip of blue around the eyelid. Both are applied with an overglaze enamel technique called *iro-e*.

The shaping of the pheasant's body also shows a high degree of skill. The long, straight tail rises at a 45-degree angle, and the neck turns in a smooth arc toward the back, as if the bird is preening. In the kiln, where clay shrinks and warps, producing such exacting shapes takes considerable talent and experience.

Ninsei's elegant ceramics were highly sought after by the nobility and samurai elite for use in *chanoyu*, or tea ceremony. In fact, many surviving examples—including the pheasant incense burners—are tea utensils.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雌雉香炉

この陶器は、17世紀、陶芸家・野々村仁清が制作した雉の形をした香炉である。雌は雄と同様、上絵付けの技法に優れ、造形も巧みである。1960年に重要文化財に指定された。

仁清は、窯の中で酸化する銀の絵の具を使って、虹色に輝く褐色と灰色の羽を描き、本物の雉の雌の色に近いグラデーションを表現している。頭部には、赤と金の肉垂と、まぶたの周りにほんの少し青を入れるという、芸術的な工夫が施されている。いずれも「色絵」と呼ばれる上絵付けの技法である。

雉の体の造形も高度な技術を要する。この長くまっすぐな尾は45度の角度で上がり、首は背中に向かって滑らかな弧を描き、まるで羽繕いをしているように見える。粘土が収縮したり、ゆがんだりする窯の中で、このような正確な形を作り出すには、相当な才能と経験が必要である。

仁清の優雅な焼き物は、公家や武士階級が茶の湯や茶道具として好んで使用した。実際、雉香炉を含め、現存する多くの作品が茶道具である。

001-006

Silver and Gold: The Subtle Female いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 色絵雌雉香炉（いろえめすきじこうろ）
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Silver and Gold: The Subtle Female

The markings of green pheasants, like those of many birds, differ drastically between males and females. While the males have developed flashy colors to attract mates, females have muted grays and browns that help them blend into their surroundings and avoid predators.

Ninsei recreated that sexual dimorphism in his feathered pair. Despite the female's sober palette, her coloring required no less skill to create. In fact, the complex shading of the brown plumage was achieved by using silver paint. As the silver content oxidizes in the kiln, gradations of brown and black appear, mimicking the variegations in a female's dun coloring.

On the female's head, Ninsei took some artistic license. Female green pheasants do not have the red wattles or ear tufts that males do, but he included them in this piece. Perhaps Ninsei wished to add a hint of color and create a visual tie with the male. Another theory suggests that he had access only to a male pheasant as a model and altered the female's body coloring based on memory. A third, intriguing conjecture is that *both* pheasants are male. In this case, the "female" version would represent a male seen at night, when colors are muted in darkness.

Ninsei was skilled at anticipating changes the clay would undergo in the kiln, allowing him to produce complex shapes. This is evident in the bird's posture: the tail rises at a 45-degree angle and the neck turns in a smooth arc toward the back, as if the bird is preening. (This preening posture is a convention used in East Asian painting to designate the female of a pair.) The incense burner's vents are cut in the shape of feathers to help them blend into the pattern.

In recognition of its artistic merit, this piece was designated an Important Cultural Property in 1960.

Reuniting the Pheasant Pair

Because the two incense burners seem to form a male–female pair and are similar in size and style, they are thought to have been produced at the same time. However, the male was purchased by the Maeda family, and the female sold elsewhere. The female resurfaced in Tokyo in 1991, when its owner, Mizuno Fujiko, donated it to the museum. More than 300 years since the pheasants were first produced in Ninsei's kiln, the pair are reunited and on permanent display.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

銀と金：繊細なメス

多くの鳥類がそうであるように、雉も雄と雌でその模様が大きく異なる。雄は相手を引きつけるために派手な色をしているが、雌は周囲に溶け込み、外敵を避けるために落ち着いた灰色や茶色をしている。

この羽のペアは、その性差を再現したものである。雌の色調は地味だが、その彩色には熟練を要する。褐色の羽の複雑な陰影は、銀の絵の具で表現されている。窯の中で銀が酸化することで、茶色や黒のグラデーションが現れ、雌の褐色の色彩を表現している。

雌の頭部には、仁清が少し芸術的な表現を施してある。雌の雉には、雄のような赤い肉垂や耳がないが、この作品にはそれらがついている。おそらく、雄の雉と視覚的なつながりを持たせるために、色彩を加えたのであろう。また、本物の雉をモデルにしているが、雄しか手に入らないので、記憶を頼りに雌の色彩を変更したのではないかという説もある。また、2羽とも雄で、この「雌」は夜間に暗くなって色が薄くなった雄を表しているという説も興味深い。

仁清は、粘土窯の中でどのように変化するかを予測し、複雑な形を作り出すことに長けていた。これは鳥の姿勢から明らかである。尾は45度に上がり、首は背中に向かって滑らかな弧を描き、まるで羽繕いをしているようだ（この羽繕いの姿勢は、東アジアの絵画で雌雄を識別するために用いられるものである）。また、香炉の吹き出し口は、模様になじむように羽の形にカットされている。

この作品は、その芸術的価値が認められ、1960年に重要文化財に指定された。

雉のペアが再結成

この2つの香炉は雌雄の組み合わせのようで、大きさや様式が似ていることから、同時に制作されたものと思われる。しかし、雄は前田家に買い取られ、雌は別の場所に売られた。1991年、この雌は東京で所有者の水野富士子氏から寄贈された。仁清の窯でこの雉のペアが焼かれてから300年

余りの時を経て、二羽の雉が再び揃い、常設展示されることになったのである。

001-007

Maki-e Bookstand with Wakanoura Scenery

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 蒔絵和歌の浦図見台（まきえわかのうらずけんだい）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

***Maki-e* Bookstand with Wakanoura Scenery**

This seventeenth-century lacquered bookstand was crafted when Kanazawa's distinctive lacquerware style was still in its infancy. The exact provenance of the piece is unknown, but it is attributed to Shimizu Kuhei (?–1688).

Shimizu was born in Edo (now Tokyo) and learned his craft there. In the early seventeenth century, domain lord and influential patron of the arts Maeda Toshitsune (1593–1658) invited Shimizu to practice his art in Kaga domain (now Ishikawa Prefecture). Shimizu worked alongside fellow lacquer artist Igarashi Dōho II (1635–1697), and the two helped to establish Kaga lacquerware as a distinct and flourishing art form. Both men were masters of *maki-e*, a decorative technique in which metallic powders, such as gold dust, are applied to soft lacquer to create images. So renowned was their work that the term *maki-e* soon became synonymous with fine Kaga lacquerware.

The Maeda family that ruled Kaga domain was immensely wealthy—second only to the shogun himself—and they turned their resources to cultural pursuits. Luxury objects, such as this bookstand, were commissioned to display their wealth and prestige and were far more ornate than similar objects intended for daily use.

The bookstand depicts Wakanoura Bay in Wakayama Prefecture, a place of natural beauty that has inspired Japanese poets and authors for more than a millennium. Wakanoura Bay appears many times in the eighth-century *Man'yōshū*, the oldest extant collection of Japanese poems. The bookstand's imagery evokes a *Man'yōshū*

tanka poem:

*Wakanoura ni
shio michi kureba
kata wo nami
ashihe wo sashite
tazu naki wataru*

When the tide comes in
at Wakanoura Bay
and the tideland is submerged
the cranes cry out overhead
and wheel toward the reedy shore.

Looking closely at the scene, one can see that some elements stand out in relief, creating a textured, three-dimensional effect. This is achieved with a technique called *shishiai togidashi maki-e*, a combination of *togidashi* (burnished) and *taka* (raised) *maki-e*. In burnished *maki-e*, the design is created by applying gold powder to wet lacquer in low relief. After it dries, the piece is covered with another layer of black or clear lacquer. This layer is polished down with charcoal until the design is revealed, flush with the new surface. In raised *maki-e*, surface designs are built up with layers of lacquer and charcoal or clay dust before the metallic powder layer is added. *Shishiai togidashi* is often used in *maki-e* landscapes to give the composition a sense of depth.

The bookstand also displays other lacquer decoration techniques strongly associated with Ishikawa Prefecture, including gold and silver *kirikane* (the application of cut metal shapes as opposed to powders). The work is so finely done that generations of lacquer artists have studied it to hone their techniques.

As a masterpiece created during the formative period of Kaga *maki-e*, the bookstand was designated an Important Cultural Property in 1998.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒔絵和歌の浦図見台

この漆塗りの見台は、17世紀、金沢の特産品である漆器がまだ発展途上であった時代に作られた。正確なことはわかっていないが、清水九兵衛（?-1688）の作とされている。

清水は江戸（現在の東京）に生まれ、そこで漆工芸を学んだ。17世紀初頭、芸術家の支援者であった大名・前田利常（1593-1658）は、清水を加賀藩（現在の石川県）に招き制作にあたらせた。清水は、同じ漆工芸家の二代目五十嵐道甫（1635-1697）と共に、加賀漆器を独自の芸術として確立させることに貢献した。二人は、蒔絵の名手だった。「蒔絵」とは、漆の上に金粉などの金属粉を載せて絵を描く技法である。彼らの作品は高く評価され、やがて加賀漆器は「蒔絵」の代名詞となった。

加賀藩主・前田家は将軍家に次ぐ富を持ち、その財力を文化に注いでいた。この見台のような豪華な品々は、彼らの富と名声を示すために発注されたもので、日常的に使用される同様の品々とは比較にならないほど華麗なものである。

この見台には和歌山県の和歌の浦が描かれている。和歌の浦は千年以上にわたって日本の詩人や作家にインスピレーションを与えてきた自然美の宝庫である。和歌の浦は、8世紀の現存する日本最古の歌集「万葉集」に何度も登場する。この見台のデザインは、万葉集のある短歌を連想させる：

若の浦に
潮満ち来れば
潟をなみ
葦辺をさして
鶴鳴き渡る

和歌の浦に
潮が満ち
干潟が水に沈むと
鶴が頭上で鳴き
葦が生い茂る岸边に渡る

よく見ると、画像の一部（鶴・芦・浜辺など）が浮き彫りになっており、質感のある立体的な効果を生み出していることがわかる。これは肉合研出蒔絵と呼ばれる技法で、研ぎ出しと高蒔絵を組み合わせたものである。研出蒔絵は、濡れた漆に金粉を塗り、浮き彫りにしたものである。漆が乾いたら、黒や透明の漆を塗り重ねる。これを炭で磨くと、模様が浮かび上がってくる。高蒔絵では、漆と

木炭や粘土の粉を何層にも重ねて文様を作り、金属粉の層を作る。風景を意匠とする蒔絵には、奥行きを出すために肉合研出がよく使われる。

この見台には、このほかにも金銀切金（粉体ではなく、切削加工された金属を貼る手法）など、石川県にゆかりの深い漆芸の技法が施されている。その精巧な出来栄は、代々の漆工芸家が技を磨くために研究してきたほどである。

この見台は、加賀蒔絵の形成期を代表する傑作として、1998年に重要文化財に指定された。

001-008

Maki-e Bookstand with Wakanoura Scenery

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 蒔絵和歌の浦図見台（まきえわかのうらずけんだい）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

***Maki-e* Bookstand with Wakanoura Scenery**

This seventeenth-century lacquered bookstand is lavishly decorated with *maki-e*—a decorative technique in which metallic powders, such as gold dust, are applied to soft lacquer. It is attributed to Shimizu Kuhei (?–1688), one of the fathers of Kanazawa lacquerware and a master of *maki-e*.

Shimizu was born in Edo (present-day Tokyo) and learned his craft there. He moved to Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures) in the early seventeenth century at the invitation of the lord of Kaga, Maeda Toshitsune (1593–1658). Under the patronage of the wealthy Maedas, lacquerware techniques flourished in Kaga.

Looking closely at the scene, one can see that some elements stand out in relief, creating a textured, three-dimensional effect. This is achieved with a technique called *shishiai togidashi maki-e*, a combination of *togidashi* (burnished) and *taka* (raised) *maki-e*. Other techniques associated with Kanazawa lacquerware, such as gold and silver *kirikane* (the application of cut metal shapes as opposed to powders), were also used.

The image on the bookstand is of Wakanoura Bay in Wakayama Prefecture. It references a tanka poem that appears in an eighth-century poetry collection called the *Man'yōshū*:

Wakanoura ni

*shio michi kureba
kata wo nami
ashihe wo sashite
tazu naki wataru*

When the tide comes in
at Wakanoura Bay
and the tideland is submerged
the cranes cry out overhead
and wheel toward the reedy shore.

The bookstand was designated an Important Cultural Property in 1998.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒔絵和歌の浦図見台

この17世紀の漆塗りの見台は、蒔絵（金粉などの金属粉を柔らかい漆に塗る技法）で贅沢に装飾されている。金沢漆器の祖の一人であり、蒔絵の名手である清水九兵衛（?-1688）の作とされている。

清水は江戸（現在の東京）に生まれ、漆工芸を学んだ。17世紀初頭、加賀藩主・前田利常（1593-1658）に招かれ、加賀藩（現在の石川県と富山県）に移った。前田家の支援のもと、加賀では漆工芸の技術が栄えた。

よく見ると、画像の一部（鶴・芦・浜辺など）が浮き彫りになっており、質感のある立体的な効果を生み出していることがわかる。これは肉合研出蒔絵と呼ばれる技法で、研ぎ出しと高蒔絵を組み合わせたものである。このほかにも金銀切金（粉体ではなく、切削加工された金属を貼る手法）など、金沢漆器に関連する技法も用いられている。

この見台に描かれているのは、和歌山県の和歌の浦の風景である。8世紀の歌集『万葉集』に詠まれた短歌が題材になっている：

若の浦に
潮満ち来れば

潟をなみ

葦辺をさして

鶴鳴き渡る

和歌の浦に

潮が満ち

干潟が水に沈むとき

鶴が頭上で鳴き

葦が生い茂る岸辺に渡る

この見台は、1998年に重要文化財に指定された。

001-009

Brocade *Karaori* with Paulownia and Phoenixes

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 重要文化財
緑地桐鳳凰文唐織 能装束（みどりじきりほうおうもんからおり）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Brocade *Karaori* with Paulownia and Phoenixes

This brocade kimono is a *karaori*—a luxurious garment worn in noh theater by actors portraying female characters. The term *karaori* refers both to the garment and the type of fabric from which it is made. *Karaori* production flourished in Japan during the Edo period (1603–1867), but this particular example dates to the turn of the seventeenth century.

Karaori fabric, like all brocades, consists of a ground weave overlaid with a float weave. In other words, the weaver starts with a basic pattern of warp and weft threads, then adds in supplementary weft threads in certain areas to create an embroidery-like design that overlays the ground weave. Unlike true embroidery, the design is created as part of the weaving process, rather than stitched on afterward. In this garment, the ground weave is a dark green silk twill, while a pattern of phoenixes and flowering paulownia trees has been added using threads of white, pale blue-green, yellowish green, light grey, navy blue, yellow, and red.

Over the centuries, *karaori* became increasingly luxurious, and later versions often used lavish amounts of gold and silver thread in the design. *Karaori* worn in modern-day noh performances may weigh several kilograms and often sparkle under the lights. In contrast, this piece shows the colorful, but more sedate, style of the Momoyama cultural period (1573–1615). Another characteristic of this time period is the way the designs alternate in bands from the top of the garment to the bottom. For example, the phoenixes on the sleeves face left in the top row but right in the row below.

The noh theatrical tradition is highly stylized and performed by actors in masks and ornate costumes. The design of the costumes indicates the type of role an actor is playing. A *karaori* with a red ground weave, for example, is reserved for younger female characters. Other ground colors, like the green used here, indicate a middle-aged or older character. Regal motifs like the phoenix and paulownia usually signify someone of great majesty.

Ishikawa Prefecture has a robust noh tradition. The prefecture's precursor, Kaga domain, was ruled from the late sixteenth century until 1871 by the wealthy Maeda family, who invested heavily in artistic and cultural enterprises. They were passionate about noh, fostering and supporting the local Hōshō school of performers throughout their tenure.

As an early surviving example of *karaori*, this piece was designated an Important Cultural Property in 1974.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

桐と鳳凰の錦唐織

この錦の着物は「唐織」で、能楽の女形が着る豪華な衣装である。唐織とは、能の衣裳とそれを作る布の種類の両方を指す言葉である。唐織は江戸時代（1603-1867）に盛んに作られたが、これは17世紀初頭に作られたものである。

唐織は他の錦織と同様に、地織の上に浮織を重ねたものである。つまり、経糸と緯糸で基本的な柄を作り、その上に部分的に緯糸を補い、刺繍のように柄を重ねるのだ。刺繍とは異なり、デザインは後から縫い付けるのではなく、織りの工程で作られる。この着物は、地織が深緑の絹綾織で、白、淡い青緑、黄緑、ライトグレー、紺、黄、赤の糸で鳳凰と花桐の柄が描かれている。

その後、唐織はますます豪華になり、金糸や銀糸をふんだんに使ったデザインも多く見られるようになった。現代の能舞台で着用される唐織は、数キログラムの重さがあり、照明に照らされてキラキラと輝きを放つこともある。それに対して、この作品は、色鮮やかではあるが、落ち着いた雰囲気のある桃山文化時代（1573-1615）のスタイルである。また、衣服の上部から下部にかけて、図柄が交互に並んでいるのも、この時代の特徴である。例えば、袖の鳳凰は、上の段は左向きだが、その下の段は右向きである。

能楽の伝統は非常に様式化されており、面と華麗な衣装をつけた役者によって演じられる。装束のデザインは、役者がどのような役を演じるかを示している。例えば、赤い地色の唐織は、若い女性の役柄を表す。ここで使われているこの緑など、赤以外の地色は、中高年の役柄を表す。また、鳳凰や桐などの豪華なモチーフは、高傑（威厳）な人物を表す。

石川県は能の盛んな県である。県の前身である加賀藩は、16世紀後半から1871年まで芸術・文化事業に多大な投資を行った富豪の前田家の支配下にあった。前田家は能楽に熱心で、在任中は地元の宝生流の能楽師を育成・支援した。

現存する最古の唐織の例として、この着物は1974年に重要文化財に指定された。

001-010

Brocade *Karaori* with Paulownia and Phoenixes

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 重要文化財
緑地桐鳳凰文唐織 能装束（みどりじきりほうおうもんからおり）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Brocade *Karaori* with Paulownia and Phoenixes

This brocade kimono is a *karaori*—a luxurious garment worn in noh theater by actors portraying female roles. *Karaori* production flourished in Japan during the Edo period (1603–1867), but this particular example dates to the turn of the seventeenth century.

The term *karaori* can refer to both the garment and the fabric, which consists of a ground weave overlaid with a float weave. The float weave is a pattern of supplementary, decorative weft threads that are woven in on top of the base weft threads to create embroidery-like patterning.

Later *karaori* often used significant amounts of gold thread in their designs, but the more sedate style of this piece is typical of the Momoyama cultural period (1573–1615). Rather than gold, the pattern uses colored silk threads over a dark green twill ground. Another feature characteristic of the period is the way the brocade designs form alternating bands from the top of the garment to the bottom. The phoenixes on the sleeves, for example, face left in the top row but right in the one below it.

In the highly stylized noh tradition, costumes indicate what type of role an actor is playing. A *karaori* with a red ground weave, for example, is reserved for younger female characters. Other ground colors, like the green used here, indicate a middle-aged or older character. The regal motif of phoenixes and paulownia suggests someone of particular majesty.

This *karaori* was designated an Important Cultural Property in 1974.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

桐と鳳凰の錦唐織

この錦の着物は「唐織」で、能楽の女形が着る豪華な衣装である。唐織は江戸時代（1603-1867）に盛んに作られたが、これは17世紀初頭に作られたものである。

唐織とは、地織に浮織を重ねた能の衣裳と生地の間方を指す言葉である。浮織とは、地糸である緯糸の上に補助的に装飾用の緯糸を織り込み、刺繍のような模様にしたものである。

後の唐織は金糸を多用することが多いが、本品は桃山文化時代（1573-1615）らしい落ち着いた作風である。柄は金ではなく、深緑の綾織地に色糸を用いたものである。また、錦の図柄が衣服の上部から下部にかけて帯状に配されているのも、この時代の特徴である。例えば袖の鳳凰は、上段は左向きだが、下段は右向きである。

非常に様式化された能の伝統では、衣装は役柄を示すものである。例えば、赤い地色の唐織は、若い女性の役柄を表す。緑色の地色の唐織は、中高年の役柄を表す。鳳凰と桐をモチーフにした威風堂々たる姿は、高傑な人物を表す。

この唐織は1974年に重要文化財に指定された。

001-011

View of West Lake by Shūgetsu Tōkan (1496)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 西湖図（せいこず）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

***View of West Lake* by Shūgetsu Tōkan (1496)**

West Lake in Hangzhou, China, has appeared in Chinese legends, paintings, and literature since the Tang dynasty (618–907). Envoys, monks, and traders from Japan who went to China often visited Hangzhou during their travels, and the lake became well known among Japanese literati. Over time, West Lake came to epitomize Chinese ideals of natural beauty, capturing the imaginations of Japanese poets, painters, and aristocrats.

This hanging scroll dates to 1496, and it is the earliest extant Japanese depiction of West Lake. It was painted by Shūgetsu Tōkan (dates unknown), who studied under renowned painter Sesshū Tōyō (1420–1502). Originally, the painting was attributed to Sesshū himself because the brushwork of the mountains, temples, and trees is notably similar to Sesshū’s painting style. However, the inscription in the upper left corner of the painting suggests a different origin.

The text reads, “This image of West Lake in Hangzhou was done on the third day of the third month of the ninth year of Hongzhi (1496) at the State Guesthouse in Beijing.” Records show that Sesshū was not in China in 1496, but Shūgetsu was. Shūgetsu likely sketched the lake in person, then later referred to Chinese paintings of the lake to complete his version while staying at the Beijing State Guesthouse. Because of the information provided in this inscription, the work was properly credited to Shūgetsu.

The names of different locations are written on the painting, such as “Six Bridges”

underneath the line of bridges and “Lingyin Temple” above a small building nestled between the Northern and Southern Peaks in the center-back of the painting. Although Shūgetsu had to compress the scene to fit it on the paper, it is a realistic, almost map-like depiction with buildings and walls drawn cleanly and precisely. The realistic style lent credibility to the work, as it was proof that the painter had seen the landscape with his own eyes. Later Japanese painters, particularly those from the renowned Kanō school, used Shūgetsu’s work as a model for their own paintings of the lake.

The Kanō School, established by Kanō Masanobu (1434–1530), dominated Japanese painting for over 300 years, receiving patronage from wealthy samurai, aristocrats, and the Ashikaga and Tokugawa shogunates. Kanō School artists specialized in ink paintings of Chinese subjects, such as Chinese landscapes and Buddhist patriarchs. During the 1600s, Kanō painters who were unable to travel to West Lake themselves drew upon Shūgetsu’s depiction of West Lake to produce their own works. Each artist added his own touch to the composition and brushwork, emphasizing certain features while minimizing others.

The museum holds four paintings of West Lake. In addition to Shūgetsu’s, there are versions by Kanō Motonobu (1476–1559), Kanō Kōi (?–1636), and Kanō Tanyū (1602–1674). In the three later works, the mountains are taller, the buildings are less prominent, and clouds shroud the lake, creating a more ethereal tone. Compared to the faithful—albeit compressed—depiction of the lake by Shūgetsu, the works produced by Kanō School painters focus more on artistic ambiance. They also demonstrate a greater blend of Chinese and Japanese painting styles. Although the paintings are not usually on display due to their fragility, detailed images can be found on the museum’s website.

Shūgetsu’s *View of West Lake* was designated an Important Cultural Property in 1950.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西湖図、秋月等観（1496年）作

中国杭州にある西湖は、唐の時代（618-907）から中国の伝説や絵画、文学に登場する場所である。中国に渡った日本の使節や僧侶、商人たちは、旅の途中でしばしば杭州を訪れ、日本

の文人たちの間でも西湖はよく知られるようになった。やがて西湖は中国の理想的な自然美を表現し、日本の詩人や画家、貴族の心をとらえた。

本図は、1496年に描かれた掛け軸で、現存する日本最古の西湖の絵である。これは雪舟等楊（1420-1502）に師事した秋月等観（年代不詳）によって描かれたものである。山や寺院、樹木の筆法が雪舟の画風に酷似していることから、当初は雪舟の筆とされていた。しかし、本図の左上隅にある款記は、その出所を示唆している。

「杭州西湖図、弘治九年（1496）三月三日、北京の会同館にて描かれた」と記されている。1496年当時、雪舟は中国にいなかったが、秋月がいたことが記録に残っている。秋月はおそらく西湖を写生し、その後、北京の会同館に滞在しながら中国の絵画を参考にして完成させたと思われる。この碑文があることで、この作品は正しくは秋月の作品であるとされた。

橋の下には「六橋」、中央奥の北高峰と南高峰に挟まれた小さな建物の上には「靈隠寺」と、それぞれの地名が書かれている。秋月が紙面に収まるように縮めて描いたとはいえ、建物や壁がきれいに描かれ、地図のようにリアルな描写である。この写実的な描写は、絵師が自分の目で見たことを証明するものであり、作品に信憑性を与えたものであった。後世の日本画家、特に狩野派の画家たちは、この秋月の作品を手本に湖水画を描いていった。

狩野正信（1434-1530）が開いた狩野派は、武士や貴族、足利将軍家、徳川将軍家などから支援を受け、300年以上にわたって日本画壇を支配した。狩野派の画家たちは、中国の山水画や仏教の中心人物など、中国を題材とした水墨画を得意としていた。1600年代、西湖を訪れることができなかった狩野派の画家たちは、秋月が描いた西湖を参考にしながら作品を制作していった。構図や筆法に工夫を凝らし、ある部分は強調し、ある部分は抑えるなど、それぞれの画家が独自の表現で西湖を描いた。

当館には、西湖を描いた4枚の絵画がある。秋月のほか、狩野元信（1476-1559）、狩野興以（?-1636）と狩野探幽（1602-1674）が描いたものである。後三者は、山が高くなり、建物が目立たず、雲が湖を覆い、より幽玄な雰囲気が漂う。湖の様子は、圧縮されてはいるが秋月の忠実な描写に比べ、狩野派の画家たちの作品は、より芸術的な雰囲気に重点がおかれている。また、中国と日本の画風がより融合している。絵は壊れやすいため通常展示されていないが、当館のホームページで詳細な画像を見ることができる。

秋月の「西湖図」は、1950年に重要文化財に指定された。

001-012

View of West Lake by Shūgetsu Tōkan (1496)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 西湖図（せいこず）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

***View of West Lake* by Shūgetsu Tōkan (1496)**

West Lake in Hangzhou, China, has featured in Chinese legends, paintings, and literature since the Tang dynasty (618–907). Japanese visitors to China often went to Hangzhou during their travels, and the lake came to epitomize Chinese ideals of natural beauty that captured the imaginations of Japanese poets, painters, and aristocracy.

This hanging scroll dates to 1496 and is the earliest extant Japanese depiction of West Lake. It was painted by Shūgetsu Tōkan (dates unknown), who studied under renowned painter Sesshū Tōyō (1420–1502).

The inscription in the upper left corner of the hanging scroll reads, “This image of West Lake in Hangzhou was done on the third day of the third month of the ninth year of Hongzhi (1496) at the State Guesthouse in Beijing.” Shūgetsu likely sketched the lake when he visited it, then later referred to Chinese paintings of the lake to complete his work.

The names of different locations are written on the painting, such as “Six Bridges” underneath the line of bridges and “Lingyin Temple” above a small building nestled between the Northern and Southern Peaks in the center-back of the painting. It is a realistic, almost map-like depiction of the lake. This realism made the painting a credible reference for later Japanese painters, who attempted their own West Lake depictions during the Edo period (1603–1867).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西湖図、秋月等観（1496年）作

中国杭州にある西湖は、唐の時代（618-907）から中国の伝説や絵画、文学に登場する場所である。中国を訪れた日本人は、旅先で杭州を訪れることが多く、中国の自然美を象徴する湖として、日本の詩人や画家、貴族の心を捉えた。

本図は、1496年に描かれた掛け軸で、現存する日本最古の西湖の絵である。雪舟等楊（1420-1502）に師事した秋月等観（年代不詳）が描いたものである。

掛け軸の左上には、「杭州西湖図、弘治九年（1496）三月三日、北京の会同館にて描かれた」と記されている。西湖を訪れた際に写生し、その後、中国の絵画を参考にして完成させたようだ。

橋の下には「六橋」、中央奥の北高峰と南高峰に挟まれた小さな建物の上には「靈隠寺」と、それぞれの地名が書かれている。まるで地図のような湖のリアルな描写である。このリアルさは、江戸時代（1603-1867）に西湖を描こうとした後世の日本画家にとって、信頼できる参考資料となった。

001-013

Water Jar (*Mizusashi*) with Plum Blossoms

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /

重要文化財 色絵梅花図平水指（いろえばいかずひらみずさし）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Water Jar (*Mizusashi*) with Plum Blossoms

This water jar was made by ceramicist Nonomura Ninsei, a master of Kyoto's renowned ceramic style, Kyō ware. In 1950, the water jar was designated an Important Cultural Property for its artistic excellence and as an archetypal piece of seventeenth-century tea ware.

Ninsei was active in Kyoto in the mid- to late seventeenth century. After studying in the pottery centers of Arita (Saga Prefecture) and Seto (Gifu Prefecture), he set up his own kiln in Kyoto under the patronage of Kanamori Sōwa (1584–1656), founder of the Sōwa school of tea. Sōwa guided the development of Ninsei's style to suit his tea philosophy and helped promote the potter's works among other members of the imperial court.

Water jars, called *mizusashi*, are used in tea ceremony (*chanoyu*). They hold fresh water that is used to fill the kettle and rinse the tea bowls. In tea styles where the host carries the utensils into the tea room during the gathering, the *mizusashi* is generally brought in first. Often, however, *mizusashi* are placed in the tea room beforehand due to their large size and considerable weight when filled. This one is 23.4 centimeters in diameter.

The vessel's plum tree design was made using *iro-e*, an overglaze enamel technique in which the artist paints colored glazes over the surface of a previously glazed and fired piece. The item is then fired again at a lower temperature to fuse the two layers of glaze. The paints change color due to chemical reactions and become fluid during

firing, so the potter must have a thorough understanding of the materials' behavior to achieve the desired effect.

Ninsei often used thick layers of the yellowish-white glaze seen here as a base for his colorful designs. On this piece, the plum tree and its blossoms are rendered in red, black, and green glazes, using gold paint to add definition. Silver paint, which oxidizes over time, is applied on some of the flowers to achieve the slightly shiny gray color. Note how Ninsei skillfully evokes the lichen-covered bark of an older tree with lightly shaded green on the trunk and branches.

Ninsei was also influential in the development of Kutani ware in Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures). The ruling Maeda family and their retainers deeply admired his style and acquired many of his works.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

梅花の水指

京都の代表的な陶磁器である京焼の大成者、陶芸家・野々村仁清の作の水指である。1950年、17世紀の茶器の典型として、その優れた芸術性から重要文化財に指定された。

仁清は、17世紀半ばから後半にかけて京都で活躍した人物である。有田（佐賀県）や瀬戸（岐阜県）で学んだ後、京都で宗和流茶道の開祖・金森宗和（1584-1656）の支援のもと自らの窯を構えた。宗和は、仁清の作風と宗和の茶道哲学を一致させるように指導し、朝廷の人々に仁清の作品を広めることに貢献した。

水指は「ミズサシ」と呼ばれ、茶の湯で使われる。釜に水を入れたり、茶碗をすすぐためのものである。お茶会の際、亭主が茶室に道具を持ち込むスタイルでは、水差しを先に持ち込むのが一般的だ。しかし、水差しはサイズが大きく、水を入れるとかなりの重さになるため、あらかじめ茶室に置かれることが多い。これは直径23.4cmの大きさである。

この作品の梅の木は、釉薬をかけて焼いた作品の上に色釉をかける「色絵」技法で作られたものである。その後、再び低温で焼成し、2層の釉薬を融合させる。絵の具が化学反応によって発色したり、焼成中に液体になったりするため、陶芸家は材料の挙動をよく理解していなければ、思うような効果を得ることができない。

仁清は、色彩豊かな図柄を表現するために、このようなやや黄みを帯びた白色の釉薬をベースとして厚く塗り重ねることが多かった。この作品では、梅の木と花が赤、黒、緑の釉薬で描かれ、金彩で立体感を出している。花の部分には、時間の経過とともに酸化する銀彩を使って、少し光沢のあるグレーを表現している。また、仁清が幹や枝に施された緑色の濃淡で、樹木の樹皮に付着した地衣類を巧みに表現している。

また、仁清は加賀藩（現在の石川県、富山県）の九谷焼の発展にも大きな影響を与え、藩主前田家やその家臣たちは仁清の作風を深く称賛し、多くの作品を所蔵した。

001-014

Water Jar (*Mizusashi*) with Plum Blossoms

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 色絵梅花図平水指 (いろえばいかずひらみずさし)
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Water Jar (*Mizusashi*) with Plum Blossoms

This water jar was made by Nonomura Ninsei, a master of Kyō ware ceramics. A skillful and archetypal work of seventeenth-century tea ware, it was designated an Important Cultural Property in 1950.

Ninsei was active in Kyoto in the mid- to late seventeenth century. After studying in the pottery centers of Arita (Saga Prefecture) and Seto (Gifu Prefecture), he set up his own kiln in Kyoto under the patronage of Kanamori Sōwa (1584–1656), founder of the Sōwa school of tea ceremony (*chanoyu*). Ninsei subsequently became known in court circles for producing tea utensils, such as this water jar. During a tea gathering, such vessels hold the fresh water that is used to fill the kettle and rinse the tea bowls.

The plum tree design was made using *iro-e*, an overglaze enamel technique in which the artist paints colored glazes over the surface of a previously glazed and fired piece. The item is then fired again at a lower temperature to fuse the two layers of glaze.

Ninsei often used thick layers of the slightly yellowish-white glaze seen here as a base for his colorful designs. On this piece, the plum tree and its blossoms are rendered in red, black, and green glazes, with gold paint to add definition. Note how Ninsei skillfully evokes the lichen-covered bark of an older tree with lightly shaded green on the trunk and branches. Silver paint, which oxidizes with time, is used on some of the flowers to achieve the slightly shiny gray color.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

梅花の水指

この水指は、京焼の大成者の一人である野々村仁清の作である。17世紀の茶器の原型ともいえるべき優れた作品として、1950年に重要文化財に指定されている。

仁清は、17世紀半ばから後半にかけて京都で活躍した。有田（佐賀県）や瀬戸（岐阜県）の窯元で学んだ後、宗和流茶道の創始者である金森宗和（1584-1656）の支援を受けて京都に窯を構えた。その後、仁清はこの水指などの茶器を制作し、朝廷にその名を広めた。茶会ではこれらの容器に、釜に水を入れたり、茶碗をすすぐための清水を入れておく。

この梅の木のデザインは、釉薬をかけて焼いた作品の上に色釉をかける「色絵」技法で作られたものである。その後、再び低温で焼成し、2層の釉薬を融合させる。

仁清は、色彩豊かな図柄を表現するために、このようなやや黄みを帯びた白色の釉薬をベースとして厚く塗り重ねることが多かった。この作品では、梅の木とその花は、赤、黒、緑の釉薬で描かれ、金彩で変化をつけている。また、幹や枝に施された緑色の濃淡で、樹皮に付着した地衣類を巧みに表現していることにも注目していただきたい。花の一部には、時間の経過とともに酸化する銀彩を使い、やや光沢のある灰色を表現している。

001-015

Agriculture in the Four Seasons by Kusumi Morikage (1600s)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 四季耕作図（しきこうさくず）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

***Agriculture in the Four Seasons* by Kusumi Morikage (1600s)**

This pair of folding screens depicts the customs of seventeenth-century villagers over the course of the four seasons. They were created by the painter Kusumi Morikage (ca. 1620–1690). Kusumi was originally part of the prestigious Kanō School of painting, which prospered between the fifteenth and seventeenth centuries. Kusumi studied under Kanō Tanyū (1602–1674), one of the most successful Kanō painters of the Edo period (1603–1867), but eventually left the school and developed his own painting style depicting rural life in Japan.

Depictions of rural life, such as those of agricultural activities or silk production, are a genre of painting that came from China. This genre, called *kankai-ga*, became popular in the Muromachi period (1336–1573). The paintings were intended, in part, to educate rulers about the daily life of their subjects and remind them of the hardships their people faced. Through the paintings, rulers could see that the people in their domains were working hard, and that they should be treated with compassion. The images also may have been used to educate children of the samurai class.

Many Japanese artists—Kusumi among them—produced paintings of rural life that closely imitated Chinese models, even depicting the people in them with Chinese clothing and dwellings. However, these folding screens are noteworthy because they show Japanese customs, not Chinese. The landscapes, buildings, clothing, and activities illustrated in these screens represent Japanese life in the seventeenth century.

Another unique aspect of the screens is that the seasons are depicted in sequence from

left to right. Traditionally, Japanese writing, picture scrolls, and screen paintings progress from right to left. In this work, Kusumi has reversed the order of the seasons, starting on the left with spring and progressing to winter on the right.

The screens have six panels each. Snow covers the treetops and roofs in the first two spring panels. In the next few, the snow disappears, and people can be seen crossing the bridge, fishing in the river, and working in the fields. Figures in the fifth panel are relaxing under the trees in summer. The scene then moves to autumn, where people are hard at work in the fields. In the final panels of the second screen, there is a bustle of activity as people prepare for winter. Children are playing, and an official can be seen collecting the annual tax following the harvest season.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

四季耕作図、久隅守景（1600年代）作

17世紀の村人の四季折々の風習を生き生きと描いた、一対の屏風である。作者は画家・久隅守景（1620年頃－1690年頃）。久隅はもともと、15世紀から17世紀にかけて隆盛を極めた狩野派の画家である。久隅は、江戸時代に最も活躍した狩野派の画家のひとりである狩野探幽（1602-1674）に師事したが、やがて退塾し、日本の農村生活を描いた独自の画風を確立した。

農耕や絹の生産など農村の生活を描いた絵は、中国から伝わった絵画のジャンルである。「鑑戒画」と呼ばれ、室町時代（1336-1573）に流行した。これらの絵画は、統治者に領民の日常生活を教え、その苦労を思い起こさせるという目的もあった。絵を通して領民が懸命に働いていること、思いやりをもって接するべきことを知ることができた。また、武士階級の子供たちの教育にも使われたかもしれない。

久隅をはじめとする多くの日本画家は、中国の農村生活を模倣し、中国風の衣服や住居を身にまとった人々も描いている。しかし、この屏風が注目されるのは、中国ではなく、日本の風習を描いている点である。この屏風に描かれている風景、建物、衣服、風習は、17世紀の日本人の生活を表現している。

また、季節が左から右へと順に描かれているのもユニークな点である。日本の文字や絵巻物、屏風絵は、右から左へと進んでいくのが伝統的なスタイルである。この作品では、季節の順序を逆にし、左から春、そして右に冬へと続いている。

屏風はそれぞれ6面ある。最初の2面の春の絵では、雪が梢や屋根を覆っている。次の数面では雪が消え、橋を渡る人、川で釣りをする人、畑で働く人が描かれている。5面目の人物は、夏の木の下でくつろいでいる。そして場面は秋へと移り、人々は畑仕事に精を出している。2画面目の最後の面では、冬支度の喧騒が描かれている。子供たちが遊び、収穫期になると役人が年貢を取り立てる姿が見られる。

001-016

Agriculture in the Four Seasons by Kusumi Morikage (1600s)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要文化財 四季耕作図（しきこうさくず）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

***Agriculture in the Four Seasons* by Kusumi Morikage (1600s)**

This pair of folding screens depicts the customs of ordinary people during the Edo period (1603–1867) over the course of the four seasons. The screens, which have six panels each, were created by seventeenth-century painter Kusumi Morikage (ca. 1620–1690). Kusumi was originally part of the prestigious and influential Kanō School of painting, but he went on to develop his own style of painting rural life in Japan.

Paintings of rural life constituted a specific genre in Chinese art. They were intended to remind the emperor to have compassion for his toiling subjects. When this genre was introduced to Japan during the Muromachi period (1336–1573), Japanese artists reproduced not only the general theme, but also the Chinese landscapes, clothing, and customs. Kusumi's *Agriculture in the Four Seasons* was original in that he changed the scene from Chinese to Japanese: the scenery, buildings, and activities in these screen paintings portray Japan in the seventeenth century.

Another unique aspect of this piece is that the seasons are depicted in sequence from left to right. Traditionally, Japanese writing, picture scrolls, and screen paintings are viewed from right to left. In this work, Kusumi has reversed the order of the seasons, starting with spring on the left and progressing to winter on the right.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

四季耕作図、久隅守景（1600年代）作

江戸時代（1603-1867）の庶民の風習を四季折々に描いた一対の屏風である。この屏風は、17世紀の画家・久隅守景（1620年頃－1690年頃）が制作したもので、それぞれ6面で構成されている。久隅はもともと名門・狩野派に属していたが、その後、日本の農村生活を描いた独自の画風を確立した。

中国美術において、農村の生活を描いた絵は特殊なジャンルであった。天皇が労働する民衆を思いやるためのものであった。室町時代（1336-1573）にこのジャンルが日本に伝わると、一般的なテーマだけでなく、中国の風景や衣服、風習なども再現された。久隅の「四季耕作図」は、中国から日本へ舞台を移した点で独創的であった。この屏風に描かれている風景、建物、活動などは、いずれも17世紀の日本を描写している。

また、この作品のユニークな点は、季節が左から右へと順番に描かれていることだ。日本の文字、絵巻物や屏風絵は、右から左へ見るのが伝統的な見方である。この作品では、季節の順序を逆にし、左から春、そして右に冬を描いている。

001-017

Ko-kutani Ware

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 古九谷（こくたに）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Ko-kutani Ware

Kutani ware porcelain is distinguished by its colorful overglaze enamel decorations. Its history comprises two distinct periods. *Ko-kutani*, or “old Kutani,” refers to the earliest pieces produced in the latter half of the seventeenth century. After that, production ceased for about 100 years. The style was revived at the beginning of the nineteenth century, and later pieces are thus known as *saikō-kutani*, or “revival Kutani.”

Kutani ware production began in the mid-seventeenth century with the discovery of porcelain stone, a rare and necessary ingredient for porcelain, in the village of Kutani (in what is now southern Ishikawa Prefecture). The area was part of Daishōji domain, which was governed by a branch of the Maeda family. At the time, Arita, on the southern island of Kyushu, was the only place in Japan that produced true porcelain, and imports from China had diminished due to political unrest. The Maedas thus saw an opportunity to build a local porcelain industry.

A kiln was established in Kutani sometime around 1640. The pieces it produced were strongly influenced by pottery from Arita, where potters had begun crafting overglaze enamel pieces in red, yellow, green, blue, and black in the 1630s. Similarly, the overglaze designs of *ko-kutani* are distinguished by a palette of green, yellow, purple, navy blue, and red, now referred to as the *kutani gosai* (literally “five colors of Kutani”). The designs were generally outlined in black and the glaze applied in thick layers to achieve deep, bold coloration.

Ko-kutani designs are now loosely divided into two groups. The “colored” (*iro-e*) style

uses all five colors, which is why it is sometimes also referred to as the “five-color style” (*gosaite*). *Iro-e* designs leave some of the white field of the base porcelain visible. In contrast, the “blue style” (*aote*) excludes red and uses just two or three of the other colors in designs that often completely cover the surface of the porcelain. Intricately patterned yellow backgrounds are common in *aote* designs.

Production seemingly ceased around 1700, ending the *ko-kutani* period. Because of the kiln’s limited scale and period of production, there are relatively few remaining examples of true *ko-kutani*. However, later potters have recreated and expanded on its styles, so the coloration and motifs of *ko-kutani* ware remain a vital part of modern Ishikawa ceramics.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古九谷

九谷焼は、色鮮やかな上絵付けが特徴である。その歴史は、2つの異なる時代から成り立っている。古九谷は、17世紀後半に作られた初期の作品を指す。その後、約100年間、生産が途絶えた。19世紀初頭に九谷焼は復活し、「再興九谷」と呼ばれるようになった。

九谷焼は17世紀半ば、九谷村（現在の石川県南部）で磁器に必要な希少な材料である陶石が発見されたことから始まった。この地域は、前田家の分家が治める大聖寺藩の一部であった。当時、日本で本格的な磁器を生産していたのは南九州の有田だけであり、中国からの輸入は政情不安により減少していた。そこで、前田家は磁器の地場産業を生み出す機会を見出した。

1640年頃、九谷に窯が建てられた。有田では、1630年代から赤、黄、緑、青、黒などの釉薬が上絵付けに用いられるようになり、後藤の作風はその影響を強く受けている。古九谷の上絵付けは、緑、黄、紫、紺、赤の同じような配色が特徴で、現在では「九谷五彩」と呼ばれている。絵柄の輪郭を黒で描き、釉薬を厚くかけることで、深みのある大胆な色彩を表現するのが一般的であった。

現在、古九谷は大きく2つに分類されている。色絵は5色すべてを使うため、五彩手とも呼ばれることがある。色絵では素地の白地が少し見えるのが特徴である。これに対し、青手は赤を除いた、他の2～3色だけを使い、磁器の表面を完全に覆い尽くすようにデザインされることが多い。青手では、精巧な模様が施された黄色地のものが多い。

1700年頃に生産が終了し、古九谷の時代は終わりを告げた。窯の規模や生産期間が限られていたため、真の古九谷は比較的少数しか残っていない。しかし、後世の陶芸家たちがその作風を再現し、発展させたため、古九谷の色彩やモチーフは、現代の石川県の陶芸に欠かせないものとなっている。

001-018

Ko-kutani Ware

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 古九谷（こくたに）

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Ko-kutani Ware

Kutani ware porcelain is distinguished by its bold overglaze enamel decorations in a palette of five colors called the *kutani gosai*: green, yellow, purple, navy blue, and red.

The history of Kutani ware is divided into two distinct periods. *Ko-kutani* (“old Kutani”) refers to porcelain produced from approximately 1655 to the end of the seventeenth century. *Ko-kutani* ware was created at a kiln under the patronage of the ruling Maeda family. After the kiln ceased production, there was a hiatus of around a century before Kutani ware was revived. Pieces produced after this gap are called *saiko-kutani*, or “revival Kutani.”

Ko-kutani styles are now loosely divided into two groups. The “colored” (*iro-e*) style uses all five colors, which is why it is sometimes also referred to as the “five-color style” (*gosai-te*). *Iro-e* designs leave some of the white field of the base porcelain visible. In contrast, “blue style” (*ao-te*) excludes red and uses just two or three of the other colors in designs that often completely cover the surface of the porcelain. Intricately patterned yellow backgrounds are particularly characteristic of *ao-te* pieces.

Given the limited scale and production period of the original kiln, relatively few examples of true *ko-kutani* ware remain. However, thanks to the influence the style had on later potters, its coloration and motifs remain a vital part of the Ishikawa ceramic tradition.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古九谷

九谷焼は、緑、黄、紫、紺、赤の5色の九谷五彩と呼ばれる色彩で、大胆な上絵付けが特徴的な陶磁器である。

九谷焼の歴史は、大きく2つの時代に分けられる。古九谷とは、1655年頃から17世紀末頃までに作られた磁器を指す。古九谷は、前田家の支援のもと、窯で作られたものである。窯が製造を中止した後、約100年ぶりに九谷焼が再興された。それ以降に作られたものを「再興九谷」と呼んでいる。

古九谷は現在、大きく2つに分類されている。色絵は五色すべてを使うので、五彩手と呼ばれることもある。色絵は素地の白地が少し見えるのが特徴である。これに対し、青手は赤を除き、他の2～3色だけを使い、表面を完全に覆い尽くすようにデザインされることが多い。特に、黄色を基調とした精巧な模様が青手の特徴である。

窯は規模も生産時期も限られていたので、真の古九谷は比較的少数しか残っていない。しかし、後世の陶芸家に与えた影響もあり、その色調や文様は石川県の陶芸を語る上で欠かせないものとなっている。

001-019

The Hyakkō Hishō: A Lord's Collection of Decorative Craft Samples

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 百工比照（ひゃくこうひしょう）

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hyakkō Hishō: A Lord's Collection of Decorative Craft Samples

The Hyakkō Hishō is a seventeenth-century collection of small articles, swatches, and illustrations representing decorative crafts from across Japan. It was conceived by Maeda Tsunanori (1643–1724), the fifth lord of Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures). The collection comprises eleven boxes—over 2,000 items in total—that exemplify superior craft techniques of the 1600s.

The Collector

Maeda Tsunanori was a meticulous, scholarly man who valued collecting books, documents, and decorative arts and crafts. Like many of his contemporaries, he was strongly influenced by the ideas of Chinese Neo-Confucianist Zhu Xi (1130–1200), who encouraged “investigating things to extend knowledge.” In keeping with this philosophy, Tsunanori believed that closely observing decorative crafts (a form of “knowledge” stemming from human creativity) would give him insight into the fundamental patterns making up the physical world. Tsunanori was unusual in applying this philosophy to decorative arts and crafts, making the Hyakkō Hishō a unique and precious resource.

To form the collection, Tsunanori had artisans make samples for him. He also gathered items from the Maeda family's residences in Kaga and Edo (now Tokyo). He even purchased items from other domains, and when an owner refused to sell, had copies made or illustrations drawn. Approximately 85 to 90 percent of the collection was gathered by Tsunanori; after his death, his descendants continued to expand it. However, the lack of organization of Box Eleven—thought to have been a temporary

“sorting box”—suggests that the collection was never completed or fully catalogued.

Contents

The collection contains samples of *maki-e* lacquer decoration, metalwork, woodwork, *washi* paper, leather, and cloth, as well as illustrations of garments, family crests (*kamon*), and more.

Box One contains, among other things, samples of *maki-e*. Especially notable are the squares of *nashiji nuri-iro*, one of the earliest *maki-e* styles. The style uses a fine gold powder called *nashiji* (literally, “pear-skin surface”) made of irregularly sized particles. When sprinkled over a lacquered base, the powder creates a texture that resembles the skin of an Asian pear. The *nashiji maki-e* squares are arranged to show a progression of application techniques and colorings. In this way, the samples would have served as useful teaching tools for artisans as well as a reference for specific designs and styles of *maki-e*.

Box Two holds many colorful illustrations of martial items, including various campaign jackets (*jinbaori*) that were worn over armor to protect samurai from wind and rain. Tsunanori likely wanted to collect the jackets themselves, but as they were symbols of rank for their samurai owners, it was impossible for him to acquire them. Instead, Tsunanori had the campaign jackets carefully depicted on paper and stored the illustrations in the Hyakkō Hishō collection.

Many of the boxes contain actual items—not samples—that have seen practical use. Boxes Three and Four contain metal fittings, Boxes Five and Six contain ornamental nail covers, and Box Seven holds intricately designed drawer handles. The remaining boxes contain decorative finials, samples of wood and leather, drawings of drawer knobs and nail covers, blueprints, and items that were never properly organized and stored.

The gold and enameled nail covers in Box Six are particularly splendid. Some are designed to resemble cages containing birds or insects; others show flowers blooming from the cages. The nail covers were interior decorative fixtures in the Maeda family

residence in Edo before being added to the Hyakkō Hishō.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

百工比照：大名の工芸標本集

百工比照は、17世紀に日本各地の工芸品を表す小物や見本、図版を集めたものである。加賀藩（現石川県、富山県）5代藩主・前田綱紀（1643-1724）の発案によるものである。1600年代の優れた工芸技術を示す11箱、計2,000点余りを収蔵している。

収集家

前田綱紀は几帳面な学者で、書物や文献、工芸品などの収集に努めた。同時代の多くの人と同様、綱紀は中国の新儒学者・朱熹（1130-1200）の「格物致知」という思想に強く影響を受けていた。この思想に基づき、綱紀は装飾工芸（人間の創造性に由来する「知」）をよく観察することで、物理的な世界を構成する基本的なパターンを見出すことができると信じていた。この思想を工芸品に応用したのは綱紀にとって珍しく、「百工比照」は他に類を見ない貴重な資料となった。

このコレクションは、綱紀が職人に見本を作らせたものである。また、加賀や江戸（現在の東京）の前田家の邸宅から収集したものもある。また、他藩のものを購入し、売却を拒否された場合は、複製や挿絵を描いてもらったりもした。コレクションの約85～90%は綱紀が集めたもので、綱紀の死後も子孫によって拡充された。しかし、第11号箱は一時的な「仕分け箱」であったと思われ、整理されていないことから、完全な目録作成には至らなかったと考えられる。

内容

蒔絵、金工、木工、和紙、皮革、布の見本や、衣服、家紋などの図を収録している。

第1号箱には、蒔絵の見本などが収められている。特に注目すべきは、初期の蒔絵様式のひとつである梨子地塗色類の升目である。梨地とは、不規則な大きさの粒子からなる「梨地」と呼ばれる細かい金粉を使用する。漆塗りの下地に粉を蒔くことで、梨の皮のような質感を表現するものである。梨地蒔絵の升目は、塗り方と色調の変遷を示すように配置されている。このように、蒔絵のデザインやスタイルの参考になるとともに、職人の教材としても役立ったであらう。

第2号箱には、風雨を防ぐために鎧の上に羽織る陣羽織など、色鮮やかな武具の図版が多数収められている。綱紀は陣羽織そのものを収集しなかったのだろうが、陣羽織は武士の身分の象徴でもあり、入手は不可能であった。そこで綱紀は、陣羽織を丁寧に紙に描かせ、その図版を百工比照のコレクションに収めたのである。

箱の中には、見本ではなく、実際に使用されたものが多く含まれている。第3・4号箱は金具、第5・6号箱は装飾用の釘隠し、第7号箱は複雑なデザインの引き出しの取っ手が入っている。残りの箱には、装飾用のフィニアル、木や革のサンプル、引き出しの取っ手や釘隠しの図面、設計図、また、まだきちんと整理・保管されていないものなどが入っている。

特に、第6号箱の金とエナメル釘隠しは見事である。鳥や昆虫を入れた鳥かごをイメージしたものや、鳥かごから花が咲いているようなデザインのものもある。この釘隠しは、百工比照に収蔵される以前は、江戸の前田家の邸宅にあった室内装飾品である。

001-020

The Hyakkō Hishō: A Lord's Collection of Decorative Craft Samples

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 百工比照（ひゃくこうひしょう）

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Hyakkō Hishō: A Lord's Collection of Decorative Craft Samples

The Hyakkō Hishō is a seventeenth-century collection of samples representing decorative arts and crafts throughout Japan. It includes swatches displaying craft techniques, craft illustrations, and many small, crafted objects. There are over 2,000 items in total, spanning approximately 50 years of the early Edo period (1603–1867).

The collection has 11 boxes. The first two boxes hold mainly folding books, but there are also drawers containing samples of wood and lacquer. The remaining boxes contain stacked drawers of items and craft samples.

There are samples of *maki-e* lacquer, metalwork, woodwork, paper, leather, and cloth, as well as illustrations of different types of *haori* jackets and family crests (*kamon*). Highlights include the square samples of *nashiji nuri-iro*—one of the earliest *maki-e* lacquering techniques—in Box One, and the elaborate decorative nail covers from the Maeda family's residence in Edo (now Tokyo) in Box Six.

The fifth lord of Kaga domain, Maeda Tsunanori (1643–1724), engineered the creation of the Hyakkō Hishō. He was a meticulous, scholarly man who valued collecting books and documents, and later his interests grew to include decorative arts and crafts.

Approximately 85 to 90 percent of the collection was gathered by Tsunanori; the rest was collected by his successors. Tsunanori had samples made and also collected items from the Maeda family's residences. He even purchased items from other domains,

and when an owner refused to sell, had copies made or illustrations drawn.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

百工比照：工芸標本集

百工比照は、17世紀に日本各地の工芸品や美術品の見本を集めたものである。その中には、工芸技法を示す見本や工芸図、工芸小物も多く含まれている。江戸時代前期（1603-1867）の約50年間に渡り、合計2,000点余りが収集された。

コレクションは11箱ある。最初の2箱は帖仕立の折本が中心で、木や漆の見本が入った引き出しもある。残りの箱には、品物や工芸品の見本が入った引き出しが積み重ねられている。

蒔絵、金工、木工、紙、皮革、布の見本のほか、羽織や家紋の図版もある。第1号箱の、蒔絵の初期技術であるの梨子地塗の角型見本、第6号箱の前田家の江戸（現在の東京）の邸宅の精巧な釘隠しなどが見どころである。

百工比照は、加賀藩5代藩主・前田綱紀（1643-1724）が考案したものである。几帳面な学者で、書物や文献の収集に努め、後に美術工芸品にも興味を持つようになった。

コレクションの約85～90%は綱紀が収集したもので、残りは後継者によって収集されたものである。綱紀は見本をつくらせたり、前田家の邸宅から集めたりした。また、他藩から購入し、売却を拒否された場合は、複製や挿絵を描かせることもあった。

001-021

Yūri-kinsai Underglaze Gold Leaf いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（１）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「陶芸－釉裏金彩」
（ゆうりきんさい） 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

***Yūri-kinsai* Underglaze Gold Leaf**

Yūri-kinsai is a relatively new underglaze technique for ceramics in which designs are created with pieces of cut gold leaf and gold paint. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 2001.

Gold has long been used to decorate ceramics. Overglaze gold paint (applied after firing) was used in China as far back as the Song dynasty (960–1279). Examples imported to Japan in the seventeenth century led potters in Arita (in what is now Saga Prefecture) and Kutani (in present-day Ishikawa Prefecture) to incorporate gold paint into their designs. Over time, the practice evolved to use gold foil, instead, in a technique called *kinrande*, or “gold brocade.”

Gold has a tendency to melt or distort at the high temperatures most ceramic glazes require for proper vitrification. That is why gold decoration like *kinrande* is usually an overglaze technique, applied as the final step and sealed with a lower-temperature firing. However, this means the gold remains near the surface and is prone to wearing off over time.

In the early 1960s, Ishikawa potter Takeda Aritsune (1888–1976) developed a new technique called *yūri-kinsai*. It involves sandwiching the gold leaf between two layers of transparent, low-temperature glaze; this protects the gold from damage and gives it a softer sheen.

The *yūri-kinsai* process begins with a ceramic vessel fired with a high-temperature glaze. Then, the artist draws the design on tracing paper, figuring out how best to cut the necessary pieces from gold foil sheets measuring roughly 11 square centimeters. Each piece is given a number corresponding to a place in the design. The delicate gold leaf, usually around 1/10,000 of a millimeter thick, is placed between two thick sheets of paper onto which the design has been copied. The pieces are then cut out by hand. More complex works may require hundreds of small shapes. Next, the artist prepares the ceramic for application, dabbing on a thin layer of low-temperature glaze as adhesive and transferring the pattern from the tracing paper. The tiny pieces of gold leaf are applied one by one using tweezers. Even a stray breath can be enough to damage the fragile material, so the process requires the utmost care and concentration.

Once the gold leaf has been applied, details can be added with gold paint or powder and by scratching lines through the gold with a needlelike tool. After drying the design, the artist paints the surface with a transparent low-temperature glaze, taking care not to displace any of the gold pieces, and sends it to a final firing.

Artists can achieve varied expressions with *yūri-kinsai* by using silver and platinum leaf, by overlapping sections of leaf, or by using gold leaf of varying thickness to create different textures and opacities.

Another Ishikawa artist associated with the *yūri-kinsai* technique is Yoshita Minori (1932–), who was designated a Holder of Important Intangible Cultural Heritage in 2001.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

釉裏金彩

釉裏金彩は、切り出した金箔片と金泥で文様を描く、比較的新しい陶磁器の下絵付け技法である。2001年に重要無形文化財に指定された。

金は古くから陶磁器の装飾に用いられてきた。中国では古く宋の時代（960-1279）から金彩（焼成後に塗布）が行われていた。日本には17世紀に渡来し、有田（現在の佐賀県）や九谷（現在の石川県）の陶芸家たちが金彩を施した作品を制作するようになった。その後、金箔を

使うようになり、金欄手と呼ばれる技法に発展した。

金は、釉薬がガラス化する際の高温で溶けたり歪んだりする性質がある。そのため、金欄手などの金装飾は、最終工程で施される上絵付けの技法で、より低温の焼成で封じ込められるのが一般的である。しかし、これでは金が表面近くに残り、時間が経つとすり減りやすくなる。

1960年代前半、石川県の陶芸家・竹田有恒（1888-1976）は、「釉裏金彩」という新しい技法を開発した。金箔を2層の透明な低温釉薬で挟み込むことで、金箔を傷から守り、柔らかな光沢を持たせることができる。

釉裏金彩は、まず高温の釉薬で陶磁器を焼成するところから始める。そして、トレーシングペーパーに絵柄を描き、11センチ四方の金箔からどのように必要な形を切り出すかを考える。それぞれのピースには、デザイン上の場所に対応する番号が付けられている。厚さ1万分の1ミリほどの繊細な金箔を、デザインを写し取った2枚の厚い紙の間に挟み込む。ピースは手作業で切り出される。複雑な作品になると、何百もの小さな形が必要になることもある。次に、接着剤となる低温釉薬を薄く塗り、トレーシングペーパーからパターンを転写して、陶磁器に貼り付けるための下準備を行う。ピンセットで小さな金箔を一枚一枚貼っていく。息がかかっただけでも傷つきやすいので、細心の注意と集中力が必要となる。

金箔を貼り付けたら、金色の絵の具や金粉を塗り、針のような道具で金箔を引っ掻き、線をひくなどして、細部を描き加えていく。乾燥させた後、透明な低温釉薬で金箔をずらさないように塗り、本焼きをする。

名人は銀箔やプラチナ箔を用い、箔を重ねたり、金箔の厚さを変えて質感や不透明度を変えたりすることで、多彩な釉裏金彩の表現が可能になる。

2001年に重要無形文化財保持者に認定された吉田美統（1932-）も、この「釉裏金彩」技法にゆかりのある石川県の作家である。

001-022

Yūri-kinsai Underglaze Gold Leaf いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (1)
国指定重要無形文化財 工芸技法 「陶芸－釉裏金彩」
(ゆうりきんさい) 【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

***Yūri-kinsai* Underglaze Gold Leaf**

Yūri-kinsai is a relatively new underglaze technique for ceramics in which designs are created with pieces of cut gold leaf and gold paint. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 2001.

Gold has been used to decorate Japanese ceramics since the seventeenth century, but it was usually applied with overglaze techniques that leave it near the surface and vulnerable to wear over time. In the early 1960s, Ishikawa potter Takeda Aritsune (1888–1976) developed an underglaze technique for applying gold leaf and paint, which came to be known as *yūri-kinsai*. His method both protects the gold from damage and gives it a softer sheen.

The *yūri-kinsai* process begins with cutting pieces of the design out of delicate gold leaf, which is prone to tears and wrinkling if mishandled. The pieces are then carefully attached with a thin layer of glaze to a ceramic vessel previously fired with a high-temperature glaze. Additional detail work can be done with gold paint and gold powder or by scratching lines into the gold with a needlelike tool. Once the design has dried, a final layer of transparent glaze is carefully applied, and the vessel is fired at a low temperature, leaving the gold design sandwiched between several layers of glaze.

Another Ishikawa artist famous for the *yūri-kinsai* technique is Yoshita Minori (1932–), who was designated a Holder of Important Intangible Cultural Heritage in 2001.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

釉裏金彩

釉裏金彩は、切り出した金箔片と金泥で文様を描く、比較的新しい陶磁器の下絵付け技法である。2001年に重要無形文化財に指定された。

金は17世紀頃から日本の陶磁器に用いられてきたが、上絵付けの技法が一般的で、表面に近い部分であるため、経年変化による摩耗に弱かった。1960年代初頭、石川県の陶芸家、竹田有恒（1888-1976）は下絵付けに金箔や絵の具を用いる、「釉裏金彩」と呼ばれる技法を開発した。この技法は、金箔を傷から守り、柔らかな光沢を与えるものである。

釉裏金彩は取り扱いを誤ると破れやシワが生じやすい繊細な金箔からデザインの一部を切り出るところから始まる。それをあらかじめ高温の釉薬で焼いた陶器に、薄い釉薬で丁寧に接着していく。さらに金泥や金粉を使ったり、針のような道具で金地に線を引いたりすることで、細部まで表現することができる。絵柄が乾いたら、最後に透明な釉薬を丁寧に塗り、低温で焼成すると、何層もの釉薬の間に金色の絵柄が挟まれた状態になる。

2001年に重要無形文化財保持者に認定された人間国宝の吉田美統（1932-）も、この「釉裏金彩」の技法で有名な石川県の作家である。

001-023

Saiyū Glazing

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（2）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「陶芸—彩釉磁器」
（さいゆうじき） 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Saiyū Glazing

Saiyū is a modern glazing technique invented by ceramicist Tokuda Yasokichi III (1933–2009) and characterized by vividly colored glazes that fuse to create fine gradations. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1997.

Tokuda Yasokichi III was born in Komatsu, Ishikawa Prefecture, to a famed Kutani ceramics family headed by his grandfather Tokuda Yasokichi I (1873–1956). Yasokichi I is known for his skilled use of overglaze enamels and for reengineering the glazes used in seventeenth-century *ko-kutani* pottery. He also created many original colors. Yasokichi III showed a similar proficiency with glazes and was selected to appear in the prestigious Japan Fine Arts Exhibition for the first time at just 22 years of age.

Yasokichi III was particularly interested in the “blue” (*aote*) overglaze style of *ko-kutani*. This style is distinguished by its avoidance of the color red in favor of deep green, yellow, purple, and navy blue designs. He was experimenting with ways to apply these glazes to a more modern aesthetic. Using higher-than-normal firing temperatures, he found—by accident—that the glazes not only fused to the bisque but melted into one another, blending into hazy spectrums of color often compared to auroras or supernovas. Yasokichi III named these fluid, psychedelic gradations *saiyū*.

Saiyū glazing stands out in the Kutani ceramic tradition for its bold departure from traditional forms and motifs, yet it rests on traditional glaze compositions that go back to the very origin of the art form. The Ishikawa Prefectural Museum of Art holds nine

characteristic *saiyū* works by Yasokichi III that demonstrate his decidedly modern sensibility and the range of innovative expressions he made possible.

In 1997, recognition of Yasokichi III's work led to the designation of *saiyū* as an entirely new category of Important Intangible Cultural Heritage. That same year, he was named a Holder of Important Intangible Cultural Heritage charged with preserving and promoting *saiyū* glazing. Yasokichi III died in 2009, but he passed the techniques of *saiyū* to his eldest daughter, who assumed the family title of Yasokichi IV (1961–).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

彩釉磁器

彩釉は、陶芸家・三代目徳田八十吉（1933-2009）が考案した現代釉薬の技法で、色鮮やかな釉薬が溶けて細かいグラデーションを描くのが特徴である。1997年に重要無形文化財に指定された。

三代目徳田八十吉は石川県小松市の九谷焼の名家に生まれた。祖父は、初代徳田八十吉（1873-1956）。初代八十吉は、17世紀の古九谷の釉薬を改良（古い作品を研究して技術を復元）したことで知られている。また独自の色彩を数多く生み出している。三代目八十吉も同様の釉薬を得意とし、若年22歳で日本美術展覧会に初入選を果たしている。

三代目八十吉は、古九谷の青手の上絵付に特に関心を寄せていた。このスタイルは、赤を使わず、緑、黄、紫、紺などの濃い釉薬を使うのが特徴だ。三代目八十吉は、この釉薬を現代的な美学で表現することを試みていた。そして、通常よりも高い温度で焼成したところ、釉薬がビスクと融合するだけでなく、互いに溶け合い、オーロラや超新星に例えられるような霞がかった色のスペクトルになることを、偶然にも発見したのである。八十吉は、このような流動的で幻想的なグラデーションを、彩釉と名付けた。

彩釉は、九谷焼の原点である伝統的な釉薬の配合に基づきながら、伝統的な形やモチーフから大きく逸脱した、九谷焼の中でも突出した存在である。石川県立美術館には、三代目八十吉の特徴的な彩釉作品9点が収蔵されており、彼の現代的な感性と斬新な表現の幅を見ることができる。

1997年、八十吉の功績が評価され、彩釉はまったく新しい重要無形文化財に指定された。同

年、彩釉の保存と普及を目的として重要無形文化財の保持者に認定された。三代目八十吉は2009年に死去したが、彩釉の技術を長女に伝え、長女が四代目八十吉（1961-）を襲名した。

001-024

Saiyū Glazing

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（2）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「陶芸—彩釉磁器」
（さいゆうじき） 【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Saiyū Glazing

Saiyū is a modern glazing technique invented by Tokuda Yasokichi III (1933–2009) and characterized by vividly colored glazes that fuse to create fine gradations. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1997.

Yasokichi III was the third generation of the Tokuda family to advance the art of Kutani ware. He studied under his grandfather, the first Yasokichi (1873–1956), who recreated the lost glazes used in seventeenth-century *ko-kutani* ware. Yasokichi I was also known for his skill with overglaze enamel techniques—a legacy his grandson would continue.

Yasokichi III was particularly interested in the “blue” (*aote*) overglaze enameling of *ko-kutani*. This style is distinguished by its avoidance of red in favor of deep green, yellow, purple, and navy blue glazes. He was experimenting with ways to apply these glazes to a more modern aesthetic when he accidentally discovered the liquid, psychedelic color gradations he called *saiyū*. The effect is achieved by using higher-than-normal firing temperatures, causing the glazes not just to fuse to the bisque but melt into one another. The result is hazy spectrums of color often compared to auroras or supernovas.

In 1997, Yasokichi III was named a Holder of Important Intangible Cultural Heritage charged with preserving and promoting *saiyū* glazing. He died in 2009, but he passed the techniques of *saiyū* to his eldest daughter, who assumed the family title of Yasokichi IV (1961–).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

彩釉磁器

彩釉は、三代目徳田八十吉（1933-2009）が考案した現代釉薬の技法で、鮮やかな色の釉薬が融合して細かいグラデーションを生み出すのが特徴である。1997年に重要無形文化財に指定された。

三代目八十吉は、徳田家の三代目として九谷焼の技術を発展させた。17世紀の古九谷で使われていた釉薬を再現した祖父の初代八十吉（1873-1956）に師事した。初代八十吉は、上絵付けの技術でも知られ、その技は孫に受け継がれた。

三代目八十吉は、古九谷の青手の上絵付に特に関心を寄せていた。このスタイルは、赤を使わず、緑、黄、紫、紺などの濃い釉薬を使うのが特徴だ。この釉薬を現代風にアレンジできないかと試行錯誤していたところ、偶然にも、八十吉が後に彩釉と呼ぶ幻想的な色のグラデーションを発見したのである。通常より高い焼成温度で焼くことで、釉薬がビスクと融合するだけでなく、互いに溶け合うことで効果を発揮する。その結果、オーロラや超新星に例えられるような、ぼんやりとした色のスペクトルが生まれるのである。

1997年、三代目八十吉は重要無形文化財保持者に認定され、彩釉の保存と普及に努めた。2009年に死去したが、彩釉の技術を長女に伝え、長女が四代目八十吉（1961-）を襲名した。

001-025

Maki-e

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（3）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸－蒔絵」（まきえ）
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Maki-e

Maki-e is a technique used to create designs on lacquerware by adding metallic powders, such as gold dust, to soft, freshly applied lacquer. The term—which means “sprinkled picture”—can also refer to the pieces decorated this way. It is one of the most common decorative techniques used in Japanese lacquerware.

Maki-e designs first began to appear on Japanese lacquerware in the eighth century. Over the next several centuries, the technique spread across the country. It was applied to both large-scale decorative works, such as screens and Buddhist altars, and to smaller household items, like hair ornaments and writing boxes. The expensive materials and specialized skills required to produce *maki-e* meant that for most of the craft’s history, only the elite could afford it. However, with the emergence of a wealthy merchant class in the eighteenth century, commoners also began to patronize *maki-e* artists. This influx of new clients led to a broadening of the art form’s applications and range of expressions. In the mid-nineteenth century, Japan lifted many of its restrictions on international trade, leading to increased exports and artistic exchange. In this climate, *maki-e* continued to evolve and its use gained international recognition not only in the applied arts, but also in creative art.

The techniques used to create *maki-e* works are grouped into three styles. All lacquerware is created by building up layer after layer of lacquer (the sap of the lacquer tree). In *togidashi* (burnished) *maki-e*, the metallic design is applied in the middle of the layering process and covered by subsequent coats of lacquer. Once the piece has hardened, it is polished down to reveal the design, flush with the surrounding lacquer. In *hira* (flat) *maki-e*, the artist brushes a design in lacquer on top of a finished

piece. Metallic dust is sprinkled over the design, and it adheres only to the wet lacquer. Only a small amount of lacquer is used, which leaves the design more or less flush with the surface. By contrast, *taka* (raised) *maki-e* is created by purposefully raising the design. Beginning with a smooth surface, the artist builds up certain areas with layers of lacquer mixed with charcoal or clay dust. This creates an image in high relief, to which the metallic powder is then applied.

Along with gold and silver, a variety of other metals and alloys are used to achieve different color gradations. For example, *aokin*, a mix of gold and silver, produces a lighter gold color, while *shakudō*, a blend of gold and copper, produces a reddish bronze that can develop a blackish-purple patina over time. In addition, powders with grains of different sizes create varying textures and degrees of luster.

Artists have developed several specialized tools to manipulate the lacquer and metallic powders used in *maki-e*, which are expensive and easily scattered. Two of the most important are the *funzutsu* (a bamboo tube with silk or gauze covering one end that is used to sprinkle powders evenly) and the *tsumeban* (a small thumb-mounted palette for liquid lacquer). Delicate brushes are used to sweep away excess powder without disturbing the design.

Several other decorative techniques are often used in tandem with *maki-e* in Ishikawa crafts. These include *hyōmon* (the application of cut metal shapes rather than powders), *rankaku* (decoration with crushed eggshell), *raden* (mother-of-pearl inlay), and *chinkin* (incised gold inlay). Many lacquerware pieces at the Ishikawa Prefectural Museum of Art display a combination of these techniques.

Maki-e was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955, and the first Holder of Important Intangible Cultural Heritage for *maki-e* was Ishikawa native Matsuda Gonroku (1896–1986). Three other Ishikawa residents have also become holders of *maki-e* heritage: Ōba Shōgyo (1916–2012) in 1982, Terai Naoji (1912–1998) in 1985, and Nakano Kōichi (1947–) in 2010.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒔絵

蒔絵とは、塗りたての柔らかい漆器に金粉などの金属粉を塗り、文様を表現する技法である。また、蒔絵とは、このように装飾された作品を指すこともある。日本の漆器では、最も一般的な装飾技法のひとつである。

蒔絵は、8世紀ごろから日本の漆器に見られるようになり、その後、数世紀にわたって全国に広まった。屏風や仏壇などの大型の装飾品から、髪飾りや筆箱などの家庭用品まで、その用途は多岐にわたる。蒔絵は高価な材料と専門的な技術を必要とするため、その歴史の大半は富裕層だけが手に入れることができた。しかし、18世紀に入り裕福な商人層が出現すると、蒔絵師をひいきにするようになった。このような新しい顧客の流入により、アートの用途や表現の幅が広がっていったのである。19世紀半ばになると、日本は国際貿易に対する多くの制限を撤廃し、輸出や芸術の交流が盛んになった。このような状況の中、蒔絵は進化を続け、応用芸術だけではなく、創造的な芸術として国際的に認知されるようになったのである。

蒔絵の技法は、大きく3つに分類される。漆器はすべて、漆（漆の木の樹液）を何層にも塗り重ねて作られる。研ぎ出し蒔絵は、漆を塗り重ねる途中で金彩を施し、さらに漆を塗り重ねる。漆が固まったところで、周囲の漆と同じ高さになるように磨き上げ、デザインを浮かび上がらせる。平蒔絵は、完成した作品の上に漆で文様を刷り込む。その上に金属粉を蒔き、濡れた漆にだけ付着させる。漆は少量しか使用しないので、文様はほぼ平坦に仕上がる。一方、高蒔絵は意図的に盛り上げたデザインである。高蒔絵は、平滑な面に炭や粘土の粉を混ぜた漆を何層にも塗り重ねることで、部分的に盛り上げていく。これにより、高浮き彫りのイメージを作り出し、その上に金属粉を塗布する。

金や銀のほか、さまざまな金属や合金を用いて、色のグラデーションを表現する。例えば、金と銀を混ぜた青金（あおきん）は明るい金色を生成するが、金と銅を混ぜた赤銅（しゃくどう）は赤銅色で、時間が経つと黒紫色の緑青（ろくしょう）を帯びることがある。また、粒の大きさが異なる粉を使うことで、質感や光沢を変化させることができる。

高価で飛散しやすい蒔絵の漆や金属粉を自在に操るために、作家はいくつかの専用道具を開発した。その代表的なものが、竹筒の片側に絹やガーゼを被せて、粉を均一に蒔くための「粉筒」と、液体漆用の親指に取り付ける小さなパレット「爪盤」である。絵柄を崩さないように余分な粉を払い落とすための繊細な刷毛もある。

石川県の工芸品では、蒔絵のほかにいくつかの技法が併用されることが多い。平文（粉ではなく切って加工した金属を用いる）、卵殻（卵殻を砕いたもので装飾する）、螺鈿（螺鈿細工）、沈金（金をはめ込む）などである。石川県立美術館には、これらの技法を組み合わせた漆器が多く展示されている。

蒔絵は1955年に重要無形文化財に指定され、最初の重要無形文化財保持者は石川県出身の松田権六（1896-1986）である。このほかにも、石川県出身の3人が蒔絵の保持者に認定されている。1982年に大場松魚（1916-2012）、1985年に寺井直次（1912-1998）、2010年に中野孝一（1947-）が認定された。

001-026

Maki-e

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（3）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸－蒔絵」（まきえ）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Maki-e

Maki-e is a decorative technique used in lacquerware in which metallic powders, such as gold dust, are added to soft, freshly applied lacquer. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Maki-e was used as far back as the eighth century, mainly for members of the social and religious elite. Techniques and designs diversified and evolved as lacquerware became available to a wider customer base, particularly during the commercial boom of the eighteenth century and the increased international exchange of the nineteenth and twentieth centuries.

Maki-e, which means “sprinkled picture,” is applied to a hardened lacquer surface by first brushing on shapes in wet lacquer, then sprinkling them with metallic powders. The powder adheres to the fresh lacquer, creating an image or design. *Maki-e* decoration can be embedded in the base lacquer, made flush with the surface, or done in high relief, depending on the technique used.

Maki-e artists have developed many ways to diversify their art. Along with gold and silver, they may use other metals and alloys to produce different colors. Powders with variously sized grains create a range of textures and lusters. Artists can also combine *maki-e* with related techniques, like *rankaku* (decoration with crushed eggshell) and *raden* (mother-of-pearl inlay), to add pure white or iridescent glimmers to their designs. Many lacquerware pieces at the Ishikawa Prefectural Museum of Art display a combination of these techniques.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

蒔絵

蒔絵は、漆器に用いられる装飾技法で、塗りたての柔らかい漆の上に金粉などの金属粉を塗るものである。1955年に重要無形文化財に指定された。

蒔絵の歴史は古く、8世紀頃には主に社会的・宗教的な権力者のメンバーのために用いられていた。特に18世紀の商業ブーム、19世紀から20世紀にかけての国際交流の進展により、漆器が他の顧客層にも普及するにつれ、技法やデザインは多様化し、進化を遂げた。

蒔絵とは、固まった漆の表面に、濡れた漆で形を描き、その上に金属粉を蒔いて作られる。塗りたての漆に粉が付着し、絵柄が出来上がる。蒔絵は技法によって、下地漆の中に埋め込むもの、表面と同じ高さのもの、高浮き彫りのものなどがある。

蒔絵師はその芸術を多様化するために、さまざまな方法を開発してきた。金や銀だけでなく、他の金属や合金を用いて様々な色を表現することもある。また、粒の大きさが異なる粉を使うことで、様々な質感や光沢に変化を持たせることもできる。蒔絵に卵殻（卵殻を砕いたもので装飾する）や螺鈿（螺鈿細工）を組み合わせることで、純白の輝きや虹色の輝きを加えることもできる。石川県立美術館には、これらの技法を組み合わせた漆器が数多く展示されている。

001-027

Chinkin Incised Gold Inlay

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（４）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸—沈金」（ちんきん）
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

***Chinkin* Incised Gold Inlay**

Chinkin incised gold inlay is a technique used to decorate lacquerware by etching fine grooves into hardened lacquer and filling them with gold powder or foil. It is one of several traditional decorative techniques that contribute to the renown of Ishikawa Prefecture's lacquerware.

The technique originated in China during the Song dynasty (960–1279). Gold-inlaid pieces were imported to Japan during the Muromachi period (1392–1573), as evidenced by surviving examples in the treasury of Kyoto's Daitokuji Temple. Local artisans studied the pieces and adopted the technique, which eventually spread across the country.

Chinkin, which means “sunken gold,” is applied by carving lines or dots into hardened lacquerware with metal chisels called *chinkin-nomi*. Artists make their own chisels, using a whetstone to get the exact shape they want on the cutting edge. Different shapes—rounded, angular, sharply pointed, rough—create different effects, as does the pressure with which the chisel is applied. For example, the tapered shape of a bamboo leaf can be made by using a triangular chisel and pressing more firmly in the middle of the cut than at the beginning and end. The straight lines of a bamboo cane would be carved with a narrow, knifelike blade with a slightly curved edge, while chisels filed to a pinpoint would add fine details and texture. Painstaking care is required as the lacquer does not allow the artist to repair errant scratches or mistakes.

Once the design has been carved, the artist covers it with a thin layer of wet lacquer.

Next, the surface is wiped down with traditional handmade paper (*washi*), which absorbs the excess lacquer and leaves just a tiny amount in the grooves. The artist then applies gold foil or gold dust, dabbing it on with a bit of cotton wool. The metal adheres only to the wet lacquer in the grooves, and after a moment, the excess is wiped away with a palm or fingertip, revealing the design now gleaming in sharp contrast to the lacquer background.

To create variations in color, artists use silver, platinum, or other metals. Materials such as carbon powder can be layered on to darken or lighten the tone. There are also variations in which red or black lacquer are used instead of metallic powders to fill the carved design.

Chinkin was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955. It has become strongly associated with Ishikawa Prefecture, particularly the city of Wajima, which has produced several Holders of Important Intangible Cultural Heritage: Mae Taihō (1890–1977) in 1955, Mae Fumio (1940–) in 1999, and Yamagishi Kazuo (1954–) in 2018.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沈金

沈金とは、漆を硬化させたものに細かい溝を彫り、そこに金粉や箔を充填して装飾する技法である。石川県の漆器の名声を支えている伝統的な装飾技法のひとつである。

この技法は、中国の宋の時代（960-1279）に生まれた。日本には室町時代（1392-1573）に鎗金（そうきん）が輸入され、京都の大徳寺の宝物館に現存するものがその例である。その技法を学んで取り入れた地元の職人たちが、やがて全国に広めていった。

沈金とは「沈んだ金」という意味で、固まった漆器に「沈金ノミ」という金属製のノミで線や点を彫り込んでいくものである。職人たちは、砥石を使い、刃先の形状を整えながら、自分だけのノミを作る。丸みを帯びたもの、角ばったもの、鋭く尖ったもの、粗いものなど、形状の違いや力の入れ具合によって、さまざまな効果が得られる。例えば、笹の葉のような先が細い形は、角ノミを使い、切り始めと切り終わりよりも、途中を強く押すことで作ることができる。竹稈の直線的なラインは、刃先が少し曲がったナイフのような細い刃物で彫り、ピンポイントに削られたノミは、細かい部分や質感を加えることができる。漆は傷や失敗を修復することができないので、細心の注意が必要である。

彫り上げたデザインは、漆で薄く覆っていく。次に、伝統的な手作りの紙（和紙）で表面を拭き、余分な漆を吸収させ、溝の部分にほんの少し残していく。そして金箔または金粉を綿毛のようなもので叩いて塗る。金属は溝の濡れた漆にのみ付着し、しばらくして手のひらや指先で余分な部分を拭き取ると、漆地とは対照的にデザインが輝き出す。

銀やプラチナなどの金属を使い、色のバリエーションをつけることもできる。また、炭の粉などを重ねて、色を濃くしたり薄くしたりすることもできる。金属粉の代わりに朱漆や黒漆で彫文様を埋めるバリエーションもある。

沈金は1955年に重要無形文化財に指定された。石川県、特に輪島市との結びつきが強く、重要無形文化財保持者を数人輩出している。1955年に前大峰（1890-1977）、1999年に前史雄（1940-）、2018年に山岸一男（1954-）が認定されている。

001-028

Chinkin Incised Gold Inlay

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（４）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸—沈金」(ちんきん)
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

***Chinkin* Incised Gold Inlay**

Chinkin incised gold inlay is a decorative technique used in lacquerware in which designs are etched into hardened lacquer and filled with gold powder or foil to create a design. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

The technique, which means “sunken gold,” originated in China during the Song dynasty (960–1279). Gold-inlaid pieces were imported to Japan during the Muromachi period (1392–1573), which allowed local artisans to study and recreate the process.

Chinkin is created by carving lines or dots into hardened lacquerware with metal chisels called *chinkin-nomi*. Artists make their own chisels, using a whetstone to form the exact shape they need on the cutting edge. Different shapes—rounded, angular, sharply pointed, rough—are used to create different effects, as is the pressure with which the chisel is applied. Artists can create bold, sweeping rays, or details as delicate and subtle as a kitten’s fur.

After carving the design, the artist covers it with a thin layer of wet lacquer. The surface is then wiped down with traditional handmade paper (*washi*), which absorbs the excess and leaves just a tiny amount in the grooves. Gold dust or gold foil is softly dabbed onto the design with a bit of cotton wool. The gold adheres only to the wet lacquer. After a moment, the excess metal is wiped away, revealing the design now gleaming in sharp contrast to the lacquer background.

In modern times, *chinkin* inlay is particularly associated with lacquerware from Wajima, Ishikawa Prefecture, which has produced multiple Holders of Important Intangible Cultural Heritage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

沈金

沈金は、漆を硬化させたものに文様を刻み、金粉や箔を充填して文様を表現する漆器の装飾技法である。1955年に重要無形文化財に指定された。

「沈んだ金」を意味するこの技法は、中国の宋の時代（960-1279）に生まれた。日本には室町時代（1392-1573）に沈金が輸入され、職人が研究を重ね、再現するようになった。

沈金とは、沈金ノミという金属製のノミで、固まった漆器に線や点を彫り込んで作るものである。職人は砥石を使い、刃先の形を整えながら、自分だけのノミを作っていく。丸みを帯びたもの、角ばったもの、鋭く尖ったもの、荒いものなど、形状や力の入れ具合によって、さまざまな効果が得られる。大胆に広がる線や、子猫の毛並みのような繊細なディテールも作り出すことができる。

文様を彫った後、濡れた漆を薄く塗っていく。その後、伝統的な手作りの紙（和紙）で表面を拭き、余分な部分を吸収させ、溝にほんの少し残す。金粉または金箔を綿毛で軽く叩いていく。この時、金は濡れた漆にのみ付着する。しばらくして余分な金属を拭き取ると、漆地と対照的にデザインが輝き出す。

現代では、特に石川県輪島市の漆器に沈金が施され、重要無形文化財保持者を複数輩出している。

001-029

Lacquer Application (*Kyūshitsu*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (5)
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸—髹漆」
(きゅうしつ) 【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Lacquer Application (*Kyūshitsu*)

Kyūshitsu is a general term referring to the lacquer application processes used in Japanese traditional crafts. It includes techniques for preparing the substrate (base object), such as lathing or bamboo weaving, but it is distinct from decorative techniques, such as painting or metal inlay.

Thanks, in part, to abundant lacquer trees (*Toxicodendron vernicifluum*), Japan has been producing lacquerware since at least 4,000 BCE. The tradition underwent a period of rapid growth and increased sophistication during the seventeenth century, when domain lords' efforts to foster local industry resulted in the emergence of diverse styles. Since then, a rich culture of tools and techniques evolved that are unique to Japanese lacquer application.

Kyūshitsu techniques can be loosely grouped into two methods: those in which lacquer is applied directly to a substrate, and those in which the substrate is covered with a foundation to which the subsequent layers of lacquer are applied. The two approaches can result in markedly different outcomes with regard not only to appearance, but also durability, heat resistance, and other functional characteristics of the final product. Whichever method is used, the process requires many applications of lacquer that must be allowed to harden before the next layer can be applied. This labor-intensive work can take months or even years to complete.

Lacquer is a challenging medium. Its glossy, highly durable finish is formed when a component chemical called urushiol reacts with oxygen in the air, but the reaction is

vulnerable to fluctuations in temperature and humidity. Particularly before electricity made climate control possible, managing these variables so that the lacquer set properly required special expertise. Additionally, wet lacquer must be protected from dust or other particles that may adhere and mar the finish. To facilitate the process, artisans developed unique equipment like the *urushi-buro*, a dust-proof drying box made from moisture-retentive Japanese cypress or cedar that helps to maintain even humidity.

Lacquerware crafts in Ishikawa Prefecture are centered around Wajima, Yamanaka Onsen, and Kanazawa. In 1974, *kyūshitsu* was designated an Important Intangible Cultural Heritage, and Akaji Yūsai (1906–1984) was designated a holder of the technique. Other Ishikawa artists to receive the title are Shioda Keishirō (1926–2006) in 1995 and Komori Kunie (1945–) in 2006.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

漆塗り（髹漆）

髹漆とは、日本の伝統工芸における漆塗りの総称である。旋盤や竹編みなど素地（下地）を整える技法も含まれるが、塗装や象嵌などの装飾技法とは区別される。

日本では、漆の木が豊富にあったこともあり、少なくとも紀元前4,000年頃から漆器が作られていた。17世紀になると、藩主による地場産業の育成を背景に、多様なスタイルの漆器が作られるようになり、伝統は急速に発展して洗練されていった。それ以来、漆を塗るための道具や技法は、日本独自の豊かな文化として発展していった。

「髹漆」の技法は、木地に直接漆を塗る方法と、下地をつくり、その上に漆を塗り重ねる方法の2つに大別される。この2つの方法は、外観だけでなく、最終製品の耐久性、耐熱性などの機能面でも大きく異なる結果をもたらす。どちらの方法でも、漆を何度も塗っては固め、次の漆を塗っては固めるという工程が必要となる。そのため、この労力のかかる作業は、数ヶ月または数年かかることもある。

また、漆は難易度の高い素材である。漆は、ウルシオールという成分が空気中の酸素と反応して光沢を出し、耐久性も高いが、この反応が温度や湿度の変化に弱いのである。特に電気の普及で空調管理が可能になる以前は、漆がきちんと固まるように管理するには特別な専門知識が必要であった。さらに、濡れた漆にはホコリやゴミが付着して上塗りが損なわれる可能性があるため、注意し

なければならない。そのため、湿気を均一に保つのに役立つ保湿性の高いヒノキやスギを使った「漆風呂」のような防塵用の乾燥箱など、独自の道具が開発された。

石川県では、輪島、山中温泉、金沢を中心に漆器工芸が盛んである。1974年に重要無形文化財に指定され、赤地友哉（1906-1984）が保持者に認定された。他の石川県の保持者として、1995年に塩多慶四郎（1926-2006）、2006年に小森邦衛（1945-）が認定されている。

001-030

Lacquer Application (*Kyūshitsu*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（5）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸—髹漆」
（きゅうしつ） 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Lacquer Application (*Kyūshitsu*)

Kyūshitsu is a general term referring to the lacquer application processes used in Japanese traditional crafts. It includes techniques for preparing the substrate (base object), such as lathing or bamboo weaving, but it is distinct from decorative techniques, such as painting or metal inlay.

In the seventeenth century, competition between domains resulted in the development of many distinct regional lacquerware traditions. These produced a rich culture of unique tools and techniques associated with Japanese lacquer application. In recognition of this legacy, *kyūshitsu* was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1974.

Kyūshitsu techniques can be loosely grouped into two methods: those in which lacquer is applied directly to a substrate, and those in which the substrate is covered with a foundation to which the subsequent layers of lacquer are applied. The two approaches influence not only the appearance of the finished product, but also functional characteristics such as durability and heat resistance.

Lacquer is a challenging medium. Its glossy finish is formed when a component chemical called urushiol reacts with oxygen in the air, but the reaction is vulnerable to fluctuations in temperature and humidity. Lacquer must be applied in multiple—sometimes hundreds—of layers and given sufficient time to harden between each. Many techniques require the lacquer to be polished between applications as well. Meanwhile, wet lacquer must be protected from dust or other particles that may mar

the finish. The entire process can take months or even years to complete.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

漆塗り（髹漆）

髹漆とは、日本の伝統工芸において、漆を塗る工程の総称である。旋盤や竹編みなど素地（下地）を整える技法も含まれるが、絵付けや象嵌などの装飾技法とは区別される。

17世紀、藩の間の競争により、各地に漆器の伝統が生まれた。1974年に重要無形文化財に指定された「髹漆」は、漆塗りに関わる独自の道具や技術など豊かな文化を生み出した。

「髹漆」の技法は大きく分けて、木地に直接漆を塗る方法と、素地（下地）をつくり、その上に漆を塗り重ねる方法に分けられる。この2つの方法は、仕上がりの外観だけでなく、出来上がった製品の耐久性や耐熱性などの機能的な特性にも影響を与える。

漆は、難易度の高い素材である。漆は、ウルシオールという成分が空気中の酸素と反応して光沢を出す。この反応は温度や湿度の変化に弱い。漆は何度も、時には何百回も塗り重ね、その間に十分に硬化させる必要がある。また、多くの技法では、漆を塗る間に研磨する必要がある。濡れた漆に埃やゴミが上塗りを損なわないように注意も必要だ。このように、漆は完成までに数ヶ月または数年かかることもある。

001-031

Mother-of-Pearl Inlay (*Raden*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法 (6)
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸－螺鈿」(らでん)
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Mother-of-Pearl Inlay (*Raden*)

Raden is a decorative technique in which small pieces of mother of pearl are embedded in lacquer. It was introduced from China in the eighth century, as indicated by relics found in the Shōsōin treasure house at Nara's Tōdaiji Temple. *Raden* subsequently became a common technique in Japanese lacquerware, often used alongside gold and silver *maki-e* embellishments. It was used not only for small personal or household items, but also in grand architecture such as the lavishly decorated ceiling of the Phoenix Hall at Byōdōin Temple, near Kyoto.

“Mother of pearl” refers to the pearl-like substance known as nacre, which builds up on the inside of certain mollusk shells. Different species produce different colors and qualities of nacre, but the species commonly used in *raden* include abalone, pearl oyster, turban, and nautilus. As every shell has individual contours and a unique pattern of iridescence, finding those that will work with the envisioned design is a *raden* artist's initial challenge.

The second major hurdle is extracting suitable pieces of mother of pearl. First, the artist uses a whetstone or grinder on both sides of the shell to produce a flat wafer of nacre with relatively even surfaces. The size and natural curve of the shell limit the number of large pieces that can be extracted. Nacre is brittle, so the thickness of the pieces determines the ways they can be used. Pieces between 0.1 and 2 millimeters thick are called *atsugai* (“thick shell”) and those under that size are *usugai* (“thin shell”). In the past, *usugai* was produced by boiling shells for three to seven days, then peeling off thin layers. Today, mechanical grinders are used, so the shell is cooled with water to prevent the buildup of friction. (Otherwise, the heat would damage the shell

during the lengthy grinding process necessary to produce such thin layers.) In addition to *atsugai* and *usugai*, small flakes of nacre can be pulverized into an iridescent powder called *mijingai* (“shell particles”), which can also be used in the design.

Once the artist has sufficient mother of pearl pieces, they are cut to the desired shapes. Depending on the thickness of the piece, this can be done with a scroll saw, precision knife, punch template, or acid etching. Shell pieces may be further embellished with hairline engravings, painting, or by applying gold foil to the back of translucent *usugai*.

Next, the cut pieces are applied to the lacquerware, either inlaid or affixed to its surface. The design is then covered with a protective layer of lacquer and burnished. *Maki-e*, another lacquerware decorative technique, is often used in tandem with *raden* to add metallic silver and gold to the *raden* palette of iridescent whites, pinks, and blues.

The Ishikawa Prefectural Museum of Art has many fine examples of *raden* lacquerware in its collection, spanning the fifteenth century to modern times. These include one nationally designated Important Cultural Property and several Important Cultural Properties of Ishikawa Prefecture.

Raden was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1999.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

漆塗り（髹漆）

螺鈿（らでん）は、漆の中に小さな真珠貝を埋め込む装飾技法である。この技術が8世紀に中国から伝わったことは、奈良・東大寺の正倉院宝物から発見された遺物によって証明された。その後、螺鈿は金や銀の蒔絵と一緒に、日本の漆器によく使われる技法となった。また、小物や生活用品だけでなく、京都近郊の平等院鳳凰堂の豪華な天井装飾など、大建築物にも使用された。

マザーオブパールは、軟体動物の貝殻の内側にできる真珠層と呼ばれる真珠のような物質のことである。貝の種類によって真珠の色や質は異なるが、螺鈿に使われるのはアワビ、チョウガイ、ヤコウガ

イ、オウムガイなどが多い。どの貝も輪郭や真珠光沢の模様が異なるため、デザインに合うものを探すのが最初の難関である。

次に大きなハードルとなるのが、適切な真珠層の破片採取することである。まず、貝の両面を砥石やグラインダーで削り、真珠層の表面を比較的平らにする。貝の大きさや自然なカーブによって、採取できる大きな破片の数が制限される。真珠層はもろいため、採取した真珠層の厚さによって、使い道が決まる。厚さ0.1ミリから2ミリのものを「厚貝」、それ以下のものを「薄貝」と呼ぶ。かつて薄貝は3～7日間煮て、薄い真珠層をはがして作られていた。現在は、機械式の研磨機を使用しているため、摩擦が起きないように貝を水で冷却している（そうしなければ、長時間研磨している間に熱で貝が傷んでしまう）。厚貝、薄貝のほか、真珠貝の小片を粉碎した「みじん貝」という虹色の粉もデザインに使うことができる。

真珠層が十分に確保できたら、次は形を切り出す。作品の厚さにもよるが、糸のこ、精密ナイフ、パンチテンプレート、酸エッチングなどを使って切り出す。さらに、細い線の彫刻や絵画、半透明の薄貝の裏面に金箔を貼るなどして、貝殻に装飾を施すこともある。

次に、切り出した貝殻を漆器にはめ込んだり、その表面に貼り付けたりする。その上に漆を塗り、研ぎ出す。漆器の装飾技法のひとつである蒔絵は、螺鈿と組み合わせて使われることが多く、虹色の白、ピンク、青などの色調に金属銀や金を加える。

石川県立美術館には、15世紀から現代に至るまで多くの螺鈿漆器が収蔵されている。その中には、国指定重要文化財1件、石川県の重要文化財も多数含まれている。

螺鈿は1999年に、重要無形文化財に指定された。

001-032

Mother-of-Pearl Inlay (*Raden*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（6）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「漆芸－螺鈿」（らでん）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Mother-of-Pearl Inlay (*Raden*)

Raden is a lacquerware decorative technique in which mother of pearl is embedded in the surface lacquer. The technique was introduced from China in the eighth century, and Japanese artists used it to ornament everything from small household items to military equipment and great works of architecture.

Raden uses the iridescent layer on the inside of certain mollusk shells, called “mother of pearl” or “nacre.” Many species, including abalones and pearl oysters, produce nacre appropriate for *raden*, although the color and quality varies. Mother of pearl is extracted by grinding down both sides of the shell until a thin wafer remains. Pieces between 0.1 and 2 millimeters are called *atsugai* (“thick shell”), and those under the 0.1-millimeter cutoff are called *usugai* (“thin shell”). The thickness determines how the pieces are used. Small flakes of nacre can be pulverized into an iridescent powder called *mijingai* (“shell particles”).

The shapes needed for an artist’s envisioned design are cut from the mother of pearl using a scroll saw, precision knife, punch templates, or acid etching; then they are applied to the piece of lacquerware. Artists generally use inlay techniques with thicker shell pieces, while thinner ones can be more easily affixed by brushing them with lacquer and sticking them to the surface. A final coat of lacquer is applied before the piece is burnished to a smooth, polished surface.

Raden was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1999.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

螺鈿

螺鈿（らでん）は、表面の漆の中に真珠層を埋め込んだ漆器の装飾技法である。8世紀に中国から伝わり、日本の芸術家たちは小物から武具、建築物に至るまで、この技法を用いて装飾を施した。

螺鈿は軟体動物の貝殻の内側にある虹色の層を利用したもので、「真珠層」と呼ばれている。アワビやチョウガイなど多くの貝が螺鈿に適した真珠層を形成するが、その色や質はさまざまである。真珠層は、薄いウエハース状になるまで貝殻の両面を研削して、抽出される。厚さ0.1～2ミリのものを「厚貝」、0.1ミリ以下のものを「薄貝」と呼び、厚さによって使い分けられる。また、真珠貝の小片を粉にしたものは「みじん貝」と呼ばれ、虹色に輝く。

真珠層から、糸のこ、精密ナイフ、パンチングテンプレート、酸エッチングなどで、思い描くデザインを切り出し、漆器に貼り付ける。厚みのある貝は象嵌で、薄い貝は漆を塗って貼り付ける方法が一般的である。最後に漆を塗り、表面を磨いて完成する。

螺鈿は1999年に、重要無形文化財に指定された。

001-033

Metal Chasing (*Chōkin*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（7）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工—彫金」
（ちょうきん）【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Metal Chasing (*Chōkin*)

Chōkin refers to a variety of decorative chasing techniques used in metalwork. These include specialized methods of engraving, carving, hammering, and inlay. They were collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Chasing techniques arrived in Japan from continental Asia during the Yayoi period (300 BCE– 300 CE). Originally, the techniques were mainly used for ritual objects and personal adornments of copper, gold, silver, and bronze. As metallurgic and metalworking skills evolved, various alloys were devised, and these stronger metals were used to craft tools for daily use, such as pots, as well as swords and armor. Chasing techniques for decorating these new metal alloys evolved in tandem.

Even after Japan emerged from over a century of warfare into the relatively peaceful Edo period (1603–1867), the ruling samurai class continued to commission weapons and armor as status symbols. Chasing and other decorative techniques flourished. However, a major turning point for the craft came in 1876, when the newly established Meiji government banned the wearing of swords. Until that point, producing the ornamental fittings on swords had been the livelihood of many metalworkers. This change—combined with the increased mechanization of metal production—caused a sharp decline in handcrafted and hand-chased metalwork. On the other hand, around this time traditional Japanese crafts began appearing at international exhibitions, driving a demand for exports. Many metalworkers turned from producing pieces with martial applications to purely artistic works, redirecting and reviving the craft.

The *chōkin* technique most associated with Ishikawa Prefecture is *zōgan*, or inlay. This involves embedding softer metals, such as gold and silver, into a harder base metal. The local style is called *kaga zōgan*, named after the domain that preceded the modern-day prefecture. It is distinguished firstly by the way the inlaid metal is held in place. The artisan cuts into the base metal at an angle so that the deepest part of the cavity is wider than the opening. When the inlaid metal is hammered in, it spreads into this indentation while the base metal overhang is pressed down over it. This secures the inlay in place and leaves both metals flush. *Kaga zōgan* is also known for multilayered inlays and the use of copper alloys called *irogane*. These alloys can be treated with solutions to create protective oxide coatings and patinas of various colors.

Other *chōkin* techniques involve the use of chisels to engrave the metal with hair-thin lines, triangular marks, or wedges resembling brush strokes. Images can be carved in sunken relief, low relief, or three dimensions. The metal may also be pierced with holes to create openwork or minutely dented with a hammer to create a stippled texture.

The Ishikawa Prefectural Museum of Art holds many pieces demonstrating *chōkin* techniques, including some of the *zōgan* metal stirrups that were the pride of Kaga domain.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

彫金

彫金（ちょうきん）とは、金属工芸品に施される様々な装飾技法を指す。彫り、打ち出し、魚子打ち、象嵌などの特殊な技法が含まれる。1955年に重要無形文化財に指定された。

弥生時代（紀元前300–紀元後300）にアジア大陸から日本に伝来した彫金の技法は、当初は主に銅、金、銀、青銅などの祭器や装身具に用いられていた。しかし、冶金や金属加工の技術が発達するにつれ、さまざまな合金が考案され、より強い金属が鍋などの生活用具や剣・鎧などに使われるようになった。そして、この新しい合金を装飾するための、彫金の技法も同時に発展していった。

日本が100年以上続いた戦乱の世から、比較的平和な江戸時代（1603–1867）に入っても、武家は武器や鎧をステータスシンボルとして注文し続けた。また、彫金などの装飾技法も盛んに

行われた。しかし、1876年、明治政府が刀剣の着用を禁止したことが大きな転機となった。それまでは、刀の飾り金具を作ることが、多くの金工の生業であった。また、金属生産の機械化が進み、手づくりや手彫りの金工品は激減した。一方、この頃から日本の伝統工芸が国際博覧会に出品されるようになり、輸出の需要も出てきた。多くの金工家が、武道的なものから純粋な芸術的な用途へと転換し、工芸の方向性を変え、復活させたのである。

石川県にゆかりのある彫金技法は、象嵌である。金や銀などの柔らかい金属を、より硬い地金に埋め込んでいく。加賀象嵌と呼ばれるこの技法は、石川県の前身である藩の名前にちなんで名づけられた。加賀象嵌の特徴は、まず、地金の留め方にある。地金に斜めに切り込みを入れ、開口部より奥の方が広くなるようにする。象嵌を打ち込むと、このくぼみに広がり、その上に地金のはみ出し部分が押さえつけられる。こうすることで象嵌が固定され、両金属が同一平面になる。加賀象嵌は、重ね象嵌や「色金」と呼ばれる銅合金を使うことでも知られている。この合金は、溶液で処理することにより、さまざまな色の保護用の酸化皮膜や緑青（ろくしょう）を作ることができる。

また、彫金技法には鑿（たがね）を使って、毛彫りや蹴彫り、片切り彫りなどの技法がある。さらに、肉合彫りや浮き彫り、彫りくずし、透かし彫り、魚子打ちなどで文様を施すこともできる。

石川県立美術館には、加賀藩が誇った象嵌の鐙（あぶみ）など、彫金の技法を示す作品が数多く所蔵されている。

001-034

Metal Chasing (*Chōkin*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（7）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工—彫金」
（ちょうきん）【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Metal Chasing (*Chōkin*)

Chōkin refers to a variety of decorative chasing techniques used in metalwork. These include specialized methods of engraving, carving, hammering, and inlay. They were collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Early chasing techniques were imported from continental Asia during the Yayoi period (300 BCE–300 CE) and evolved alongside Japanese metallurgy as a way of ornamenting both ritual and functional objects. A shift towards purely artistic applications happened in the late nineteenth century, when the wearing of swords was banned by the new Meiji government and metal production became more mechanized. Metalworkers turned their skills to art instead, finding an international market eager for all kinds of Japanese crafts.

Chōkin encompasses specialized techniques for line engraving, relief carving, and openwork, but the technique most associated with Ishikawa Prefecture is inlay, in which softer metals, like gold and silver, are embedded in harder base metals. The local style is called *kaga zōgan* (Kaga inlay), named after the domain that preceded the modern-day prefecture. It is distinguished partly by the way the inlaid metal is held in place. The artisan cuts into the base metal at an angle so that the bottom of the cavity is wider than the opening. When the inlay is hammered in, it spreads into this indentation while the base metal overhang is pressed down over it.

The Ishikawa Prefectural Museum of Art holds many pieces demonstrating *chōkin* techniques, including some of the *zōgan* metal stirrups that were the pride of Kaga

domain.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

彫金

彫金（ちょうきん）とは、金属工芸品に施される様々な装飾技法を指す。彫り、打ち出し、魚子打ち、象嵌などの特殊な技法が含まれる。1955年に重要無形文化財に指定された。

弥生時代（紀元前300年－紀元後300年）にアジア大陸から伝わり、日本の冶金技法とともに儀礼的・機能的な装飾品として発展してきた彫金の技法。19世紀後半、明治政府により刀剣類の着用が禁止され、金属加工の機械化が進むと、金属職人たちはその技法を美術品に転用し、日本のあらゆる工芸品を海外に売り込むようになった。

彫金には、線彫り、浮き彫り、透かし彫りなどの専門技法があるが、石川県に最も関係の深い技法は、金や銀などの柔らかい金属を硬い地金に埋め込む「象嵌（ぞうがん）」である。この技法は「加賀象嵌」と呼ばれ、石川県の前身である藩の名前にちなんで名づけられた。加賀象嵌の特徴は、地金の留め方にある。職人が地金に斜めに切り込みを入れ、開口部より底部の方が広くなるようにする。象嵌を打ち込むと、このくぼみに広がり、その上に地金のはみ出した部分が押しつけられる。

石川県立美術館には、加賀藩が誇った象嵌の鍔（あぶみ）など、彫金の技法を示す作品が数多く所蔵されている。

001-035

Kaga Metal Inlay

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（７）
選択無形文化財 工芸技法「金工一（彫金）加賀象嵌」
（かがぞうがん）【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kaga Metal Inlay

Kaga metal inlay, also called *kaga zōgan*, is a decorative metalwork technique that developed in Kaga domain (now Ishikawa Prefecture). The craft is particularly associated with armor, sword fittings, and horse tack produced in Kaga during the Edo period (1603–1867). *Kaga zōgan* is one of several metal chasing techniques known as *chōkin*, which were collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Metal inlays are usually formed by embedding softer metals, such as gold and silver, into a harder base metal. *Kaga zōgan* is a flat inlay technique, meaning the sheets of metal or wire that make the design are made to lie flush with the base metal. A key feature of this style is the way the inlaid metal is held in place. The artisan cuts into the base metal at an angle so that the bottom of the cavity is wider than the opening. When the inlay metal is hammered in to create a smooth surface, it spreads into this indentation and is secured in place by the overhanging base metal.

The designs of *kaga zōgan* are often multicolored. This is achieved with a multilayered approach in which inlaid pieces are themselves inlaid with another metal. Multilayer inlays are difficult to achieve with soldering or adhesives, but the strength of the bond created with the *kaga zōgan* method makes them possible. Unusual colors are also created through a technique called *irogane*, in which traditional copper alloys are treated with weak acidic solutions to create protective oxide coatings and colorful patinas.

In Japan, inlaid swords dating as far back as the Kofun period (ca. 250–552 CE) have been found, but the craft was not firmly established until the advent of metalsmith Gotō Yūjō (1440–1512). Considered the father of Japanese engraving, Gotō developed many decorative metalworking techniques, which his descendants further evolved and disseminated.

Inlay techniques came to Ishikawa in the early seventeenth century, when the area was known as Kaga domain. The lord of the domain, Maeda Toshinaga (1562–1614), invited Gotō Tokujō (1550–1631), Yūjō’s great-great-grandson, to instruct local metalworkers on the decoration of armor and horse tack. This arrangement between the Maeda and Gotō families continued for centuries, during which time Kaga domain developed a reputation for exquisite metalwork, particularly inlaid stirrups and armor capable of withstanding the wear and tear of practical use.

When the Meiji Restoration in 1868 ended samurai rule, metalworkers who made a living supplying samurai with swords and armor lost the main source of their livelihoods. However, government policies supporting trade and international exchange created an overseas market for metal artworks, and some metalworkers were able to pivot to purely artistic pursuits. The craft was once more endangered by metal scarcities during Japan’s wars in the first half of the twentieth century, and again when the technological boom years of the second half led to dwindling interest in traditional crafts.

Despite these difficulties, the metalworkers of Ishikawa have endured and passed down the skills and knowledge of *kaga zōgan* to a new generation—artists who are even now developing innovative ways of applying the technique to a modern aesthetic. In 2004, Nakagawa Mamoru (1947–) was designated a Holder of Important Intangible Cultural Heritage for his skill in metal chasing. The Ishikawa Prefectural Museum of Art holds one work by Nakagawa and seven works by his teacher, metal engraver Takahashi Kaishū (1905–2004).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀象嵌

加賀象嵌（かがぞうがん）は、加賀藩（現在の石川県）で発達した装飾的な金工技法である。特に江戸時代（1603－1867）に加賀で生産された鎧、刀装具、馬具に関連する工芸品である。加賀象嵌は彫金技法のひとつであり、彫金は1955年に重要無形文化財に指定された。

一般的に象嵌は、金銀などの柔らかい金属を、硬い地金に埋め込むことによって形成される。加賀象嵌は平象嵌とも呼ばれ、地金に金属板や針金で文様を埋め込み、地金と同じ高さになるように作られる技法である。加賀象嵌の特徴は、地金の留め方にある。職人が地金に斜めに切り込みを入れ、開口部よりも底部の方が広くなるようにする。このくぼみに象嵌を打ち込み、表面を滑らかにすると、象嵌が広がり、地金のはみ出しで固定される。

加賀象嵌のデザインは多色であることが多く、これは象嵌の部分と別の金属を重ね合わせる「重ね象嵌」という手法で表現される。はんだや接着剤では接合が難しいが、加賀象嵌は接着力が強いので可能だ。また、伝統的な銅合金を弱酸性の溶液で処理し、保護用の酸化皮膜やカラフルな緑青（ろくしょう）を作る「色金」という技法で、珍しい色を作ることできる。

日本では古墳時代（250年頃-552年頃）の象嵌刀が発見されているが、その技法が確立されたのは、金工家・後藤祐乗（1440-1512）の登場からである。後藤は日本の彫金の父と考えられ、多くの装飾的な金属加工技術を開発し、その子孫がさらに進化させ、普及させた。

石川県に象嵌技法がもたらされたのは、17世紀初頭、加賀藩の時代である。藩主の前田利長（1562-1614）は、祐乗の曾孫である後藤徳乗（1550-1631）を招き、鎧や馬具の装飾を地元の金工に指導させたのである。加賀藩は、前田家と後藤家の間で数世紀にわたって金工の名声を高め、特に象嵌細工の鎧（あぶみ）や実用に耐える甲冑（かっちゅう）に定評があった。

1868年の明治維新で武士がいなくなると、武士に刀や鎧を納めることを生業としていた金工職人たちは、生計の主な源を失った。しかし、貿易や国際交流を支援する政府の政策により、金属工芸品の海外市場が生まれ、一部の金属工芸家は純粋な芸術活動へと軸足を移すことができた。しかし、20世紀前半の戦争による金属不足、後半の技術革新による伝統工芸への関心の低下などにより、再び危機的な状況に陥った。

しかし、石川県の金工家たちは、加賀象嵌の技と知識を新しい世代に伝え、その技を現代的な美意識に応用するための革新的な方法を開発しているのである。2004年、中川衛（1947-）は、その彫金技術が評価され、重要無形文化財保持者に認定された。石川県立美術館は、中川の作品1点と、中川の師である彫金家・高橋介州（1905-2004）の作品7点を所蔵している。

001-036

Kaga Metal Inlay

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（７）
選択無形文化財 工芸技法「金工―（彫金）加賀象嵌」
（かがぞうがん）【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kaga Metal Inlay

Kaga metal inlay, also called *kaga zōgan*, is a decorative metalwork technique from Ishikawa Prefecture, formerly known as Kaga domain. It is one of the *chōkin* chasing techniques collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Kaga zōgan is a flat inlay technique in which softer metals, such as gold and silver, are embedded in a base of harder metal. The artisan cuts into the base metal at an angle so that the bottom of the cavity is wider than the opening. When the inlay metal is hammered in to create a smooth surface, it spreads into this indentation and is secured in place by the overhang in the base metal. *Kaga zōgan* is also known for multilayered inlays and for the use of patinated copper alloys called *irogane* that produce an array of colors.

Kaga zōgan is strongly associated with armor and horse tack produced in Kaga domain during the Edo period (1603–1867). During that time, the rulers of Kaga invested heavily in traditional crafts, including metalwork. They invited famed metalworkers from Kyoto and Edo (present-day Tokyo) to instruct their artisans. The works of beautiful and durable inlay the artisans subsequently produced were gifted to the shogun and to other domain lords in a show of soft power.

Today, *kaga zōgan* endures as an art form in its own right. Its methods are preserved by Ishikawa artisans, who are finding new expressions for this traditional technique in jewelry, art, and home décor. In 2004, Nakagawa Mamoru (1947–) was designated a Holder of Important Intangible Cultural Heritage for his skill in metal chasing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀象嵌

加賀象嵌（かがぞうがん）は、石川県（旧加賀藩）の装飾金工技法である。彫金技法のひとつであり、彫金は1955年に重要無形文化財に指定された。

加賀象嵌は、金や銀などの柔らかい金属を、硬い金属の地金に平らに埋め込む平象嵌の技法である。地金に斜めに切り込みを入れ、開口部より底部の方が広くなるようにする。このくぼみに、象嵌した金属を打ち込んで表面を滑らかにすると、金属が広がり、地金の張り出した部分によって固定される。また、加賀象嵌は重ね象嵌や、色金と呼ばれる銅合金を用いて、多彩な色彩を表現することでも知られている。

加賀象嵌は、江戸時代（1603－1867）に加賀藩で生産された鎧や馬具と強い結びつきがある。この時代、加賀藩は金工をはじめとする伝統工芸に大きな投資を行っていた。加賀藩は、京都や江戸（現在の東京）から有名な金工職人を招き、職人たちを指導した。その結果、美しく丈夫な象嵌細工が生まれ、将軍や諸大名に献上され、ソフト・パワーが発揮された。

現在も加賀象嵌は芸術として存続している。石川県の職人たちは、その技法を守りながら、ジュエリーやアート、インテリア、室内装飾など、新たな表現で加賀象嵌の魅力を伝えている。2004年、中川衛（1947-）は、その彫金技術が評価され、重要無形文化財保持者に認定された。

001-037

Metal Casting (*Chūkin*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（8）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工―鑄金」
（ちゅうきん）【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Metal Casting (*Chūkin*)

Chūkin refers to several traditional casting methods used in Japanese metalwork. Each involves pouring molten metal into a mold, then allowing the cast object to cool at room temperature. Because the artisan is working with metal as a liquid, much more complicated forms are possible compared to what can be achieved through other metalworking techniques, such as hammering. *Chūkin* techniques were collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1964.

Molds for *chūkin* are constructed using a mixture of clay and sand called *mane* (pronounced “mah-nay”). The molds are divided into three types based on the way they are made: *rōgata*, *komegata*, and *sōgata*.

Rōgata is a lost-wax technique in which a model of the desired object is first crafted out of a malleable mix of beeswax and resin. *Mane* is then packed around the wax model and heated. The wax liquefies and drains out, leaving a hollow in the shape of the original image. Of the three mold types, lost-wax casting allows artists to reproduce the most complex shapes, but the model is destroyed in the process.

Komegata is a section molding technique (also called “piece molding”) in which a model is first made with clay. The model is then covered with plaster, creating a preliminary mold. Next, the outside of the plaster mold is covered in *mane*, which is then cut into sections for removal and separate reassembly. After that, the inside of the plaster mold is covered in *mane*. This results in two mirrored *mane* shapes, one slightly smaller than the other. Once hardened, they are used as an inner and outer

mold.

The *sōgata* approach is used for circular, bowl-shaped objects like bells and tea ceremony kettles. The top and bottom of a *sōgata* mold are formed inside two heat-resistant basins. The insides of the basins are filled with *mane*, which is then pressed into an even layer lining the sides and bottom of each basin. The inside surface of the *mane* is smoothed using a board rotated around the basin's central axis. Decorative designs can then be pressed or carved into the *mane*; these will appear on the outer surface of the finished object. Next, the *mane* inside the basins is hardened by firing. Then the top and bottom halves of the mold are fitted together—much like two halves of a wooden nesting doll—with a core mold called a *nakago* inside them. The *nakago* rests on spacers of metal to create a gap for the molten metal to flow into.

Regardless of method, when the casting mold is complete, molten metal is poured in, taking the shape of the hollow within. Once the metal has cooled, the mold is broken away, leaving just the metal form. Often, the still-warm object is coated with lacquer or a black, iron-based dye to give it color and a protective finish.

Cast metal objects were first imported to Japan from mainland Asia, but evidence suggests domestic casting began during the early Yayoi period (400 BCE–200 CE). By the first century CE, craftspeople in Japan were using advanced casting techniques to form bronze items such as swords, mirrors, and bell-shaped ritual objects called *dōtaku*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鑄金

鑄金（ちゅうきん）とは、日本の金工で使われるいくつかの伝統的な鑄造方法を指す。いずれも、溶かした金属を型に流し込み、常温で冷やすというものである。金属を液体として扱うため、鋳起などの他の金属加工技術に比べ、より複雑な形状が可能である。1964年に重要無形文化財に指定された。

鑄金の鑄型は、「真土（まね）」と呼ばれる粘土と砂を混ぜたもので作られる。この鑄型は、作り方によって「蠟型（ろうがた）」「込型（こめがた）」「惣型（そうがた）」の3種類に分けられる。

蠟型は、蜜蠟と樹脂を混ぜ合わせたものから、目的の物体の原型を作るロストワックス技法である。蠟の周りに真土を詰め込み、加熱する。すると、蠟が溶けて排出され、原型のくぼみが残る。3種類の型のうち、ロストワックス鑄造は最も複雑な形状を再現できるが、原型はその過程で壊される。

込型は、粘土で原型を作る込型鑄造（piece molding）の技法である。まず粘土で型を作り、その上に石膏で原型を作る。次に、石膏型の外側を真土で覆い、それを分割して取り外し、別々に組み立てる。その後、石膏型の内側を真土で覆う。こうすることで、鏡像のような2つの真土ができ、片方はわずかに小さくなる。固まった後は、内型と外型として使用する。

鐘や茶道の茶釜など、円形のお椀のような形状のものには、「惣型」という手法を用いる。耐熱性のある2つの型の中に、惣型の上下を形成する。その中に真土を入れ、側面と底面が均等になるように押し付ける。型の中心軸を中心に回転させた型紙の板で、型の内側を平らにならす。このとき、真土を押ししたり、彫刻したりすることで、外側に装飾を施すことができる。次に、型の中の真土を焼成して固める。そして、木製の入れ子人形のように上下の型を合わせ、その中に中型と呼ばれる芯型を入れていく。中型には金属製のスペーサーを置いて、溶けた金属が流れ込むように隙間を作る。

いずれの方法でも、鑄型が完成したら、溶けた金属を流し込み、中の空洞の形をとる。金属が冷えると、鑄型は壊され、金属の形だけが残る。このとき、漆や鉄系の黒色染料でコーティングし、保護することが多い。

日本に初めて鑄物が伝わったのはアジア大陸からであるが、弥生時代初期（紀元前400年-200年）には鑄物が始まっていたことがわかっている。1世紀頃までには、高度な鑄造技術によって、刀剣、鏡、銅鐸などの青銅器が作られるようになった。

001-038

Metal Casting (*Chūkin*)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（8）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工―鑄金」
（ちゅうきん）【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Metal Casting (*Chūkin*)

Chūkin refers to several traditional casting methods used in Japanese metalwork. Casting creates metal forms by pouring molten metal into molds and allowing it to cool. When working with molten metal, artisans can achieve much more complicated shapes than are possible with other metalworking techniques, such as hammering. *Chūkin* techniques were collectively designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1964.

Casting technology arrived in Japan from mainland Asia during the early Yayoi period (400 BCE–200 CE). By the first century CE, metalworkers were using advanced techniques to form bronze items such as swords, mirrors, and bell-shaped ritual objects called *dōtaku*. Techniques for casting iron, which has a higher melting point, soon followed, along with the development of metallurgical techniques to refine ore and create diverse alloys from gold, silver, copper, tin, and iron. The specialized skills to smelt and cast these materials were handed down in metalworking shops from generation to generation. Over the centuries, casting has been used not only for decorative works but also in the creation of temple bells, tea ceremony kettles, cauldrons for cooking rice, and other objects linked with traditional Japanese culture. In Ishikawa Prefecture, metal casting is particularly associated with the making of gongs (*dora*) used in tea ceremony.

Chūkin is classified by the method used to make the casting mold. *Rōgata* is a lost-wax technique. *Komegata* is a section molding technique using clay models and plaster to create inner and outer molds. *Sōgata* is a technique in which a mixture of sand and clay called *mane* is pressed in a layer along the walls of two bowl-shaped basins that

form the halves of an outer mold. After firing, the parts are fitted together like two halves of an egg around a smaller core, leaving space between them for the liquid metal.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鑄金

鑄金（ちゅうきん）とは、日本の金工で使用されるいくつかの伝統的な鑄造方法を指す。鑄造とは、溶かした金属を型に流し込み、冷やすことで金属を形作る技法である。金属を液体として扱うため、鋳起しなどの他の金属加工技術よりもはるかに複雑な形状を実現することができる。1964年に重要無形文化財に指定された。

鑄造技術は、弥生時代初期（紀元前400年-紀元200年）にアジア大陸から日本にもたらされた。1世紀頃までには、刀や鏡、銅鐸などの青銅器が高度な技術で造られるようになった。また、鉾石を精錬し、金、銀、銅、錫、鉄などさまざまな合金を作る冶金技術も発達していた。そして、これらの材料を錬り、鑄造する専門技術が、金属加工業で代々受け継がれていったのである。何世紀にもわたって、鑄物は装飾品だけでなく、梵鐘や茶釜、飯釜など日本の伝統文化に関連するものにも用いられてきた。特に石川県では、茶道の銅鑪（どら）作りに鑄物が受け継がれている。

鑄金は、鑄型の作り方で分類される。蠟型（ろうがた）はロストワックスの技法で作られる。込型（こめがた）は、粘土の模型と石膏で内型と外型を作る込型鑄造（piece molding）の技法である。惣型（そうがた）は、外型の半分をなす2つの椀状の鉢の壁に沿って、砂と粘土（真土）と呼ばれるの混合物を層状に押し付ける技法である。焼成後、外型と内型を卵のようにはめ込み、その間に液状の金属を流し込む。

001-039

Dora Gongs

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（9）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工—銅鑼」（どら）
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Dora Gongs

Dora are small metal gongs mainly used in tea ceremony (*chanoyu*). They are made with an alloy called *sahari*, a carefully calibrated mixture of copper, tin, lead, and silver. The balance of these metals is key to producing a *dora*'s distinctive resonance, while the size and thickness of an individual gong determine its pitch and timbre.

Gongs made of various metals were brought to Japan via mainland Asia, possibly originating with percussion instruments from the southern islands of Java and Sumatra. Originally, they were used as musical instruments in the performing arts and to signal events like military maneuvers and ship departures. As tea gatherings developed into a social and aesthetic practice in the fifteenth and sixteenth centuries, *dora* gongs were incorporated as a means for the host to signal to participants that it was time to enter the tea room. The low, long-lasting reverberations were intended to set a suitably meditative tone for the gathering. Even today, *dora* remain essential implements in all modern schools of tea.

Dora are cast using a lost-wax method. First, a base form is crafted using a mixture of clay and rice chaff. When this base form is fired, the chaff turns to ash, creating small holes that will allow gas to escape during the casting. The still-hot base is then covered with layer upon layer of *mane*, a blend of clay and sand, which can be shaped and smoothed with a wooden template into the desired gong shape. Once dried, the *mane* can be further carved or scraped to add texture and ornamentation, although this will also affect the tone of the finished gong. Together, the base and *mane* layers create the bottom half of the casting mold. A layer of wax is pressed into the sculpted depression, and a clay-and-rice-chaff top completes the mold. When the entire construction is

heated, the wax layer drains out, creating a gong-shaped hollow in which to pour the molten *sahari* alloy.

Once cooled for about an hour, the mold is carefully chipped away to reveal the gong within. The artisan will finish the piece with polishing and sometimes hammering. The completed *dora* is then hung in a wooden frame.

The making of *dora* gongs was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955. That same year, Ishikawa native Uozumi Iraku I (1886–1964) was designated a holder of Important Intangible Cultural Heritage for his skill at making *dora*. In 2002, his grandson Uozumi Iraku III (1937–) was also designated a holder of the technique. The Ishikawa Prefectural Museum of Art collection includes *dora* and other metalworks produced by the Uozumi family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

銅鑼

銅鑼は、主に茶道（茶の湯）で使われる小型の金属製の鉦（かね）である。銅、錫、鉛、銀を慎重に配合した「砂張（さはり）」と呼ばれる合金で作られる。これらの金属のバランスで銅鑼特有の響きを作り出し、個々の銅鑼の大きさや厚みで音程や音色を決定する。

さまざまな金属製で作られた銅鑼が、アジア大陸を経由して日本に伝わったが、その起源はジャワ島やスマトラ島などの南方系の打楽器であった可能性がある。もともとは芸能の楽器として、また軍事作戦や船の出航などの合図に使われていた。15世紀から16世紀にかけて茶会が社会的、美的実践として発展するにつれ、銅鑼は亭主が参加者に茶室に入る時間を知らせる手段として取り入れられるようになった。低く、長く続く残響音は、集まりにふさわしい瞑想的な音色をもたらすことを意図していた。今日でも、銅鑼はすべての近代的な流派のお茶にとって不可欠な道具である。

銅鑼はロストワックス製法で作られている。まず、粘土と粉殻を混ぜたもので土台となる形を作る。粉殻は焼くと灰になり、鑄造時にガスが抜けるように小さな穴が開く。その上に、粘土と砂を混ぜた「真土」を何層にも重ね、木型で形を整え、鉦の形にならす。乾燥後、さらに真土を削り、質感や装飾を加えることもできるが、これは完成品の音色にも影響する。ベースと真土を合わせたものが、鑄型の下半分になる。蠟の層が彫られたくぼみに押し込まれ、粘土と粉殻の層が型を完成させる。鑄型全体を加熱すると、蠟の層が抜け、鉦の形の空洞ができ、そこに溶けた砂張を流し込む。

1時間ほど冷やした後、型を丁寧に削り取ると、中の銅鑼が現れる。職人が磨き、時には鎚で叩い

て仕上げる。完成した銅鑼は、木製の枠に掛けられる。

1955年、銅鑼は重要無形文化財に指定された。同年、石川県出身の初代・魚住為楽（1886-1964）が、銅鑼作りの技術で重要無形文化財保持者に認定された。2002年には孫の三代・魚住為楽（1937-）も技術保持者に認定された。石川県立美術館には、魚住家の銅鑼をはじめとする金工品が収蔵されている。

001-040

Dora Gongs

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（9）
国指定重要無形文化財 工芸技法 「金工—銅鑼」（どら）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

***Dora* Gongs**

Dora are small gongs used mainly in tea ceremony (*chanoyu*). The tea host rings a *dora* to signal participants that it is time to enter the tea room, and the deep, long-lasting reverberations are intended to set an appropriately meditative tone for the gathering. The gongs produce this resonant sound thanks to their constituent alloy—a precise mixture of copper, tin, lead, and silver called *sahari*.

Dora are cast by hand using a lost-wax technique. The artisan makes a new casting mold for each one, since the mold must be broken to extract the cooled metal inside. The artisan finishes the piece with polishing and sometimes hammering. The size and thickness of the gong, as well as any ornamentation, influence its pitch and timbre, and anticipating these effects requires expert skill. The completed *dora* is hung in a wooden frame called a *dorakake*.

The craft of making *dora* was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955. Kanazawa native Uozumi Iraku III (1937–) became a Holder of Important Intangible Cultural Heritage for the *dora*-making technique in 2002. He learned the craft from his grandfather, Uozumi Iraku I (1886–1964), who had been designated a holder in 1955 for his skill in making *dora*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

銅鑼

銅鑼は、主に茶道（茶の湯）で使われる小型の金属製の鉦（かね）である。茶人が銅鑼を鳴らして茶室に入る時間を知らせ、その深く長い余韻は、集まりに適切な瞑想的なトーンにするためのものである。銅、錫、鉛、銀を精密に配合した「砂張（さはり）」という合金が、この響きを生み出すのである。

銅鑼はロストワックスという技法で、手作業で鑄造される。鑄型を壊して中の冷えた金属を取り出す必要があるため、職人は1つ1つ新しい鑄型を作るのである。職人が磨き、時にはハンマーで叩いて仕上げる。銅鑼の大きさや厚み、装飾品によって音の高さや音色が変わるので、それを見極めるのも熟練の技である。完成した銅鑼は、「銅鑼掛（どらかけ）」と呼ばれる木製の杵に吊るされる。

銅鑼作りは、1955年に重要無形文化財に指定された。金沢市出身の三代・魚住為楽（1937-）は、2002年に銅鑼作りの技術で重要無形文化財保持者に認定された。1955年に銅鑼作りの技術で保持者に認定された祖父の初代・魚住伊楽（1886-1964）から、その技術を受け継いだ。

001-041

Woodworking

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（10）
国指定重要無形文化財 工芸技法「木竹工—木工芸」
（もっこうばい）【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Woodworking

Woodworking has long been a key component of traditional architecture and numerous other crafts, such as lacquerware and basketry. The importance of woodworking was formally recognized in 1970, when it was designated an Important Intangible Cultural Heritage.

Japan's varied climate and geography support a wide variety of native timber suitable for woodworking. Simple artifacts made of wood, such as bowls, bows, and boats, have been found at archaeological sites dating back to the Jōmon period (10,000–400 BCE). The spread of iron tools during the Yayoi period (400 BCE–200 CE) and the arrival of expert engineers and craftspeople from mainland Asia starting in the Kofun period (ca. 250–552), led to increasing complexity and sophistication in the craft. Beginning in the seventeenth century, urbanization and the growing wealth of the merchant class contributed to a woodworking boom in which highly specialized skills evolved to meet demand for ever more intricate and lavish works. From the nineteenth century on, increased international trade and exchange fueled broad demand for Japanese crafts, prompting woodworkers to turn their traditional skills to the making of innovative works of art. These creations established woodworking as a major artistic discipline.

Woodworking in Ishikawa Prefecture falls predominantly into four categories. Joinery (*sashimono*) involves fastening wooden boards or panels together without the use of nails. This is usually done so that the joint is concealed. Carving (*kurimono*) involves the use of planes, knives, and chisels to shape objects from blocks of wood. The technique requires careful attention to the grain and other features of the timber, and

artists adjust their work to make the most of the material's organic qualities. Bentwood work (*magemono*) involves soaking pieces of softwood like cedar or cypress in hot water to make them pliable and then bending them into cylinders or ovals. This technique is often used to make rice and bento boxes, as the naturally antiseptic wood retains heat and moisture. Finally, lathing (*hikimono*) involves the use of blades to shape blocks of wood rotating on a lathe, making it ideal for circular items like bowls and trays. All of these techniques require the artisan to have an expert understanding of the wood's properties, since cut wood can warp or split due to changes in temperature or humidity.

Woodworking has become a highly developed craft in Ishikawa partly because it is used to craft lacquerware substates (base objects). Having a finely formed base on which to apply lacquer is the first prerequisite not only in traditions like Yamanaka ware—where the wood grain remains visible through thin layers of lacquer—but also in the more thickly lacquered and ornately decorated styles of Kanazawa and Wajima.

Ishikawa has produced several Holders of Important Intangible Cultural Heritage in woodworking, including the very first one: Himi Kōdō (1906–1975), designated in 1970 for *sashimono*. Two more woodworking holders from Ishikawa are Kawagita Ryōzō (1935–), named in 1994 for *hikimono*, and Haisoto Tatsuo (1941–2015), named in 2012 for *sashimono*. Works by each of these artists can be found at the Ishikawa Prefectural Museum of Art.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

木工

木工は長い間、伝統的な建築物や漆器、籠細工など多くの工芸品の重要な構成要素であった。木工の重要性は1970年に正式に認められ、重要無形文化財に指定された。

日本は気候や地形が変化に富んでおり、木工に適した多種多様な在来木材が豊富にある。縄文時代（紀元前 10,000- 300 年）の遺跡からは、椀、弓、舟などの単純な木製品が見つっている。弥生時代（紀元前 400 年-紀元前 200 年）に鉄器が普及し、古墳時代（約250-552年）にはアジア大陸から専門技術者や職人が渡来したことで、工芸はますます複雑化、高度化していった。17世紀以降、都市化と商人階級の富の増大により木工ブームが起こり、より複雑で豪華な作品の需要に応えるため、高度な専門技術が発達した。19世紀以降、国際貿易や交

流が盛んになると、日本の工芸品への需要が高まり、木工職人は伝統的な技術を生かして革新的な芸術性の作品を制作するようになった。そして、木工は芸術の一大分野として確立していったのである。

石川県の木工は、大きく分けて4つに分類される。指物（さしもの）とは、木製の板やパネルを釘を使わずに固定することである。これは通常、接合部が見えないようにする。刳物（くりもの）は、かなや刃物、ノミを使って、一塊の木から形を作る。木目や材質を見極め、素材の持ち味を生かした作品に仕上げる。曲物（まげもの）は、杉やヒノキなどの針葉樹を湯に浸してしなやかにし、円柱や楕円に曲げたものである。防腐効果のある木材は保温・保湿性が高いため、ご飯箱やお弁当箱などによく使われる。また、ろくろで回転させた木の塊を刃物で成形する挽物（ひきもの）は、お椀やお盆など円形のものに適している。いずれも、切り出した木材が温度や湿度の変化で反ったり割れたりするため、木の性質を熟知した職人が必要である。

木工は漆器の下地（ベースとなるもの）を作るために使われることもあり、石川県では非常に発達した工芸品となっている。漆を塗る下地は、木目を生かした山中漆器だけでなく、金沢や輪島などの厚塗りで華麗な装飾が施された漆器でも、漆を塗る土台が緻密であることは不可欠である。

石川は木工芸の重要無形文化財保持者を何人も輩出している。最初に1970年に「指物」で氷見晃堂（1906-1975）が認定された。石川県出身のもう二人の木工芸保持者は、1994年に「挽物」で川北良造（1935-）、2012年に「指物」で灰外達夫（1941-2015）の2名が認定されている。それぞれの作家の作品は、石川県立美術館で見ることができる。

001-042

Woodworking

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（10）
国指定重要無形文化財 工芸技法「木竹工—木工芸」
（もっこうばい）【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Woodworking

Woodworking is a diverse craft with a long history in its own right, but it has also been a key component of crafts such as lacquerware and basketry. The importance of woodworking was formally recognized in 1970, when it was designated an Important Intangible Cultural Heritage.

The varied climate and geography of the Japanese archipelago support a wide variety of native timber suitable for woodworking, and archaeological excavations have uncovered artifacts of shaped wood dating back to the Jōmon period (10,000–400 BCE). Over time, as tools and techniques became more sophisticated, works of art and architecture grew increasingly complex. Today, woodworking is recognized as a major artistic discipline.

The four main techniques used are *sashimono* (nail-less joinery), *kurimono* (carving from a single block of wood), *magemono* (bending softwoods soaked in hot water), and *hikimono* (lathing). All of these techniques require the artisan to have an expert understanding of the wood's properties, since cut wood can warp or split when exposed to changes in temperature or humidity.

In Ishikawa Prefecture, woodworking has developed alongside the area's famed lacquerware, which commonly has a wood substrate (base). Finely formed bases are essential not only in traditions like Yamanaka ware, where the wood grain remains visible through thin layers of lacquer, but also in the more thickly lacquered and ornately decorated styles of Kanazawa and Wajima.

Several Holders of Important Intangible Cultural Heritage in woodworking have come from Ishikawa, including Himi Kōdō (1906–1975), Kawagita Ryōzō (1935–), and Haisoto Tatsuo (1941–2015).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

木工

木工は、それ自体が長い歴史を持つ多様な工芸品であるが、漆器、籠細工など多くの工芸品の重要な構成要素でもある。1970年には、正式にその重要性が認められ、重要無形文化財に指定された。

日本列島の気候や地形は、木工に適した多種多様な種類の在来木材を育み、縄文時代（紀元前10,000-400年）の木製品の遺物が発掘されている。時が経つにつれ、道具や技術が高度化し、美術品や建築物も複雑化していった。現在では、木工は芸術の一大分野として認識されている。

その技法は、「指物」「刳物」「曲物」「挽物」の4つに大別される。いずれも、切り出した木が温度や湿度の変化で反ったり割れたりするため、木の性質を熟知した職人が必要だ。

石川県では、漆器とともに木工が発達しており、漆器の下地（ベース）は木が一般的である。山中漆器のように木目を生かしたものだけでなく、金沢や輪島のように漆を厚く塗り、装飾を施したもので、木地がきれいに整っていることが必要不可欠である。

氷見晃堂（1906-1975）、川北良造（1935-）、灰外達夫（1941-2015）など、石川県から木工芸の重要無形文化財保持者が数人誕生している。

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（11）
国指定重要無形文化財 工芸技法「金工—日本刀」
（にほんとう）【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Forging Japanese Swords

Single-edged blades have been produced in Japan for centuries using forging techniques that create exceptionally strong steel with complex surface grains and temper patterns. Japanese sword making was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Over the centuries, various types of blades with different lengths and curvatures emerged in response to the needs and styles of the time. All of the blade styles, however, have shared a similar forging technique. The raw material is a low-impurity iron sand that is mixed with charcoal, smelted, and forge-welded into a type of steel called *tamagahane*. These steel blocks are repeatedly folded and hammered out to remove impurities and distribute the carbon content evenly, resulting in a high-quality, multilayered steel. The tip of the blade is cut at an angle and hammered to form the point, after which the entire surface is smoothed.

Next, the sword is tempered to increase its strength and ability to hold a sharp edge. The smith first applies a mix of clay, charcoal, and powdered whetstone to all but the cutting edge. The blade is heated, then abruptly quenched in water, which creates a unique temper pattern along the blade's length. Then, any distortions in the blade are corrected using a hammer, and the blade is polished to razor sharpness. The final step is the inscription of the smith's signature (*mei*) on the tang, the part of the blade that fits inside the hilt.

Cast swords—formed by pouring molten metal into a mold—had existed since at least

the Kofun period (ca. 250–552). It was not until the Heian period (794–1185), however, that domestic swordsmiths began to forge swords. At the end of the twelfth century, the very long, arced blades called *tachi* emerged, marking the true beginning of *nihontō*, or Japanese swords.

During the turmoil of the fifteenth and sixteenth centuries, a slightly shorter sword called a *katana* became the dominant style. While some finely forged swords were produced for rulers, many lower-quality, mass-produced *katana* were made for ordinary samurai. In the early seventeenth century, however, peace was achieved under the Tokugawa shogunate. Over the next two centuries of shogunate rule, swords became important symbols of status and power. This drove increased sophistication in the craft as wealthy patrons demanded works of both functional and artistic value. Swordsmiths and artisans of related crafts gathered in castle towns to meet this demand.

Both the blades and the associated mountings and fittings were often works of art, made by specialized artisans. Ornate additions, like custom-made wood scabbards covered with lacquer and gold *maki-e*, hilts covered in silk-wrapped sharkskin, and finely wrought hand guards inlaid with precious metals, showed the wealth and status of the wearer. Thanks to the patronage of the Maeda lords, Kaga domain (present-day Ishikawa and Toyama Prefectures) was able to attract and foster many skilled swordsmiths and related artisans from the seventeenth to nineteenth centuries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の鍛造

日本では古くから片刃の刀が生産されており、鍛造技術により、複雑な鍛え肌・地肌と刃文を持つ、非常に強靱な鋼が生み出されている。1955年、日本刀づくりは重要無形文化財に指定された。

何世紀にもわたって、時代のニーズやスタイルに応じて、長さや曲率の異なるさまざまな種類の刃物が生み出されてきた。しかし、どの刀にも共通するのは、鍛造技術である。原料は不純物の少ない砂鉄で、これを炭と混ぜて製錬し、鍛接し、玉鋼（たまはがね）と呼ばれる鋼をつくる。この鋼塊を何度も折り曲げたり、打ち出したりして不純物取り除き、炭素を均一に分散させることで、高品質で多層構造の鋼に仕上げる。刃の先端を斜めにカットし、槌で叩いて尖らせた後、全体を平滑に

仕上げる。

次に、刀の強度と切れ味を高めるために焼き入れを行う。まず、粘土と炭と砥石の粉を混ぜたものを刃先以外のすべての部分に塗る。刃を熱し、水で急冷することで、刃の長さに沿って独特の刃文ができる。その後、ハンマーで刃の歪みを取り、鋭利な刃に磨き上げる。最後になかご（柄の内側に納まる刃の部分）に鍛冶職人のサイン（銘）を入れる。

鋳型に溶かした金属を流し込んで作る鋳造刀は、少なくとも古墳時代（250～552年頃）には存在していた。しかし、国内の刀工が鍛刀するようになったのは、平安時代（794-1185）に入ってからである。12世紀末には、太刀と呼ばれる非常に長い弧を描く刀が登場し、これが日本刀の原型となった。

15世紀から16世紀にかけての混乱期には、カタナと呼ばれるやや短めの刀が主流となった。藩主のための精巧な刀が作られる一方、一般の武士のための低品質で大量生産された刀も多くあった。しかし、17世紀初頭に日本は徳川幕府のもとで平和が訪れた。その後、2世紀にわたる幕府の支配下に置かれ、刀剣は身分と権力の象徴となり、富裕層が機能性と芸術性を兼ね備えた価値の高い作品を求めるようになり、刀工の技術も洗練されていった。城下町には刀匠や関連工芸の職人たちが集まり、彼らの要望に応えた。

刀身とその付属品は専門の職人によって作られた芸術品であることが多い。漆や金の蒔絵を施した特注の木製の鞘（さや）、絹を巻いた鮫革の柄（つか）、貴金属をはめ込んだ精巧な鐔（つば）など、華麗な装飾品は着用者の富と地位を示している。加賀藩（現在の石川県・富山県）は、前田家の支援のもと、17世紀から19世紀にかけて、多くの腕利きの刀工や関連職人を集め、育成することができた。

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（11）
国指定重要無形文化財 工芸技法「金工—日本刀」
（にほんとう）【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Forging Japanese Swords

Japanese swords, or *nihontō*, are curved, single-edged blades known for their exceptionally strong steel and complex grain and temper patterns. Their making was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955.

Japanese swords are distinguished by the way they are forged and tempered. The raw material is a low-impurity iron sand that is mixed with charcoal, smelted, and forge-welded into a type of steel called *tamagahane*. *Tamagahane* blocks are repeatedly folded and hammered out to remove impurities and evenly distribute the carbon, resulting in high-quality, multilayered steel. A clay mixture is applied everywhere but the cutting edge before the blade is heated and quenched, which gives it a completely unique temper pattern. Finally, the blade is polished and the smith's signature inscribed on the tang (the part of the blade that fits inside the hilt).

Although earlier swords exist, the origin of true *nihontō* is the emergence of long, curved blades called *tachi* during the Heian period (794–1185). *Tachi* were supplanted by a slightly shorter style called *katana* as the dominant form in the fifteenth and sixteenth centuries. However, the term *nihontō* covers a wide variety of both short and long blades that emerged at different times in response to the needs and styles of the era.

During the seventeenth to nineteenth centuries, the Maeda lords of Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures) attracted many skilled swordsmiths, as well as artisans who crafted sword components, like scabbards and hand guards. Under the

Maedas' patronage, they were able to pursue and refine their crafts, supplying elite members of the warrior class with finely wrought swords and ornate fittings.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本刀の鍛造

日本刀は、湾曲した片刃の刃物で、非常に強い鋼と複雑な鍛え肌・地肌や刃文で知られている。1955年、日本刀づくりは重要無形文化財に指定された。

日本刀の特徴は、鍛錬と焼き入れの方法にある。原料は不純物の少ない砂鉄で、これを炭と混ぜて製錬し、鍛錬して玉鋼（たまはがね）と呼ばれる鋼を作る。玉鋼の塊を何度も折り曲げ、打ち延ばすことで不純物を取り除き、炭素を均一に分散させることで、高品質な多層鋼に仕上げる。刃を熱し、焼き入れする前に粘土を混ぜたものを刃先以外のすべての部分に塗ることで、全く独自の刃文をつけることができる。最後に刃を磨き上げ、なかご（柄の内側に納まる部分）に鍛冶職人の銘を刻む。

それ以前の刀も存在するが、真の日本刀の起源は平安時代（794-1185）の太刀と呼ばれる長く湾曲した刀の出現にある。15世紀から16世紀にかけて、太刀はカタナと呼ばれるやや短い刀に取って代われ、主流となった。しかし、一口に「日本刀」といっても、時代のニーズやスタイルに応じて、短刀から長刀までさまざまな刀が生まれた。

17世紀から19世紀にかけて、加賀藩（現・石川県・富山県）の前田藩主は、刀鍛冶や鞘・鍔などの刀装具の職人を引き寄せた。前田家の支援のもと、職人たちは技術を磨き、武士の上位階級に精巧な刀や華麗な装飾を施した刀を供給することができた。

001-045

Kirikane

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（12）
国指定重要無形文化財 工芸技法「金工・截金」（きりかね）
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kirikane

Kirikane is a decorative technique in which extremely thin pieces of metal foil, usually gold or silver, are cut and applied to wood or another substrate (base object) to form minute and intricate patterns. Originally, *kirikane* was principally used to decorate the robes and armor of Buddhist statuary. The technique came to Japan from mainland Asia during the Asuka period (552–645), but reached its peak between the eighth and early fourteenth centuries.

During the Edo period (1603–1867), *kirikane* was largely replaced by the use of gold paint, which was faster and easier to apply. *Kirikane* fell out of use to the degree that at one point, the skills to apply it were preserved only by Higashi-Honganji and Nishi-Honganji Temples in Kyoto. After World War II, the craft was revived when it spread beyond the religious realm as a way of decorating objects such as tea utensils and other works of art.

Gold foil is delicate enough to be torn by a stray breath, so *kirikane* artisans strengthen it by layering several sheets together. The sheets are handled with tweezers made of bamboo, a material that does not stick to the foil or conduct potentially damaging sparks of static electricity. Each sheet is briefly laid on a bed of hot ash, which heats the gold just enough to bond to the other sheets when they are stacked together and pressed. Once the multilayered gold foil is thick enough, the artisan transfers it to a deerskin cutting stand and uses a bamboo knife to cut strips thinner than a human hair. The deerskin holds the thin strips in place while also letting them be lifted away without sticking.

A special glue is used to affix the strips to the substrate. The glue is a mix of *funori*, a seaweed-based adhesive, and *nikawa*, an adhesive made from animal skin. The artisan works with a brush in each hand to apply the strips. One has a tip moistened with water. The artisan curls the end of a foil strip around the tip to lift it from the cutting stand. The other brush is moistened with a mixture of glue and water. The artisan uses it to simultaneously guide the foil strip onto the substrate and attach it to the surface.

Only three people have ever been designated as Holders of Important Intangible Cultural Heritage for *kirikane*. Ishikawa Prefecture was home to one of them, Nishide Daizō (1913–1995), who was designated in 1985. He encountered *kirikane* while studying the restoration of Buddhist art, and through intensive study he taught himself the technique. Nishide then incorporated *kirikane* into his own woodworking. The museum has several of his works in its collection, including a series of stylized animal-shaped vessels completely covered in multicolored gold lines and flower petals applied using the *kirikane* technique.

Kirikane was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1981.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

截金

截金（きりかね）とは、極薄の金や銀などの金属箔を切り取り、木などの素地（下地）に塗布して、微細で複雑なパターンを形成する装飾技法である。もともと截金は、仏像の衣や鎧の装飾に多く用いられていた。日本には飛鳥時代（552-645）にアジア大陸から渡来したが、8世紀から14世紀初頭にかけて最盛期を迎えた。

江戸時代（1603-1867）には、より早く簡単に塗れる金泥に取って代われ、截金は使われなくなった。一時は京都の東本願寺と西本願寺にしかその技術が残っていないほど廃れてしまった。第二次世界大戦後、宗教の枠を超えて、茶道具や美術品などの工芸品に施されるようになり、復活した。

金箔は息がかかると破れてしまうほど繊細なため、職人が何枚も重ねて補強する。竹製のピンセットを使って、箔に付着しないように、また静電気を帯びないように、何枚も重ねていく。このとき、箔は熱せられた灰の上に置かれ、重ね合わされた箔が他の箔と密着するのに十分な熱を持つ。何層にも重ねた箔が十分な厚さになったら、鹿革の裁断台に移し、竹刀で髪の毛よりも細く切っていく。鹿

革が薄い箔を固定し、かつ剥がすときにくっつかないようにするためだ。

帯状にしたものを下地に貼り付けるには、特殊な接着剤を使用する。糊は、海藻を原料とする「布海苔（ふのり）」と、動物の皮を原料とする「膠（にわか）」を混ぜ合わせたものである。職人は両手に筆を持って、帯状の箔を貼っていく。1つは、先端を水で湿らせた筆である。職人が箔の端を巻いて、裁断台から浮かせる。もう一本は、糊と水を混ぜたもので湿らせた筆である。これで箔を下地に乗せると同時に、表面に接着させる。

截金で重要無形文化財保持者に認定されたのは、これまで3人しかいない。石川県にはその一人、西出大三（1913-1995）は1985年に認定された。彼は仏教美術の修復を学ぶ中で截金に出会い、熱心に研究して独学で技法を習得した。その後、截金を自身の木工芸に取り入れた。当館には、色とりどりの金線と花びらで動物の容器全体を覆い尽くした截金作品など、数点の作品が収蔵されている。

截金は1981年に重要無形文化財に指定された。

001-046

Kirikane

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（12）
国指定重要無形文化財 工芸技法「金工・截金」（きりかね）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kirikane

Kirikane is a decorative technique in which extremely thin pieces of metal foil, usually gold or silver, are cut and applied to wood or another substrate (base object) to create minute and intricate patterns. It was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1981.

Kirikane arrived in Japan from mainland Asia during the Asuka period (552–645) and was traditionally used to decorate Buddhist statuary. During the seventeenth and eighteenth centuries, *kirikane* was largely replaced by the use of gold paint, which was faster and easier to apply. However, a pair of temples in Kyoto kept the technique alive, and it was revived after World War II by artists who applied it to non-religious works of art.

Gold foil is delicate enough to be torn by a stray breath, so *kirikane* artisans strengthen it by bonding several sheets together. Each sheet is briefly laid on a bed of hot ash, which heats the gold just enough to bond it to the other sheets when they are stacked together and pressed. Artisans hold and cut the layered foil with tweezers and a knife made of bamboo, a material that does not stick to the foil or conduct potentially damaging sparks of static electricity. The gold is cut into strips thinner than a human hair, which are then painstakingly glued to the surface of an object to create designs or embellish carvings.

The Ishikawa-born artist Nishide Daizō (1913–1995) was designated a Holder of Important Cultural Heritage in 1985 for his skill in *kirikane*.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

截金

截金（きりかね）とは、極薄の金や銀などの金箔を切り取り、木などの素地（下地）に貼り付けて、微細で複雑な模様を表現する装飾技法である。1981年に重要無形文化財に指定された。

飛鳥時代（552－645）にアジア大陸から渡来した截金は、伝統的に仏像の装飾に使われていた。17世紀から18世紀にかけては、より早く簡単に塗れる金泥の使用に取って代わられた。しかし、京都の2つの寺院がこの技法を守り続け、第二次世界大戦後、宗教以外の美術品に応用され、復活した。

金箔は息を吹きかけると破れてしまうほど繊細なため、截金職人は何枚も金箔を貼り合わせて強度を高めている。このとき、箔は熱せられた灰の上に置かれ、重ね合わされた箔が他の箔と密着するのに十分な熱を持つ。職人はピンセットと、箔がくっつきにくく、静電気を帯びにくい竹製のナイフで重ねた箔を持ち、カットする。箔は髪の毛より細いものもあり、丹念に作品の表面に貼りつけて、デザインや彫刻を装飾する。

石川県出身の西出大造（1913-1995）は截金の技術が評価され、1985年に重要無形文化財の保持者に認定された。

001-047

What Is a Holder of Important Intangible Cultural Heritage?

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要無形文化財全般（工芸部門を中心に）と人間国宝
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

What Is a Holder of Important Intangible Cultural Heritage?

Holders of Important Intangible Cultural Heritage are nationally recognized masters of a traditional craft or performing art that has been designated an Important Intangible Cultural Heritage. Many countries have a national treasure designation for tangible items—such as artwork, archeological artifacts, and historical architecture—but Japan was the first country to designate *intangible* practices, like traditional music, performing arts, and craft techniques, part of its cultural heritage. Such practices are deemed as important to a country’s culture and history as its tangible treasures, to be preserved for future generations against the homogenizing forces of globalization and modernization.

In 1950, the government began creating a framework to support the preservation and transmission of its full cultural heritage with the Law for Protection of Cultural Properties. This legislation was the first to define what constituted Important Intangible Cultural Heritage. A 1954 revision established a system for the designation of arts and crafts that fit this definition. The revision also contained provisions to recognize individuals or groups who mastered a designated art or craft as “holders” tasked with its preservation and promotion. Today, these people are referred to as “Holders of Important Intangible Cultural Heritage” or, informally, as “Living National Treasures.”

The selection process for both Important Intangible Cultural Heritages and Holders of Important Intangible Cultural Heritage is handled by the Ministry of Education, Culture, Science, Sports, and Technology. The minister submits candidates to the

Council for Cultural Affairs, an internal body focused on cultural research and promotion. With the assistance of relevant experts, the council decides if the proposed candidates should receive the designation.

Only a few hundred people have been named Holders of Important Intangible Cultural Heritage, a title they hold until death. Currently, the number of possible concurrent holders is capped at 116, although the actual number is usually lower. The number is set by the national budget, as all titleholders receive a stipend of at least 2 million yen each year. The funds are used for training successors, holding public performances or exhibitions, and creating archival documentation, such as films.

There are nine categories for Important Intangible Cultural Heritage under the heading of “Crafts”: ceramics, textiles, lacquerware, metalwork, woodwork and bamboowork, doll making, paper making, *bachiru* (stained ivory engraving), and *kirikane* (applying thin lines of metal foil to create designs). Specific techniques are recognized under these broad categories, such as *saiyū* glazing within the ceramics category or *maki-e* ornamentation under lacquerware.

Ishikawa Prefecture has a proud history in many of these categories. In fact, as of 2022, the prefecture had nine individuals and one group designated Holders of Important Intangible Cultural Heritage in crafts—more per capita than any other prefecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

重要無形文化財保持者とは？

重要無形文化財保持者とは、国の重要無形文化財に指定されている伝統工芸や芸能の名人を指す。美術品や考古遺物、歴史的建造物など、形のあるものを国宝に指定する国は多くあるが、日本はいち早く伝統音楽、芸能、工芸などの無形のものを文化遺産に指定した。このような慣行は、その国の文化や歴史にとって有形文化財と同様に重要なものであり、グローバル化や近代化によって均質化されることなく、後世に残すべきものである。

1950年、政府は「文化財保護法」を制定し、文化遺産の保存と継承を支援するための枠組み作りに着手した。この法律は、重要無形文化財を構成するものを定義した最初のものであった。

1954年の改正により、この定義に適合する美術工芸品の指定制度が設けられた。この改正には、指定された技術や工芸を習得した個人や団体を「保持者」として認定し、その保存と振興を図る規定も含まれている。現在、これらの人々は「重要無形文化財保持者」、あるいは通称「人間国宝」と呼ばれている。

重要無形文化財と重要無形文化財保持者の選考は、文部科学省が行っている。大臣は、文化財の研究・普及を目的とした文化審議会に候補者を提出し、有識者の意見を聞きながら、指定するかどうかを決定する。

重要無形文化財保持者に認定されたのはわずか数百人しかおらず、その認定は亡くなるまで保持される。現在の保持者の数は116人だが、実際数はこれよりも少ない。この人数は国家予算で決められるもので、資格保持者には毎年少なくとも200万円の俸給が支給される。資金は、後継者の育成、公演や展示会の開催、映画などの記録物の作成にも使われる。

重要無形文化財の「工芸」には、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、和紙、撥鏝（ばちる、染めに象牙を彫る）、截金（細い金箔を張って模様を描く）の9分野があり、その中で、陶芸は彩釉、漆芸は蒔絵というように、特定の技法が認められている。

石川県は、これらの分野で多くの実績を残している。2022年現在、石川県には人間国宝が9人、1団体あり、県民一人当たりの重要無形文化財保持者の数は他県より多い。

001-048

What Is a Holder of Important Intangible Cultural Heritage?

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
重要無形文化財全般（工芸部門を中心に）と人間国宝
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

What Is a Holder of Important Intangible Cultural Heritage?

Holders of Important Intangible Cultural Heritage—informally known as “Living National Treasures”—are individuals or groups recognized by the government as being masters of a craft or performing art that has been designated an Important Intangible Cultural Heritage. They receive an annual stipend and other support from the government to help them preserve and promote their knowledge and skills.

The designation was established in 1954 under a revision to the 1950 Law for Protection of Cultural Properties. The revision tasked the agency now called the Ministry of Education, Culture, Science, Sports, and Technology with the preservation not only of tangible cultural artifacts like historical buildings, but also the intangible bodies of knowledge that underpin traditional crafts and performing arts.

Only a few hundred people have been named Holders of Important Intangible Cultural Heritage, a title they hold until death. Currently, the number of possible concurrent Holders is capped at 116, although the actual number is usually lower.

There are nine categories for Important Intangible Cultural Heritage under the heading of “Crafts”: ceramics, textiles, lacquerware, metalwork, woodwork and bamboowork, doll making, paper making, *bachiru* (stained ivory engraving), and *kirikane* (applying thin pieces of metal foil to create designs). Specific techniques are recognized under these broad categories, such as *saiyū* glazing within the ceramics category or *maki-e* ornamentation under lacquerware.

Ishikawa Prefecture has a proud history in many of these categories, particularly woodwork, lacquerware, metalwork, textiles, and ceramics. In fact, as of 2022, the prefecture had nine individuals and one group designated Holders of Important Intangible Cultural Heritage in crafts—more per capita than any other prefecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

重要無形文化財保持者とは？

重要無形文化財保持者（通称「人間国宝」と呼ばれている）とは、国の重要無形文化財に指定されている伝統工芸や芸能の名人を指す。人間国宝は、その知識や技術を保存し、普及させるために、政府から年俸やその他の支援を受けている。

本指定は、1950年の文化財保護法の改正により、1954年に制定された。それは、現在の文部科学省に、歴史的建造物などの有形文化財だけでなく、伝統工芸や芸能品などの無形文化財も保存するよう求めた。

重要無形文化財保持者に指名されたのはわずか数百人しかおらず、その認定は亡くなるまで保持される。現在の保持者の数は116名とされているが、実際数はこれよりも少ない。

重要無形文化財の「工芸」には、陶芸、染織、漆器、金工、木竹工、人形、和紙、撥鏝（ばちる、染めに象牙を彫る）、截金（細い金箔を張って模様を描く）9分野があり、その中で、陶芸は彩釉、漆器は蒔絵というように、幅広い分野で特定の技法が認められている。

石川県は、木工、漆工、金工、染織、陶器など、多くの分野で歴史を誇っている。2022年現在、重要無形文化財保持者は9人、1団体あり、県民一人当たりの国宝数は全国一である。

001-049

Kaga *Maki-e*

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（13）

加賀蒔絵（かがまきえ）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kaga *Maki-e*

Kaga *maki-e* is a style of lacquerware produced during the Edo period (1603–1867) in Kaga domain (present-day Ishikawa and Toyama Prefectures). The style is distinguished by ornate decoration using a technique called *maki-e*, in which metallic powders, such as gold dust, are applied to soft lacquer to create images and designs.

Kaga domain was governed by the Maeda family. The domain's bountiful production of rice—the basis of the Edo-period economy—made the Maedas immensely wealthy. They invested their resources in cultural development, often recruiting the country's finest artisans and outfitting them with whatever they required. In the early seventeenth century, Lord Maeda Toshitsune (1593–1658) invited two masters of *maki-e* to ply their craft near Kanazawa Castle. Shimizu Kuhei (?–1688) came from Edo (present-day Tokyo), while Igarashi Dōho I (?–1678) came from Kyoto. The two men created some of the most celebrated works of Kaga *maki-e* and trained their successors in its techniques, laying the foundation for Kanazawa lacquerware's current renown.

Lacquerware is coated in the viscous sap of lacquer trees. The sap must be applied in multiple layers and given sufficient time between each to harden. In addition, lacquerware decorated using the *maki-e* technique requires precious metals. Together, these time-consuming and expensive aspects of producing Kaga *maki-e* meant that only the wealthy could afford it. As a result, the objects that Kaga artisans produced usually reflected the tastes and interests of the ruling elite. Items decorated with Kaga *maki-e* include armaments like saddles, stirrups, and scabbards, as well as household items such as writing boxes and tea ceremony implements. These decorations were

often ornate and intricate, depicting scenes from nature that evoked famous poems or auspicious images from folklore.

Kaga *maki-e* compositions often combine several techniques to create three-dimensional scenes with texture and depth. The *shishiai togidashi* technique, for example, combines *togidashi* (burnished) and *taka* (raised) *maki-e*. In burnished *maki-e*, the lacquer and powder design is made in low relief and dried, and the piece is then covered with another layer of black or clear lacquer. This layer is polished down with charcoal until the design is revealed, flush with the new surface. With raised *maki-e*, surface designs are built up with layers of lacquer and charcoal or clay dust before the metallic powder layer is added. Other decorative techniques, such as crushed eggshell and mother-of-pearl inlay, were often used in tandem with *maki-e* to broaden a design's color palette.

Examples of Kaga *maki-e* in the Ishikawa Prefectural Museum of Art collection include a lavish seventeenth-century bookstand attributed to Shimizu Kuhei and a writing box by Igarashi Dōho I that uses *maki-e* and mother-of-pearl inlay to depict a moonlit autumn field.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀蒔絵

加賀蒔絵は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩（現在の石川県と富山県）で作られた装飾漆器の一つである。金粉などの金属粉を柔らかい漆に塗り、絵柄を描く「蒔絵」の様式による、華麗な装飾が特徴である。

加賀藩は前田家が治めていた。江戸時代の経済の基礎であった米の生産量が豊富だったため、前田家は非常に裕福であった。前田家は、日本の優秀な職人を集め、必要とするものを提供し、文化の発展に投資した。17世紀初頭、前田利常公（1593-1658）は金沢城の近くに2人の蒔絵師を招いた。清水九兵衛（?-1688）は、江戸（現在の東京）の出身で、初代・五十嵐道甫（?-1678）は京都の出身である。二人は加賀蒔絵の代表的な作品を制作し、その技術を後継者に伝え、現在の金沢漆器の名声の基礎を築いた。

漆器は、漆の木の粘性のある樹液を塗ったものである。この樹液を何度も塗り重ね、固まるまでに十分な時間をかける必要がある。また、蒔絵を施すには貴金属が必要である。加賀蒔絵は、この

ように手間と費用がかかるため、富裕層しか手が出せなかった。そのため、加賀蒔絵の対象は支配階級の人々の趣味や嗜好を反映したものとなっていた。加賀蒔絵は、鞍（くら）、鐙（あぶみ）、鞘（さや）などの武具から、筆箱、茶道具などの生活用品に至るまで、その装飾は多岐にわたる。加賀蒔絵の装飾は、有名な和歌や民話の吉祥文様を連想させる、自然の情景を描いた華麗で複雑なものが多い。

加賀蒔絵は、複数の技法を組み合わせることで、質感や奥行きのある立体的な情景を表現することが多い。例えば、「肉合研出蒔絵」は、「研ぎ出し蒔絵」と「高蒔絵」を組み合わせた蒔絵技法である。研ぎ出し蒔絵は、漆と粉の模様を浅浮き彫りにして乾燥させ、その上に黒や透明の漆を塗り重ねる。さらに、文様が浮き上がるまで木炭で研ぎ落として、新しい面と同じ高さにする。高蒔絵は、漆と炭や粘土の粉を何層にも重ねて文様を作り、その上に金属粉の層をつくる。蒔絵の色彩を広げるために、砕いた卵殻や螺鈿などの装飾技法もよく併用される。

石川県立美術館には、17世紀に清水九兵衛の作とされる豪華な書見台や、初代・五十嵐道甫が制作した蒔絵と螺鈿で、月明かりに照らされた秋の野原を描いた文箱など、加賀蒔絵の名品が収蔵されている。

001-050

Kaga *Maki-e*

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（13）

加賀蒔絵（かがまきえ）

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kaga *Maki-e*

Kaga *maki-e* is a style of decorated lacquerware developed during the Edo period (1603–1867) in Kaga domain (present-day Ishikawa and Toyama Prefectures). Kaga *maki-e*, which evolved into present-day Kanazawa lacquerware, was known for its intricate and ornate designs made with *maki-e*—a technique in which metallic powders, such as gold dust, are applied to soft lacquer.

During the Edo period, Kaga domain was governed by the wealthy Maeda family. Maeda Toshitsune (1593–1658) invited *maki-e* masters Shimizu Kuhei (?–1688) and Igarashi Dōho I (?–1678) to move to Kanazawa and establish lacquerware workshops under his patronage. The two men created some of the most celebrated works of Kaga *maki-e* and trained their successors in its techniques. This established Kanazawa as a major center of lacquerware production.

Maki-e application can be done in several ways, and the design can be left flush with the surface or raised to various degrees. Kaga *maki-e* is noted for combining these methods in order to create three-dimensional compositions. Its designs often incorporate iridescent mother of pearl and crushed white eggshell as well.

Kaga *maki-e* pieces reflected the tastes and interests of the ruling Maeda lords. Motifs from nature were common, particularly those that made tasteful references to famous poems or auspicious images from folklore. Kaga *maki-e* decoration was applied to martial gear, such as horse tack, armor, and scabbards, as well as luxury household objects, such as bookstands and tea ceremony implements.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀蒔絵

加賀蒔絵は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩（現在の石川県と富山県）で発展した装飾漆器の一つである。現在の金沢漆器へと発展した加賀蒔絵は、柔らかい漆に金粉などの金属粉を塗る「蒔絵」の様式による、複雑で華麗なデザインで知られている。

江戸時代、加賀藩は富豪・前田家によって統治されていた。前田利常（1593-1658）は、蒔絵師である清水九兵衛（?-1688）と初代・五十嵐道甫（?-1678）を金沢に招き、漆器の工房を設立させた。二人は加賀蒔絵の代表的な作品を制作し、その技術を後継者に伝えた。これにより、金沢を一大漆器産地となった。

蒔絵の技法には、文様を平らにするもの、盛り上げるものなど、様々な方法がある。加賀蒔絵は、これらの方法を組み合わせて、立体的な構図を作り出すのが特徴である。そのデザインには、螺鈿や砕いた白い卵殻もよく使われている。

加賀蒔絵は、前田藩主の趣味嗜好を反映したものであった。自然をモチーフにしたものが多く、特に有名な和歌や民話に登場する吉祥文様を参考にしたものがよく作られている。加賀蒔絵は、馬具や鎧、鞍などの武具、書見台や茶道具などの豪華な生活用品にも施された。

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（14）

加賀友禅（かが ゆうぜん）

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kaga Yūzen Silk Dyeing

Kaga *yūzen* is a hand-dyeing technique in which artisans paint hand-drawn designs in a distinctive palette of five colors to render vivid and realistic natural images on silk. Along with Kyō *yūzen* from Kyoto and Edo *yūzen* from Tokyo, it is one of Japan's three major silk dyeing traditions. Kaga *yūzen* is used to decorate fabric accessories, such as bags and scarfs, and to create luxurious kimonos.

The history of Kaga *yūzen* begins in the sixteenth century in Kaga domain, in the area of present-day Ishikawa Prefecture. At that time, the domain was a major silk producer, but its textiles were dyed a solid pink color. In the mid-seventeenth century, artisans began decorating the fabric with basic patterns and pictures. The next stage of development is attributed to a famed designer of silk fans named Miyazaki Yūzen (?–1758). Historical records differ, but Yūzen was either born in Kaga, or else visited Kanazawa from Kyoto around 1712. His expertise in resist dyeing, a technique that enables the use of multiple colors, was passed on to other Kaga dyers. Yūzen's influence, along with the patronage of the domain's wealthy Maeda lords, allowed Kaga *yūzen* to develop into the refined art that continues today.

The Kaga *yūzen* process begins with the artist sketching the envisioned image (or series of images) on paper. The outlines of the image are then painted onto a long band of undyed silk using ink made from the Asiatic dayflower. (The ink is water-soluble, so the lines will wash out later.) Next, the design is traced with a sticky rice paste applied with a special piping bag. The paste resists dye and creates a barrier that keeps the dye contained within the lines.

After this, the image can be colored in. The artist hand-paints each section of the image using dyes in gradations of the five colors known as the *kaga gosai*: indigo, crimson, ocher, dark green, and royal purple. When painting flowers, Kaga artists often apply the dye at the outermost edge of each petal and brush inward, resulting in a characteristic gradation where colors are darkest around the edges and grow paler toward the center. The direction of gradation is reversed in *Kyō yūzen*.

When the Kaga *yūzen* design is fully painted, the silk is steamed to set the colors. Next, the image is completely covered with rice paste in preparation for dyeing the background. The paste will resist the background dye, preventing it from marring what has already been colored. The background dye is also applied by hand using wide, short-bristled brushes, and achieving even coloration across a wide expanse of silk requires considerable skill. The silk is steamed once more to set the background color.

Now completely colored, the silk is ready to be washed. Cold water and stiff brushes are used to remove and rinse away the dayflower ink, rice paste, and any excess dye. Traditionally, this step was carried out in rivers and streams, where the long strips of silk were tied to sticks that held them in place against the current. Most modern workshops now have a shallow tank with running water, but during winter artisans using the old approach can still occasionally be seen at Kanazawa's Asano River.

There is a version of Kaga *yūzen* (called *Itaba yūzen*) that does not start with a hand-painted outline. Instead, the artist applies individual colors to the silk using a series of paper stencils hardened with persimmon tannin. The process works much like wood-block printing or modern-day screen printing.

Yūzen dyeing was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955, and two Ishikawa residents have become holders of the *yūzen* technique: Kimura Uzan (1891–1977) in 1955 and Futatsuka Osao (1946–) in 2010. The Ishikawa Prefectural Museum of Art has many works dyed using the Kaga *yūzen* technique, including fine kimonos, hanging scrolls, screens, and other decorative items.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀友禅

加賀友禅は、手描きの絵柄と5色の独特の色調で、鮮やかで写実的な自然のイメージを絹に表現する、手描き染めの様式である。京都の京友禅、東京の江戸友禅と並び、日本三大染色のひとつに数えられている。加賀友禅は、バッグやスカーフなどの布小物の装飾や、豪華な着物などにも用いられている。

加賀友禅の歴史は16世紀、現在の石川県である加賀藩に始まる。当時、加賀藩は絹織物の一大産地であったが、ピンク色の無地染めの織物であった。17世紀半ばになると、職人たちは生地にはベーシックな模様や絵を描くようになった。次の発展段階は、絹の扇絵師で有名な宮崎友禅（?-1758）によるものである。歴史的な記録はまちまちだが、友禅は加賀の出身か、1712年頃に京都から金沢を訪れたとされている。多彩な色使いを可能にする防染の技術は、加賀の染物師に受け継がれた。友禅の影響と前田藩主の支援により、加賀友禅は現在も続く洗練された芸術へと発展した。

加賀友禅の工程は、まず、絵師がイメージする絵柄（または一連のイメージ）を紙に描くことから始まる。そして、染めてない絹の長い帯に、ツクサの墨で輪郭を描く（墨は水溶性のため、線は後で洗い流される）。次に、専用の絞り袋で糊置きを塗って模様をなぞる。この糊が染料をはじくので、線に染料を閉じ込めることができる。

この後、その絵柄に色をつけていく。加賀五彩と呼ばれる藍、深紅、黄土、深緑、古代紫の5色のグラデーションの染料で、一枚一枚手描きしていく。花の絵の場合、花びらの一番外側から染料を塗り、内側に向かって刷毛で塗ることが多いため、端が最も濃く、中心に向かって薄くなるグラデーションが特徴的である。京友禅では、このグラデーションの方向が逆になる。

加賀友禅の絵柄を描き終わったら、絹を蒸して色を定着させる。次に、背景を染めるために、糊で絵柄を完全に覆う。糊は背景の染料をはじき、描いた絵柄を汚さないようにするためである。背景の染料も、毛足の短い幅広の刷毛を使って手作業で塗るが、絹の広い範囲に均等に色をつけるには、かなりの熟練を要する。さらにもう一度蒸して、地色を定着させる。

これで完全に着色された絹は、水洗の準備が整う。冷水と硬い筆を使い、ツクサの墨や糊、余分な染料を洗い流す。伝統的には、この工程は川や小川で行われ、長い絹の帯を棒に結び、流れに耐えるようにしていた。現在、工房の多くは浅い水槽に水を張っているが、冬場には金沢の川では、昔ながらの方法で作業する職人の姿を今でも時折見ることができる。

加賀友禅には、手描きの輪郭線から始まらない板場友禅がある。代わりに、柿渋で固めた型紙を使い、絹に一色ずつ色をのせていく。木版画や現代のスクリーン印刷のようなものである。

友禅染は1955年に重要無形文化財に指定され、石川県には2人の友禅技法保持者がいる。1955年に木村雨山（1891-1977）、2010年に二塚長生（1946-）の2人が保持者となった。石川県立美術館には、着物や、掛け軸、屏風など加賀友禅で染められた作品が多数展示されている。

【タイトル】石川県立美術館 / 伝統工芸の技法（14）

加賀友禅（かが ゆうぜん）

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kaga Yūzen Silk Dyeing

Kaga *yūzen* is a centuries-old silk dyeing tradition in which artisans use hand-drawn designs and a distinctive palette of five colors to render vivid and realistic natural images on silk. Along with Kyō *yūzen* from Kyoto and Edo *yūzen* from Tokyo, it is one of Japan's three major silk dyeing traditions. Today, the Kaga *yūzen* technique is used to decorate accessories, such as bags and scarfs, and to create Ishikawa's luxurious Kaga *yūzen* kimonos.

In the sixteenth-century, Kaga domain (the area of present-day Ishikawa Prefecture) was a noted producer of silk. In the early eighteenth century, the groundbreaking methods of famed silk fan designer Miyazaki Yūzen (?–1758) were introduced to Kaga. His intricate resist-dyeing technique made elaborate, multicolored designs possible by allowing artists to hand-paint complex images while using water-soluble rice paste to protect certain areas of the fabric from absorbing unwanted dye. This process remains the foundation of Kaga *yūzen* dyeing today.

Kaga *yūzen* is known for realistic depictions from nature, such as leaves that have been nibbled by insects or touched by decay. Such imagery is called *mushi-kui* (insect-eaten), and it represents fragility and transience in nature. In addition, Kaga *yūzen* designs tend to avoid the gold and silver ornamentation favored in the more ornate Kyō *yūzen* style. And while Edo *yūzen* tends toward muted colors, Kaga *yūzen* uses a palette of five bold hues known as the *kaga gosai*: indigo, crimson, ocher, dark green, and royal purple.

Yūzen dyeing was designated an Important Intangible Cultural Heritage in 1955, and two Ishikawa residents have become holders of the *yūzen* technique: Kimura Uzen (1891–1977) in 1955 and Futatsuka Osao (1946–) in 2010.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀友禅

加賀友禅は、手描きの絵柄と独特の五色の色彩で、絹の上に鮮やかで写実的な自然の情景を描写する、何世紀にもわたる伝統的な絹織物染めである。京都の京友禅、東京の江戸友禅と並び、日本三大染色のひとつに数えられている。現在、加賀友禅の技術は、バッグやスカーフなどの小物の装飾や、石川県の高級着物である加賀友禅の制作に用いられている。

16世紀、加賀藩（現在の石川県の地域）は絹織物の名産地であった。18世紀初頭、有名な絹の扇絵師である宮崎友禅（？–1758）は、加賀藩に画期的な染織技術をもたらした。彼の複雑なレジスト染色法は、手描きによる複雑な絵柄を可能にし、さらに水溶性の糊で染料を吸収させないようにすることで、色とりどりの精巧なデザインを可能にした。この技法は、現在も加賀友禅の基本となっている。

加賀友禅は、虫にかじられた葉や朽ちた葉など、自然をリアルに表現することで知られてる。これは「虫喰い」と呼ばれ、自然のはかなさを表現している。また、加賀友禅のデザインは、京友禅のような金銀の華やかな装飾を避ける傾向にある。江戸友禅が落ち着いた色調であるのに対し、加賀友禅は藍、深紅、黄土、深緑、古代紫の5色の「加賀五彩」と呼ばれる色彩が用いられている。

友禅染は1955年に重要無形文化財に指定され、1955年に木村雨山（1891-1977）、2010年に二塚長生（1946-）の2人の石川県民が友禅の技術保持者となっている。

001-053

The History of Traditional Crafts in Ishikawa

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 石川県の伝統工芸 歴史等全般
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The History of Traditional Crafts in Ishikawa

Ishikawa Prefecture has long and robust craft traditions that encompass ceramics, textiles, lacquerware, metalwork, and woodwork.

The most significant phase in Ishikawa's craft history was the Edo period (1603–1867). During this time, the area was part of Kaga domain, one of more than 250 relatively autonomous domains under the authority of the shogunate based in Edo (now Tokyo). Kaga was governed by the Maeda family from 1583 until the domain system was abolished in 1871.

Kaga was the wealthiest domain in Japan due to its bountiful agriculture—particularly its production of rice, which was the basis of the Edo-period economy. The Maeda family turned their considerable resources to cultural development, inviting some of the country's leading craftspeople and artists to Kanazawa. The Maedas provided them with generous patronage in exchange for founding local workshops and teaching local artisans their techniques.

Another element in the evolution of Ishikawa crafts was the establishment of a multi-discipline crafts workshop called the Kaga Domain Workshop (Osaikusho). The workshop's original purpose was to make and repair weapons during the decades of warfare that preceded the Edo period. Even after hostilities had mostly subsided, the first Maeda lord, Maeda Toshiie (ca. 1539–1599), was hesitant to disband the workshop in case hostilities broke out again. Instead, he directed the artisans there to

focus on ornamental techniques, such as the decoration of armor and weapons. The peace held, however, and Kaga's third lord, Maeda Toshitsune (1594–1658), officially changed the workshop's mission to the promotion of decorative arts.

Artisans from diverse fields worked together at the Kaga Domain Workshop. This kind of artistic cross-pollination was rare, as craftspeople generally operated independently and kept their techniques secret. However, in the collaborative atmosphere of the workshop they were able to combine their specializations to produce masterpieces. Key techniques to emerge from the workshop include Kaga *maki-e* and Kaga metal inlay.

The Maedas made gifts of their artisans' finest works to other samurai lords, members of the aristocracy, and favored retainers, fostering the influence and prestige of Kaga domain. Merchant ships began to stop at ports in Kaga and take crafts to be sold as far north as Hokkaido and around the southern tip of Japan's main island to reach Osaka and Kyoto. Gradually, Kaga products became known around the country, establishing a reputation for quality and beauty of workmanship that endures in Ishikawa today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石川県の伝統工芸の歴史

石川県には、陶芸、染織、漆器、金工、木工など、伝統的な工芸品がある。

石川県の工芸の歴史において最も重要な時期は、江戸時代（1603-1867）である。この時代、この地域は加賀藩の一部であった。江戸（現在の東京）に拠点を置く幕府の管轄下にあった250以上の自治領の一つである。1583年から1871年の廃藩置県まで、加賀藩は前田家の支配下にあった。

加賀は農業が盛んで、特に当時の経済の基礎となった米の生産量が多く、日本で最も裕福な藩であった。前田家は、その豊富な資金をもとに文化の発展に努め、一流の職人や芸術家を金沢に招いた。前田家は、金沢に工房を設立し、地元の職人たちに技術を教える代わりに、彼らに手厚い後援を行った。

石川県の工芸を発展させたもう一つの要素は、加賀藩御細工所と呼ばれる多分野の工芸品工房の設立である。工房の本来の目的は、江戸時代以前の数十年にわたる戦乱の中で、武器の

製造や修理を行うことであった。戦乱が収まった後も、前田藩初代藩主・前田利家（1539頃-1599）は、再び戦乱に見舞われた場合に備えて、工房を解散させることを躊躇していた。その代わり、職人たちに鎧や武器の装飾など、装飾技術に専念するように指示した。しかし、平和が訪れたことで、加賀藩3代藩主・前田利常（1594-1658）は、工房の使命を装飾美術の振興に改めた。

加賀藩御細工所では、さまざまな分野の職人たちが一緒に仕事をしていた。一般的に職人は独立して活動し、その技術を秘密にしていたため、このような芸術的な異業種交流は珍しいことであった。しかし、工房の協力的な雰囲気の中で、それぞれの分野を融合させ、傑作を生み出すことができたのである。加賀時絵や加賀象嵌などの技法もここで生まれた。

前田家では、職人の技が光る作品を他の武家領主や貴族、寵臣に贈り、加賀藩の影響力と名声を高めていった。商船は加賀の港に停泊し、北は北海道、南は大阪や京都まで、加賀藩の工芸品を運んでいた。加賀の名産品は徐々に全国に広まるようになり、石川県の品質と美しさは今日に至るまで高い評価を得ている。

001-054

The History of Traditional Crafts in Ishikawa

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 石川県の伝統工芸 歴史等全般
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The History of Traditional Crafts in Ishikawa

Ishikawa Prefecture has long and robust craft traditions that encompass ceramics, textiles, lacquerware, metal work, and woodwork.

Ishikawa crafts underwent a period of rapid evolution and sophistication during the Edo period (1603–1867), thanks to the lords of what was then called Kaga domain. The ruling Maeda family was immensely wealthy, thanks to the domain's bountiful rice production, and they turned those resources to cultural pursuits. A workshop originally built for maintaining and repairing armor and weapons was converted into a multi-discipline crafts workshop where as many as 70 artisans practiced their crafts, trained successors, and collaborated on ornate masterworks for the Maedas. The lords also invited skilled artisans from around the country to relocate to Kanazawa, offering them land and generous monetary support. The characteristic techniques of Kaga *yūzen* silk dyeing, Kaga *maki-e*, Kaga metal inlay, and other renowned Ishikawa crafts developed during this time.

Meanwhile, enterprising merchants began distributing Kaga products well beyond the borders of the domain via coastal trading ships. These boats plied a route between Hokkaido and Osaka, stopping in many ports along the way. In addition to fertilizer, rice, and other staple commodities, they carried luxury items like lacquerware. Thanks to this commerce, and to the Maedas' custom of giving fine handicrafts as political gifts, the traditional crafts of Ishikawa earned a widespread reputation for quality and beauty that endures today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石川県の伝統工芸の歴史

石川県には、陶芸、染織、漆器、金工、木工など、伝統的な工芸品がある。

石川県の工芸は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩主によって、急速に進化し洗練されたものになった。加賀藩主・前田家は、豊かな米作によって巨万の富を築き、その財を文化に注いだ。もともと鎧や武具の整備・修理を行うためにつくられた工房は、70人もの職人が技を磨き、後継者を育成し、前田家のために華麗な作品を共同制作する多分野の工芸館に変わった。また、全国の腕利きの職人を金沢に招き、土地の提供や多額の資金援助も行った。加賀友禅、加賀蒔絵、加賀象嵌など、石川県の代表的な工芸品は、この時期に生まれた。

一方、進取の気性に富む商人たちは、沿岸の交易船を使って加賀産物を藩の外にまで広く送り出し始めた。北海道と大阪を結ぶ船は、さまざまな港に停泊して、加賀藩の特産品を運んだ。肥料や米などの生活必需品に加え、漆器などの高級品も運ばれていた。こうした交易と、前田家の政治的な贈答品としての工芸品によって、石川県の伝統工芸はその品質と美しさで広く知られるようになり、現在に至っている。

001-055

Historical Architecture of the National Crafts Museum

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 国立工芸館 建物
(旧軍第九師団司令部庁舎、旧金沢偕行社)
【想定媒体】 WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Historical Architecture of the National Crafts Museum

The building that houses the National Crafts Museum is an amalgamation of two wooden structures from the Meiji era (1868–1912) that were relocated, reconstructed, and renovated. One of the two is the former command headquarters for the Ninth Division of the Japanese Imperial Army; the other is a former officers' club. Both structures were registered Tangible Cultural Properties in 1997 as valuable examples of late nineteenth-century Western-style architecture.

Historical Context

Western influence is a defining characteristic of Meiji-era buildings. After more than two centuries of isolation, Japan's borders were forcibly opened to trade in 1854 following the arrival of a United States Navy squadron possessing far superior firepower. Newly aware of a power imbalance with Western countries, Japan kicked off a period of rapid modernization. At the time, many Japanese leaders felt the fastest route to closing the gap was adopting elements of Western culture—including architecture. Foreign architects were sometimes invited to design buildings, but in other cases, domestic architects worked independently to replicate the appearance of Western buildings.

Old Ninth Division Command Headquarters

The structure to the left of the museum's main entrance was once the headquarters for the Ninth Division of the Japanese Imperial Army. The division was established in 1898 and a command center was constructed in the second bailey (*ninomaru*) of Kanazawa Castle. After World War II, the building was repurposed, renovated, and

relocated several times, serving at various points as offices for Kanazawa University, a public health corporation, and museum storage. A project to move the building to its current location and restore the original exterior began in 2017 and was completed in 2020.

This structure's bilateral symmetry, double rows of windows, and use of pilasters and a pediment on the exterior are common elements in late nineteenth-century architecture. Inside, the spacious central entrance hall leads to a solid zelkova-wood staircase. The pair of pillars flanking the stairs are topped with stucco acanthus leaves, a common ornamentation on Greek and Roman columns. The windows of the building also slide open vertically rather than horizontally (as was typical in traditional Japanese architecture).

Old Army Generals' Club

To the right of the museum's main entrance is the Old Army Generals' Club, a building originally constructed near this location in 1909 as a place for high-ranking commissioned officers to gather and socialize. After World War II, it was a city tax office before becoming the dressing rooms for an adjoining noh theater, a storage facility for the neighboring Ishikawa Prefectural History Museum, and then office space for several prefectural agencies. Like the Old Ninth Division Command Headquarters, it was also moved to the current location and restored over the period from 2017 to 2020.

The central section of the roof of the Generals' Club has the four-way double slope characteristic of a mansard roof, steeper near the top and flaring more gently just above the eaves. Mansard roofs are particularly associated with eighteenth- and nineteenth-century France. The building's design also incorporates baroque elements like Corinthian pilasters on the façade and dormer windows on the roof, which demonstrate the technical accomplishments of the unknown architect.

One incongruous point on the exterior is the presence of five-pointed stars on the ventilation grates along the base of the building. This auspicious symbol was also embroidered on Imperial Army uniforms. Its origin and the reason it became a symbol for the army are debated, but the star was called a *tamayoke*, meaning “ward against

many evils” (多魔除け). The word also means “bullet-averting” if written with different characters (弾除け).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

国立工芸館の歴史的建築物

国立工芸館の建物は、明治時代（1868-1912）建てられた2つの木造建築を移築・改築・改装したものである。1つは旧陸軍第九師団司令部庁舎、もう1つは旧陸軍偕行社である。どちらも19世紀後半の貴重な洋風建築として、1997年に有形文化財に登録された。

歴史的背景

明治時代の建築物の特徴は、西洋の影響を受けていることである。日本は2世紀以上にわたる鎖国を経て、1854年、はるかに優れた火力を持つアメリカ海軍の艦隊の来訪により、強制的に開国させられた。このとき日本は、欧米諸国とのパワーバランスの崩れを自覚し、急速な近代化の道を歩み始めた。当時、日本の指導者の多くは、建築を含む西洋文化の要素を取り入れることが、その差を縮める早道だと考えていた。外国人建築家を招聘することもあったが、国内の建築家が独自に西洋の建築物の外観を模倣することもあった。

旧陸軍第九師団司令部庁舎

当館の正面玄関の左手にある建物は、かつて大日本帝国陸軍第九師団の司令部であった。同師団は1898年に創設され、金沢城二ノ丸に司令部が置かれた。第二次世界大戦後は、金沢大学本部、健民公社、博物館の収蔵庫などとして再利用、改修、移築が繰り返された。2017年から現在の場所に移築し、当時の外観を復元するプロジェクトが始まり、2020年に完成した。

この建築は、左右対称、二列の窓、ピラスターとペディメントを用いた外観など、19世紀後半の建築によく見られる要素である。内部は、中央の広々とした玄関ホールから、ケヤキ材の無垢の階段が続いている。階段を挟む一対の柱の上部には、ギリシャ・ローマの円柱によく見られる装飾であるアカンサスの葉が漆喰で施されている。また、窓は日本の伝統的な建築様式である横開きではなく、縦開きのスライド式になっている。

旧陸軍偕行社

当館正面玄関の右手にある旧陸軍偕行社は、1909年に高位将校の親睦の場としてこの付近に建設された建物である。第二次世界大戦後は市の国税局を経て、近隣の能楽堂の控室、隣接する石川県立歴史博物館の収蔵庫、そして県の複数の事務所として利用されてきた。旧第九師団司令部同様、こちらも2017年から2020年にかけて現在地に移築・復元された。

将軍倶楽部の屋根の中央部分は、マンサード屋根の特徴である4方向の二重勾配で、上部付近が急勾配、軒先のすぐ上は緩やかに広がっている。マンサード屋根は、特に18～19世紀のフランスに特徴的な屋根である。また、ファサードのコリント式ピラスターや屋根のドーマーウィンドウなど、バロック的な要素も取り入れられ、無名の建築家の技術力の高さがうかがえるデザインとなっている。

外観上の不自然な点は、建物の基部にある換気口の格子に五芒星（星形）が描かれていることだ。これは帝国陸軍の軍服にも刺繍されていた吉祥のシンボルである。その由来や、なぜ軍隊のシンボルになったかは諸説があるが、星は「多魔除け」と呼ばれていた。また、別の文字で書くと「弾除け」の意味にもなる。

001-056

Hirosaka Annex Building

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】石川県立美術館 広坂別館 建物
（旧陸軍第九師団長官舎）
【想定媒体】WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Hirosaka Annex Building

The Hirosaka Annex of the Ishikawa Prefectural Museum of Art was built in 1922 as the official residence of the commander of the Ninth Division of the Japanese Imperial Army. It was registered a Tangible Cultural Property in 2016 as a characteristic example of a Taisho-era (1912–1926) military residence. It is one of only six left in the country.

Historical Context

Western influence and an eclectic mix of styles are defining traits of Taisho-era buildings. After more than two centuries of isolation, Japan's borders were forcibly opened to trade in 1854 following the arrival of a United States Navy squadron possessing far superior firepower. Newly aware of a power imbalance with Western countries, Japan kicked off a period of rapid modernization. At the time, many Japanese leaders felt the fastest route to closing the gap was adopting elements of Western culture—including architecture. Foreign architects were sometimes invited to design buildings. In other cases, domestic architects worked independently to replicate the appearance of Western buildings, often blending traditional Japanese elements into their designs.

Key Features

The current front entrance is beneath a peak-roofed carriage porch where visitors arriving by coach would have disembarked. However, it is thought that the commander and his family would have entered through a second doorway that once existed to the right, where today a small gable covers an area of slightly grayer stonework. On the building's upper floor, half-timber accents—a common architectural feature in

northern Europe—are painted pink and set into thick mortar applied in a rough-textured style called *doitsu kabe*, or “German walls.” Another point to note is the European-style main roof, with its clipped gable and dormer-style vent. In contrast to the front of the building, the rear is covered in white wooden siding. This is thought to be a later addition by American military forces who took over the building in 1945 during the Allied Occupation; they felt the change would give the building a homier feel. Some original interior elements remain, including two mantelpieces adorning faux fireplaces, and some rare surviving examples of period glass lighting fixtures. The ornamental woodwork of the ceilings—a different design in every room—also survives.

Surviving plans tell us the original structure also included a large residential area. The commander worked and entertained guests in the building’s Western-style rooms (the half of the house that survives), but he and his family lived in Japanese-style tatami rooms that were torn down in 1962. In 2008 and 2016, parts of the building were renovated and a tatami room was restored.

Current Use

After World War II, the structure was used at various points as housing for American military officers, offices for the Kanazawa Family Court, a prefectural children’s center, a bird sanctuary, and a rest facility for neighboring Kenrokuen Garden. Now, however, the building houses the art museum’s Conservation and Restoration Studio of Cultural Properties. The Studio is responsible not only for restoring and maintaining the museum’s collection, but also for providing specialized training for the next generation of technical experts. Visitors can learn about various restoration processes at an interactive touchscreen station and even see restoration work in progress in the observation area.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

広坂別館

石川県立美術館・広坂別館は、陸軍第九師団の師団長官舎として1922年に建てられた。大正時代（1912-1926）の軍邸宅の特徴的な例として保存され、2016年に有形文化財に登録された。全国に6棟しか残されていないうちの1棟である。

歴史的背景

大正時代の建物は、西洋の影響を受け、様々な様式が混在しているのが特徴である。日本は2世紀以上にわたる鎖国を経て、1854年、はるかに優れた火力を持つアメリカ海軍の艦隊の来訪により、強制的に開国させられた。このとき日本は、欧米諸国とのパワーバランスの崩れを自覚し、急速な近代化の道を歩み始めた。当時、日本の指導者の多くは、建築を含む西洋文化の要素を取り入れることが、その差を縮める早道だと考えていた。そのため、建築物の設計に外国人建築家を招聘することもあった。また、国内の建築家が独自に西洋の建築物の外観を再現し、日本の伝統的な要素を取り入れた設計と融合させるなど、工夫を凝らした。

主な特徴

現在の正面玄関は、馬車で到着した訪問者が下車したであろう尖った屋根の車寄せの下にある。しかし、指揮官とその家族は、当初は右側にあったもう一つの扉口から入ったと考えられている。現在では、小さな切妻がやや灰色の石造りの部分を覆っている。上階には、北ヨーロッパでよく見られるハーフ・ティンバーのアクセントがピンク色に塗られ、厚いモルタルで塗られた「ドイツ壁」と呼ばれる粗い質感の壁面に据えられている。また、半切妻とドーマー型の換気口を持つヨーロッパ風の屋根であることも特筆すべき点である。正面とは対照的に、背面は白木の下見板張りで覆われている。これは連合国軍占領下の1945年、米軍が建物を引き継ぎ、より家庭的な雰囲気にするために後付けしたものと思われる。内装は、暖炉を飾る2つのマンテルピース（暖炉飾り）や、珍しいガラス製の照明器具など、オリジナルのものがいくつか残っている。また、部屋ごとに異なる天井の木工装飾も残されている。

現存する設計図によると、当初は広い住宅地も併設されていた。長官は、現存する家の半分の洋室で仕事や接待を行い、家族は1962年に取り壊された和室で暮らしていた。2008年と2016年に、建物の一部が改修され、一室の和室が復元された。

現在の用途

第二次世界大戦後は、米軍将校の官舎、金沢家庭裁判所の事務所、県立児童会館、野鳥園、近隣の兼六園の休憩館として利用されてきた。しかし、現在は、美術館の文化財保存修復工房として利用されている。この工房は、美術館のコレクションの修復や維持だけでなく、次世代の技術者を育成するための専門的なトレーニングも担っている。タッチスクリーンを使った体験型ステーションで修復の工程を学ぶことができるほか、見学コーナーでは修復の様子を見ることが出来る。

001-057

Old Kanazawa Army Armories: Historic Brick Buildings of the Ishikawa Prefectural Museum of History

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立歴史博物館 赤レンガ建物
(旧陸軍兵器庫)
【想定媒体】 WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Old Kanazawa Army Armories: Historic Brick Buildings of the Ishikawa Prefectural Museum of History

The Ishikawa Prefectural Museum of History is housed in three long red-brick buildings that served as armories for the Japanese Imperial Army in the early twentieth century. They were originally constructed in 1909, 1913, and 1914. The buildings are important examples of both turn-of-the-century military architecture and Japan's short-lived use of brick as a building material.

Historical Context

Early twentieth-century state-built architecture was heavily influenced by Western models. After a two-century period of isolation, Japan's borders were forcibly opened to trade in 1854 following the arrival of a United States Navy squadron possessing far superior firepower. Newly aware of a power imbalance with Western countries, Japan kicked off a period of rapid modernization. At the time, many Japanese leaders felt the fastest route to closing that gap was adopting elements of Western culture—including architecture. Foreign architects were sometimes invited to design buildings, and in other cases, domestic architects worked independently to replicate the appearance of Western buildings. Because red brick was associated with European architecture, it came into vogue in the late nineteenth century. This launched a flurry of domestic brick production to meet the demand for ambitious government projects, such as the original Tokyo Station. Unfortunately, the material proved poorly suited to a country with frequent earthquakes. It fell out of use after only a few decades.

Key Features

In a renovation project that ran from 1983 to 1990, the exteriors of the three red-brick

buildings were restored to their original state. Each of the two-story buildings measures about 90 meters in length and has a steep gable roof covered in Japanese-style clay tiles with ornamental finials. Like many Western-style buildings of the period, the long sides are bilaterally symmetrical. From the double-doored main entrance in the center, each side mirrors the other with pairs of arched windows on both floors interspersed with thick pilasters. The presence of heavy, black iron grates and solid steel shutters on the windows attests to both the value and danger of the artillery and munitions once stored inside. By the time of restorations, all of these steel shutters had been removed—likely smelted down for other uses—but the restoration team was able to recreate them based on a surviving pair found in the attic of Building Three.

Much of the original interiors had to be replaced during the renovations to improve earthquake resistance and allow for adequate housing of the museum collections. However, some original elements were deliberately preserved. In Building Three, visitors can see high into the rafters and spot the rope and pulley system that was used to lift heavy armaments onto the second floor. A display in the lobby of Building Two has preserved parts of the original support structures, such as a brick pile and wooden support beam, to show how the buildings were constructed.

Current Use

After World War II, the structures were used by the Kanazawa College of Art before coming under the management of the prefectural government in 1972. The Ishikawa Prefectural Museum of History took up residence in 1986. Now, the three buildings house the museum's exhibits and offices, as well as the Kaga-Honda Museum, which displays treasures from the collection of a powerful samurai family.

The Old Kanazawa Army Armories were designated Important Cultural Properties in 1990.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧金沢陸軍兵器庫：石川県立歴史博物館の歴史的なレンガ造りの建物

石川県立歴史博物館は、20世紀初頭に旧陸軍の兵器庫として使用された3棟の赤レンガ造りの

長大な建物を利用している。1909年、1913年、1914年に建てられたものである。これらの建物は、世紀末の軍事建築と、日本が短期間で煉瓦を建築材料として使用したことを示す重要な例である。

歴史的背景

20世紀初頭の国家建築は、西洋のモデルから大きな影響を受けていた。日本は2世紀にわたる鎖国を経て、1854年、はるかに優れた火力を持つアメリカ海軍の艦隊が来航し、強制的に開国させられた。このとき日本は、欧米諸国とのパワーバランスの崩れを自覚し、急速な近代化の道を歩み始めた。当時、日本の指導者の多くは、建築を含む西洋文化の要素を取り入れることが、その差を縮める早道だと考えていた。外国人建築家を招聘することあれば、国内の建築家が独自に西洋建築の外観を模倣することもあった。19世紀後半、赤レンガはヨーロッパ建築を連想させるため、流行した。東京駅などの官公庁の大プロジェクトに対応するため、国産レンガの生産が盛んになった。しかし、地震の多い日本には不向きな材料であったため、わずか数十年で使われなくなった。

主な特徴

1983年から1990年にかけて行われた改修プロジェクトで、3棟の赤レンガの外観が当時の姿に復元された。いずれも2階建てで、建物は全長85～90m、急勾配の切妻屋根に瓦葺きで、棟飾りが付いている。この時代の多くの洋風建築と同様、長辺が左右対称になっている。中央の二重ドアの正面玄関からは、両側が鏡像になっており、それぞれの階には厚い柱が組み入れられた一対のアーチ型の窓がある。窓には重厚な黒い鉄格子と頑丈な鉄製の扉があり、かつて内部に保管されていた大砲と弾薬の価値と危険性を物語っている。修復された時点では、これらの鉄製の扉は既にすべて取り外されていたが、修復チームは、第3棟の屋根裏部屋で発見された現存する1組の鉄製の扉をもとに、これを再現することに成功したのである。

この改修工事では、耐震性の向上と収蔵品の適切な収容を可能にするため、オリジナルの内装の多くを変更する必要があった。しかし、中には意図的に保存されたものもある。第3号棟では垂木の上まで見ることができ、また重い兵器を2階まで運ぶのに使われたロープと滑車のシステムを見ることができる。第2棟のロビーには、レンガの杭や木の支え梁など、当時の支持構造の一部が保存され、建物がどのように建てられたかがわかるようになっている。

現在の用途

第二次世界大戦後は、金沢美術工芸大学で使用された後、1972年に県が管理するようになった。1986年、石川県立歴史博物館として開館。現在、3棟の建物には、博物館の展示室や事務室、武家屋敷の宝物を展示する加賀本多博物館がある。

旧金沢陸軍兵器庫は、1990年に重要文化財に指定された。

001-058

Ishikawa Prefectural Museum of Art いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Ishikawa Prefectural Museum of Art

The Ishikawa Prefectural Museum of Art has a collection of over 4,000 pieces that exemplify the sophistication and diversity of Ishikawa arts and crafts and demonstrate the essential role they have played in the culture and history of Japan. The collection includes a National Treasure on permanent display, six Important Cultural Properties, and many works by the prefecture's esteemed Holders of Important Intangible Cultural Heritage.

The museum is one of the oldest regional art museums in the country. It was founded in 1959 at a smaller facility on the edge of Kenrokuen Garden. In the late 1970s, the prefecture began making plans for a new museum that could hold larger-scale exhibitions and would be better equipped to maintain the historical items in its collection. The current building opened in 1983 at the heart of Kanazawa's greenery-rich cultural district.

The museum's collection is comparatively large and includes a significant number of important pieces from Ishikawa's long history as a center of traditional arts and crafts. During the Edo period (1603–1867), the ruling Maeda family brought master artisans to the area and fostered the establishment of cutting-edge workshops. While some of the resulting works circulated to other parts of the country, many stayed in the region and were passed down through local families. During World War II, Kanazawa was spared the large-scale destruction of other major cities. As a result, many private collections survived those tumultuous years and were later donated to the museum.

Between the museum's permanent and temporary exhibits, around 250 pieces are on display at any given time. These include works that showcase the craft techniques and styles for which Ishikawa is famous—Kutani ware, Kaga *yūzen* textiles, and gold-decorated lacquerware—as well as finely crafted artifacts of regional history, such as decorative swords and horse tack, a ceremonial palanquin, and Buddhist sutras. The collection also includes works that demonstrate local participation in Japan's broader artistic spheres: tea ceremony implements, noh masks and costumes, and calligraphy tools. Modern artworks, such as oil paintings and photography by contemporary Ishikawa artists, show how techniques and aesthetics continue to evolve.

The museum continues to acquire both historical and recent works related to local arts and crafts traditions, aiming to play a core role in their preservation. It also offers local residents and visitors alike a welcoming place to learn about the cultural heritage of Ishikawa.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石川県立美術館

石川県立美術館は、石川県の美術工芸の精巧さと多様性を示し、日本の文化や歴史において重要な役割を果たす4,000点を超える作品を所蔵している。1点の国宝の常設展示、6点の重要文化財、県内の重要無形文化財保持者の作品を多数収蔵している。

当館は、全国でも最も古い地方美術館の一つである。1959年に兼六園の端にある小さな施設に設立された。1970年代後半、県はより大規模な展示が可能で、歴史的なコレクションを維持できる新美術館の計画を開始した。1983年、現在の建物は、緑豊かな金沢の文化街の中心に開館した。

当館のコレクションは比較的規模が大きく、伝統工芸の中心地として長い歴史を持つ石川県の重要な作品を多数所蔵している。江戸時代（1603-1867）には、前田家が名工を招き入れ、最先端の工房を育成した。作品は全国各地に流出することもあったが、多くは地元に残り受け継がれてきた。第二次世界大戦中、金沢は他の大都市のような大規模な破壊を免れたので、多くの個人コレクションが戦災を掻い潜り、後に当館に寄贈された。

常設展と企画展を合わせると、常時約250点が展示されている。九谷焼、加賀友禅、加賀蒔絵漆器など石川県を代表する工芸技術や様式を紹介するものから、装飾刀や馬具、輿、経典など

石川県の歴史を物語る精巧な工芸品も含まれている。また、茶道具、能面・能装束、書道具など、日本の広範な芸術領域に地域が参加したことを示す作品も含まれている。石川県の現代作家による油彩画や写真などのモダンな作品からは、技術や美意識が進化し続けていることがわかる。

当館は、石川県の伝統的な美術工芸品の保存の中核を担うべく、歴史的な作品から最新の作品まで、幅広く収集し続けている。また、石川県の文化遺産を地域の皆さんや観光客に紹介する場としても利用されている。

001-059

Ishikawa Prefectural Museum of Art いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Ishikawa Prefectural Museum of Art

The Ishikawa Prefectural Museum of Art has a collection of over 4,000 pieces that exemplify Ishikawa's arts and crafts traditions and demonstrate the region's important role in the culture and history of Japan. The collection includes a National Treasure, six Important Cultural Properties, and many works by the prefecture's esteemed Holders of Important Intangible Cultural Heritage.

The museum is one of the oldest regional art museums in the country. It was founded in 1959 at a smaller facility on the edge of Kenrokuen Garden. The current building opened in 1983 and is located at the heart of Kanazawa's greenery-rich cultural district.

Between permanent and temporary exhibits, around 250 pieces are on display at any given time. Visitors can view craft techniques and styles synonymous with Ishikawa, such as Kutani ware, Kaga *yūzen* textiles, and gold-decorated lacquerware. Also on display are antiquities that reflect the region's history, including Buddhist sutras and swords and horse tack from the ruling Maeda family. The collection spans more than two millennia, from Jōmon-period (10,000–300 BCE) pottery to twenty-first-century oil paintings and photography, illuminating the evolution of Ishikawa's cultural heritage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石川県立美術館

石川県立美術館は、石川県の美術・工芸の伝統を代表する4,000点以上の作品を収蔵し、日本の文化や歴史におけるこの地域の重要な役割を示している。国宝1点、重要文化財6点をはじめ、県内の要無形文化財保持者の作品も多数所蔵している。

当館は、全国でも最も古い地方美術館の一つである。1959年、兼六園の端に小さな施設として設立された。現在の建物は、1983年に金沢の緑豊かな文化街の中心に開館した。

常設展と企画展を合わせると、常時約250点を展示している。九谷焼、加賀友禅、加賀蒔絵漆器など石川県の代表的な工芸品見ることができる。また、経典、前田家の刀剣や馬具など、石川県の歴史的な古美術品も展示されている。このコレクションは、縄文時代（紀元前10000-紀元前300）の土器から21世紀の油彩画や写真に至るまで、二千年以上にわたる石川県の文化遺産の変遷を知ることができる。

001-060

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
尊經閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

The Maeda Ikutokukai Gallery displays a selection of items from the Sonkeikaku Bunko, a repository of classical texts, historical documents, ornamental armor, campaign jackets, paintings, and other treasures collected by the wealthy Maeda family. The Maedas governed Kaga domain (present-day Ishikawa and Toyama Prefectures) from 1583 until 1871.

The full Sonkeikaku Bunko collection comprises over 10,000 items, and the repository is located in Tokyo. Because of the Maeda family's historical connection to Kanazawa, the Ishikawa Prefectural Museum of Art is permitted to hold and display approximately 400 of the repository's artifacts and works of fine art.

Historical Background

By the start of the Edo period (1603–1867), the Maedas were one of the wealthiest families in Japan, and the annual income of Kaga domain was second only to that of the shogunate. The Maedas' resources enabled them to invest in promoting the arts and collecting many fine pieces. Significant portions of the Sonkeikaku Bunko collection were amassed by the third lord of Kaga, Maeda Toshitsune (1594–1658), and by his grandson Maeda Tsunanori (1643–1724), the domain's fifth lord.

Historically, some of the treasures were kept at the Maeda family residence in Edo (now Tokyo). During the Edo period, a domain lord had two main residences: one in his own domain and one in Edo. Under the shogunate policy of “alternate attendance”

(*sankin kōtai*), every year domain lords had to alternate between living in Edo and living in their own domains. Because of this system, part of the collection was in Tokyo when the shogunate fell in 1867. As for the rest, treasures kept in the Kanazawa residence were transferred to Tokyo when the family moved there permanently during the Meiji era (1868–1912).

In 1926, Maeda Toshinari (1885–1942), the sixteenth head of the Maeda family, established the Maeda Ikutokukai Foundation in Tokyo to organize and preserve the family's collection. In its entirety, the Sonkeikaku Bunko contains 22 National Treasures and 77 Important Cultural Properties—a remarkable number for a single family to have amassed. The vast majority of the repository contents are texts, many quite old and valuable, that remain in Tokyo and are restricted to authorized researchers. The Maeda Ikutokukai Gallery at Ishikawa Prefectural Museum of Art is the only place where the general public can view items from this historic collection.

The Maeda Ikutokukai Gallery

The gallery rotates items on a monthly basis according to exhibition themes, such as paintings, arms and armaments, noh costumes, and implements for tea ceremony. Displays may include the Maeda lords' numerous sets of armor, campaign jackets, stirrups adorned with Kaga metal inlay, tea utensils, landscape paintings, Japanese calligraphy, and—on rare occasions—the Hyakkō Hishō, an unusual collection of samples illustrating craft techniques.

The gallery offers visitors an opportunity to see these well-preserved treasures up close and to appreciate masterworks that were the pride of one of Japan's wealthiest samurai families.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

前田家の宝物 尊経閣文庫

前田育徳会展示室は、前田家が収集した古典籍、古文書、甲冑、陣羽織、絵画などの宝物を所蔵する「尊経閣文庫（そんけいかくぶんこ）」の中から、選りすぐりの品々を展示している。前田家は1583年から1871年まで加賀藩（現在の石川県と富山県）を治めた。

尊経閣文庫は1万点を超えるコレクションがあり、東京に保管されている。石川県立美術館は、前田家と金沢の歴史的なつながりから、所蔵品のうち約400点の美術工芸品の所蔵・展示が認められている。

歴史的背景

江戸時代（1603-1867）初頭までには、前田家は日本有数の豪家のひとつとなり、加賀藩の年収は幕府に次ぐものとなっていた。前田家の財力により、芸術の振興に投資を行い、多くの優れた作品を収集することができた。加賀藩3代藩主・前田利常（1594-1658）と、その孫で5代藩主・前田綱紀（1643-1724）が収集したものが、尊経閣文庫のコレクションの大部分を占めている。

歴史的には、宝物の一部は江戸（現在の東京）の前田家邸宅に保管されていた。江戸時代、藩主の屋敷は藩内と江戸の二カ所にあった。幕府の「参勤交代（さんきんこうたい）」という政策により、藩主は毎年、江戸と自分の領地を交互に往復しなければならなかった。このため、1867年の幕府滅亡時には、収蔵品の一部は東京にあった。残りの金沢藩邸にあった宝物は、明治時代（1868-1912）に東京に永住することになり、東京に移された。

1926年、前田家16代当主の前田利為（1885-1942）は、前田家のコレクションを整理・保存するために財団法人前田育徳会を東京に設立した。尊経閣文庫には、国宝22点、重要文化財77点が収められており、一族のコレクションとしては驚異的な数である。寄託内容の大半は東京に残され、貴重な古文書（古典籍）であり、研究者以外には公開されていない。一般公開は石川県立美術館の前田育徳会展示室のみである。

前田育徳会展示室

この展示室では、絵画、武具、能装束、茶道具など、展示テーマに合わせて月替わりで展示を行っている。前田家伝来の鎧兜、陣羽織、加賀象嵌の鎧、茶道具、山水画、書道、時には百工比照（工芸技法を示す珍しい見本のコレクション）など、前田家ゆかりの品々を展示している。

保存状態のよい貴重な品々を間近で見ることができ、日本有数の武家が誇った名品を鑑賞することができる。

001-061

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
尊經閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

The Maeda Ikutokukai Gallery displays a selection of items from the Sonkeikaku Bunko, a repository of classical texts, historical documents, ornamental armor, campaign jackets, paintings, and other treasures collected by the wealthy Maeda family. The repository itself is in Tokyo, but because of the Maeda family's historical connection to Kanazawa, the Ishikawa Prefectural Museum of Art is permitted to hold and display approximately 400 of the repository's artifacts and fine art pieces.

The full Sonkeikaku Bunko collection comprises over 10,000 items, including 22 National Treasures and 77 Important Cultural Properties—a remarkable number for a single family to have gathered. The Maedas governed Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures) from 1583 until 1871. Significant portions of the Sonkeikaku Bunko collection were amassed by the third lord of Kaga, Maeda Toshitsune (1594–1658), and by his grandson Maeda Tsunanori (1643–1724), the domain's fifth lord.

The Maeda Ikutokukai Gallery rotates items from the Sonkeikaku Bunko on a monthly basis. Displays may include some of the Maeda lords' numerous sets of armor, stirrups adorned with Kaga metal inlay, tea utensils, landscape paintings, calligraphy, and occasionally, the Hyakkō Hishō—a collection of samples and crafted items that illustrate decorative craft techniques. The gallery provides an opportunity to see these well-preserved treasures up close and to appreciate masterworks that were the pride of one of Japan's wealthiest samurai families.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

前田家の宝物 尊経閣文庫

前田育徳会展示室は、前田家が収集した古典籍、古文書、甲冑、陣羽織、絵画などの宝物を所蔵する「尊経閣文庫（そんけいかくぶんこ）」の中から、選りすぐりの品々を展示している。尊経閣文庫自体は東京にあるが、前田家と金沢の歴史的なつながりから、石川県立美術館は、文庫の遺品や美術品約400点の作品の所蔵・展示が認められている。

国宝22点、重要文化財77点を含む1万点余りのコレクションは、一族のコレクションとしては驚異的な数である。前田家は1583年から1871年まで加賀藩（現在の石川県と富山県）を治めた。3代藩主・前田利常（1594-1658）と、その孫で5代藩主・前田綱紀（1643-1724）が、尊経閣文庫のコレクションの大部分を収集したのである。

前田育徳会展示室では、月替わりで「尊経閣文庫」に収められている品々を展示している。前田家伝来の鎧兜、加賀象嵌の鎧、茶道具、山水画、書道、時には百工比照（工芸の技法を示す見本や工芸品）も展示されている。この展示室では、保存状態のよい貴重な品々を間近で見ることができ、日本有数の武家が誇った名品を鑑賞することができる。

001-062

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
尊經閣文庫分館（そんけいかくぶんこぶんかん）
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Treasures of the Maeda Family: The Sonkeikaku Bunko

This gallery displays items from the Sonkeikaku Bunko—a repository of classical texts, historical documents, ornamental armor, paintings, and other treasures owned and collected by the Maeda family during the Edo period (1603–1867). The displays are rotated monthly and may include sets of armor made for the Maeda lords, luxurious campaign jackets, stirrups adorned with Kaga metal inlay, tea utensils, landscape paintings, calligraphy, and occasionally, the Hyakkō Hishō—a collection of samples and objects illustrating decorative craft techniques.

In its entirety, the Sonkeikaku Bunko collection contains 22 National Treasures and 77 Important Cultural Properties—a remarkable number for a single family to have amassed. Most of the objects are ancient texts that remain at a facility in Tokyo, but the Ishikawa Prefectural Museum of Art is permitted to hold and display approximately 400 of the repository’s artifacts and works of fine art.

By the start of the Edo period, the Maedas were one of the wealthiest families in the country, and the annual income of Kaga domain was second only to that of the shogunate. The Maedas’ resources enabled them to invest heavily in promoting the arts and collecting many fine pieces. Significant portions of the Sonkeikaku Bunko collection were amassed by the third lord of Kaga, Maeda Toshitsune (1594–1658), and by his grandson Maeda Tsunanori (1643–1724), the domain’s fifth lord.

Historically, part of the Maedas’ collection was kept at their residence in Edo (now Tokyo). During the Edo period, domain lords had two main residences: one in their own domain and one in Edo. Under the shogunate policy of “alternate attendance” (*sankin kōtai*), lords had to alternate between these two residences every year. Domain lords’ wives and principal heirs were required to live in Edo full-time, so some of the family’s personal effects were kept in the Maedas’ Edo residence. For this reason, part

of the collection was in Tokyo when the shogunate fell in 1867. The rest was transferred from Kanazawa to Tokyo when the family moved there permanently during the Meiji era (1868–1912). In 1926, Maeda Toshinari (1885–1942), the sixteenth head of the Maeda family, established the Maeda Ikutokukai Foundation in Tokyo to organize and preserve the family's collection.

Only researchers with prior permission are allowed into the Tokyo repository. Consequently, the Maeda Ikutokukai Gallery is the only place where the general public can view these treasures, which were the pride of one of Japan's wealthiest samurai families.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

前田家の宝物 尊経閣文庫

この展示室では、前田家が江戸時代（1603–1867）に収集した古典籍、古文書、武具、絵画などの宝物を保管する「尊経閣文庫（そんけいかくぶんこ）」の所蔵品を展示している。前田家伝来の鎧兜、陣羽織、加賀象嵌の鎧、茶道具、山水画、書道、時には百工比照（工芸技法を示す見本のコレクション）まで、月替わりで展示している。

国宝22点、重要文化財77点という、一族のコレクションとしては驚異的な数を誇る。そのほとんどが古文書（古典籍）で、東京の施設に保管されているが、石川県立美術館では、収蔵品のうち約400点の美術工芸品の収蔵・展示が認められている。

江戸時代に入ると、前田家は国内有数の豪家のひとつとなり、加賀藩の年収は幕府に次ぐものだった。前田家の財力は、芸術の振興に多大な投資を行い、多くの優れた作品を収集することを可能にした。加賀藩3代藩主・前田利常（1594-1658）と、その孫で5代藩主・前田綱紀（1643-1724）が収集したものが、尊経閣文庫のコレクションの大部分を占めている。

歴史上、前田家のコレクションの一部は、江戸（現在の東京）の藩邸に保管されていた。江戸時代、藩主の屋敷は本所と江戸の二カ所にあった。幕府の「参勤交代（さんきんこうたい）」の政策により、藩主は毎年、この2つの屋敷を交互に行き来しなければならなかった。

藩主の妻や主な相続人は江戸に常駐することが義務づけられていたため、前田家の江戸屋敷には遺品が保管されていた。そのため、1867年の幕府崩壊の際には、コレクションの一部は東京にあった。残りの金沢藩邸にあった宝物は、明治時代（1868–1912）に東京に永住することになり、東京に移された。

1926年、前田家16代当主の前田利為（1885-1942）が東京に財団法人前田育徳会を設立し、コレクションの整理・保存をした。

東京の保管庫には、事前に許可を得た研究者のみが入ることができる。そのため、日本有数の武家の誇りである名品を一般に公開するのは、前田育徳会展示室だけである。

001-063

Kaga Domain Workshop (Osaikusho)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
加賀藩御細工所（かがはんおさいくしょ）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kaga Domain Workshop (Osaikusho)

The Kaga Domain Workshop (Osaikusho) was a crafts workshop established in the late sixteenth century in Kaga domain (now Ishikawa and Toyama Prefectures). Patronized by the region's powerful Maeda family, the workshop contributed extensively to the development of highly skilled artisans, crafts, and decorative arts until it was closed in 1868.

The workshop's original purpose—like that of similar workshops in other domains—was to manage and repair weapons and armor during the decades of countrywide warfare that preceded the Edo period (1603–1867). After the turmoil had subsided, there was no longer great need for the traditional services of the workshop. However, a degree of political instability lingered, so Maeda Toshiie (ca. 1539–1599), the first lord of Kaga domain, ordered the workshop to continue operations, lest conflict break out once more. As time went on, the risk of conflict diminished, and members of the workshop turned to more artistic pursuits.

Maeda Toshitsune (1594–1658), the third lord of Kaga domain, actively encouraged the development of decorative arts and crafts at the workshop. Under Toshitsune's influence, the workshop was formally established as the Osaikusho, and skilled artisans of every type were employed. Numerous craft techniques flourished, such as *zōgan* inlay and Kaga *maki-e*, and artisans from all over Japan were drawn to the growing Kanazawa castle town.

More than their own initiative brought artisans to the area—the Maeda family actively invited many to live and work there. In addition to Toshitsune, Maeda Tsunanori (1643–1724), the fifth lord of the Kaga domain, is largely credited with the development of craft techniques in Kaga during the 1600s. Raised by his grandfather Toshitsune, Tsunanori was enthusiastic about the arts. He created an extensive collection of craft samples and items, known as the Hyakkō Hishō, to study and catalogue superior crafting techniques. Tsunanori encouraged the development of crafts by having the artisans live together near the workshop. He also rewarded those who produced particularly high-quality items.

The Kaga Domain Workshop broke new ground in another respect. Previously, craft techniques had been developed by families who transmitted knowledge of the techniques only to their own descendants. However, at the Kaga Domain Workshop craftsmen of all disciplines—lacquerware, painting, metalwork, and many others—gathered and worked side by side. Their combined efforts enabled the advancement of many craft disciplines and the creation of superb pieces.

One of the most impressive items created at the Kaga Domain Workshop is a ceremonial palanquin from the late Edo period. By the 1800s, there were over 70 artisans working at the workshop, and they combined their knowledge and skills to create this elaborate work. The design features a pattern of vines decorated with flowers and the plum-blossom-shaped Maeda family crest, all rendered in gold *maki-e* lacquer, *raden* shell inlay, and gold inlay on a black lacquer background. The metal fittings are also intricately designed. The inside is decorated, as well, with *maki-e* lacquer and colorful paintings on a gold background.

The Kaga Domain Workshop closed permanently in 1868 after more than 250 years of continuous activity. Its closure resulted from the fall of the Tokugawa shogunate in 1867 and the beginning of the Meiji era (1868–1912), when the country’s political organization was significantly restructured. Domain lords were stripped of their lands and authority, and domains were reorganized into prefectures; part of Kaga domain became Ishikawa Prefecture in 1872.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀藩御細工所

加賀藩御細工所（おさいくしょ）は、16世紀後半に加賀藩（現在の石川県、富山県）によって設立された工芸品製作所である。加賀藩の有力者であった前田家の支援を受け、1868年に閉鎖されるまで、高度な技術を持つ職人や工芸品、装飾品などの発展に大きく貢献した。

この工房の本来の目的は、他藩の工房と同様、江戸時代（1603-1867）に先立つ数十年にわたる戦乱の時代に武器や武具を管理・修理することが本来の目的であった。混乱が収まると、従来のような工房の大きなニーズはなくなった。しかし、政情不安もあり、加賀藩初代藩主・前田利家（1539-1599）は、万が一、再び戦乱が起こった場合に備えて、工房を継続するよう命じたのである。時が経つにつれ、争いの危険性は減少し、工房の成員はより芸術的な活動へと移行していった。

加賀藩3代藩主・前田利常（1594-1658）は、工房の装飾美術・工芸の発展を積極的に奨励した。利常の影響により、工房は正式に「御細工所」（おさいくしょ）として設立され、あらゆる種類の熟練工が採用されるようになった。象嵌や加賀蒔絵など、さまざまな工芸技術が開花し、城下町として発展した金沢には全国から職人が集められた。

前田家は、自分たちの意思で職人を呼び寄せるだけでなく、積極的に多くの職人を招き入れ、そこに住まわせ働かせた。1600年代の加賀の工芸技術の発展には、利常のほか、第5代加賀藩主の前田綱紀（1643-1724）が大きく貢献したとされている。祖父・利常に育てられた綱紀は、芸術に造詣が深かった。さらに、優れた工芸技術を研究し、標本化するために、工芸品の見本や品々を集めた「百工比照」として知られる膨大なコレクションを作成したのである。綱紀は、職人を工房の近くに住まわせるなどして、工芸の発展を促した。また、特に質の高いものを作った職人には褒賞を与えた。

加賀藩御細工所は、もう一つの点で新境地を開いた。それまでは、技術の知識を自分の子孫にのみ伝えた家によって発展してきた。しかし、加賀藩御細工所には、漆器、絵付け、金工などあらゆる分野の職人が集まり、肩を並べて仕事していたのである。その結果、多くの技法が生まれ、優れた作品が生み出されたのである。

加賀藩御細工所の代表的な作品に、江戸時代後期の御輿がある。1800年代には、70人以上の職人が在籍し、それぞれの知恵と技術を結集して、この精巧な作品を作り上げた。デザインは黒漆地に金蒔絵、螺鈿細工、金象嵌で、蔓に花をあしらった文様と梅花型の前田家の家紋を表現している。金具のデザインも凝っている。内部も蒔絵や金地と色鮮やかな絵が施されている。

加賀藩御細工所は、250年以上続いた後、1868年に永久に閉鎖された。1867年に徳川幕府が崩壊し、明治時代（1868-1912）が始まり、日本の政治体制が大きく再編されたことがその

理由である。大名は領地と権限を奪われ、藩は県に改編され、加賀藩の一部は1872年に石川県となった。

001-064

Kaga Domain Workshop (Osaikusho)

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
加賀藩御細工所（かがはんおさいくしょ）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kaga Domain Workshop (Osaikusho)

The Kaga Domain Workshop (Osaikusho) was a crafts workshop established in the late sixteenth century and operated by Kaga domain (present-day Ishikawa and Toyama Prefectures). The workshop was patronized by the region's powerful Maeda family, and it contributed significantly to the development of highly skilled artisans, crafts, and decorative arts until it closed in 1868.

The workshop's original purpose—like that of similar workshops in other domains—was to manage and repair weapons and armor during the decades of countrywide warfare that preceded the Edo period (1603–1867). After the final battle ended in 1615, stability and peace ensued, which meant there was less need to craft or repair weapons and armor.

Maeda Toshitsune (1594–1658), the third lord of Kaga domain, changed the workshop's focus to the advancement of decorative arts and crafts. Under Toshitsune's influence, the workshop was formally established as the Osaikusho, and artisans of every type were drawn to the growing Kanazawa castle town.

Maeda Tsunanori (1643–1724), the fifth lord of Kaga domain, receives much of the credit for advancing craft techniques in Kaga during the 1600s. Raised by his grandfather Toshitsune, Tsunanori was enthusiastic about the arts. To encourage their development, Tsunanori had artisans live near the workshop. Craft techniques had previously been kept as family or trade secrets, but craftsmen of all disciplines—

lacquer, painting, metalworking, and many others—gathered and collaborated at the Kaga Domain Workshop. Their combined efforts enabled the creation of many of Kaga’s most superb pieces. Tsunanori also rewarded the artisans when they produced particularly high-quality items.

In addition to their main crafts, many of the Osaikusho artisans worked to excel at cultural pursuits that the Maedas favored, such as noh theater and tea ceremony.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀藩御細工所

加賀藩御細工所（おさいくしょ）は16世紀後半に設立され、加賀藩（現在の石川県と富山県）が運営していた工芸品製作所である。この工房は、加賀藩の有力者であった前田家の支援を受け、1868年に閉鎖されるまで、高度な技術を持つ職人や工芸品、装飾品の発展に大きく貢献した。

この工房の本来の目的は、他藩の工房と同様、江戸時代（1603-1867）に先立つ数十年にわたる戦乱の時代に、武器や武具の管理・修理することであった。1615年に戦いが終わり、安定と平和が訪れたため、武器や防具の製作や修理の必要性が少なくなった。

加賀藩3代藩主・前田利常（1594-1658）は、工房を装飾美術・工芸の振興に重点を置くようにした。利常の影響により、工房は正式に「御細工所」（おさいくしょ）となり、金沢の城下町にはさまざまな職人が引き寄せられた。

5代目加賀藩主・前田綱紀（1643-1724）は、1600年代に加賀で工芸技術を発展させたことで、多くの功績が認められている。祖父・利常のもとで育った綱紀は、芸術に造詣が深かった。そのため、職人を工房の近くに住まわせ、技術の発展を促した。加賀藩の工房には、それまで家内や企業秘密とされていた漆や絵付け、金工などさまざまな職人が集まり、協力していた。彼らの協力により、加賀の数々の名品が生み出されたのである。綱紀はまた、職人たちが特に質の高いものを作ると報いた。

御細工所の職人の多くは、本業の工芸品に加えて、能楽や茶道など、前田家の好む文化的な分野にも力を注いだ。

001-065

Kaga Domain and the Maeda Family Cultural Policy

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 / 前田家と加賀藩の概要

【想定媒体】 看板 WEB

できあがった英語解説文

Kaga Domain and the Maeda Family Cultural Policy

The area now known as Ishikawa Prefecture was once a part of Kaga domain—one of about 250 relatively autonomous regions under the authority of the shogun during the Edo period (1603–1867). Kaga was governed by 14 lords of the Maeda family from 1583 until the abolition of the domain system in 1871. Thanks to the family’s strong commitment to fostering Kaga’s traditional arts, the Maedas’ legacy remains alive and well in the cultural life of Ishikawa.

Kaga domain was a large and highly productive agricultural region. Because a domain’s wealth was determined by the volume of crops—particularly rice—that it produced, the Maedas’ income was second only to the aggregate income of the shogunate itself.

Before the start of the Edo period, Japan had endured centuries of conflict among independent warlords who had funded and waged war with their own armies. At the end of the sixteenth century, the Tokugawa family rose to ascendancy and established a shogunal government based in Edo. The Tokugawas were well aware that greater wealth meant more resources to recruit and equip troops, and that wealthy domain lords like the Maedas could pose a significant threat should they decide to revoke their allegiance and funnel their wealth into rebellion.

The Maedas, too, worried their wealth might lead the shogun to view them as political rivals. As a result, they embarked on a shrewd political course: to invest heavily in non-military pursuits like noh theater, the decorative arts, and tea ceremony. This policy kept the family in the shogun’s good graces, giving them access to government posts and transforming Kanazawa into a regional hub despite its distance from the capital. At the same time, developing cultural influence was a peaceful way to assert the domain’s independence and offset the control of the shogunate.

The Maeda cultural policy can broadly be categorized as twofold: collection and cultivation. Accumulating fine works of art lent prestige to a domain lord. While this was a common pursuit among the samurai class, the deep pockets of the Maedas allowed them to outspend their rivals, and many masterpieces from around Japan ended up in their possession. The Maedas were not satisfied, however, with simply collecting. They made the promotion of local arts and crafts a fundamental part of their domain management. They attracted many of the country's finest artisans to Kaga by offering generous stipends, patronage, and land. Many of the crafts for which Ishikawa is famous, such as Kaga *yūzen* silk dyeing, were established by artisans from Kyoto and Edo (now Tokyo) who moved to Kanazawa at the Maedas' invitation.

One of their most influential acts was to turn a former armor repair workshop at Kanazawa Castle into a multidiscipline crafts workshop called the Kaga Domain Workshop (Osaikusho). With the financial support of successive domain lords, artists honed their skills, trained successors, and collaborated on boundary-pushing projects and masterworks. The fifth Maeda lord, Maeda Tsunanori (1643–1724), initiated the creation of a wide-ranging compendium of contemporary craft samples from around the country. Known as the Hyakkō Hishō, it helped to educate and inspire artisans at the Kaga Domain Workshop. Many key techniques that define Ishikawa's lacquerware, metalwork, and woodwork today emerged from this innovative institution.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

加賀藩と前田家の文化政策

現在の石川県として知られている地域は、かつて加賀藩の一部であった。江戸時代（1603-1867）に、将軍の権限下にあった約250の自治領の一つである。加賀は、1583年から1871年の廃藩置県まで、前田家14代が統治した。加賀の伝統工芸の育成に力を注ぎ、その遺産は石川県の文化に脈々と受け継がれている。

加賀藩は広大で、農業が盛んな地域であった。藩の財産は米を中心とした農作物の生産量で決まるため、前田家の収入は幕府の総収入に次ぐ豊かな藩であった。

江戸時代に入る前、日本は何世紀もの間、独立した武将たちの間で争いが絶えなかった。16世紀末に徳川家が台頭し、江戸を拠点に幕府を開いた。徳川家は、富が増えれば、兵員の動員や装備のための資源も増えることを十分認識しており、前田家のような富裕な領主が忠誠心を失い、反乱を起こせば、大きな脅威となりうることをよく知っていた。

前田家もまた、自分たちの富が将軍の政敵とみなされることを懸念していた。そこで前田家は、能楽、美術、茶道など非軍事的な分野への投資をするという抜け目のない政治路線に乗り出した。

この政策により、一族は将軍家の寵愛を受け、官職に就くことができ、金沢は都から遠く離れていながら、地方の中心都市へと変貌を遂げた。同時に、文化的な影響力を高めることは、藩の独立性を主張し、幕府の支配を相殺する平和的な方法であった。

前田家の文化政策は、大きく分けて「収集」と「育成」の二つに分けられる。美術品の収集は、藩主の威信を高めるために行われた。これは武士の間では常識であったが、前田家は裕福だったため、他の大名よりも多く日本各地の名画を数多く所有した。しかし、前田家は単に収集するだけでは満足しなかった。地域の芸術や工芸を振興することを領国経営の基本としていた。加賀藩は、支援や土地を提供することで、全国の優秀な職人たちを呼び寄せた。加賀蒔絵をはじめとする石川県の工芸品の多くは、前田家の招きで京都や江戸から金沢に移り住んだ職人たちによって確立されたものである。

中でも、金沢城の甲冑修理場を、加賀藩御細工所と呼ばれる多分野の工芸工房に変えたことは、大きな影響力を持つことになった。歴代藩主の資金援助により、芸術家たちは技術を磨き、後継者を育成し、境界を越えるプロジェクトや名作を共同制作したのである。5代藩主・前田綱紀

（1643-1724）は、全国の当時の工芸の見本を幅広くまとめたものを作成するよう促した。それは百工比照として知られ、加賀藩の工房の職人たちの教育・啓発に役立てられた。今日の石川県の漆器、金工、木工を定義する多くの重要な技術は、この革新的な施設から生まれた。

001-066

Ishikawa Traditional Crafts: An Introduction

いしかわ工芸・文化財デジタルコンテンツ推進協議会

【タイトル】 石川県立美術館 /
石川県の伝統工芸 イン트로ダクション
【想定媒体】 看板 WEB

できあがった英語解説文

Ishikawa Traditional Crafts: An Introduction

For hundreds of years, the area now known as Ishikawa Prefecture has been a major center for handicrafts, rivaling the cultural capitals of Kyoto and Edo (now Tokyo). The prefecture's thriving craft traditions encompass ceramics, textiles, lacquerware, metalwork, and woodwork. Many art forms practiced around Japan, such as swordsmithing and *yūzen* silk dyeing, evolved unique expressions in Ishikawa. Other techniques, such as Kaga metal inlay, originated in the area.

In recognition of their artistic and historical value, many of the art forms practiced in Ishikawa have been designated Important Intangible Cultural Heritage by the national government. By population, the prefecture is home to the most crafts-related Holders of Important Intangible Cultural Heritage—the master practitioners tasked with preserving the time-honored techniques that have been designated Intangible Cultural Heritage.

Today, visitors to Ishikawa can see not only masterworks from the past, but also modern artisans still plying their trades and finding new ways to adapt traditional techniques to a modern aesthetic. Contemporary works range from exquisite pieces of fine art destined for museums to daily items of functional beauty, like Kutani ware rice bowls or Wajima lacquer chopsticks. Some products remain ultra-traditional, such as the ceremonial gongs used in tea ceremony, while other crafts have found new expressions in the modern age. For example, the micron-thin gold leaf once applied to Buddhist statuary can now be found atop soft-serve ice cream and in high-end facial treatments.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石川県伝統工芸品の紹介

現在、石川県として知られている地域は、数百年前から京都や江戸（現在の東京）の文化都市と肩を並べる工芸の中心地である。陶磁器、織物、漆器、金工、木工など、石川県の伝統工芸は盛んである。刀鍛冶や友禅など、日本各地で行われている工芸が石川県で独自の発展を遂げた。また、加賀象嵌など、この地域が発祥の地とされる技法もある。

石川県で行われている工芸の多くは、その芸術的・歴史的価値が認められ、国の重要無形文化財に指定されている。また、無形文化遺産に登録された伝統的な技法を守る名人である、工芸に関する重要無形文化財保持者の輩出も、人口比で日本一となっている。

現在、石川県を訪れると、過去の名作だけでなく、現代の職人たちが伝統的な技術を現代的な美意識に適合させるために新たな方法を模索している姿を見ることができる。美術館に展示されるような精巧な美術品から、九谷焼の飯碗や輪島塗の箸のような機能美を備えた日用品まで、現代の作品は多岐にわたる。茶道の銅鑪のように超伝統的なものもあれば、現代に新たな表現を見出した工芸品もある。例えば、かつて仏像に使われていたミクロン単位の薄さの金箔は、今ではソフトクリームの上に貼られたり、高級なフェイシャルトリートメントに使われたりしている。

地域番号	002	協議会名	小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
002-001	若狭歴史博物館 / 若狭地域の仏像①		501～750	アプリQRコード
002-002	若狭歴史博物館 / 若狭地域の仏像②		501～750	アプリQRコード
002-003	若狭歴史博物館 / 季節と人々の祈り		501～750	アプリQRコード
002-004	若狭歴史博物館 / 王の舞と村々の神事		251～500	アプリQRコード
002-005	若狭歴史博物館 / 町の祭礼と華やかな芸能		251～500	アプリQRコード
002-006	若狭歴史博物館 / トリハマ貝塚と嶺南の縄文時代		251～500	アプリQRコード
002-007	若狭歴史博物館 / 弥生時代の越前敦賀と若狭		251～500	アプリQRコード
002-008	若狭歴史博物館 / 若狭湾岸の古墳時代		251～500	アプリQRコード
002-009	若狭歴史博物館 / 「御食国」若狭 前夜-膳臣の進出-		251～500	アプリQRコード
002-010	若狭歴史博物館 / 敦賀・若狭関係の木簡		251～500	アプリQRコード
002-011	若狭歴史博物館 / 「御食国」若狭 -天皇の食を支える地-		251～500	アプリQRコード
002-012	若狭歴史博物館 / 「塩の道」若狭-都人の食を支える地-		251～500	アプリQRコード
002-013	若狭歴史博物館 / 角鹿の塩-呪いをかけ忘れた塩-		251～500	アプリQRコード
002-014	若狭歴史博物館 / 古代の都への道		251～500	アプリQRコード
002-015	若狭歴史博物館 / 若狭と都を結ぶ道		251～500	アプリQRコード
002-016	若狭歴史博物館 / 中世若狭の荘園		251～500	アプリQRコード
002-017	若狭歴史博物館 / 中世の若狭湾-若狭湾を行きかう人々と文化-		251～500	アプリQRコード

002-018	若狭歴史博物館 / 世界及日本図	251～500	アプリQRコード
002-019	若狭歴史博物館 / 若狭守護 若狭武田氏	251～500	アプリQRコード
002-020	若狭歴史博物館 / 若狭国の近世-街道と湊を活かした国づくり-	251～500	アプリQRコード
002-021	若狭歴史博物館 / 京極家と若狭小浜藩	251～500	アプリQRコード
002-022	若狭歴史博物館 / 若狭小浜藩の発展-酒井家と家中-	251～500	アプリQRコード
002-023	若狭歴史博物館 / 小浜藩の学問奨励	251～500	アプリQRコード
002-024	若狭歴史博物館 / 北前船の寄港地-小浜と敦賀-	251～500	アプリQRコード
002-025	旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 / 玄関口の部屋・茶の間	251～500	アプリQRコード
002-026	旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 / 2階座敷	251～500	アプリQRコード
002-027	旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 / 1階奥座敷・庭	251～500	アプリQRコード
002-028	小浜町並み保存資料館 / 家屋全体	～250	アプリQRコード
002-029	鯖街道熊川宿 / 説明看板：与七の碑	～250	アプリQRコード
002-030	鯖街道熊川宿 / 説明看板：西山稻荷	～250	アプリQRコード
002-031	鯖街道熊川宿 / 説明看板：まがり	251～500	アプリQRコード
002-032	鯖街道熊川宿 / 説明看板：御蔵屋敷跡	～250	アプリQRコード
002-033	鯖街道熊川宿 / 説明看板：松木神社	251～500	アプリQRコード
002-034	鯖街道熊川宿 / 説明看板：前川	251～500	アプリQRコード
002-035	鯖街道熊川宿 / 説明看板：菱屋	～250	アプリQRコード

002-036	鯖街道熊川宿 / 説明看板：陣屋跡	251～500	アプリQRコード
002-037	鯖街道熊川宿 / 説明看板：長屋道	～250	アプリQRコード
002-038	鯖街道熊川宿 / 説明看板：旧逸見勘兵衛家	251～500	アプリQRコード
002-039	鯖街道熊川宿 / 説明看板：熊川城跡	～250	アプリQRコード
002-040	鯖街道熊川宿 / 説明看板：番所	251～500	アプリQRコード
002-041	鯖街道熊川宿 / 案内地図：熊川宿（設置場所：中の町駐車場、まがり、道の駅ポケットパーク）	251～500	アプリQRコード
002-042	鯖街道熊川宿 / 案内地図：上ノ町（設置場所 番所横）	251～500	アプリQRコード
002-043	鯖街道熊川宿 / 案内地図：中ノ町（設置場所：宿場館前）	251～500	アプリQRコード
002-044	鯖街道熊川宿 / 案内地図：下ノ町（設置場所：下の町駐車場前）	251～500	アプリQRコード
002-045	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（熊川宿の誕生）	～250	アプリQRコード
002-046	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（宿場町以前の熊川宿）	～250	アプリQRコード
002-047	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（鯖街道の起源）	～250	アプリQRコード
002-048	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（京は遠ても十八里）	～250	アプリQRコード
002-049	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（若狭街道）	～250	アプリQRコード
002-050	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（熊川の文化）	～250	アプリQRコード
002-051	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（熊川葛）	～250	アプリQRコード
002-052	若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） / 展示説明（2F生活用品の展示）	～250	アプリQRコード

002-001

Buddhist Statues of the Wakasa Region

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 若狭地域の仏像①

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Buddhist Statues of the Wakasa Region

Overview

The Wakasa region has a large number of valuable Buddhist statues for a non-metropolitan area. Many of them are high-quality works created in the former capitals of Nara and Kyoto that are designated Important Cultural Properties. The presence of such sculptures can be attributed to several factors, including the early spread of Buddhism to Wakasa, the relative proximity to the old capitals, the wealth generated by Obama's port trade, and the fact that the region was largely spared from the damages of civil war. While some statues are kept in the Wakasa History Museum, most remain in the same temples where they have been worshipped for centuries.

Learn More

The Spread of Buddhism to Wakasa

After Buddhism was introduced to Japan from mainland Asia in the sixth century, it was accepted in the capital and promoted through the founding of temples. This was furthered by an imperial order issued in 741, requiring each province to establish a state-sponsored temple (*kokubunji*). In Wakasa Province, a *kokubunji* temple was constructed in 807.

Judging by the age of certain statues and temples, Buddhism seems to have reached Wakasa more quickly compared to some other regions. This is attributed in part to the number of monks that traveled there for ascetic training. The mountains of Wakasa were reportedly a popular choice for such training, being far enough from the capital to feel removed from the cultural and political center, but close enough for an easy return

if need be. Early exposure to Buddhism contributed to the deep attachment to the faith that prevails among people in the region.

Statuary through the Ages

The Buddhist statue believed to be the oldest in Wakasa was created sometime between the late seventh and the early eighth century. It depicts Kannon, the bodhisattva of compassion, in an eleven-headed form. Dating Buddhist statuary includes analyzing the technical skill involved and identifying visual characteristics typical for certain historical periods, in addition to purely scientific methods. A display board along the wall uses sculptures of Kannon to illustrate the differences between works produced in different eras.

Asuka through Nara Periods (552–794): Early Buddhist statues from the sixth to the eighth centuries were carved with stylized features and mysterious expressions. They were usually made of wood or gilt bronze.

Heian Period (794–1185): In the ninth and tenth centuries, statues were more likely to be made of wood. A single piece of wood was used to carve the entire figure in a technique called *ichiboku-zukuri*. In combination with the use of large tree trunks, this method made it possible to create sculptures with much bigger, taller bodies. The works of that period became grander and more imposing, with sterner facial expressions and clothing with heavy folds.

The statues of the eleventh and twelfth centuries are characterized by gentler, warmer expressions, round faces, and slender bodies dressed in light, draping robes. The *yosegi-zukuri* (joined woodblock) technique, in which parts of the sculpture were carved separately and then assembled for more detailed work, was introduced and popularized during that time.

Kamakura Period (1185–1333): In the thirteenth century, Buddhist sculpture style began to shift toward more realistic depictions of the face, body, and clothing. Figures were carved with determined facial expressions and a certain tension in the form. The *gyokugan* (literally “jewel eyes”) technique of adding crystal eyes that shone in the low lighting of temple interiors became popular.

Flourishing Temples in an Era of Trade

The wars that occurred from the twelfth to the early seventeenth century caused the destruction of many religious institutions and priceless treasures across Japan.

Although some conflict did occur in the Wakasa area, it was spared the large-scale battles that ravaged many other provinces. Fewer temples and statues made of wood were lost to fire, and surviving temple records have proved invaluable to modern researchers.

Another factor that contributed to the presence of high-quality Buddhist statuary in the region was the flourishing trade in Obama, which was a thriving port town for centuries. It was especially prosperous in the Edo period (1603–1867), when religious institutions were supported by the imperial court, the Sakai family who ruled the Obama domain, and wealthy merchants. This gave temples the means to obtain valuable sculptures made by experienced craftsmen in Kyoto.

Protection from the Anti-Buddhist Movement

Buddhism and Shinto were practiced in a syncretic fusion for over a thousand years, but in 1868, the Meiji government issued an order to separate the two religions. This triggered a wave of anti-Buddhist sentiment, and many temples, statues, and other works of art were lost. However, in present-day Wakasa there are temples enshrining statues of Shinto deities, as well as temples with sculptures thought to have been transferred from other locations to save them from harm. The deep faith of the people in the region helped preserve many treasures that would otherwise have been destroyed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭地域の仏像①）

若狭地域の仏像

概要

若狭地方には、大都市ではない地域としては、貴重な仏像が数多くあります。その多くは、かつての首都であった奈良や京都で制作された質の高い作品で、重要文化財に指定されています。そのような仏像の存在は、若狭への仏教の早期の広がり、昔の首都に比較的に近かったこと、小浜港の

交易によって生み出された富、そしてこの地域が内線の被害から大部分が免れたという事実などの、いくつかの要因に起因する可能性があります。いくつかの仏像は若狭歴史博物館に保管されていますが、ほとんどは何世紀にもわたって崇拝されてきた同じ寺院に残っています。

もっと詳しく知る

若狭への仏教の伝播

仏教は6世紀にアジア大陸から日本に伝わった後、都に受け入れられ、寺院の建立を通して促進されました。このことは、741年に下された勅令によって促進され、それぞれの国で国営の寺院（こくぶんじ 国分寺）を設立することが義務付けられました。若狭国では807年にこくぶんじ 国分寺が建立されました。

特定の仏像や寺院の年代から判断すると、他のいくつかの地域に比べて、仏教はより早く若狭に伝わったと思われます。この原因の一部は、修行のためにそこを旅した僧侶の数にあります。若狭の山々は、文化的、政治的な中心から離れていると感じられるほど十分に首都から遠いですが、必要であれば簡単に戻ることができるほど近いので、そのような修行によく選ばれていたであろうと伝えられています。早くから仏教に触れていたことは、この地域の人々に普及している信仰への深い関心の一因となりました。

代々の彫像術

若狭最古と考えられている仏像は、7世紀後半から8世紀前半頃の間には作られました。その仏像は慈悲の菩薩である観音を十一の頭がある姿で表しています。仏像の年代測定には、純粋な科学的方法に加えて、技術的な技能を分析し、特定の歴史的時期に典型的な視覚的特徴を特定することが含まれます。壁沿いの展示ボードには、観音像を使って、異なる時代に制作された作品の違いを示しています。

飛鳥時代から奈良時代（552年～794年）：6世紀から8世紀の初期の仏像は、より様式化された顔立ちと神秘的で精神的な表情が彫られています。それらは通常、木または金銅でできていました。

平安時代（794年～1185年）：9世紀と10世紀には、木製の仏像がより多く作られるようになった可能性があります。いちぼくづくり 一木造と呼ばれる技術で、一本の木から像の全体が彫られました。大きな木の幹を使用することと合わせて、この技法により、はるかに大きく背の高い像を作ることができました。この時代の作はより壮大で印象的になり、より厳しい顔の表情と重いひだのある衣服を備えていました。

11世紀と12世紀の仏像は、より穏やかで温かい表情、丸い顔、軽やかでひだのある服を着たほっそりした体の特徴です。よせぎづくり 寄木造（木のブロックを結合する）技術は、より細かい作業を行うため、像のパーツを別々に彫り、その後に組み上げるもので、この時代に導入され普及しました。

鎌倉時代（1185年～1333年）：13世紀には、仏像の彫刻スタイルは、顔、体、衣服のより現実的な描写へと移行し始めました。仏像はより決然とした表情とある程度の緊張感のある造形に仕上げられました。寺院内の暗い照明に映える水晶の目を入れる、玉眼（^{ぎよくがん}文字通りには、宝石の目）技法が流行しました。

交易の時代に繁栄する寺院

12世紀から17世紀初頭にかけて発生した戦により、日本中の多くの宗教施設や貴重な寺宝が破壊されました。いくつかの紛争は若狭でも起こりましたが、他の多くの地方に損害を与えた大規模な戦闘からは免れました。火事で失われた木造の寺院や彫像は他地域より少なく、残された寺院の記録は、現代の研究者にとって非常に貴重であることが証明されました。

この地域に高品質の仏像があるもう1つの要因は、何世紀にもわたって繁栄した港町であった小浜での交易が盛んなことでした。特にこの町が栄えたのは江戸時代（1603年～1867年）で、この時代には、朝廷や小浜藩を治めた酒井家、豪商が宗教施設を支援しました。これにより、寺院は京都の熟練した職人によって作られた貴重な像を入手する手段を獲得しました。

反仏運動からの保護

1000年以上にわたり、仏教と神道は融合して実践されてきましたが、1868年に明治政府は2つの宗教を分離する命令を出しました。これは反仏教の感情の波を引き起こし、多くの寺院や彫像、その他の芸術作品が失われました。しかし、現在の若狭には、神道の神々の像を安置する寺院や、損壊から救うために他の場所から移されたと思われる仏像を有する寺院があります。この地域の人々の深い信仰が、そうでなければ破壊されたであろう多くの寺宝を保存するのに役立ちました。

002-002

Buddhist Statues of the Wakasa Region: Exhibition Items

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 若狭地域の仏像②

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Buddhist Statues of the Wakasa Region: Exhibition Items

Seated Statue of Dainichi Buddha (mid-eleventh century, Kurokoma, Obama)

This image of Dainichi, the Cosmic Buddha, was long worshipped in the village of Kurokoma. It is considered the oldest sculpture of Dainichi Buddha in the Wakasa region. Some records suggest that it was venerated by monks who served at shrines in Kurokoma during the time of syncretic Shinto and Buddhist worship, while others indicate that it may have been housed in a hall built by the community and affiliated with a nearby temple. Originally, the statue was likely covered with gold leaf and was painted in color after the gold faded. The crown and halo were added at a later date. The hands of Dainichi Buddha form a mudra gesture symbolizing the unity of the five elements (earth, water, fire, air, and metal) with spiritual consciousness.

Replica of a Standing Statue of Fudo Myo-o (late eleventh century, Enshoji Temple)

The original of this sculpture depicting Fudo Myo-o, the Immovable Wisdom King, is enshrined at Enshoji Temple in central Obama and is a nationally designated Important Cultural Property. Fudo Myo-o is portrayed in a dynamic pose, left foot forward as if ready to step off the pedestal. It is an early example of a statue based on the concept of *Fudo jukyukan* (“nineteen visualizations of Fudo Myo-o”), incorporating characteristic iconography such as voluminous curly hair and a braid over the left shoulder, the way the teeth bite into the lips, having one eye open and the other squinted, and holding a sword and a lasso. The sword is not present in this replica, but the right hand is positioned to grip the handle.

Replica of a Seated Statue of Fudo Myo-o (late eleventh century, Jozenji Temple)

The original of this Fudo Myo-o image was once enshrined in the Fudodo Hall on a mountain near Jozenji Temple and is now kept in a repository on the temple grounds. It is a nationally designated Important Cultural Property. The sculpture was long worshipped as a “wave-breaking Fudo” that answered prayers for maritime safety. The slender body and shallowly carved folds of the clothing are characteristic of works produced in Kyoto in the late Heian period (794–1185). The style is based on a statue brought to Japan from China by the Buddhist monk Enchin (814–891).

Replica of a Seated Statue of Kannon Bodhisattva (early tenth century, Chokeiin Temple)

This sculpture depicts Kannon, the bodhisattva of compassion, holding a lotus flower. The original is enshrined in the Kannondo Hall administered by Chokeiin Temple and is a nationally designated Important Cultural Property. According to records, it was initially the principal object of worship at Nikkoji Temple located at the foot of Mt. Kusuyagadake. Legend says that the figure was carved in 731 by Gyoki (668–749), a prominent monk from Nara. The temple burned down in the early sixteenth century, but the statue of Kannon was carried away and escaped harm.

Replica of a Seated Statue of Bato Kannon (late eleventh century, Magoji Temple)

The original of this image of Bato (Horse-Headed) Kannon is enshrined in the main hall at Magoji, a temple supposedly founded by Prince Shotoku (Shotoku Taishi, 574–622). Characteristic of this form of Kannon, it has eight arms, three faces, and wears a horse head as a crown. The fierce expression is unusual for the bodhisattva of compassion, but according to some interpretations, this reflects the strength required to protect the faithful, while in esoteric Buddhism it is considered a representation of anger at worldly thoughts that obstruct the path toward enlightenment.

Seated Statue of Amida Buddha (tenth century, Hotokedani Ward, Obama)

This small sculpture of Amida, the Buddha of Infinite Light and Life, was likely carved in the Wakasa region. Most of the statue is made of *hinoki* cypress using the *ichiboku-zukuri* technique (carving from a single piece of wood), but the arms from the elbow and the legs from the knee are made from different wood. The statue was long worshipped in the village of Hotokedani, playing a central role in the religious life of the community.

Seated Statue of Jizo Bodhisattva (nineteenth century, Kaminegori Village)

This Jizo Bodhisattva was worshipped as a guardian deity in the Jizodo Hall at the entrance to the village of Kaminegori. The sculpture depicts Jizo in monk robes, sitting in a half-lotus position, and holding a *shakujo* staff in the right hand. Kaminegori was located on the Saba Kaido (“Mackerel Road”), a network of trade routes connecting Wakasa to Kyoto, and became a trading hub and a site of cultural exchange. Travelers passing by likely prayed to this Jizo statue for safety on their journey.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭地域の仏像②）

若狭地域の仏像 展示品

大日如来坐像（11世紀半ば、小浜市黒駒^{くろこま}）

この大日如来（宇宙仏）の像は古くから黒駒^{くろこま}村で信仰されていました。若狭地方最古の大日如来像とされています。これは、神仏習合の時代に黒駒の神社に勤めていた僧侶によって崇拝されたという記録もあれば、村人によって建てられ近所のお寺の管理下となったお堂に安置されていた可能性があるという記録もあります。この像は当初は金箔で覆われており、金箔が薄くなった後に彩色されたものと思われます。冠と光背は後に追加されました。大日如来の手は、五つの元素（土、水、火、風、金）と精神的意識との統一を象徴する印相の手振りを形成しています。

不動明王立像の複製（11世紀後半・円照寺）

不動の知恵の王である不動明王を描いたこの像の原品は、小浜市中心部の円照寺に祀られており、国の重要文化財に指定されています。不動明王は、左足を前に出して台座から降りようとするかのような躍動的な姿で描かれています。不動十九観像^{ふどうじゅうくわん}（十九の不動明王の可視化）の初期の作例で、ボリュームのある巻き髪や左肩にかかる三つ編み、唇に食い込む歯、片方の目を開けてもう片方の目を細め、剣となげなわを持っているなどの相が特徴的です。この複製には剣はありませんが、右手は柄を握るように配置されています。

不動明王坐像の複製（11世紀後半・常禅寺^{じょうぜんじ}）

この不動明王像の原品は、かつて常禅寺近くの山にある不動堂に安置されており、現在は境内の宝物庫に保管されています。原品は国の重要文化財に指定されています。この像は、海上安全祈願に応える「波を砕く不動」として古くから信仰されてきました。細身の体と浅く彫られた衣服のひだは、平安時代後期（794年～1185年）の京都で制作された作品の特徴です。作風は、仏教僧の円珍^{えんちん}（814年～891年）が中国から日本に持ち帰った仏像に基づいています。

観音菩薩坐像の複製（10世紀初頭、長慶院^{ちやうけいいん}）

この像は慈悲の菩薩である観音が蓮の花を持っている様子を表しています。原品は長慶院が運営する観音堂に安置されており、国の重要文化財に指定されています。記録によると、当初は久須夜ヶ岳^{くすやがだけ}の麓にある日光寺の本尊でした。伝説によれば、731年に奈良の高僧・行基^{ぎやうき}（668年～749年）が彫ったと伝えられています。16世紀初頭に日光寺は焼失しましたが、観音像は運び出され損傷を免れました。

馬頭観音坐像の複製（11世紀後半・馬居寺^{まごじ}）

この馬頭（馬の頭）観音の像の原品は、聖徳^{しやうとく}という皇子（聖徳太子^{しやうとくたいし}、574年～622年）が創建したとされる馬居寺の本堂に安置されています。この形式の観音の特徴は、8本の腕と3つの顔を持ち、冠として馬の頭を被っていることです。慈悲の菩薩としては異例の激しい表情ですが、一部の解釈では、これは信者を保護するために必要な強さを反映しているとされ、一方で密教では、悟りへの道を妨げる世俗的な考えに対する怒りの表現と見なされています。

阿弥陀如来坐像（10世紀・小浜市^{おばま}仏谷区^{ほとけだに}）

この小さな阿弥陀如来（無限の光と生の仏）は、若狭地方で彫られたものと思われます。この像のほとんどの部分は、檜^{いちょう}の一木造（一本の木から彫る）技法で作られています。肘から腕、膝から足は別の木材で作られています。仏谷村では古くからこの像が信仰され、村の宗教生活の中心的役割を果たしてきました。

地藏菩薩坐像（19世紀、上根来村^{かみねごり}）

この地藏菩薩は、上根来村の入り口にある地藏堂に守護神として祀られていました。この像は、僧侶の衣をまとい、半跏趺座し、右手に尺杖^{しゃくじやう}という杖を持った地藏を描いています。上根来は若狭と京都を結ぶ交易路網である鯖街道^{さばかいどう}（鯖の道）に面しており、交易や文化交流の拠点となりました。ここを通った旅人は、この地藏像に旅の安全を祈願したと考えられます。

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 季節と人々の祈り

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Seasonal Prayers and Traditions

Overview

Numerous festivals and rituals are held at shrines, temples, mountains, fields, seashores, and homes in the Wakasa region throughout the year. They range from rites performed for deities of the fields to lively parades celebrating good harvests and seaside rituals asking for calm waters. This diversity reflects the various lifestyles and occupations of the people, as well as the trade-driven influences that shaped the beliefs and customs in the region. Passing down these traditions from generation to generation, people mark the seasons much as their ancestors did.

Learn More

New Year's

The New Year is a time to cleanse oneself and the community of the misfortunes of the previous year and to pray for good luck in the next year. *Yumi-uchi* (bow-shooting) rituals are performed throughout Wakasa to make predictions for the year by firing arrows at a special target. In the *Toiwai* (or *Kitsunegari*) ritual, children acting as representatives of the deities go around the village chanting or pounding on doors with ritual mallets or sticks to bestow good fortune.

Spring and Summer

Many rituals performed during the rice-planting season are focused on praying for a bountiful harvest. From late May to early June, about 30 rural communities in Wakasa hold *Ta no Kami* (deity of the fields) festivals, with children carrying small portable shrines (*mikoshi*) through the village and fields. In some communities, other children

accompany the procession, chanting and striking the ground with ritual bamboo wands for purification.

Obon

In mid-August, the spirits of the ancestors are believed to return to visit their families, and rituals are held to welcome the spirits and later send them back safely. One of the rites most representative of Obon is the Rokusai Nenbutsu, a Buddhist memorial service that includes dancing and chanting *nenbutsu* prayers to the rhythm of bells and drums for salvation and rebirth. The Rokusai Nenbutsu was brought from Kyoto centuries ago and is still performed in some 20 communities in Wakasa with variations in dance style, age of participants, and costumes. In the Matsuage fire ritual, another tradition that originated in Kyoto, a large torch is set up in a field, and at nightfall men throw burning bundles of kindling at the torch, attempting to light it.

In seaside communities, boats often feature in Obon festivities. One example is the Shoraibune Okuri (“boat sendoff”) ritual, in which ancestral spirits are provided with ritual ships for their return to the spirit realm at the end of their visit with the living. About eight communities still practice this tradition, building the ships from bamboo, rice and wheat straw, grass, and other materials, and decorating them with flags and colorful streamers. The ships are filled with offerings and floated out into the ocean.

Fall and Winter

Many rituals are held during this time to give offerings to the deities in nature to thank them for a good harvest or protection. On the Oshima Peninsula, there is a religious practice called Niso no Mori, in which distant ancestors are venerated as deities at small, remote altars in the sacred areas of local woodlands or at the foot of mountains. This includes the Shimotsuki no Senzo (“worshipping ancestors in the eleventh month”) festival, in which special offerings are presented at the altars in the woods in late November or December. During the Yama no Kami festivals for the mountain deities, which are celebrated throughout the Wakasa region, similar offerings are put on small altars in the winter months. This is followed by a special feast, and working in the mountains on those days is forbidden.

Exhibition Items

The objects in this room represent the diverse seasonal festivals and rituals of the Wakasa region. The “New Year’s” section displays wooden mallets used by children to bring good luck to village households. The “Spring and Summer” section includes a portable shrine for a rice field deity. It is made mostly of bamboo, wheat, and straw and demonstrates how natural fibers are skillfully woven together to create shapes and decorations. The “Obon” section contains examples of the musical instruments used in the Rokusai Nenbutsu, such as the characteristic *kane* bells and handheld *shimedaiko* drums. The *shoraibune* ships are represented with a large, 2/3 scale model. In the “Fall and Winter” section, realistic food models illustrate offerings presented to ancient deities. In the case of the Yama no Kami festival, offerings include *okoze* stonefish, believed to appease a mountain goddess who is jealous of beautiful women, as well as 12 wooden tablets with drawings of women that are thought to be “substitutes” for sacrifices.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（季節と人々の祈り）

季節の祈りと伝統

概要

若狭地域では年間を通して、神社やお寺、山、畑、海辺、そして家庭などで、多数のお祭りや儀式が執り行われています。田の神々のために行われる儀式から、豊作を祝う賑やかな行列、海の平穏を祈る海辺の儀式まで、さまざまです。この多様性は、人々のさまざまなライフスタイルや職業、そしてこの地域の信仰や伝統を形作った交易主導による影響を表しています。これらの風習は、代々受け継がれ、人々はその先祖たちと同じように季節を刻みます。

もっと詳しく知る

新年

お正月の期間は、自身や集落の前年の厄を祓い、来たる年の幸運を祈る時期です。若狭の各地で行われる弓射ち（弓を射る）の儀式は、特別な的に向かって矢を放つことによって、その年を占いますトイワイ（またはキツネガリ）と呼ばれる行事では、神々に代わって子どもたちが村を回り、幸運を授けるために、唱えごとをしたり神事用の槌や棒で戸口をドンドンと叩いたりします。

春と夏

田植えの時期に行われるたくさんの神事は、五穀豊穡を祈願するものです。5月下旬から6月上旬にかけて、若狭町の約30の集落で、田の神（田んぼの神様）祭りが開催され、この祭りでは、子

もたちが小さな持ち運べる社（神輿）を担ぎ、集落や田畑を練り歩きます。他の子供たちが行列に同行し、お清めのために唱えながら儀式用の竹の杖で地面を打つ地区もあります。

お盆

8月中旬には先祖の霊が家族のもとに帰ると考えられており、霊を迎え、そしてその後、無事に送り返すために様々な儀式が行われます。お盆の最も代表的な儀式の一つは六斎念仏^{ろくさいねんぶつ}で、鐘と太鼓のリズムに合わせて救済と転生のための念仏の祈りを唱え踊ることを含む仏教法要です。六斎念仏は何世紀も前に京都からもたらされ、今でも若狭の約20の集落で、踊り方や参加者の年齢、衣装も様々に演じられています。同じく京都発祥の伝統である松上げという火の儀式では、大きな松明が野原に設置され、夕方になると男性たちが、松明に火を点けるために燃える薪の束を投げます。

海に面した集落では、船がしばしばお盆の祭りに利用されます。その一例が、精霊船送り^{しょうらいぶね}（船を送る）という儀式で、祖先の霊が生者との訪問の終わりに霊界に戻るための儀式用の船を提供します。おおよそ八つの集落が今でもこの伝統を実践しており、竹、稲わら、麦わら、草、その他の材料で船を造り、旗や色とりどりの吹流しで船を飾ります。船はお供え物で満たされ、海に漂って行きます。

秋と冬

この季節には、自然の神々へ豊作や保護に感謝するためのお供え物を捧げるために、たくさんの儀式が行われます。大島半島では、ニソの杜^{もり}と呼ばれる宗教的な行事があり、遠い祖先たちが神として、地元の森の聖域や山のふもとにある離れた小さな祭壇で祀られます。霜月の先祖祭（11月に先祖を崇拝する）がその風習に含まれ、11月下旬または12月に祭壇で特別なお供え物が奉納されます。若狭地方全体で祝われる山の神々のための山の神祭の間、同様のお供え物が冬の期間に、小さな祭壇に置かれます。これに続いて特別なごちそうがあり、その日は山での作業は禁止されています。

展示品

この部屋の品物は、四季折々に開催される若狭地方のさまざまな祭り、行事を表しています。「お正月」のコーナーには、子どもたちが村の家庭に幸運をもたらすために使用する木槌が展示されています。「春と夏」のコーナーでは、田の神のための神輿などがあります。この神輿のほとんどは竹や小麦、わらでできており、天然の繊維がどのように巧みに編まれ、形や装飾が作られているかが示されています。「お盆」のコーナーでは、特徴的な鐘や手持ちできる締め太鼓^{しめだいこ}という太鼓など、六斎念仏の楽器の例が紹介されています。精霊船という船は、大きな2/3スケールの模型で表現されています。「秋と冬」のコーナーでは、リアルな食品模型で、古代の神々に捧げられる供物について説明しています。山の神まつりの場合は、お供え物は、美しい女性に嫉妬する山の女神をなだめると信じられているオコゼや、いけにえの「身代わり」と考えられる女性の絵が描かれた12枚の木簡などがありま

す。

002-004

O no Mai Ritual Dances

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 王の舞と村々の神事

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

O no Mai Ritual Dances

Overview

The O no Mai (literally “King’s Dance”) is a ritual commonly performed by a single male dancer wearing a long-nosed mask and wielding a halberd. The tradition is said to have spread from the former capitals of Nara and Kyoto between the eleventh and the fourteenth centuries. Active trade between port towns along the Sea of Japan and the metropolitan areas likely spurred the cultural exchange that brought the practice to Wakasa. At present, seventeen O no Mai dances are preserved in the region and are usually performed during spring festivals. The form, length of the dance, number of participants, and costumes vary by location.

Learn More

A Tradition from a Thousand Years Ago

The origins and purpose of O no Mai dances have been lost to time, but the tradition likely began in the eleventh century at religious sites in Nara and Kyoto. The red color of many O no Mai costumes is associated with repelling evil, and several shrine legends related to the dance tell of a hero defeating an enemy, which suggests that the rituals were possibly performed to ward off disasters and misfortune.

Connection to Bugaku and Gigaku Performances

O no Mai may have origins in bugaku, an ancient type of dance that was traditionally performed at the imperial court or for the nobility. Bugaku was brought from mainland Asia in the sixth century in the process of trade and cultural exchange and developed into a distinctive Japanese art form by approximately the eighth century. Similarities can be found between O no Mai and ancient bugaku pieces such as *Sanju* and *Kitoku*,

in which the dancers are thought to represent military leaders celebrating a victory. O no Mai may also have been influenced by *gigaku*, an even older type of masked dance from mainland Asia that gradually disappeared as bugaku became more popular. Some researchers suggest that the appearance of the O no Mai dancer in a long-nosed mask originated from the procession that took place before *gigaku* performances, led by a similarly masked actor whose role was to ritually purify the path.

The Role of Private Agricultural Estates

The O no Mai tradition probably came to Wakasa via trade routes connecting the region to the old capitals. It was sustained due to the presence of *shoen*, private agricultural estates that were maintained in distant provinces by court nobles and influential shrines and temples. Such estates were major contributors to the spread of Kyoto and Nara culture in Wakasa, and most of the surviving O no Mai dances are performed at Shinto shrines located on former *shoen* lands.

Variations of O no Mai

There is substantial variation among the seventeen O no Mai dances preserved at shrines across the Wakasa region. While some dances only last two minutes, others can go on for up to an hour. Most are performed by a single male dancer, but some involve multiple participants. In some cases, the performers are adults, while in others, they are school-age boys. Though the overarching theme of the O no Mai ritual is thought to be warding off evil, at certain shrines the dance serves as an offering to the deities when asking for specific blessings, such as a good harvest or bountiful catches of fish. The differences illustrate how O no Mai changed over time to reflect the folklore of each area, as well as the needs and lifestyle of the villagers.

Exhibition Items

The mannequins display a variety of costumes, masks, and halberds, illustrating the differences between the seventeen O no Mai dances still practiced in Wakasa. Photos of the dances in front of the mannequins present the range of costumes in more detail. Video recordings are played on the screen, showing the slow, stylized movements of the ritual performance. A red robe, an elaborate phoenix headdress made with peacock feathers, and a long-nosed mask from the Edo period (1603–1867) that are displayed in a glass case were all once used in the O no Mai at Mimi Jinja Shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（王の舞と村々の神事）

王の舞という儀式的な舞

概要

王の舞（文字通りに言うと「王の舞」）は、一般的に、長い鼻の仮面を着け、薙刀をふるう一人の男性が舞う儀式です。この伝統は、11世紀から14世紀にかけて、日本の昔の首都である奈良と京都から広まったと考えられています。日本海の港町と首都圏との活発な交易が、若狭にその風習をもたらした文化交流を促進したものと思われます。現在、この地域では17の「王の舞」が保存されており、春の祭りの際によく行われます。舞の形式や長さ、参加人数、衣装は場所によって異なります。

もっと詳しく知る

千年前からの伝統

王の舞の起源と目的は時が経つにつれて失われましたが、伝統は奈良と京都の宗教的な場所で11世紀に始まった可能性があります。多くの王の舞の装束の赤色は邪気をはじくものであり、いくつかの神社のこの舞にまつわる伝説は、英雄が敵を倒すことを物語っており、このことは、この儀式が災難や厄除けのために舞われている可能性があることを示唆しています。

舞楽、伎楽との関わり

王の舞は、宮廷や貴族のために伝統的に演じられていた古代の舞のひとつである「舞楽」^{ぶがく}に由来する可能性があります。舞楽は、貿易や文化交流の過程で6世紀にアジア大陸からもたらされ、8世紀頃に独特の日本的な芸術形式へ発展しました。王の舞と、散手^{さんじゅ}や貴徳^{きとく}などの舞手が勝利を祝う軍の司令官を表していると考えられている古代の舞楽作品との間には類似点が見られます。王の舞はまた、舞楽の人気が高まるにつれて次第に姿を消したアジア大陸のさらに古いタイプの仮面舞踊である伎楽の影響を受けている可能性があります。一部の研究者は、鼻の長い面を着けた王の舞の舞手の姿は、似た面を着けて道を儀式的に浄化する役割を果たした演者が率いた、伎楽^{ぎがく}の公演の前に行われた行列に端を発しているとし唆しています。

私有農園の役割

王の舞の伝統は、恐らくこの地方と昔の都を結ぶ交易路を通じて伝わったものと思われます。王の舞の伝統は、遠い地方にいる公家や有力な神社仏閣によって維持された荘園（私有農地）の存在によって維持されました。このような荘園は京都と奈良の文化を若狭へ広めることに大きく貢献し、そして現存する王の舞のほとんどが、かつての荘園の土地にあった神社で行われています。

王の舞のバリエーション

若狭地方の神社に保存されている17の王の舞には、かなりのバリエーションがあります。2分間しか続かないダンスもあれば、最長1時間続くダンスもあります。多くは一人の男性の踊り手によって演じられますが、中には複数の参加者が関わるものもあります。出演者は大人の場合もあれば、学齢期の少年の場合もあります。王の舞の儀式的な目的は厄除けと考えられていますが、神社によってはこの舞は豊作や魚介類の豊漁などの特定の御利益を祈願する時に神様へ奉納されます。この違いは、各地域の民俗と村人のニーズや生活様式を反映して、王の舞がどのように変化したかを示しています。

展示品

マネキンには、さまざまな衣装、仮面、鉾が展示されており、若狭でまだ実践されている17の王の舞の違いが示されています。マネキンの前にある舞の写真は、衣装の幅をより詳細に示しています。ビデオ録画がスクリーン上で再生されており、この儀式的な舞のゆっくりとした定型化された動きを示しています。ガラスケースの中にある、赤い羽織、孔雀の羽で作られた精巧な鳳凰の頭飾り、江戸時代（1603年～1867年）の鼻の長い仮面は全て、かつては彌美神社の王の舞で使用されていました。

【タイトル】若狭歴史博物館 / 町の祭礼と華やかな芸能
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Town Festivals and Performing Arts

Overview

In the Edo period (1603–1867), Obama flourished as a port and a castle town. During that time, religious influences and a general increase in wealth contributed to the development of both elegant and lively festivities that contrasted with the simpler traditions observed in rural areas. Large floats, complex dances, and rich costumes became characteristic for the town festivals of Obama, some of which have been held for centuries and continue annually to this day.

Learn More

Urban Festivals in Obama

Celebrations in towns like Obama were larger and more extravagant than festivals held in primarily agricultural and fishing communities. Major holidays such as the New Year, Setsubun (the day before the beginning of spring), and Obon honoring the spirits of ancestors in the summer were especially popular. Energetic dances and captivating performances were held both to worship the deities and for entertainment. Wealthy merchants made generous donations for the events, and a great number of people participated in the celebrations. Thus, Obama festivals could be grand, elaborate affairs that lasted for days and included religious services, artistic performances, and general merrymaking.

Influence of Other Regions

The festivals of Obama were often influenced by the culture and traditions of Kyoto, as Obama was a port town that specialized in maritime trade and transportation of goods to the capital of the time. When the Sakai family of the Kawagoe domain

(present-day Saitama Prefecture) became lords of the Obama domain in the early seventeenth century, they brought with them performance styles that were popular in eastern Japan. One of these, the Unpin Jishi lion dance, is still performed in one of Obama's wards.

Obama Gion Festival and Hoze Festival

A prime example of the grand urban festivals of old Obama was the Gion Festival of Hiromine Jinja Shrine. The Obama Gion Festival picture scroll from the Edo period owned by the shrine depicts a lively procession of floats, musicians, dancers, costumed participants, and spectators, demonstrating the impressive scale of the festival at the time. The influence of the famous Gion Festival of Kyoto can be seen in the large floats, festival music, and pole-wielding *bofuri* dancers. Some of the performance aspects of the Obama Gion Festival have become part of the Hoze Festival held by Hachiman Jinja Shrine in mid-September. Neighborhood troupes and decorated floats travel through the city streets and perform folk arts, honoring local traditions that have been passed down for several hundred years.

Exhibition Items

This section primarily displays mannequins dressed in costumes that are used in urban festivals of the Wakasa region. Most of them represent the performers who participate in the Hoze Festival. The *bofuri* pole wielder wears an exotic outfit and a head covering made of long, pale hair; the *odaiko* drummer is dressed in a distinctive yellow kimono with black patterns. The flute player from the kagura music troupe wears a yellow kimono with a sedge hat that is lined with dangling charms and hides the performer's face behind a red veil. The Unpin Jishi dancer wears a lion headdress topped with dark feathers. Other costumes include the Red Yase, a figure said to banish misfortune by chasing people with the ritual weapon it holds, and Okobe, a comical figure with a large head made from a fish basket, who appears as entertainment alongside some *bofuri* groups. On the wall behind the mannequins are enlarged images from the illustrated scroll depicting the Gion Festival as it was celebrated in Obama some 150 years ago.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（町の祭礼と華やかな芸能）

町の祭り・芸能

概要

江戸時代（1603年～1867年）、小浜は港と城下町として栄えました。この間、宗教的影響と全体的な富の上昇により、農村部で見られるより簡素な伝統とは対照的に、優雅で活気のある祝祭が発展しました。大きな山車、複雑な踊り、豪華な衣装は、小浜の町の祭りの特徴となりました。その一部は何世紀にもわたって行われ、今でも毎年続いています。

もっと詳しく知る

小浜の町の祭り

小浜のような町でのお祝いは、主に農村や漁村で開催されたお祭りよりも大きく、より贅沢でした。正月や節分（春が始まる前の日）、夏に祖先の霊をたたえるお盆などの主要な祝祭日は特に人気がありました。神々への信仰と娯楽の両方のために、活気に満ちた舞や魅惑的なパフォーマンスが行われました。裕福な商人は祭りのために気前よく寄付を行い、多数の人々が祭りに参加しました。こうして、小浜の祭りは、宗教的な奉仕や芸術的なパフォーマンス、全体的に賑やかな雰囲気を楽しむことなどがある、壮大で手の込んだ行事になっていた可能性があります。

他地域からの影響

小浜は海上交易と当時の首都への物資の輸送に特化した港町だったので、その祭りはしばしば京都の文化と伝統の影響を受けました。また、17世紀初頭に川越（現在の埼玉県）の酒井家が小浜藩主となった際、彼らは東日本で流行していた芸能の形式を持ち込みました。その一つである雲浜獅子^{うんぴんじし}という獅子の舞は、今でも小浜市のある地区で演じられています。

小浜の祇園祭と放生祭

昔の小浜の都会的なお祭りの代表的な例は、廣嶺神社^{ひろみね}の祇園祭でした。廣嶺神社所蔵の江戸時代の小浜祇園祭の絵巻には、山車や囃子、踊り子、衣装を着た参加者、見物人などによる賑やかな行列が描かれており、当時の祭りの大きな規模を物語っています。有名な京都の祇園祭の影響は、大きな山車、祭りの音楽、棒振り^{ぼうぶり}という棒を振る舞の踊り手などに見ることができます。小浜の祇園祭の演目の一部は、9月中旬に八幡神社^{はちまん}で行われる放生祭^{ほうぜ}の一環となりました。近隣の一団や飾り付けられた山車が街の通りを行き来し、数百年にわたって受け継がれてきた地元の伝統を称える民俗芸能を披露します。

展示品

このセクションでは主に、若狭地方の都市部の祭りで使われる衣装を着たマネキンを展示しています。それらのほとんどは、放生祭に参加する演者を代表しています。棒振りという棒を振る人は、異国風の衣装を着て、長い薄い色の毛でできた頭飾りを着けており、大太鼓^{おおだいて}という太鼓手は黒い模様のある特徴的な黄色の着物を着ています。神楽楽団の横笛奏者は、黄色い着物に、端に飾りがぶら下がった菅笠を合わせ、赤いベールで顔を隠しています。雲浜獅子の踊り手は、頂上に黒

い羽がある獅子の頭飾りを身に着けています。他の衣装には、持っている儀式的な武器で人々を追いつ立てることで不幸を追放すると言われている赤い夜叉^{やせ}と、魚籠で作られた大きな頭を持つコミカルな人物であるおこべがあり、これらはいくつかの棒振りの集団と一緒に客を楽しませるものとして登場します。マネキンの後ろの壁には、約150年前に小浜で祝われた祇園祭を描いた絵巻物の拡大された絵が描かれています。

002-006

Torihama Shell Midden and Reinan Area in the Jomon Period

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / トリハマ貝塚と嶺南の縄文時代

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Torihama Shell Midden and Reinan Area in the Jomon Period

Overview

The Jomon period (approximately 13,000–400 BCE) was characterized by the development of clay pottery and increasingly settled patterns of living in addition to the hunter-gatherer lifestyle. Over 60 archaeological sites from that time have been discovered in the Reinan area in the southwestern part of Fukui Prefecture along Wakasa Bay. Excavations of a prehistoric settlement and waste dumping site in Torihama, which became known as the Torihama Shell Midden, revealed remains of dwellings, storage pits, and a remarkable quantity of well-preserved artifacts and organic matter from the first half of the Jomon period. These finds provide invaluable insight into the lifestyle of the Torihama settlement's inhabitants, who made use of plentiful resources from the nearby forests, lakes, rivers, and sea.

Learn More

Discovery and Origin of the Torihama Shell Midden

The shell midden was discovered deep underground in the Torihama neighborhood of the town of Wakasa, where the Hasu and Takase Rivers meet. A lot of well-preserved remains were found at the site, which was covered with cold groundwater and calcium from shells, protecting it from oxidation. Judging from the remains, the inhabitants of the settlement harvested and processed mollusks, edible plants, and other types of food available depending on the season, discarding the shells and other waste at a lakeshore, which gradually formed the midden.

Plant and Animal Matter

The plant and animal remains from the midden show that people lived in a relatively permanent settlement, which contrasts with the migratory hunter-gatherer lifestyle that was predominant prior to the Jomon period. The nearby lakes, sea, and forests with abundant flora and fauna ensured the availability of food throughout the year. Over 75 species of edible plants and animals were identified in the midden, including boar, deer, shellfish, nuts, and berries.

Man-Made Artifacts

Dugout canoes, bows, axe handles, wooden containers, and other crafted objects were discovered at the Torihama Shell Midden site. Some of the objects were coated with lacquer. Other finds included twisted and braided rope, fragments of woven baskets made of plant fiber, animal-bone needles, and a mallet that may have been used to soften fiber. Excavations also produced a wide array of personal accessories, such as combs, hair ornaments, earrings, bracelets, and pendants made of wood, stone, tusks, deer antlers, shells, clay, and other materials.

Pottery Items

Scientific studies determined that the pottery excavated from the layers of the Torihama Shell Midden dates from around 11,700 to 3,800 BCE. Items from approximately 4,300 to 3,800 BCE are particularly good examples of earthenware that illustrate gradual changes in shapes and designs. The majority of the pottery discovered at Torihama was covered with soot and charred food remains, and analysis demonstrated that the vessels were used for cooking seafood and plants.

Exhibition Items

A large collection of earthenware from the Torihama Shell Midden is displayed in chronological order, making it easy to see the differences in design and form. Many of the items are deep vessels with thin walls, wide mouths, and relatively narrow bodies. The decorative patterns in the clay were made with sharp tools or fingernails.

The dugout canoe is the first of two that were excavated in 1981–1982. The body of the dugout is made from a large Japanese cedar tree, thought to have been hollowed out by burning and then carving with stone tools. Among the fragments of rope and

cloth on display, the thin, two-strand rope was found in the layer dating to approximately 9,500 BCE. Digging tools made of deer antlers, stone axes, wooden axe handles, and bone spearheads that were used for fishing are a few examples of the tools of Jomon people. The various organic remains from the Torihama Shell Midden are in good condition and include animal and fish bones, nuts, and shells that give the site its name.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（トリハマ貝塚と嶺南の縄文時代）

縄文時代の鳥浜貝塚と嶺南地域

概要

縄文時代（およそ紀元前13,000年～紀元前400年）は、土器の発達と、狩猟採集民の生活様式に加えて次第に定住生活が発達したことによって特徴付けられました。福井県南西部の若狭湾沿いにある嶺南地域では、当時の遺跡が60以上発見されています。鳥浜貝塚^{とりはま}として知られるようになった、鳥浜にある先史時代の集落とゴミ捨て場の遺跡の発掘調査では、住居や貯蔵用の穴、縄文時代前半の保存状態の良い遺物と有機質遺物が大量に発見されました。これらの発見は、近くの森、湖、川、海からの豊富な資源を活用した鳥浜の集落の住民たちの生活様式について貴重な洞察をもたらしています。

もっと詳しく知る

鳥浜貝塚の発見と由来

この貝塚は、若狭町鳥浜の、はす川と高瀬川^{たかせ}が合流する地域の地下深くで発見されました。冷たい地下水と貝殻からのカルシウムで覆われ、酸化から守られたその遺跡からは、よく保存された遺物が多数発見されました。遺物から判断すると、集落の住民は、季節ごとに手に入る貝類や食べられる植物、その他の食べ物を獲得して加工し、貝殻やその他のゴミを湖の水辺に捨て、それによって次第に貝塚が形成されたと考えられています。

動植物

貝塚から出た動植物の遺物は、人々が比較的に恒久的な集落に住んでいたことを示しており、それは縄文時代より前の時代に優勢だった移動性の狩猟採集生活とは対照的です。動植物が豊富な近くの湖や海、森は、一年中食料の入手を確かにしていました。イノシシ、シカ、貝類、ナッツ、ベリーなど、75種以上の食用の植物や動物が貝塚で確認されました。

人工物

鳥浜貝塚遺跡では、丸木船、弓、斧の柄、木製の容器などの人工物が発見されました。その中に

は漆が塗られたものもありました。その他の発見には、よったり組んだりした縄や、植物繊維でできた編みかごの破片、動物の骨でできた針、繊維を柔らかくするために使用されたかもしれない木槌などがありました。また、木や石、牙、鹿角、貝、粘土などの材質で作られた、櫛や髪飾り、イヤリング、ブレスレット、ペンダントなど、さまざまな装飾品が発掘されました。

土器

科学的な研究により、鳥浜貝塚の地層から出土した土器は、紀元前11,700年頃から紀元前3,800年頃のものであることが判明しました。紀元前4,300年頃～紀元前3,800年頃の品は、特に、土器の形状とデザインがどのように徐々に変化したかを示す良い例です。鳥浜で発見された土器の多くは、すすや焦げた食べ物の残骸で覆われており、分析の結果、魚介類や植物の調理に使用されたことが判明しました。

展示品

鳥浜貝塚から出た土器の膨大なコレクションは、時系列に沿って並べられており、意匠や形状の違いが分かりやすくなっています。その多くは、薄くて口が広く、比較的に胴部が細い、深鉢です。その装飾模様は、鋭利な道具や爪で刻まれました。

丸木舟は、1981年から1982年にかけて発掘された2隻のうちの1隻目です。船体は日本杉の大木を使って作られており、焦がしてその後石器で彫ることによって、中をくり抜いたと考えられます。展示されている縄や布の破片の内、細い2本撚りの縄は、紀元前約9,500年前の地層から発見されたものです。鹿の枝角で作られた掘削道具や石斧やその木製の斧の柄、漁に使われた骨の槍先などは、縄文人の道具の数少ない例です。鳥浜貝塚のさまざまな有機質遺物は良好な状態で、動物や魚の骨、木の実、この場所の名前の由来となった貝殻などが含まれています。

002-007

Wakasa and Tsuruga Regions in the Yayoi Period

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 弥生時代の越前敦賀と若狭

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wakasa and Tsuruga Regions in the Yayoi Period

Overview

The Yayoi period (400 BCE–300 CE) was marked by a shift from a hunter-gatherer society to an agricultural society. During that time, paddy-field rice cultivation methods and bronze and iron metalworking were introduced from mainland Asia to the northern part of the island of Kyushu, from which they spread to the rest of Kyushu and throughout the islands of Honshu and Shikoku. Several important archaeological sites dating to the Yayoi period have been discovered on the Obama and Tsuruga Plains, giving valuable insight into the societal, technological, and cultural developments that occurred in the area, including the gradual emergence of a class society. Some of the items from excavated settlements provide evidence of connections with other regions.

Learn More

Yayoi Pottery

Compared to examples from the Jomon period (13,000 BCE–400 BCE), Yayoi ware was generally less decorative, with clean, functional shapes. The pottery-making process remained much the same, coiling long rolls of clay in a circle and stacking them one on top of another to form the desired object. The surfaces of vessels were then smoothed, and sharp tools were used to incise simple patterns on the outside. However, the variety of pottery types increased, reflecting more diverse purposes, and included cooking pots, storage jars, bowls, footed trays, and more.

Iron and Bronze Items from Mainland Asia and the Development of Metalworking

Various iron and bronze objects were introduced to the Japanese archipelago during this period, including weapons and ritual implements, such as bronze mirrors and bells. Yayoi craftsmen subsequently developed metalworking techniques to make their own weapons, tools, ritual implements, and other objects from imported raw materials. At that level of technology, bronze proved more durable than iron and was considered more valuable. It is believed that the use of bronze items both as weapons and as symbols of status contributed to the development of social stratification.

Dotaku Bronze Bells and Other Ritual Implements

Among the most distinctive cast bronze items created in the Yayoi period were ritual bells called *dotaku*. Their surfaces had various patterns, some of which represented animals and people. Evidence demonstrates that some of the *dotaku* were indeed used as bells, but others were not. Little is confirmed about the exact purpose of the *dotaku* bells, but it is surmised that they were used in ceremonies to pray for bountiful harvests. Other items assumed to have been used for ritual purposes are weapon-shaped stone artifacts, which were made by grinding the stone into shapes similar to bronze and iron swords and dagger-axe blades imported from the Korean Peninsula.

Yoshiko Site in Tsuruga

The Yoshiko site, established sometime in the mid-Yayoi period, is located on the southeastern edge of the Tsuruga Plain. The northern part of the site was residential, evidenced by remains of pit dwellings, as well as flat-land and raised-floor buildings constructed using wooden pillars that were dug into the ground. The southern part was a cemetery that contained simple grave pits and large, rectangular burial sites enclosed by ditches, which were supposedly used to inter members of influential families. The latter burial style is characteristic of the Yayoi period. Artifacts excavated at the site include pottery, ground-stone tools, ritual implements, tubular beads at various stages of completion, and bead-making tools.

Fuchu-Ishida Site in Obama

Many significant archaeological discoveries were made at the Fuchu-Ishida site, which was excavated in 2005–2008. These include the first ditch-enclosed rectangular burial site found in the Wakasa area and the first wooden coffins discovered in the Hokuriku region. About 120 wooden pillars from 69 structures were excavated at the site, providing valuable information about the architecture of Yayoi-period pillar-based

buildings. Wells with a basic water purification system at the bottom were found in the southern part of the settlement. In addition, the Fuchu-Ishida site was the first location in Fukui Prefecture that contained comma-shaped bronze ornaments similar to those typical for Yayoi sites in the Kansai region, as well as hourglass-shaped clay tablets found predominantly in the Chugoku region in the west of Honshu and in Shikoku.

Exhibition Items

This section displays Yayoi artifacts excavated in the Wakasa and Tsuruga regions, reflecting the emergence of new tools, technologies, and pottery items. A wooden coffin from the Fuchu-Ishida site dates to approximately 300–200 BCE and is made from large planks of Japanese cedar. The bottom plank has a square-shaped hole thought to serve as a handle for bearing the coffin. The two sets of pots, jars, footed trays, and other earthenware excavated from the Fuchu-Ishida site and the Yoshiko site show differences in pottery forms that reflect influences from different regions on two Yayoi settlements that were located relatively close to each other.

The stone short swords discovered at the Yoshiko site were created based on metal swords brought from the Korean Peninsula. Various arrowheads on display represent the gradual development of production methods and materials. The leaf-shaped and triangular stone arrowheads made by chipping off parts of the stone illustrate an older technique. The triangular arrowheads shaped by grinding show a new method that emerged during the Yayoi period. Finally, the bronze arrowhead is an example of metalworking, the newest technology at the time. The steps in the process of making jasper tubular beads are demonstrated using artifacts from the Yoshiko site. The discovered tools and numerous beads at various stages of completion suggest that bead-making was the trade of some of the site dwellers. The fragment of a bird figurine is another notable item from the Yoshiko site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（弥生時代の越前敦賀と若狭）

弥生時代の若狭・敦賀地方

概要

弥生時代（紀元前400年～300年）は、狩猟採集社会から農耕社会へ移行したことが特徴です。この時代に、水田稲作法や、青銅や鉄の金属加工技術がアジア大陸から九州北部に伝えら

れ、そこからそれらは九州南部へ広がり、本州と四国へと広がりました。弥生時代のいくつかの重要な遺跡が小浜平野と敦賀平野で発見されており、階級社会が徐々に出現してきたことなど、この地域で起こった社会的、技術的、文化的発展に関する貴重な洞察を提供しています。発掘された集落からの品物の中には、他地域との繋がり証拠を提供するものもあります。

もっと詳しく知る

技術の進歩

弥生土器

縄文時代（紀元前13,000年～紀元前400年）の例と比較すると、弥生土器は一般的に、装飾が少なく、すっきりとした機能的な形でした。土器の成形過程はほとんど同じままで、長い粘土の紐を輪にして積み重ね、目的の物を形成しました。容器の表面は滑らかにされ、鋭い道具を使って外側に簡単な模様が刻まれました。しかし、より多様な目的を反映して陶器の種類は増加し、調理用のかめ、保存用の壺、鉢、脚付きの坏などがありました。

アジア大陸からの鉄・青銅製品と金属加工の発展

この時代、日本列島に、武器や儀式用の道具（銅鏡や銅鐸など）など、さまざまな鉄や青銅の物品がもたらされました。その後、弥生時代の職人たちは、輸入された原料から武器や道具、祭具などの品物を作成するために、金属加工技術を発達させていきました。

銅鐸とその他の祭具

弥生時代に作られた青銅の鋳物で最も特徴的なのが、銅鐸と呼ばれる儀式用の鐘です。それらの鐘の表面にはさまざまな文様があり、時には動物や人物が描かれていました。銅鐸は実際に鐘として使われたものもあれば、そうでないものもあったということを示す証拠もあります。銅鐸の正確な用途について、確認されていることは少ないのですが、豊作を祈る儀式に使われたと推測されています。その他に、朝鮮半島から輸入された青銅や鉄の剣と戈の刃の形を模して、石を研磨して作られた武器型の石器も祭祀用と推定されています。

敦賀の吉河遺跡

弥生時代中期にできた吉河遺跡は、敦賀平野の南東の端に位置しています。遺跡の北部は居住域であったことが、竪穴式住居や、地中に刺された木造の柱を使って建てられた床が地面または地面よりも高い建物の遺跡によって証明されています。南部は墓域で、簡易な墓穴と、影響力のある一族を収容するためのものと考えられる大きくて溝で区画された方形の墓がありました。後者の埋葬形式は、弥生時代に特徴的だった様式でした。この場所で出土した遺物には、土器や磨製石器、祭器、様々な製作段階にある管玉、そして管玉を作るための道具類が含まれていました。

小浜の府中石田遺跡

2005年～2008年に発掘が行われた府中石田遺跡では、多くの重要な考古学的発見がありました。この発見には、若狭地域で最初に発見された溝で区画された方形の墓と、北陸地方で最初

に発見された木製の棺が含まれていました。69棟の構造物に使われた木製の柱約120本がこの遺跡から出土し、弥生時代の柱を基礎にした建物の構造に関する貴重な資料が得られました。集落の南部には、底部に基本的な浄水装置を備えた井戸がありました。加えて、関西地方の弥生遺跡に典型的なタイプに似た巴形銅器と、主に本州西部にある中国地域と四国で見つかった分銅形土製品が、福井県で初めて府中石田遺跡で発見されました。

展示品

このセクションでは、若狭と敦賀地方で発掘された、新しい道具、技術、土器の形式の出現を反映した弥生時代の遺物を展示しています。府中石田遺跡から出た木棺はおおよそ紀元前300年～紀元前200年のもので、大きな杉板を使って作られています。底板には棺を持つための取っ手と思われる四角い穴が開いています。府中石田遺跡と吉河遺跡から出土した二組の、かめ、壺、脚付きの坏、そしてその他の土器は、比較的に近接したこの2つの弥生集落それぞれが、他の地域から受けた影響を反映した土器の形態の違いを示しています。

吉河遺跡で発見された石の小刀は、朝鮮半島からもたらされた金属の刀に基づいて作られました。展示されているさまざまな矢じりは、製造方法と材料の段階的な発展を表しています。石の一部を削って作った葉形や三角形の石鏃は、古い技法を示しています。研ぎ出された三角形の鏃は、弥生時代に出現した新しい技法を示しています。最後に、青銅の矢じりは、当時の最新技術である金属加工の一例です。吉河遺跡の出土品を使って、碧玉の管玉を作る工程を紹介しています。発見された道具類と、完成までのさまざまな段階にある多数の管玉は、管玉製造がこの遺跡の一部の住人たちの職業であったことを示唆しています。鳥の形をした土製品の欠片は、吉河遺跡から出土したもう一つの注目すべき品物です。

002-008

Wakasa and Tsuruga Regions in the Kofun Period

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 若狭湾岸の古墳時代

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wakasa and Tsuruga Regions in the Kofun Period

Overview

During the Kofun period (ca. 250–552), the Yamato court rose to power in present-day Nara and Osaka Prefectures, gradually expanding its influence over clans that ruled in more remote regions. The name of the historical period comes from the large burial mounds (*kofun*) that were built for emperors and members of ruling elites, such as clan leaders and other prominent figures. The *kofun* served both as tombs and as displays of power and political status. The body of the deceased was usually placed in a stone burial chamber, and an earth mound was formed over it. The deceased was accompanied by grave goods such as weapons, horse tack, agricultural and other tools, jewelry, and ritual implements. The keyhole-shaped *kofun* built across the Japanese archipelago are considered symbols of Yamato power. A number of *kofun* were also erected in the Wakasa and Tsuruga regions, and the excavation and analysis of burial mounds built between the mid-fifth and mid-sixth century suggest that the area played an important part in relations between the Yamato court and the ancient kingdoms of the Korean Peninsula.

Learn More

Kofun Culture and the Connection to the Yamato Court

Most *kofun* were keyhole-shaped, double-rectangle, round, or square. It is believed that the shapes and sizes of the mounds reflected the political and social hierarchy established by the Yamato court. In the Wakasa and Tsuruga regions, the existence of about 20 keyhole-shaped *kofun* and several large round *kofun* has been confirmed. These are considered to have been tombs of powerful clan chiefs who were related or otherwise strongly connected to the Yamato. The burial mounds built in Wakasa

between the mid-fifth and the early sixth century show the adoption of horizontal stone chambers that first emerged on the island of Kyushu, as well as the use of grave goods originating from the Korean Peninsula. This is thought to reflect close connections between Wakasa clans and the people of northern Kyushu and the Korean Peninsula and may indicate the clans' involvement in diplomatic relations between the Yamato court and the old kingdoms of Korea.

The Largest Kofun in the Wakasa Area

Many of the particularly large *kofun* in the Wakasa and Tsuruga regions are located in the Kita River basin between the present-day city of Obama and the town of Wakasa. The seven largest burial mounds erected for Wakasa clan leaders in the area were keyhole-shaped and measured from 63 to 100 meters in length. The biggest of these is Jonozuka Tumulus, which dates to the early fifth century. The last large *kofun* of a powerful clan leader in the area was Maruyamazuka Tumulus, a round mound about 50 meters in diameter that was built in the mid-sixth century (but no longer exists). Most of these *kofun* were two- or three-tiered mounds delineated by clay objects called *haniwa* and surrounded by moats; the slopes of the mounds were covered with stones. These features reflect the adoption of the *kofun* style of Yamato rulers and clan members.

Grave Goods

Similar to other regions, grave goods discovered in the *kofun* in Wakasa include mirrors, bronze decorations, jewelry, swords and other weapons, horse tack, various tools, and pottery. For example, items found in Nishizuka Tumulus, the late fifth-century tomb of a clan chief located in the central part of Wakasa, include gold earrings, bronze mirrors, gilt bronze belt fittings, and silver bells, some of which were made on the Korean Peninsula. These valuable objects (particularly the belt decorations) were symbols of status and power, suggesting that the person buried in Nishizuka Tumulus was a prominent figure who played a role in the relations between the Yamato court and the kingdoms of the Korean Peninsula.

Sue Pottery

Early in the fourth century, a type of unglazed, reddish-brown pottery called Haji ware was developed in Japan. The clay vessels were shaped by hand and fired at 700-800°C, as in the Yayoi period (400 BCE–300 CE). However, in the first half of the fifth

century a new pottery-making technology was imported from the Korean Peninsula, in which clay items were shaped on a wheel and fired at 1,000°C in “tunnel” kilns built into a hillside. This produced more durable, less porous, gray-colored pottery called Sue ware. In the mid-fifth century, ritual objects used on the outside of *kofun* mounds began to include Sue pottery, and by the early sixth century, grave goods would contain large amounts of Sue ware together with smaller amounts of Haji ware.

Exhibition Items

The large collection of grave goods on display was discovered at the site of Shishizuka Tumulus, a 34-meter keyhole-shaped burial mound built for a local leader in the early sixth century in the Mihama area of Wakasa. Included are many kinds of Sue pottery, such as pots, tall decorated jars, jar stands, footed trays and tray lids, a drink-serving jar with a hole for inserting a pipe, and horn-shaped drinking vessels that are particularly rare examples of Sue ware. Remains of a kiln that produced Sue pottery for the Shishizuka Tumulus were discovered on the nearby mountainside. Other grave goods include weapons such as a long sword, a knife with a deer-horn handle, and an iron arrowhead, as well as parts of horse tack and iron tools such as a curved sickle, an axe, and tongs. The ornament on display was assembled from round, tubular, and comma-shaped *magatama* beads that were discovered in the burial chamber; the beads were originally parts of several necklaces. The large cylindrical *haniwa* was restored from fragments found at Shiroyama Tumulus, a tomb of a Wakasa chieftain built in the first half of the fifth century.

The cross-section *kofun* model represents the keyhole-shaped Mukaiyama Tumulus No. 1, built in the mid-fifth century. Its excavation uncovered a horizontal burial chamber corresponding to an older burial style used in northern Kyushu, which led to the conclusion that Wakasa was one of the first regions on the island of Honshu to adopt such chamber construction. The front (square) part of the *kofun* had a rectangular pit that contained weapons, suggesting that the person buried in the stone chamber was a prominent warrior. Among the grave goods was a gold earring from the Korean Peninsula, which indicates that a connection already existed between Wakasa and the old Korean kingdoms.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭湾岸の古墳時代）

墳時代の若狭・敦賀地方

概要

古墳時代（約250～552年）には、大和朝廷が現在の奈良県や大阪府で権力を握り、遠く離れた地域を支配する氏族への影響力を徐々に拡大しました。この時代の名前は、天皇や一族の指導者、その他の有力者など、支配階級の人のために建設された大規模な古墳（古墳）に由来しています。古墳は、墓としてだけでなく、権力や政治的地位を示すものとしても機能しました。故人の遺体は、大抵は石の埋葬室に入れられ、それを覆うように土の塚が築かれました。故人には、武器や馬具、農具やその他の道具、装飾品、そして祭器などの副葬品が添えられました。日本列島の各地に築かれた前方後円墳は、大和朝廷の権力の象徴と考えられています。若狭・敦賀地方でも、多くの古墳が築かれており、5世紀半ばから6世紀半ばにかけて築かれた古墳の発掘調査や分析から、この地域が大和朝廷と朝鮮半島の古代王国との関係において重要な役割を果たしたことが示唆されています。

もっと詳しく知る

古墳文化と大和朝廷とのつながり

ほとんどの古墳は、前方後円墳、前方後方墳、円墳、または方墳でした。古墳の形や大きさは、大和朝廷によって確立された政治的および社会的階層を反映していると考えられています。若狭・敦賀地方では約20基の前方後円墳と数基の大型円墳の存在が確認されています。これらは、大和と関係が深い、あるいは強いつながりを持つ有力な氏族の長の墓であったと考えられています。5世紀半ばから6世紀前半にかけて若狭に築かれた古墳には、最初に九州で出現した横穴式石室の採用や、朝鮮半島からもたらされた副葬品の使用が見られます。これは、若狭の氏族が、北九州や朝鮮半島の人々と深いつながりを持っていたことを反映しており、大和朝廷と朝鮮の古代王朝との外交に関わっていたことを示しているのかもしれません。

若狭地域で最大の古墳

若狭・敦賀地域で特に大きな古墳の多くは、小浜市と若狭町の間にある北川流域にあります。この地域で、若狭の氏族の長のために造られた7つの最大の古墳は前方後円墳で、全長は63メートルから100メートルでした。最も大きな古墳は上之塚古墳で、5世紀初頭に造られました。この地域の強力な氏族長のための最後の大規模な古墳は丸山塚古墳で、6世紀半ばに造られた直径約50mの円墳でした（しかし、現存はしていません）。これらの大規模古墳の多くは、2層または3層の墳丘で、埴輪と呼ばれる土製品によって区切られ、堀に囲まれており、また墳丘の斜面は石で覆われていました。このような特徴は、大和の支配者とその一族の古墳の様式を採用したことによるものです。

副葬品

他の地域の古墳と同様に、若狭の古墳からも副葬品が出土しており、鏡や青銅の装飾品、宝飾

品、刀やその他の武器、馬具、農工具、そして土器などが含まれていました。例えば、若狭中心部にある5世紀後半の氏族長の墓である西塚古墳からは、金の耳飾り、銅鏡、金銅の帯具、銀の鈴などが発見されており、その中には朝鮮半島製のものもありました。これらの価値の高い品物

（特に帯飾り）は、地位と権力の象徴であり、西塚古墳の埋葬者が大和朝廷と朝鮮半島の王国との関係において重要な役割を果たした重要な人物であったことを示唆しています。

須恵器

4世紀初頭、土師器と呼ばれる素焼きの赤褐色の陶器が日本で開発されました。土師器は弥生時代（紀元前400年～紀元300年）のように手で成形され、700～800℃で焼成されました。しかし、5世紀前半に朝鮮半島から、ロクロで成形し、丘の斜面の中に造られた「穴」の窯で1000℃で焼成するという新しい陶器の製造技術が輸入されました。これにより、須恵器と呼ばれる、耐久性が高く、浸透性が低い、灰色の陶器が生み出されました。5世紀半ばには、古墳の外側で祭祀に使われた物に須恵器が含まれるようになり、6世紀初頭には多量の須恵器が少量の土師器とともに副葬品としてよく使われました。

展示品

展示されている大量の副葬品は、若狭の美浜地域で6世紀初頭に地元の指導者のために造られた34メートルの前方後円墳である獅子塚古墳から発見されました。その中にはたくさんの種類の須恵器が含まれ、背の高い装飾的な壺、壺をのせる台、脚付きの盆とその蓋、管を刺すための穴がある飲み物を注ぐ壺、そして須恵器の中でも特に珍しい例である角形の飲用の器などがありました。獅子塚古墳用の土器を作っていた窯の跡が、近くの山腹で発見されました。その他の副葬品には、長刀、鹿角の柄のナイフ、鉄製の鍬などの武器、馬具の一部、湾曲した鎌、斧、トングなどの鉄製の農工具があります。展示されている装飾品は、石室から出土した丸い玉や管玉、コンマの形をした勾玉を組み合わせたものです。この玉は元々、いくつかのネックレスのパーツでした。大きな円筒型の埴輪は、5世紀前半に築造された若狭の族長の墓である城山古墳から出土した破片から復元されました。

古墳の断面の模型は、5世紀半ば頃に造られた前方後円墳の向山古墳1号です。発掘調査によって、九州北部で用いられた古い埋葬形式と同じ横穴式石室が発見され、若狭は本州で最初にこのような型の石室構造を採用した地域の1つであることが判明しました。古墳の前方部には武器を収めた長方形の穴があり、石室に埋葬された人物は傑出した戦士であったことが示唆されています。副葬品の中には、朝鮮半島からの金のイヤリングがあり、若狭と朝鮮の旧王国との間にはすでにつながりがあったことを示しています。

002-009

Advance of the Kashiwade no Omi Clan

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 「御食国」若狭 前夜-膳臣の進出-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Advance of the Kashiwade no Omi Clan

Overview

The commercial and political relationship between Wakasa and the capital of the country began to take shape sometime before the eighth century. By that time, the emperor's court had already recognized the value of Wakasa's natural resources and strategic location along the coast of the Sea of Japan. A powerful clan that governed the region was made responsible for supplying food (particularly marine products) for the emperor and court nobility. As official purveyors of food to the court, the clan was granted the title of Kashiwade no Omi.

Learn More

A Powerful Wakasa Clan Supplying Food to the Court

Sometime in the second half of the seventh century, the Wakasa region came under the jurisdiction of the Yamato court, located in present-day Nara Prefecture. Among the regions along the Sea of Japan, Wakasa was the closest to the capital and thus an ideal source of marine products. To secure these resources, an influential clan that ruled over the area was appointed to serve as officials responsible for supplying food from Wakasa to the court and became formally known as Kashiwade no Omi. During the following centuries, the relationship with the capital (Nara and later Kyoto) developed and strengthened due to a network of trade routes and a high demand for the abundant seafood from Wakasa.

Ancient Burial Mounds and the Kashiwade no Omi Clan

The Kashiwade no Omi clan appears to be connected to some of the *kofun* (burial mounds) discovered in the Wakasa region. The clan ruled during a time when such

tombs were built for clan leaders and other powerful figures. Excavations of the *kofun* in Wakasa unearthed various grave goods demonstrating that the region was a trading hub between the capital and mainland Asia. Such items were rare and valuable markers of status, indicating that the burial mounds were built for people of importance with ties to the capital, such as the Kashiwade no Omi clan.

Exhibition Items

The display features artifacts and historical documents related to the Kashiwade no Omi clan and their activities in the Wakasa region. Replicas of grave goods found in the burial chamber of Nishizuka Tumulus, one of the several *kofun* located in Wakasa, include a decorated mirror, a silver bell, a gilt bronze belt fitting, and gold earrings. The clay fragments are from *haniwa*, ceremonial objects that once lined the exterior of the burial mound.

The texts on exhibit are Edo-period (1603–1867) reprints of *Sendai kuji hongei* and *Nihon shoki*, two of the early Japanese histories that contain some information about the Kashiwade no Omi clan. For example, volume 10 of *Sendai kuji hongei* tells the story of how Arato no Mikoto, the son of the clan's founder, was appointed to govern the Wakasa region in the fifth century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（「御食国」若狭 前夜 膳臣の進出）

かしわでのおみ
膳 臣という一族の進出

概要

若狭と国の首都との間の政治的な結びつきは、8世紀以前のある時点で形成され始めました。その時まで、朝廷はすでに若狭の天然の資源と日本海沿岸の戦略的位置の価値を認識していました。この地域を統治する有力な氏族は、天皇や公家に食糧（特に海産物）を供給する責任を負っていました。公式的な朝廷への食糧の提供者として、この氏族は かしわでのおみ 膳 臣の称号を与えられた。

もっと詳しく知る

宮廷に食料を供給した若狭の有力氏族

7世紀後半のいつ頃かに、若狭地方は現在の奈良県にあった大和朝廷の管轄下に置かれました。若狭は日本海側の地域の中で最も都に近く、そのため、理想的な海産物の供給源となりました。

これらの資源を確保するために、この地域を支配していた有力な氏族が若狭から朝廷への食糧供給を担当する役人に任命され、公式的には膳^{かしわでのおみ}臣として知られるようになりました。その後の数世紀間に、首都（奈良、後に京都）との関係は、貿易路網と、若狭からの豊富な海産物に対する高い需要によって発展し、強化されました。

古代の古墳と膳臣一族

膳臣の一族は、若狭地方で発見された古墳の一部と関連があると考えられています。この一族は、貴族や氏族の長、その他の強力な人物のためにそのような墓が建てられた時代に、統治を行いました。若狭の古墳の発掘調査では、この地域が首都やアジア大陸との間の貿易拠点だったことを示すさまざまな副葬品が発掘されました。こうした品々は希少で、社会的地位を示すのに役立つ物であり、膳臣氏など都と縁のある重要人物のために築造された古墳であったことを示しています。

展示品

この展示では、膳臣氏や彼らの若狭地方での活動にまつわる工芸品や史料を集めています。若狭にあるいくつかの古墳の一つである西塚古墳の玄室から出土した副葬品のレプリカには、装飾された鏡、銀の鐘、金銅の帯金具、金のイヤリングなどがあります。粘土の破片は、かつて古墳の外側に並んでいた儀式用の道具である埴輪^{はにわ}に由来するものです。

展示されている文書は、江戸時代（1603年～1867年）の先代旧事本紀^{せんだいいくじほんぎ}と日本書紀の翻刻であり、膳臣に関する情報を含んでいる初期の日本の歴史書の内の2つです。例えば、先代旧事本紀^{せんだいいくじほんぎ}の第10巻には、氏祖の息子であった荒礪^{あらと}命^{のみこと}が5世紀に若狭地方を統治するよう任命された経緯が語られています。

002-010

Wooden Shipping Tags from Wakasa and Tsuruga

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 敦賀・若狭関係の木簡

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wooden Shipping Tags from Wakasa and Tsuruga

Overview

Wakasa Province used to pay certain taxes and tributes to the emperor's court in the form of food. Wooden tablets called *mokkan* that served as shipping tags for such payments in the eighth century have been excavated from the ancient capitals of Fujiwarakyo and Heijokyo in present-day Nara Prefecture. Inscriptions on the tablets showed the district of origin, the relevant tax or tribute, and the type of food the shipment contained. Payments sent from Wakasa included large amounts of salt and various seafood such as sea bream, mussels, and sea urchin.

Learn More

Evidence of Food Supplies to the Court

Mokkan tablets from the Wakasa region were uncovered during excavations of Fujiwarakyo (the capital in 694–710) and Heijokyo (the capital in 710–740 and in 745–784). This suggests that Wakasa Province was a *miketsukuni*, a region designated as a provider of food for the emperor and the court. Other *miketsukuni* were Awaji Province (Awaji Island in present-day Hyogo Prefecture), Ise Province, and Shima Province (both in present-day Mie Prefecture).

Physical Characteristics and Information on the Mokkan Tablets

The oldest of the discovered *mokkan* dates to 687. The tablets were typically made of *hinoki* cypress or Japanese cedar and ranged from about 8 to 24 cm in length. The writing on them reveals information such as which district the shipment came from,

what tax payment it was related to, who the payer was, and what type of food it contained.

Recorded Forms of Tax Payments

Many of the tags marked salt shipments used to pay *cho*, a type of individual tax levied on people of the commoner class with adjustments according to age and working ability. At that time, various taxes were paid with foodstuffs such as rice and soybeans rather than money. However, *cho* had to be paid in goods other than rice, such as raw silk or timber. Since Wakasa Province was an important salt producer, the primary form of *cho* tax payments for its citizens was salt.

Other food products listed on *mokkan* for shipment to the capital include Japanese pilchard, sea bream, mussels, sea urchin, abalone, sea squirt, squid, sea cucumbers, and seaweed.

Exhibition Items

Replicas of wooden shipping tags excavated at the sites of the old capitals are suspended in large glass cases, and both the front and the back of each tablet are easily visible. The touchscreen Mokkan Navi located next to the cases is a digital database of several dozen *mokkan* that is searchable by three categories: era, shipment origin, and contents. Each page displays a high-resolution image of a tablet with the old Japanese text, which is accompanied by a modern Japanese translation and illustrations of the shipment contents.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（敦賀・若狭関係の木簡）

若狭と敦賀の木製の荷札

概要

若狭国は、特定の税や貢納物を食物の形で朝廷に納めていました。8世紀にこのような支払いのための荷札として使われた木簡と呼ばれる木の板が、古代の首都であり、現在の奈良県にあった藤原京や平城京から出土しています。板には、荷元の地域や関連する税または貢納物、貨物に含まれる食品の種類が刻まれていました。若狭からの支払いには、大量の塩と、タイ、イガイ、ウニなどのさまざまな海産物が含まれていました。

もっと詳しく知る

宮廷への食糧供給の証拠

若狭地方の木簡という板は、かつての首都であった藤原京（694年～710年の都）、平城京（710年～740年と745年～784年の都）の発掘調査で出土しました。このことから若狭国は、御食国と呼ばれる、天皇や朝廷のための食糧を供給する地として指定された地域であったことが伺えます。その他の御食国は、淡路国（現在の兵庫県淡路島）、伊勢国、志摩国（いずれも現在の三重県）である。

出土した最古の木簡は687年のものです。木簡は通常はヒノキまたはスギでできており、長さは8cmから24cmです。その文字を調べると、貨物がどの地域から来たのか、どの税の支払いに関係しているか、誰が納税者であるか、どのような種類の食品が含まれていたかなどの情報が明らかになります。

記録された納税形態

この荷札の多くは、調^{ちよう}という、年齢と労働能力に応じて調整された平民階級の人々に課される一種の個人税を支払うための、塩の出荷を記録していました。当時、様々な税はお金ではなく、米や大豆などの食料で納められていました。しかし、調は生糸や材木など、米以外の品物で支払われなければなりません。若狭国は重要な塩の産地であったため、この住人たちの調という税の主な支払い形態は塩でした。

その他の都に向けた荷物として木簡に記載された食品には、マイワシ、タイ、イガイ、ウニ、アワビ、ホヤ、イカ、ナマコ、海藻などがあります。

展示品

古い都の跡地から出土した木製の荷札の複製が大きなガラスケースに吊り下げられており、それぞれの板の表と裏の両方が容易に見られます。このケースの隣にあるタッチパネル式の木簡ナビは、数十点の木簡を年代・出荷地・内容物の3つのカテゴリで検索できるデジタルデータベースです。各ページには、高解像度の板の画像と古い日本語の文が表示され、現代日本語訳と出荷内容の説明が添えられています。

めにそのような墓が建てられた時代に、統治を行いました。若狭の古墳の発掘調査では、この地域が首都やアジア大陸との間の貿易拠点だったことを示すさまざまな副葬品が発掘されました。こうした品々は希少で、社会的地位を示すのに役立つ物であり、膳臣氏など都と縁のある重要人物のために築造された古墳であったことを示しています。

展示品

この展示では、膳臣氏や彼らの若狭地方での活動にまつわる工芸品や史料を集めています。若狭にあるいくつかの古墳の一つである西塚古墳の玄室から出土した副葬品のレプリカには、装飾され

た鏡、銀の鐘、金銅の帯金具、金のイヤリングなどがあります。粘土の破片は、かつて古墳の外側に並んでいた儀式用の道具である埴輪^{はにわ}に由来するものです。

展示されている文書は、江戸時代（1603年～1867年）の先代旧事本紀^{せんたいいくじほんぎ}と日本書紀の翻刻であり、膳臣に関する情報を含んでいる初期の日本の歴史書の内の2つです。例えば、先代旧事本紀^{せんたいいくじほんぎ}の第10巻には、氏祖の息子であった荒碓命^{あらとのみこと}が5世紀に若狭地方を統治するよう任命された経緯が語られています。

002-011

Wakasa Province: Supplying Food for the Emperor

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 /
「御食国」若狭 -天皇の食を支える地-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wakasa Province: Supplying Food for the Emperor

Overview

From approximately the eighth to the tenth century, Wakasa Province functioned as a *miketsukuni*, a region designated to pay certain taxes and tributes in the form of food that would be served to the imperial family and members of the court. Wakasa was renowned for salt and various types of seafood. Wooden shipping tags and relevant historical records reveal how select coastal provinces helped meet the needs of the nobility in the capital and what kinds of food were served to the emperor and the court during that time.

Learn More

Miketsukuni: Designated Food Provinces

In the Nara period (710–794), food products provided to the court were gathered from several designated provinces called *miketsukuni* (“food provinces”). They were chosen based on access to the sea, variety of available foodstuffs, and proximity to the capital so that the food could be delivered without spoiling. The *Man'yōshū*, an eighth-century poetry collection, specifically mentions three *miketsukuni*: Awaji Province (Awaji Island in present-day Hyogo Prefecture), Ise Province, and Shima Province (both in present-day Mie Prefecture).

Wakasa as a Provider of Food for the Court

No extant documents explicitly name Wakasa Province as a *miketsukuni*, but several historical findings suggest that it was considered as such. Most notably, wooden tablets called *mokkan* that served as shipping tags for goods sent from Wakasa were

discovered during excavations of Fujiwarakyo (the capital in 694–710) and Heijokyo (the capital in 710–740 and in 745–784) in present-day Nara Prefecture. Writing on the tablets included information such as the origin of the shipment, the tax being paid, the taxpayer, and the type of food. Ancient records from Todaiji Temple in Nara mention Wakasa alongside the three formally designated *miketsukuni* as “provinces that pay tribute each month in rare foods.”

Records of Taxes Paid with Food in the Engishiki

Detailed information about Wakasa Province paying taxes and tributes in salt and seafood appears in the *Engishiki*, a compilation of customs and official procedures from the early tenth century. Specific goods that were accepted as payments included salt, sea bream, mussels, Japanese pilchard, sea urchins, abalone, sea squirt, squid, sea cucumbers, and seaweed. The fact that Wakasa was listed in the *Engishiki* as a payer of both taxes and tributes is regarded as further proof of the province’s status as a *miketsukuni*.

Exhibition Items

This exhibit provides an example of what a typical meal in the palace of the emperor may have looked like in the eighth century. Ancient documents describe the emperor sitting on a low bench in front of a vermilion lacquered table, using chopsticks and silver spoons to eat food served in silver bowls. Four smaller containers were used for seasonings: *hishio* (a precursor of miso and soy sauce), salt, vinegar, and sake. Based on this, researchers believe that the food was likely served plain and then seasoned according to taste.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（「御食国」若狭 天皇の食を支える地）

若狭国：天皇への食糧供給

概要

およそ8世紀から10世紀にかけて、若狭国は、皇族や宮廷の人々に提供される食糧の形で特定の税や貢納物を支払うよう指定された地域である御食国の役割を果たしました。若狭は塩や様々な海産物の産地として有名でした。木製の荷札と関連する歴史的な記録は、選ばれた沿岸地方が首都の貴族たちのニーズを満たすのにどのように役立ったか、そしてその当時に天皇や宮廷へどのような種類の食べ物が提供されたかを明らかにします。

もっと詳しく知る

御食国：指定された食べ物の地

奈良時代（710年～794年）に、宮廷に提供された食糧は、御食国（食べ物の国）と呼ばれるいくつかの指定された国から集められました。それらは、海への交通の便や入手可能な食材の多様性、そして首都への近さに基づいて選ばれ、そのため食べ物が腐ることなく届けられました。8世紀の歌集である万葉集には、淡路国（現在の兵庫県淡路島）、伊勢国、志摩国（いずれも現在の三重県）という3つの御食国が具体的に言及されています。

宮廷への食糧供給地としての若狭

現存する文書で若狭国を御食国として明示したものはありませんが、いくつかの歴史的な調査の結果は、若狭国が御食国とみなされていたことを示唆しています。特に明白なのは、現在の奈良県にある藤原京（694年～710年の都）、平城京（694年～710年と745年～784年の都）の発掘調査で、若狭から送られた品物の荷札として使われていた木簡と呼ばれる木の板が発見されたことです。この板には、出荷元や支払われる税、納税者、食品の種類などの情報が書かれていました。奈良の東大寺の古代の記録には、正式に指定された先ほどの3つの御食国とともに、若狭が「珍しい食べ物で毎月貢納する国」として言及されています。

延喜式における食料による納税の記録

10世紀初頭の風習や公務の手続きを編纂した延喜式には、塩や海産物で税や年貢を納めていたことについての詳細な情報があります。納税物として認められた特定の品物には、塩、タイ、イガイ、マイワシ、ウニ、アワビ、ホヤ、イカ、ナマコ、そして海藻が含まれていました。若狭が延喜式に税と貢納物の両方を納入したとして記載されたという事実は、御食国としての国の地位を示すさらなる証拠と見なされています。

展示品

この展示は、8世紀の皇居で見られたかもしれない典型的な食事の例を示しています。古代の文書には、天皇は朱塗りの食卓の前の低い長椅子に座り、箸と銀のスプーンを使用して、銀の椀に盛り付けられた料理を食べていたことが記述されています。4つの小さな器は、ひしお（味噌や醤油の前身）や塩、酢、酒という調味料のために使用されました。これに基づき、研究者たちは、食べ物はあっさりとした味で食卓に出され、その後好みに応じて味付けされた可能性が高いと考えています。

002-012

The Salt Road: Supplying the Capital with Wakasa Salt

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 /
「塩の道」若狭-都人の食を支える地-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Salt Road: Supplying the Capital with Wakasa Salt

Overview

In the eighth century, certain areas along Wakasa Bay were important producers of salt, which has been essential for the seasoning and preservation of food for thousands of years. Historical records and archaeological findings indicate that seawater from the bay was used to produce salt through a combination of concentrating, boiling, and baking. At that time, taxes were paid in goods instead of money, and salt made in Wakasa was routinely shipped to the capital in Heijokyo (present-day Nara) as payment.

Learn More

Salt Production

Japan does not have rock salt deposits and is too humid to produce sea salt by evaporation alone, so for centuries the process involved using furnaces to boil seawater down to crystallized salt. Seawater was first poured over dried seaweed or seaweed ash to make a concentrate. Then it was boiled down in large earthenware pots to crystallize the salt. Finally, the resulting coarse salt was baked in clay pots, which separated bitter compounds and shaped the final product for convenient preservation and transportation.

Several salt production sites were discovered in the Wakasa region, including Okozu, an ancient state-run site that once operated near the coast in present-day Obama. Excavations revealed fragments of earthenware and the locations of several furnaces, and the area was designated a National Historic Site.

Supplying Salt to the Capital

Starting in the mid-seventh century, Japan introduced many legal reforms and adopted an official taxation system. One type of individual tax, called *cho*, had to be paid in goods other than rice (the staple at that time), and people of the Wakasa region paid much of their *cho* taxes in the form of salt. Multiple wooden tablets that were used as shipping tags for Wakasa salt were discovered during excavations of the site of the Heijokyo capital. Designations on some of the tablets use specific honorific wording suggesting that the shipment contents may have been intended for the emperor and the court.

Exhibition Items

The tools and models displayed in this section illustrate the salt production process used in the Wakasa region in ancient times. The fragments of earthenware vessels were excavated from the Okozu, Ano Shiohama, and Soneda salt production sites in Obama and Wakasa. The figurines in the exhibit show the main steps of making salt by boiling down seawater, and an artist's rendition presents the kind of basket that historians believe was used to transport blocks of salt to the capital.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（「塩の道」若狭 都人の食を支える地）

塩の道～若狭の塩を都に届ける～

概要

8世紀に、若狭湾沿いの特定の地域は、何千年もの間に味付けと保存に不可欠なものとして使用されてきた、塩の重要な生産地でした。歴史的記録と考古学的発見は、この湾からの海水は、濃縮・沸騰・焼成の組み合わせを用いて塩を生成するために使用されたことを示しています。当時、税の支払いはお金ではなく物品で納められ、若狭で作られた塩は定期的に税の支払いとして平城京（現在の奈良）の都へ運ばれていました。

もっと詳しく知る

塩の生産

日本には岩塩の堆積物がなく、湿気が高すぎて蒸発させるだけでは海塩を生成できないため、何世紀にもわたって、炉を使用して海水を沸騰させ結晶化した塩にすることが必要でした。まず、乾燥させた海藻や海藻の灰に海水をかけて濃縮液を作ります。その後、それを大きな土製の鍋で煮

詰めて塩を結晶化させます。最後に、得られた粗塩を土器で焼き、苦味のある化合物を分離し、保存と輸送に便利な最終製品を作りました。

若狭地方では、現在の小浜の海岸近くで操業していた古代の官営工場だった岡津^{おこづ}など、いくつかの製塩所跡が発見されました。発掘調査で、土器の破片やいくつかの炉の場所が明らかになり、この地域は国の史跡に指定されています。

首都への塩の供給

7世紀半ばから、日本は多くの法改正を導入し、公式の税制を採用しました。調と呼ばれる個人税の一種は、米（当時、税の支払いの主だった）以外の品物で納めなければならず、若狭地方の人々は調という税の多くを塩で納めていました。平城京という都の遺跡の発掘調査では、若狭の塩の荷札として使われていた木簡が複数発見されました。一部の木簡の表記には特定の尊称的な言葉が使用されており、貨物の内容が天皇と宮廷に向けて送られた物である可能性があることを示唆しています。

展示品

このセクションに展示されている道具や模型は、古代の若狭地方で用いられた製塩過程を示しています。小浜と若狭にある、岡津、阿野塩浜、曾根田の製塩所跡から、土器の破片が出土しました。展示された置物は、海水を煮詰めて塩を作る主要な手順を示しており、芸術家の演出は、塩の塊を首都へ運ぶために使用されたと歴史家が信じている種類の籠を紹介しています。

002-013

Tsunuga Salt: The Only Salt Left Uncursed

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 角鹿の塩-呪いをかけ忘れた塩-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Tsunuga Salt: The Only Salt Left Uncursed

Overview

For centuries, the Tsunuga area along Wakasa Bay (present-day Tsuruga) was known for producing high-quality salt. Moreover, at one point it was regarded as the only salt that was safe for the emperor to eat. According to an ancient tale, political intrigue and unrequited love in the capital led a vengeful minister to curse all the salt in Japan. Fortunately, as he was casting the curse, he forgot to mention Tsunuga, so the salt produced there was considered spared, making Tsunuga an even more valuable source of salt for the court and the nobility of the capital.

Learn More

According to *Nihon shoki*, an eighth-century chronicle of Japanese history, the powerful, high-ranking minister Heguri no Matori (d. 498) tried to usurp power and reign over the country after the death of Emperor Ninken (449–498), the legendary 24th emperor. Matori claimed to be acting on behalf of the late emperor's young son, the future Emperor Buretsu (489–507), and lived in a grand palace commissioned for the heir.

As Buretsu grew up, he began courting Kagehime, a secret lover of Matori's son Heguri no Shibi. When she reluctantly agreed to a meeting for fear of what might happen if she denied the advances of the prince, Matori was ordered to provide horses for Buretsu. The minister accepted the order, mockingly saying, "For whom else are the palace horses kept? Of course, his orders shall be obeyed," but deliberately delayed them.

Despite the setback, Buretsu eventually approached Kagehime at a poetry reading event. Shibi tried to intervene, but was ordered to step aside. The two young men exchanged poems, concealing threats and insults in metaphor. When Shibi refused to stand down, Buretsu used his next verse to declare his love directly to Kagehime, but Shibi responded that his was the only love she required.

Buretsu realized then that Shibi and Kagehime were already a couple. Remembering the incident with the horses and enraged by the disrespect, Buretsu had Shibi executed and arranged for Matori to be killed. Filled with resentment, Matori cursed all the salt in the sea as a final act of revenge before his death, expecting that the cursed salt would eventually reach the emperor's table. He listed the names of countless places, but apparently forgot to mention the Tsunuga area, and it was therefore believed that only salt from Tsunuga was safe for consumption by the emperor.

It is unlikely that events took place exactly as the ancient story suggests, but it provides an interesting explanation as to why Tsunuga salt was highly valued. The tale also highlights the connection between Wakasa Bay and the capital, showing how happenings at the court and among the nobility could influence the reputation and consumption of goods from a comparatively small, far-off coastal region.

Exhibition Items

On display are artifacts and replicas of objects related to Tsunuga salt production. Notable items include ancient pottery found at the Matsubara salt production site and a replica of one of the wooden shipping tags that marked salt supplies from Tsunuga to the capital in Heijokyo (present-day Nara). An enlarged reproduction of one of the *Nihon shoki* pages telling the story of Tsunuga salt, as well as a photo of the Matsubara site, can be seen in the information panels.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（角鹿の塩 呪いをかけ忘れた塩）

角鹿の塩：呪われなかった唯一の塩

概要

何世紀もの間、若狭湾に沿った角鹿地域（現在の敦賀市）は、良質な塩の産地として知られていました。さらに、ある時には、天皇が食べても安全な唯一の塩と見なされていました。古代の物語によると、首都での政治的陰謀と報われない愛により、復讐に燃える大臣が日本のすべての塩に呪いをかけました。幸いなことに、彼が呪いを唱えていた時、角鹿に言及するのを忘れたので、そこで生産された塩は呪いを免れたとされ、それによって角鹿は宮廷や首都の貴族にとってさらに価値のある塩の供給源になりました。

もっと詳しく知る

8世紀の日本の歴史の年代記である日本書紀によると、有力な高位の大臣であった平群真鳥（498年没）は、伝説的な第24代天皇である仁賢天皇（449年～498年）の死後、権力を奪い、国を支配しようとしていました。真鳥は、亡き天皇の幼い息子である将来の武烈天皇（489年～507年）の代理で行動していると主張し、この相続人のために委託された壮大な宮殿に住んでいました。

武烈は成長すると、真鳥の息子である平群鮪の秘密の恋人であった影姫に求愛を始めました。影姫が皇子の誘いを断るとどうなるかを恐れ、しぶしぶ会うことを了承した時、真鳥は武烈へ馬を提供するよう命じられた。大臣は命令を受け入れ、あざけるように「誰のためにこの宮殿の馬を飼っているのか？もちろん、彼の命令には従わなければならない」と言ったが、故意に馬を遅らせました。

その妨害にもかかわらず、武烈は最終的に詩の朗読会で影姫に近づきました。鮪は邪魔をしようとしていましたが、脇へ追いやられました。この二人の若い男たちは、比喻の中に脅迫と侮辱を隠した詩を交換しました。鮪が身を引くことを拒否したとき、武烈は次の詩歌を使って影姫に直接愛を宣言しましたが、鮪は自分の愛こそが影姫が必要とする唯一の愛であると返答しました。

武烈はその時、鮪と影姫がすでに恋人同士であることに気づきました。馬の一件を思い出し、無礼に激怒した武烈は、鮪を処刑し、真鳥を殺そう手配しました。恨みでいっぱいとなった真鳥は、死ぬ前の最後の復讐として、最終的に呪われた塩が天皇の食卓に届くことを期待して海の全ての塩を呪いました。彼は数えきれないほどの地名を挙げましたが、どうやら角鹿地域に言及することを忘れていたようで、そのため、天皇が食しても安全なのは角鹿から来た塩だけだと信じられていました。

古代の物語が示唆するその通りに出来事が起こった可能性は低いですが、この物語は角鹿の塩が高く評価された理由について興味深い説明を提供しています。物語はまた、若狭湾と首都とのつながりを浮き彫りにし、宮廷や貴族の間での出来事がどのようにして、比較的小さく遠く離れた沿岸地域からの商品の評判と消費に影響を与えた可能性があるかを示しています。

展示品

展示されているのは、角鹿の製塩にまつわる工芸品や複製品などです。注目すべきアイテムには、松原製塩遺跡で発見された古代の陶器や、角鹿から平城京（現在の奈良）の首都への塩の供給を示した木製の荷札の内の1つを複製したものなどがあります。角鹿の塩の物語を伝える日本書紀の1ページを拡大した複製と、松原遺跡の写真が情報パネルの中に見ることができます。

【タイトル】若狭歴史博物館 / 古代の都への道
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Roads to the Ancient Capitals

Overview

In the seventh and eighth centuries, the early Japanese government was focused on the centralization of power and the creation of extensive infrastructure that would connect outlying regions to the capital. In the case of Wakasa Province, roads were built and maintained to efficiently transport salt and seafood from the coast, and government offices were established to handle local administration in the region. A number of temples and shrines were also founded along the new roads.

Learn More

Roads and Post Stations

One of the six major roads that helped connect the ancient capitals (first those in present-day Nara Prefecture and later Kyoto) to remote regions was the Hokurikudo. Wakasa was the first province along the route that provided access to the ports on the Sea of Japan. People traveling the Hokurikudo road past Lake Biwa could branch off to Wakasa or continue north toward Tsuruga and along the coastline as far as present-day Niigata Prefecture.

The roads enabled efficient communication between the provinces and the capital. Messengers carried orders from the central government, reports from provincial rulers, and emergency documents. Horses for official use were kept at post stations located approximately every 16 kilometers along the route. Wooden shipping tags for taxes and tributes excavated in Nara bear the names of four such stations, while the *Engishiki*, a tenth-century compilation of customs and official procedures, mentions three.

Government Offices

Wakasa Province was officially established in 701 under a new administrative system that divided the country into provinces, districts, and villages (later townships). Several offices were built to manage affairs at different administrative levels. The provincial office was run by governors dispatched from the capital, and district offices were managed by people appointed from prominent local families. Artifacts discovered at the sites of former government offices range from foundation stones and roof tiles to everyday items such as pottery, coins, and inkstones.

Temples

Buddhism was introduced to Japan from mainland Asia in the sixth century, and the construction of Buddhist temples began soon after. The first temples in Wakasa were built sometime in the late seventh century. For example, analysis of roof tiles excavated at the former site of Kodoji Temple suggests that it was originally constructed around that time.

Wakasa Jinguji Temple was founded in 714 as a religious site where Shinto and Buddhism were practiced in a syncretic fusion. Wakasa Jinguji is known for the Omizu Okuri (“water-sending”) ritual held to symbolically send sacred water to Todaiji Temple in Nara, which holds the famous Omizutori (“water-drawing”) ritual ten days later. The connection to Nara was further highlighted when excavations of the Wakasa Jinguji grounds revealed ancient roof tiles in a style matching those of Heijo Palace, the imperial residence in the eighth century.

In 741, Emperor Shomu (701–756) decreed that each province should establish a *kokubunji* (a state-sponsored temple) to spread Buddhism and pray for the safety of the country. Wakasa Kokubunji Temple was built in 807 to fulfill this role in Wakasa Province. Though the earliest structures were lost, the remains of the original temple are a designated National Historic Site.

Exhibition Items

The artifacts and documents on display reflect the important role of the roads that led from Wakasa to the former capitals and other regions. Roof tile fragments were

excavated from locations such as Wakasa Kokubunji Temple and the ruins of Kodoji Temple. Everyday objects, including pottery, coins, and bells, were found at sites of former villages, post stations, and government offices. An Edo-period (1603–1867) reprint of the *Engishiki* is opened to the section discussing the status of Wakasa Province within the administrative system, and a document from Todaiji Temple includes details about the Omizutori water ritual that takes place after the Omizu Okuri ritual held by Wakasa Jinguji Temple.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古代の都への道

概要

7世紀から8世紀にかけて、初期の日本政府は、権力の集中化と、遠く離れた地域と首都を繋ぐ大規模なインフラストラクチャーの創設に重点を置いていました。若狭国の場合、海岸から塩や海産物を効率よく運ぶために道路が建設されて保全され、地方行政を扱うため役所が設置されました。特定の寺院や神社もまたこの新たな道路沿いに設立されました。

もっと詳しく知る

道路と駅家

古代の都（最初は現在の奈良県、後に京都）と遠い地方を結ぶのに役立った6つの主要な道路の内の1つが北陸道でした。若狭は日本海の港へのアクセスを提供した北陸道沿いにある最初の国でした。琵琶湖を越えて北陸道を旅する人々は、分岐して若狭へ行くか、またはそのまま北上して敦賀に向かい、海岸線に沿って現在の新潟県にまで行くことができました。

この道路により、各地方と都の間の効率的な通信ができるようになりました。使者たちは、中央政府からの命令、地方の支配者からの報告、および緊急文書を運びました。公的な用途のための馬が、この道に沿って約16kmごとに配置された駅家で飼われていました。奈良で発掘された、税と貢納のための木製の荷札には、そのような駅家の名前が4つ記されており、一方で、10世紀の風習や公務の手続きを編纂した延喜式には、3つの名前が言及されています。

政府の執務所

若狭国は701年に、全国を国、郡、里（後に郷）へと分割した新しい行政制度の下で公式的に設立されました。異なる行政区分で業務を管理するために、いくつかの執務所が建設されました。国の執務所は都から派遣された役人によって運営され、郡の執務所は地元の有力な一族から任命された人々によって運営されました。国の執務所の跡地から出土した遺物は、礎石や瓦、そして土器や硬貨、硯などの日用品にまで及びます。

寺院

仏教は6世紀にアジア大陸から日本に伝わり、そのすぐ後に仏教寺院の建設が始まりました。若狭に最初の仏教寺院が建てられたのは、7世紀後半頃です。例えば、興道寺こうどうじの旧跡から出土した瓦の分析から、この頃に創建されたことが分かります。

若狭神宮寺わかさじんぐうじは、神道と仏教が融合して信仰された宗教的な場所として、714年に創建されました。若狭神宮寺は、奈良の東大寺へ聖なる水を象徴的に送るお水送り（水を送る）の儀式が有名で、10日後には東大寺で有名なお水取り（水を汲む）の儀式が行われます。若狭神宮寺の発掘調査で、8世紀の皇居であった平城宮と一致するスタイルの古代の屋根瓦が発見されたことで、奈良とのつながりがさらに強調されました。

741年、聖武天皇（701年～756年）は、仏教を広めるため、国の安全を祈るために、各国に国分寺（国から支援を受けた寺）を設立するよう命じました。若狭国分寺は、807年に若狭国でその役目を果たすために建立されました。最初期の建造物は失われましたが、元々の寺院の遺跡は国の史跡に指定されています。

展示品

展示されている遺物や文書は、若狭から昔の都や他の地域に至る道の重要な役割を反映しています。若狭国分寺や興道寺跡などから瓦片が出土しました。陶器、硬貨、鐘などの日常品が、かつての村、宿場、役所の跡地で発見されました。江戸時代（1603年～1867年）の延喜式の復刻版は、行政制度における若狭国の地位を論じる部分に公開されており、東大寺の文書には、若狭神宮寺でお水送りが行われた後に行われるお水取りの儀式詳細などが記載されています。

002-015

Projection Mapping

Roads Linking Wakasa to Nara and Kyoto 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】若狭歴史博物館 / 若狭と都を結ぶ道

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Projection Mapping **Roads Linking Wakasa to Nara and Kyoto**

Overview

This presentation employs projection mapping technology to show the historical connection between the Wakasa region and the ancient capitals of Nara and Kyoto. Bright colors, graphics, animation, and other visual effects are used to tell the story of the routes that made possible the flow of goods and cultural exchange between the regions over the centuries. The presentation is about 5 minutes long.

Learn More

Map Layout

The map shows the topography of the area between Wakasa Bay and the old capitals of Nara and Kyoto. It is south-oriented, with the bay located near the presentation's "Play" button. The two capitals are placed near the center of the map, just past the rugged mountains that span present-day Fukui, Kyoto, and Shiga Prefectures.

Salt Shipments

Over 1,300 years ago, large amounts of salt produced in Wakasa and Tsunuga (now Tsuruga) were supplied to the capital in Nara. Excavations uncovered many wooden tablets that served as shipping tags for Wakasa salt and various kinds of seafood. The routes used to transport salt to the capital are shown with illuminated white lines.

Omizu Okuri Ritual

The Omizu Okuri ("water-sending") ritual is held in Obama on March 2nd to

ceremonially send sacred water to Nara for the famous Omizutori (“water-drawing”) ritual at Todaiji Temple. The event at Todaiji involves drawing water from a sacred well and offering it to Buddhist deities. The purpose of the rite is to cleanse people of their sins and usher in the spring season. A shining blue, stream-like animation represents the presumed ritual flow of water from Obama to Nara.

Connection to Kyoto

After the capital was moved to Kyoto (initially named Heiankyo) in 794, the relationship between Wakasa and the capital continued to strengthen. Bright yellow lines illustrate the numerous routes that were used for travel and transportation of goods between the regions. Active trade naturally facilitated cultural exchange, which brought festivals, performing arts, religious teachings, and Buddhist statuary from Kyoto to the Wakasa region. Many traditions and cultural properties originating in the capital or reflecting its influence have been preserved in Wakasa.

Saba Kaido Road

In the Edo period (1603–1867), numerous shipments of mackerel from Wakasa Bay were transported to Kyoto on foot via a network of trade routes that came to be known as the Saba Kaido (“Mackerel Road”). Fish and seafood from the bay were precious commodities in the landlocked capital and became a significant part of Kyoto cuisine. Bright blue lines show the branching roads of the Saba Kaido network leading from Wakasa Bay to the capital.

Modern Transportation Network

Contemporary highways and national routes that have been built throughout the area are shown with illuminated white lines. The well-developed network of roads serves as a reminder that traditions, economy, and lifestyles may greatly change over time, but the main function of the roads remains the same, supporting progress through trade, travel, and the exchange of ideas between people.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭と都を結ぶ道）

プロジェクションマッピング

若狭と奈良・京都を結ぶ街道

概要

このプレゼンテーションでは、プロジェクションマッピング技術を使用して、若狭地方と古代の首都であった奈良と京都との歴史的なつながりを示しています。明るい色、画像、アニメーション、その他の視覚効果は、何世紀にもわたって2つの地域間の物資の流れと文化交流を作りだした道の物語を伝えます。このプレゼンテーションの長さは約5分です。

もっと詳しく知る

地図のレイアウト

この地図は、若狭湾と昔の首都であった奈良と京都の間の地域の地形を示しています。この地図は南が上で、若狭湾はプレゼンテーションの「再生」ボタンの近くにあります。2つの首都は、地図の中央付近に配置されており、ちょうど、現在の福井県、京都府、滋賀県にまたがるごつごつした山々を過ぎた所にあります。

塩の出荷

1300年以上前、若狭と角鹿（現在の敦賀）で生産された大量の塩が奈良にある首都へ供給されました。発掘調査によって、若狭の塩や様々な海産物の荷札として使われていた木製の板が多数出土しました。首都への塩の輸送に使用されたルートは、光る白い線で示されています。

お水送りの儀式

東大寺で行われる有名な「お水取り（水を汲む）」の儀式のために、神水を奈良へ儀式的に送る、「お水送り（水を送る）」の儀式が小浜で3月2日に行われます。東大寺の行事では、聖なる井戸から水をくみ上げ、仏様に捧げます。その儀式の目的は、人々の罪を清め、春を迎えることです。青く輝く小川のようなアニメーションは、推定される小浜から奈良への儀式的な水の流れを表しています。

京都とのつながり

794年に都が京都（当初は平安京と呼ばれた）に移された後、若狭と都の関係は強化され続けました。鮮やかな黄色の線は、地域間の旅行や物資の輸送に使用された多数のルートを示しています。活発な交易は自然と文化交流を促進し、祭り、芸能、宗教、仏像が京都から若狭地方にもたらされました。若狭には、京に由来する、またはその影響を反映した多くの伝統や文化財が保存されています。

鯖街道

江戸時代（1603年～1867年）、若狭湾から多くのサバの荷が徒歩で京都に運ばれ、後に「鯖街道」（サバの道）と呼ばれる交易路網が築かれました。若狭湾からの魚介類は、内陸の首都では貴重な商品であり、京料理の重要な部分になりました。鮮やかな青色の線は、若狭湾から都へと続く鯖街道のネットワークの分岐路を示しています。

現代の輸送ネットワーク

この地域を通る現代の高速道路や国道は、光る白い線で示されています。よく整備された道路網は、伝統、経済、ライフスタイルが時とともに大きく変化する可能性があることを思い出させてくれますが、道路の主な機能は変わらず、交易、旅行、人々の間のアイデアの交換を通じて進歩を支えています。

【タイトル】若狭歴史博物館 / 中世若狭の荘園

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Agricultural Estates in Wakasa

Overview

From the twelfth to the mid-sixteenth century, the Wakasa region was the location of many *shoen* estates, which were private, partially tax-exempt agricultural landholdings granted to large shrines and temples, nobles, and samurai families. Since the proprietors were often based in the old capitals of Nara and Kyoto, the estates were administered by local representatives who ensured that the farmers produced enough food to send a set amount as payment in lieu of taxes. The connections between the *shoen* and the landholders became one of the routes that brought high-quality craft items, religious traditions, and festival culture from the capital region to Wakasa.

Learn More

Shoen Estates and Their Administration

Wakasa has long been known as a fertile region with access to the sea, which made it a very desirable location to have a *shoen* estate. In the past, most land in Japan was considered the property of the emperor, and taxes were paid to the court. However, *shoen* lands were exempt from some of the taxes imposed by the central government and were managed by proprietors that were often located in distant places, usually through a *daikan* representative living in the area. The farmers who worked the land sent rice or other goods as payment to the *shoen* landholders rather than the court.

Cultural Exchange through Connections with Proprietors

The number of active *shoen* estates in Wakasa was particularly large between the second half of the twelfth century and the first half of the fifteenth century. Their proprietors were very influential religious institutions and court nobility. According to

historical records, these included Toji Temple and Sanjusangendo Temple in Kyoto, Todaiji Temple and Kasuga Taisha Shrine in Nara, and members of the emperor's household, such as the Fushimi no Miya family branch. Through these connections, some aspects of culture from the capital were transmitted to the *shoen* in the form of Buddhist statues, religious traditions, and art objects. Prominent examples in Wakasa are the *dengaku* folk music and O no Mai ritual dances, which are performed at spring festivals as offerings to the deities. Most of the *dengaku* and O no Mai traditions preserved at local shrines were originally dedicated to deities of the land at the *shoen* estates.

Decline of the Shoen System

The *shoen* system began to weaken in the mid-fifteenth century and gradually disappeared, as individual samurai lords strengthened their control over domain lands and the country entered the Warring States period (1467–1615). However, the memory of the *shoen* is reflected in the modern-day Wakasa region in the names of districts and neighborhoods that were once part of such estates.

Exhibition Items

This section includes objects and replicas of historical documents related to the *shoen* estates that once existed in the Wakasa region. A letter from Minamoto no Yoritomo (1147–1199), the founder of the Kamakura shogunate, recognizes the Nishizu Estate as property of Kyoto's Jingoji Temple and warns the administrators of the estate not to defy him. A fourteenth-century copy of a land ownership registry from 1265 lists information about holdings in the Wakasa region at that time. One display focuses on the Tara Estate that belonged to Toji Temple in Kyoto. A map, estimated to date to 1461, illustrates how the land was divided between farmers and what irrigation systems were in place. A letter to Toji from the estate residents shows what steps were taken when problems arose in relation to *shoen* management. The letter is dated 1334 and bears an oath to the deities that the contents are true. It contains allegations of unfair treatment on the part of the temple-appointed administrator, and the complainants have “signed” beneath their names with simple circular marks in ink.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（中世若狭の荘園）

若狭の荘園

概要

12世紀から16世紀半ばにかけて、若狭地方には、多くの荘園（大きな神社仏閣、公家、武家に与えられた、部分的に非課税の私有農地）がありました。その所有者は昔の首都であった奈良や京都に拠点を置くことが多かったため、その農園は、農家が税の代わりに一定量の十分な食料を生産することを確実にさせる地元の代表者によって管理されました。荘園と地主とのつながりは、首都圏から若狭へ、質の高い工芸品や宗教的伝統、祭礼文化をもたらしたルートの一つとなりました。

もっと詳しく知る

荘園とその管理

若狭地方は、昔から、海に近い肥沃な地域として知られており、荘園を持つのにとても好ましい場所とされるようになりました。かつて、日本の土地のほとんどは天皇の所有地とみなされており、税金は朝廷に納められていました。しかし、荘園の土地は中央政府が課す税の一部を免除されており、通常はその地域に住む代官という代表者を通じて、遠くに居る所有者に管理されていました。その土地で働いた農民たちは、朝廷ではなく荘園所有者に米やその他の品物を支払いとして送りました。

所有者とのつながりによる文化交流

12世紀後半から15世紀前半の間、若狭の盛んな荘園の数は特に多くありました。それらの所有者は非常に影響力のある宗教施設や宮廷貴族でした。歴史的な記録によれば、京都の東寺や三十三間堂、奈良の東大寺や春日大社、伏見宮家など天皇の家系の者などです。こうしたつながりを通じて、都の文化のいくつかの側面が、仏像や宗教的伝統、芸術品などの形で荘園に伝わりました。若狭の代表的な例としては、田楽という民謡や、春の祭礼で神々への奉納として行われる王の舞が挙げられます。この地域の田楽と王の舞の伝統のほとんどは、もともと荘園の土地の神々を祀っていた地元の神社で保存されてきました。

荘園制度の衰退

荘園制度は、個々の武家の領主が領地に対する支配を強化し、国が戦国時代（1467年～1615年）に入ったため、15世紀半ばに衰退し始め、徐々に消滅しました。しかし、荘園の記憶は、現在の若狭地方でも、昔は荘園の一部であった地区や町の名前に反映されています。

展示品

この区画では、かつて若狭地域にあった荘園にまつわる品や、歴史的資料のレプリカなどを展示しています。鎌倉幕府の創設者である源頼朝（1147年～1199年）からの手紙は、西津荘園を京都の神護寺の所有物として認めるとともに、荘園の管理者たちへ頼朝に逆らってはならないと警告しています。1265年の地籍簿を14世紀に写したのものには、当時の若狭地方の所有地に関する情報が記載されています。1つの展示は、京都の東寺に属していた太良荘園に焦点を当てていま

す。1461年のものと推定される地図には、農民の間で土地がどのように分割され、どのような灌漑システムが設置されていたかが示されています。荘園の住民から東寺への手紙には、荘園の管理に関連した問題が発生したときに、どのような措置が取られたかが示されています。この手紙は1334年の日付で、内容が真実であると神々へ誓っています。この手紙には寺院に任命された管理者による不当な扱いの申し立てが含まれており、申立人は、名前の下に墨で簡素な円形のマークを付けて「署名」しています。

002-017

Medieval Wakasa Bay: A Cultural Crossroads

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 /
中世の若狭湾-若狭湾を往来する人々と文化-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Medieval Wakasa Bay: A Cultural Crossroads

Overview

Between the twelfth and the sixteenth centuries, Wakasa Bay was an important gateway on the coast of the Sea of Japan that served as a relay point between the capital and destinations both in Japan and mainland Asia. Food, fine art, religious objects, and other goods were traded through large ports like Obama and Tsuruga, and the accompanying increase in travel contributed to the sharing of ideas and cultural exchange.

Learn More

Shipping Food, Works of Art, and Exotic Animals

The northern sea routes from Wakasa Bay reached as far as Hokkaido, while southwestern routes stretched to Kyushu and the Korean Peninsula. Cargo was not limited to food products and everyday items, but also included statues, paintings, sutras, ceramics, and other valuables. Of particular note is a large ship that came to the Obama port in 1408 with several animals not endemic to Japan. One of them was an elephant, the first on record to enter the country, which was later presented to Ashikaga Yoshimochi (1386–1428), the fourth Ashikaga shogun.

Trade Connections within Japan and with Other Countries

Many precious objects arriving at the ports were sent on to other destinations, but some were preserved by influential families and temples in the Wakasa region. In 1422, Hagaji Temple in Obama received an ornate Lotus Sutra that was a 1325 copy of a highly treasured sutra from the Korean kingdom of Goryeo (918–1392). The temple

also benefited from trade relationships within Japan, as Abe Yasusue, a lord of the northeastern Tohoku region, provided financing for the reconstruction of the main hall in 1447.

Christianity in the Wakasa Bay Area

Among the many people whose ideas and beliefs were brought to Japan through the ports of Wakasa Bay were Christian missionaries. In 1560, the Society of Jesus (also known as the Jesuits) baptized a man from Wakasa who went by the name Yohoken Paulo (d. 1596). In 1580, Paulo and his son Toin Vicente (1540–1609) were admitted as new members of the Society. The two made valuable translations of religious texts and greatly contributed to early Christian missionary work in Japan.

Exhibition Items

This section includes items illustrating the diversity of goods and cultural phenomena that passed through Wakasa Bay. A thirteenth-century Buddhist statue from China depicts Karura, a birdlike protector deity adopted from Hindu lore. In 1990, the statue was found washed up on the shore in Obama; it was wrapped in the tattered vermilion cloth upon which it is placed in the glass case.

A reprint of a 1471 map from the Korean Peninsula includes a label for Obama, showing that the port was recognized abroad. A copy of another document specifies that the ship that brought the very first elephant to Japan in 1408 also carried peacocks, sambar deer, cockatoos, and other exotic animals.

A replica of the Lotus Sutra donated to Hagaji Temple in 1422 is notable for the very fine details of illustrations and for the costly materials such as silver and gold paint used on dark blue paper. Another exhibit is a reprinted edition of a text detailing the lives of Christian saints, titled *Sanctos no gosagevo no vchi nvqigaqi* (Excerpts from the Acts of the Saints), that Jesuit converts Yohoken Paulo and Toin Vicente translated into Japanese; note that the translated text uses Latin script.

The white porcelain figure holding an infant depicts Kannon, the Buddhist bodhisattva of compassion. It was made in China in the sixteenth century and is the only one of its kind in Wakasa. Though Kannon holding a child is a common Buddhist theme, some

Japanese Christians worshipped such statues as Maria Kannon due to the visual and symbolic resemblance to Mary, the mother of Jesus in Christian theology.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（中世の若狭湾 若狭湾を行きかう人々と文化）

中世の若狭湾：文化の交差点

概要

12世紀から16世紀にかけて、若狭湾は、首都と日本国内の目的地及びアジア大陸の目的地との間の中継点として機能した、日本海沿岸の重要な玄関口でした。食品、美術品、宗教的な道具などの品物が、小浜や敦賀などの大きな港を経由して取引され、それに伴う旅の増加は、思想の共有と文化交流に貢献しました。

もっと詳しく知る

食品、美術品、異国の動物の輸送

若狭湾からの北航路は北海道にまで至り、南西航路は九州や朝鮮半島まで伸びていました。荷物は食品や日用品だけでなく、像や絵画、経典、陶磁器などの貴重品も含まれていました。特筆すべきは、1408年に小浜港に寄港した、日本に生息していない数匹の動物を乗せた大型船です。そのうちの1頭は象で、記録上初めて日本に入国し、後に第4代足利将軍である足利義持（1386年～1428年）に贈られました。

日本国内および外国との貿易関係

港に到着した多くの貴重品は他の目的地に送られましたが、中には若狭地方の有力な一族や寺院によって保存されたものもありました。1422年、小浜の羽賀寺^{はがじ}は、朝鮮の王朝である高麗（918年～1392年）から来た非常に貴重な経典の1325年の写本であった華麗な法華經を受け取りました。東北地方から来た武将の安倍康季^{あべやすすえ}が1447年に本堂を再建するための資金を提供したため、羽賀寺は日本国内の交易の繋がりからも恩恵を受けました。

若狭湾岸地域のキリスト教

若狭湾の港を通じて思想や信仰が日本にもたらされた多くの人々の中には、キリスト教の宣教師がいました。1560年、イエズス会（ヤソ会としても知られる）は、養方軒パウロ^{ようほうけん}（1596年没）という名前と呼ばれていた若狭出身の男性に洗礼を授けました。1580年、パウロとその息子の洞院ヴィセンテ^{とういん}（1540年～1609年）は、協会から新しい会員として認められました。二人は宗教書の貴重な翻訳を行い、日本における初期のキリスト教伝道活動に大きく貢献しました。

展示品

このセクションでは、若狭湾を通過したさまざまな商品や文化現象の多様さを示す品物などを紹介しています。中国から来た13世紀の仏像は、ヒンドゥー教の伝承から導入された鳥のような守護神であるカルラを表しています。1990年、ガラスのケースに置かれているぼろぼろの朱色の布に包まれたこの像が、小浜の海岸に打ち上げられているのが発見されました。

朝鮮半島からもたらされた1471年の地図の再版には、小浜の港が海外で認められたことを示す、小浜の印が書かれています。別の文書のコピーは、1408年に日本へ最初のゾウを運んだ船が、クジャク、サンバジカ、オウム、およびその他の外国産の動物も運んでいたことを明記しています。

1422年に羽賀寺に寄贈された法華経の複製は、非常に細かい挿絵と、紺色の紙に使用された銀や金の絵の具などの高価な素材が特徴です。

もう1つの展示品は、イエズス会への改宗者の養方軒パウロと洞院ヴィセンテが日本語に翻訳した、サンクトスのご作業の内抜書（聖人の行動の抜粋）と題されたキリスト教の聖人たちの生活を詳しく説明した教科書の復刻版です。特筆すべき点は、この書でラテン文字を使用していることです。

乳幼児を抱く白磁の像は、仏教の慈悲の菩薩である観音を表しています。16世紀に中国で作られたもので、この種のものでは若狭で唯一のものです。子どもを抱く観音は一般的な仏教の題材ですが、一部の日本のクリスチャンは、キリスト教神学におけるイエスの母である聖母マリアに視覚的および象徴的に類似しているため、マリア観音として、このような像を崇拝しました。

002-018

Folding Screens with Maps of Japan and the World

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 世界及日本図

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Folding Screens with Maps of Japan and the World

Overview

The two eight-paneled folding screens with maps of Japan and the world are replicas of rare and valuable examples of cartography produced before the Edo period (1603–1867). They reflect the era when geographic knowledge was dramatically expanding to include regions such as the Korean Peninsula, northeastern China, Western Europe, and the New World. The folding screens were passed down for generations in a wealthy merchant family in Obama and are nationally designated Important Cultural Properties reflecting Obama's role as a port town that connected Japan and the rest of the world. The originals are preserved in the museum archives.

Learn More

Rare Maps Made at the End of the Sixteenth Century

Many maps were produced in Japan throughout the Edo period, but the ones on these ornamental folding screens are thought to have been made earlier, at the end of the sixteenth century. One shows the archipelago of Japan, and the other depicts the entire world based on maps used by sailors from Spain or Portugal. Each screen is about 3.8 meters wide and 1.2 meters tall. The maps' borders, colors, and labels provide insight into how the regions of Japan and the world were understood by mapmakers of the time.

History of the Two Folding Screens

The folding screens were likely made in Kyoto and may have once belonged to a daimyo lord who was close to Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the de facto ruler of

Japan at the end of the sixteenth century. The screens were eventually brought to Obama and were owned by generations of the Kawamura family, wealthy merchants who ran a successful shipping business. The fact that a merchant family in a coastal town could obtain such outstanding works of art demonstrates how prosperous some business owners became due to the thriving trade in Obama.

Exhibition Items

The folding screen with the map of Japan depicts the country surrounded by blue seas and framed by gold-leaf clouds. The coastlines of the islands of Kyushu and Shikoku, as well as the Chugoku and Kansai regions in the southwestern part of Honshu (the main island), are faithfully represented. By comparison, the coastlines of the Tohoku region and the island of Hokkaido in the far northeast of Japan are much less accurate.

The other screen features an oval-shaped map of the world. A band in the middle represents the equator and is divided by red marks at every ten degrees of longitude. Various colors are used to signify regions as interpreted by the cartographers of the time. Much like on the map of Japan, some areas are depicted in a way that resembles modern maps quite closely, while others are less accurate, showing that knowledge and documentation of different continents at the time was uneven. The surface of the folding screen around the map is covered with gold leaf, creating a striking contrast with the deep blue of the oceans.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（世界及日本図）

日本地図・世界地図屏風

概要

日本地図と世界地図を備えた二つの八曲屏風は、江戸時代（1603年～1867年）以前に制作された貴重な地図画の例の複製です。それらは、朝鮮半島や中国北東部、西ヨーロッパ、新世界などのような地域への地理の知識が劇的に拡大した時代を反映しています。この屏風は小浜の豪商の家に代々受け継がれ、日本と世界を結ぶ港町としての小浜の役割を反映し、国の重要文化財に指定されています。原品は当館蔵です。

もっと詳しく知る

16世紀末に作られた珍しい地図

日本では江戸時代に多くの地図が制作されましたが、この装飾的な屏風に描かれた地図はそれよりも早く、16世紀末に制作されたと考えられています。1つは日本列島を描いており、もう1つはスペインやポルトガルの船乗りが使っていた地図をもとに世界全体を描いています。いずれの屏風も、幅約3.8メートル、高さ約1.2メートルです。地図の境界線や色、符号は、当時の地図製作者が日本と世界の地域をどのように理解していたかについての洞察を提供します。

二つの屏風の歴史

この屏風は京都で制作された可能性が高く、16世紀末の日本の事実上の支配者であった豊臣秀吉（1537年～1598年）に近い大名がかつて所有していた可能性があります。屏風は最終的に小浜に持ち込まれ、成功した海運業を営んでいた裕福な商人だった川村家が代々所有していました。海岸沿いの町の商家がこのような優れた芸術作品を手に入れることができたという事実は、小浜の交易が盛んになったことで、商売人がいかに繁栄したかを物語っています。

展示品

日本地図の屏風には、青い海と金箔の雲に囲まれた日本が描かれています。九州や四国地方は本州南西部の中国・関西地方と同じく海岸線が忠実に再現されています。それに比べて、東北地方や日本のはるか北東にある北海道の海岸線は、かなり不正確です。

もう一方の屏風には、楕円形の世界地図が描かれています。中央の帯は赤道を表し、経度10度ごとに赤いマークで区切られています。当時の地図製作者の解釈に従って、地域を表すのにさまざまな色が使用されています。日本地図と同様に、現代の地図に非常によく似た方法で描かれている地域もあれば、かなり不正確な地域もあり、異なる大陸に関する当時の知識と記録にむらがあったことを示しています。地図の周囲の屏風の表面は金箔で覆われており、海の深い青とのはっきりとしたコントラストを生み出しています。

002-019

The Wakasa Takeda Family: Governors of Wakasa Province

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 若狭守護 若狭武田氏

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Wakasa Takeda Family: Governors of Wakasa Province

Overview

The Wakasa Takeda family ruled Wakasa Province from the mid-fifteenth to the late sixteenth century. They were appointed to the position of *shugo* (provincial governor) by the sixth Ashikaga shogun, Ashikaga Yoshinori (1394–1441), and managed the province from Kyoto until the early sixteenth century, when they built Nochiseyama Castle in Obama. The Wakasa Takeda were known for their studies of military strategy and skill in battle, as well as for their support of the arts, such as *waka* and *renga* poetry.

Learn More

Origin and Branches of the Takeda Family

The main branch of the Takeda family claimed descent from Emperor Seiwa (850–881), the 56th emperor of Japan, and the Seiwa Genji line of the Minamoto clan, which produced some of the most famous warriors of the Heian period (794–1185). The family initially served as the *shugo* governors of Kai Province (present-day Yamanashi Prefecture). In 1221, Takeda Nobumitsu (1162–1248) was appointed the governor of Aki Province (present-day western Hiroshima Prefecture), which led to the founding of the Aki Takeda branch of the family.

In 1440, acting on orders from the shogun Ashikaga Yoshinori, Takeda Nobuhide (1413–1440) of the Aki Takeda defeated the Isshiki family, who were serving as the *shugo* governors of Wakasa Province at the time. In recognition, Nobuhide received

the governorship of Wakasa, and this became the origin of the Wakasa Takeda family branch.

Governorship of Wakasa Province

At first, like many other *shugo*, the Wakasa Takeda did not live in Wakasa Province. Despite the title, *shugo* primarily resided in Kyoto, where they could participate in various functions and fulfill their duties at the court, leaving provincial governance to deputies (*shugodai*). However, after the Onin War ravaged the capital in 1467–1477, the Wakasa Takeda began preparations to move to Wakasa.

Along with the completion of Nochiseyama Castle on Mt. Nochiseyama in 1522, the sixth family head Takeda Motomitsu (1494–1551) established an official residence at the base of the mountain. His retainers built smaller castles in strategic positions across the province to defend against attacks from the neighboring regions.

Support of Arts and Culture

Since the Wakasa Takeda were based in Kyoto for many years, they were well connected with cultured figures in the capital. Even after moving to Wakasa Province, they invited prominent poets, painters, scholars, and Zen monks to their residence, promoting the arts and Buddhist faith in the region during their rule.

Decline of the Wakasa Takeda

By the latter half of the sixteenth century, the influence of the Wakasa Takeda family had waned, superseded by the Asakura family of neighboring Echizen Province (present-day eastern Fukui Prefecture) during the power struggle between the Ashikaga shogunate and the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582). As a result, the ninth family head Takeda Motoaki (1552–1582) was taken into Asakura custody. Though he was eventually returned to Wakasa after Nobunaga's victory, he was replaced in 1573 by Niwa Nagahide (1535–1585), one of Nobunaga's generals, ending the long period of Wakasa Takeda rule in the province.

Exhibition Items

Next to the Wakasa Takeda family tree is a replica of a 1574 portrait of Takeda Motomitsu, depicting him on a horse and wearing a costume for mounted archery. The

Wakasa Takeda were known for passing down a type of martial training called *inuomono*, which involved shooting blunted arrows at dogs running in an arena. One volume of a guide to Takeda-style *inuomono* thought to date to the Kan'ei era (1624–1645) is opened to an illustrated page with detailed notes and tips. A document bearing the *kao* (stylized signature) of Takeda Motomitsu, sent to Myotsuji Temple in 1528, exempts the temple from certain taxes and prohibits outsiders from cutting trees on the grounds and requisitioning temple buildings for lodgings. A *waka* poem by Motomitsu displayed as a hanging scroll demonstrates the Wakasa Takeda family's skill in the literary arts.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭守護 若狭武田氏）

若狭武田家：若狭国の守護

概要

若狭武田家は、15世紀半ばから16世紀後半にかけて若狭国を治めました。彼らは、第6代足利将軍であつた足利義教（^{あしかがよしのり}1394年～1441年）から守護（地方の知事）に任命され、16世紀初頭に小浜に後瀬山城を築城するまでは京都から国を治めた。若狭武田家は、彼らの戦略の研究や戦闘の技だけでなく、彼らが和歌や連歌という詩などの芸術を支援したことで知られていました。

もっと詳しく知る

武田家の由来と分家

武田家の本家は、日本の第56代天皇である清和天皇（850年～881年）の子孫であると言われ、また、平安時代（794年～1185年）の最も有名な武士の何人かを生み出した源氏の内の清和源氏系の子孫であると言われています。当初は甲斐国（現在の山梨県）の守護を務めました。1221年、武田信光（^{のぶみつ}1162年～1248年）が安芸国（^{あき}現在の広島県西部）の守護に任命され、安芸武田家という分家が誕生しました。

1440年、将軍・足利義教の命により、安芸武田家の武田信栄（^{のぶひで}1413年～1440年）は、当時、若狭国の守護として務めていた一色家を討ちました。その功績により、信栄は若狭守護職を拝領し、これが若狭武田家という分家の起源となりました。

若狭国守護の職

他の多くの守護と同様に、若狭武田家も最初は若狭国に住んでいませんでした。その肩書きにも

かわらず、守護は主に、さまざまな行事に参加でき、宮廷での義務を果たすことができる京都に居住し、地方の統治は代理人（守護代）に任せました。しかし、応仁の乱が1467年から1477年にかけて都を荒廃させた後、若狭武田家は若狭への移住の準備を始めました。

1522年、後瀬山に後瀬山城が完成するのに伴い、6代当主であった武田元光^{もとみつ}（1494年～1551年）が山麓に公邸を構えました。彼の家臣は、近隣地域からの攻撃から守るために、若狭国中の戦略的な位置により小さな城を建設しました。

芸術と文化の支援

若狭武田家は長年京都に拠点を置いていたため、京の文化人とよく交流がありました。若狭国に移った後も、若狭武田家は著名な歌人、絵師、学者、禅僧を邸宅に招いて、若狭武田家が統治する間、この地域に芸術と仏教信仰を広めました。

若狭武田家の衰退

16世紀後半になると若狭武田家の影響力は弱まり、足利幕府と強力な武将であった織田信長（1534年～1582年）との勢力争いの際に、隣国の越前国（現在の福井県東部）の朝倉家に取って代わられました。その結果、九代当主であった武田元明^{ただもとあき}（1552年～1582年）が朝倉家に拘留されました。信長が勝利した後、彼は最終的に若狭に戻されましたが、1573年に信長^{にわながひで}の武将の一人である丹羽長秀（1535年～1585年）に取って代わられました。

展示品

武田若狭の家系図の隣には、1574年の武田元光の肖像画のレプリカがあり、彼が馬に乗って流鏑馬の衣装を着ている様子が描かれています。若狭武田家は、なまぐらの矢で場内の中を走る犬^{いぬおもの}を撃つことなどを含む武道の訓練の一種である、犬追物の稽古を継承したことで知られていました。寛永年間（1624年～1645年）にまで遡ると考えられている武田式の犬追物の入門書の一つの巻は、詳細な注記とヒントが書かれた絵があるページが開かれています。1528年に明通寺に送られた武田元光の花押の入った文書は、寺院の特定の税を免除し、外部の者が境内の木材を伐採することや宿泊のために寺院の建物を徴用することを禁止しています。元光の和歌が掛け軸として飾られており、武田若狭家の文芸の腕前を示しています。

002-020

Wakasa in the Early Modern Period: Utilizing Roads and Ports to Develop the Region

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 /
若狭国の近世-街道と湊を活かした国づくり-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wakasa in the Early Modern Period: Utilizing Roads and Ports to Develop the Region

Overview

During Japan's early modern period (1568–1867), the lords who governed the Wakasa region made use of roads and ports to develop the lands under their jurisdiction to increase their wealth and power. They regulated trade and taxes, introduced new laws, and implemented projects that helped places like Kumagawa-juku post town and the port town of Obama grow into prosperous centers of trade.

Learn More

Provincial Governance

In 1587, Asano Nagamasa (1546–1611) was appointed to govern Wakasa Province. After conducting land surveys for taxation purposes, he issued a decree in 1589 that exempted Kumagawa-juku from a number of taxes. The area had been a trade and travel crossroads since long before that time, but the new policies were favorable to merchants, helping Kumagawa-juku develop into a thriving post town with numerous shipping agencies, porter stations, shops, and lodging facilities. As a result, traffic significantly increased on surrounding roads, such as the Kurihan Kaido, a major route between Kumagawa-juku and the port of Imazu on Lake Biwa. In 1595, the new governor of Wakasa Province Kinoshita Katsutoshi (1569–1649) issued a set of regulations for both commoners and officials, including strict laws against improper conduct, particularly bribery.

Ties to Powerful Figures

Many merchants in the port town of Obama held favor with Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the de facto leader of Japan at the end of the sixteenth century. Some of them were permitted to resell certain goods on behalf of the government at a profit, notable examples being Luzon pottery from the Philippines and rice collected by Hideyoshi as annual tribute. Additionally, relationships between members of the Toyotomi family and Obama merchants helped to improve the social status and economic standing of certain families in Obama.

Developing the Obama Domain

At the beginning of the seventeenth century, Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the founder of the Tokugawa shogunate, formalized a system of domains governed by daimyo lords. He appointed Kyogoku Takatsugu (1563–1609) as the first lord of the newly established Obama domain. Kyogoku began construction of Obama Castle to replace the smaller Nochiseyama Castle and improve defenses and built a district for samurai residences around the new castle site. From 1634, the domain was governed by the Sakai family, who completed the construction of Obama Castle and helped Obama grow into an even more prosperous port town. The Sakai family oversaw maritime trade, supported merchant businesses, financed temples and shrines, and promoted the development of regional crafts such as Wakasa lacquerware.

Exhibition Items

The documents on display are related to the development of the Wakasa region in the early modern period of Japanese history. A replica of a picture scroll from the Edo period (1603–1867) depicts a bird's-eye view of Kumagawa-juku post town, which is notably similar to the town's present-day layout. The guardhouse that was used to monitor the movement of travelers and goods can be seen in the middle, near the fence at the entrance to the post town. A reproduction of the decree issued by Asano Nagamasa in 1589 after conducting land surveys exempts Kumagawa-juku from certain taxes. A hanging scroll exhibits a replica of the decree by Kinoshita Katsutoshi from 1595 that outlined rules for proper behavior.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭国の近世 街道と湊を活かした国づくり）

近世の若狭 道と港を活用した地域の発展

概要

日本の近世（1568年～1867年）の間、若狭地方を治めた領主たちは、彼らの管轄下にある土地を開発し、富と権力を増大させるため、道路や港を利用しました。彼らは交易と税を統制し、新しい法律を導入し、熊川宿という宿場町や小浜の港町のような場所を、繁栄した交易の中心地へ成長させるのを助けるプロジェクトを実施しました。

もっと詳しく知る

若狭国の統治

1587年には、浅野長政^{ながまさ}（1546年～1611年）が若狭国を治めるよう任命されました。徴税のための検地を行った後、彼は1589年に熊川宿の様々な税を免除する勅令を出しました。この地域は古くから交易と旅の交差点となっていたましたが、新しい政策は商人に有利なものであり、それによって熊川宿は多くの運送代理店、運搬人の駅、店舗、宿泊施設を備えた宿場町へと発展させるのを助けました。その結果、熊川宿と琵琶湖沿いにある今津港を結ぶ主要ルートであった九里半街道^{くりはん}など周辺道路の交通量が大きく増加しました。1595年、若狭国の新たな統治者となった木下勝俊^{きのした かつとし}（1569年～1649年）は、不適切な行為、特に贈収賄に対する厳格な法律を含む、庶民と役人に対する一連の規則を発行しました。

権力者との絆

小浜の港町の多くの商人は、16世紀末の日本の事実上の指導者であった豊臣秀吉（1537年～1598年）に好意を持っていました。彼らの中には、政府に代わって特定の商品を再販し利益を得ることを許可された者もいて、商品の顕著な例としては、フィリピンからのルソン陶器や秀吉が年貢として徴収した米などがありました。さらに、豊臣家の者と小浜の商人との結びつきは、小浜の特定の家族の社会的地位と経済的地位を向上させるのに役立ちました。

小浜藩の開発

17世紀初頭、徳川幕府の創始者である徳川家康（1543年～1616年）は、大名という領主によって統治される藩の体制を確立しました。家康^{きやうくた かつぐ}は京極高次（1563年～1609年）を小浜藩の初代藩主に任命しました。京極は、小さな後瀬山城に取って代わる小浜城の築城を開始し、防御を強化し、新しい城の周りに武家屋敷の地区を造りました。1634年からは酒井家が藩を統治し、彼らが小浜城の築城を完了させ、小浜がさらに繁栄した港町に成長するのを助けました。酒井家は、海運交易を監督し、商人の事業を支援し、寺院や神社に資金を提供し、若狭漆器などの地域の工芸品の発展を促進しました。

展示品

展示されている資料は、日本の歴史における近世の若狭地方の発展に関連するものです。江戸時代（1603年～1867年）の絵巻の複製品には、熊川宿という宿場町の鳥瞰図が描かれており、それは現在の町の配置とよく似ています。旅人や物資の動きを監視していた番所は、図の中ほ

ど、宿場町の入り口の柵の近くに見ることができます。浅野長政が1589年に土地の検地を経て発行した布告の複製は、特定の税金から熊川宿を免除しています。掛け軸は、適切な行動の規則を概説した1595年の木下勝俊による法令の複製を展示しています。

002-021

The Kyogoku Family and the Obama Domain

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 京極家と若狭小浜藩

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Kyogoku Family and the Obama Domain

Overview

When the Tokugawa shogunate formalized a system of domains ruled by daimyo lords in the early seventeenth century, Wakasa Province was assigned to Kyogoku Takatsugu (1563–1609) as the Obama domain in 1600. As the first ruler of the new domain, Takatsugu soon began construction of Obama Castle, as well as various improvements around the town and the port, but died in 1609 before the transformation of Obama was complete. His son Tadataka (1593–1637) ruled the Obama domain and continued the projects until 1634, when he was transferred to the Matsue domain.

Learn More

Kyogoku Takatsugu

The power of the Kyogoku family waned considerably after the Onin War (1467–1477), but the 17th head Kyogoku Takatsugu (1563–1609) managed to restore the family's fortunes. He changed allegiances several times in his younger years and distinguished himself in military campaigns under Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the de facto leader of Japan at the time. In recognition, Takatsugu received the rank of daimyo and became lord of Otsu Castle in Omi Province (present-day Shiga Prefecture). In 1587, he married Ohatsu (1570–1633), a woman of noble birth whose family connections would prove invaluable to the Kyogoku family.

Takatsugu became an ally of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), a powerful daimyo who aimed to take control of the country after Hideyoshi's death. As Ieyasu gathered his

forces in the eastern part of the country, Takatsugu managed to delay some of his enemies at Otsu Castle, contributing to Ieyasu's victory in the decisive Battle of Sekigahara in 1600. In recognition, Takatsugu was appointed the first lord of the newly formed Obama domain in the same year.

As domain lord, Takatsugu sought to improve the defenses of the Wakasa region by starting construction of Obama Castle to replace the smaller Nochiseyama Castle. He also oversaw changes in the town of Obama itself, supporting the growth of merchant businesses in the busy port town and building a district for samurai residences around the castle.

Ohatsu (Jokoin)

Ohatsu was one of three daughters born to the daimyo Azai Nagamasa (1545–1573) and his wife Oichi (1547–1583), a sister of the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582). Ohatsu married Kyogoku Takatsugu in 1587 and became the mistress of Otsu Castle. Despite her inability to bear children, she was considered a beautiful and intelligent wife who served as her husband's trusted advisor. Her family connections were a valuable addition to the marriage, as her elder sister was a favored consort of Toyotomi Hideyoshi and her younger sister was the wife of Tokugawa Hidetada (1579–1632), the second Tokugawa shogun. This positioned Ohatsu to serve as an intermediary between two of the most powerful families in that period of Japan's history.

In 1600, Ohatsu assisted her husband in defending Otsu Castle against enemies of the Tokugawa, and when Takatsugu was rewarded with lordship of the Obama domain, they both moved to Wakasa. After Takatsugu died in 1609, Ohatsu followed the tradition of noblewomen at the time and became a nun at Jokoji Temple in Obama under the name Jokoin. Though nuns were meant to withdraw from the world, Ohatsu was using her family connections to broker peace between the Toyotomi and the Tokugawa families, who were at odds for years. When the conflict came to a head in 1615, Ohatsu was in the Toyotomi-controlled Osaka Castle, still attempting to negotiate with her elder sister, and had to be evacuated by her retainers before the castle was burned down by Tokugawa forces.

Ohatsu passed away in 1633 and was laid to rest at Jokoji Temple in accordance with her final wishes.

Exhibition Items

Two hanging scrolls showcase replicas of Edo-period (1603–1867) portraits of Kyogoku Takatsugu in court attire and his wife Ohatsu (Jokoin) in the clothing typical of a noblewoman who has become a nun. Other items on display include a replica of the Kyogoku family genealogy and an illustrated copy of *Okiku monogatari* (The Tale of Kiku), open to the pages that depict the dramatic evacuation of Ohatsu from Osaka Castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（京極家と若狭小浜藩）

京極家と小浜藩

概要

17世紀初頭に、徳川幕府が大名という領主によって藩を治める体制を確立すると、若狭国は小浜藩として1600年に京極高次（1563年～1609年）に割り当てられました。この新しい藩の最初の統治者として、高次はすぐに小浜城の建設や、町と港周辺のさまざまな改良工事を始めましたが、小浜の変化が完了する前に、1609年に亡くなりました。彼の息子の忠高（1593年～1637年）は1634年に松江藩に移されるまで、小浜藩を統治しその工事を続けました。

もっと詳しく知る

京極高次

応仁の乱（1467年～1477年）の後、京極家の勢力は大きく衰退しましたが、17代当主・京極高次（1563年～1609年）なんとか一族の繁栄を再興することができました。彼は若い頃に何度か忠誠を変え、当時の日本の事実上の指導者であった豊臣秀吉（1537年～1598年）の下での軍事作戦で頭角を現しました。高次はその功績を認められて大名となり、近江国（現在の滋賀県）の大津城の城主となりました。1587年に、高次は、後に彼女の家系が京極家にとってかけがえのないものだったと証明された高貴な生まれの女性、お初（1570年～1633年）と結婚しました。

高次は、秀吉の死後に国の支配を目指した強力な大名であった徳川家康（1543年～1616年）の同盟者になりました。家康が日本の東部に軍を集めたとき、高次はどうか敵の一部を大津城で足止めし、1600年の重大な関ヶ原の戦いで家康の勝利に貢献しました。同年、この功績に

より、高次は新たにつくられた小浜藩の最初の藩主に任命されました。

藩主として、高次は若狭地方の防御を改善するために、小さな後瀬山城に代わる小浜城の建設を開始しました。彼はまた、小浜の町自体の改変を監督し、にぎやかな港町での商人たちの商いの成長を支え、城の周りに侍たちの住居の地区を建設しました。

お初^{じょうこういん}（常高院）

お初は、大名の浅井^{あざいながまさ}長政（1545年～1573年）と有力な武将だった織田信長（1534年～1582年）の妹であり長政の妻だったお市（1547年～1583年）の間に生まれた3人の娘の1人でした。お初は1587年に京極高次と結婚し、大津城の女主人となりました。彼女は子どもを産むことができませんでしたが、夫の信頼できる相談役として尽くした、美しく知的な妻と見なされていました。彼女の姉は豊臣秀吉の寵愛を受け、妹は二代目将軍の徳川^{ひでただ}秀忠（1579年～1632年）の妻だったので、初の家系は高次との結婚に際して貴重な財産となりました。これによってお初は、日本の歴史上のその時代で最も有力な2つの家の間の仲介者として尽くしました。

1600年、お初は、徳川家の敵から大津城を守る夫を助け、そして高次が小浜藩主の称号を与えられると、二人は若狭に移りました。1609年に高次が亡くなった後、お初は当時の高貴な女性の慣例に従い、小浜の常高寺^{じょうこうじ}で尼となり、常高院と名乗りました。尼僧は俗世から引き下がるものとされていましたが、お初は家のつながりを利用して、何年にもわたって対立していた豊臣家と徳川家の間の和平の仲裁を行いました。1615年にその争いが頂点に達したとき、お初は豊臣家が支配する大坂城にいて、まだ彼女の姉との交渉を続けていたので、城が徳川軍によって焼け落とされる前に、お初の家臣たちは彼女を避難させなければなりませんでした。

お初は1633年に亡くなり、彼女の遺願によって常高寺に葬られました。

展示品

二つの掛け軸は、江戸時代（1603年～1867年）の宮廷装束の京極高次と、尼となった高貴な女性の典型的な服装をした妻のお初（常高院）の肖像画の複製です。そのほかの展示には、京極氏系図の複製や、お初の大坂城からの劇的な脱出を描いたページを開いた「お菊物語（菊の物語）」の挿絵の複写などがあります。

002-022

The Sakai Family and Development of the Obama Domain

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 /
若狭小浜藩の発展-酒井家と家中-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Sakai Family and Development of the Obama Domain

Overview

The powerful and well-connected Sakai family was the second to rule as daimyo of the Obama domain. Sakai Tadakatsu (1587–1662), the first Sakai lord of the domain, completed the construction of Obama Castle and introduced various measures to further develop the port town of Obama. The Sakai family financed Shinto shrines and Buddhist temples, promoted local crafts such as Wakasa lacquerware, and oversaw the lucrative maritime trade through the Obama port for over two hundred years.

Learn More

The Rule of Sakai Tadakatsu

In 1634, Sakai Tadakatsu became the ruler of the Obama domain. He was a long-time retainer of the Tokugawa family and held several prominent positions in the Tokugawa shogunate, including *roju* (“elder”) and *tairo* (“great elder,” a position second only to the shogun). He spent most of his time in Edo (now Tokyo), the seat of the shogunate, and governed Obama from afar, frequently corresponding by letter with those left in charge of the domain.

Tadakatsu had previously been the lord of the Kawagoe domain (present-day Saitama Prefecture), and when he moved to Obama, he brought in performing artists and styles of entertainment popular in eastern Japan. One of these, the Unpin Jishi lion dance, is still performed in one of Obama’s wards.

Completion of Obama Castle

Under Sakai rule, the construction of Obama Castle started by the first domain lord Kyogoku Takatsugu (1563–1609) was finally completed in 1641, after more than thirty years of work. Obama soon became a flourishing castle town and a bustling port with a thriving entertainment district. The Sakai family was also known for supporting Wakasa artisans making lacquerware and other traditional crafts.

The Final Years of Sakai Rule

The Sakai governed Obama until the domain system was abolished in 1871. The 14th and last Sakai daimyo of the domain, Sakai Tadaaki (1813–1873), also served as the representative of the Tokugawa shogunate in Kyoto. During the tumultuous political events surrounding the downfall of the Tokugawa shogunate and the restoration of imperial rule in 1868, Tadaaki was nearly labeled an enemy of the newly enthroned Emperor Meiji (1852–1912). However, the skillful political tactics of Obama domain retainers allowed him to pledge allegiance to the emperor and helped the domain avoid war.

Exhibition Items

The suit of armor belonged to the last daimyo of the Obama domain, Sakai Tadaaki. Most of the armor was made in the Edo period (1603–1867), but the helmet is much older and was made sometime between the fourteenth and the sixteenth centuries. Decorative metal fittings on the armor bear the Sakai family crest. Other items on display include Sakai family genealogies, a copy of a letter sent to Sakai Tadakatsu by the trade representative of the Joseon kingdom on the Korean Peninsula, and a hanging scroll with a replica of a portrait of Tadakatsu from 1660 that depicts him in court attire. A four-tiered lacquered box made using modern Wakasa lacquerware techniques and a recreation of a traditional lacquered box for storing valuable items serve as examples of a regional craft promoted by the Sakai lords during their rule.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭小浜藩の発展 酒井家と家中）

酒井家と小浜藩の発展

概要

有力で良い縁故を持っている酒井家は、2番目の小浜大名として藩を治めました。酒井氏で初め

て藩主となった酒井忠勝（1587年～1662年）は小浜城を完成させ、港町小浜をさらに発展させる様々な施策を導入しました。酒井家は、200年以上にわたり、神社や寺院に資金を提供し、若狭漆器などの地元の工芸品を奨励し、小浜港を介した実入りの良い海上貿易を監督しました。

もっと詳しく知る

酒井忠勝による統治

1634年、酒井忠勝が小浜藩の統治者になりました。彼は徳川家の長年の家臣であり、老中（「長老」）や大老（「偉大な長老」、将軍に次ぐ地位）など、徳川幕府でいくつかの重要な地位を占めていました。彼は幕府の本拠地である江戸（現在の東京）でほとんどの時間を過ごし、藩を任せている者と頻繁に手紙で通信し、遠方から統治を行いました。

忠勝は、以前は川越藩（現在の埼玉県）の藩主であり、小浜へ移った際、東日本で人気の芸人たちや芸能のスタイルを持ち込みました。その一つである雲うん浜びん獅子ししという獅子の舞は、今でも小浜のある一地区で演じられています。

小浜城の完成

酒井政権の下で、初代藩主であった京極高次（1563年～1609年）が着工した小浜城は、30年以上の歳月を経て1641年に完成しました。小浜はすぐに城下町として栄え、繁華街のある賑やかな港となりました。酒井家はまた、漆器やその他の伝統工芸を作る若狭の職人たちを支援したことで知られています。

酒井家による統治の末期

酒井家は藩制が廃止された1871年まで小浜を統治しました。第14代、最後の酒井家大名であった酒井忠義ただあき（1813年～1873年）は、京都で徳川幕府の代表も務めました。徳川幕府の崩壊と1868年の天皇制の回復をめぐる激動の政治的出来事の間、忠義は新たに即位した明治天皇（1852年～1912年）の敵とみなされそうになりました。しかし、小浜藩士の巧みな政治戦略により、彼は天皇に忠誠を誓うことができ、小浜藩が戦争を回避するのに役立ちました。

展示品

ひと揃いの鎧は、最後の小浜大名であった酒井忠義のものでした。その鎧の大部分は江戸時代（1603年～1867年）に作られましたが、兜ははるかに古く、14～16世紀のいつ頃かに作られました。鎧に付けられた飾り金具には酒井家の家紋が入っています。この他にも、酒井家の系図、朝鮮半島にあった朝鮮王朝の通商代表が酒井忠勝に送った書簡の写し、宮廷の装束を着た忠勝の肖像が描かれた1660年の掛け軸などが展示されています。若狭漆器の技法を現代に生かした四重塗りの箱や、貴重な品を入れるための伝統的な漆塗りの箱と蓋を再現したものは、酒井家の統治下で酒井家に奨励された郷土工芸の例です。

002-023

Promotion of Academics in the Obama Domain

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 小浜藩の学問奨励

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Promotion of Academics in the Obama Domain

Overview

Throughout the Edo period (1603–1867), lords of the Obama domain encouraged education and learning. They opened the first domain-funded school in the region that is now Fukui Prefecture and financed scientific research with a particular focus on medicine. This helped produce a succession of outstanding scholars whose efforts changed medical understanding throughout Japan. Two such scholars were Obama physicians Nakagawa Junan (1739–1786) and Sugita Genpaku (1733–1817), who introduced Western medical knowledge of anatomy to the country, contributing to the cultural exchange between Japan and Europe.

Learn More

Promotion of Confucian Studies

Sakai Tadakatsu (1587–1662), the first Sakai lord of the Obama domain, initiated the promotion of Confucian studies by inviting a teacher of Confucianism to educate the citizens of the domain. His successor, Sakai Tadao (1630–1682), was similarly enthusiastic about learning and organized open lectures for the Obama townspeople. The seventh Sakai lord of the domain, Sakai Tadamochi (1723–1775), invited a Confucian scholar to instruct high-ranking retainers.

Development of Medical Science

The first medical dissection of a human body in Japan took place in 1754 in Kyoto. It was performed at the request of physicians from Obama and was approved by Tadamochi, who was the representative of the Tokugawa shogunate in the capital. This

substantially improved understanding of human anatomy and increased interest in medical science in the Obama domain.

Procuring Dutch Anatomy Books

In 1771, Nakagawa Junan, an Obama physician who also specialized in Dutch studies, showed his colleague Sugita Genpaku two Dutch books on anatomy, *Ontleedkundige tafelen* (Anatomical Tables) and *Anatomicae institutiones corporis humani* (Textbook of Human Anatomy). Sugita found them highly informative and submitted a request to Sakai Tadatsura (1752–1806), the ninth Sakai lord, to buy the expensive books for the domain.

The First Complete Translation of a Western Medical Text

Sugita and Nakagawa referred to *Ontleedkundige tafelen* when they witnessed another autopsy. The two scientists were stunned by the accuracy of the anatomical diagrams in the book and decided to create a translation of the Dutch text to be used in Japan. Three other physicians were involved in the project, and the resulting translation, titled *Kaitai shinsho* (New Text on Anatomy), was published in 1774. This was the first complete translation of a Western medical text in Japan.

The First Domain-Funded School in Wakasa and Echizen

In the same year of 1774, Tadatsura founded Junzokan, which became the first school to be funded and run by a domain in the Wakasa and Echizen regions (present-day Fukui Prefecture). Younger students learned to read, while older students focused on Japanese and Chinese history, sutra recitation, and Confucian studies. Several other domain-run schools and over 500 *terakoya* schools managed by Buddhist temples were built in Wakasa and Echizen during the Edo period.

Exhibition Items

Items of note include the original four volumes of *Kaitai shinsho* and a French edition titled *Tabules anatomiques* from 1734, which contains drawings identical to those in the Dutch version obtained by Sugita and his colleagues. A poster compares the illustrations found in the Dutch book with the new renditions made for *Kaitai shinsho* by the Western-style painter Odano Naotake (1749–1780). Two hanging scrolls feature portraits of Sugita and Nakagawa. Other exhibits include Sugita's memoir on

medical science titled *Keiei yawa* (Talks with My Shadow), which was published in 1810, and a research text on tobacco compiled by Otsuki Gentaku (1757–1827), a student of Sugita. The gauntlets and headgear come from a suit of armor that belonged to Ban Nobutomo (1773–1846), a retainer of the Obama domain and a scholar of Japanese classics who once studied at Junzokan.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小浜藩の学問奨励

概要

江戸時代（1603年～1867年）、小浜藩の藩主は教育や学問を奨励しました。彼らは、現在の福井県であるこの地域に、藩が資金を提供する最初の学校を設立し、特に医学に焦点を当てた科学研究へ資金を提供しました。これにより、優れた才能を持つ学者が次々と輩出され、彼らの努力が日本中の医学的理解を変えました。そのような学者の内の二人が、西洋医学の解剖学の知識を日本に伝え、日本とヨーロッパの文化交流に貢献した、小浜の医師であった中川順庵（1739年～1786年）と杉田玄白（1733年～1817年）です。

もっと詳しく知る

儒学の振興

小浜藩の初代の酒井氏藩主であった酒井忠勝（1587年～1662年）は、藩民の教育のために儒学の教師を招き、儒学の振興に着手しました。後継者の酒井忠直（1630年～1682年）も同様に学問に熱心で、小浜の町人向けの公開講座を開きました。7代目の酒井小浜藩主であった酒井忠用（1723年～1775年）は位の高い家臣を指導させるため儒学者を招きました。

医学の発達

日本で最初の医学的な人体解剖は、1754年に京都で行われました。それは小浜の医師が要請し、都の徳川幕府の代表であった忠用の承認を得て行われました。これにより、人体解剖学の理解が大幅に向上し、小浜藩における医学への関心が高まりました。

オランダの解剖図書の入手

1771年、小浜の医師であり、また蘭学を専門とした中川順庵は、同僚の杉田玄白へ、解剖学に関する2冊のオランダ語の本、ターヘル・アナトミア（解剖一覧表）とカスパリウス・アナトミア（人体解剖学の教科書）を見せました。杉田はそれらが非常に有益であると感じ、第9代の酒井氏藩主である酒井忠貞（1752年～1806年）へ、この高価な本を藩のために購入してもらいたい出ました。

初の西洋医学書の完訳

杉田と中川は別の解剖を目にした際、ターヘル・アナトミアを参照しました。この2人の科学者は、その本の解剖図の正確さに驚愕し、日本で使えるようにそのオランダ語の教科書の翻訳を作成することを決意しました。このプロジェクトには他に3人の医師が関わり、翻訳された結果、解体新書（解剖に関する新しい文書）と題され、1774年に出版されました。これは、日本で最初の西洋医学書の完全な翻訳でした。

若狭・越前で初の藩校

同じく1774年に、忠貫は順造館^{じゆんぞうかん}を創設し、これが若狭・越前地方（現在の福井県）で初めて藩が出資し運営する学校となりました。低学年の学生は読み方を学び、高学年は日本と中国の歴史、読経、儒学を集中して学びました。江戸時代には、若狭と越前には他のいくつかの藩営校と500を超えるお寺が運営する寺子屋という学校が建てられました。

展示品

注目すべき品は、解体新書の原本4冊と、杉田と彼の同僚が入手したオランダ語版と同じ図面を含むターヘル・アナトミアの1734年刊のフランス語版などがあります。あるポスターでは、オランダの本にある挿絵と、洋画家・小田野直武（1749年～1780年）が解体新書のために新たに描いた挿絵を比較しています。2つの掛け軸には、杉田と中川の肖像画が描かれています。そのほかの展示品には、1810年に刊行された杉田の医学的回顧録である「形影夜話^{けいえい やわ}」（自分の影と語る）や、杉田の弟子である大槻玄沢^{おおつきげんたく}（1757年～1827年）が編纂したタバコの研究書などがあります。筆手と兜は、かつて順造館で学んだ小浜藩士であり国学者であった伴信友^{ばんのぶとも}（1773年～1846年）の所有していた鎧兜から来たものです。

002-024

Ports of Call for Kitamaebune Ships: Obama and Tsuruga

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭歴史博物館 / 北前船の寄港地-小浜と敦賀-
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Ports of Call for Kitamaebune Ships: Obama and Tsuruga

Overview

Kitamaebune (“north-bound ships”) were trading ships that sailed the coastal route between Osaka and Hokkaido from the mid-Edo period (1603–1867) to the early Showa period (1926–1945). They traveled from the Seto Inland Sea to the Sea of Japan and back, calling at various ports to buy and sell local products, such as herring and kelp from the north and clothing, sake, and salt from the west. Maritime trade stimulated the development of port towns, brought prosperity to merchants operating shipping businesses, and greatly contributed to cultural exchange around the country.

Learn More

Kitamaebune Ships

In the Wakasa region, the ships now commonly referred to as *kitamaebune* were called *sengokubune*, *omawari*, and *bezaisen*. The *kitamaebune* ships carried goods on both outbound and return journeys, trading at every stop, which ensured higher profits compared to vessels that transported cargo from Osaka to Edo (present-day Tokyo) along the Pacific coast, which made the return trips with empty holds.

Prosperity through Maritime Trade

Both Obama and Tsuruga were important ports of call for the *kitamaebune* ships, as they were located at a midway point of the route along the Sea of Japan and were relatively close to Kyoto, the capital at the time. This allowed ships to unload in Obama or Tsuruga so that goods could be transported over land to Kyoto. The *kitamaebune* were essential to the development of the two towns, bringing food,

merchandise, and news from distant regions, stimulating the trade-based economy, and conveying aspects of various cultures from across Japan to each port of call. Tsuruga, in particular, flourished due to the number of ships entering the port, with the peak of activity recorded in the latter half of the seventeenth century.

Development of Alternative Routes and Means of Transport

Before long, the so-called westward route that passed through the Kanmon Straits between the islands of Honshu and Kyushu and allowed direct access to Osaka through the Seto Inland Sea was pioneered and soon proved more convenient. As a result, the partially overland trading route through Tsuruga, Obama, Lake Biwa, Otsu (present-day Shiga Prefecture), and Kyoto became less popular. With the subsequent development of railways and other means of transport, the use of the *kitamaebune* ships gradually declined.

Exhibition Items

The most eye-catching exhibit is a replica of an elaborate model of a *kitamaebune* ship, the original of which is kept at Hachiman Jinja Shrine in Obama. Specially crafted models of ships were regarded as sacred vessels for the spirit of Funadama, a guardian deity believed to grant safety at sea. This variation of Funadama worship is particular to Obama, while in other regions objects representing the deity were traditionally mounted on the masts of the actual ships.

Other items on display include a compass from the mid-nineteenth century that uses the characters for the Chinese zodiac signs to indicate directions, a wooden tablet that served as proof of passage for ships, and a reproduction of a crewmember's diary from an Obama domain *kitamaebune*. The large Wakasa tile figure of a *shachihoko*, a mythical creature with the head of a tiger and the body of a fish, and Wakasa agate carvings of a hen with three chicks exemplify some of the goods that were shipped from the region during the *kitamaebune* trade period.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

北前船の寄港地 小浜と敦賀

概要

北前船（「北行きの船」）は、江戸時代中期（1603年～1867年）から昭和初期（1926年～1945年）にかけて、大阪と北海道の間の沿岸の航路を航行した交易船です。瀬戸内海から日本海を往復し、北からはニシンや昆布、西からは衣類や酒、塩などといったような、地場産品を売買するために各地の港に寄港しました。海運は港町の発展を促し、海運業を営む商人に繁栄をもたらし、国内の文化交流に大きく貢献しました。

もっと詳しく知る

北前船という船

若狭地方では、いま一般的に北前船と呼ばれている船は、千石船、大廻り、弁才船と呼ばれていました。北前船は往路・復路ともに物資を運び、各寄港地で交易を行っていたため、大坂から江戸（現在の東京）まで太平洋沿岸に沿って貨物を輸送した船（復路では荷が無かった）と比べると、より高い利益を確保していました。

海運貿易による繁栄

小浜も敦賀も、日本海側の航路の中間地点に位置し、当時の首都であった京都にも比較的に近い場所にあったので、北前船にとって重要な寄港地でした。これにより、船は小浜や敦賀で荷降ろしができ、そのため商品を陸路で京都へ運ぶことができました。北前船は二つの町の発展に不可欠なもので、遠く離れた地域から食べ物や商品、ニュースを運び、交易経済を刺激し、日本各地のさまざまな文化を寄港地に伝えました。特に敦賀は入港する船の多さによって栄え、17世紀後半に活動のピークを記録しました。

代替ルートと輸送手段の開発

やがて、本州と九州の間の関門海峡を通り、瀬戸内海を経由して大阪に直接アクセスできる、いわゆる西回りルートが開拓されると、すぐに、より便利であると判明しました。その結果、敦賀、小浜、琵琶湖、大津（現在の滋賀県）、京都を通る陸路の交易路の一部は人気が下がりました。その後の鉄道やその他の交通手段の発達に伴い、北前船の利用は概して徐々に減少していきました。

展示品

最も目を引く展示は、北前船の精巧な模型の複製で、原品は小浜の八幡神社に保存されています。特別に製作された船の模型は、海の安全を授けると信じられていた守護神である船玉の霊の神聖な器と見なされていました。他の地域では、神を表す品物は伝統的に実際の船の帆柱に取り付けられていたため、船玉崇拝のこの変化は小浜に特有のものです。

展示されている他の品物には、干支の文字を使用して基本的な方向を示す19世紀半ばの方位磁石や、船の通過の証明として機能した木製の札、小浜藩の北前船の乗組員の日記の複製が含まれます。頭が虎で体が魚という想像上の生き物であるシャチホコの大きな若狭瓦の像と、3羽の雛と雌鶏の若狭瑠璃の彫刻は、北前船が交易していた時代にこの地域から出荷された商品の例です。

002-025

Former Ryotei Hotoro: Entrance and Reception Area

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 /

玄関口の部屋・茶の間

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Former Ryotei Hotoro: Entrance and Reception Area

Hotoro was once one of the largest luxury restaurants and entertainment establishments (*ryotei*) in the Sanchomachi area. The building was constructed in the late nineteenth century and preserves the historic atmosphere of the neighborhood, which had multiple teahouses, restaurants, and inns during the time when Obama was a bustling port. The expert craftsmanship, high-quality materials, distinctive architecture, and refined interior details reflect Hotoro's prosperity and serve as reminders of its past as a *ryotei* that entertained distinguished guests.

Entrance

The entryway has a small garden with a stone lantern, a tiled floor that was quite unusual for that time period, and a round latticed window. Originally the floor was earthen, but it was later replaced with small ceramic tiles carefully laid by hand. Eye-catching details like the decorative window gave potential customers an idea of the elegant interior that awaited them inside the *ryotei*.

Reception Area

Upon stepping into the building, guests found themselves in a large reception space. The proprietress would be seated in the far-left room, welcoming visitors and making arrangements to accommodate their requests. She conversed with the patrons at the brazier table made of zelkova wood, gathering information and strengthening personal and business relationships.

Historic and Everyday Objects in the Former Ryotei

A variety of other notable items occupy the reception space. Boxes for paper lanterns stored on high shelves bear the ringed cross crest of the Murata family, the owners of the establishment. This part of the building contains two Shinto altars: in an alcove facing the entrance is a small shrine dedicated to Inari, a deity of commerce and agriculture, and in the far-left room is the family's household altar (*kamidana*). One of the shelves displays several traditional dolls called Fukusuke that are thought to bring commercial success and good fortune. Comparatively recent additions include beckoning cat figurines (*maneki-neko*) believed to attract customers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（旧料亭「蓬嶋楼」 玄関口の部屋・茶の間）

旧料亭蓬嶋楼：入口と受付のエリア

蓬嶋楼は、かつては三丁町エリアで最大級の高級レストランであり娯楽施設（料亭）でした。この建物は19世紀後半に建設され、小浜が賑やかな港だった頃に複数の茶屋やレストラン、旅館があった、近隣の歴史的な雰囲気を保存しています。熟練した職人技、高品質の素材、特徴的な建築、洗練されたインテリアのディテールは、蓬嶋楼の繁栄を反映しており、貴賓をもてなした料亭としてのその過去を思い出させるものとして役立ちます。

玄関

玄関は、石灯籠を配した小さな庭と、当時としては珍しいタイル張りの床、丸い格子窓が特徴です。玄関はもともと土の床でしたが、後に手作業で丁寧に敷かれた小さな陶磁器製のタイルに置き換えられました。装飾的な窓のように目を引くディテールたちは、これから訪れる顧客にその料亭の建物内で彼らを待っている優雅なインテリアを想像させるものでした。

応接間

建物に入ると、お客は自身が広い応接間にいることに気づきました。女将は左奥の部屋に座って、訪問者を歓迎し、彼らの要望に応じるための手配をしました。けやきでできた火鉢の台で常連客と会話を交わし、情報を収集し、人間関係に加えて商売的な関係を強化しました。

旧料亭の歴史的な品と日用品

その他にも、その応接間にはさまざまなこだわりが見られます。高い棚に収納された提灯用の箱には、店主であった村田家の十字を輪で囲んだ紋が入っています。建物のこの部分には2つの神道の祭壇があります。入り口に面した床の間には、商業と農業の神である稲荷をまつる小さな神社があり、一番左の部屋にはその家族の家庭のための祭壇（^{かみだな}神棚）があります。その棚の1つには、商業的

成功と幸運をもたらすと考えられている、^{ふくすけ}福助と呼ばれる伝統的な人形がいくつか飾られています。比較的最近に追加されたものには、顧客を引き付けると信じられている手招きする猫の置物（^{まねきねこ}招き猫）があります。

002-026

Former Ryotei Hotoro: Second-Floor Parlor

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 / 2階座敷

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Former Ryotei Hotoro: Second-Floor Parlor

The lavish parlor on this floor was the heart of the luxury restaurant (*ryotei*) Hotoro and was dedicated to entertaining guests. The two large rooms were used as a single space, and the side room was available for private engagements. The parlor was designed with a particular focus on high-quality materials and eye-catching features, such as intricately carved transoms, red walls, and windows and sliding doors with translucent *washi* paper. The fine-grain wood ceiling on this floor is higher than on the first floor, which is typical for a building in an entertainment district where customers were hosted upstairs.

A Space Designed for Entertaining Guests

Hotoro did not have a kitchen and dishes were specially ordered from outside caterers, which was considered the mark of a truly elegant establishment. Guests gathered at the large table in the far room to eat, drink, and enjoy each other's company. The room near the parlor's entrance served as a stage for music and dance performances by geisha (called *geiko* in Obama, as is the custom in Kyoto). Examples of musical instruments used by *geiko*, such as shamisen and a small drum, are displayed in a dedicated recess along the wall. To the left of the instruments is a large "full moon" design element that serves as a frame for a tokonoma alcove with a hanging scroll. A similar "crescent moon" in the opposite corner of the parlor frames a flower arrangement and creates an artistic balance between the two rooms.

Works of Art Enhancing the Impression of Luxury

The art on display in the parlor includes a variety of paintings, calligraphy, ceramics, and woodcarvings. Some remain from the time when Hotoro operated as a *ryotei*, while others were added in later years. In the far room, a painting of a flock of sparrows in flight was the subject of a game enjoyed by patrons. The goal was to count the birds, a task that likely became more and more challenging after a few drinks. Near the “crescent moon” motif hang two calligraphy pieces by Iwaya Ichiroku (1834–1905), an influential artist who contributed to the development of modern calligraphy. Another prominent work of art is a pair of six-paneled folding screens that span the length of both rooms. The gilded panels display calligraphy by Tatsu Soro (1714–1792), a Confucian scholar and poet known for his works in classical Chinese.

Preserving the Historic Atmosphere

The second-floor parlor provided fine dining and entertainment for countless patrons, including merchants, ship owners, and wealthy travelers, for about a hundred years until the *ryotei* closed in 1989. The distinctive architecture, opulent interior design, and numerous works of art on display preserve both the look and the atmosphere of Hotoro from that prosperous era.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（旧料亭「蓬嶋楼」 2階座敷）

旧料亭蓬嶋楼：2階座敷

この階にある豪華な座敷は、高級レストラン（料亭）の中心的な部分であり、お客をもてなすための部屋でした。一つの部屋として使用された2つの大きな部屋と、プライベートに過ごすための脇部屋で構成されています。この座敷は、精緻な彫刻が施された欄間、赤い壁、透け感のある和紙を使った窓や襖など、上質な素材と目を引く要素にこだわって設計されています。この階の、木目が細かく美しい木材を使った天井は1階に比べて高くなっており、上層階でお客をもてなす歓楽街の建物の典型となっています。

お客をもてなすための空間

蓬嶋楼には、厨房がなく、料理は外部の仕出し屋へ特注しており、それはまさに格調高い施設証と考えられています。お客は座敷の奥の部屋にある大きなテーブルに集まり、食べたり、飲んだり、常連客同士が互いに楽しんだりしました。座敷の入口近くの部屋は、芸者（小浜では京都での慣習と同じく芸妓と呼ばれる）による音楽と舞のパフォーマンスのステージとして使われました。壁沿いの

専用のくぼみには三味線や小鼓など、芸妓が使う楽器の例が展示されています。楽器の左側には、掛け軸のある床の間の枠として機能する大きな「満月」の意匠があります。この座敷の反対側の角にある同様の「三日月」の意匠は、生け花を縁取っており、2つの部屋の上に芸術的なバランスが生み出されています。

贅沢な印象を際立たせる芸術作品

座敷には、絵画、書、陶器、木彫など、無数の芸術が展示されています。蓬嶋楼が料亭として営業していた頃から残っているものもあれば、後年追加されたものもあります。奥の部屋にある、飛んでいるスズメの群れを描いた絵は、常連客が楽しむ遊びのお題目でした。この遊びの目的は鳥を数えることでしたが、お酒を数杯飲んだ後ではどんどん難しくなったことでしょう。「三日月」モチーフの近くには、現代書道の発展に貢献した影響力のある芸術家、巖谷一六^{いわやいちろく}（1834年～1905年）による2つの書道作品が掛かっています。もう1つの傑出した芸術作品は、両方の部屋にまたがる一対の六面屏風です。金箔で覆われた板には、中国古典の作品で知られる儒学者であり詩人である龍草蘆^{たつそうろ}（1714年～1792年）の書があります。

歴史的な雰囲気への保存

2階の座敷は、1989年に料亭が閉店するまでの約100年間、商人、船主、裕福な旅行者など、数え切れないほどのお客様に美食と娯楽を提供しました。その特徴的な建築や、豪華な内装、そして展示されている無数の美術品によって、蓬嶋楼が栄えた時代のその見た目と雰囲気の両方が今も残っています。

002-027

Former Ryotei Hotoro: First-Floor Parlor and Garden

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】旧料亭「蓬嶋楼(ほうとうろう)」 / 1階奥座敷・庭
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Former Ryotei Hotoro: First-Floor Parlor and Garden

This part of the building was added in the Taisho era (1912–1926) and contains a spacious parlor for entertaining guests. Like the other rooms, the space utilizes high-quality materials and interesting design elements befitting a respected luxury restaurant (*ryotei*). For example, windows near the tokonoma alcove have a rhombus pattern with thin lines that seem to converge or separate when viewed from different vantage points. The large table in the center was made from a single piece of Japanese horse chestnut and is trimmed with oak, and the metallic-looking light fixture above the table is, in fact, made of wood coated with glossy lacquer.

Decorations and Works of Art

The parlor contains a variety of artwork and decorative items. One is a painting from the Meiji period (1868–1912) titled *Inchu hassan-zu (Eight Immortals of the Wine Cup)*. The scene is based on a poem by the influential Chinese poet Du Fu (712–770) that describes a group of eight Tang-dynasty scholars with a love of alcoholic beverages. A scroll with a landscape painting hangs in the tokonoma. Calligraphy on the opposite wall presents a poem said to have been recited by the northern Chinese general Cao Cao (155–220) just before the momentous Battle of Red Cliffs in 208.

The Garden

The hallway outside the first-floor parlor runs alongside the *ryotei*'s main garden. The view is largely unobstructed, as the sliding doors are set with glass panels that are rare and valuable examples of expertly blown glass from the Meiji period. The garden itself is centered on a small pond surrounded by artfully placed plants. On the far side of the

pond is a small shrine dedicated to Konpira Gongen, a deity related to seafaring. The presence of a Konpira shrine in a *ryotei* is rather unusual, but considering that Obama used to be a lively port town, the deity was likely worshipped by many of the guests.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（旧料亭「蓬嶋楼」 1階奥座敷）

旧料亭蓬嶋楼：1階の座敷と庭

この建物のこの部分は、大正時代（1912年～1926年）に追加され、お客をもてなすための広々とした座敷が含まれています。他の部屋と同様に、この空間は上質な素材で構築され、高級レストラン（料亭）にふさわしい興味深いデザイン要素を備えています。たとえば、床の間というアルコーブの近くにある窓は、異なった視点から見ると収束または分離するように見える細い線でできた菱形のパターンを特徴としています。中央の大きなテーブルはトチの一枚板にナラ材で縁取りされており、テーブルの上の金属のように見える照明器具は、実際には光沢のある漆を塗った木材で作られています。

装飾と芸術作品

座敷には、さまざまな芸術作品や装飾品があります。芸術作品の1つは、明治時代（1868年～1912年）の「飲中八仙図」と題された絵画です。このシーンは、影響力のある中国の詩人、杜甫（712年～770年）の詩に基づいており、酒を愛する8人の唐王朝の学者のグループを描いています。床の間には風景を描いた掛軸が掛かっています。反対側の壁の書道は、208年の重要な赤壁の戦いの直前に中国北部の将軍、曹操（155年～220年）が口にしたと言われる詩を表しています。

庭

1階の座敷の外にある廊下は、料亭の主な庭に沿っています。引き戸には、明治時代の匠みな吹きガラスの希少で貴重な例であるガラス板が取り付けられているため、景色はほとんど妨げられません。庭自体は、巧みに配置された植物に囲まれた小さな池を中心としています。池の向こう側には、海運にまつわる神である金比羅権現こんびらごんげんをまつる祠があります。料亭に金毘羅神社があるのは珍しいことですが、小浜は港町として賑わいを見せていたことから、この神様はおそらく多くのお客から信仰されていたのでしょう。

002-028

Obama Traditional Townscape Preservation Center

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】小浜町並み保存資料館 / 家屋全体

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Obama Traditional Townscape Preservation Center

The distinctive townscape of the Nishigumi district reflects Obama's long history as a thriving port town that connected Kyoto to the sea. To support preservation efforts throughout the area, the Obama Traditional Townscape Preservation Center was opened in a restored *machiya* townhouse in 1997, becoming an example of how old buildings can be renovated while maintaining the atmosphere of the district. In 2016, the center was moved to the current building, another former townhouse and shop. It serves as an educational facility, showcasing the typical *machiya* architecture and culture of the Nishigumi district, and provides tourist information about the area.

Traditional Architecture and Layout of the Former Shop

The building dates to the Taisho era (1912–1926), and its long, narrow structure is similar to the *machiya* townhouses of Kyoto. The overall layout is divided into two halves lengthwise. The left side of the first floor is comprised of a suite of four rooms with tatami floors; the one nearest the street originally served as a storefront. On the right is a narrow, hall-like entryway with a door in the back that separated the part of the building accessible to customers from the private area used only by the residents. The door leads into a kitchen area with a large traditional stove and a very high ceiling, which helped filter out smoke. The rear part of the property contains a bath, a toilet, a courtyard garden with a well, and a large storehouse. The second floor is comparatively smaller and was used primarily as sleeping quarters for the family and servants. At present, it functions as storage for festival items.

Obama Culture and Tourist Information

Pictures of landmarks and festivals of Obama are displayed on the walls throughout the building, and books with old photographs show the scenery and everyday life in the city in the nineteenth and twentieth centuries. A reception desk is set up in the second room of the preservation center, and tours of the building are available if a guide is present. Please note that tours are offered only in Japanese.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（小浜町並み保存資料館 家屋全体）

小浜の伝統的な町並みの保存館

西組地区の特徴的な街並みは、京都と海を結ぶ港町として栄えた小浜の長い歴史を反映しています。地域全体の保全活動を支援するため、1997年に小浜町並み保存館は修復された町家の中に開設され、この地区の雰囲気を持しながらも古い建物を改良する例になっています。2016年、この保存館は、別の旧町家兼店舗である現在の建物に移転しました。ここは、西組地区の代表的な町家建築や文化を紹介し、この辺りの観光情報を提供する教育施設です。

旧商店の伝統的な建築と間取り

建物は、大正時代（1912年～1926年）に建てられたもので、その細長い構造は京都の町家に似ています。全体のレイアウトは、縦に2つに分かれています。1階左側には、一続きになった畳敷きの4部屋があり、通りに最も近い部屋は、もともと店頭として機能していました。右側には狭い廊下のような玄関があり、後ろにドアがあり、この建物の顧客がアクセスできる部分と、住人だけが使用するプライベートなエリアを分けています。ドアは、大きな伝統的なかまどと非常に高い天井（煙をろ過して出すのに役立った）のある台所のエリアに通じています。敷地の奥には、お風呂、トイレ、井戸のある中庭、そして大きな蔵があります。2階は比較的小さく、主に家族や使用人の寝室として使用されていました。現在はお祭り用品の保管場所として機能しています。

小浜の文化と観光の情報

館内のいたるところの壁に小浜の名所や祭りの写真が飾られ、古い写真を掲載した本には、19世紀から20世紀の街の風景や日常生活が紹介されています。受付は保存館の二番目の部屋に設置されており、もしガイドが居る場合は館内ツアーも利用できます。このツアーは日本語のみで提供されているのでご了承ください。

002-029

Yoshichi Stone Monument

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：与七の碑

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Yoshichi Stone Monument

This unassuming stone monument was placed near the Shimoncho entrance to the historic Kumagawa-juku post town as a tribute to a man named Yoshichi, the epitome of filial piety in the region.

Yoshichi lived in Kumagawa-juku with his wife approximately three hundred years ago. Though the couple was very poor, they still made sure to provide food for their elderly parents, even if it meant that they themselves had to go without. When the lord of the Obama domain heard about the couple's respect and devotion to their parents, he praised their commitment and rewarded them with rice to support the entire family.

A nearby rest facility with space for exhibitions, lectures about Wakasa culture, and hands-on classes was named Yoshichi to honor the bond between parent and child exemplified by the story.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：与七の碑）

与七の石碑

この控え目な石碑は、この地域の親孝行の鑑である与七という男を称えるものとして、歴史ある熊川宿という宿場町の下ノ町しもんちよの入口近くに置かれました。

よしち

与七は約300年前に妻と一緒に熊川宿に住んでいました。この夫婦は非常に貧しかったにも関わらず、例え彼ら自身の食べ物が無くなってしまうとしても、老いた両親に食べ物を提供することは欠かしていませんでした。小浜藩の領主は、この夫婦の両親への敬意と献身を聞いた時、彼らの献身を称え、この家族全員を支援するために米を与えました。

石碑の近くには、展示会や若狭文化の講義、体験教室などのためのスペースを備えた休憩所があり、この物語に代表される親子の絆を称えて与七と名付けられました。

002-030

Nishiyama Inari Jinja Shrine

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：西山稲荷
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Nishiyama Inari Jinja Shrine

The vermilion torii gates on the mountain slope near the Shimoncho entrance to the historic Kumagawa-juku post town mark the path toward Nishiyama Inari Jinja Shrine. The small shrine located further up the slope is dedicated to Inari, a deity of agriculture and commerce.

Nishiyama Inari Shrine has been a worship site for many centuries. It was a popular place to pray for success in business and was often visited by people involved in the shipping trade. The date when the shrine was built is not known, but oral history passed down in the area suggests that it was sometime between 1680 and 1760. The spirit of the deity is said to have been brought directly from Fushimi Inari Taisha, the head Inari shrine located in Kyoto. Just like Fushimi Inari Taisha, each autumn Nishiyama Inari Shrine holds an *ohitaki* ritual in which wooden sticks with people's prayers written on them are burned in a sacred fire. This demonstrates that the connection between post towns such as Kumagawa-juku and the old capital of Kyoto involved an exchange of religious traditions and culture in addition to trading in food and other goods.

When visiting Nishiyama Inari Shrine, please note that the path may be obstructed by fallen trees and that hiking should be avoided in poor weather.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：西山稲荷）

西山稲荷神社

歴史ある熊川宿という宿場町の下ノ町しもんちよの入口近くの山の斜面にある朱色の鳥居は、西山稲荷という神社への道を示しています。斜面のさらに上にあるその小さな神社は、農業と商業の神である稲荷を祀っています。

西山稲荷は何世紀にもわたって信仰されてきた場所です。そこは商業の成功を祈るのに人気の場所であり、運送業に携わる人々がよく訪れました。いつ神社が建てられたのかは正確にはわかりませんが、この地域に伝わる口伝によると、1680年から1760年の間のいつ頃に建てられたとされています。神の御霊は、京都にある稲荷神社の総本宮である伏見稲荷大社から直接勧請されたと言われています。伏見稲荷大社と同じように、西山稲荷では、毎年秋に人々の祈りが書かれた木の棒を聖なる火で燃やす「お火焚きひたき」という儀式が行われます。この儀式は、熊川宿などの宿場町と昔の首都である京都のとの間に、食料やその他の商品の取引に加えて、宗教的な伝統や文化の交換を伴う繋がりがあったことを示しています。

西山稲荷を訪れる際は、倒木で道が塞がれる場合がありますので、悪天候時のハイキングは避けてください。

002-031

Magari (Bend in the Road)

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 鯖街道熊川宿 / 説明看板：まがり
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Magari (Bend in the Road)

Residents of Kumagawa-juku refer to this L-shaped bend in the road between the Shimoncho and Nakancho areas as the Magari (“the Bend”). It is considered a remnant of military defenses from sometime between the fifteenth and the sixteenth centuries when a mountain castle overlooked the town. Similar constructs called *masugata* (literally “box shape”) were used in castle towns throughout the country to slow down potential invaders and obscure their line of sight, preventing them from easily charging forward. In addition to defensive purposes, during the relatively peaceful Edo period (1603–1867) the Magari was used as a communal place where regional laws and orders were posted on official signposts.

In other areas, *masugata* were often built at town entrances, but the Magari of Kumagawa-juku is in a more central location. Since the western side of Kumagawa-juku is relatively newer, it is believed that the town may have expanded in that direction from its original layout, meaning that the Magari used to lie at the western edge.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：まがり）

まがり（道路にある曲がり角）

熊川宿の住人は、^{しもんちよ}下ノ町地域と^{なかんちよ}中ノ町地域の間の道路上にあるL字型の曲がり角を「まがり（曲がり角）」と呼んでいます。このまがりは、15世紀から16世紀にかけて山城がこの町を見下ろしていた頃の、軍事的な防御の名残とされています。枡形（文字通り「箱型」）と呼ばれる同様の構造

は、侵入者を減速させ、彼らの視線を遮り、簡単に前進するのを防ぐために、全国の城下町で使用されました。防御のためだけでなく、比較的平和だった江戸時代（1603年～1867年）の間、このまがり、公式的な標識で地域の法律と命令を公表するための公共的なスペースとしても機能しました。

他の地域では、杢形はよく町の入口に造られましたが、熊川宿のまがり、より中心的な場所にあります。熊川宿の西側は比較的新しいため、町は当初の町割りからその方向に拡大したであろうと考えられており、まがりはかつて西の端にあったとも考えられています。

002-032

Site of Obama Domain Rice Storehouses

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：御蔵屋敷跡
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Site of Obama Domain Rice Storehouses

The site where Matsunoki Jinja Shrine now stands was once occupied by twelve rice storehouses that were used for tax payments collected by Obama domain officials. In the Edo period (1603–1867), various taxes were paid with foodstuffs such as rice and soybeans rather than money. Historical records show that at a certain point, the Obama domain collected approximately 30,000 bales of rice from 61 villages and brought them to Kumagawa-juku post town. The rice was kept temporarily in the storehouses, which were administered by two magistrates stationed nearby.

Transporting Rice through Kumagawa-Juku to Kyoto

The rice from villages across the domain was sent to Kumagawa-juku via the Wakasa Kaido road and the Kita River. Once the boats arrived, the cargo was taken to the magistrate's office, tallied, and placed in the domain's storehouses. The rice was then transported by horse to Takashima in Omi Province (present-day Shiga Prefecture), where it was loaded on boats and shipped across Lake Biwa to Otsu. From there, the tax payments were delivered to the capital in Kyoto.

Storehouse Demolition and Founding of Matsunoki Shrine

When the Meiji government abolished the domain system and replaced it with the prefecture system in 1871, the Obama domain storehouses and magistrate's office were demolished. Some of the storehouses may have been moved and used as private homes, but none remain at the original location. Matsunoki Shrine was founded on the site in 1933 to honor the village leader Matsunoki Shozaemon (1625–1652). Matsunoki advocated on behalf of farmers who were being heavily taxed and was executed for breaking the law that forbade lower-class citizens from directly

petitioning the government. Taxes were eventually decreased, reducing the burden on the villagers, and Matsunoki became a local hero because of his sacrifice.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：御蔵屋敷跡）

小浜藩の米蔵の跡地

現在、松木神社^{まつのき}が建っている土地にはかつて、小浜藩の役人が徴収した税を保存するために使われた12の米蔵がありました。江戸時代（1603年～1867年）には、さまざまな税金が、お金ではなく米や大豆などの食材で支払われていました。歴史的な記録によると、ある時には、小浜藩は61の村から約3万俵の米を集め、熊川宿という宿場町に運びました。米は一時的にその蔵に保管され、近くに配置された2人の奉行によって管理されていました。

熊川宿経由での京都への米の輸送

税の季節の間、藩中の村から来た米の俵が若狭街道という道と北川を經由して熊川宿に送られました。舟が到着すると、貨物は奉行所に運ばれ、集計され、藩の蔵に置かれました。その後、米は馬で近江国（現在の滋賀県）の高島に運ばれ、そこで船に積み込まれ、琵琶湖を越えて大津に運ばれました。そこから、その税は京都の首都に届けられました。

蔵の取り壊しと松木神社^{まつのき}の創建

1871年に明治政府によって藩制が廃止され都道府県制に置き換えられた時、小浜藩の蔵と奉行所は取り壊されました。いくつかの蔵は、移動され民家として使用された可能性がありますが、元の場所には何も残っていません。1933年、この土地には、村の指導者だった松木庄左衛門

（1625年～1652年）を祀る松木神社^{まつのき}が設立されました。松木は重い税を課された農民たちの代表と主張し、下層階級の人々が政府に直接請願することを禁じた法律に違反したとして処刑された。ついには税が引き下げられ、村人の負担は軽減され、松木^{まつのき}は自身が犠牲となったことで地元
の英雄になりました。

002-033

Matsunoki Jinja Shrine

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：松木神社
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Matsunoki Jinja Shrine

This shrine is dedicated to Matsunoki Shozaemon (1625–1652), a village leader who advocated for Obama domain farmers suffering from heavy taxation. Four centuries later, he is still remembered in Wakasa as a heroic figure who sacrificed his life trying to lessen the burden placed on his fellow villagers.

Heavy Taxation to Fund Castle Construction

During the Edo period (1603–1867), goods such as rice and beans were used to pay taxes instead of money. In the early seventeenth century, when the Kyogoku family was appointed to govern the Obama domain, taxes were raised significantly to fund the construction of Obama Castle. For example, the tax paid in soybeans was increased by 12–25 percent. This level of taxation remained unchanged even after the castle was completed in 1641 under the rule of the Sakai family. Though the farmers managed to make the payments initially, the disproportionate tax burden jeopardized the livelihood of many people throughout the domain.

Matsunoki Shozaemon Advocating for Farmers

Matsunoki was one of more than 20 representatives from 252 villages in the region who gathered to discuss the unfair taxation and directly petition the domain government to revise the rates. After more than a decade of continuous unsuccessful appeals, the taxes were finally reduced to the original level. However, because of the strict social class division of the time, it was illegal for lower-ranking people to directly petition the government in this way. Matsunoki, who had been a key figure in the years-long process, was arrested in 1648 and crucified on the bank of the Hikasa River in 1652, losing his life at the age of 28.

Shrine Founding and Precincts

In 1933, Matsunoki Jinja Shrine was built in honor of Matsunoki Shozaemon and his sacrifice. It is located on the land where the official Obama domain rice storehouses once stood. While the majority of shrines in Japan are dedicated to Shinto deities that have been worshipped since ancient times, Matsunoki Shrine is an example of a shrine venerating a relatively recent historical figure. Beyond the first torii gate is a large statue of Matsunoki down on one knee and offering up a written document, depicting the moment when he petitioned the domain officials on behalf of the common people.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：松木神社）

まつのき 松木神社

この神社には、重い課税に苦しんでいた小浜藩の農民を擁護した村の指導者、まつのきしょうざ えもん松木庄左衛門（1625年～1652年）が祀られています。4世紀が経った後も彼は、自分の命を犠牲にして、仲間である村人にかかる負担を軽減しようと努めた英雄として、若狭地域で記憶されています。

城の建設資金のための重税

江戸時代（1603年～1867年）には、お金の代わりに米や豆などの品が税の支払いに使われていました。17世紀初頭、京極家が小浜藩を統治するよう任命された時、彼らは小浜城の建設へ資金を提供するため大幅に増税しました。例えば、大豆で支払われる税は約12～25%増加しました。この課税水準は、酒井家の統治下で1641年に城が完成した後も変わりませんでした。農民は、初めのうちは何とか支払うことができましたが、不適切な税負担は藩全体の多くの人々の生活を危険に晒しました。

まつのきしょうざ えもん 松木庄左衛門農家のために訴える

まつのき松木は、この地域の252の村から集まった20人超の代表者の一人であり、不当な課税について話し合うために集まり、税率の改定を地方政府に直接請願しました。10年以上も成功しない訴えが続いた後、ついに税が元の水準まで減税されました。しかし、当時の厳格な社会階級の区分のため、身分の低い人々がこのように政府へ直接請願することは違法でした。長年の過程で重要人物であった松木は、1648年に逮捕され、1652年に日笠川の岸で磔になり、28歳で命を落としました。

社殿と境内

1933年、松木神社は松木庄左衛門と彼の犠牲的な行動に敬意を表して建てられました。神社は、かつて小浜藩の公的な米の倉庫があった土地にあります。日本の神社の大部分は古くから崇拝されてきた神道の神々を祀っていますが、松木神社は、比較的最近の歴史上の人物を崇拝する神社の一例です。最初の鳥居の向こうには、片膝をついて文章をさし上げる姿の大きな松木の像があり、庶民に代わって藩の役人へ請願した瞬間を表しています。

002-034

Maegawa Channel

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：前川
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Maegawa Channel

The stone-paved channel called Maegawa that runs the entire length of Kumagawa-juku was built in the early seventeenth century as part of the official effort to develop the small village into a post town. The channel was a blessing for the residents, serving as a source of pure water both for field irrigation and the necessities of daily life. Stone steps with a platform just above the water level, called *kawato*, were built intermittently along the channel to provide easier access for everyday tasks such as washing clothes or vegetables. People and horses traveling through the post town would use the water running by the storefronts to quench their thirst and replenish supplies.

Another use of the Maegawa was for *imoarai*, waterwheel-based devices for peeling potatoes. A pole placed through the center of a paddled wooden barrel would be set in the gaps in the stone walls on either side of the channel, suspending it over the water. The flowing water would hit the paddles and spin the barrel, tumbling and peeling the potatoes inside.

With the advent of modern plumbing, the channel is no longer used as a source of drinking water or a place to do laundry. However, it serves to wash away snow in winter, provides a much-needed reprieve from the summer heat, and is an integral part of the traditional atmosphere of the townscape.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：前川）

前川という水路

熊川宿の端から端まで流れている、前川と呼ばれる舗装された水路は、17世紀初頭に、小さな村を宿場町へと発展させるための公的な取り組みの一環として造られました。この水路は住民にとって有難いものとなり、畑の灌漑用水と日常用水の両方のための、きれいな水の供給源としての役割を果たしました。カワトと呼ばれる、水位のすぐ上にある台を備えた石段が、水路に沿って点々と設けられており、衣服や野菜を洗うなどの毎日の仕事を簡単にできるようにしました。この宿場町を通った人々や馬は、店先を流れる水で喉の渇きを癒し、物資を補給したものでした。

前川のもう1つの用途は、ジャガイモの皮を剥くための水車をベースにした装置である芋洗いでした。水かきの付いた木製の樽の中央に配置されたポールは、水路の両側の石壁の隙間に設置され、樽を水上に吊るしました。流れる水は水かきにぶつかって樽を回転させ、中のジャガイモを転がして皮を剥きます。

近代的な水道管敷設の到来によって、この水路はもはや、飲料水の供給源としても、洗濯をする場所としても使用されなくなりました。しかしこの水路は今、冬には雪を洗い流すのに役立ち、切望されている夏の暑さからの一時的な救いを提供し、町並みの伝統的な雰囲気の不可欠な部分にもなっています。

002-035

Hishiya Building

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 鯖街道熊川宿 / 説明看板：菱屋
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Hishiya Building

This building was constructed in 1868 to house a large shipping and wholesale business called Hishiya, which played an important part in the trade-based economy of Kumagawa-juku post town for generations. Hishiya was one of the locations where cargo was unloaded and picked up for transportation from Kumagawa-juku to the next destination. Porters and horses could also be rented there. At the height of success, approximately 27,000 tons of cargo moved through Hishiya per year. The thriving business was representative of the town's role as a major shipping hub along the Wakasa Kaido road, a key trade route that connected the Wakasa region with the capital in Kyoto.

The late nineteenth-century architecture of Hishiya is a notable element of the townscape of Kumagawa-juku, which is a nationally designated Important Preservation District for Groups of Traditional Buildings. The two-story structure is one of the largest in the area and has a wide facade that looks over the main road and the flowing water of the Maegawa channel. The exterior features deep red and white walls, latticed windows, and a tiled roof. At present, the building is used as shared office space and a location for conferences, lectures, pop-up shops, and community events, continuing to support the livelihood of Kumagawa-juku residents in a new, modern way.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：菱屋）
菱屋の建物

この建物は、熊川宿という宿場町の貿易経済において何世代にもわたって重要な役割を果たしてきた、菱屋と呼ばれる大きな運送・卸売業者の建物として1868年に建設されました。菱屋は熊川宿から次の目的地への輸送のために貨物を降ろして集荷する場所の1つでした。運搬人や馬もそこで借りることができました。その成功の絶頂期には、年間約27,000 t の貨物が菱屋を通過しました。その繁盛した商いは、若狭地方と京都の首都を結ぶ重要な交易路である若狭街道沿いにある主要な輸送の中心地としての町の役割を代表するものでした。

菱屋の19世紀後半の建築は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された熊川宿の町並みの、注目すべき要素です。2階建ての建物はこの地域で最大級の建物の一つで、その広い正面は主要な道と前川の流れを見渡しています。建物の外観の特徴は、深い赤と白の壁、格子窓、瓦屋根です。現在、この建物はシェアオフィススペースとして、また会議や講演会、ポップアップショップ、地域イベントの場として利用されており、新しい現代的な方法で熊川宿の住民の生活を支え続けています。

002-036

Site of Kumagawa-Juku Magistrate's Office 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 鯖街道熊川宿 / 説明看板：陣屋跡
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Site of Kumagawa-Juku Magistrate's Office

This site was once occupied by an Edo-period (1603–1867) administrative compound where civil affairs related to governing the Kumagawa area and the Obama domain as a whole were handled by various officials. The most important tasks were the regulation of shipping agents in Kumagawa-juku post town and the management of the domain's annual taxes, which were paid in the form of rice and kept in twelve storehouses located nearby.

Construction and Functions of the Administrative Compound

The first administrative buildings were constructed in the early seventeenth century, during the rule of Kyogoku Takatsugu (1563–1609), the first lord of the Obama domain. At that time, the compound was classified as a *jinya* and encompassed administrative headquarters, storehouses, and the residence of the highest-ranking local government official. After Sakai Tadakatsu (1587–1662) was appointed the lord of the domain in 1634, the *jinya* became a *bugyosho* (magistrate's office) and its authority was expanded to cover a wider scope of civil affairs. The office played an important role as the regulator of the bustling economy of Kumagawa-juku, since the post town was located at a strategic point along the Wakasa Kaido road that connected the ports along the Sea of Japan to Kyoto, which was the capital at the time.

Demolition of the Magistrate's Office and Current Use of the Site

The magistrate's office and the nearby rice storehouses were demolished in 1871, when the domain system was abolished by the Meiji government and replaced with the prefecture system. At present, the site contains a traditional processing plant making high-quality starch from kudzu (Japanese arrowroot; *Pueraria montana* var. *lobata*)

and a small water-filled habitat for the rare Genji firefly (*Luciola cruciata*). At the far end is an entrance to a hiking trail that leads past scenic viewing points on the mountainside to the remains of Kumagawa Castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：陣屋跡）

熊川宿の行政長官の執務場所の跡地

この場所のはかつて江戸時代（1603年～1867年）の行政施設で占められ、熊川地域と小浜藩全体の統治に関連する民事がさまざまな役人によって処理されていました。最も重要な仕事は、熊川宿という宿場町の運送業者の取り締まりと、米の形で支払われ、近くにある12の蔵に保管されていた藩の年税の管理でした。

この行政施設の構造と機能

最初の行政の建物は、小浜藩の初代領主である京極高次（1563年～1609年）の統治中であった17世紀の初頭に建設されました。当時、この施設は陣屋に分類され、行政の本部、蔵、最も位の高い地方行政官の邸宅が含まれていました。酒井忠勝（1587年～1662年）が1634年に藩主に任命された後、陣屋は奉行所（奉行の執務場所）になり、その権限はより広い範囲の民事を取り扱うように拡大されました。熊川宿は、日本海沿いの港と当時の首都であった京都を結ぶ若狭海道沿いの要所に位置していたため、この奉行所は経済が活発な熊川宿の調整役として重要な役割を果たしました。

行政長官の執務場所の取り壊しと現在の現地の使われ方

明治政府により藩制度が廃止され、都道府県制度に置き換えられた1871年に、奉行所と近隣の米蔵が取り壊されました。現在、敷地内には葛から高品質のでんぷんを製造する伝統的な加工工場と、珍しい源氏蛸（ゲンジボタル）のための水で満たされた小さな生息地があります。最も奥の端には、山腹の絶景ポイントを過ぎて熊川城跡へと続くハイキングコースへの入口があります。

002-037

Nagayamichi Road

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 鯖街道熊川宿 / 説明看板：長屋道
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Nagayamichi Road

This narrow alleyway once led to a single-story building called a *nagaya* (“longhouse”), which served as military barracks. It housed up to 16 *ashigaru*, low-ranking foot soldiers who reported to the town magistrate. Over time, the path leading to the barracks came to be known as the Nagayamichi, or “road to the *nagaya*.” Although the building itself no longer exists, the alleyway retains its historic name.

Ashigaru soldiers were usually involved in various military campaigns, but in the relatively peaceful Edo period (1603–1867) they were often employed for public service work like patrolling the town and guarding gates. Though no records remain to describe the duties carried out by the *ashigaru* stationed in Kumagawa-juku, it is assumed that they assisted the town magistrate on domain business. They might have handled shipments of rice sent as annual tax payments to the nearby government-managed storehouses or stood watch at the Kumagawa Guardhouse, where travelers paid taxes on transported goods and were inspected for weapons or banned items.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：長屋道）

長屋道という道

この狭い路地は、かつて兵舎として使われていた長屋（長い家）と呼ばれる平屋建ての建物に通じていました。そこには、町奉行の部下であった足軽という位の低い歩兵が最大16人住んでいました。時が経つにつれ、兵舎に通じる道は長屋道、「長屋への道」として知られるようになりました。建物自体はもはや存在していませんが、路地はその歴史的な名前を保持しています。

足軽という兵士は通常、さまざまな軍事行動に関わっていましたが、比較的に平和だった江戸時代（1603年～1867年）には、彼らは町のパトロールや門番などの公務に従事することがよくありました。熊川宿に駐屯した足軽がどのような任務を遂行したかを示す記録は残っていませんが、彼らは町奉行の藩の仕事を支援したと考えられています。その仕事には、近くの幕府が管理した蔵へ年貢として送られる米の出荷の対処や、旅行者が輸送品の関税を支払ったり、武器や禁止品の検査を受けたりした熊川番所の立番が含まれる可能性があります。

002-038

Former Residence of Henmi Kanbei

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：旧逸見勘兵衛家
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Former Residence of Henmi Kanbei

This property is a prime example of the type of *machiya* townhouses that were favored by wealthy residents of Kumagawa-juku post town in the Edo period (1603–1867). It was the home of Henmi Kanbei (1842–1909), the first mayor of Kumagawa. According to historic building plans, the main house was originally constructed in 1858. The property contained a small sake brewery, a garden, and a storehouse located in the rear that was used for a large book collection.

In 1994, the residence was donated to the town of Wakasa by a family descendant. It was designated a Tangible Cultural Property by the town administration in 1995 and underwent extensive repair work that took three years. The restored residence became an example of how old-style buildings in Kumagawa-juku could be upgraded to meet the needs of modern life while preserving the traditional appearance for future generations.

At present, the facility includes lodgings, a café, and a souvenir shop. Visitors can explore the traditional home for a small fee during the café's business hours (weekends and holidays, spring through autumn).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：旧逸見勘兵衛家）

へんみかんべえ
逸見勘兵衛の旧邸宅

この建物は、江戸時代（1603年～1867年）に熊川宿という宿場町の裕福な住民に好まれた町家の代表的な例です。ここはかつて熊川の初代の長であった逸見勘兵衛（^{へんみかんべえ}1842年～1909年）の邸宅でした。歴史的な建築図面によれば、主屋はもともと1858年に建てられました。敷地内には、小さな酒蔵や庭園があり、そして裏手には大規模な本の収集に使用された蔵がありました。

この邸宅は1994年に逸見家の子孫から若狭町へ寄贈されました。1995年に町の有形文化財に指定され、3年をかけて大規模な修繕工事が行われました。復元されたこの邸宅は、熊川宿の古い建物を、後世のために伝統的な外観を維持しながら、現代の生活のニーズを満たすために改良する方法の例となりました。

現在、この建物には、宿泊施設、カフェ、土産物店が入っています。カフェの営業時間中（週末と祝日、春から秋）、訪問者は小額の料金で伝統的な家を探索することができます。

002-039

Site of Kumagawa Castle

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 説明看板：熊川城跡
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Site of Kumagawa Castle

Kumagawa-juku is known primarily as a post town that was once used for shipping various foodstuffs and other goods along the Wakasa Kaido road, but for a short period of time it was guarded by Kumagawa Castle. The castle was situated on a mountaintop and overlooked the travel route and the village below. Some of the castle's defensive features still remain in Kumagawa-juku, such as an L-shaped bend in the road (known as the Magari), intended to impede the advance of potential attackers.

Kumagawa Castle and the Numata Family

Kumagawa Castle was built sometime in the sixteenth century by the Numata family, but the exact dates of construction are unknown. In 1569, when Numata Mitsukane was the lord of Kumagawa Castle, it was attacked and captured by Matsumiya Kiyonaga, the lord of a neighboring castle. The Numata family is said to have fled to Omi Province (present-day Shiga Prefecture), where Mitsukane served as a military commander for the Hosokawa family. His daughter Jako (1544–1618) would later marry Hosokawa Fujitaka (also known as Hosokawa Yusai, 1534–1610), a prominent general and an accomplished writer. Jako herself became a well-known figure as one of the defenders of Tanabe Castle during a siege in 1600.

Brief Rule of the Matsumiya Family and Abandonment of the Castle

For several years, Kumagawa Castle was occupied by the Matsumiya family, but was abandoned once the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582) conquered the Wakasa region and appointed his subordinate Niwa Nagahide (1535–1585) to govern it in 1573. Now only vaguely defined shapes in the earth that remain from a moat and

defensive trenches show where the castle once stood. The observation points along the short trail that runs behind the former site of the Kumagawa-juku magistrate's office and Shiraishi Jinja Shrine provide an idea of what the view from Kumagawa Castle may have been like.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：熊川城跡）

熊川城跡

熊川宿は、かつて若狭街道に沿ってさまざまな食料品やその他の商品を輸送するときに使用された宿場町として主に知られています。しかし、ある短い期間では、熊川城に守られていました。その城は山頂にあり、その下の旅路と村を見下ろしていました。熊川宿には今でも、潜在的な攻撃者が前進してくるのを妨げるL字型の曲がり角（まがりとして知られる）が道にあるなど、城の防御的な特徴がいくつか残っています。

熊川城と沼田氏

熊川城は、16世紀に沼田氏によって建てられたと言われていますが、正確な築城日は不明です。1569年、熊川城の城主が沼田光兼ぬまたみつかねであった時、熊川城は隣の城の城主であった松宮清永まつみやきよながに攻撃され占領されました。沼田氏は、近江国（現在の滋賀県）に逃亡し、そこで光兼は細川氏の武将として仕えたといわれています。彼の娘の麿香じよこう（1544年～1618年）は後に、著名な将軍であり著名な作家でもあった細川藤考ふじたか ほそかわゆうさい（細川幽斎としても知られる1534年～1610年）と結婚しました。麿香自身は、1600年の包囲の際に、田辺城を守った人の一人として有名になりました。

松宮氏による統治と廃城

熊川城は数年間、松宮氏に占領されましたが、強力な武将の織田信長（1534年～1582年）がこの若狭地域を征服し、1573年に彼の部下である丹羽長秀にわながひで（1535年～1585年）をこの地を治めるように任命すると、城は放棄されました。今では、堀と防御的な塹壕から残された漠然とした輪郭を示す地形だけが、城がかつて立っていた場所を示しています。熊川奉行所の跡地や白石神社の裏手からの短い小道の途中にある展望スポットからは、熊川城から見たかもしれない眺めを見ることができます。

002-040

Kumagawa Guardhouse

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 鯖街道熊川宿 / 説明看板：番所
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa Guardhouse

The Kumagawa Guardhouse was built during the Kan'ei era (1624–1644) by Sakai Tadakatsu (1587–1662), the lord of the Obama domain, to monitor travelers passing through Kumagawa-juku post town. A historical map of the Wakasa and Tsuruga regions created in 1645 depicts the guardhouse as standing at the center of Kumagawa-juku, but a late eighteenth-century map places it at the current location in the Kamincho area, indicating that it was moved at some point in the late seventeenth or eighteenth century.

Guardhouse Operations

The guardhouse was manned by two officials whose job was to inspect and interrogate travelers, check travel permits, and levy taxes on goods transported along the Wakasa Kaido road. Because the Wakasa Kaido was the most well-traveled road in the network of trade routes connecting Obama and the Sea of Japan to Kyoto (the capital at the time), these taxes were a major source of income for the domain. In the Edo period (1603–1867), guardhouses such as this were used by the Tokugawa shogunate to maintain control over domains throughout the country. In particular, taxation of goods, weapons transportation, and women's travel were strictly regulated. After the fall of the shogunate in 1867, the guardhouse became defunct in 1870. The building was later remodeled and used as a private residence.

Restoration and Exhibits

In 2002, the former guardhouse was purchased by the town of Wakasa and then restored to its original appearance. Inside, two life-sized figures represent officials in charge of checking travel documents and collecting taxes on goods transported

through the post town. Displayed against the back wall are bows, arrows, rifles, and a set of three weapons used for making arrests. These include a *sasumata* (a pole with a U-shaped fork used to pin suspects in place), a *tsukubo* (a pole with a T-shaped end used to trip, push, or pull), and a *sodegarami* (a pole with iron spikes on the end to snag clothing).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 説明看板：番所）

熊川番所

熊川番所は、熊川宿という宿場町を通過する旅行者を監視するために、小浜藩の藩主であった酒井忠勝（1587年～1662年）によって寛永時代（1624年～1644年）に建てられました。1645年に作成された若狭・敦賀地方の歴史ある地図では、熊川番所は熊川宿の中心に描かれていますが、18世紀後半に作成された地図では、番所を上ノ町地域の現在の場所に配置しており、これは、番所が17世紀後半または18世紀のある時点で移転されたことを示しています。

番所の運営

番所には、旅行者を検査・尋問し、旅行許可書の確認や若狭街道に沿って運ばれる物品に税を課すことを任務とする2人の役人が配置されていました。若狭街道は、小浜そして日本海を京都（当時の首都）と結ぶ交易路網の中で最もよく行き来されていたので、これらの税は藩の大きな収入源でした。江戸時代（1603年～1867年）、このような番所は、国中の藩の支配を維持するため、徳川幕府によって利用されました。特に、商品への課税や、武器の移動、女性の旅行に関しては厳しく規制されました。幕府が1867年に滅亡した後、1870年に衛兵所は廃止されました。その建物は後に改築され、個人の住居として使用されました。

修復と展示

2002年、旧番所は若狭町に買い取られ、元の姿に戻すために修復されました。中にある等身大の2人の人物像は、渡航文書の確認と宿場町を通過する商品の税の徴収を担当する役人を表しています。後ろの壁に展示されているのは、弓、矢、鉄砲、そして捕物に使用された3つの武器のセットです。これらには、さすまた刺股（容疑者を固定するために使用されるU字型に分岐した先端を備えた棒）、つくぼう突棒（ころばせたり、押したり引いたりするために使用されるT字型の先端を備えた棒）、そしてそでがらみ袖搦（衣服を引っ掛けるために先端に鉄のとげが付いた棒）が含まれます。

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 案内地図：熊川宿
（設置場所：中の町駐車場、まがり、道の駅ポケットパーク）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa-Juku Post Town

Kumagawa-juku was a prosperous post town that facilitated the transport of goods along the Wakasa Kaido road, a major trade route that connected the Wakasa region with the capital in Kyoto. In 1589, a government edict exempted the town from a number of taxes, which stimulated the development of businesses such as shipping agencies, porter stations, shops, and lodging facilities. Kumagawa-juku is a nationally designated Important Preservation District for Groups of Traditional Buildings, and its historical atmosphere provides a glimpse into what everyday life may have been like in a bustling post town between 1750 and 1867. The town is divided into three areas: Kamincho, Nakancho, and Shimoncho.

Notable Sites

1. Kumagawa Guardhouse

Government officials manning the guardhouse monitored the road in and out of the post town, inspecting travel permits and levying taxes on transported goods. It has been restored to its original appearance, and the interior recreates a scene showing inspectors at work with a variety of weapons displayed in the back. The guardhouse is designated a Tangible Cultural Property by the town of Wakasa.

2. Former Residence of Henmi Kanbei

This property once belonged to Henmi Kanbei (1842–1909), the first mayor of Kumagawa. It represents the type of *machiya* townhouses that were favored by wealthy residents of the post town. The property underwent extensive restoration to serve as an example of how traditional buildings can be preserved for future generations. At present, it contains a lodging facility, a café, and a souvenir shop.

3. Kumagawa-Juku Museum (Shukubakan)

The building was originally constructed in 1940 and served as the Kumagawa Village Office. In 1997, it became a museum dedicated to the history and culture of Kumagawa-juku and the Saba Kaido (“Mackerel Road”) network of trade routes that connected Wakasa and Kyoto. Exhibits include archive documents, photographs, panel displays, and a variety of items related to everyday life and commercial activities of the old post town.

4. Historic Residence of the Ogino Family

For generations, the Ogino family operated a prosperous business called Kuramiya that specialized in the transportation of goods. The main house of the property was built around 1811 and is the oldest remaining traditional *machiya* townhouse in Kumagawa-juku. Other notable architectural features include an adjacent baggage storehouse and loft sleeping quarters for employees. The residence is a nationally designated Important Cultural Property.

5. Murata Museum

This building was once the home of Murata Torakichi, the founder of Kikunoi, a restaurant with three Michelin stars that was established in Kyoto in 1912. With the assistance of Torakichi’s grandson, the third-generation owner of Kikunoi, the former residence was renovated and became a facility dedicated to the food culture of Wakasa that flourished along the Saba Kaido trade routes.

6. Yoshichi Rest Area

The building functions as a rest facility that is also used to hold exhibitions, hands-on classes, lectures, and other events. It is named after a man called Yoshichi, who is considered the epitome of filial piety in Kumagawa-juku. Yoshichi lived in the area with his wife, and although they were extremely poor, they never failed to provide food for their aging parents. In the end, they were richly rewarded for their respect and devotion by the lord of the Obama domain.

（鯖街道熊川宿 案内地図：熊川宿【設置場所：中の町駐車場、まがり、道の駅ポケットパーク】）

熊川宿という宿場

熊川宿は、若狭地域と京都の首都を結ぶ主要な交易路である若狭街道に沿った物資の輸送を促進した、繁栄した宿場町でした。1589年、政府の勅令により町は多くの税金を免除され、運送代理店、運搬人の事業所、商店、宿泊施設などの商業の発展が促進されました。熊川宿は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、その歴史的な雰囲気は、1750年～1867年の賑やかな宿場町での日常生活を垣間見ることができます。町は上ノ町、中ノ町、下ノ町の3つのエリアに分かれています。

注目の場所

1. 熊川番所

番所に配属された役人は、熊川宿に出入りする道路を監視し、旅行許可を検査し、輸送された商品に税を課しました。ここは元々の外観に復元され、内部には工作中的の検査官を示すシーンが再現されており、その背後には様々な武器が展示されています。番所は若狭町から有形文化財に指定されています。

2. 旧逸見勘兵衛家

この建物は、熊川の初代の長であった逸見勘兵衛（1842年～1909年）がかつて所有していたものです。宿場町の裕福な住民に好まれた町屋という様式の代表となっています。この施設は、伝統的な建物を将来の世代のためにどのように保存できるかの一例とするために、大規模な修復が行われました。現在は、宿泊施設、カフェ、土産物店が入っています。

3. 熊川宿資料館（宿場館）

この建物は元々1940年に建てられ、熊川村役場として使われていました。1997年には、熊川宿の歴史と文化、そして若狭と京都を結ぶ交易路である鯖街道（鯖の道）の道路網を専門とする資料館になりました。展示品には、保存資料、写真、パネル展示、昔の宿場町の日常生活や商業活動に関連するさまざまな品物が含まれます。

4. 荻野家の伝統的な住宅

荻野家は何世代にもわたって、物資の輸送を専門とする倉見屋と呼ばれる繁栄した事業を営んでいました。建物の主屋は1811年頃に建てられており、熊川に残っている最も古い伝統的な町家です。その他の注目すべき建築上の特徴には、隣接する荷物用の蔵と従業員用の屋根裏の寝室があります。この邸宅は国の重要文化財に指定されています。

5. 村田館

この建物は元々、1912年に京都で創業したミシュラン3つ星付きの料亭である菊乃井^{きくのい}の創設者の村田寅吉^{とらきち}の家でした。菊乃井の3代目オーナーである寅吉の孫の支援を受け、この旧邸宅は改装され、鯖街道という交易路に沿って栄えた若狭の食文化に特化した施設になりました。

6. 与七^{よしち}休憩所

この建物は、展示会や体験型授業、講演会、その他のイベントの開催にも使われている休憩施設として機能しています。熊川宿で親孝行の鑑とされる与七という男にちなんで名付けられました。与七はかつて妻と一緒にこの地域に住んでおり、とても貧しかったにもかかわらず、年老いた両親に食べ物を提供することを欠かしませんでした。ついには、この夫婦の尊敬と献身に対して、小浜藩の藩主から豪華な褒美が与えられました。

002-042

Kumagawa-Juku Post Town: Kamincho Area

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 案内地図：上ノ町
(設置場所 番所横)
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa-Juku Post Town: Kamincho Area

Kumagawa-juku was a prosperous post town that facilitated the transport of goods along the Wakasa Kaido road, a major trade route that connected the Wakasa region with the capital in Kyoto. The historic town is divided into three areas: Kamincho, Nakancho, and Shimoncho.

Kamincho Area

This is the area of Kumagawa-juku nearest to Kyoto. It was the entrance to the post town for travelers heading toward the port town of Obama and the exit for those journeying to the capital. An old expression in Wakasa states, “The far-off capital is only 18 *ri* away,” and experienced porters could cover the distance (about 72 kilometers) in just one day.

The Kumagawa Guardhouse was established at the entrance to the post town to monitor the road. Domain officials stationed there inspected travel permits and levied taxes on transported goods. Near the guardhouse is the original location of Gongen Jinja Shrine, where a deity said to protect against fire and floods was worshipped.

The main road beyond the guardhouse used to be lined with shipping agencies, porter stations, various shops, and lodging facilities. The Maegawa channel flowing by the storefronts along the road served as a source of water for residents and travelers alike. The historic townscape has many traditional buildings with tiled roofs and slatted

windows, preserving the atmosphere of Kumagawa-juku from the time when it was a thriving post town.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 案内地図：上ノ町【設置場所：番所横】）

熊川宿：上ノ町^{かみんちよ}地域

熊川宿は、若狭地域と京都の首都を結ぶ主要な交易路である若狭街道に沿った物資の輸送を促進した、繁栄した宿場町でした。歴史ある町は上ノ町、中ノ町、下ノ町の3つのエリアに分かれています。

上ノ町地域

熊川宿のこの地域は京都に最も近く、かつては旅行者にとって小浜の港町に向かう入口であり首都へ旅する際の出口として機能していました。若狭の古くからの表現では、「遠くの首都はたった18里しか離れていない」と言われており、経験豊富な運搬人たちはたった1日でこの距離（約72km）を踏破することができました。

宿場町の入口には、その道を監視するために熊川番所が設置されました。そこに駐留していた政府の役人は、旅行許可を検査し、輸送された商品に税を課しました。番所の近くには、火や洪水から身を守ると言われる神が祀られた権現神社^{ごんげんじんじや}の元の場所があります。

番所の向こうの主要な道路には、かつては運送会社、運搬人の事業所、さまざまな商店、宿泊施設が並んでいました。道路沿いの店先を流れる前川は、住民と旅行者にとって水源としての役割を果たしました。歴史ある町並みには、瓦屋根や格子窓を備えた伝統的な建物が多くあり、宿場町として栄えた熊川宿の雰囲気を残しています。

002-043

Kumagawa-Juku Post Town: Nakancho Area

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 案内地図：中ノ町

（設置場所：宿場館前）

【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa-Juku Post Town: Nakancho Area

Kumagawa-juku was a prosperous post town that facilitated the transport of goods along the Wakasa Kaido road, a major trade route that connected the Wakasa region with the capital in Kyoto. The historic town is divided into three areas: Kamincho, Nakancho, and Shimoncho.

Nakancho Area

The central area of Kumagawa-juku was the heart of the post town where most businesses and administrative buildings were concentrated. The streets were lined with porter stations, shops, lodging facilities, and prosperous wholesalers such as Hishiya and Kuramiya, both of which specialized in the transportation of goods. The architecture of the well-preserved buildings reflects the style favored by affluent merchants who played a major role in the town's trade-centered economy.

Throughout the history of Kumagawa-juku, administrative affairs were primarily conducted from Nakancho. During the Edo period (1603–1867), the magistrate's office that regulated shipping agents and managed the Obama domain's annual taxes was located in this area. In the twentieth century, a Western-style building was constructed near the main road to serve as the Kumagawa Village Office. At present, it houses the Kumagawa-juku Museum (Shukubakan), which exhibits archive documents, panel displays, and various items related to the town's history and its role as a shipping hub.

There are several places of worship in the Nakancho area, such as Kakujoji Temple, Tokuhoji Temple, Matsunoki Jinja Shrine, and Shiraishi Jinja Shrine. Matsunoki Shrine occupies the plot of land where twelve storehouses for holding rice collected by the Obama domain as tax payments once stood. A path leading from the main road, known as the Okuramichi, was used to carry shipments of rice from the nearby Kita River to the storehouses.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 案内地図：中ノ町【設置場所：宿場館前】）

熊川宿：中ノ町地域

熊川宿は、若狭地域と京都の首都を結ぶ主要な交易路である若狭街道に沿った物資の輸送を促進した、繁栄した宿場町でした。歴史ある町は上ノ町、中ノ町、下ノ町の3つのエリアに分かれています。

中ノ町地域

熊川宿の中心部は、最も多くの企業や行政の建物が集まる宿場町の中心でした。通りには、運搬人の事業所、商店、宿泊施設、そして商品の輸送を専門とする菱屋や倉見屋などの繁栄した卸売業者が並んでいました。保存状態の良い建物の建築は、この町の貿易中心の経済において主要な役割を果たした裕福な商人が好む様式を示しています。

熊川宿の歴史を通して、行政の仕事は主に中ノ町から行われていました。江戸時代（1603年～1867年）にはこの地域に、運送代理店を規制し、小浜藩の年税を管理する奉行所がありました。20世紀には、主要な道の近くに熊川村役場として洋館が建てられました。ここは後に、保存資料やパネル展示など、町の歴史や運送の中心地としての役割に関連するさまざまなアイテムが展示される、熊川宿博物館（宿場館）となりました。

中ノ町には、かくじょうじ覚成寺、とくほうじ得法寺、まつきじんじゃ松木神社、しらいしじんじゃ白石神社など、いくつかの信仰の場があります。松木神社は、かつて小浜藩が税として徴収した穀物を保有するために使った12の蔵があった土地にあります。近くの北川からこの蔵まで米を運ぶために、おくらみち御蔵道として知られる主要な道から続く小道が使われました。

002-044

Kumagawa-Juku Post Town: Shimoncho Area

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】鯖街道熊川宿 / 案内地図：下ノ町
（設置場所：下の町駐車場前）
【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa-Juku Post Town: Shimoncho Area

Kumagawa-juku was a prosperous post town that facilitated the transport of goods along the Wakasa Kaido road, a major trade route that connected the Wakasa region with the capital in Kyoto. The historic town is divided into three areas: Kamincho, Nakancho, and Shimoncho.

Shimoncho Area

This is the area of Kumagawa-juku closest to the port town of Obama. It provided lodging and accommodations to many of the travelers who stayed overnight on the journey along the Wakasa Kaido. A stone monument near the Shimoncho entrance is dedicated to Yoshichi, a man who is considered a paragon of filial piety in Kumagawa-juku. Yoshichi and his wife never allowed their aging parents to go hungry, despite being extremely poor themselves. A nearby rest facility named after Yoshichi is used to host exhibitions, hands-on classes, and lectures about Wakasa culture.

Shimoncho is the location of the former residence of Murata Torakichi, who established the three-star Michelin restaurant Kikunoi in Kyoto in 1912. With the assistance of Torakichi's grandson, the third-generation owner of Kikunoi, the building was renovated and reopened as the Murata Museum, a place that introduces the food culture of the Wakasa region.

There is an L-shaped bend in the road called the Magari ("the Bend") between the Shimoncho and Nakancho areas. Similar constructs were often built in castle towns for

defensive purposes, intended to slow potential attackers. A mountain castle was located near Kumagawa-juku for a brief period sometime during the fifteenth and sixteenth centuries, and it is believed that the bend was situated at the western edge of the town at the time. The current location of the Magari suggests that Shimoncho was developed comparatively later than the other areas of Kumagawa-juku. Nevertheless, it has a similar atmosphere and contains many traditional townhouses, most of which are now private residences.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（鯖街道熊川宿 案内地図：下ノ町【設置場所：下の町駐車場前】）

熊川宿：下ノ町地域

熊川宿は、若狭地域と京都の首都を結ぶ主要な交易路である若狭街道に沿った物資の輸送を促進した、繁栄した宿場町でした。歴史ある町は上ノ町、中ノ町、下ノ町の3つのエリアに分かれています。

下ノ町地域

熊川宿のこの地域は、小浜の港町に最も近い所です。ここは、若狭街道を旅する途中で宿泊するたくさんの旅人へ宿とおもてなしを提供しました。下ノ町の入口近くにある石碑は、熊川宿で親孝行の鑑とされる与七よしちという男に供えられています。与七と彼の妻は、彼ら自身が非常に貧しかったにもかかわらず、彼らの年老いた両親が空腹になることは決して許しませんでした。この近くにある、与七にちなんで名付けられた休憩施設は、展示会や体験講座、若狭文化についての講義を開催することに使用されています。

下ノ町は、1912年に京都で創業したミシュラン3つ星付きの料亭である菊乃井きくのいの創設者の村田寅吉とらきちの旧居がある場所です。菊乃井の3代目オーナーである寅吉の孫の助けを借りて、建物は改装され、若狭地域の食文化を紹介する村田館として再生しました。

下ノ町と中ノ町の間道路には、まがりと呼ばれるL字型の曲がり角があります。同様の構造物は、潜在的な攻撃者の速度を低下させるため、防御目的で城下町によく建設されました。15～16世紀のある時には熊川宿の近くに山城があり、当時は町の西端にこの曲がり角があったと考えられています。現在のまがりの位置は、下ノ町が熊川宿の他の地域よりも比較的に後になって開発されたことを示唆しています。それにもかかわらず、下ノ町は上ノ町や中ノ町と同様の雰囲気を持っており、多くの伝統的な町屋があり、そのほとんどは現在は個人の住居となっています。

002-045

The Birth of Kumagawa-Juku Post Town 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
展示説明（熊川宿の誕生）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Birth of Kumagawa-Juku Post Town

Kumagawa-juku is best known as an important shipping hub that facilitated trade between the ports along the Sea of Japan and the old capitals of Nara and Kyoto. However, its history as a post town (*shukuba*) did not officially begin until the late sixteenth century.

Development under the Rule of Asano Nagamasa

After the daimyo Asano Nagamasa (1546–1611) was appointed to govern Wakasa Province in 1587, he carried out an inspection of the Kumagawa area. Asano recognized the economic potential of the small village due to its proximity to the Wakasa Kaido trade route and the border of Omi Province (present-day Shiga Prefecture). In 1589, he issued an edict that exempted Kumagawa from a number of taxes, which stimulated the development of various businesses such as shipping agencies, porter stations, shops, and lodging facilities.

Further Growth into a Prosperous Post Town

Kumagawa-juku continued to grow under the rule of successive lords from the Kinoshita, Kyogoku, and Sakai families. The Maegawa channel was extended through the town, offices were built for government representatives overseeing the area, and a guardhouse was set up to monitor the flow of people and goods in and out of the post town. As a result of favorable taxation policies and various construction projects, Kumagawa developed from a small village of only 40 households to a thriving post town of over 200 households in the span of just a few decades.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：熊川宿の誕生）

熊川宿という宿場町の誕生

熊川宿は、日本海沿岸の港と古都奈良・京都との貿易を促進した重要な運輸の中心地として最もよく知られています。しかし、宿場町（宿場）としての歴史は、正式には16世紀後半まで始まりませんでした。

浅野長政の統治下での発展

1587年に大名であった浅野長政（1546年～1611年）が若狭国の統治者に任命された後、彼は熊川地域の視察を行った。浅野は、若狭街道という交易路と近江国（現在の滋賀県）の国境に近いことから、この小さな村の経済的可能性を見出しました。1589年、彼は熊川地域からさまざまな税を免除する勅令を発令し、運送代理店や運搬人の事務所、商店、宿泊施設など様々な事業の発展を促しました。

豊かな宿場町へのさらなる発展

熊川宿は、木下氏、京極氏、酒井氏という歴代の領主の支配下で成長を続けました。前川という水路は町全体に拡張され、地域を監督する政府の代表者のために奉行所が建設され、宿場町に出入りする人や物の流れを監視するための番所が設置されました。有利な税制と様々な建設プロジェクトの結果、熊川はわずか数十年の間に、たった40世帯の小さな村から200世帯以上の繁栄した宿場町へと発展しました。

【タイトル】若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
 展示説明（宿場町以前の熊川宿）
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa before the Post-Town Era

Before Kumagawa developed into a post town (*shukuba*) in the late sixteenth century, it was just a small village near the border of Wakasa Province and Omi Province (present-day Fukui Prefecture and Shiga Prefecture, respectively). Travelers along the Wakasa Kaido road who took the Hozaka Pass just southeast of Kumagawa crossed into Omi Province and could continue east toward Imazu and Lake Biwa or go south to Kutsuki, Ohara, and Kyoto (then the capital of Japan). Records suggest that a facility for inspecting people and goods existed near Kumagawa in the early fifteenth century, showing that the Wakasa Kaido road was already an important route connecting the capital and the Sea of Japan.

The Numata Family

In the sixteenth century, the Kumagawa area was ruled by the Numata family. Jako (1544–1618), the daughter of Numata Mitsukane, the lord of Kumagawa Castle, was chosen to marry into the powerful Hosokawa family. Her husband Hosokawa Fujitaka (also known as Hosokawa Yusai, 1534–1610), a prominent general and an accomplished writer, later became lord of Tango Province (present-day northern Kyoto Prefecture). Jako herself was recognized for her role as one of the defenders of Tanabe Castle during a siege in 1600. Following her conversion to Christianity, she also became known as Hosokawa Maria.

Wakasa Kaido Road

The Wakasa Kaido road running through Kumagawa was primarily a trade route, but was sometimes also used for military purposes. According to a biography of the powerful warlord Oda Nobunaga (1534–1582), he and his commanders stayed

overnight in Kumagawa during a campaign against the lord of the neighboring Echizen Province (present-day northern Fukui Prefecture) in 1570.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：宿場町以前の熊川宿）
宿場町時代より前の熊川

16世紀後半に熊川がポストタウン（宿場）へと発展する前は、若狭国と近江国（それぞれ、現在の福井県と滋賀県）の国境近くにある小さな村にすぎませんでした。熊川の南東にある保坂峠^{ほうざか}を通過した若狭街道を行く旅人たちは近江国に渡り、引き続き東の今津^{いまづ}や琵琶湖へ向かうか、または南に向かって朽木^{くつき}、大原、京都（当時の首都）に行くことができました。記録によれば、15世紀初頭には熊川の近くに人や物を検査する施設があり、若狭海道はすでに首都と日本海を結ぶ重要なルートであったことがわかります。

沼田氏

16世紀には、熊川地域は沼田氏によって統治されていました。熊川城の領主である沼田光兼^{みつかね}の娘である麿香^{じゃこう}（1544年～1618年）は、権力のある細川氏と結婚するために選ばれました。彼女の夫である細川藤孝^{ほそかわふじたか}（細川幽斎^{ほそかわゆうさい}としても知られる1534年～1610年）は、著名な武将であり、著名な作家であり、後に丹後国^{たんご}（現在の京都府北部）の領主になりました。麿香自身は、1600年の包圍戦で田辺城^{たなべ}を守った一人として有名になりました。彼女はキリスト教に改宗したことから、細川マリアとしても知られるようになりました。

若狭街道

熊川を貫く若狭街道は、主に交易路でしたが、時には軍事目的で使われることもありました。強力な武将のリーダーであった織田信長（1534年～1582年）の伝記によると、信長と彼の武将たちは、1570年に隣接する越前国^{えちぜん}（現在の福井県北部）の領主に対する行軍中に熊川に一晩滞在しました。

【タイトル】若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
 展示説明（鯖街道の起源）
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Origins of the Saba Kaido Trade Routes

Saba Kaido (“Mackerel Road”) is the popular name of the branching network of trade routes that connected the Sea of Japan and the ancient capital of Kyoto. The name came into use sometime in the Edo period (1603–1867), but the routes themselves have a history of more than a thousand years, which is demonstrated by archaeological findings and ancient shipping records.

Archaeological Discoveries in Ancient Burial Mounds

Many keyhole-shaped burial mounds (*kofun*) are located along the roads that run through the Wakasa region. The Kaminaka area is particularly well known for the fifth- and sixth-century mounds found there. Grave goods discovered during excavations include items from mainland Asia, indicating that overseas trade already occurred at the ports along the Sea of Japan and that established trade routes leading to the capital facilitated transportation of goods inland. Some of the burial mounds have been tentatively identified as related to the Kashiwade no Omi, a clan that was tasked with supplying foodstuffs from Wakasa to the emperor and his court.

Wakasa Province Supplying Food to the Court

The shipments of food were made because Wakasa Province was once a *miketsukuni*, a province that paid some of its taxes in the form of food for the emperor’s court. Wooden shipping tags from Wakasa were found during excavations of Fujiwarakyo (the capital in 694–710) and Heijokyo (the capital in 710–740 and in 745–784) in present-day Nara Prefecture. The tags include information about the district the shipment came from, the tax payment it was for, and the type of food it contained. Examples of inscriptions that are still legible include salt and seafood such as mussels

and sea bream. Thus, long before the Saba Kaido trade routes became famous for mackerel, other valuable food products were transported from Wakasa along the same roads all the way to Nara and later Kyoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：鯖街道の起源）

鯖街道という交易路の起源

鯖街道（鯖の道）は、日本海と古代の都であった京都を結び、様々に分岐した交易路のネットワークの通称です。この名前は江戸時代（1603年～1867年）に使用されるようになりましたが、この道自体に1000年以上の歴史があることは、考古学的な発見や古代の輸送の記録によって証明されています。

古代の古墳での考古学的発見

若狭地域を貫くこの道沿いには、鍵穴の形をした古墳（古墳）が数多く点在しています。特に上中地域は、そこで見つかった5～6世紀の古墳で有名です。発掘調査で発見された副葬品にはアジア大陸のからのものも含まれており、日本海沿岸の港ではすでに海外との貿易が行われていたことや、首都への交易路が確立されたことで内陸への輸送が容易になったことを示しています。いくつかの古墳は、若狭から天皇や朝廷へ食料を供給する任務を負っていた一族である膳臣（かしわでのおみ）に関連しているかもしれないと見なされています。

若狭国の朝廷への食糧の供給

若狭国はかつて、御食国（みけつくに）という朝廷への税の一部を食糧で納めなければならない地域だったため、食料の出荷が行われた。現在の奈良県にかつてあった藤原京（ふじわらきょう）（694年～710年の都）と平城京（へいじょうきょう）（710年～740年と745年～784年の都）の発掘調査で、若狭からの木製の荷札が発見されました。その荷札には、出荷元の地域、その荷に関連する税の支払い、荷に含まれていた食品の種類、などの情報が含まれています。今でも判読できるそこに刻まれた文字の例としては、塩、そしてイガイや鯛などの海産物などがあります。このように、鯖街道という交易路が鯖で有名になるずっと前から、他の貴重な食料品が同じ道を通して若狭から奈良、そして後に京都へ運ばれました。

002-048

The Many Routes of the Saba Kaido

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
展示説明（京は遠ても十八里）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Many Routes of the Saba Kaido

Mackerel was one of the major commodities shipped from the Wakasa region during the Edo period (1603–1867). It was freshly caught in the Sea of Japan and salted or fermented to preserve it for the journey to remote markets. The bulk of the fish was sent to Kyoto, which was the capital at the time, and the routes connecting Wakasa and Kyoto came to be known as the Saba Kaido, or “Mackerel Road.”

A Network of Trade Roads

Though the name “Saba Kaido” implies a single road, it was a branching network consisting of multiple trade routes. The most well-traveled was the Wakasa Kaido road, which passed through Kumagawa-juku post town and led to Kyoto via the villages of Kutsuki, Ohara, and Yase. The shortest way from the port town of Obama to Kyoto was the mountain trail along the Onyu River and through the Harihatagoe Pass, but it was very steep, making the journey quite challenging. Other roads connected Wakasa to the Tanba area north of Kyoto and to Lake Biwa in Omi Province (present-day Shiga Prefecture).

Only 72 Kilometers to Kyoto

An old expression in Wakasa states that “the far-off capital is only 18 *ri* away,” referring to the fact that the distance to Kyoto is approximately 72 km. Despite the challenging trek through the mountains, experienced porters carrying fish and other goods along the Saba Kaido could make the journey in just one day. As a haiku written by the renowned poet Yosa Buson (1716–1784) about the Saba Kaido reads: The people of Wakasa / Are well-accustomed to travel / Through the summer mountains.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：京は遠ても十八里）

鯖街道のいくつかのルート

江戸時代（1603年～1867年）、鯖は若狭地方から出荷された主要な商品の1つでした。遠方の市場への旅に向けて保存するために日本海で獲れたての鯖を、塩漬けまたは発酵させました。その魚の大部分は当時の首都であった京都に送られ、そして若狭と京都を結ぶ道は「鯖街道」（鯖の道）として知られるようになりました。

交易路のネットワーク

「鯖街道」という名前は一本の道を連想させますが、それは複数の交易路からなる分岐した網状のものでした。最もよく行き来されたのは若狭街道で、熊川宿という宿場町を通り、朽木、大原、八瀬という村々を経由して京都に至りました。港町の小浜から京都への最短ルートは、遠敷川沿いの山道で、針畑越えという峠を通過する道でしたが、この道はとても急勾配で、そこを旅するのはかなり難しいことでした。他の道は、若狭と京都北部の丹波地域や近江国（現在の滋賀県）の琵琶湖とを結んでいました。

京都までたった72km

若狭の古い表現に「京は遠ても一八里」とあり、京都までの距離は約72kmという事実になんだものです。山あいを通る困難な旅にもかかわらず、魚やその他の物資を鯖街道に沿って運ぶ経験豊富な運搬人は、たった1日でその旅を終えることができました。有名な歌人の与謝蕪村（1716～1784年）のある俳句に、鯖街道の様子がこう詠まれています。「夏山や通ひなれたる若狭人」

【タイトル】若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
 展示説明（若狭街道）
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Wakasa Kaido Road

The Wakasa Kaido road was used since ancient times to transport seafood and other goods from the port town of Obama to the old capitals of Nara and Kyoto. During the Edo period (1603–1867), it was the most well-traveled road among the multitude of trade routes comprising the Saba Kaido (“Mackerel Road”) network. The Wakasa Kaido ran from Obama to Kumagawa-juku post town, over the Hozaka Pass through the mountains, south to the village of Kutsuki, and further south through Ohara and Yase, ending at Demachiyanagi in northern Kyoto.

Historical Records on the Role of Wakasa Kaido

Records of shipments and business dealings conducted along the Wakasa Kaido in the Edo period, such as the *Obama ichiba nakagai monjo* (Obama Market Brokerage Archives), make it possible to estimate the scale of travel that occurred at the time. Other books published in the mid-eighteenth century contain descriptions of construction projects aimed at enabling shipping by riverboat between Obama and Kumagawa-juku, as well as data on how many hundreds of horses passed through the post town in certain years.

Part of a Pilgrimage Route

In addition to being an essential trade route, the Wakasa Kaido road played an important role in religious life. A section of the road helped connect Matsuno’odera Temple and Hogonji Temple, two stops along the Saigoku Kannon Pilgrimage route in western Japan that encompasses 33 temples dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion. According to early eighteenth-century business records from Kumagawa-

juku, sometimes hundreds of pilgrims stayed the night in the post town on their way along the Wakasa Kaido.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：若狭街道）

若狭街道という道

若狭海道は古代から、港町である小浜から昔の首都である奈良や京都へ、海産物やその他の物を運ぶために利用されていました。江戸時代（1603年～1867年）には、鯖街道（「鯖の道」）のネットワークを構成する多数の交易路の中で、最もよく行き来された道でした。若狭街道は、小浜から熊川宿という宿場町へと延び、山あいにある保坂峠を越えて、南は朽木村に、さらに南へ行くとおおはらやせを通り、京都北部の出町柳で終わりました。

若狭街道の役割に関する史料

おばまいちばなかがいもんじょ（小浜の市場の仲買の記録）など、江戸時代に若狭街道で行われた輸送や商取引の記録から、当時に行われた旅行の規模を推定することができます。18世紀半ばに出版された他の本には、小浜と熊川宿の間で川船による輸送を可能にすることを目的とした建設プロジェクトの説明と、ある特定の年に何百頭もの馬が宿場町を通過したというデータが記載されています。

巡礼路の一部

若狭街道は、重要な交易路であっただけでなく、宗教的生活においても重要な役割を果たしました。若狭街道のある箇所は、慈悲の菩薩である観音を祀る33の寺院を含む、西日本にある西国観音巡礼路上の二つの立ち寄り先である松尾寺と宝厳寺を結ぶのに役立ちました。熊川宿の18世紀初頭の業務記録によれば、時には何百人もの巡礼者が、若狭街道を旅する途中で熊川宿に泊まったとあります。

【タイトル】若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
 展示説明（熊川の文化）
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

The Culture of Kumagawa

Since Kumagawa is located on the Wakasa Kaido road, it has long been a place of cultural exchange between the old capital of Kyoto and mainland Asia. People and goods from the Sea of Japan and beyond passed through Kumagawa on the way to Kyoto, while religious beliefs, festival traditions, and works of art flowed from the capital to Kumagawa.

A Cultural Crossroads

Many famous artists, writers, entertainers, and religious figures stopped in Kumagawa during their travels. Rennyo (1415–1499), the leader of the Jodo Shinshu (True Pure Land) school of Buddhism, spent some time with the monks of Tokuhoji Temple in 1475, and the temple was later converted to Jodo Shinshu. Hosokawa Fujitaka (also known as Hosokawa Yusai, 1534–1610), a prominent general and accomplished writer who married Jako (1544–1618), the daughter of the lord of Kumagawa Castle, visited in 1567 to host a *renga* poetry gathering. The renowned *renga* poet Satomura Joha (1525–1602) stayed in Kumagawa-juku in 1568.

Aspects of Kyoto Culture in Kumagawa

The influence of Kyoto culture is most evident in the traditional festivals of Kumagawa-juku. During the annual festival of Shiraishi Jinja Shrine on May 3rd, a large float decorated with a luxurious tapestry is paraded through the town in the style of Kyoto's famous Gion Festival. The Tessen Odori dance that originated in the Yase and Ohara villages of northern Kyoto is performed in Kumagawa-juku in the summer. The practice was discontinued in the Taisho era (1912–1926), but was revived in 1998

through the efforts of the town residents and a traditional performing arts preservation society.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：熊川の文化）

熊川の文化

熊川は若狭街道にあることから、長らく、昔の首都であった京都とアジア大陸との文化交流の場となってきました。日本海から人や物資が京都へ向かう途中で熊川を経由し、都から信仰や祭礼、美術品が次々と持ち込まれました。

文化の交差点

多くの著名な芸術家、文人、芸人、宗教家が旅の途中、熊川で過ごしました。浄土真宗の宗祖である蓮如（1415年～1499年）は、1475年に得法寺の僧侶としばらくの間を過ごし、後に得法寺は浄土真宗に改宗しました。熊川城主の娘である麿香（1544年～1618年）と結婚した著名な武将であり、著名な作家であった細川藤孝（細川幽斎としても知られる1534年～1610年）は、1567年に連歌という詩の会を主催するために訪れました。有名な連歌の詩人の里村紹巴（1525年～1602年）は、1568年に熊川宿に滞在しました。

熊川における京文化

京文化の影響は、熊川宿の伝統的な祭りに最も顕著に表れています。毎年5月3日に行われる白石神社の祭りでは、豪華な織物で飾られた大きな山車が、京都の有名な祇園祭のように街中を練り歩きます。夏には、京都北部の八瀬村や大原村で発祥した鉄扇踊りという踊りが、熊川宿で踊られます。この催しは大正時代（1912年～1926年）に途絶えましたが、町民や伝統芸能の保存会の尽力により、1998年に復活しました。

【タイトル】若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
 展示説明（熊川葛）
 【想定媒体】アプリQRコード

できあがった英語解説文

Kumagawa-Juku Kudzu Starch

Kudzu (Japanese arrowroot; *Pueraria montana* var. *lobata*) is a climbing vine of the legume family that grows rampantly in fields and mountains. It is traditionally regarded as one of the seven flowering plants representing autumn and is mentioned in the eighth-century *Man'yōshū*, Japan's oldest collection of poetry. Starch has been produced from kudzu roots for centuries and remains a valuable ingredient for food and medicine to this day. When cooking, it is primarily used to make traditional sweets, such as gelatinous *kuzu manju* and chewy *kuzu mochi*, or as a thickening agent. As herbal medicine, it is commonly mixed into drinks to improve blood circulation and to alleviate early cold symptoms such as chills and stiffness.

Kumagawa-Juku Starch in Historical Documents

Kudzu starch from Kumagawa-juku has long been renowned for its excellent quality. *Wakasako* and *Wakasa gunkenshi*, two books written in the Edo period (1603–1867) about the history of the Wakasa region, confirm that starch made in Kumagawa-juku was sold in the old capital of Kyoto in the seventeenth century. In 1830, the Confucian scholar Rai San'yo (1780–1832) sent starch from Kumagawa-juku to his sick mother in Hiroshima. The accompanying letter included instructions for preparing a boiled mixture of starch and ginger to help moisten the lungs. Rai praised the quality of Kumagawa-juku kudzu starch as more refined compared to starch made in the Yoshino region of Nara Prefecture, another area famous for the product.

Production Process

The high grade of kudzu starch made in Kumagawa-juku can be attributed to the months-long traditional production method and the quality of water used in the process.

Production begins in the winter, since the roots must be harvested before the plant expends nutrients on spring growth. After being washed and peeled, chunks of the thick root are crushed and put through a strainer. The resulting mash is then repeatedly soaked in fresh, cold water. Impurities are removed through a filtering process that is performed multiple times until the white substance left behind reaches the desired quality. After settling, the paste-like starch is left to dry, solidifying into a powdery block that can be broken up and sold to customers.

Preserving Traditional Techniques

Most kudzu starch producers throughout the country now use more modern equipment. However, the Kumagawa Kudzu Promotion Society is dedicated to preserving traditional regional techniques and passing them on to future generations. It operates a small factory at the former site of the Kumagawa-juku magistrate's office, harvesting kudzu roots in the nearby mountains and following the centuries-old process to create starch of the highest quality.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：熊川葛）

熊川葛

葛はマメ科のつる植物で、野山で繁茂します。伝統的に秋の七草の一つとされ、日本最古の歌集である8世紀の万葉集にも代表的な季節の花として登場します。何世紀も前から、葛の根からでんぷん質の食べ物が作られ、食品や医薬品の貴重な原材料になっています。料理では、主にゼラチン状の葛饅頭やもちもちしている葛餅などの伝統的なお菓子や、増粘剤として使われています。生薬としては、血行を良くし、寒気やこわばりなどの風邪の初期症状をやわらげるために、飲み物に混ぜて飲むのが一般的です。

史料における熊川宿の葛

熊川宿の葛は、古くから品質の良さで有名です。江戸時代（1603年～1867年）に書かれた若狭地方の歴史を記した2冊の書物、「わかさこう稚狭考」や「わかさぐんけんし若狭群県志」によれば、17世紀に昔の首都であった京都で熊川宿の葛粉が売られていたことが確認されています。1830年、儒学者のらいさんよう頼山陽（1780年～1832年）は、広島にいた病気の母親に熊川宿から葛を送りました。同封された手紙には、肺を湿らせるのを助けるための、葛と生姜の煮物の作り方の指示も書かれていました。らい頼は、もう一つの名産地である奈良県吉野地方産の葛粉と比べて、熊川宿の葛は上品だと称賛し

ました。

生産過程

熊川宿で生産される葛の品質の高さは、数ヶ月に及ぶ伝統的な製法と、その過程で使用される水の質によるものといえるでしょう。葛が春の成長のために栄養分を消費する前に、葛の根を収穫する必要があるため、葛の製造は冬に始まります。洗って皮をむかれた後、太い根の塊はすりつぶされ、漉し器に通されます。すりつぶされどろどろになった葛はその後、冷たい真水に繰り返し浸されます。残った白い物質が目的の品質になるまで何度も濾過の過程を行い、不純物を取り除きます。沈殿させた後、ペースト状のでんぷん質を乾燥させ、粉の塊へと固化させます。それを粉々に砕いて販売することができます。

伝統的な製法の保存

日本全国のほとんどの葛の製造者は現在、より近代的な設備を使用しています。しかし、熊川葛振興会は、伝統的なこの地域の葛づくりの技術を守り、後世に伝えることに力を注いでいます。この協会は熊川宿の奉行所の跡地で小さな工場を営み、近くの山で葛を収穫し、最高品質の葛を製造するための何世紀もの歴史をもつプロセスに従っています。

002-052

Second-Floor Exhibition: Daily Life in a Post Town

小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会

【タイトル】 若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） /
展示説明（2F生活用品の展示）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Second-Floor Exhibition: Daily Life in a Post Town

The exhibits on this floor are related to everyday life and business activities in Kumagawa-juku, which was a thriving post town with shipping agencies, porter stations, various shops, and lodging facilities.

Clothing and Tools Used by Travelers and Porters

Travelers that passed through the town in the Edo period (1603–1867) often wore hats, shoes, and raincoats made of straw, and examples of such apparel can be found next to tools used for trade and shipping. Poles and woven baskets were used by porters for carrying heavy loads on their shoulders, and even heavier loads were handled by cattle. The large wooden harness allowed goods to be carried by oxen. It is decorated with mother-of-pearl inlay and may have been used for special occasions like transporting annual tax payments. Hung beside it are straw shoes that were woven for the oxen, serving to protect the hooves and provide traction on slippery footing.

Other Business-Related and Household Items

Some of the other commerce-related objects include wooden signboards from several stores, a pharmacy sign listing some of the medicines on offer, as well as boxes and jars for carrying various goods. During winter snows, wooden sleds were used for transportation. An example of an everyday household item particular to Kumagawa-juku is the *imoarai*, a waterwheel-based, barrel-like device for peeling potatoes that utilizes the force of water flowing in the stone-paved Maegawa channel that runs the entire length of the town.

Kudzu Starch Production Process and Tools

Part of the second floor is dedicated to kudzu starch, a regional specialty in Kumagawa. Items on display include trays, basins, crushing and cutting tools, a kudzu root, and a sample of the final product from 100 years ago. Information panels and photos provide an explanation of the steps involved in the manufacturing process and reproduce historical records mentioning the high quality of Kumagawa-juku starch.

Kumagawa-Juku Present and Past

A large diorama recreates a bird's-eye view of present-day Kumagawa-juku and the surrounding landscape. Two historical maps, one from the late Edo period (1603–1867) and one from 1878, list the names of businesses and families that operated and resided in the post town and offer insight into how the layout has changed over time. Moments of everyday life are preserved in numerous black and white photos, the oldest of which date to the Taisho era (1912–1926).

The various documents, tools, craft items, clothes, and other exhibits paint a vivid picture of life in Kumagawa-juku over the last several centuries. Be it a firefighter corps banner, a ceremonial staff used in festivals, traditional headgear worn by *ashigaru* foot soldiers, decorative roof tiles, or even a Western-style phonograph, each piece speaks to a time past, now carefully preserved at the museum.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館） 展示説明：2F生活用品の展示）

2階の展示：宿場町の日常生活

このフロアの展示品は、かつては運送代理店や運搬人の事務所、さまざまな商店、宿泊施設があり、宿場町として栄えた熊川宿の日常生活や商業活動にまつわるものです。

旅人や運搬人が使用した衣類や道具

江戸時代（1603年～1867年）に町を通過した旅人たちは、藁で作られた帽子や靴、カッパをよく身に着けていました。そのような衣料品の例は、交易や輸送に使用される道具の隣に見られます。棒と編み籠は肩に乗せて重い荷物を運ぶために使用され、さらに重い荷物は牛によって取り扱われました。大きな木製の鞍は、牛が物資を運べるようにするものです。螺鈿細工で装飾されており、年貢の運搬

などの特別な機会に使用された可能性があります。そのそばには、牛のために編まれた、ひづめを保護し滑りやすい足場で牽引力を提供するための藁のくつが吊るされています。

その他の商業用品および家庭用品

その他の商売に関連する品物には、いくつかの店の木製の看板や、提供されている薬の一部を並べた薬局の看板、さまざまな商品を運ぶために使用される箱や壺などがあります。冬の雪の間は、木製のそりが運搬に使われました。熊川宿ならではの日用品の一例として「芋洗い^{いもあら}い」があり、これは水車をベースにした樽のような形の道具で、町全体を通っている石で舗装された前川という水路を流れる水の力を利用してじゃがいもの皮を剥くためものです。

葛の製造過程と道具

2階の一部は、熊川の特産品である葛のコーナーです。展示品には、お盆やたらい、粉碎および切断する道具、葛の根、100年前の最終製品のサンプルなどが含まれます。パネルや写真で製造工程を解説し、熊川宿の葛の品質の高さについて言及した歴史資料を展示しています。

熊川宿の現在と過去

大型のジオラマは、現在の熊川宿とその周辺の風景を俯瞰で再現しています。江戸時代（1603年～1867年）後期のものと1878年のものの2枚の歴史的地図には、かつて宿場町で営業していた企業や居住していた家族の名前が記載されており、時間の経過とともにレイアウトがどのように変化したかについての洞察が得られます。日常生活の瞬間が数多くの白黒写真で保存されており、そのうちの最も古いものは大正時代（1912年～1926年）のものであります。

さまざまな資料、道具、工芸品、衣服、その他の展示品は、過去数世紀にわたる熊川宿の生活を鮮やかに描き出しています。消防隊の旗、祭りで使用される儀式用の杖、足輕の歩兵が着用する伝統的な笠、装飾的な屋根瓦、さらには洋風の蓄音機など、それぞれの品が過去の時代を物語っており、現在は資料館に大切に保管されています。

地域番号	003	協議会名	松本市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
003-001	国宝松本城 天守1階 / 武者走		～250	看板
003-002	国宝松本城 天守1階 / 石落		～250	看板
003-003	国宝松本城 天守1階 / 天守の土台支持柱		～250	看板
003-004	国宝松本城 天守1階 / 矢狭間・鉄砲狭間		～250	看板
003-005	国宝松本城 天守1階 / 天守大棟の鯨, 鯨真木		～250	看板
003-006	国宝松本城 天守1階 / 松本城天守の構造		～250	看板
003-007	国宝松本城 天守1階 / 壁の構造		～250	看板
003-008	国宝松本城 天守1階 / 懸魚芯材(げぎょしんざい)		～250	看板
003-009	国宝松本城 天守2階 / 鉄砲のできるまで, 銃身の製作法		251～500	看板
003-010	国宝松本城 天守2階 / 大型火縄銃と馬上筒		251～500	看板
003-011	国宝松本城 天守2階 / 火縄銃の製作地と特徴		251～500	看板
003-012	国宝松本城 天守2階 / 雑兵物語, 赤羽文庫, 武器図		251～500	看板
003-013	国宝松本城 天守2階 / 島原の乱		～250	看板
003-014	国宝松本城 天守2階 / 象がんで装飾された銃		～250	看板
003-015	国宝松本城 天守2階 / 灯明皿, 器と食材, 貝類, 魚類, 焼塩壺, 舶来磁器, 合子		251～500	看板
003-016	国宝松本城 天守2階 / 大坂の陣		～250	看板
003-017	国宝松本城 天守2階 / 牛つなぎ石伝説 (webサイト)		～250	WEB

003-018	国宝松本城 天守2階 / 松本城二の丸御殿跡の発掘と整備	～250	看板
003-019	国宝松本城 天守2階 / 戦国期の弾づくり・火縄銃	～250	看板
003-020	国宝松本城 天守2階 / 長篠の戦い	～250	看板
003-021	国宝松本城 天守2階 / 船載砲	～250	看板
003-022	国宝松本城 天守2階 / 古銭	～250	看板
003-023	国宝松本城 天守2階 / 煙管・碁石	～250	看板
003-024	国宝松本城 天守2階 / 硯	～250	看板
003-025	国宝松本城 天守2階 / 平面に表された二の丸御殿、松本城二の丸御殿絵図	～250	看板
003-026	国宝松本城 天守2階 / 瓦, 瓦伝票, 巴文軒丸瓦, 沢潟紋	～250	看板
003-027	国宝松本城 天守2階 / 点火方法の進歩	251～500	看板
003-028	国宝松本城 天守2階 / 前装銃から後装銃への発展	～250	看板
003-029	国宝松本城 天守2階 / 松本城鉄砲蔵	～250	看板
003-030	国宝松本城 天守2階 / 鉄砲の分類	～250	看板
003-031	国宝松本城 天守2階 / 天下をねらう人々と鉄砲の広がり	～250	看板
003-032	国宝松本城 天守2階 / カラクリ 火縄銃の機関部	～250	看板
003-033	国宝松本城 天守2階 / 発射法・早合による弾丸の装填	～250	看板
003-034	国宝松本城 天守2階 / 武士の装備品（イラスト）	～250	看板
003-035	国宝松本城 天守6階 / 守護神二十六夜社勧請の謂れ	～250	看板

003-036	国宝松本城 天守6階 / 建言書・懇願書	～250	看板
003-037	国宝松本城 辰巳附櫓 / 概要	～250	看板
003-038	国宝松本城 辰巳附櫓 / 銅卵(胴乱), 弾薬箱	～250	看板
003-039	国宝松本城 辰巳附櫓 / 鳥銃袋, 切火縄, 火縄械, 火縄筒	～250	看板
003-040	国宝松本城 辰巳附櫓 / 花頭窓	～250	看板
003-041	国宝松本城 辰巳附櫓 / 様々な変り弾	～250	看板
003-042	国宝松本城 辰巳附櫓 / 投砲ろく, 烙丸, 枕火矢杵丸, 盆貌弾, 葡萄弾	～250	看板
003-043	国宝松本城 辰巳附櫓 / 竹管請筒, 錫いれ, 火針	～250	看板
003-044	国宝松本城 辰巳附櫓 / 螺と爬, かる杖, 櫓早合	～250	看板
003-045	国宝松本城 月見櫓 / 概要	～250	看板
003-046	国宝松本城 月見櫓 / 明治の修理実施中の天守(明治43年頃), 松本城古写真(明治35年頃)	～250	看板
003-047	国宝松本城 本丸庭園 / 宇宙ツツジ	～250	看板
003-048	国宝松本城 本丸庭園 / 清正公駒つなぎの桜	～250	看板
003-049	国宝松本城 本丸庭園 / 松本城保存の功労者	～250	看板
003-050	国宝松本城 本丸庭園 / 小笠原牡丹	～250	看板
003-051	国宝松本城 本丸庭園 / 松本城と城下町	～250	看板
003-052	国宝松本城 本丸庭園 / 史跡松本城の概要	～250	看板
003-053	国宝松本城 松本城公園 / 太鼓門枳形の由来, 切株の説明, 太鼓門礎石の由来	251～500	看板

003-054	国宝松本城 松本城公園 / 二の丸御殿絵図	～250	看板
003-055	国宝松本城 松本城公園 / 土蔵	～250	看板
003-056	国宝松本城 松本城公園 / 国宝 旧開智学校校舎	～250	看板
003-057	国宝松本城 西総堀土塁公園 / 土塁って何だろう？, 松本城西総堀土塁の概要, 土塁ってどうやって造ったの？, 土塁と石垣	251～500	看板
003-058	国宝松本城 西総堀土塁公園 / 土塁の構築, 土塁模式図, 総堀杭列	251～500	看板
003-059	国宝松本城 西総堀土塁公園 / 武家屋敷概要 礎石建物, 庭園遺構, 甕の埋設	～250	看板
003-060	国宝松本城 西総堀土塁公園 / 近代の土塁, 市内に残る土塁, 土塁の復元, 現代に残された土塁	251～500	看板
003-061	国宝旧開智学校校舎 / 概要 (館内看板)	251～500	看板
003-062	国宝旧開智学校校舎 / 概要 (webサイト)	251～500	WEB
003-063	国宝旧開智学校校舎 / 概要 (パンフ)	751～	パンフレット
003-064	国宝旧開智学校校舎 / ガラス	～250	アプリQRコード
003-065	国宝旧開智学校校舎 / 丸太柱	～250	アプリQRコード
003-066	国宝旧開智学校校舎 / 棧唐戸	～250	アプリQRコード
003-067	国宝旧開智学校校舎 / 紙天井	～250	アプリQRコード
003-068	国宝旧開智学校校舎 / 正面玄関	251～500	アプリQRコード
003-069	国宝旧開智学校校舎 / 八角塔屋	～250	アプリQRコード
003-070	国宝旧開智学校校舎 / 校舎外観 (擬洋風建築の紹介)	251～500	アプリQRコード
003-071	国宝松本城 乾小天守 / 乾小天守と丸太柱	～250	看板

003-072	国宝松本城 渡櫓2階 / 松本城の沿革	～250	看板
003-073	国宝松本城 渡櫓2階 / 年表	251～500	看板
003-074	国宝松本城 渡櫓2階 / 松本城下絵図	～250	看板
003-075	国宝松本城 渡櫓2階 / 歴代6家城主	251～500	看板
003-076	国宝松本城 渡櫓2階 / 桔木(はねき)構造	～250	看板
003-077	国宝松本城 天守2階 / 日本と火縄銃	251～500	看板
003-078	国宝松本城 天守2階 / からくり：平	～250	看板
003-079	国宝松本城 天守2階 / からくり：かにの目無き	～250	看板
003-080	国宝松本城 天守2階 / からくり：外記	～250	看板
003-081	国宝松本城 天守2階 / 突上戸, 武者窓, 水切り	～250	看板
003-082	国宝松本城 天守2階 / 変わった鉄砲	～250	看板
003-083	国宝松本城 本丸庭園 / 松本城戊辰出兵記念碑	251～500	看板
003-084	国宝松本城 黒門 / 歴代城主の家紋	～250	看板
003-085	国宝松本城 / 天守 1 階～6階 概要	251～500	看板
003-086	国宝松本城 / 大手門跡の看板	～250	看板
003-087	国宝松本城 / おもてなし隊の役	251～500	アプリQRコード
003-088	国宝松本城 / 松本城へようこそ(パンフ)	～250	パンフレット
003-089	国宝松本城 / 日本のお城(パンフ)	～250	パンフレット
003-090	国宝松本城 / 戦時と平時の松本城(パンフ)	～250	パンフレット

003-091	国宝松本城 / 天守1階、2階(パンフ)	～250	パンフレット
003-092	国宝松本城 / 天守3階、4階(パンフ)	～250	パンフレット
003-093	国宝松本城 / 天守5階、6階(パンフ)	～250	パンフレット
003-094	国宝松本城 / 本丸御殿、二の丸御殿(パンフ)	～250	パンフレット
003-095	国宝松本城 / 松本城 観覧案内(webサイト)	251～500	WEB
003-096	国宝松本城 / 松本城の四季(webサイト)	～250	WEB
003-097	国宝松本城 / ボランティアガイドの案内(webサイト)	～250	WEB
003-098	国宝松本城 / 国宝松本城について(webサイト)	～250	WEB
003-099	国宝松本城 / 天守とその構造『国宝に指定された大天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓の五棟』+『天守の特徴』(webサイト)	251～500	WEB
003-100	国宝松本城 / 天守とその構造『石垣～野面積みと算木積み～』+『滴水瓦と捨て瓦』(webサイト)	251～500	WEB
003-101	国宝松本城 / 大天守：1階(webサイト)	251～500	WEB
003-102	国宝松本城 / 大天守：2階(webサイト)	251～500	WEB
003-103	国宝松本城 / 大天守：3, 4, 5階(webサイト)	251～500	WEB
003-104	国宝松本城 / 大天守：6階(webサイト)	251～500	WEB
003-105	国宝松本城 / 乾小天守(webサイト)	251～500	WEB
003-106	国宝松本城 / 渡櫓・辰巳付櫓・月見櫓(webサイト)	251～500	WEB
003-107	国宝松本城 / 黒門・太鼓門(webサイト)	251～500	WEB
003-108	国宝松本城 / 本丸御殿跡・二の丸御殿跡(webサイト)	251～500	WEB

003-109	国宝松本城 / 市川量造と小林有也のレリーフ (webサイト)	～250	WEB
003-110	国宝松本城 / 水野忠直奉献灯笼・戸田家の 灯笼・小笠原牡丹(webサイト)	～250	WEB
003-111	戊辰戦争出兵記念碑・全国城郭管理者協議 会加盟の城写真(webサイト)	～250	WEB
003-112	国宝松本城 / 古山地御殿跡・若宮八幡跡 (webサイト)	～250	WEB
003-113	国宝松本城 / 松本城の歴史：松本城築城 以前(webサイト)	251～500	WEB
003-114	国宝松本城 / 松本城の歴史：松本城の築 城・江戸時代の松本(webサイト)	251～500	WEB
003-115	国宝松本城 / 松本城の歴史：明治維新 (webサイト)	501～750	WEB
003-116	国宝松本城 / 松本城の歴史：現代まで (webサイト)	501～750	WEB
003-117	国宝松本城 / 松本城伝説(webサイト)	～250	WEB
003-118	国宝松本城 / 梁を伸ばした匠伝説(webサイ ト)	～250	WEB
003-119	国宝松本城 / 袖溜橋（緑橋）伝説(webサ イト)	～250	WEB
003-120	国宝松本城 / 松姫伝説(webサイト)	～250	WEB
003-121	国宝松本城 / 傾いた城伝説(webサイト)	～250	WEB
003-122	国宝松本城 / 国宝指定と修理の歩み(webサ イト)	751～	WEB
003-123	国宝松本城 / 住民が守った松本城(webサイ ト)	251～500	WEB
003-124	国宝松本城 / 松本城を残し伝える(webサイ ト)	751～	WEB
003-125	国宝松本城 / 収蔵品(webサイト)	251～500	WEB
003-126	国宝松本城 / 渡櫓2階	～250	看板

003-001

First-Floor Corridors

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 武者走

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

First-Floor Corridors

The Great Keep's first floor has wide corridors to give soldiers space to move around during an attack. The western and southern corridors, which face the moat, are slightly wider to accommodate many defenders at once, since an attack was more likely to come from these directions. In order to create extra headroom for soldiers carrying long bows or muskets, the corridors are approximately 50 centimeters lower than the tatami-floored area they surround.

The walls of the corridors curve subtly inward at their centers. This unintentional feature was caused by the castle's stone-wall foundation: the rough-hewn rocks used to build the foundation were difficult to arrange in perfect right angles. As a result, the stone foundation of the Great Keep curves slightly inward. This curve is also present in the keep's walls, which were aligned with the foundation. Although the first and second floors of the keep appear square, two of their four corners meet at less than 90-degree angles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

1階廊下

大天守の1階には広い廊下があり、攻撃時に兵士が移動するのに十分なスペースが確保されている。廊下は、収納スペースである中央のプラットフォームより50センチほど下に沈んでいる。この高低差により、壇上へはかなりの段差が生じるが、通路の上に空間があるため、長い弓や火縄銃を持った兵士も楽に通行することができる。堀に面した西側と南側の通路は、一度に多くの防御者を収容するためにやや広くなっており、これらはより攻撃されやすい方向であるためだ。

廊下の壁は微妙に内側にカーブしている。これは城の石垣の基礎に起因する意図せず生じたデザインである。石垣の基礎は荒削りの石でできているため、直角を保つのが難しい。そのため、せっかく

四角い基礎を築いたのに、大天守の基礎の側面は、上に行くほどわずかに内側に曲がっている。大天守の一番外側の柱を基礎に合わせたとき、このカーブが天守閣の壁にも伝わってしまったのだ。天守閣の1階と2階は正方形に見えるが、4つの角のうち3つは90度以下の角度で接している。

003-002

Castle Defenses: *Ishi Otoshi*

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 石落

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Castle Defenses: *Ishi Otoshi*

These openings in the floor, called *ishi otoshi*, allowed defenders to repel enemies who reached the castle's stone-wall foundation below. To prevent people and objects from falling through the openings, the *ishi otoshi* were covered with wooden boards that could be removed when the castle came under attack.

Ishi otoshi were typically built at corners to address blind spots in a castle's defenses, but Matsumoto Castle has additional openings at the midpoints between corners. It was thought that a determined attacker could climb the castle's stone-wall foundation, which has a relatively gentle slope of about 57°. Putting *ishi otoshi* at the midpoints made it possible to prevent this and defend the castle against attackers who breached its outer defenses.

Although the name *ishi otoshi* (literally, "stone drops") implies that they were used to drop stones, the openings are quite narrow. If Matsumoto Castle had ever come under attack, defenders would more likely have fired down at attackers with bows and muskets.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城の防御：石落

天守閣の下にある石垣に到達した敵を攻撃するために、床に開けた穴のことを「石落」という。石落しには、人や物が落ちないように木の板が張られていることが多いが、万一、攻撃された場合には取り外すことができる。

石落は、城の防御の死角となる角に設けられるのが一般的だが、松本城では角と角の間地点にも開口部が設けられている。石垣の基礎は約57°と比較的緩やかな傾斜になっており、強敵な

らこれを乗り越えることも可能であったと考えられる。これらのさらなる石落としを設けることによって、多角的な防御が可能になったのである。

石落という名称は、兵士が石を落すために使用したことを意味するが、開口部はかなり狭く、そのような使い方はしなかったと思われる。もし松本城が攻撃されたなら、弓や火縄銃のために石落としを有効活用したことだろう。

003-003

Foundation Support Pillar

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 天守の土台支持柱
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Foundation Support Pillar

Matsumoto Castle stands on a composite alluvial fan formed by the Metoba and Susuki Rivers. To erect a castle on the soft, marshy soil, the builders used innovative construction techniques to prevent the keep from slowly sinking into the ground. Their first innovation was the addition of a thick, wooden lattice to internally reinforce the castle's foundation.

Sixteen hemlock posts, each measuring 5 meters in length and ranging from 36.3 to 39.3 centimeters in diameter, were arranged in a four-by-four grid and connected with beams. Then, the builders buried the entire structure. This created an artificial hill, around which they built the stone walls of the foundation. The foundation, together with the hill, evenly bore the weight of the nearly 1,000-ton Great Keep.

The 16 hemlock posts were excavated during major repairs to the castle in the 1950s, and one post is displayed here. As part of the repairs, the wooden posts were replaced with concrete piles.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

土台支持柱

松本城は、女鳥羽川と薄川が形成した沖積平野に建つ。軟弱な湿地帯であるため、城の建設は困難であったが、天守閣が徐々に沈んでいくのを防ぐために、革新的な建築技術が用いられた。まず、城の基礎を支えるための足場が作られた。

長さ5メートル、直径36.3～39.3センチの榎の木柱16本を、4×4のグリッド状に配置した。そして、柱と柱の間を梁で結び、その上に人工的な丘を築き、その上に基礎となる石垣を築いた。この補強された土台が、1,000トン近い大天守の重量を支えているのである。

この柱は、1950年代の大修理で出土したもので、そのうちの1本がここに展示されている。この大

修理では、木造の柱をコンクリートで固め、安全性と耐久性を向上させた。

003-004

Castle Defenses: Loopholes

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 矢狭間・鉄砲狭間
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Castle Defenses: Loopholes

The rectangular openings in the walls of the Great Keep allowed defenders to shoot arrows and fire muskets down at attackers. These openings, called “loopholes,” were incorporated into many defensive structures, such as gates and walls. Loophole openings can be rectangular, circular, or triangular in shape, and they are often fitted with wooden covers to keep out rain and wind.

There are a total of 110 loopholes built into the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage. The square openings were designed for long-barreled muskets, while the taller rectangular openings were for soldiers using bows. Many of the square loopholes are placed lower on the wall, indicating that gunners fired from a crouched or kneeling position.

The distance from the loopholes to the edge of the inner moat measures approximately 60 meters, which was also the farthest range at which a matchlock musket could accurately be fired. The number and positioning of the square loopholes reflects the predominance of gun warfare in the late sixteenth century, when Matsumoto Castle was constructed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城の防御：狭間

大天守の壁にある長方形の穴は「狭間」と呼ばれ、攻撃してくる敵に矢を放ったり、火縄銃を撃ったりすることができるようになっていた。抜け穴は、門やバリケードなど他の防御構造にも組み込まれ、さまざまな武器に対応できるよう、円形や三角形にすることもできた。天守閣を使用しないときは、雨風を防ぐために木製の栓をすることが多かったが、松本城ではそのようなことはしなかった。大天守、乾小天守、渡櫓の3つの古い建築物には、合計115個の狭間がある。正方形の狭間は

長銃身の火縄銃のために設計され、長方形の狭間は弓を使う兵士のために角度がよくなるように設計された。正方形の狭間は高さが低いものが多く、これは砲手がしゃがんだ姿勢で射撃していたことを示している。

狭間から内堀の端までの距離は約60メートルで、これは火縄銃が正確に発射できる距離でもある。これは松本城が築かれた16世紀後半に鉄砲戦が盛んであったことを示す戦略的な設計である。

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 天守大棟の鯨, 鯨真木
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Shachi Tiles

The roofs of many castles are adorned with ornamental ridge-end tiles in the shape of creatures called *shachi* (or *shachihoko*). These legendary beasts have the heads of tigers and the bodies of fish. According to folklore, *shachi* can spray water from their mouths to put out fires, and the tiles were believed to protect the castle.

Shachi tiles likely developed from similar tiles that were placed on the roofs of ancient palaces and temples. Much like the guardian lion-dogs (*komainu*) seen at Shinto shrines, *shachi* frequently appear in male–female pairs. The male’s open mouth and the closed mouth of the female are said to represent the sounds “a” and “m.” These two sounds signify the beginning and the end of all things, and they have deep significance within Buddhism and other religions that originate from India.

The tiles displayed here were removed from the roof of the Great Keep during repairs in the 1950s. The male is 127 centimeters from base to tail and was located on the southern end of the roof, while the female measures 124 centimeters and was located on the northern end. Inscriptions on the two wooden posts that held the tiles indicates this pair of *shachi* was likely added to the castle in 1843.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鯨瓦

「しゃち」もしくは「しゃちほこ」と呼ばれる生物は、虎の頭と魚の体を持つ神話上の生き物である。鯨は、海から水を吸い上げて城の火に浴びせると、火災から守ってくれるという言い伝えがある。そのためか、城の屋根には鯨をかたどった棟瓦がよく置かれるようになった。

これは古代の宮廷や寺院にあった翼や動物の尾をかたどった瓦が発展したものであろう。鯨は、神社の狛犬と同じように、雌雄一対で登場することが多い。雄の開いた口と雌の閉じた口は、「オ」と

「ン」の音を表していると言われている。この二つの音は、万物の始まりと終わりを意味し、仏教やその他のインド宗教において深い意味を持っている。

ここに展示されている鯰瓦は、1950年代の大天守の修理の際に、屋根から取り外されたものである。高さ127cmの雄は棟の南端に、124cmの雌は北端に置かれていた。瓦を支える2本の木柱に刻まれた銘文から、この鯰は1843年に作られたものと思われる。

003-006

The Structure of the Castle Foundation

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 松本城天守の構造
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Structure of the Castle Foundation

The stone walls of the castle's foundation were built using rough-hewn rock taken from nearby mountains. In this style of masonry, which was common in the latter half of the sixteenth century, the rocks are lightly worked (or "dressed") with chisels to fit them together. Although lightly worked stone was considered less refined than cut stone, lightly worked stone walls required less labor and could be completed more quickly. The gaps left between the stones allowed rainwater to drain through the foundation, protecting the lowermost sections of the castle from rot. For added stability, long rectangular keystones were placed at the corners in alternating directions.

Matsumoto Castle is located on a composite alluvial fan, and there was a risk that its foundation would gradually sink, causing the Great Keep to collapse. When the castle was built, internal support structures were used to shore up the foundation and prevent it from sinking. Before constructing the stone walls, the builders laid 3-meter logs at roughly 50-centimeter intervals along the area that would become the bottom of the foundation. Additional timbers were then laid perpendicularly on top of this structure, creating "pillows" that would support the larger stones at the base. This created a raflike structure that would more evenly disperse the weight of the keep.

As a final measure, two rows of logs were driven vertically into the ground under the moat roughly 5 meters from the foundation. These outer rows were believed to further solidify the soil and prevent the entire section of earth from shifting or sliding.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城の基礎の構造

城の基礎となる石垣は、近隣の山から切り出した荒削りの石材で造られている。この方法は、16

世紀後半には珍しくなくなった、石材を軽く加工して組み立てる方法である。丁寧に加工された石垣に比べれば、洗練されているとはいえないが、手間がかからないので早く完成させることができた。また、石と石の間に隙間があるため、水捌けがよい。また、基礎の角には、長方形の石を交互に並べて、安定性を高めている。

松本城は沖積平野にあるため、基礎が徐々に沈下して大天守が倒壊する恐れがあった。これを防ぐために、支柱を設けた。石垣を積む前に、石垣の底になる部分に、3メートルの丸太を約50センチ間隔で水平に敷き詰めた。これは、天守閣の重さをより分散させるために、筏のような構造にするためだ。さらにその上に、壁の足元と平行に丸太を積み重ね、土台の大きな石を支える「枕」を作った。さらに、土台から約5メートルの堀の下には、丸太を2列、垂直に打ち込んでいる。この丸太の列は、土をさらに固め、土の部分全体がずれたり滑ったりしないようにするためと考えられている。

003-007

Keep Walls

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 壁の構造
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Keep Walls

The walls of the Great Keep were designed to protect defenders from the muskets of an attacking army. On the first and second floors, some sections of the walls were built almost 30 centimeters thick to withstand musket fire. The walls of upper floors did not need to be as thick, thanks to the change in the angle of fire. An attacker firing at the first floor would hit the wall almost head-on, but the higher they aimed, the shallower the angle of penetration would become.

White plaster walls are a common feature of Japanese architecture. They are built by layering mud and plaster over a wooden lattice that acts as a support frame. In the case of Matsumoto Castle, this frame was created using mostly cherry and maple saplings. The lattice is then wrapped in rope, which serves as an anchor for layers of clay that are spread over both sides. Finally, an outer layer of white plaster completes the wall. On the exterior of the keep, the upper part of the wall has been left exposed, while the lower part is covered by black-lacquered weatherboard.

This section of the second-floor wall was removed during repairs in the 1950s. The additional layer of plaster that can be seen in front of the wall was added between 1903 and 1913 to help protect and preserve the castle walls. The diagram shows a cross section of the wall as viewed from above, making it possible to see how the layers are joined together.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大天守の壁

大天守の壁は、16世紀末に一般化した火縄銃の射撃に耐えられるよう設計されている。城壁は1階と2階が最も強固で、最大29.4cmの厚みがある。火縄銃の弾は大天守の最上階まで届くが、

高層階ではそれほど壁を厚くする必要はなかったのである。下から城を狙う場合、攻撃者は壁を正面から撃つことはできないし、高く狙えば狙うほど貫通する角度は浅くなる。

日本建築には、土塀がよく登場する。土塀を作る際には、まず支柱となる木製の格子を組み立てる。松本城の場合は、サクラ、カエデ、クレソンの苗木で組んだ。その格子に縄を巻きつけ、その縄を支点に泥漆喰を塗り重ねる。最後に白い石灰漆喰を塗り、完成である。大天守の外壁は、上部を露出させ、下部を黒塗りのベベルサイディングで覆っている。

この2階部分の壁は、1950年代の修理の際に撤去された。手前に見える漆喰の層は、1903年から1913年にかけて行われた保存修復工事の際に追加されたものである。図は壁の断面を上から見たもので、層がどのように組み合わせられているかを見ることができる。

003-008

Gegyo Bargeboard Pendants

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守1階 / 懸魚芯材(げぎょしんざい)
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Gegyo Bargeboard Pendants

The bargeboards that run along the outer edges of the castle's gables are adorned with decorative wooden pendants called *gegyo*. Like the *shachi* roof tiles displayed nearby, *gegyo* were said to protect a building from fire. The word *gegyo* literally means "hanging fish," and the earliest versions of these decorations were shaped like fish. Many different forms of *gegyo* were developed over time, including variations based on the shape of a boar's eye (a heart-shaped design), shells, turnips, and clovers.

Gegyo can be seen on all the triangular gables of the Great Keep, Northwest Tower, and Southeast Wing. The one displayed here was removed from the Southeast Wing. Such turnip-shaped *gegyo* were particularly common during the Edo period (1603–1867).

This *gegyo* is made from Japanese cypress. It was originally covered in hempen cord, which served as an anchor for a layer of plaster, and the small nails used to attach this cord to the wood are still present. The central hexagonal fitting (*rokuyō*) was coated in black lacquer. The lacquer has since worn off, but it remains visible in the staining of the wood.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

懸魚（破風板装飾）

懸魚とは、屋根の破風の外側にある棧瓦を飾る木製の装飾具である。破風板は屋根の梁が露出している部分を覆うという実用的な役割があるが、懸魚は純粋に装飾的な役割を担っているものである。

元々魚の形をしていたことから「懸魚」と呼ばれるようになったと思われる。近くに展示されている魚型の鯰瓦のように、火災から建物を守るためのお守りとしての意味合いもあったのかもしれない。しか

し、その後、猪の目（ハート型）、貝、カブ、クローバーなど、さまざまな形の懸魚が生まれ、現在に至っている。

大天守、乾天守、辰巳附櫓の三角形の破風のいずれにも懸魚が描かれている。ここに展示されているのは、辰巳附櫓から取り外されたものである。カブ型のデザインは、江戸時代（1603-1867）に最も流行したものの一つである。

この装飾は檜でできている。元々は麻紐で覆われており、白漆喰を塗るための固定具として使用されていた。この麻紐を固定するための小さな釘が残っている。中央の六角形の金具（六曜）には黒漆が塗られていたが、現在は剥がれ落ち、木部の汚れも見える。

003-009

Lock, Stock, and Barrel: Making a Matchlock Musket

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 /
鉄砲のできるまで、銃身の製作法
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Lock, Stock, and Barrel: Making a Matchlock Musket

Producing a matchlock musket was a job for several different craftsmen: a blacksmith to forge the barrel, a woodworker to carve the stock, and a mechanist to craft and assemble the “lock” (firing mechanism).

Although firearms and gunsmithing did not reach Japan until the 1540s, Japanese craftsmen had already spent centuries developing relevant skills, such as smithing and metalworking. With two European muskets as the models, swordsmiths on Tanegashima Island were able to recreate the guns in less than a year, and by the 1550s, hundreds of muskets were being produced at foundries in many different regions.

JPN	ENG
【銃身・鉄砲師が作る】	Forming the Barrel (Blacksmith)
真金・筒を作る心棒となる	A hardened iron mandrel is used to shape the barrel
瓦金・筒状に荒巻したところ	The barrel core starts as a piece of roughly cylindrical wrought iron
真金を入れて鍛える	The iron is wrapped around the mandrel and forged
二重巻張・巻板を筒に二重に巻きつける	Strips of iron or steel are wrapped in two layers around the barrel core
銃身・先目当、前目当がつけられる	The barrel is tapered, and the front and rear sights are added

銃身銘・作者銘が刻まれるものもある	Some barrels are etched with the name of the gun's owner or manufacturer
【銃床・台師が作る】	Shaping the Stock (Woodworker)
白木に墨入れがされる	The dimensions of the stock are inked onto a block of wood
銃身をおさめる切り込みを仕上げる	The block is cut and shaped to fit the barrel
形を整え、銃床が完成する	The buttstock is carved
銃床銘・作者銘が墨書されるものもある	Some stocks are inked with the name of the gun's owner or manufacturer
【からくり・金具師が作る】	Assembling the Lock (Mechanist)
火ばさみ	Serpentine (holds the match cord)
侍請金	Serpentine tumbler
カニの目のついている盗人金	Sear with "crab eye" pin to hold the serpentine in tension
ゼンマイ	Spring
抑え金	Suppressor plate
地板	Lock plate
部品を組み立てからくりが完成する	The parts are assembled to form the finished lock

Forging a Matchlock Gun Barrel

The barrel of a Japanese matchlock musket starts as a sheet of wrought iron, which is wrapped around a tempered iron rod called a mandrel and forged into a seamless tube. An iron breechblock is screwed into the tube's tail end to seal it, and the barrel's interior is honed to a smooth, consistent inner diameter. From there, the barrel is worked into its final form. The muzzle is shaped, and sights are added at both ends. Finally, the barrel is joined to the stock, and a band of metal is used to secure it. The

lock mechanism and lock plate are added, and all the elements are fixed in place using brass pins.

Mass-produced muskets used by rank-and-file soldiers had simple barrels made from single sheets of iron. In contrast, the barrels of muskets carried by samurai were wrapped in additional strips of metal to reinforce them. The most valuable matchlocks were those with barrels wrapped in two strips of tempered steel made from black sand, the same strong, flexible steel used to make Japanese swords.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

カラクリ、銃床、銃身：火縄銃の製作

火縄銃の製造は、複数の熟練工の仕事であった。銃身を鍛える鍛冶屋、銃床を彫る木工屋、そしてカラクリを作り組み立てる技師である。

日本では 1540 年代まで銃器は知られていなかったが、すでに金属加工やからくり人形の製作に長けた職人が何人もいた。種子島の刀匠は、ヨーロッパのマスカット銃 2 丁を手本に、1 年足らずでその技術を再現した。1550 年代までには、各地の鉄砲鑄造所で何百という火縄銃が生産されるようになった。

火縄銃の銃身の鍛造

日本製火縄銃の銃身は、まず錬鉄の板をマンドレルと呼ばれる焼き入れした鉄の棒に巻きつけ、継ぎ目のない筒状に鍛造する。この筒の尾端に鉄製尾柱をねじ込んで密閉し、筒の内部を滑らかに安定させるためにホーニング加工を施す。最後に銃身を銃床にはめ込み、帯金で固定する。さらにからくりやそのプレートを取り付け、真鍮製のピンで固定する。

一般兵が使う火縄銃は、一枚の鉄板から作られたシンプルな銃身である。武士の持つ高級な銃は、銃身に短冊状の金属を巻いて補強した。武士が持つような高級なものは、銃身に帯状の金属を巻いて補強し、その上に武士の刀と同じ玉鋼の焼入れ鋼を二重に巻いたものが最も高価な火縄銃であった。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 大型火縄銃と馬上筒
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Large-Bore Guns and Cavalry Weapons

***Ōzutsu*: Big Matchlocks**

Ōtomo Sōrin (1530–1587), a daimyo lord and Christian convert from Kyushu, is credited with introducing high-caliber firearms to Japan. In 1576, Ōtomo sought help from the Portuguese in fighting his regional rivals, and the heavy guns he obtained through trade came to be known as *ōzutsu* (literally, “large bores”). Knowledge of these guns spread, and by the end of the sixteenth century, domestic gunsmiths were producing their own *ōzutsu*.

Although designed much like muskets, *ōzutsu* were closer to cannons in their destructive power. Even the smallest of these big guns fired a ball that was 26 millimeters in diameter. They had a range of around 500 meters and were used for attacking castles and other fortifications.

Ōzutsu played an important role in the Siege of Osaka (1614–1615), one of the last large-scale battles fought between the supporters and opponents of the Tokugawa shogunate (1603–1868). It is said that the defenders of Osaka Castle were demoralized by days of round-the-clock bombardment with 30-millimeter *ōzutsu*.

Japanese gunsmiths improved on the basic *ōzutsu* design throughout the 1600s and 1700s, eventually producing guns in calibers as large as 100 millimeters. In Europe, field cannons of similar caliber were used extensively in the Napoleonic Wars (1803–1815).

***Kakae-Ōzutsu*: Firing a Heavy Matchlock**

Matchlock *ōzutsu* that could be held and fired were called *kakae-ōzutsu*, or “handheld *ōzutsu*.” Handling a heavy *ōzutsu* was no easy task; the guns’ heft and recoil made them difficult to aim and fire. Western-style firearms have a shoulder stock, but

Japanese matchlocks do not. Instead, gunners developed a method for firing the powerful guns without bracing them against anything. *Kakae-ōzutsu* were fired from a standing posture, or instead while kneeling with the left elbow placed on the raised left knee for support. When firing, the gunner jerked his right arm back, directing the recoil upward rather than backward.

Samurai commanders liked *ōzutsu* for their combination of portability and firepower. The guns packed a punch, but they could still be carried through narrow streets or up twisting mountain roads that would have been impassable for carriage-mounted cannons.

Bajō-Zutsu: Cavalry Guns

Japanese gunsmiths developed short-barreled carbines called *bajō-zutsu* for use by mounted samurai. What these weapons lacked in long-range accuracy they made up for with ease of use.

Katō Kiyomasa (1562–1611), a daimyo lord from central Japan who fought in campaigns on the Korean Peninsula (1592–1598), was the best-known practitioner of horse-mounted gunnery. At a time when custom weapons were reserved for samurai of high social status, Katō equipped all members of his cavalry with specialized *bajō-zutsu*. The mounted warriors would fire as they charged to break up the enemy ranks, then follow in with their spears.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大型火縄銃と馬上筒

大筒

大友宗麟（1530-1587）は、日本に大口径の火器を導入した人物として知られている。1576年、大友は敵対勢力に対抗するためポルトガルの支援を求め、入手した重火器は「大筒」として知られるようになった。この大筒に関する知識が広まり、16世紀末には国内の鉄砲鍛冶が大筒を製作するようになった。

直径 26 ミリの球を発射する大筒は、射程距離が 500 メートル前後で、城郭などの攻撃に使われた。徳川幕府が平和な時代を迎える前の最後の大規模な戦いの一つである大坂の陣（1614 年～1615 年）でも重要な役割を担った。大坂城は 30 ミリの大筒で 24 時間砲撃され、守備隊の士気が下がり、降伏に追い込まれたといわれる。

日本の鉄砲鍛冶は 1600 年代から 1700 年代にかけて、この大筒の基本設計を改良し、ついには口径 100 ミリにも及ぶ大砲を作り出した。ヨーロッパでは、ナポレオン戦争（1803～1815 年）で、同じような口径の野戦砲が盛んに使われた。

抱え大筒

持ったまま撃てる大筒は「抱え大筒」と呼ばれた。重量があり、反動も大きいため、狙いを定めて撃つことが難しく、重量のあるこの大筒を扱うことは容易でなかった。西洋の火縄銃にはショルダーストックがあるが、日本の火縄銃にはない。そのため、射撃手たちは強力な鉄砲を支え無しで発射する独自の方法を開発した。立ったままもしくは膝をついて発射し、左肘を立てた左膝の上に乗せて支えるという方法であった。発射の際は、右腕を後ろに振って反動を上方に逃がした。

武将たちは、携帯性と威力を兼ね備えた「大筒」を好んだ。狭い道や曲がりくねった山道など、車載用の大砲では通れないような場所でも持ち運ぶことができた。

馬上筒

日本の鉄砲鍛冶は、騎馬武者用の短銃身鉄砲を開発した。この銃は、遠距離での命中精度の低さを克服し、扱いやすさを実現した。

加藤清正（1562–1611）は、朝鮮半島（1592–1598）での軍事作戦で戦った中部日本の大名であり、騎馬砲術の最も有名な実践者でした。特注の武器が社会的地位の高い武士のために抑えられていた時代に、加藤は騎兵隊のすべてのメンバーに特殊な馬上筒を装備しました。騎乗した戦士は、敵の隊列を壊すために突撃しながら発砲し、槍で追撃しました。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 火縄銃の製作地と特徴
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Gun Manufacturing Around Japan

Firearm production spread quickly after the introduction of Portuguese guns in 1543. Within a decade, manufacturing had begun in several different areas of Japan. The main centers were in Kyushu, where domestic production originated, and in the region around Osaka and Kyoto. Many foundries were established by swordsmiths who applied their sophisticated metalworking skills to making firearms.

Although the first domestically made firearms were copied from imports, Japanese gunmakers soon began introducing variations and improvements, and each regional center developed its own distinct style.

Satsuma (Kagoshima Prefecture)

When the lord of Tanegashima Island obtained two matchlock guns from Portuguese traders in 1543, he instructed a local swordsmith, Yaita Kinbei (1502–1570), to copy the weapons. A year later, Yaita established a gun works on the island. According to legend, Yaita married his daughter Wakasa to one of the Portuguese traders in return for a crucial gun-making secret: how to thread a heavy iron breechblock into the barrel's butt end to take the force of firing.

Satsuma guns are long and slender, with internally mounted lock springs and mechanisms made mostly of iron. The overall design is minimalist, with no trigger guards or slots to house a ramrod, but some Satsuma weapons have decorative touches, such as engraved serpentine or red-lacquered stocks.

Negoro (Wakayama Prefecture)

The Negoro gun works was founded by Tsuda Kenmotsu (1499–1568), one of Japan's

first master gunners. A descendant of warrior monks from Negoroji Temple (in what is now Wakayama Prefecture), Tsuda lived for a time on Tanegashima Island.

In 1543, Tsuda purchased one of two Portuguese matchlocks that the lord of Tanegashima had obtained from Portuguese traders. He brought the weapon back to Negoro and employed swordsmiths to replicate the European weapon. Tsuda's manufacturing operation was soon overshadowed by the fast-growing gun works in Sakai, near Osaka, but gunnery training and matchlock production continued at Negoro.

Negoro guns are mostly large-caliber weapons, with broad muzzles, octagonal barrels, and externally mounted locks made of brass. These weapons were in great demand during the early years of firearm warfare in Japan, but few survive today.

Awa (Tokushima Prefecture)

Awa domain produced mostly medium-caliber weapons with long, broad-muzzled barrels. The locks on these weapons have U-shaped, externally mounted springs, a simple and popular design called *hira-karakuri*.

Sakai (Osaka Prefecture)

The arrival of firearms in Japan created opportunities for enterprising businessmen such as Tachibanaya Matasaburō (dates unknown), a merchant from the port city of Sakai, near Osaka. Tachibanaya's gun works became one of the two largest in Japan, and Tachibanaya became known by the nickname "Musket Mata" (Teppō Mata). Tachibanaya's gunsmiths and their descendants produced weapons for some 300 years, primarily for the Tokugawa shogunate (1603–1868).

Sakai matchlocks are distinguished by long, octagonal barrels made from malleable iron. The guns have relatively bulbous butt ends that taper elegantly to narrow muzzles, and their brass locks have U-shaped, externally mounted springs.

Many Sakai guns were elaborately decorated, with metal-inlaid stocks and engraved lock plates and barrels. Sakai gunsmiths produced most of the ornate, expensive weapons, known as *daimyō-zutsu*, that were made exclusively for regional warlords.

Bizen (Okayama Prefecture)

Late in the Tokugawa period (1603–1867), a group of swordsmiths established a gun works in Bizen province, on the coast of the Seto Inland Sea. The matchlocks they produced are unadorned and durable, and they found popularity with gunners who needed reliable weapons rather than display pieces.

Kunitomo and Hino (Shiga Prefecture)

Soon after the first guns arrived on Tanegashima, the island's lord presented one to Shogun Ashikaga Yoshiharu (1511–1550), who sent it to a group of blacksmiths in the village of Kunitomo, along with orders to replicate the weapon.

The Kunitomo gun works soon became one of the two largest in Japan, alongside Sakai. It produced matchlock muskets for four centuries, supplying first the armies of warlords who waged the civil wars of the sixteenth century, and later the armies of the Tokugawa shogunate (1603–1868). More than 1,000 craftspeople worked at Kunitomo at its peak. In total, about a third of the Japanese matchlock guns that survive today are thought to have been produced in Kunitomo.

Kunitomo's gunsmiths and those in the neighboring town of Hino produced weapons of every kind, updating their barrel and lock designs to suit the times. Most Kunitomo guns are simple and easy to use, without many decorative touches. Practical innovation was the Kunitomo trademark; barrels became narrower and lighter over the years, and new components, such as screws, were introduced to their lock designs.

Sendai (Miyagi Prefecture)

When the Tokugawa shogunate (1603–1868) began restricting firearm production in the seventeenth century, some domains quietly amassed their own arsenals. The daimyo of Sendai, a wealthy domain in northern Japan, covertly sent craftspeople to Kunitomo to learn gun manufacturing. He then secretly established a gun works inside Sendai territory, where weapons were produced until the nineteenth century.

Sendai guns are practical and reliable. They are generally fitted with external torsion lock springs (*geki-karakuri*). Their wooden stocks sometimes have decorative flourishes, such as carvings of floral designs featuring gourds, grapes, or kudzu vines.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本各地での鉄砲生産

1543年にポルトガルから鉄砲が伝来して以来、鉄砲の生産は急速に広まった。その後10年で、日本の各地に銃砲製造拠点ができる。その中心は、国産化の始まりの地である九州と、近畿地方（大阪・京都周辺）である。この新しい武器には、刀工たちの高度な金属加工技術が生かされ、多くの鍛冶場が設立された。

国産火縄銃は輸入品を模倣したものであったが、やがてバリエーションや改良が加えられ、各地域で独自の発展を遂げた。

薩摩（鹿児島県）

1543年、種子島の領主がポルトガル人商人から2丁の火縄銃を入手すると、地元の刀工、八板金兵衛（1502-1570）にその模造品を作るよう指示した。1年後、八板は種子島に鉄砲鍛冶場を設立した。八板はポルトガル人探検家の一人と娘の若狭を結婚させ、その見返りとして鉄砲製造の重要な秘伝を授かったと言われている。

薩摩鉄砲は細長く、内部にカラクリのバネを取り付け、その仕組みはほとんど鉄でできている。全体的にミニマルなデザインで、トリガーガードや槊杖を収納する部分はないが、薩摩の武器には火ばさみの刻印や紅がら塗りの銃床など、装飾的な要素を持つものもある。

根来（和歌山県）

根来鉄砲隊は、日本最初の鉄砲名人、津田監物（1499-1568）によって創設された。津田は現在の和歌山県にある根来寺の僧の子孫で、鉄砲の玄関口であった種子島に住んでいたこともある。

1543年、津田は種子島藩主がポルトガル人探検家から入手した2本のポルトガル製火縄銃のうちの1本を購入した。津田はこの武器を根来に持ち帰り、刀匠を雇い、ヨーロッパの武器を再現した。津田の鉄砲製造は、やがて大阪近郊の堺で急成長した鉄砲製造所に押され気味になったが、根来では砲術の訓練と一部の製造が根来で続けられた。

根来銃は大口徑のものが多く、銃口は広く、銃身は八角形で、外側に真鍮製のカラクリが取り付けられている。日本における火縄銃の戦いの初期には、これらの武器は非常に需要があったが、現在ではほとんど残っていない。

阿波（徳島県）

阿波藩では、長大な口径の銃身を持つ中口径の武器が多く生産された。カラクリは外側にU字型のバネを取り付けた「平からくり」と呼ばれるシンプルな構造で、人気があった。

堺（大阪府）

火縄銃の伝来は、大阪・堺の商人、橋屋又三郎（生没年不詳）のような進取の気性に富んだ実業家にチャンスをもたらした。橋屋の銃製造所は日本二大鉄砲製造所となり、橋屋は「鉄砲又」と呼ばれるようになった。橋屋の鉄砲職人とその子孫は、主に徳川幕府（1603-1867）のため

に約300年にわたり武器を生産した。

堺の火縄銃は、柔らかい鉄製の長い八角形の銃身が特徴である。銃身は比較的丸みを帯び、銃口は細く、真鍮製のカラクリは外側にU字型にバネが取り付けられている。

堺の鉄砲は、金属を嵌め込んだ銃床、彫刻を施したカラクリのプレートや銃身など、精巧な装飾が施されたものが多い。堺の鉄砲鍛冶は、大名筒として知られる華麗で高価な武器のほとんどを製造していた。

備前（岡山県）

江戸時代（1603-1867）末期、備前藩の日本海側で、刀工たちが鉄砲鍛冶を創業した。彼らが作る、飾り気がなく、耐久性に優れた火縄銃は、展示用ではなく、実戦用の武器を必要とする砲撃手の間で人気を博した。

国友・日野（滋賀県）

種子島に初めて鉄砲が伝来して間もなく、島の領主は足利義晴（1511-1550）に鉄砲を献上し、義晴は国友村の鍛冶屋に鉄砲の複製を命じるとともに、その鉄砲を送ったという。

国友の鉄砲鍛冶は、堺と並ぶ日本二大鉄砲鍛冶となった。国友の鉄砲製造所は、16世紀の内戦から徳川幕府（1603-1867）までの400年にわたり、火縄銃を製造した。最盛期には1,000人以上の職人が働いていたという。現在残っている日本の火縄銃の約3分の1は国友で生産されたものと言われている。

国友の鉄砲職人や隣町の日野の鉄砲職人は、時代に合わせて銃身やカラクリのデザインを変えながら、あらゆる種類の鉄砲を製造した。国友の鉄砲は、装飾を排したシンプルで使いやすいものが多い。銃身は年々細く軽くなり、カラクリにはネジなどの新しい部品が導入されるなど、実用的な工夫が凝らされていたのも国友の特徴だった。

仙台（宮城県）

17世紀、徳川幕府が火縄銃の製造を制限し始めると、一部の藩は独自に火縄銃の製造所を密かに設立した。日本の北部に位置する裕福な藩である仙台の大名は国友に職人を密かに派遣し、鉄砲製造を学ばせた。そして、仙台領内に密かに鉄砲製造所を設立し、19世紀まで生産を続けた。

仙台の鉄砲は、実用的で信頼性が高い。銃身や照準器のデザインも多様で、外側にねじりバネ（げきからくり）がついているのが一般的である。装飾は主に木製銃床に多く、瓢箪、葡萄、葛などの花模様が彫られている。

003-012

Zōhyō Monogatari: A How-To Guide for Foot Soldiers

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 /
雑兵物語, 赤羽文庫, 武器図
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Zōhyō Monogatari: A How-To Guide for Foot Soldiers

Zōhyō monogatari (Foot Soldiers' Tales) is a primer for the pikemen, archers, gunners, grooms, and porters who made up the bulk of seventeenth-century armies. The book consists of 30 first-person accounts and guidance from infantrymen (*ashigaru*) and support troops. Written in a lively, colloquial style, *Zōhyō monogatari* was intended as a manual for new recruits.

Foot soldiers were poorly paid, equipped, and fed, and they needed more than combat skills to survive a campaign. *Zōhyō monogatari* instructs soldiers how to smear crushed hot peppers on their legs to keep warm, start fires with horse manure, make soup from rope or tree bark, and bury plundered food and clothing in enemy territory.

Gunnery is covered extensively. The manual's advice includes the ideal range for a shot (about 100 meters), how to deal with a mounted target (shoot the horse first, then the rider), and how to use your sword when the enemy closes in (swing at exposed feet or hands, because an *ashigaru*'s cheap sword would “bend like a pot handle” against heavy armor).

Zōhyō monogatari was compiled between 1657 and 1683, a time when soldiers with real battlefield experience were becoming scarce. The most recent large-scale military conflict had been the Shimabara Rebellion (1637–1638), and the Tokugawa shogunate (1603–1868) had created social stability that would ultimately last for over two centuries. As a result, samurai needed new ways of passing on their expertise.

Zōhyō monogatari is sometimes attributed to Matsudaira Nobuoki (1630–1691), a daimyo lord and advisor to the shogun, but its author is not definitively known.

Buki Nihyaku-Zu: An Illustrated Guide to Weapons

Buki nihyaku-zu (Illustrations of 200 Weapons) is a pictorial collection of weapons, armor, and other military equipment published in 1848. The book was intended as a study aid: its pages include cut-out lines so that the illustrated panels can be removed and used like flashcards.

The book includes all manner of military gear: swords, daggers, bows, and pikes; flags, banners, and other signaling equipment; as well as warships, fortifications, and siege weapons. Seventeen entries cover firearms and their accessories: cannons, muskets, bombs, ammunition, match cords, ramrods, and carriages. The color illustrations include the name of each weapon written in both kanji and easy-to-read phonetic characters.

The Akahane Document Collection

Akahane Michishige and his wife, Kayoko, were avid gun collectors, and their collection of matchlock muskets and other firearms formed the basis for the Matsumoto Castle Gun Museum. They also kept a wide collection of books and other documents related to firearms. Among these documents are texts and manuals from Japan as well as from Western countries. The Akahanes' entrusted their library to the city of Matsumoto along with their collection of matchlock muskets and other firearms.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

雑兵物語：足軽のためのハウツーガイド

『雑兵物語』は、17世紀の軍隊の大部分を占めた槍兵、弓兵、鉄砲兵、厩番、運搬係のための助言書である。本書は、30人の足軽兵と支援部隊の証言と助言で構成されている。この『雑兵物語』は、新兵のためのわかりやすい指導書として、生き生きとした口語体で書かれている。

足軽は給料も装備も食事も貧しく、戦場で生き残るためには戦闘技術だけでは不十分だった。

『雑兵物語』には、暖を取るためにつぶした唐辛子を足に塗る、馬糞を燃やして火を起こす、縄や木の皮で汁物を作る、敵地で略奪した食料や衣類を埋める、などの方法が書かれている。

砲術についても詳しく説明されている。射程距離の目安（約100メートル）、馬上での対処法

（まず馬を撃ち、次に騎手を撃つ）、敵が迫ってきたときの刀の使い方（露出した足や手に振り下ろす-足軽の安物刀は重い鎧に対して「鍋の柄のように曲がる」）などが解説されている。

『雑兵物語』は1657年から1683年にかけて編纂されたが、当時は実戦経験のある軍人が少なく、なっていた時代であった。島原の乱（1637-1638）を最後に大規模な軍事紛争がなくなり、徳

川幕府（1603-1867）が数百年にわたる社会の安定を作り出した時代である。そのため、武士たちは自分たちの専門知識を伝える新しい方法を考えなければならなかった。

『雑兵物語』は、大名で将軍の相談役であった松平信興（1630-1691）の著作とされることもあるが、その真偽は定かでない。

武器図：足軽のためのハウツーガイド

『武器図』は、1848年に出版された武器や鎧などの軍装品の図鑑である。学習教材として、ページには切り取り線があり、コマを切り取ってカルタとして使用することができる。

収録されているのは、剣、短剣、弓、矛などの武具、旗、幟などの合図用具、軍艦、要塞、攻城兵器など、あらゆる種類のものである。17の項目は、大砲、マスケット銃、爆弾、弾薬、火縄、竿、運搬船などの銃器やその付属品を扱っている。図版はカラーで、各武器の名称は漢字と読みやすい音読みの両方で記載されている。

赤羽文庫

松本城鉄砲コレクションを寄贈した赤羽道重・か代子夫妻は、鉄砲に関するさまざまな書籍や資料も所蔵していた。日本だけでなく西洋の書籍も含む赤羽文庫は、火縄銃やその他の武器のコレクションとともに松本市に寄贈された。

003-013

History-Making Gun Battles: The Shimabara Rebellion

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 島原の乱

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

History-Making Gun Battles: The Shimabara Rebellion

The Shimabara Rebellion (1637–1638) in southern Kyushu was an uprising of some 37,000 peasants and masterless samurai against the forces of the Tokugawa shogunate (1603–1868). The rebels were angry about high taxes and religious persecution; many of them were Christians whose families had converted under the Shimabara domain's previous lord, who was Catholic. After some initial skirmishes, the rebels took refuge in a castle, forcing a months-long siege.

Both sides were well equipped with firearms. The Tokugawa forces were backed by Dutch merchant marines, who provided a gunship and cannons to the besieging army. The rebels were armed with muskets likely obtained from the Portuguese, who were rivals of the Dutch.

After the rebels ran out of food and gunpowder, the shogunate's troops succeeded in storming the castle. Tens of thousands of rebels were either killed in the fighting or executed afterward.

In the wake of the revolt, the shogunate tightened its policy of national seclusion, strengthened an existing ban on Christianity, and imposed new restrictions on the manufacture and possession of firearms. Just a few years later, the shogunate closed the country to Westerners almost completely.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

島原の乱

島原の乱（1637-1638）は、徳川幕府（1603-1867）の軍勢に対して、約3万7千人の農民と主君のいない武士が起こした反乱である。反乱軍には、高い税金や宗教的迫害に怒る

者、島原の先代領主がカトリック信者だったため、島原藩の下で改宗したキリシタンが多く含まれていた。反乱軍は小競り合いの後、城に避難し、数カ月にもわたる包囲戦に突入した。

両者とも銃器は十分に備えていた。徳川軍はオランダの商船隊から砲艦と大砲を提供され、籠城戦を展開した。一方、反乱軍は、オランダ商人のライバルであるポルトガル人から入手したマスケット銃で武装していた。

幕府軍が城を攻め落としたのは、反乱軍が食糧と火薬を使い果たした後だった。数万人の反乱軍は戦死するか、処刑された。

反乱の後、幕府は鎖国政策を強化し、キリスト教禁止令を強化し、銃器の製造と所持に新たな制限を課した。その数年後、幕府は欧米人の入国を完全に禁止することを決定する。

003-014

Guns as Status Symbols

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 象がんで装飾された銃
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Guns as Status Symbols

Matchlock muskets, like swords, are weapons that came to be seen as signs of wealth and power, or even as art.

After the internal conflicts of the sixteenth century led to the relative peace and stability of the Tokugawa period (1603–1867), the demand for weapons of war decreased. The shogunate still needed guns for its own arsenals, but it imposed harsh restrictions on the unauthorized manufacture and possession of firearms.

As a result, muskets became symbols of status for their rarity. Like the set of long and short swords worn only by samurai, or the swords worn by European gentry, an elegant musket could serve as a statement of power and class. Important officials displayed guns in their residences, and shogunal gunsmiths began producing elaborately ornamented pieces to cater to this demand.

Some of the aesthetic flourishes that could be added to a musket include engraved barrels and lock plates, and stocks inlaid with gold, silver, or brass. Floral designs were popular, and many guns were etched with the names of their owners or manufacturers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ステータスの証としての銃乱

火縄銃は単なる武器ではなく、富や権力の象徴、あるいは芸術品として扱われることもあった。16世紀の内乱期から、徳川時代の比較的平和で安定した時代になると、戦争用具としての必要性は低下した。幕府は自国の武器庫に鉄砲を必要としたが、外部での鉄砲の製造や所有には厳しい制限を課した。

火縄銃は単なる武器ではなく、富や権力の象徴、あるいは芸術品として扱われることもあった。16世紀の内乱期から、徳川時代の比較的平和で安定した時代になると、戦争用具としての必要性は低下した。幕府は自国の武器庫に鉄砲を必要としたが、外部での鉄砲の製造や所有には厳しい制限を課した。

その結果、火縄銃は身分の象徴となった。武士の長刀と短刀のように、あるいはヨーロッパの貴族の刀のように、優雅に作られたマスケット銃は、権力と階級の象徴となったのである。また、有力者は自宅や屋敷に銃を飾り、鉄砲鍛冶は装飾を目的とした精巧な作品を製作するようになった。マスケット銃に施される装飾には、銃身やカラクリの刻印、金・銀・真鍮を象眼した銃床などがある。また、花柄のデザインも人気があり、所有者や製造者の名前が刻まれたものも多い。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 /
 灯明皿, 器と食材, 貝類, 魚類, 焼塩壺, 舶来磁器, 合子
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tableware and Food Remains

Tableware from several regions was excavated from the Ninomaru Goten site. These discoveries included bowls from Seto (Aichi Prefecture) and Mino (Gifu Prefecture), in central Japan, and blue-and-white porcelain plates and tea bowls from Imari (Saga Prefecture), in Kyushu.

Archaeologists also found remnants of meals, including the bones of pheasants and ducks and the shells of shellfish. Knowing what was eaten at the Ninomaru Goten helps researchers establish a richer understanding of everyday life at the castle and provides valuable information about food distribution and class in Tokugawa-period (1603–1867) society.

Shells

The Ninomaru Goten's inhabitants consumed a range of ocean shellfish, including abalone, turban snails, red clams, oysters, and Asian hard clams. Shells from freshwater clams and pond snails were also found at the site.

Fish Bones

Bones from sea bass, sea bream, amberjack, and other ocean fish were found at the Ninomaru Goten, along with the bones of carp, a freshwater fish. Seafood was transported to Matsumoto from the Pacific Ocean or the Sea of Japan, a great luxury in the days before electric refrigeration and rapid transport. Most fish would have been salted before being shipped to Matsumoto, but even raw fish was not unheard of: records indicate that a raw sea bream was presented at an 1825 celebration that marked 100 continuous years of rule by the Toda family.

Salt Container

Refined salt was a favored seasoning among samurai and nobles. It was made by baking unprocessed salt in ceramic pots to separate out the bitter-tasting remnants of the brine (called “bittern”) and other unwanted particles. Fifty-nine containers of refined salt were excavated from the Ninomaru Goten site.

This container bears the mark of a salt maker in Senshu (Sakai, Osaka Prefecture), where salt is still produced today.

Korean Porcelain

Archaeologists found celadon ware from the Korean Peninsula during the excavation of the Ninomaru Goten. This green porcelain was highly valuable. The example here was likely produced sometime between the fourteenth and sixteenth centuries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

オイルランプ

二の丸御殿跡からは、複数の窯業地の食器が出土した。中部地方では瀬戸（愛知県）や美濃（岐阜県）の茶碗、九州では伊万里（佐賀県）の青花磁器皿や茶碗などが発見された。また、ヤマドリやカモなどの鳥の骨や貝殻など、城下町の人々の食事の跡も見つかっている。御殿で何が食べられていたかを知ることは、城の日常生活をより詳しく解明することにつながり、徳川時代の食の流通や階層を知る上で貴重な情報である。

貝類

松本城の住民は、アワビ、サザエ、アカガイ、カキ、ハマグリなど、さまざまな海の貝類を食していた。また、二の丸跡からは、また、淡水や汽水の貝殻のシジミやヤマトシジミの貝殻も見つかっている。

魚の骨

二の丸御殿からは、スズキ、鯛、カンパチなどの海の魚や、淡水魚では鯉の骨も発見されている。太平洋や日本海から松本に運ばれた魚介類は、電気冷蔵や高速輸送が発達していなかった時代には、贅沢品であった。ほとんどの魚は塩漬けにして出荷されたが、生魚も珍しくはなかった。1825年の戸田氏の治城百年祭では、生の鯛が供されたとの記録が残っている。

塩の容器

武士や公家が好んで使った調味料が精製塩である。塩を加工しないまま陶製の釜で焼き、苦味のあるにがりなどを取り除いて作られた。二の丸御殿跡からは59個の精製塩の容器が出土してい

る。

この容器には、現在も塩の産地である泉州（大阪府堺市）の塩屋の印がある。

朝鮮磁器

二の丸御殿の発掘調査で、朝鮮半島産の青磁が発見された。この緑色の磁器は非常に貴重であった。この作品は、14世紀から16世紀にかけて作られたものと思われる。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 大坂の陣

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

History-Making Gun Battles: The Siege of Osaka

The Siege of Osaka Castle, fought in 1614 and 1615, was the final clash between the Toyotomi and Tokugawa families. They had feuded for power throughout the late sixteenth and early seventeenth centuries, and the ultimate victor was Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the first of the Tokugawa shoguns and the founder of a dynasty that would last until 1868. Ieyasu understood the power of firearms; when he attacked Osaka Castle, he brought a battery of cannons from Europe.

The siege was the climax of a long rivalry. Fifteen years earlier, Ieyasu had gained control of Japan by subduing the Toyotomi family and their remaining retainers. The final holdouts were left with a single stronghold: Osaka Castle, ruled by Toyotomi Hideyori (1593–1615). But Ieyasu still saw the Toyotomi family as a threat, and in 1614, he moved to destroy them once and for all.

Ieyasu's armies had newer, better guns, including large-caliber matchlocks called *ōzutsu*. They used these heavy guns to bombard the castle day and night, supplemented with barrages from the 10 cannons Ieyasu had obtained from the Dutch and English. The bombardments did not harm the castle's heavy stone foundation, but they are said to have damaged its wooden buildings and demoralized the fortress's defenders. According to one account, a cannon ball breached the apartments of Hideyori's mother, Yododono, and destroyed a tea cabinet as she was using it.

Ieyasu's tactics proved to be successful. On the eighth day of the fifth month, the young head of the Toyotomi family committed ritual suicide as the castle burned, and the long feud came to an end.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

歴史に残る鉄砲戦：大坂の陣

1614年から1615年にかけて行われた大坂の陣は、16世紀後半から17世紀初頭にかけて権力争いをしていた2つの大名家の最後の激突であった。勝ったのは徳川家康（1543-1616）。家康は火器の力をよく理解していた。大坂城を攻めるとき、ヨーロッパから大砲の砲台を持ち込んだ。

この戦いは、長い間のライバル関係の結果であった。その15年前、家康（1543-1616）はライバルである豊臣家を抑え、日本の支配権を手に入れた。豊臣家に残された砦は、大坂城のみとなった。しかし、家康は豊臣家を脅威とみなし、1614年、豊臣家を徹底的に滅ぼそうと動き出した。

徳川軍は大筒と呼ばれる大口径の火縄銃など、より優れた新型の鉄砲を持ち、オランダやイギリスから入手した大砲10門とともに、日夜、城に砲撃を行った。この砲撃で、城の重い石造りの土台には被害がなかったが、木造の上部構造物には被害があり、城の守備隊の士気も低下したと言われている。当主の母親、淀殿の居室を破り、茶箆筒を壊してしまったという話もある。

結局、城は燃え、豊臣家の若き当主、秀頼（1593-1615）は切腹した。

003-017

The Ox-Tethering Stone

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 牛つなぎ石伝説(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Ox-Tethering Stone

About 500 meters south of Matsumoto Castle, a rock draped with paper *shide* streamers stands on a street corner. This rock is called the “Ox-tethering Stone,” a name that alludes to a legend surrounding two famous warlords.

In 1550, Matsumoto was conquered by Takeda Shingen (1521–1573), ruler of Kai Province (now Yamanashi Prefecture) and one of the most renowned warlords of the Warring States period (1467–1600). Shingen’s conquest brought him into conflict with Uesugi Kenshin (1530–1578), who ruled Echigo Province (now Niigata Prefecture) to the north. These two fearsome leaders were called the “Tiger of Kai” and the “Dragon of Echigo,” and they developed a fierce rivalry. The two clashed many times over the subsequent decades, but neither warlord was victorious. Through their prolonged struggle, Shingen and Kenshin developed deep mutual respect, and Kenshin is even said to have wept when Shingen died.

During the 1560s, Shingen was also at war with two provinces to the south. These enemies conspired to block trade routes that connected Shingen’s landlocked territories with the coast. At the time, salt and seafood were crucial parts of a farmer’s grain-based diet, and cutting off access to these staples was an effective way to weaken Shingen’s forces.

Although Kenshin could have taken advantage of his weakened enemy, it is said that he instead sent oxen carrying loads of salt to Matsumoto. Supposedly, those oxen were tied to a rock near the central crossroad, and Kenshin’s gift was the origin of the salt

market that developed there.

In truth, this legend only appeared toward the end of the Edo period (1603–1867), and the salt market had existed since long before. Nonetheless, the story has been repeated as an illustration of the respect the two warlords had for each other, and the expression “giving salt to an enemy” is still used today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

牛つなぎ石

松本城から南へ約500メートル、街角にしめ縄を付けた石がある。この石は「牛つなぎ石」と呼ばれているが、決して牛をつなぐために使われたものではない。その名は、二人の有名な武将にまつわる伝説に由来している。

1550年、松本は甲斐の国（現在の山梨県）の武田信玄（1521-1573）に征服された。武田信玄は戦国時代（1467-1568）の最も有名な武将の一人であった。信玄は越後国（現在の新潟県）を支配していた上杉謙信（1530-1578）と対立することになる。この二人は「甲斐の虎」「越後の龍」と呼ばれ、激しい対立を繰り広げた。その後、数十年にわたり、両者は何度も戦火を交えたが、いずれも勝利することはなかった。信玄と謙信は長い戦いの中でお互いを深く尊敬し、信玄の死には謙信が涙したとも言われている。

1560年代、信玄は南方の2つの国とも戦っていた。これらの敵は、信玄の内陸領と海岸を結ぶ通商路を遮断するために共同して戦った。当時、塩と魚介類は穀物を中心とした農民の食生活に欠かせないものであり、これを絶つことは信玄の勢力を弱めるのに有効な手段であった。塩が手に入らなくなった信玄の民は栄養失調に陥った。弱った敵につけ込むこともできたが、謙信は松本に塩を積んだ牛車を送ったという。その牛車は、現在この岩のある路傍の神社につながれ、謙信の贈り物は、そこに出現した町の塩市の起源となったとされている。

実は、この伝説が生まれたのは江戸時代（1603～1867）の終わり頃で、塩市はそれ以前から存在していた。しかし、両武将が互いに尊敬し合っていたことを示す物語として繰り返し語られ、現在でも「敵に塩を贈る」という表現が使われている。

003-018

Excavation of the Ninomaru Goten

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 松本城二の丸御殿跡の発掘と整備
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Excavation of the Ninomaru Goten

The Ninomaru Goten was a complex of living quarters and offices located to the east of the Great Keep and north of the Taikomom Gate. It was one of three administrative and residential buildings (*goten*) at the castle. Excavations of the site were conducted in the 1970s and '80s. They unearthed stone foundations and numerous artifacts that shed light on the life of Japan's ruling elite from the sixteenth to the nineteenth centuries.

The moats that surround the castle divide it into a series of concentric sections, or "baileys." The innermost area is called the *honmaru*, or main bailey, and the area between the first and second moats is called the *ninomaru*, or second bailey. The Honmaru Goten, located in the main bailey, was Matsumoto Castle's primary administrative center until it burned down in 1727. After the fire, operations were moved to the Ninomaru Goten.

The Ninomaru Goten became a prefectural office in 1871, but its buildings were destroyed by fire five years later. The *goten* was replaced by a courthouse, which was later moved to the *sannomaru* (third bailey) in 1978. Following archaeological excavations and repairs, the area was converted into a park.

JPN	ENG
焼石 二の丸御殿の基礎の一部。ひび割れや赤い変色が、1876年の大火の激しさを物語っている。	Charred Stone Part of the Ninomaru Goten's foundation. Cracks and red discoloration show the intensity of the fire that destroyed the complex in 1876.

上台所囲炉裏 御殿の台所にあった大きな囲炉裏。砂岩の囲いを含めて 1.8 メートル×2.8 メートルの大きさがある。精製塩の入った壺が出土している。	Kitchen Hearth A large open hearth from the Ninomaru Goten's kitchen. Including its sandstone enclosure, the hearth measured 1.8 meters by 2.8 meters. Jars of refined salt were unearthed here.
側溝 御殿を囲むように、幅 30 センチ、深さ 20 センチの浅い排水溝があった。北東の角で分岐し、近くの堀に水を流していた。	Drainage Ditch A shallow drainage ditch, 30 centimeters wide and 20 centimeters deep, enclosed the <i>goten</i> buildings. The ditch split at the northeastern corner and carried water into the nearby moat.
礎石群 平らな川石が建物の柱を支えている。石の位置から部屋の間取りを推測することができる。	Foundation Stones The building's structural supports sat on flat river stones. Room layouts can be inferred from the stones' positions.
井戸・導水用の木管 幅 137cm、深さ 1.5m の貯水槽で、黄土で覆われている。木製のパイプで水の流れを制御している。	Cistern and Wooden Pipe This cistern was 1.37 meters in diameter, 1.5 meters deep, and lined with yellow clay. Water flowed out through a wooden pipe.
雪隠 幅 2.5m×長さ 5m の狭い範囲に 3 つの竪穴式便所が密集しており、そのうち 2 つは実質的に隣り合わせに並んでいた。便所は一般に建物の外側に設置されていた。	Latrines Three pit latrines were found clustered in a small area 2.5 meters by 5 meters. Two of the toilets were practically side by side. Latrines were generally placed around the outer edges of buildings.
大竈 幅 0.6 メートルと 0.8 メートルの大型の竈で、炊飯用の鍋を載せていた。鍋を固定するリングの金属片が出土している。	Cooking Stoves This pair of large cooking stoves held pots for cooking rice. They were 0.6 meters and 0.8 meters wide, respectively. Pieces of metal from the rings that held the pots were unearthed here.
信州松本御城内地蔵清水井戸分水乃図 城の貯水池から二の丸御殿の台所や近隣の武家屋敷に水を送る様子を示したもの。	Water Distribution This illustration shows how water from castle reservoirs was directed to the Ninomaru Goten kitchens and nearby samurai residences.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二の丸御殿の発掘調査

二の丸御殿は、大天守の東側、太鼓門の北側に位置する居住区と執務施設で構成されていた。城内に3つある御殿の一つであった。1970年代から80年代にかけて行われた二の丸跡の発掘調査では、16世紀から19世紀にかけての日本の支配階級の生活を明らかにする石塁や数多くの遺物が出土している。

城の周囲には堀が巡らされ、城は曲輪と呼ばれる同心円状の区画に分けられている。一番奥の堀を本丸、一の丸と二の丸の間を二の丸と呼ぶ。本丸御殿は、1727年に焼失するまで松本城の行政の中心であった。その後、行政機能は二の丸御殿に移った。

明治維新（1868）後の1871年、二の丸御殿は県庁となったが、5年後に火災で消失した。その後、裁判所となり、1978年に三の丸に移築された。二の丸は考古学的な発掘調査や修復を経て、公園として整備された。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 戦国期の弾づくり・火縄銃
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Division of Duties: Crafting Ammunition

As firearms became more common in the second half of the sixteenth century, the job of producing musket balls and match cord fell to the wives and daughters of samurai.

Lead musket balls were cast from molds using lead ingots melted over small braziers. Each matchlock musket required shot of a specific size. This could be anywhere from about four millimeters in diameter, for small pistols, to more than 80 millimeters for heavy, cannon-like *ōzutsu*.

Early match cords were braided together from cypress or bamboo fibers. The natural oils in these fibers kept them burning slowly, but the cords took a long time to dry if they got wet. Eventually, wood-fiber cords gave way to cords woven from cotton and soaked in a solution of lye and saltpeter.

Like the match cord solution, gunpowder itself can be mixed using different ratios of saltpeter, wood ash, and sulfur. Certain ratios produced better or worse results, and braiding techniques and mixing ratios were therefore considered valuable military secrets.

Matsumoto Castle and Guns

Matsumoto Castle was built for the age of musket and cannon warfare. Its wooden walls were coated in thick, protective layers of plaster, and the Great Keep has 55 musket loopholes through which gunners could fire down on attackers. The layout of the castle grounds was calculated to ensure gunners in the keep could reliably hit targets attempting to cross the inner moat, 60 meters away.

Matsumoto Castle's loopholes are square. Their openings are wider on the interior than the exterior, a design that allows for a broad shooting arc while minimizing the

gunner's exposure to enemy fire. Firing from the castle, a skilled sharpshooter using a specially made long-barreled matchlock could hit a target up to 300 meters away.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

職務の分担：弾薬の製造

16世紀後半、火縄銃の普及に伴い、弾薬の必要性が高まった。火縄銃の玉や火縄の製造は、武士の妻や娘に任された。

鉛製の銃弾は、金型と小さな火鉢を使って作られた。小銃用の直径4ミリほどのものから、大筒のような重量のある80ミリを超えるものまで、それぞれの火縄銃ごとに決まった大きさの玉が必要であった。初期の火縄は、ヒノキや竹の繊維で編まれていた。しかし、水に濡れると乾くのにかかる時間がかった。

やがて、木綿の紐を灰汁と塩硝の溶液に浸して編んだもの（水火縄）が主流となった。

火薬の調合は、マッチ棒の溶液のほか、塩硝、木灰、硫黄の比率をいろいろと変えて行われた。この比率の違いによって、火薬の効き目が良くも悪くもなるため、織物の技術や塩硝の比率は貴重な軍事機密とされた。

松本城と鉄砲

松本城は、火縄銃と大砲の時代に合わせて作られた城である。木造の城壁には厚い漆喰が塗られ、天守閣には55もの火縄銃用の狭間があり、そこから敵に発砲できるようになっている。天守閣から60m先の内堀を越えようとする敵に確実に命中するよう、城内の配置が計算されていたのである。

松本城の抜け穴は正方形である。これは、敵の攻撃を最小限に抑えながら、広い射程距離を確保するための設計である。城から発砲すると、銃身を長くした特製の火縄銃を使用する優れた狙撃手は、300メートル先の敵を命中させることができた。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 長篠の戦い

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

History-Making Gun Battles: The Battle of Nagashino

The 1575 Battle of Nagashino is perhaps the best-known gun battle of the sixteenth century. Its outcome helped to prove the tactical value of firearms, which were still relatively new weapons at the time.

The battle took place on the Shitaragabara Plain, in what is now Aichi Prefecture, in central Japan. On one side was Takeda Katsuyori (1546–1582), son of Takeda Shingen (1521–1573), who had built one of the most fearsome armies of the era. Opposing him were the combined forces of Oda Nobunaga (1534–1582) and his retainer Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the future shogun. Katsuyori's forces had surrounded a castle controlled by an ally, and Nobunaga and Ieyasu were seeking to break the siege.

According to the popular account, the battle was decided by the 3,000 gunners in Nobunaga's army. Nobunaga was known as a brilliant general and an enthusiastic adopter of firearms. He positioned his gunners in three rows behind palisades on the opposite side of the plain from the castle, then drew the elite Takeda cavalry into a charge. Firing in volleys, the gunners cut down the sword- and spear-wielding horsemen, and Nobunaga and Ieyasu went on to win the day.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

歴史に残る鉄砲戦：長篠の戦い

1575年の長篠の戦いは、おそらく16世紀から17世紀にかけての最も有名な鉄砲戦である。この戦いは、当時まだ比較的新しい武器であった火縄銃の戦術的価値を証明し、戦争のあり方を変えるきっかけとなった。

戦いの舞台は、現在の愛知県北設楽郡設楽原である。武田勝頼（1546-1582）は、武田信

玄（1521-1573）を父に持ち、当時最も強力な軍隊を築いていた。対するは、織田信長とその臣下で後に将軍となる徳川家康（1543-1616）の連合軍である。勝頼軍は徳川の同盟国が所有する城を包囲し、信長と家康はその包囲を破ろうとしていた。

一般的な説では、信長軍3000人の鉄砲隊が勝負を決めたとされている。信長は型破りな名将として知られ、火縄銃を積極的に取り入れた。信長は、城の反対側の柵の後ろに鉄砲隊を3列に並べ、武田軍の精鋭騎馬隊を引きつけて砲撃を仕掛けた。連射された鉄砲隊は、刀や槍を持った騎馬兵をなぎ倒し、信長と家康は勝利した。

003-021

Dutch Naval Cannon

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 船載砲

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Dutch Naval Cannon

This muzzle-loaded Dutch cannon was cast sometime in the late sixteenth century. It could shoot a 33-millimeter cannonball between 300 and 500 meters and was fired by fuse. The cannon's wheeled carriage allowed it to be moved easily around the deck of a warship or the battlements of a European castle.

Imported European cannons were used in Japan longer than imported muskets. Japanese gunsmiths quickly learned to produce high-quality matchlock muskets, but they struggled to match the durability of heavy European cannon barrels. Unlike musket barrels, cannon barrels were typically forged as single pieces of metal.

The first cannons in Japan were a pair of breech-loading swivel guns acquired from Portuguese traders in 1576. Dutch and English suppliers had supplanted the Portuguese by the early 1600s. They provided the cannons that the forces of the Tokugawa shogunate (1603–1868) used at the Siege of Osaka (1614–1615), the best-known artillery battle of the samurai age.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

オランダ海軍の大砲

これは16世紀後半に鑄造されたオランダ製の前装式大砲である。33ミリの砲弾を300～500メートルの範囲で発射することができ、導火線を用いて発射された。この大砲は車輪付きで、軍艦の甲板やヨーロッパの城壁の上を簡単に移動することができた。

日本では、ヨーロッパの大砲は、ヨーロッパの火縄銃よりも長く使われた。日本の鉄砲鍛冶はすぐに高品質の火縄銃を製造できるようになったが、ヨーロッパの重い大砲の銃身に匹敵する耐久性を得るには苦労した。火縄銃の銃身と異なり、大砲の銃身は一体の金属塊として鍛造されるのが普通であった。

日本で最初の大砲は、1576年にポルトガル商人から譲り受けた2挺の後装式旋回砲（フランキ砲）である。1600年代初頭には、オランダとイギリスがポルトガルに取って代わり、大砲を供給するようになった。武士の時代の最も有名な砲撃戦である大坂の陣（1614-1615）で徳川幕府軍が使用した大砲は、オランダとイギリスが供給したものである。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 古銭

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Antique Coins

Over 200 antique coins were excavated from the Ninomaru Goten site. Among them were 17 varieties of coins from China (33 Chinese coins in total) and one coin from the Korean Peninsula.

Archaeologists had hoped to find coins minted in Matsumoto. In 1636, the shogunate introduced a new copper coin called the *kan'ei*, which became the standard currency of the Tokugawa period (1603–1867). These coins were minted at about a dozen sites around Japan, including in Matsumoto, and a batch of *kan'ei* coins was produced there in 1637. Unfortunately, no Matsumoto coins were unearthed at the Ninomaru Goten. Most of the Japanese coins found at the site were re-denominated versions known as *shin-kan'ei*, which came into circulation after 1668.

The excavation also uncovered branch-like metal sprues left over from the minting process and counterfeit coins made from the metal bowls of tobacco pipes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古銭

二の丸御殿跡からは 200 枚を超える古銭が出土した。その中には中国貨幣が 17 種（中国貨幣 33 枚）、朝鮮半島の貨幣が 1 種含まれていた。

考古学者たちは、松本で鑄造された銭貨の発見を期待していた。1636 年、幕府は「寛永」という新しい銅銭を導入し、これが徳川時代（1603-1867）の標準通貨となった。この銅銭は、松本を含む全国十数ヵ所で鑄造され、1637 年には松本城で一回の鑄造が行われた。

残念ながら、二の丸御殿からは松本製の銅銭は出土していない。出土した和銭のほとんどは、1668 年以降に流通した新寛永と呼ばれる寛永の改鑄銭である。

また、タバコの煙管の金属部分や、鑄造の際に出る枝状の金属部分を利用した偽硬貨も発見された。

003-023

Tobacco Pipes and Go Stones

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 煙管・碁石
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Tobacco Pipes and Go Stones

Even at the busy Ninomaru Goten, there was time for relaxation and recreation. Archaeologists found 22 pipe bowls and stems at the site, along with stones used to play the board game Go.

Tobacco was first introduced to Japan in the late sixteenth century. In 1601, a Franciscan missionary named Jerónimo de Jesús de Castro (d. 1601) presented tobacco seeds to Tokugawa Ieyasu (1543–1616), founder of the Tokugawa shogunate. Ieyasu was evidently not impressed: the shogunate later banned tobacco as a vice. Nonetheless, smoking remained popular, and the prohibition was eventually lifted. Matsumoto subsequently became a major tobacco cultivation center that exported to large cities including Edo (Tokyo) and Nagoya.

Go is a strategy board game that originated in China and is believed to have reached Japan sometime during the seventh century. Players take turns placing black or white stones on a 19-by-19 grid to surround and capture territory and the opposing player's stones. The Go stones found at the Ninomaru Goten site were made from black slate and white clamshell.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

タバコの煙管と碁石

忙しい二の丸御殿にも、くつろぎと楽しみの時間があった。遺跡からは22本の煙管とその茎、そして囲碁に使われた石が発見された。

タバコが日本に初めて持ち込まれたのは16世紀末のこと。1601年、フランシスコ会の宣教師ジェロニモ・デ・ジェズ・デ・カストロ（1601年没）が、徳川幕府を開いた徳川家康（1542-1616）にタバコの種を献上した。家康はこれを好ましく思わなかったようで、幕府はタバコを悪習として禁止

した。しかし、タバコの人気はとどまらず、やがて解禁された。松本はタバコの栽培が盛んで、江戸（東京）や名古屋といった大都市にタバコを輸出していた。

囲碁は中国発祥の戦略ボードゲームで、日本には7世紀ごろに伝わったとされている。19×19のマス目に黒と白の石を交互に置いていき、陣地と相手の石を囲んで攻略することを目指す。二の丸御殿跡で発見された碁石は、黒粘板岩と蛤の殻でできていた。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 硯

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Inkstones

Thirteen inkstones were found at the Ninomaru Goten site, two of which were fully intact. The inkstones were likely used by scribes who worked at the castle.

Stones for grinding and holding ink have been used in China since antiquity. They spread to Japan from the Asian mainland, along with written language, in the fourth century. Inkstones are mentioned in several classical works, including the eighth-century *Nihon shoki* (Chronicles of Japan) and Sei Shōnagon's *The Pillow Book*, completed in 1002.

Written records were crucial to successful administration during the Tokugawa period (1603–1867). Extensive record-keeping of taxation and harvest yields is part of what allowed the Tokugawa shogunate to maintain its control over the country for more than two centuries.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

硯

二の丸御殿跡からは13個の硯が発見され、そのうち2個は完全な形で残っていた。硯は、御殿の行政庁舎で働く書記の人たちが使っていたものと思われる。

硯は、中国では古くから使われており、日本には4世紀頃に大陸から文字が伝来した際に渡来したと考えられている。8世紀の『日本書紀』や1002年に完成した清少納言の『枕草子』など、古典にも硯の記述が見られる。

徳川時代（1603-1867）には、現代と同じように、藩政を成功へと導くために文書による記録が重要視された。徳川幕府が2世紀以上にわたって藩政を維持できたのは、租税や収穫物に関する膨大な記録の蓄積があったからである。

003-025

Layout of the Ninomaru Goten

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 平面に表された二の丸御殿、
松本城二の丸御殿絵図
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Layout of the Ninomaru Goten

The Ninomaru Goten was an administrative complex of roughly 50 rooms that occupied over 2,100 square meters. The Great Keep stood to its west, and the complex was accessed via the Taikomono Gate to the southeast and the Ninomaru Ura-Gomon Bridge to the north.

The Ninomaru Goten was a secondary administrative center (*goten*) of Matsumoto domain. In 1727, when the primary center in the main bailey burned down, its functions were moved to the Ninomaru Goten. After the Meiji Restoration (1868), the Ninomaru Goten briefly served as a prefectural office, but its buildings were destroyed by fire in 1876. Two years later, a courthouse was established on the site and remained there until 1978, when it was relocated to a different area of the castle grounds.

The relocation created an opportunity to excavate the former site of the Ninomaru Goten. Between 1979 and 1984, archaeologists uncovered and restored the foundations of the complex. They also discovered various artifacts that hold valuable information about daily life at the *goten*. Some of those artifacts are displayed here.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二の丸御殿の図面

二の丸御殿は、床面積2,100平方メートル余り、約50の部屋からなる行政施設であった。西に大天守、南東に太鼓門、北に二の丸裏御門橋が架かっていた。

二の丸御殿は、1727年に本丸の御殿が焼失するまで、松本藩の二番目の行政機関として機能していた。明治維新後、二の丸御殿は一時県庁となったが、1876年に火災で焼失した。その2年後には裁判所が置かれ、1978年に城内の別の場所に移設されるまでこの地に存在した。

この移転を機に、二の丸御殿の跡地が発掘されることになった。1979年から1984年にかけて、考古学者による発掘調査が行われ、二の丸御殿の基礎が復元された。また、御殿で行われていた

作業について貴重な情報を提供するさまざまな遺物も発見された。ここでは、それらの遺物の一部を展示している。

003-026

Roof Tiles

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 瓦, 瓦伝票, 巴文軒丸瓦, 沢
潟紋
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Roof Tiles

Fired-clay roof tiles were introduced to Japan in the late sixth century with the spread of Buddhism from the Asian mainland. More than 1,100 ceramic roof tiles were uncovered at the Ninomaru Goten site. Some of the tiles have decorative patterns, including Chinese-style scrollwork (*karakusa*), comma-like shapes called *tomoe*, paulownia leaves (*kiri*), threeleaf arrowhead plants (*omodaka*), and clusters of circles or dots (*rokusei*).

Order Tablet

This tile was used as a record of an order for tiles. It is inscribed with the details of the order, such as the number and pattern of each type of tile and the day the order was filled. These details indicate the tiles were made during the Mizuno family's stewardship of Matsumoto Castle (1642–1725).

The information on the tile reads:

Sixth day of the seventh month

Scrollwork pattern x89

Arrowhead crest pattern x56

Komaru pattern x65

Flat x82

Threeleaf Arrowhead Crest (*Omodaka-mon*)

Many of the tiles found at Ninomaru Goten are engraved with the image of a threeleaf arrowhead plant. The plant was the crest of the Mizuno family, lords of Matsumoto Castle from 1642 to 1725. In the example on display, the central crest is surrounded by 16 dots representing pearls, a design detail that suggests the tile was made in the early years of the Mizuno stewardship.

***Tomoe*-Pattern Tile**

This tile is engraved with a pattern of three swirling comma-like shapes (*tomoe*). The origins of the three-*tomoe* figure are uncertain, but variations of it have been used in Japanese emblems and crests since the eleventh century.

Round tiles such as this one are affixed to the eaves of buildings to cover exposed tile joints. The example on display is believed to date from the construction of Matsumoto Castle, in the 1590s.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

瓦

二の丸御殿跡からは、1,100枚以上の陶器瓦が出土した。唐草紋、渦巻き状の巴と呼ばれる図形、桐の葉、点または円の集まりなど、装飾文様や家紋が刻まれたものもある。日本には6世紀後半、大陸からの仏教伝来とともに、焼成粘土瓦が伝来した。

瓦伝票

この瓦には、瓦の種類ごとの数や模様、注文した日など、瓦の注文の詳細が刻まれている。これらのことから、この瓦は水野氏が松本城を管理していた時代（1642～1725年）のものであることがわかる。瓦に記載されている情報は以下の通り：

七月六日

巻物細工の柄（89）

矢筈紋（やはずもん）（56）

小丸模様（65）

フラット（82）

沢瀉紋

二の丸御殿の瓦の多くには、沢瀉紋が刻まれている。この紋は、1642年から1725年まで松本城主であった水野家の家紋である。展示品は、その沢瀉紋を16個の丸で囲み、真珠を表現したもの

で、丸い珠を円形にならべた紋で、水野氏の初期に作られた瓦であることを示している。

巴文軒丸瓦

この瓦には、3つの渦が巻いている巴形の模様が刻まれている。巴形の起源は不明だが、11世紀以降、日本の紋章に用いられている。

このような丸瓦は、建物の軒先の瓦の目地を隠すために貼られる。今回展示されているのは、1590年代の松本城築城時のものと考えられている。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 点火方法の進歩

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

From Touchholes to Percussion Caps: The Evolution of Firing Mechanisms

Advances in firearm technology have often amounted to new ways to formulate or ignite gunpowder. All firearms, from the earliest cannons to modern handguns, work essentially the same way: gunpowder is ignited in a tube with a sealed end, and the expanding gases send a projectile flying out the other end.

The challenge, especially for early gunsmiths, was to find a method for loading and firing that was fast, reliable, and safe for the weapon's user.

Touchholes

The earliest known firearm is a cannon made in thirteenth-century China. Similar weapons appear in European records from early in the subsequent century. These guns were simple metal or bamboo cylinders that fired balls, shot, or darts. The firing mechanism was straightforward: the gunner ignited the gunpowder inside the barrel using a slow match held on a long rod (called a “linstock”) that was touched to a small hole in the sealed end.

Touchhole firing was adequate for fixed or wheeled artillery, but it was awkward for handheld weapons, since the gunner generally needed both hands to hold and aim the gun.

Matchlocks

One of the biggest steps in the development of firearms was the invention of spring-loaded mechanisms that could ignite the charge at the pull of a trigger. The first spring-loaded locks were called “matchlocks,” named after the slow-burning match cords they used. Developed in Europe in the fifteenth century, matchlocks used an S-

shaped arm called a “serpentine” to apply the flame to the gunpowder. The serpentine held a lit match cord; when the gunner pulled the trigger, the serpentine snapped forward and ignited a pan of priming powder, which in turn set off the main charge inside the barrel.

Matchlocks were a big improvement over touchholes, but they had their drawbacks. A gunner in battle or on sentry duty had to keep their match cord constantly lit. A single sentry station could consume a mile of match cord each year, and keeping the flame burning was not always safe or easy. Rain or mud could easily snuff out the match, and the light and smell of a lit cord could give away a gunner’s position, especially at night.

Flintlocks

To eliminate the need for match cords, gunsmiths invented mechanical parts called “locks” that could create sparks to ignite the gunpowder. Several different varieties of mechanism were developed, but flintlocks offered a combination both reliability and efficiency.

In place of a match-holding serpentine, a flintlock employed a spring-loaded hammer that gripped a piece of flint. When the gunner pulled the trigger, the flint struck a hinged steel plate (called a “frizzen”) above the priming pan, creating a spark that ignited the powder.

Flintlocks were the main firearms used by European armies from the mid-seventeenth to the mid-nineteenth centuries, but they were never adopted in Japan.

Percussion Caps

A percussion cap is a small brass or copper charge of volatile chemicals that explodes when struck. A cap could be used in place of a spark or flame to ignite the powder charge. Caps were also more reliable, and cap-based firing mechanisms began to replace flintlocks in the first half of the nineteenth century.

Percussion caps were first used in muzzle-loading muskets and later in breech-loading rifles and pistols. Eventually, small, percussion-detonated primers became part of integrated cartridges, the ammunition used in modern firearms.

タッチホール式から雷管式へ：発射装置の変遷

火薬の調合や点火に工夫を凝らすことで、銃器技術の進歩がもたらされることは少なくない。初期の大砲から現代の拳銃まで、すべての銃器は、基本的に同じように作動する：火薬に点火し、膨張したガスがもう一方の端から標的に向かって弾丸を発射するというものだ。

特に初期の鉄砲鍛冶にとっては、装填と発射をいかに速く、確実に、そして安全に行えるかが課題であった。

タッチホール式

最古の火器は、13世紀の中国で作られた大砲である。1300年代初頭のヨーロッパの記録にも、同様の武器が登場している。これらの大砲は、金属製や竹製の円筒で、砲丸や散弾、矢を発射する単純なものであった。発射の仕組みは簡単だった：砲手は、「リンストック」と呼ばれる長い棒を密閉された端の小さな穴にマッチを接触させ、銃身内の火薬に点火した。

タッチホール発射は、固定砲や車輪付きの大砲には適していたが、手で持って使う武器には不向きで、砲手が銃を持ち、狙いを定めるのに両手を必要とするのが一般的であった。

マッチロック（火縄）式

銃器の発展で最も大きな出来事となったのが、引き金を引くだけで装薬に点火できるバネ仕掛けの発明であった。最初のパネ式からくりは、ゆっくりと燃えるマッチの紐にちなんで「マッチロック（火縄）式」と呼ばれた。15世紀にヨーロッパで開発されたマッチロック式は、サーペントインと呼ばれるS字型のアームで火薬に炎を当てる仕組みになっていた。サーペントインには火のついた縄があり、砲手が引き金を引くと、サーペントインが前に折れて火薬皿に着火し、銃身内の主薬を爆発させたのである。

マッチロック式はタッチホール式に比べて大きな進歩であったが、欠点もあった。戦場や見張り役の砲手は、常に火縄に火をつけておかなければならなかった。見張り所1か所で1年間に1マイル分もの火縄を消費することもあり、火を絶やさないことは安全でも簡単でもなかった。雨や泥で火縄は簡単に消えてしまうし、特に夜間は火のついた紐の光と匂いで砲手の位置が分かってしまうこともあった。

フリントロック式

火縄を不要にするために、鉄砲鍛冶は、火花を飛ばして火薬を点火するからくりを作った。何種類が開発されたが、信頼性と効率性を最も高めたのが火打ち石であった。

フリントロック式は、火縄を入れるサーペントインの代わりに、バネ仕掛けのハンマーで火打ち石を挟み込む。火打ち石は、引き金を引くと、火皿の上にある「フリズン」と呼ばれる蝶番のついた鉄板を叩き、火花を発生させて火薬に点火させる。

17 世紀半ばから 19 世紀半ばまで、ヨーロッパの軍隊で主に使われたフリントロック式銃器は、日本では採用されることはなかった。

雷管式

雷管とは、真鍮や銅に揮発性の化学物質を充填した小さなもので、叩くと爆発する。火花や炎の代わりに火薬に点火することができる。火打ち石による火花よりも雷管の方が信頼性が高く、19 世紀前半には雷管を使った発射装置がフリントロック式に取って代わり始めた。

雷管式は、はじめ前装式の火縄銃に使われ、後に後装式のライフルやピストルにも使われるようになった。やがて、小型の雷管は、現代の銃器に使われる一体型カートリッジに組み込まれるようになった。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 前装銃から後装銃への発展
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

From Muzzle-Loaders to Breech-Loaders

Until the nineteenth century, almost all guns were loaded from the mouth of the barrel, called the “muzzle.” The gunner poured gunpowder into the muzzle, added a musket ball or other projectile, tamped the mixture down with a ramrod, then leveled the weapon to fire. This made loading and firing a slow and cumbersome process.

Firearms that loaded from the back (called “breech-loaders”) had existed since at least the sixteenth century. They were faster and easier to load, but they tended to crack or burst under the force of the exploding charge. That problem was solved in the nineteenth century through advances in metalworking and the development of cartridge ammunition. Breech-loaders have since become the standard in firearm design.

Most modern ammunition can be described as a cartridge that contains a bullet, gunpowder, and a percussion-sensitive ignition device. Many firearms can hold several cartridges at once in an internal or external “magazine,” greatly increasing their rate of fire. Because cartridges allow for the quantity of gunpowder to be exactly standardized, they also inflict less wear and tear on a gun barrel than firing with loose powder.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

前装銃から後装銃へ

19世紀まで、ほとんどの銃はマズルと呼ばれる銃口の部分から装填されていた。銃口から火薬を注ぎ、弾丸を入れ、竿で叩いてから銃を水平にして発射する。そのため、装填と発射には時間がかかり、手間がかかった。

背面から装填する銃器（後装式）は、少なくとも 16 世紀には存在していた。しかし、この銃は装填が早く簡単な反面、火薬が爆発する時の衝撃で割れたり破裂したりすることがあった。19 世紀になって、金属加工の進歩とカートリッジ弾薬の開発によって、この問題は解決された。その後、銃器は後装式が主流となった。

現代の弾薬は、弾丸と火薬と打撃感応式点火装置を組み合わせたカートリッジが主流である。弾丸はクリップや弾倉を利用して素早く装填することができ、連射速度が大幅に向上する。カートリッジは火薬の量を細かく規定できるため、バラ火薬に比べて銃身の消耗が少ない。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 松本城鉄砲蔵
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Matsumoto Castle Firearm Museum

Matsumoto Castle's collection of firearms comprises 141 matchlock muskets and other antique firearms, 283 gun accessories and tools, and over 450 documents relating to firearms and their history. Most of these items date from between the sixteenth and nineteenth centuries.

The collection was donated by Akahane Michishige and Akahane Kayoko, a husband-and-wife pair of lifelong gun collectors, firearms scholars, and sport shooters. Though originally from Matsumoto, the Akahanes operated a successful restaurant in Tokyo for many years. During that time, they slowly amassed an impressive collection of firearms, in particular Japanese matchlock muskets.

In 1988, the Akahanes entrusted their collection to the city of Matsumoto. Part of the collection was moved to Matsumoto Castle's Great Keep in 1999 for display; the rest is kept at the Matsumoto City Museum. Even after the display was opened, the Akahanes continued to acquire new guns to expand the collection.

The Great Keep is a fitting location for displaying these matchlock muskets. Constructed in 1593 and 1594, the keep was designed for the age of firearm warfare, as evidenced by its thick walls and numerous loopholes for firing matchlocks. The castle also has its own demonstration team, the Matsumoto Castle Gun Corps, whose members practice traditional samurai gunnery techniques (*hōjutsu*). Akahane Kayoko participated in the corps' first demonstration event in 1990.

Each year, all the muskets in the collection are disassembled and cleaned in accordance with the wishes of Mr. and Mrs. Akahane, who asked that the weapons be kept always ready to defend Matsumoto Castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城鉄砲コレクション

松本城の銃砲コレクションは、141挺の火縄銃をはじめとする古式銃砲、283点の銃砲用具、450点を超える銃砲とその歴史に関する資料で構成されている。これらのほとんどは16世紀から19世紀にかけてのものである。

このコレクションは、生涯の鉄砲収集家であり、銃器研究家であり、スポーツ射撃家でもあった赤羽道重・か代子夫妻から寄贈されたものである。赤羽夫妻は松本出身で、東京で長年にわたりレストランを経営していた。その間に、日本製火縄銃を中心とする銃砲のコレクションを徐々に増やしていった。

1998年に、赤羽夫妻は松本市にそのコレクションを寄託した。1999年に展示替えをして、展示品以外は市博物館に収蔵されている。展示が始まった後も、赤羽夫妻は新たな鉄砲を入手し、コレクションを拡充していった。

大天守は、これらの火縄銃の展示にふさわしい場所である。1593年から94年にかけて建設されたこの天守閣は、火縄銃を発射するための穴が多数あり、壁も厚いことから、火縄銃戦の時代に合わせて設計されていることがわかる。また、松本城には、伝統的な侍の砲術を保存・伝承する実演チーム「松本城鉄砲隊」がある。1990年に行われた第1回演武には、赤羽根か代子氏も参加した。

毎年、「松本城を守るためにいつでも使えるようにしてほしい」という赤羽夫妻の意向で、収蔵しているすべての銃を分解・洗浄する。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 鉄砲の分類

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

An Introduction to Different Types of Firearms

The world of firearms and gun terminology is quite broad, and it can be difficult to know what makes one gun different from another. There are many ways to classify firearms across their centuries of history, but the simplest way to differentiate is by how they are loaded and fired.

Muskets (also known as arquebuses) were the most common handheld firearms of the fifteenth to seventeenth centuries. Muskets are **muzzle-loaders**, meaning that the propellant (gunpowder) and projectile (a musket ball) are inserted into the mouth of the barrel and packed down into the firing chamber using a long tool called a ramrod. The powder is ignited by a slow-burning match cord that is clipped to a spring-loaded arm. When the trigger is pulled, the arm snaps forward, bringing the lit match cord into contact with the powder and firing the gun. This firing mechanism is referred to as a **matchlock**.

In the West, matchlocks had fallen out of use by the end of the seventeenth century. They were replaced first by **wheellocks** and **flintlocks**, which use sparks rather than match cords to ignite the powder. A century later, self-igniting **percussion caps** made those designs obsolete. Muzzle-loaders were eventually replaced by faster, easier-to-use **breech-loaders**, which are loaded through an opening in the back of the barrel.

In Japan, matchlocks were never abandoned, and gunsmiths improved on the design during the 1600s and 1700s. Muzzle-loading matchlock muskets remained in use throughout the Tokugawa period (1603–1867), when Japan kept itself largely isolated from the world. Only when the country reopened in the nineteenth century did it begin importing and manufacturing more modern weapons.

さまざまな銃器の種類を知るための入門編

銃器や銃の専門用語の世界は非常に広く、ある銃と他の銃の違いを知ることは困難な場合がある。銃器は何世紀もの歴史の中で多くの分類方法があるが、最も簡単な方法は、装填と発射の方法で区別することである。

火縄銃（別名アークウィバス）は、15 世紀から 17 世紀にかけて使用された手持ち式の銃器の主流であった。マスケット銃は**銃口装填式（前装式）**で、推進剤（火薬）と発射体（鉄砲玉）を銃口の中に入れ、ラムロッドと呼ばれる長い道具を使って発射口に詰め込む。火薬は、バネ仕掛けのアームに取り付けられた、ゆっくりと燃える火縄で点火される。引き金を引くとアームが前に出て、火のついた縄を火薬に接触させ、銃を発射する。この発射装置を**火縄式**という。

西洋では、火縄銃は 17 世紀末には使われなくなった。その後、火薬の着火に火縄ではなく火花を使う**ホイーロック式**や **フリントロック式**、さらに 1 世紀後には自己着火式の**雷管式**が使われるようになった。前装銃はやがて、より早く、使いやすい**後装**（銃身後部の開口部から装填する）**銃**に取って代わられた。

日本では火縄銃が廃れることはなく、1600 年代から 1700 年代にかけて鉄砲職人によって改良が加えられた。徳川時代（1603～1867 年）、日本は鎖国をしていたので、銃口装填式の火縄銃がそのまま使われた。19 世紀になり、日本が開国して初めて、より近代的な武器の輸入と製造が始まった。

003-031

Guns and the Struggle for Power

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 天下をねらう人々と鉄砲の広がり
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Guns and the Struggle for Power

Guns were introduced to Japan during a period of prolonged conflict. The Ashikaga shogunate (1336–1573) began to lose its grip on the country in the 1460s, leaving a power vacuum that provincial daimyos battled to fill for more than a century. Firearms helped determine the outcome of these conflicts; daimyos who adopted firearms gained an advantage against those who didn't.

Other changes in warfare made the impact of guns even more significant. When muskets were first introduced in 1543, daimyos were already realizing the effectiveness of armies composed mainly of foot soldiers called *ashigaru*, who had begun displacing mounted samurai on the battlefield. Firearms, which could be used with much less training than weapons like bows, were vital to the role played by *ashigaru*. They soon became the main gunnery troops of daimyo armies.

The Early Adopter: Oda Nobunaga

Oda Nobunaga (1534–1582) is the daimyo most closely associated with firearms. Nobunaga was a cunning and tenacious leader who set out to establish himself as ruler of Japan. He deposed the last Ashikaga shogun in 1573 and went on to defeat or subordinate most of his rivals. Nobunaga's campaign gained great momentum, but his bid to become shogun ended with his betrayal and assassination in 1582.

Nobunaga was known as an innovative and unconventional strategist. In 1550, at the age of 16, he was already training his troops in the use of firearms, and soon he was using gun-wielding *ashigaru* to great effect. At the Battle of Nagashino in 1575, a unit of 3,000 gunners in Nobunaga's army cut down the charging cavalry of Takeda Katsuyori (1546–1582). Takeda was a rival daimyo and one of the last obstacles preventing Nobunaga's rise to power.

The Militant Insurrectionists: Ikkō-Ikki

The Ikkō-ikki were not daimyos; they were a loose collection of peasants, low-ranking samurai, and militant Buddhist monks who rebelled against daimyo rule. The fighting forces of the Ikkō-ikki were especially quick to adopt and manufacture firearms.

In 1569, the Ikkō-ikki clashed with the Oda family for control of what is now the city of Nagoya. In 1570, Nobunaga's army was ambushed by an Ikkō-ikki force that included warrior monks from Negoroji Temple, an early center of gun production. The insurrectionists' gunners helped force the great daimyo into retreat, and these attacks were the start of a decade-long conflict that Nobunaga won at great cost.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

銃と権力闘争

鉄砲が日本に伝来したのは、長引く内乱の時代であった。1460 年代に足利幕府（1336-1573）の権威が失墜し、その権力の真空を埋めるために地方の大名が 1 世紀以上にわたって争った。鉄砲はその戦いの勝敗を左右し、鉄砲を導入した大名はライバルに対して優位に立つことができた。

鉄砲の影響は、他の軍事的変化によってさらに大きくなった。1543 年に火縄銃が登場したとき、大名はすでに足軽を中心とした軍隊の有効性を認識しており、騎馬武士に代わって足軽が戦場で活躍し始めていた。弓などの武器よりはるかに訓練が少なく済む銃器は、足軽の役割にぴったりで、足軽はまもなく大名軍の主要な砲術部隊となった。

先駆者：織田信長

火縄銃と最も関係の深い大名は、織田信長（1534-1582）である。信長は16世紀の戦国時代にほぼ天下を手中に収め、1573年に足利将軍を退位させ、ライバルたちのほとんどを打ち負かした。

信長は、革新的で型破りな軍事思想家として知られている。1549 年、彼は国友の鉄砲鍛冶から 500 個のマッチロックを購入し、すぐに鉄砲を装備した足軽衆を効果的に使うようになった。1575 年の長篠の戦いでは、信長軍の 3000 人の鉄砲隊が、信長の天下取りの最後の障害となった武田勝頼（1546-1582）の騎馬隊の突撃を打ち負かした。

武装蜂起した者たち：一向一揆

一向一揆とは、農民、下級武士、武装した仏僧の集まりのことで、大名とは異なる。一向一揆の戦闘部隊は、特に火器の導入と製造が早かった。

1569 年、一向一揆は、現在の名古屋市の支配権をめぐって織田家と対立した。1570 年、国友と並ぶ鉄砲の産地であった根来寺の僧兵を中心とした一向一揆軍が信長軍を待ち伏せた。

3,000 人の鉄砲隊は、信長を退却させるのに貢献した。この戦いは 10 年に及ぶ長期戦となり、信長は大きな犠牲を払って勝利した。

003-032

Matchlock Mechanisms

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / カラクリ 火縄銃の機関部
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matchlock Mechanisms

Many of the earliest guns had very simple designs. They were fired by applying a flame directly to the gunpowder inside, typically through a small hole in the back of the barrel. This method was fine for stationary cannons but awkward for handheld weapons. Matchlocks made aiming and shooting easier through the addition of a spring-loaded arm called a “serpentine.” The serpentine held a lit match cord; when the gunner pulled the trigger, the arm snapped forward and ignited a pan of priming powder. The flash set off the main gunpowder charge inside the barrel and fired the gun.

There are many variations on the basic matchlock design, and Japanese gunsmiths introduced their own innovations. As with many technologies, more complex versions had more features but could be expensive and difficult to maintain.

JPN	ENG
カラクリ 火縄銃の機関部	Parts of a Matchlock Mechanism
点火した火縄をつけた火ばさみ	Serpentine with lit match cord
平からくり（レプリカ）	A basic <i>hira-karakuri</i> lock mechanism
カニの目かき内からくり（レプリカ）	An internally mounted <i>uchi-karakuri</i> lock mechanism
外記からくり（レプリカ）	A <i>geki-karakuri</i> lock mechanism with coiled spring
引き金	Trigger

地板	Lock plate
カニの目	“Crab eye” (<i>kani-no-me</i>)
火縄	Match cord
火ばさみ	Serpentine (holds the match cord)
胴金	Lock band
弾き金	Mainspring
火皿	Priming pan
火ぶた	Pan cover
平からくりの機構と作動の仕組み (←)	Movement of a <i>hira-karakuri</i> lock (←)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

火縄銃の仕組み

初期の鉄砲の多くは、銃身後部の小さな穴から中の火薬に直接炎を当てて発射するものであった。この方法は、据え置き型の大砲には適していたが、携帯型の武器には不向きであった。火縄銃は、サーペンタインと呼ばれるバネ仕掛けのアームを取り付けることで、照準や射撃を容易にした。サーペンタインには火のついた火縄が入っており、砲手が引き金を引くとアームが前に飛び出して、火薬を入れた皿に点火する。この閃光が銃身内の主火薬を爆発させ、弾が発射される。

この火縄銃の基本設計には多くのバリエーションがあり、日本の鉄砲職人も独自の工夫を凝らしている。多くの技術がそうであったように、より複雑なものはより多くの機能を備えているが、高価で維持が困難であった。

003-033

Firing a Matchlock Musket

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 発射法・早合による弾丸の装填

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Firing a Matchlock Musket

1. Load

Matchlock muskets were loaded at the muzzle. The gunner poured gunpowder into the mouth of the barrel, inserted a musket ball, and tamped everything down with a ramrod.

2. Prime

Next, the gunner leveled the weapon and poured fine-grained gunpowder into the priming pan before quickly closing the pan cover. The cover kept the powder from getting wet, spilling, or accidentally igniting. A partially full priming pan might flare up without igniting the main charge, resulting in a “flash in the pan.”

3. Ready

When it was time to shoot, the gunner clipped a lit match cord to the end of the gun’s serpentine and opened the pan cover.

4. Aim

Supporting the barrel with his left hand, the gunner raised the buttstock to his cheek and aimed by lining up the barrel’s front and back sights.

5. Fire

The gunner pulled the trigger, releasing the spring-loaded serpentine and bringing the lit match cord into contact with the priming pan. The priming powder flared up and ignited the main charge inside the barrel, creating an explosion that propelled the musket ball out of the gun and toward the target.

Saving Seconds: *Hayagō*

Matchlock muskets were slow and cumbersome to load. To speed up the process, gunners invented the *hayagō*, a forerunner of modern cartridge ammunition. *Hayagō* consisted of a small, portable container, such as a bamboo tube, filled with premeasured gunpowder and a musket ball.

Unlike a true cartridge, a *hayagō* was not inserted directly into the weapon. Instead, it was used by tearing off its paper-covered end and pouring the shot and powder into the gun's muzzle. Gunners carried *hayagō* in containers on their belts or in bandoliers. Each one saved precious seconds during loading, which could mean the difference between life and death on the battlefield.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

火縄銃の発射

1. 装填

火縄銃は前装式である。銃口から火薬を注入し、弾丸を挿入し、ラムロッドで全体を押さえる。

2. 点火

次に銃を水平にし、火皿に粒の細かい火薬を入れ、素早く蓋を閉める。蓋をすることで、火薬が濡れたり、こぼれたり、誤って点火したりするのを防ぐためである。火薬の量が少ないと、主装置に点火されずに爆発し、火皿の中で発火することになる。

3. 準備

撃つ時は、銃の蛇腹の先に火のついた火縄をはさみ、火皿の蓋を開ける。

4. 照準調整

左手で銃身を支え、銃床を頬に当て、銃身の前後の照準を合わせて狙いを定める。

5. 発射

砲手が引き金を引くと、ばね仕掛けの蛇腹が外れ、火のついた火縄が火皿に接触する。火薬が燃え上がり、銃身内の主薬に引火して爆発し、銃から発射された弾は標的の方向に進む。

時間の節約：早合

火縄銃は装填に時間がかかり、面倒であった。この作業を早くするために、鉄砲隊は早合（火薬と弾を竹筒のような携帯用の容器に入れたもので、現在のカートリッジ弾の前身）を発明した。

早合は、カートリッジと異なり、銃に直接差し込むことはない。紙で覆われた端をちぎって、中身の銃弾と火薬を銃口に流し込んで使用した。鉄砲隊は早合をベルトや装弾ベルトに入れて持ち歩き、戦場では生死を分ける貴重な一秒一秒を節約した。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 武士の装備品（イラスト）
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Gunners' Gear

Armies of the fourteenth to sixteenth centuries were drawn from two classes of warriors: elite samurai, who acted as officers and cavalry, and peasant foot soldiers called *ashigaru*. Both classes could carry muskets, but it was usually *ashigaru* who formed the long firing lines that made up the bulk of an army's gunnery corps.

The suit of armor on display here belonged to a samurai. Samurai armor was made with overlapping plates of metal that were thickened when firearms became prevalent on the battlefield. However, even heavy armor could not stop a musket ball from close range, and armor continued to serve primarily as protection against swords and spears, and as a mark of rank.

Every gunner brought their own ammunition into battle. This warrior's kit consisted of a coil of match cord made from braided strips of cypress or cotton; a large, canteen-shaped container for gunpowder and a smaller, gourd-shaped container for priming powder; a pouch of musket balls with a special "crow's beak" neck that dispensed one ball at a time; a satchel of *hayagō* cartridges; and one or more ramrods to pack the musket ball and powder into the barrel. The large wooden box was used to carry ammunition to the field of battle.

Note the tube affixed to the back of the armor to hold the samurai's personal field banner (*sashimono*).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鉄砲隊の装備

14 世紀から 16 世紀にかけての軍隊は、士官として、また騎兵として活躍するエリート武士と、足軽と呼ばれる農民の足軽の二層で構成されていた。どちらも火縄銃を携帯することができたが、鉄砲隊の大部分を構成する長い射撃隊の列を形成したのは足軽であった。

ここに展示されている鎧は、武士のものである。武士の鎧は、戦場に火器が普及してから金属板を厚くするようになった。しかし、重い鎧でも火縄銃の弾を止めることはできず、鎧は主に剣や槍から身を守るため、また身分を示すものとして使われ続けた。

弾薬は各自が持参した。檜や木綿を編んだ火縄、火薬を入れる大きな水筒と火薬を入れるひょうたん型の容器、弾を 1 個ずつ入れる烏口頸袋、早合を入れる袋、弾を銃身に詰めるためのラムロッド（1 本または複数本）から構成されていた。木箱は戦場へ弾薬を運ぶのに使われた。

鎧の背中には、幟（指物）を立てるための筒が取り付けられている。

003-035

The Guardian Deity of Matsumoto Castle

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守6階 /
守護神二十六夜社勧請の謂れ
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Guardian Deity of Matsumoto Castle

The small shrine located inside the roof of the Great Keep is dedicated to the deity Nijūroku-yashin, or “deity of the twenty-sixth night.” Nijūroku-yashin is said to serve as guardian of the castle.

A legend surrounding the deity describes an event on the twenty-sixth day of the first month of 1618. A samurai named Kawai Hachirōsaburō was guarding the residence in the main bailey late at night. Just as the moon appeared from behind the mountains, he heard an unfamiliar voice calling his name. When he turned to look for the intruder, a woman in flowing scarlet *hakama* trousers appeared before him. Kawai immediately dropped to his hands and knees in awe.

The woman handed him a brocade pouch and told him that his lord’s household would prosper if a monthly offering was made of rice measuring 3 *goku*, 3 *to*, 3 *shō*, 3 *gō*, and 3 *shaku* (roughly 500 kilograms in total). She also warned him that the pouch must not be opened, and then she vanished. The following morning, Kawai reported this occurrence to the lord of the castle, Toda Yasunaga (1562–1633). It is said that thereafter offerings were made on the twenty-sixth night of each month until the Toda family gave up control of the castle in 1868.

The worship of Nijūroku-yashin might be connected to a folk religious practice that was popular in the Kanto region. Believers would stay up on the twenty-sixth night of every month, praying for the appearance of Amida Buddha and his attendants.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の守護神

大天守の屋根の下にある小さな祭壇には、城の守護神とされる二十六夜神が祀られている。この神様にまつわる伝説に、1618年正月26日の真夜中の出来事が書かれている。川井八郎三郎という番人が、本丸で夜番をしていた。月が雲間から顔を出したとき、川井八郎三郎の名を呼ぶ聞き慣れない声がした。その声に振り向くと、緋色の袴をはいた女性が目の前に現れた。川井はたちまち膝をついて感嘆した。

錦の袋を渡され、「毎月、三石、三斗、三升、三合、三勺の米（合計約500キロ）を供えれば、主家の繁栄につながる」と告げられた。そして、「この袋は絶対に開けてはいけない」と忠告して、彼女は姿を消した。翌朝、川合はこのことを大名戸田康長（1562-1633）に報告した。以後、明治維新の頃まで、毎月26日の夜に供養が行われたという。

二十六夜神信仰は、康長の生まれた地方で盛んだった民間信仰と関係があるのかもしれないという説がある。信者は正月のある夜、阿弥陀仏が現れるようにと眠らずに祈っていたそう。

003-036

Petitions by Ichikawa Ryōzō

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守6階 / 建言書・懇願書
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Petitions by Ichikawa Ryōzō

The Meiji Restoration in 1868 brought about wide-reaching political and social changes that decided the fate of the country's castles. The creation of a new, centralized government required the daimyos to surrender their land, and their domains were restructured under a new prefectural system (the precursor to the one used today). At that time, castles were seen as outdated symbols of feudalism, and many castles were torn down so the land could be repurposed.

The documents shown here are replicas of letters sent by Ichikawa Ryōzō (1844–1908) to the prefectural governor as part of his efforts to save Matsumoto Castle. Ichikawa was an activist for popular rights and the founder of a local newspaper. He was troubled by the news that the land might be auctioned off and the castle demolished. He petitioned the governor to postpone the sale for at least 10 years, during which public exhibitions would be hosted in the main bailey.

Although his petition was initially rejected, Ichikawa persisted, and his request was granted in 1873. The first exhibition was held later that year. A wide variety of objects were displayed at the castle, ranging from fine art and traditional crafts to fossils, tools, and weapons. It was Ichikawa's belief that people learn more from a single day of seeing new things than through 10 years of reading. The displays proved to be tremendously popular, and four additional exhibitions were held over the following three years.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

市川量造の懇願書

1868年の明治維新は、日本の政治と社会に大きな変化をもたらし、その影響は国内の各城の

運命にさえも及んだ。大名が領地を中央政府に明け渡し、現在の都道府県制に改められたのである。当時、城は歴史保存の対象ではなく、近代国家にふさわしくない時代遅れの戦争のシンボルとして捉えられていた。そのため、多くの城が取り壊され、土地は再利用された。

ここに紹介するのは、市川量造（1844-1908）が松本城保存のために県知事に送った手紙の複製である。民権運動家であり、地方新聞の創刊者でもあった市川は、松本城が競売にかけられ、取り壊されるという知らせに悩んでいた。彼は、城の売却を10年以上延期するよう知事に陳情し、大天守で博覧会を開催することを提案した。

一度は却下されたものの、市川は粘り強く陳情し、1873年により許可された。その年の暮れ、第1回目の博覧会が開催された。城内には美術品、工芸品、化石、道具、武器など、さまざまなものが展示された。市川は、「人は10年本を読むより、1日新しいものを見たほうが多くを学ぶ」と考えていた。この考えは正しかったようで、その後3年間で、さらに4回の展覧会が開催された。

003-037

Southeast Wing (*Tatsumi Tsuke-Yagura*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 概要
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Southeast Wing (*Tatsumi Tsuke-Yagura*)

This extension of Matsumoto Castle was built in the 1630s, at the same time as the Moon-Viewing Tower. Its main function is to connect the Moon-Viewing Tower to the castle.

The structure of the Southeast Wing reflects the transition from the tumultuous years of the Warring States period (1467–1600) to relative peace and stability under the Tokugawa shogunate (1603–1868). The Great Keep was built 40 years before the Southeast Wing, and the keep is first and foremost a defensive fortification. The Southeast Wing, having been built during peacetime, was not built to withstand a siege. Standing in the doorway between the wing and the Great Keep, it is easy to see the contrast between the timbers used in framing the two buildings. The posts of the Great Keep are about twice as wide as those in the wing.

Like other parts of the castle, one section of the floor of the Southeast Wing extends over the stone foundation below. However, it lacks the floor openings (*ishi otoshi*) found in the Great Keep that allowed defenders to fire down on attacking enemies.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

辰巳附櫓

1630年代、月見櫓と同時に建てられた大天守の増築部分。主な機能は、月見櫓と大天守をつなぐことである。

南東の郭の造りは、戦国時代の混乱期から徳川幕府（1603-1867）の比較的平和で安定した時代への移行を反映している。大天守は南東の郭より40年前に建てられ、軍事的な要塞としての性格が強い。南東の郭は平時に建てられたもので、攻城戦に耐えられるような構造にはなっていない。

いない。大天守との間にある出入り口に立つと、2つの建物の骨組みに使われている木材のコントラストを見ることができる。大天守の柱は、翼棟の柱の約2倍の幅がある。

南東の郭は他の部分と同様、下の石造りの基礎の上に胸壁が伸びている。しかし、大天守にあった、攻めてきた敵に石を落とすための「石落とし（いしおとし）」がない。

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 銅卵(胴乱), 弾薬箱
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Carrying Containers

Soldiers carried a variety of equipment and accessories. Each gunner had personal containers for gunpowder and ammunition, and porters traveling with the army carried large boxes of ammunition and match cord that were distributed among the troops before battle. This panel from a mid-nineteenth century illustrated encyclopedia entitled *Buki nihyaku-zu* (Illustrations of 200 Weapons) shows:

- (1) a waist pouch for carrying small items, such as shot or powder; and
- (2) a pair of equipment boxes connected by a pole.

The boxes were used to transport musket balls and gunpowder. They would have been carried on the shoulders of porters who attended the gunners.

The display case below contains examples of boxes, cases, and pouches used by gunners and their attendants. The chest of drawers for carrying musket balls (called a *tamabako*) was built to be carried onto the battlefield: it has sturdy reinforced corners and opens at the front rather than the top to prevent rain from leaking in.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

上記解説文の仮訳（日本語訳）

兵士はさまざまな装備品や付属品を携帯した。砲手には火薬や弾薬を入れる容器があり、荷役は弾薬や火縄を入れた大きな箱を持ち、戦いの前に部隊に配った。19世紀半ばに出版された図説百科事典『武器百圖』の一コマには、次のようなものが描かれている。

- (1) 弾薬などの小物を入れる腰袋。
- (2) 棒でつながれた一組の道具箱。

これらの箱は、火縄銃の弾や火薬の運搬に使われた。砲手の従者が肩に担いで持ち運んでいた。

下の展示ケースには、砲兵とその従者が使用した箱やケース、ポーチなどの例があります。火縄銃の弾を入れる筥笥は、戦場に持ち込むことを想定して、角を頑丈に補強し、雨漏りを防ぐために上ではなく前が開くようになっている。

003-039

Musket Match Cords

松本市

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 /
鳥銃袋, 切火縄, 火縄械, 火縄筒
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Musket Match Cords

Match cords (or “slow matches”) were made from the fibers of various plants, including cotton, bamboo, and cypress. They were often treated with saltpeter to increase their flammability. Once lit, the cords typically smoldered for several hours, but gunners still carried flint and tinder or a container of mugwort embers with which to relight their match cords. (Examples of these fire-starters are displayed below.)

This panel from *Buki nihyaku-zu* (Illustrations of 200 Weapons) shows a number of accessories:

- 1) a leather musket case;
- 2) a coil of match cord;
- 3) a match cord cut to a length of five *sun* (roughly 15 cm);
- 4) cut match cords readied for use on a board that could be staked to the ground next to the gunner; and
- 5) a cap used to cover the lit end of a match cord.

The exact length of match cord that each gunner carried into battle differed from army to army, but it was not uncommon for each soldier to have three meters of cord or more wrapped around his wrist or arm.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

火縄

木綿、竹、ヒノキなどさまざまな植物の繊維で作られた火縄（"スローマッチ"）は、燃えやすくするために塩硝で処理されることが多かった。一度火をつけると数時間はくすぶり続けるが、火打石や火

種、あるいはよもぎのくすぶりを入れた容器などを携帯し、火縄が切れたときに再び火をつけることができた。(これらの火種の展示は以下)。

この『武器図説』の一コマには、さまざまな道具が描かれている。

- (1) 皮製の火縄銃ケース
- (2) 火縄の束
- (3) 5 寸（約 15cm）に切られた火縄
- (4) 砲手の横の地面に突き刺すことができる板の上で使用するために準備されたカットされた火縄
- (5) 火縄の火の部分を覆うためのキャップ

火縄の長さは軍によって異なるが、一人当たり 3 メートル以上の縄を手首や腕に巻いていることも珍しくはなかった。

003-040

Katōmado Window

松本市

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 花頭窓
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Katōmado Window

This bell-shaped style of window is characteristic of Zen Buddhist temples. The design, known as *katōmado*, was introduced to Japan from China along with Zen Buddhism in the thirteenth century. Chinese-derived Zen architecture such as *katōmado* windows soon came to be associated with social status and refinement, and by the sixteenth century, samurai and daimyos were having these windows installed in their castles and residences.

Matsumoto Castle has four *katōmado* windows: two in the Southeast Wing and two on the fourth floor of the Northwest Tower. Their window sills have internal rain gutters to channel rainwater to the outside when the shutters are closed.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

花頭窓

この鐘型の窓は、もともと禅宗の寺院の特徴であった。13世紀、禅宗とともに中国から日本に伝わり、花頭窓と呼ばれるようになった。中国から伝わった禅宗建築は、やがて社会的な地位や 品格と結びつけられるようになった。16世紀には、武士や大名が城や屋敷に「花頭窓」を設置するようになった。

松本城には、南東の郭と乾櫓の4階にそれぞれ1基ずつ、計2基の「花頭窓」がある。これらの門扉は、雨戸を閉めたときに雨水を外部に流すための雨どいを内蔵している。

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 様々な変り弾
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Unusual Musket Balls

In the search for more effective ammunition, schools of gunnery experimented with variations on the standard musket ball. Some unorthodox rounds had barbs or sharp edges to make them more deadly; others consisted of groups of linked projectiles that were fired together. However, these elaborate bullets were difficult to manufacture, and they were only marginally more effective than simple spheres of lead. The basic spherical musket ball remained the standard for ammunition until matchlock muskets were displaced by modern guns in the nineteenth century.

This panel shows various kinds of unusual ammunition as depicted in a firearm manual from the Tanegashima school of gunnery. The display case contains musket balls of different shapes and sizes along with other items, including a ceramic hand grenade (the spiked ball at the rear).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

様々な変り弾

より効果的な弾薬を求めて、砲術学校では標準的な火縄銃の弾のバリエーションが試された。棘（とげ）をつけて殺傷力を高めたものや、弾を連結して一緒に発射するものなど、さまざまな工夫が凝らされた。しかし、これらの弾は製造が難しく、単純な鉛の球よりわずかに効果があったに過ぎない。19世紀に火縄銃が近代的な銃に取って代わられるまで、基本的な球形の弾がスタンダードであった。

このパネルでは、種子島流の火縄銃の教本に描かれている、さまざまな種類の珍しい弾薬を紹介している。展示ケースには、さまざまな形や大きさの火縄銃の弾や、陶製の手榴弾（後方にトゲのある弾）などが入っている。

003-042

Explosives

松本市

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 /
投砲ろく, 烙丸, 枕火矢杵丸, 盆貌弾, 葡萄弾
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Explosives

Gunpowder was the propellant used to fire cannons and muskets, but it could also be used to make bombs. This panel from *Buki nihyaku-zu* (Illustrations of 200 Weapons) shows several kinds of explosive munitions:

- 1) a hand grenade ignited by a fuse;
- 2) an explosive round for a large-bore matchlock musket;
- 3) a land mine;
- 4) an hourglass-shaped grenade;
- 5) an explosive cannonball (*bombu-dama*, from the English word “bomb”); and
- 6) a grapeshot cluster bomb (*budō-dama*) that was carried and thrown in a bag made from cloth and woven straw.

Early grenades (an example of which is displayed in the case on the right) were essentially glazed ceramic jars filled with gunpowder and shrapnel. Later iterations consisted of two copper halves filled with gunpowder and iron shavings, then wrapped in fabric and coated with a layer of lacquer. Toward the end of World War II, when metal became scarce, the military once again made ceramic grenades as a stopgap measure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

爆弾

火薬は大砲や火縄銃を発射するための原動力であるが、爆弾の材料としても利用された。この図は『武器百圖』の一コマで、数種類の火薬類が描かれている：

- (1) 信管で発火させる手榴弾
- (2) 大口径火縄銃用の炸薬弾

- (3) 地雷
- (4) 砂時計型手榴弾
- (5) 爆薬砲弾（盆貌弾、英語の "bomb "に由来）
- (6) 布や藁で編んだ袋に入れて携帯し、投擲した榴弾クラスター爆弾（葡萄弾）

初期の手榴弾（右のケースに展示）は、釉薬のかかった陶器の壺に火薬と榴散弾を詰めたものである。その後、2枚の銅製の半球に火薬と鉄片を詰め、布で包み、漆を塗ったものが作られた。第二次世界大戦末期、金属が不足したため、軍は応急処置として再び陶製の手榴弾を作った。

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 竹管請筒, 錫いれ, 火針
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Gunners' Tools 1

These entries from *Buki nihyaku-zu* (Illustrations of 200 Weapons) depict

- 1) paper and bamboo *hayagō*, each of which was loaded with a measured amount of gunpowder and a musket ball for quick reloading;
- 2) a container of priming powder; and
- 3) needles used to clear the vent between a musket's priming pan and its firing chamber, where the main charge was loaded. A clogged vent could prevent the priming powder from igniting the main charge, leading to a misfire.

Bamboo *hayagō* casings are displayed in the case below. *Hayagō* were sealed with stoppers or paper covers so they could be opened quickly. Bamboo casings were reusable, but there were also single-use *hayagō* made entirely of paper.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鉄砲隊の道具 1

『武器図』のこれらの記述は、次のものについて記している：

- （１） 火薬と火縄銃の弾をあらかじめセットしておき、素早く装填できるようにした火薬入れと竹筒。
- （２） 火薬の容器。
- （３） 火縄銃の火皿と主砲を装填する発射室の間にある通気孔を塞ぐための針。この通気孔が詰まると、火薬の着火を妨げ、誤射の原因となる。

下の展示ケースには、竹製の早合の薬莢も展示されている。早合は、すぐに開けられるようにストッパーや紙で封をしたもの。竹筒は再利用できるが、紙だけでできた使い捨ての早合もある。

【タイトル】 国宝松本城 辰巳附櫓 / 螺と爬, かる杖, 櫓早合
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Gunners' Tools 2

This panel from *Buki nihyaku-zu* (Illustrations of 200 Weapons) depicts:

- 1) long tools used to extract a musket ball from a barrel (after a misfire, for example) or clean the barrel of powder residue;
- 2) a ramrod for tamping down the shot and powder; and
- 3) a bandolier for carrying tubes of paper or bamboo called *hayagō*, each of which contained premeasured gunpowder and a musket ball for quick loading. This bandolier was designed to keep the gunner's sleeves out of the way during loading and firing.

The display case below contains other gear carried by infantry, including a pair of gunpowder chests labeled “Matsumoto Ammunition Brigade” (*matsumoto gyokuyakugata*). Each gunnery unit was supported by porters who carried shot and powder. The design of the chests allowed them to be worn slung on the back, much like backpacks, using ropes threaded through the iron rings on their sides.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鉄砲隊の道具 2

『武器百圖』のこの図は、次のものを描いている：

- (1) 火縄銃の弾を銃身から取り出したり（誤射など）、銃身に残った火薬を取り除いたりするための長い道具
- (2) 銃弾や火薬を押さえるためのラムロッド
- (3) 火薬と火縄銃の弾をあらかじめ計量して紙や竹の筒に入れ、素早く装填できるようにした「早合」を携帯するための装弾ベルト。このベルトは、火薬の装填や発射の際に、砲手の袖が邪魔にならないようにするためのものである。

下の展示ケースには、竹製の早合の薬莢も展示されている。早合は、すぐに開けられるようにストッパーや紙で封をしたもの。竹筒は再利用できるが、紙だけでできた使い捨ての早合もある。

下の展示ケースには、「松本玉薬方」と書かれた火薬箱など、歩兵が携行した道具が展示されている。各鉄砲隊には火薬や弾丸を運ぶ兵士がいた。箆筒は背中に背負うことができるように、側面にある鉄の輪に縄を通し、背囊のように背負うことができるように工夫されていた。

003-045

Moon-Viewing Tower (*Tsukimi Yagura*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 月見櫓 / 概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Moon-Viewing Tower (*Tsukimi Yagura*)

The Moon-Viewing Tower was constructed between 1633 and 1634, during the rule of Matsudaira Naomasa (1601–1666). Unlike the three original structures of the castle, the tower was built in peacetime and wasn't designed to withstand an attack. Instead, the tower was built as a place to entertain important guests, including the shogun himself.

In contrast to the narrow windows of the Great Keep, the Moon-Viewing Tower was fitted with sliding wooden doors on three sides that could be removed to afford a sweeping view of the main bailey and second bailey. Elements such as the elegant vaulted ceiling and vermilion-lacquered veranda indicate that the tower was likely built as a place where guests could enjoy a view of the moon above the surrounding mountains.

In 1615, the Tokugawa shogunate (1603–1868) prohibited the construction or expansion of castles, and they allowed repairs to an existing castle only by explicit permission. The construction of the Moon-Viewing Tower may have been made possible because Naomasa was a grandson of the first shogun, Tokugawa Ieyasu (1543–1616). The tower is said to have been built for a planned visit by the third shogun, Tokugawa Iemitsu (1604–1651), who would have passed through on his return from a pilgrimage to nearby Zenkōji Temple. However, a rockslide forced Iemitsu to take a different route, and he never visited Matsumoto.

Matsumoto Castle is one of only three surviving castles that have a moon-viewing tower. This tower is uniquely connected directly to the keep rather than being a detached structure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

月見櫓

月見櫓は、松平直政（1601-1666）の統治下であった1634年に建造されたものである。天守閣の3つの構造とは異なり、平時の建築であるため、旧来の城郭に見られるような防御的な要素はほとんどない。

大天守の狭い窓とは対照的に、月見櫓の3面には舞良戸が取り付けられており、この引き戸を取り外すと、大天守を一望することができる。また、天井の吹き抜けや朱塗りの縁側など、周囲の山々を望む月見の宴を催すのに使われたようである。

江戸時代（1603-1867）には、城の建設や拡張は禁止され、修理はすべて幕府に届け出なければならなかった。月見櫓は、直政が初代将軍・徳川家康（1543-1616）の孫であったことから、特別に許されたのかもしれない。三代将軍徳川家光（1604-1651）が善光寺に参詣した帰りに立ち寄る予定だったため、この塔を建てたと言われている。しかし、家光は岩盤崩落のため、別の道を通り、松本には立ち寄らなかった。

松本城は、秋に行われた月見の宴にちなんだ名前の櫓を持つ、現存する2つの城のうちのひとつである。また、櫓が天守閣に直結している唯一の例である。

003-046

Matsumoto Castle in the Meiji Era (1868–1912)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 月見櫓 / 明治の修理実施中の天守
(明治43年頃), 松本城古写真(明治35年頃)
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matsumoto Castle in the Meiji Era (1868–1912)

After the Meiji Restoration in 1868, the new government established a modern military that employed Western-style equipment and tactics. Wooden fortifications were deemed obsolete, and many castles were demolished.

Matsumoto Castle was spared this fate, due in part to the efforts of a local activist named Ichikawa Ryōzō (1844–1908). Ichikawa petitioned the prefectural government for permission to delay the demolition and host an exhibition at the castle. Ichikawa's request was approved, and five exhibitions were held in and around the Great Keep. Once these events concluded, the castle's main bailey was used by a local agricultural association, and in 1900 it became the athletic field for the local middle school.

Meanwhile, the Great Keep and other structures fell into disrepair. The middle school's principal, Kobayashi Unari (1855–1914), felt it was important to protect the castle for future generations. To this end, in 1901 he helped establish the Matsumoto Castle Preservation Society (Matsumoto Tenshukaku Hozonkai). With this organization at the helm, renovations began in 1903. The project was paused during the Russo–Japanese War (1904–1905) but was finally completed in 1913. Remarkably, 80 percent of the renovation costs were met by donations from society members.

Most of the repairs functioned to prevent the castle from dilapidating further. Warping pillars were straightened and reinforced with metal bolts, broken roof tiles were replaced, and an additional layer of plaster was applied to the exterior and interior walls. The castle's structural issues were not addressed until the 1950s, when the Great Keep was completely disassembled, repaired, and then reassembled.

明治時代（1868-1912）の松本城

1868年の明治維新後、新政府は西洋式の装備と戦術を中心とした近代的な軍隊を設立した。木造の城郭は時代遅れとされ、多くの城が取り壊された。

松本城は、市川量造（1844-1908）という政治家の尽力により、その運命を免れることができた。市川は、松本城の取り壊しを延期し、城内で展覧会を開催することを政府に願い出た。市川の願いは認められ、大天守を中心に5回の博覧会が開かれた。その後、大天守は輸入農法の実験場となり、1899年には地元の中学校の運動場となった。

一方、大天守をはじめとする建造物は老朽化が進んでいた。中学校長の小林有也（1855-1914）は、この城を後世に残すことが重要であると考えた。そして、1901年に「松本天守閣保存会」を発足させた。1903年（明治36年）には、この会を中心に改修工事が開始された。日露戦争（1904～1905年）で工事は中断されたが、1913年によりやく完成した。驚くべきことに、改修費の8割は会員からの寄付でまかなわれた。

修理のほとんどは、城がこれ以上老朽化しないようにするために行われた。ゆがんだ柱をまっすぐに伸ばし、金属製のボルトで補強し、割れた屋根瓦を取り替え、外壁と内壁に漆喰を塗り重ねた。これらの城の構造的な問題は、1950年代に天守閣を完全に解体し、再び組み立てることで解決された。

003-047

Matsumoto's "Space Azalea"

松本市

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 宇宙ツツジ

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matsumoto's "Space Azalea"

This azalea bush sprouted from a seed that traveled to outer space. On July 8, 1994, the seed was brought aboard the NASA Space Shuttle Columbia by heart surgeon and astronaut Mukai Chiaki (b. 1952), the first Japanese woman in space. Mukai was allowed to bring mementos from her hometown of Tatebayashi, in southeastern Gunma Prefecture. She took the city's flag, along with seeds from a 500-year-old azalea bush to represent the city symbol, the azalea flower.

After two weeks in space, Mukai returned to Tatebayashi with the azalea seeds, and they were divided among several universities and botanical research centers for planting and observation. The seeds were sprouted without difficulty, and the time spent in zero gravity did not seem to have affected them. In 1998, these well-traveled seeds and the azaleas grown from them were registered under the trademark "Space Azalea" (*uchū tsutsuji*) in commemoration of their journey.

In 2000, Tatebayashi hosted the annual Fill the World with Flowers convention. Fill the World with Flowers (*Hana ippai undō*) is a nationwide movement that originated in Matsumoto in 1952, when a local elementary school teacher named Komatsu Isamu began encouraging people to plant flowers to combat the town's post-war devastation. Nearly 50 years later, Tatebayashi donated this Space Azalea to Matsumoto to commemorate the founding of the movement.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本の宇宙ツツジ

このツツジは、宇宙を旅してきた種から芽を出した。1994年7月8日、日本人女性初の宇宙飛行士となった向井千秋（1952-）が、NASAのスペースシャトル「コロンビア号」に持ち込んだ種であ

る。向井は、故郷である群馬県南東部の館林市から記念品を持参することが許されていた。向井さんが選んだのは、市の旗と、市のシンボルがツツジの花であることから選んだ、樹齢500年のツツジの種だった。

ツツジの種は2週間の宇宙滞在の後、向井とともに館林に戻った。大学や植物研究所などに分けて、植え付けと観察を行った。種は問題なく発芽し、無重力空間を旅した影響も無いようだった。1998年、この旅する種子とツツジを記念して「宇宙ツツジ」という商標が登録された。

花いっぱい運動は、1952年、松本市の小学校の教師だった小松勇氏が、戦後の荒廃した街に花を植えようと呼びかけたのがきっかけで始まった全国的な運動である。それから50年近く経った2000年、館林は「世界を花でいっぱいにする会」を開催。同年、運動発足を記念して、この「宇宙ツツジ」を松本に寄贈した。

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 清正公駒つなぎの桜
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Kiyomasa's Choice of Two Horses

This two-trunked weeping cherry tree is associated with a colorful legend from Matsumoto Castle's early days. Sometime around 1594, when the castle's core structures were completed, castle lord Ishikawa Yasunaga (1554–1642) hosted fellow daimyo Katō Kiyomasa (1562–1611). Kiyomasa was returning from Edo (now Tokyo) to his own castle in Kumamoto, far to the southwest.

At the end of Kiyomasa's stay, Yasunaga wished to present him with a gift. He had his grooms bring in two peerless horses, and he told Kiyomasa to take his pick. Instead of selecting one, Kiyomasa replied, "How could I possibly choose between two horses that a connoisseur like yourself has selected?" So saying, Kiyomasa left with both horses.

Those who heard the tale afterward were greatly impressed by the visiting daimyo's astute decision. If Kiyomasa had picked one horse over the other, it would have been an insult to the unchosen animal. If he had picked the lesser of the two, people would have mocked him as a poor judge of horses. By taking both animals, Kiyomasa cleverly avoided this problem and showed his sensitivity even to the feelings of a horse.

It is said that before Kiyomasa departed, he tied his fine new steeds to a cherry tree, the predecessor of the tree that stands here today.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二頭の馬に関する清正の選択

この2本の枝垂れ桜には、松本城の初期の頃の伝説がある。1594年頃、城郭が完成したとき、

城主の石川康長（1554-1642）は、同じ大名の加藤清正（1562-1611）を迎えた。清正は江戸（現在の東京）からはるか南西の熊本の城に帰る途中だった。

清正の滞在が終わり、康長は清正に贈り物をしたいと考えた。彼は厩舎係の者に2頭の素晴らしい馬を連れてこさせ、清正に好きな馬を選んでくださいと言った。清正は、「あなたほどの目利きが選んだ馬をどうして私が選ぶことができますようや」と答え、清正は馬を2頭とも連れて帰ってしまった。

その後、この話を聞いた人たちは、清正の賢い選択に大いに感心したという。もし清正がどちらかの馬を選んでいたら、それは選ばれなかった馬が劣っていることになる。もし、劣っている馬を選べば、馬を見る目がないと揶揄される。清正は2頭を選ぶことで、この問題を巧みに回避し、馬の気持ちまで汲み取る繊細さを示したのである。

清正は旅立つ前に、新しい馬を現在の桜の木の前身の桜の木に繋いだと言われている。

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 松本城保存の功労者
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Portraits of the Castle Benefactors

These two portraits in bronze relief depict Ichikawa Ryōzō (1844–1908) and Kobayashi Unari (1855–1914), two Matsumoto citizens whose tireless efforts saved Matsumoto Castle from destruction. During the widespread push for modernization and Westernization that marked the Meiji era (1868–1912), these men saw the castle as a priceless piece of Japanese history and not as a relic of the defunct feudal regime.

Ichikawa Ryōzō (1844–1908)

Ichikawa Ryōzō (left) was born to a wealthy family in what is now the Shimoyokota area of Matsumoto. In 1871, he was appointed a municipal official, and the following year he founded a local newspaper. In October of 1872, Ichikawa learned that Matsumoto Castle had been auctioned off and would soon be torn down. Determined to postpone this, he used his own newspaper to raise awareness of the castle and petitioned for permission to hold museum exhibitions inside the Great Keep. Through these exhibitions, Ichikawa was able to raise popular support for the castle's preservation.

Kobayashi Unari (1855–1914)

Kobayashi Unari (right) was born to a samurai family from what is now southwestern Osaka. He studied physics in Tokyo, then came to Matsumoto in 1885 as the first principal of Nagano's prefectural middle school.

By the start of the twentieth century, Matsumoto Castle was showing significant signs of disrepair, and Kobayashi was moved to take action. In 1901, he founded the Matsumoto Castle Preservation Society and launched a nationwide fundraising campaign. The society's efforts raised ¥20,000 in donations, a considerable sum at the

time and enough to finance a large-scale restoration of the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城の恩人たちの肖像画

市川量造（1844-1908）と小林有也（1855-1914）の2人の松本市民は、松本城を破壊の危機から救うために、精力的に活動した。明治時代（1868-1912）、近代化・西洋化が進む中、彼らは松本城を封建時代の遺物としてではなく、日本の歴史の一部として捉えたのである。

市川量造(1844-1908)

市川量造（左）は、現在の松本市下横田に名主の家に生まれた。1871年に行政官に任命され、翌年には地方新聞を創刊した。1872年10月、市川は松本城が競売にかけられ、間もなく取り壊されることを知った。これを防ぐ決心をした彼は、自紙に陳情し、城内で展覧会を開くことを願い出た。この展覧会を通じて、松本城の保存のための資金と民衆の支持を集めた。

小林有也(1855-1914)

小林有也（右）は、現在の大阪府南西部の武士の家に生まれた。東京で物理学を学んだ後、1885年、長野県の県立中学校の初代校長として松本に赴任してきた。

20世紀に入ると、松本城の荒廃が顕著になり、小林は行動を起こすことになる。1901年、小林は「松本天守保存会」を設立し、全国で募金活動を展開した。その結果、当時としては巨額の寄付金2万円が集まり、松本城の大修復を実現することができた。

003-050

Lord Ogasawara's Peonies

松本市

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 小笠原牡丹
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Lord Ogasawara's Peonies

The white peonies planted here have a history that stretches back nearly 500 years, to before Matsumoto Castle was built. Once the prized blooms of a sixteenth-century warlord, these peonies spent centuries in the care of a local temple before being returned to the castle grounds.

During the latter half of the sixteenth century, Ogasawara Nagatoki (1514–1583) ruled the Matsumoto region from Hayashi Castle, in the mountains to the east. Nagatoki's position was threatened by Takeda Shingen (1521–1573), the powerful ruler of neighboring Kai Province, who had begun moving to invade Matsumoto from the south. Nagatoki decided to abandon his castle and flee north, but he was tormented at the thought of Shingen's forces trampling and destroying his treasured white peonies.

To preserve the peonies, Nagatoki had them entrusted to the priests at Tosenji Temple nearby. Nagatoki was eventually defeated, and the peonies remained at Tosenji, where they were maintained through the years by a family of temple parishioners named Kuneshita.

It is thanks to the Kuneshita family that the peonies are here at Matsumoto Castle today. In 1957, the family presented some of the Ogasawara peonies (known to them as “the lord's white peonies”) to Ogasawara Tadamune (1919–1996), the sixteenth head of the Ogasawara family. Greatly moved by the Kuneshita family's loyalty, Tadamune had the peonies replanted on the castle grounds. In 2006, the Kuneshita family donated several more peony plants, bringing the total to six.

In addition to the white Ogasawara peonies, pink and yellow peony varieties are planted around the enclosure. The flowers bloom in May.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

小笠原公の牡丹

この地に植えられた白牡丹の歴史は、松本城築城の約500年前にさかのぼる。16世紀のある武将が愛でた牡丹は地元の寺に預けられ、その後、城内に戻された。

16世紀後半、松本地方は小笠原長時（1514-1583）の支配下にあった。彼は東の山にある林城に住んでいた。長時は、南から迫る甲斐国の雄、武田信玄（1521-1573）による侵攻の危機にさらされていた。長時は城を捨てて北上することを決意したが、大切にしている白牡丹が敵に踏み乱らされることを思うと、胸が痛んだ。

牡丹を残すために近くの兎川寺の住職に託した。結局、長時は敗れ、その子孫が牡丹を取り戻すことはなかった。しかし、牡丹は檀家の久根下家たちによって永く維持された。

今日、松本城に牡丹があるのは、この久根下家のおかげである。1957年、小笠原家第16代当主・小笠原忠統（1919-1996）に「殿様白牡丹」と呼ばれる小笠原牡丹が贈られた。忠統は、久根下家の説明に感動し、城内に牡丹を植え直させた。2006年には、久根下家からさらに数株の牡丹が寄贈され、合計6株となった。

白い小笠原牡丹の他にも、ピンクや黄色の牡丹が天守近くに植えられている。花は5月に咲く。

003-051

Matsumoto Castle and Its Castle Town

松本市

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 松本城と城下町

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Matsumoto Castle and Its Castle Town

The construction of Matsumoto Castle and its castle town began in 1590, the year Ishikawa Kazumasa (d. 1592) was appointed daimyo of the region. A modest fortification already existed on the site, but Kazumasa began the systematic construction of moats and multiple baileys surrounding a towering central keep. After his death, in 1594 Kazumasa's son Ishikawa Yasunaga (1554–1642) completed the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage.

By the late sixteenth century, warlords had shifted from building their castles atop mountains to building them on hills or flatlands. Mountain castles were easy to defend but difficult to keep supplied, whereas lowland castles could be easily supplied with food and armaments from the farms and workshops that surrounded them.

Because flatland castles like Matsumoto lacked natural defenses, they were often fortified by multiple concentric moats. For many centuries, Matsumoto had three such moats. The inner moat surrounded the main bailey (*honmaru*), which enclosed the castle keep, storehouses, and the Honmaru Goten, where the castle lord lived. The second bailey (*ninomaru*) lay beyond the inner moat, on a narrow curve of land where the Ninomaru Goten and other administrative buildings were located. The second bailey was surrounded by an outer moat, beyond which lay the third bailey (*sannomaru*). The daimyo's highest-ranking samurai retainers lived in the third bailey, separated from the unfortified parts of town by the outermost moat and a long earthen embankment that encircled the entire 39-hectare compound.

Commoners lived in the outlying areas of town, which were bordered by farms and the surrounding countryside. Movement between the different areas of the castle town was strictly regulated. The moats were spanned by narrow bridges, and traffic across them was controlled by guarded gates.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城と城下町

松本城とその城下町の建設は、1590年、石川数正（1592年没）がこの地の領主に任命されたときに始まった。すでにこの地には小規模な城郭が存在していたが、数正は天守閣を囲む堀と複数の櫓を計画的に築き始めた。数正の死後、息子の石川康長（1554-1642）が1594年に大天守、乾小天守、渡櫓などを完成させた。

16世紀後半になると、武将たちは城を山の上に築くのではなく、丘陵や平地に築くようになった。山城は防御しやすいが、兵糧の確保が難しい。低地の城は、周囲の農家や工房から兵糧や武具を調達することができる。

松本城のような平地の城には自然の防壁がないため、同心円状の堀で囲まれていた。何世紀もの間、松本には3重の堀があった。内堀は天守閣や土蔵、大名が住む本丸御殿などがある本丸を囲んでいた。内堀の外側には二の丸があり、二の丸御殿をはじめとする建物が狭い凹字の曲輪に配置されていた。二の丸は外堀で囲まれており、その外には三の丸がある。三の丸には大名の上級家臣が住み、39ヘクタールの敷地全体を囲む最外堀と土塁によって、城外の町とは隔絶された場所にあった。

城下町の周辺は、低湿地や農地が広がり、農民が住んでいた。城下町の各区画の移動は、結接点に設けられた木戸によって、厳しく制限されていた。

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 史跡松本城の概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Historic Matsumoto Castle

Matsumoto Castle's Northwest Tower, Roofed Passage, and 29.4-meter Great Keep were constructed in 1594. Today, Matsumoto Castle is the second-oldest castle in Japan and one of only five castles that have been designated National Treasures.

The castle is located in the main bailey, one of three baileys that made up the castle compound. At the time of the castle's construction, each of the baileys was encircled by a moat and a tall earthen embankment, dividing the compound into three concentric sections. The resulting complex reached all the way to the Metoba River (1.3 kilometers to the south) and covered some 390,000 square meters.

The main bailey is the innermost area of the compound. It was the location of the Honmaru Goten, an administrative building that doubled as the residence of the castle lord. Storehouses and additional administrative buildings were in the second bailey, and the third bailey contained the residences of the higher-ranking samurai retainers.

The nineteenth century saw many sweeping social and political reforms, beginning with the Meiji Restoration of 1868. Japan's rigid class structure was abolished, and castles came to be seen as relics of a war-torn age. Over the next century and a half, Matsumoto Castle's embankments were leveled, most of the checkpoint gates were torn down, and one of the castle's three moats was almost completely filled in.

The castle's core structures would have been destroyed as well, but they remain standing thanks to the efforts of local residents. In 1930, the castle's two inner baileys and sections of the outermost moat (marked in red) were designated National Historic Sites, and they have been protected ever since.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

歴史ある松本城

松本城の乾小天守、渡櫓、高さ29.4mの大天守閣は1590年代に築かれた。現在、松本城は日本で2番目に古い城であり、国宝に指定されている5つの城のうちの1つである。

松本城天守は、城郭を構成する3つの郭のうち、本丸にあたる。築城当時は、堀と土塁で囲まれた3つの郭があり、郭はより強固なものとなっていた。その結果、城は女鳥羽川（南方1.3km）にまで及び、約39万平方メートルの広さを持つようになった。

一番奥の本丸には、城主の住居を兼ねた本丸御殿がある。二の丸には蔵や御殿、三の丸には上級家臣の屋敷があった。

19世紀には、1868年の明治維新を皮切りに、社会的、政治的な大改革が行われた。厳しい階級制度が廃止され、城は戦乱の時代の遺物とみなされるようになった。その後、1世紀半の間に、城の土塁は削られ、城門のほとんどは取り壊され、3つの堀のうち1つはほぼ完全に埋め尽くされた。城の中核となる建造物も破壊されてしまうところだったが、住民の努力により今も残っている。1930年、2つの内堀と一番外側の堀の一部（赤色部分）が国定史跡に指定され、以後、保護されている。

【タイトル】 国宝松本城 松本城公園 /
太鼓門枡形の由来, 切株の説明, 太鼓門礎石の由来
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Taikomon Gate

This imposing gate was the main point of entry to the castle's second bailey (*ninomaru*). Attackers who managed to breach the fortified embankments surrounding the third bailey (*sannomaru*) would then have faced the outer moat and a deadly bottleneck here at the Taikomom Gate.

The Taikomom consists of two gates at opposite ends of an enclosed square. This is called a *masugata*-style gate, after the square *masu* boxes used to measure quantities of rice. Enemies who breached the outer gate would have to cross the square to assault the larger, inner gate. Meanwhile, defenders along the walls and inside the gatehouse could fire down at them with bows and muskets.

The Taikomom Gate is named for the drum tower that once overlooked the square from the northern wall. The tower held a *taiko* drum and a bell used to signal the hour. In emergencies, the drum and bell could also be used to sound the alarm or relay signals to defenders over the noise of battle.

Another notable feature of the gate is the enormous rock that forms part of the wall near the inner entrance. This is the Genba Stone, a 4-meter-tall, 22.5-ton boulder that is associated with Ishikawa Yasunaga (1554–1642), the second lord of Matsumoto Castle. According to legend, Yasunaga rode atop the massive rock as it was dragged to the castle from the mountains. When one of the laborers complained, Ishikawa jumped down, cut off the man's head, and stuck it on the end of a spear. Climbing back onto the rock, he hoisted the spear high in the air and bellowed for everyone to start moving again.

The Taikomom Gate was constructed shortly after the Great Keep, in the final years of the sixteenth century. The gate was torn down sometime around 1871, along with many of the castle's outer fortifications, but part of the original western wall

(including the Genba Stone) remained in place. It was rebuilt in 1999 based on an illustration from the early eighteenth century. The original stonework forms the lower part of the wall and is distinguishable from the lighter sections around it.

Red Pine Stumps

These large stumps are from two 140-year-old red pines used during the reconstruction of the Taikomom Gate, which was completed in 1999. The trees were made into the crossbeams that support the roof of the gatehouse.

Former Pillar Foundation Stone

This stone is one of the original foundation stones that supported the pillars of the Taikomom Gate. When the gate was torn down, two of the stones was given to the Iimori merchant family, who had served the last lord of Matsumoto Castle. The Iimori family used one of the stones in their own residence, but in 1973, they returned this one to the city so that it could be displayed as part of the castle's history.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

太鼓門

この印象的な門は、城の二の丸に入るための主要な門であった。三の丸を囲む土塁を突破した攻撃者には、外堀とこの太鼓門が致命的なネックとなる。

太鼓門は広場の両端に二つの入口がある。これは米の量を計る枡形にちなんで枡形門と呼ばれる。外側の門を破った敵は、より大きな内側の門を突破しようとするために枡形内を横切らなければならなかった。その間、城壁や門番は弓や火縄銃で攻撃することができた。

太鼓門の名は、かつてこの広場の北側の壁にあった太鼓楼に由来する。太鼓楼には太鼓と鐘があり、時刻を知らせていた。緊急時には警鐘を鳴らすこともでき、戦いの喧噪の中で叫び声が聞こえない守備隊に、太鼓のパターンを変えて合図を伝えることもできた。

この門のもう一つの特徴は、内側の入り口付近の壁の一部を構成している巨大な岩である。これは、松本城二代目城主・石川康長（1554-1642）から名がつけられた高さ4m、重さ22.5tの巨石「玄蕃石」である。伝説によると、石川康長は、山から城まで引きずられる石の上に乗っていたそうだ。ある運搬人が文句を言ったときには、石川は飛び降りて、その男の首を切り落とし、槍の先に突き刺したそうである。石川は石に登り、その槍を高く掲げて、「さあ、出発だ」と叫んだ。

太鼓門は、大天守のすぐ後16世紀末に建てられた。1871年に城の外郭とともに取り壊されたが、1999年に18世紀初頭の絵図をもとに再建された。西側の石垣の一部（玄蕃石を含む）はそのまま残されている。元の石積みは、石垣の下部を形成する黒っぽい部分で見分けることができる。

赤松の切り株

この大きな切り株は、1999年に完成した太鼓門の復元工事で使用された樹齢140年の赤松2本のものだ。門の屋根を頭上で支える横木として使用された。

旧柱礎石

この石は、太鼓門の柱を支えていた元来の礎石の一つである。門の取り壊しの際、最後の松本城主に仕えた商人、飯森家に一対が贈られた。飯森家はそのうちの1個を自邸で使用していたが、1973年に「城の歴史として保存してほしい」との願いを込めて市に返還した。

【タイトル】 国宝松本城 松本城公園 / 二の丸御殿絵図
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Imagining the Ninomaru Goten

This is the former site of the Ninomaru Goten, one of three administrative and residential buildings (*goten*) that were part of the castle complex. In contrast to the castle itself, which was sparsely occupied during peacetime, the *goten* were centers of activity. They contained living space for the castle lord, as well as offices and meeting rooms. The Ninomaru Goten was the second largest of the *goten* buildings. It comprised approximately 50 rooms and covered roughly 1,980 square meters of the second bailey.

The Ninomaru Goten was originally an auxiliary building of the Honmaru Goten. It became the castle's primary *goten* after the Honmaru Goten burned down in 1727. The Ninomaru Goten, too, burned down in 1876, and the site was excavated in 1979. The building's layout is now marked with stones. Grassy areas indicate rooms that once had tatami flooring, while red pavement denotes verandas, or areas with wooden floors. Visitors to the Ninomaru Goten would have entered through the *shikidai* porch on the building's south side.

	JP	ENG
1	玄関	Reception room
2	広間	Audience room
3	槍の間	Armory for guardsmen's spears
4	式台	Porch
5	内玄関	Private reception room
6	徒士番所	Station for low-ranking samurai (<i>kachi</i>)
7	持筒番所	Armory for muskets
8	炭部屋	Room for storing charcoal
9	廊下	Corridor
10	小姓番所	Station of the castle lord's attendants (<i>koshō</i>)
11	書院	Reception room (<i>shoin</i>)

12	次の間	Anteroom to sitting room
13	三の間	Sitting room
14	入側	Tatami-floored interior corridor
15	坊主部屋	Room for young male servants (<i>bōzu</i>)
16	小使番所	Servants' quarters
17	雑事	All-purpose space
18	草履取部屋	Sandal-bearer's room
19	家具部屋	Storage for furniture
20	かまど	Hearth (<i>kamado</i>)
21	台所	Kitchen
22	土台所	Scullery
23	居間	Living room
24	台所役所	Room for scullery servants
25	納戸部屋	Storage for personal items
26	近習番所	On-call room for attendants (<i>kinju</i>)
27	物置	Storage for household items
28	寝間	Bedchamber
29	賄所役所	Office of the accountant (<i>makanaidokoro</i>)
30	賄所	Room where accounts are tallied
31	賄所番所	Room for the accountant
32	近習部屋	Room for attendants (<i>kinju</i>)
33	用人部屋	Room for lower-ranking retainers (<i>yōnin</i>)
34	庭	Garden
35	井戸	Well
36	番所	Guardroom
37	金部屋	Treasury
38	雪隠	Toilet
39	味噌部屋	Room for storing miso
40	元鎮部屋	Room for mid-ranking retainers (<i>ganchin</i>)
41	年寄部屋	Room for senior retainers (<i>toshiyori</i>)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二の丸御殿を想像する

ここは城内にあった3つの行政・居住施設（御殿）のうちの一つである二の丸御殿があった場所だ。平時は人が少ない天守とは対照的に、御殿は活動の中心地であった。御殿には、城主の居住スペースや、事務所、会議室などがあった。二の丸御殿は、二の丸の建坪約1,980平方メートルに約50の部屋があり、御殿としては2番目に大きな建物である。二の丸御殿はもともと本丸御殿の付属的な建物であった。1727年に本丸御殿が焼失した後、城の主要な住居と行政の拠点となった。二の丸御殿も1876年に焼失し、1979年の発掘調査が行われた。現在では建物の配置が

石碑に記されている。草地は畳敷きの部屋、赤い石畳は縁側や板敷きの部屋を示している。二の丸御殿は、建物の南側にある式台の板の間から入ったと思われる。

【タイトル】 国宝松本城 松本城公園 / 土蔵
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ninomaru Goten Storehouse

This white-plastered storehouse was built in 1867 by Toda Mitsuhsa (1828–1892), the last lord of Matsumoto Castle. Although the storehouse was built as a treasury for the Ninomaru Goten, it is unlikely that much money was ever kept here. The Toda family's second appointment as lords of Matsumoto Castle (from 1726 to 1869) was the longest that any family controlled the castle, but they endured financial hardship for much of that time. The land holdings they received were smaller than those of any family before them, and the Toda family's finances had already been stretched thin by the cost of rebuilding secondary residences in Edo (now Tokyo), which had burned down in 1717 and 1727.

The years of the Toda family reign were hard years. The region was struck by the Great Tenmei Famine (1782–1787) and Great Tenpo Famine (1833–1839), both of which caused the price of rice to skyrocket. The Toda family opened their own storehouses to provide relief, and it is said that not a single person starved thanks to this generous act.

When Matsumoto domain was dissolved in 1871 and redesignated as part of Chikuma Prefecture, the Ninomaru Goten became the Chikuma Prefectural Office. During this time, the storehouse was used to store documents. When the prefectural office was destroyed by fire in 1876, the storehouse survived, and today it holds items uncovered during an excavation of the site in 1979.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

二の丸御殿土蔵

松本城最後の城主、戸田光久（1828-1892）が1867年に建てた白漆喰の土蔵である。二

の丸御殿の宝物庫として建てられたが、大金が保管されていたとは考えにくい。戸田家は松本城主として2度目の就任（1726～1869年）であり、どの家よりも長く城を支配したが、それまでのどの家よりも領地が狭かった。しかも、戸田家は1717年と1727年に江戸の別邸を焼失し、その再建費用で財政が逼迫していた。

戸田家の治世は、厳しい時代であった。天明の大飢饉（1782～1787年）、天保の大飢饉（1833～1839年）に見舞われ、米価が高騰したのである。戸田家は自ら蔵を開いて救済に努め、この寛大な行為のおかげで一人の餓死者も出さなかったと言われている。

1871年に松本藩が解体され、筑摩県となると、二の丸御殿は筑摩県庁となった。土蔵は城内に残り、文書の保管に使われた。1876年に県庁が焼失した際にも蔵は残り、1979年の発掘調査で出土した資料を保管している。

003-056

The Former Kaichi School Building, a National Treasure

松本市

【タイトル】 国宝松本城 松本城公園 / 国宝 旧開智学校校舎
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Former Kaichi School Building, a National Treasure

The Former Kaichi School Building is known for its architecture, which features Western design elements recreated with traditional Japanese materials and construction techniques. This hybrid of styles is called “pseudo-Westernism” (*giyōfū*).

The two-story structure was designed by a carpenter from Matsumoto named Tateishi Seijū (1829–1894). Tateishi was tasked with creating a Western-style building, but like most Japanese architects of the time, he had no experience building with stone or brick. Faced with this challenge, Tateishi took creative steps to make the wooden school appear more like a Western building. For example, he used stucco to create the “stonework” on the lower part of the building’s exterior. Pseudo-Western design became popular following the Meiji Restoration in 1868, when Japan abandoned its closed-border policy and began to adopt technology and culture from the West.

The school building was originally located in central Matsumoto on the bank of the Metoba River, where it was used as an elementary school from 1876 to 1963. It was moved to its current location in 1964 and has since become a museum of modern-era architecture and the history of education in Japan. In 2019, the Former Kaichi School Building was the first school building from its era to be designated a National Treasure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

国宝 旧開智学校校舎

旧開智学校校舎は、西洋のデザイン要素を日本の伝統建築で再現した「擬洋風」と呼ばれる建築様式で有名である。

松本出身の大工、立石清重（1829-1894）が設計した2階建ての建物である。立石は洋風建築を任されたが、当時の日本の建築家の多くがそうであったように、石や煉瓦を使った建築の経

験がなかった。そこで立石は、木造校舎を西洋風に見せるための工夫を凝らした。例えば、1階下部の「石積み」は、実は漆喰でできている。擬洋風とは、1868年の明治維新以降、日本が鎖国を解き、西洋の思想や技術を取り入れるようになったことで、流行したデザインである。

この学校は、もともと松本の中心部、女鳥羽川のほとりにあり、1876年から1963年まで小学校として使用されていた。1964年に現在の場所に移設され、現在は日本の教育史に関する資料館として活用されている。2019年、旧開智学校校舎は教育建築物としては初めて国宝に指定された。

【タイトル】 国宝松本城 西総堀土塁公園 / 土塁って何だろう？ ,
松本城西総堀土塁の概要, 土塁ってどうやって造ったの？ , 土塁と
石垣

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Section of Earthen Embankment of the Western Outermost Moat

This wall of rammed earth is a section of the earthen embankment that ran along Matsumoto Castle's outermost moat. The castle grounds formed a rough trapezoid, with each side facing one of the four cardinal directions. This section of the embankment formed part of the western side. The outermost moat separated the castle compound from the surrounding town, farms, and merchant residences, and it was the castle's first line of defense.

The earthen embankment was over 3.5 meters tall and topped with a mud-plaster wall between 2.5 and 2.7 meters high. Fourteen watchtowers stood along its length. Travel to and from the castle compound was done through four fortified sally ports (*umadashi*) and the Ōtemon Gate in the south.

What Is an Earthen Embankment?

Earthen embankments are walls of packed dirt that were commonly used for fortification in the sixteenth century. At Matsumoto Castle, these walls were built along the castle moats as additional defenses. Enemies attempting to reach Matsumoto Castle would have faced the deep water of the moats followed by the sheer slopes of the embankments. Furthermore, any attackers who attempted to cross the moat and make the climb would have been exposed to fire from gunners and archers positioned along the embankment.

How Was the Outermost Earthen Embankment Built?

As workers dug the outermost moat, they piled the excavated earth along the bank.

This earthen mound was then shaped into a sloping, flat-topped wall of earth roughly 17.5 meters thick at its base. The resulting embankment ran along the entire 1,940-meter circumference of the outermost moat. Especially for its era, the project would have required a tremendous amount of time and manpower.

Earthen Embankments versus Stone Walls

Earthen embankments had several advantages over stone walls. They could be built using earth taken from the moat, which was readily available, whereas stone had to be gathered, transported, and shaped. Constructing a stone wall required the expertise of masons, but an earthen embankment could be built by unskilled laborers. For these reasons, earthen embankments were much faster to construct and therefore more practical for fortifying a large area quickly. Another advantage of earth over stone was its ability to absorb projectiles. Unlike stone, which can shatter, earthen embankments were better able to withstand gunfire.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西の丸堀の土塁

この土塁は、松本城の最外堀に沿った土塁の一部である。最外堀は城郭と周辺の町や農家、商家などを分断するもので、城の第一の防御線であった。城の敷地はほぼ台形で、それぞれの面が四方八方に面しているが、この土塁は西側の一部を形成していた。

土塁の高さは3.5メートル以上あり、その上に高さ2.5～2.7メートルの土塁が築かれている。総堀の土塁上には14の見張り櫓（平櫓）が立ち、4つの出入口（馬出し）と南の大手門の5つの入り口があった。

土塁とは？

土塁とは、16世紀によく使われた土で固めた防御壁のことである。松本城では、城の堀に沿ってこの土塁を築き、防御を強化した。松本城に侵入しようとする敵は、まず堀の深い水面、次に土塁の切り立った傾斜に直面する。さらに、堀を越えて侵入しようとする敵は、土塁上に配置された鉄砲隊や弓隊からの砲撃に晒される。

最外周の土塁はどのように築かれたか？

最外堀を掘る際、掘った土砂を土手沿いに積み上げた。そして、このマウンドを傾斜させ、底辺の厚さが約17.5mにもなる土の壁とした。この土塁は、最外堀の周囲1,940mをすべて覆っている。当時としては、大変な時間と労力が必要な工事であった。

土塁と石垣の比較

土塁は、石垣に比べていくつかの利点がある。堀から採取した土はすぐに使えるが、石は採取し、運搬し、形を整えなければならない。石垣は石工の技術が必要だが、土塁は未熟な労働力で作ることができる。このような理由から、土塁は建設が早く、広い範囲を素早く固めるのに適していたのである。また、土は石に比べて弾丸を吸収しやすいという長所もある。石は粉々に碎けるが、土塁は銃弾に耐えることができる。

【タイトル】 国宝松本城 西総堀土塁公園 /
土塁の構築, 土塁模式図, 総堀杭列
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Building an Earthen Embankment

Matsumoto Castle's earthen embankments were made from rammed earth (*hanchiku*), which is formed by compacting layers of dirt. First, the builders constructed a sturdy frame of wooden boards to hold the earth in place. Next, they filled the space between the boards with dozens of layers of earth, some with a higher sand content, some with more clay, and some with gravel. The layers were then tamped down, compacting them into a barrier that is much stronger than one made from soil alone.

The layers of colored strata visible in this cross section show the embankment's composition. Posts from the wooden framework were found buried on its eastern side.

Diagram of an Earthen Embankment

This figure shows a cross section of the moat, earthen embankment, and plaster wall as they would have appeared during the Edo period (1603–1867). The area beyond the moat (left) was the outlying castle town, where the houses and shops of commoners were located. In the center is the moat, which is bordered on the right by the earthen embankment. The rows of stakes in the water at the embankment's base deterred attackers from attempting to scale it.

A white plaster wall ran along the top of the embankment, where defenders could gather during an attack. Wooden boards could be laid across the struts on the wall's inner side to create a platform. Standing on this platform, defenders fire over the wall at enemies attempting to cross the moat.

The flat berm just inside the wall was called the *musha-bashiri* (literally, “warriors’ run”). It provided room for defenders to position themselves along the wall. The narrow ledge of earth between the outside of the wall and the moat was called the “dog run” (*inu-bashiri*), because it was just wide enough for a dog.

To the right of the embankment is the castle's third bailey (*sannomaru*), the district where higher-ranking samurai lived.

総堀	Outermost Moat
杭列	Rows of Stakes
犬走	<i>Inu-bashiri</i>
土塁	Earthen Embankment
土塀	White Plaster Wall
武者走	<i>Musha-bashiri</i>
武家屋敷	Samurai Residences

Rows of Wooden Stakes

Several rows of sharpened stakes were driven into the outer base of the embankment below the moat's waterline. Most of the stakes were made from split logs of pine or chestnut, and their carved points were hardened with fire. Scholars believe these stakes were intended to repel enemies, but they may also have reinforced the earth along the embankment's base, preventing it from sliding into the moat. Similar stakes have been found at Yonezawa Castle, in Yamagata Prefecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

土塁の構築

松本城の土塁は、「はんちく」と呼ばれる土を固める技法でつくられている。まず、木の板で頑丈な枠を作り、その中に土を入れる。次に、枠の中に、砂や粘土、砂利などさまざまな土を入れて、突き固める作業を数十段にも重ねていくことによって、頑強で高い壁が出来上がる。この断面に見える色のついた地層の層が、土塁の構成を示している。東側の底辺付近から数本の杭が確認されている。

土塁の図

この図は、江戸時代（1603～1867）の堀、土塁、土塀の断面図である。堀の向こう側（左）は城下町で、庶民の住居や商店があった。中央が堀で、右側が土塁。土塁の根元には水中に杭が打ち込まれており、これを乗り越えようとする攻撃者を阻む。

土塁の頂上には白漆喰の土塀があり、攻撃されたときに守備隊が集まることができる。土塀の内側の支柱には木の板を敷いて台とすることができる。この台に立つと、塀の上から堀を越えようとする敵を見下ろすことができる。また、土塀の内側にある土塁上部の平らな部分は「武者走り」と呼ばれ、城壁に沿って守備を固めることができる。塀の外側と堀の間にある土塁下部の狭い部分は、犬一匹が通れるほどの幅があるため「犬走り」と呼ばれた。

土塁の右側は三の丸で、上級の武士が住んでいた。

木製の杭の列

土塁の外側の堀の水面下には、先端が尖った杭が何列にもわたって打ち込まれている。杭の多くは松や栗の丸太を割って作られ、その先は火で焼かれて固められている。この杭は敵を撃退するためのものであるが、土留めの役割も果たしており、土が崩れないようにするためのものであったと考えられている。

同様の杭は、山形県米沢城でも発見されている。

【タイトル】 国宝松本城 西総堀土塁公園 /
 武家屋敷概要 礎石建物, 庭園遺構, 甕の埋設
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Foundations of a Samurai Residence

This multicolored pavement shows the layout of a samurai residence that once stood here. The earthen embankment to the left was the outer boundary of the third bailey (*sannomaru*), where only samurai were permitted to live. The residence was built extremely close to the embankment, suggesting that space inside the castle compound was precious.

According to a household census of Matsumoto Castle from 1728, two samurai named Kimura Buhē and Tamagawa Sukenojō lived near this section of the embankment. Both men held middle-ranking positions, and their houses were likely similar in size. Judging by the location and dimensions of the foundations, researchers believe it was likely Kimura Buhē's residence that once stood here.

The residence's lot measured roughly 25 meters from east to west and 31 meters from north to south. The house's main entrance faced east, and a smaller secondary entrance led to the dirt-floored scullery. The building was supported by wooden pillars set on foundation stones.

The residence had a man-made pond (shown in blue), which was fed by two springs. Large jars found on the southern side of the residence may also have been used for storing water. Such jugs were frequently used in privies (simple toilets) to collect waste, but soil samples indicated these jugs never held human fecal matter.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

武家屋敷の礎石

この色とりどりの石畳は、かつてここにあった武家屋敷の配置を表している。左側の土塁は三の丸の

外縁で、武士しか住むことが許されなかった。この屋敷は土塁に極めて接近して建てられており、城内の空間が貴重であったことがうかがえる。

1728年の松本城の下絵図によると、木村武兵衛と玉川助之丞の二人の屋敷が、この土塁の近くにあった。両家とも中級の武士であり、家屋も同程度の大きさであったと思われる。基礎の位置や寸法から判断して、かつてここに立っていたのは木村武兵衛の住居だった可能性が高いと考えられる。

敷地面積は東西約25m、南北約31m。正面玄関は東向きで、小さな副玄関は土台所につながっていた。建物は、礎石の上に木の柱を立てて支えている。

邸内には人工の池（青色部分）があり、2つの泉が湧き出していた。また、住居の南側から発見された大きな甕は、水を貯めるために使われた可能性がある。このような甕はトイレ（簡易便所）でよく使われるものだが、甕から採取した土には人の糞便が溜まっていることは分からなかった。

003-060

Earthen Embankments in the Meiji Era (1868–1912)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 西総堀土塁公園 /
近代の土塁, 市内に残る土塁, 土塁の復元, 現代に残された土塁
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Earthen Embankments in the Meiji Era (1868–1912)

Matsumoto Castle’s earthen embankments are thought to have been built by the Ishikawa family in the 1590s, around the same time that they constructed the castle itself. The embankments remained through the Edo period (1603–1867) and are shown on castle maps dating to the beginning of the Meiji era (1868–1912). According to city records, the outermost moat was filled in around 1921, and researchers believe this was done using dirt from the embankments. Most of the embankments were removed as a result, and many of the surviving sections remain only as small mounds.

How Did the Remaining Embankments Survive?

Some sections of the earthen embankments were incorporated into the neighborhoods of the growing city. Residents lined the earthen mounds with stones to keep them from collapsing, and many became “artificial hills” (*tsukiyama*), a feature of household landscape gardens. The sections that survive today were enclosed by private property. In 2009, the remaining sections of the embankments and their surroundings were made into protected public parks to ensure their conservation as historic landmarks.

Restoring This Embankment

Restoration of this embankment began with a survey of the surrounding area to determine the embankment’s original width and slope. Over the centuries, this section of embankment had lost some of its original height and the sloping sides that gave it its trapezoidal shape. In addition to the survey data, the restoration team also referenced Edo-period (1603–1867) documents that described the standards for building embankments.

Embankment Sites in Matsumoto

In addition to this section of the embankment, on the western side of the outermost moat, five other sections of the embankments still stand at sites around the city:

1. Matsumoto Castle Honmaru Garden

The best-preserved section of the castle embankments.

2. Earthen Embankment of the Eastern Outermost Moat

Remains as an artificial hill in a landscape garden on land now owned by the city.

3. Earthen Embankment of the Northern Outermost Moat

A small hill located just south of the Matsumoto Town Hall staff parking lot.

4. Earthen Embankment of the Auxiliary Moat (*Sutebori*)

Preserved as an artificial hill on the grounds of a religious institution.

5. Earthen Embankment of the Auxiliary Moat (*Sutebori*)

Preserved as part of the garden of a local merchant.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治時代（1868-1912）の土塁

松本城の土塁は、1590年代、石川家が築城と同時期に築いたものと考えられている。江戸時代（1603～1867年）を経て、明治初期の城郭図にも記載されている。市の記録では、この辺りの総堀は1921年頃に埋められたとされており、研究者は、土塁の土を使って埋めたと見ている。その結果、土塁はほとんど撤去され、現在は部分的に小丘として残っている。

残された土塁はどのように残ったのか？

土塁の一部は、発展する都市の住宅地や町並みに取り込まれた。崩れないように石が積まれた土塁は、「築山」となり、家庭の庭の風景となった。現在残っている部分は、外側からは見えない屋敷の奥にあった。2009年、残りの土塁は歴史的建造物として保存するため、公園として保護されることになった。

土塁の復元

この土塁を復元するためには、まず、土塁の幅や勾配を把握するために周辺を調査することから始めた。この土塁は、数百年の間に高さが失われ、台形に近い形をしていた側面がほとんど失われて

いた。復元にあたっては、調査資料に加えて、江戸時代の土塁築造の目安を記した文献も参考にした。

松本市の土塁跡

松本市内には、最外堀の西側にあるこの土塁のほか、5つの土塁が残っている。

1. 松本城本丸庭園

城郭の堤防の中で最も保存状態のよい部分。

2. 最東端の残存の土塁

人工の丘として、現在市有地の造園地に残っている。

3. 北総堀の残存の土塁

松本市役所職員駐車場のすぐ南にある小高い丘。

4. 捨堀残存土塁（すてぼり）

宗教法人の敷地内に築山（人工）の丘として保存されている。

5. 捨堀残存土塁（すてぼり）

商家の庭の一部として保存されている。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 概要（館内看板）

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

History of the Former Kaichi School Building

The Kaichi School first held classes in 1872. The founding of the school reflected the Meiji Restoration of four years prior, which had brought a wave of social and political changes, including changes to the educational system. After roughly 250 years of near isolation from Western culture, Japan began to adopt Western concepts and technologies. The Kaichi School exemplified this Western influence in its mission and principles.

Classes at the Kaichi School were initially held on the former grounds of a Buddhist temple. However, the traditional temple architecture was seen as a mismatch to the Kaichi School's modern curriculum, and the decision was made to construct a new, Western-style school building.

Tateishi Seijū (1829–1894), a local master carpenter, was tasked with designing the new building. He made several trips to the bustling cities of Tokyo and Yokohama to study the latest examples of Western architecture. On the basis of these observations, he designed what would later be the Former Kaichi School Building, which was completed in 1876. At that time, there was little government funding for educational expenses, but the public strongly supported the creation of the new school, and nearly 70 percent of the construction expenses were covered by donations.

Pseudo–Western Style Architecture

The Former Kaichi School Building is famous for its pseudo–Western style architecture. Knowledge of Western construction techniques was limited during the early years of the Meiji era (1868–1912), and most builders and architects knew only the all-wooden, post-and-lintel designs that had dominated Japanese architecture for

centuries. To create the outward appearance of Western buildings, carpenters had to make creative use of the materials and methods they already knew.

Many examples of this creativity can be seen at the Former Kaichi School Building. The exterior stonework and the brickwork of the octagonal tower were made of wood, then stuccoed or painted to resemble stone and brick. Fittingly, the elaborate decorations on the front balcony combine Western and Japanese motifs: two cherubs hold a scroll bearing the school's name, and a dragon guards the front entrance below them.

A History of Education: From School to Museum

Although the Kaichi School's main purpose was to provide elementary education, its campus included many facilities, including a middle school, a girls' school, and a school for the blind. When reforms of the educational system began in the late nineteenth century, the average school attendance rate was only 30 percent nationwide. However, the attendance rate at the Kaichi School exceeded 60 percent, reflecting both the quality of the instruction and the degree to which education was valued by the local community.

Over the next 84 years, Metoba River flooded repeatedly, damaging the Former Kaichi School Building. Following further damage from a typhoon in 1959, the historic school building was designated an Important Cultural Property in 1961. This designation prompted the decision to relocate and restore the building for posterity. The school was closed in 1963, and the building was reopened at its current location in 1964 as a museum dedicated to the history of modern education in Japan. In 2019, the Former Kaichi School Building became the first modern-era educational building to be designated a National Treasure. Along with Matsumoto Castle, it is now one of two National Treasures in Matsumoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

開智学校校舎の成り立ち

開智学校の最初の授業は、1872年にかつての仏教寺院の境内で行われた。1868年の明治維新は、社会的、政治的な変化をもたらし、教育制度も変化した。約250年間、西洋文化からほぼ隔離されていた日本は、様々な西洋の概念や技術を取り入れるようになった。やがて、伝統的な寺院建築は、開智学校の新しい近代的なカリキュラムにそぐわないと感じられるようになった。そこで、女鳥羽川のほとりに洋風建築の校舎を建てようということになった。

地元の棟梁・立石清重（1829-1894）は、東京や横浜に何度も足を運び、最新の輸入洋風建築を研究した。1876年に完成した旧開智学校校舎は、その見聞をもとに設計されたものである。当時、政府の教育予算はなかったが、新校舎建設は国民の強い支持を受け、建設費の7割近くを寄付でまかなうことができた。

擬洋風建築

旧開智学校校舎は、擬洋風と呼ばれる独特の建築様式で知られている。明治時代（1868-1912）初期は、西洋の建築技術に関する知識はまだ乏しかった。そのため、伝統的な木工技術を身につけた大工たちが、その技術を駆使して西洋建築の外観を再現したのである。旧開智学校校舎では、こうした技術の例を数多く見ることができる。八角塔の外壁の石組みやレンガは、実は木材を漆喰や塗装で石やレンガに似せて作られたものである。また、正面バルコニーには、校名が入った巻物を持った2匹の天使と、その下で正面玄関を守る龍が描かれ、西洋と日本のモチーフが融合した精巧な装飾が施されている。

擬洋風建築

開智学校は、初等教育を主な目的としながらも、中学校、女学校、盲学校など、さまざまな施設を併設していた。19世紀末に始まった学制改革では、全国平均の就学率は30%に過ぎなかった。しかし、開智学校の出席率は60%を超えており、教育の質の高さと地域社会の教育に対する価値観が反映されていた。

その後84年間、旧開智学校は女鳥羽川の氾濫で被害を受け続けた。1960年の台風による被害もあり、移転と修復が決定され、翌年には重要文化財に指定された。1963年に廃校となり、1964年に現在の場所で日本の近代教育史を紹介する博物館として再開された。2019年、旧開智学校校舎は教育建築物としては初めて国宝に指定された。現在、松本では松本城と合わせて2つの国宝のうちの1つとなっている。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 概要 (webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Former Kaichi School Building, a National Treasure

The Former Kaichi School Building was one of the first public elementary schools in Japan. Built in 1876, the school's design and architectural features exemplify the pseudo-Western style (*giyōfū*) that was popular in the 1870s. In 2019, the Former Kaichi School Building was the first modern-era school building to be designated a National Treasure.

The Origins of the Kaichi School

The Meiji Restoration in 1868 brought a wave of social and political changes that impacted every aspect of daily life, including education. After roughly 250 years of self-imposed isolation, the Japanese government abandoned its closed-borders policy and introduced a wide range of institutions and technologies from the West.

The Chikuma Prefectural School (precursor to the Kaichi School) first held classes in 1872. This first building was located on the grounds of a former Buddhist temple on the bank of the Metoba River. However, when national educational reform began and the prefectural school adopted a modern curriculum, the temple architecture seemed out of place in the culture of the time.

Tateishi Seijū (1829–1894), a Matsumoto-born master carpenter, was tasked with designing a new, Western-style school building. He made several trips to the relatively international cities of Tokyo and Yokohama to study the latest examples of Western architecture in Japan. Although Western-style buildings had begun to appear in these major cities, very little was known about Western architecture.

The *giyōfū* architectural style is a product of these late-nineteenth-century conditions: the style was created when carpenters like Tateishi, who had been trained in traditional woodworking techniques, imitated the designs of Western buildings. The resulting structures have a distinctive mix of Japanese and Western elements.

When the Former Kaichi School Building was constructed, its architecture was considered the cutting edge of design. Emperor Meiji (1852–1912) showed particular interest in the school when he visited Matsumoto in 1880, and photographs of the building were displayed at the world’s fairs in New Orleans (1884) and Chicago (1893).

From School to Museum

The Kaichi School opened to an enrollment of 1,051 students. Matsumoto’s local government ardently supported primary education, and this enthusiasm seems to have been shared by its residents. On average, only about one in every three Japanese children attended school in the 1870s, but at the Kaichi School, this ratio was close to two of every three.

Reading, writing, and arithmetic had been core skills for students even during the Edo period (1603–1867), when education mainly consisted of studying classical texts from China. The new, Meiji-era curriculum naturally included these subjects, but it emphasized the study of Western science and technology. The Kaichi School was also the only school in the prefecture that taught English Language and Culture (*eigaku*) as one of its core subjects.

The Kaichi School operated as an elementary school until 1963. Over those 84 years, the Metoba River flooded several times, damaging the school buildings. The main building was designated an Important Cultural Property in 1961, and this prompted the decision to relocate and restore it three years later. The Former Kaichi School Building is now a museum dedicated to the history of education in Japan. Its exhibits include textbooks and classroom equipment from the nineteenth century to the present.

国宝 旧開智学校校舎

旧開智学校校舎は、日本で最初の公立小学校の一つであった。1876年に建てられ、校舎のデザインや建築の特徴は、1870年代に流行した擬洋風の代表的なものだ。2019年、旧開智学校校舎は教育建築物としては初めて国宝に指定された。

開智学校の起源

1868年の明治維新は、社会的・政治的な変化の波をもたらし、教育制度を含む日常生活のあらゆる面に影響を与えた。約250年にわたる鎖国を解き、西洋からさまざまな概念や技術を導入したのである。

1872年、開智学校の前身である筑摩県学（後の開智学校）が初めて授業を行った。この最初の校舎は、女鳥羽川のほとりの旧仏閣の境内にあった。しかし、国の教育改革が始まり、開智学校も近代的なカリキュラムを採用するようになると、寺院建築は古めかしく感じられるようになった。

松本出身の大工、立石清重（1829-1894）は、新しい洋風校舎の設計を任された。彼は、東京や横浜などの大都市に何度も足を運び、日本にある最新の西洋建築を研究した。東京や横浜の大都市には洋館が建ち始めていたが、西洋建築のことはほとんど知られていなかった。19世紀末のこうした状況の中で、伝統的な木工技術を身につけた立石ら大工が、西洋の建築様式を模倣することで生まれたのが「擬洋風建築」である。その結果、和洋折衷の独特な建築物が生まれた。

旧開智学校校舎が建設された当時、その建築様式は最先端のデザインとして注目された。1880年に松本を訪れた明治天皇（1852-1912）の目に留まり、ニューオリンズ（1884年）、シカゴ（1893年）の万国博覧会では、この建物の写真が展示されたという。

学校から博物館へ

開智学校は、1,051名の生徒を集めて開校した。松本の行政が初等教育に熱心であったというが、それは住民も同じであったようである。1870年代の日本では、学校に通う子どもは3人に1人程度だったが、開智学校では3人に2人に近い割合で通っていた。

江戸時代（1603～1867）、学校では中国から伝わった古典を中心に教えていたが、明治時代の新しいカリキュラムでは、読み、書き、算数を基礎的な能力として重視した。また、開智学校は県内で唯一「英学」を主要科目のひとつに掲げていた。

旧開智学校は、1963年まで小学校として使用された。その84年の間に、女鳥羽川の氾濫で校舎は何度も被害を受けた。新しい校舎が必要と判断され、1961年には本館が重要文化財に指

定された。1964年、現在地に移築され、建設当時の姿に復元された。現在、旧開智学校は日本の教育史を紹介する博物館として、19世紀から現代までの教科書や教室用具を展示している。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 概要 (パンフ)

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Welcome to the Former Kaichi School Building

The Former Kaichi School Building is a characteristic example of the pseudo–Western style architecture that was popular during the 1870s. The building now serves as a museum, but it was originally one of the first public elementary schools in Japan. In 2019, the Former Kaichi School Building was the first modern-era school building to be designated a National Treasure.

Origins of the Kaichi School

Following the Meiji Restoration in 1868, Japan abandoned its closed-border policy after nearly 250 years of isolation. The government introduced concepts and technologies from the West as part of a modernization movement under the slogan “civilization and enlightenment” (*bunmei kaika*). This Western influence changed daily life considerably: a constitution was ratified, a public education system was established, and horse-drawn carriages, cameras, and Western clothing all became commonplace in the span of just a few years.

As part of these social reforms, the Chikuma Prefectural School was founded in 1872 and renamed the Kaichi School the following year. Classes were originally held on the former grounds of a Buddhist temple on the bank of the Metoba River. However, residents were eager to build a school building that would match the new, modern curriculum.

At that time, the national government had very little funding available for new educational infrastructure, and the funds for the new building had to be raised locally. Seventy percent of the costs were covered by donations, and the remaining 30 percent was raised through alternative means, such as dismantling defunct temple buildings and selling off the lumber.

Tateishi Seijū (1829–1894) and *Giyōfū* Architecture

Matsumoto-born master carpenter Tateishi Seijū was chosen to design the new Kaichi School building. He was known for both his skill as an artisan and his strong desire to learn more about Western architecture.

Before construction began, Tateishi made trips to Tokyo and Yokohama to study the latest Western-style buildings. The museum in the Former Kaichi School Building has collected more than 200 of Tateishi's notebooks, which he filled with sketches, blueprints, and commentary on what he saw during his travels.

The Kaichi School's pseudo-Western (*giyōfū*) architecture was considered the cutting edge of design in the 1870s. With the opening of the country, photographs and illustrations of buildings in the West had begun to enter Japan, but technical knowledge of their actual construction methods was still limited. Carpenters who had been trained only in traditional woodworking nonetheless imitated the appearance of these buildings using the techniques that were familiar to them.

The resulting architecture is a curious blend of Western and Japanese elements, and this idiosyncratic style can be seen at the Former Kaichi School Building. The façade was designed to resemble stone or brick but is actually wood and stucco. Similarly, the main entrance is decorated with an unusual combination of a dragon and two cherubs.

After completing the Former Kaichi School Building, Tateishi oversaw the construction of many other civic facilities in the area, such as the Former Matsumoto Courthouse, which once stood in the second bailey of Matsumoto Castle.

Education in the Meiji Era (1868–1912)

The educational system underwent various reforms during the late nineteenth century. Education during the Edo period (1603–1867) consisted mainly of reading, writing, and arithmetic. These basic skills were taught through the study of Confucian texts and other classical writing from China. The new Meiji-era system was instead modeled on educational programs in Western countries, and it emphasized the study of technology and the sciences alongside literacy and math. The Kaichi School was the only school in the prefecture to also include “English language and culture” (*eigaku*) as one of its core subjects.

The Kaichi School opened to an enrollment of 1,051 students. Although the school enrollment ratio in the 1870s was only around 30 percent of eligible children nationwide, enrollment at the Kaichi School was closer to 60 percent. The prefectural

governor (*gonrei*) at the time, Nagayama Moriteru (1826–1902), was an ardent supporter of education, and it seems his enthusiasm was shared by the residents of Matsumoto. The Kaichi School soon had to establish branch locations to accommodate the growing number of students. However, the students at all locations were part of the same “Kaichi School,” with the same curriculum, school rules, and motto. The motto for the boys’ division was “Devotion, Equity, Fortitude” (*ai sei gō*).

From School to Museum

The Kaichi School continued to operate as an elementary school until 1963. However, repeated flooding of the Metoba River had damaged the building, so it was decided that a new one should be constructed. The old building was designated an Important Cultural Property in 1961 and was moved to its current site in 1964. The Former Kaichi School Building now serves as a museum dedicated to the modern history of education in Japan and includes displays of textbooks and classroom equipment.

Timeline

1872	The Chikuma Prefectural School opens on the grounds of the former Zenkyūin Temple. Unlike earlier domain schools or private academies, all children are allowed to attend, regardless of social status.
1873	The Chikuma Prefectural School is renamed the Kaichi School.
1876	The new, Western-style school building designed by local master carpenter Tateishi Seijū (1829–1894) is completed.
1880	Emperor Meiji (1852–1912) visits the Kaichi School. A classroom on the second floor of the main building is converted to a sitting room for the emperor.
1890	The class structure and teaching curricula at Kaichi are revised to address education gaps by placing similarly skilled students together and forming special classes for students with disabilities.
1891	A library is established at the Kaichi School. Its collection is later used as the basis for the Matsumoto City Central Library.
1896	The Kaichi School buildings are heavily damaged by flooding of the Metoba River. Many of its pseudo-Western design elements are removed.
1906	A small museum is built on the school grounds and opens on September 21 as the “Russo–Japanese War Memorial Museum” (<i>Meiji sanjū-nana-hachi-nen sen’eki kinenkan</i>). This museum was the precursor to the modern Matsumoto City Museum.
1921	The Kaichi School publishes the first issue of <i>Little Flowers</i> , a literary magazine of student work. Publication of the magazine continues until 1935.
1961	The Former Kaichi School Building is designated an Important Cultural Property.
1964	Relocation of the Former Kaichi School Building is completed, and the original pseudo-Western design elements are restored.
2019	The Former Kaichi School Building is designated a National Treasure. It

	is the first educational building to receive this designation and the second National Treasure in Matsumoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧開智学校校舎へようこそ

旧開智学校校舎は、1870年代に流行した擬洋風建築で知られている。現在は博物館として公開されているが、もともとは日本で最初の公立小学校の一つであった。2019年、旧開智学校校舎は、教育建築物としては初めて国宝に指定された。

開智学校の成り立ち

1868年の明治維新を経て、日本は約250年続いた鎖国政策を放棄した。「文明開化」をスローガンとする近代化運動の一環として、西洋の概念や技術を導入したのである。憲法が制定され、公教育制度が整い、馬車やカメラ、洋装が普及するなど、日常生活が大きく変化した。

こうした社会変革の中で、開智学校は1872年に「筑摩県学」として創立され、翌年には「開智学校」と改称された。当初は女鳥羽川のほとりに建てられた旧仏閣の境内で授業が行われていた。しかし、住民たちは、新しい近代的なカリキュラムにふさわしい学校の建設を切望していた。

当時、学校建設費は国の予算には含まれていなかったため、新校舎の資金は地元で調達しなければならなかった。7割は住民の寄付、残りの3割は近隣の寺院の材木を売却して調達した。

立石清重（1829-1894）と擬洋風建築

開智学校新校舎の設計は、松本市出身の大工・立石清重に依頼された。立石は、職人としての腕はもちろんのこと、西洋建築を学ぶことにも熱心であった。

立石は着工前から東京や横浜に出向き、賑やかなこれらの街に出現した最新の洋風建築を研究していた。旧開智学校校舎内の博物館には、立石が旅先で見たスケッチや設計図、解説を書き込んだ200冊以上のノートが保存されている。

開智学校の擬洋風建築は、1870年代当時、デザインの最先端とされていた。開国により、西洋の建物の写真や図版が日本に入ってくるようになったが、実際の建築方法についての技術的な知識はまだ乏しかった。そこで、伝統的な木工技術しか身に付けていない大工たちは、それらの建築物の外観を模倣することにした。

その結果生まれたのが、この旧開智学校校舎に見られるような、和洋折衷の不思議な擬洋風建築である。ファサードは石やレンガをイメージしてデザインされたが、実際は木と漆喰でできている。また、正面玄関には龍と2匹の仙女という珍しい組み合わせの装飾が施されている。

旧開智学校校舎の完成後、立石は松本城の二の丸にあった旧松本裁判所など、多くの市民施設の建設に携わった。

明治時代（1868-1912）の教育

19世紀後半になると、教育制度はさまざまな改革が行われた。江戸時代（1603-1867）の教育は、儒教など中国の古典を学ぶことが中心だったが、明治時代の新制度は、欧米の教育制度を参考に、読み・書き・算術を基礎的な能力として重視するようになった。特に開智学校は、県下唯一の「英学」を主要科目に据えた先進的な学校であった。

開智学校は、1,051名の生徒を集めて開校した。1870年代の全国就学率は30%程度であったが、開智学校は60%に迫る勢いであった。県副知事の永山盛輝（1826-1902）は教育熱心な人物で、その熱意は松本市民も同じだったようである。開智学校は、生徒数の増加に伴い、やがて分校を設立することになる。しかし、どの教室も同じ「開智学校」であり、カリキュラムも校則も校訓も同じであった。男子部の校訓は「愛正剛」であった。

学校から博物館へ

開智学校は、1963年まで小学校として運営された。しかし、度重なる女鳥羽川の氾濫で校舎が傷み、新築が決定された。1961年に重要文化財に指定され、1964年に現在の場所に移設された。現在、旧開智学校校舎は、日本の教育の近代史を紹介する博物館として、教科書や教室の備品などを展示している。

年表

1872	旧全久院跡に筑摩県学が開校。それまでの藩校や私塾とは異なり、身分に関係なくすべての子どもが通うことができるようになる。
1873	筑摩県学を開智学校と改称。
1876	地元出身の棟梁・立石清重（1829-1894）の設計による洋風校舎完成。
1880	明治天皇、開智学校へ行幸。本館2階の教室を天皇の座敷に改める。
1890	明治天皇、教育勅語に署名。この文書により、その後の教育政策の基礎が確立される。
1891	開智学校に図書室が設置される。この蔵書は、後に松本市立中央図書館の設立に活用される。
1896	開智学校、女鳥羽川の氾濫で校舎が大きな被害を受ける。擬洋風建築の多くが取り払われ、より簡素な建築に改められる。
1912	開智学校、盲人学級を開始。これが松本盲学校設立の礎となる。
1921	開智学校、文芸誌『小さい花』を創刊。1935年まで刊行される。
1961	旧開智学校校舎が重要文化財に指定される。
1964	旧開智学校校舎の移築が完了し、初期の擬洋風建築が復元される。
2019	旧開智学校校舎が国宝に指定される。教育施設では初、松本市では2件目の国宝指定。

003-064

Key Point: Glass

松本市

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / ガラス

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Key Point: Glass

Before the late nineteenth century, glass was an expensive material that was rarely used in construction. Despite this, the main building and the classroom wing of the Former Kaichi School Building have roughly 2,600 pieces of glass, including both clear panes for the windows and decorative, colored fragments of stained glass. As a result, the school was given the nickname “the glass school” (*giyaman gakkō*).

Some of the windows in the octagonal tower and the lecture hall on the second floor were made with colored glass. The red, blue, green, and yellow pieces are thought to have been imported from Europe, as Japan lacked the technology to produce them domestically.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

みどころ：ガラス

19世紀後半以前、ガラスは高価な材料であり、建築に使われることはほとんど無かった。しかし、旧開智学校本館と教室棟の窓ガラスには、透明なガラスと装飾用の色ガラスを合わせて約2,600枚が使用された。そのため、「ギヤマン学校（ガラスの学校）」と呼ばれるようになった。

八角塔や2階の講堂の窓の一部には、色ガラスが使われていた。赤、青、緑、黄の4色で、当時はまだガラスの製造技術がなかったため、フランスから輸入されたものと思われる。

003-065

Key Point: Round Pillar

松本市

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 丸太柱
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Key Point: Round Pillar

The round wooden pillar of the central spiral staircase was originally part of Zenkyūin Temple, the Buddhist temple that occupied the grounds prior to the construction of the Kaichi School's pseudo-Western style building. Spiral staircases are quite rare in traditional Japanese architecture, and the school's builders were unfamiliar with them. As a result, the width of each step is so narrow that the teachers and other adults could only use the outermost edge of the staircase, which has been worn down from decades of use.

Zenkyūin was the family temple of the Toda family, who had governed Matsumoto since 1726. Following the Meiji Restoration in 1868, the government issued several edicts calling for the separation of Shinto and Buddhist institutions, which had been merged for centuries. In some regions, this sentiment was taken to violent extremes: temple lands were confiscated, bells and statues were melted down, and monks were forced to find other professions. Toda Mitsuhsa (1828–1892), the last lord of Matsumoto Castle, abolished Zenkyūin himself and had the temple grounds repurposed to host the elementary school.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

みどころ：丸太柱

螺旋階段の丸太柱は、開智学校洋館が建設される以前、授業が行われていた近くの仏教寺院「全久院」にあったものである。螺旋階段は伝統的な建築物にはなく、開智学校の建築家も馴染みがなかった。そのため、一段一段の幅が狭く、先生方が使えるのは階段の一番外側だけで、しかも何十年も使って磨り減っている。

全久院は、1726年から松本を治めていた戸田家の菩提寺であった。1868年の明治維新後、仏教を外来物とみなし、全国的に仏教を撲滅しようとする動きが起こった。寺の土地は没収され、鐘や仏像は溶かされ、僧侶は他の職業に就くことを余儀なくされた。松本城最後の城主となった戸田光則（1828-1892）は全久院を廃寺とし、その境内を小学校に転用した。

003-066

Key Point: Carved Wooden Doors

松本市

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 棧唐戸

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Key Point: Carved Wooden Doors

The paneled wooden doors of the Former Kaichi School Building were taken from nearby Jōrinji Temple. The elaborate carvings of soaring, dragon-like beasts and crashing waves on the upper panels of eight of these doors are thought to be the work of a carver named Harada Sōkei (1835–1907). Similar motifs can be found in the decorative elements of the main entrance porch.

In their original locations at the temple, the doors were fixed to socketed pillars that allowed the doors to swing open and closed. At the Kaichi School, the pillars and sockets were replaced with imported metal hinges and doorknobs to fit the modern, Western style.

A second, less obvious change was made to the temple doors to “Westernize” them: because staining was not common in Japan, the doors were instead given a protective coat of paint, which covered the natural wood grain that was characteristic of Western design. To compensate for this, the wood grain was then meticulously reproduced by hand-painting each line onto the surface of the already-painted doors. This time-intensive process illustrates the skill of the craftsmen who built the school.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

みどころ：木彫りの棧唐戸

旧開智学校校舎の棧唐戸は、もともと浄林寺から移築されたものである。8枚の扉の上部には、原田蒼溪（1835-1907）という彫刻家が手がけた龍が舞い上がり、波が打ち寄せるという精巧

な彫り物が施されている。同様のモチーフは、正面玄関ポーチの装飾にも見られる。

当初、これらの戸は柱に固定され、その上に戸を開閉するためのソケットが取り付けられていた。開智学校では、この柱とソケットを、輸入された金属製の蝶番とドアノブに交換し、モダンな洋風スタイルにしたのである。

もうひとつ、あまり目立たないが、戸に施された変化も " 洋風 " を強調するものだった。それは、塗装で隠れてしまう木目を丁寧に再現することだった。これは、木製の戸の下地に塗料を塗り、その上に木目調の模様を丹念に描いたものである。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 紙天井

【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Paper Ceiling

The ceilings of the Former Kaichi School Building were created using layers of *washi* paper. In the minds of the builders, the perfect Western-style room had white walls and a white ceiling, and they attempted to realize this ideal using the materials they were familiar with. Only the wall was left unplastered, possibly because the plaster did not reliably adhere to the ceiling, and paper was used instead. This technique resembled the way paper is layered over the wooden lattices of the shoji panels that separate rooms in traditional houses.

By the time the school was relocated and restored in 1964, many parts of the ceiling had been replaced with plaster or fiberboard. As part of the restoration efforts, the ceilings were redone in the original style.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

紙天井

旧開智学校校舎の天井は、和紙を何層にも重ねてつくられている。大工たちが思い描いた理想の洋室は、白い壁と白い天井であり、それを身近な建材で実現しようとした。壁には漆喰を使うことができたが、天井は漆喰ではうまく接着できないので、紙を使うことになった。この紙の使い方は、伝統的な家屋で部屋を仕切る障子の格子を紙で何重にも覆うのに似ている。

1964年の移築復元時には、天井の多くが漆喰や繊維板で覆われていた。そこで、天井を当時のままに作り直した。

天井は5層の紙でできている。最初の4層は、2014年にユネスコの無形文化遺産に指定された伝

統的な製法で作られた薄紙だ。最後の5層目は、耐久性を高めるために厚い紙を使用している。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 正面玄関
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Main Entryway

The front entrance to the Former Kaichi School Building was reserved for esteemed guests. Students and teachers entered through the door on the opposite end of the hallway that faces the inner schoolyard. In contrast to the white, unadorned walls of the hallway, the ceiling's central light fixture is decorated with carvings in a Western motif. Sketches of the design for this light fixture survive in the notebooks of Tateishi Seijū (1829–1894), the carpenter who designed the Former Kaichi School Building.

Emperor Meiji (1852–1912) and Modern Education

Emperor Meiji visited the Kaichi School during a tour of the country in 1880. While in Matsumoto, the emperor visited several sites that embodied Japan's progress toward modernization, including a telegraph station and a courthouse that had been built in the vicinity of Matsumoto Castle.

The Kaichi School may seem like an unusual place for an imperial visit, but the school's innovative educational practices caught the emperor's attention. In the 1870s, the Kaichi School was the only school in the prefecture to include English Language and Culture (*eigaku*) as one of its core subjects, and the Kaichi School continued to experiment with new educational programs long after the emperor's visit. In 1890, the school implemented a system that placed students by their individual abilities, and the students who needed the most help were assigned the best teachers. This system lasted only four years, as it was found to cause bullying, but the school continued to seek out ways to improve student learning.

New facilities were added to prepare for the emperor's visit. A classroom on the second floor was converted into a sitting room by closing it off with partitions and elevating the floor to reflect the high status of its occupant. At the time, formal reception halls commonly had different levels where guests would be seated according to their social positions. Furnishings were installed for the emperor's comfort, including chairs and a gold folding screen.

The room's floor is now covered with a woven-bamboo mat similar to the one in the second-floor lecture hall. Matsumoto gained a reputation for this type of bamboo weaving during the Edo period (1603–1867), but today there are few artisans capable of producing it.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

正面玄関

旧開智学校校舎の正面玄関は、来賓の方だけが使用できるようになっていた。生徒や教師は、校庭に面した廊下の反対側にある扉から入っていた。廊下の白い壁とは対照的に、天井の中央の照明器具には西洋風の彫刻が施されている。この照明器具のデザインは、旧開智学校校舎を設計した大工の立石清重（1829-1894）の手帳にスケッチとして残されている。

明治天皇（1852-1912）と近代教育

明治天皇は1880年、全国行幸の折に開智学校を訪問された。松本では、松本城の二の丸に建てられた電信局や裁判所など、日本の近代化を象徴する施設を視察された。

開智学校は、一見すると異例の訪問先だが、その革新的な教育実践が天皇の目にとまった。1870年代、開智学校は県内で唯一、「英学」を主要科目のひとつと位置づけていた。開智学校は、天皇の行幸後も新しい教育プログラムを試行し続けた。1890年には、生徒を個人の能力に応じてレベル分けし、最も助けが必要な生徒に最高の教師をつけるという制度を実施した。この制度は4年後に生徒間のいじめが原因で廃止されたが、学校は生徒の学習を向上させるための新しい方法を模索し続けた。

開智学校は、生徒のための教室は十分にあったが、明治天皇を迎えるにふさわしい施設として、新たな設備が必要であった。2階の教室を間仕切りで閉め、床を高くして天皇の座敷とし、身分の高い客を迎えることができるようにした。このように、当時の応接室は、身分に応じて客席の高さを変えることが多かった。

また、椅子や金屏風などの調度品も、天皇が快適に過ごせるようにと設置された。1891年、同校

は天皇の写真を寄贈され、現在、この座敷に飾られている。床は2階の講堂と同じ竹で編んだ筵を敷いている。松本は江戸時代（1603-1867）にこの竹編みで有名になったが、現在ではその職人も少なくなっている。

003-069

Key Point: Octagonal Tower

松本市

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 / 八角塔屋
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Key Point: Octagonal Tower

The staircase beyond this door leads up to the octagonal tower on the roof. The upper portion of each window in the tower is fitted with colored glass, much like the windows in the center of the lecture hall. The bell that hangs in the tower was rung to mark the start and end of each class. The tower's ceiling was originally made from paper, like the ceilings in other parts of the building, but it was resurfaced with wooden planks soon after.

This type of rooftop tower was a common feature of Western-style buildings constructed early in the Meiji era (1868–1912). At that time, towers were considered a defining feature of Western architecture. Similar towers can be seen on the buildings of the former Yamabe School and the former Nakagomi School, both in Nagano Prefecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

みどころ：八角塔屋

この階段は、旧開智学校校舎の屋上にある八角形の塔に通じている。塔の窓の上部には、講堂の中央にある窓と同じように、色ガラスがはめ込まれている。この塔に吊るされた鐘は、授業の開始と終了を知らせるために鳴らされたものである。塔の天井は、当初は他の部分の天井と同じように紙で作られていたが、1964年の移転に伴い、木製の板張りに変更された。

このような屋上塔屋は、明治初期に建てられた洋館によく見られたものである。当時、建築家は塔を西洋建築の象徴とみなしていた。長野県にある旧山辺学校と旧中込学校の建物にも、同じような塔が見られる。

【タイトル】 国宝旧開智学校校舎 /
校舎外観（擬洋風建築の紹介）
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Pseudo-Western Architecture at the Former Kaichi School Building

The Former Kaichi School Building is one of the most famous examples of pseudo-Western (*giyōfū*) architecture, a style that was popular in the 1870s. The asymmetrical, two-story structure is built mainly of wood, but aspects of its design were intended to replicate the appearance of stone or brick. This fusion of styles was pioneered by Japanese carpenters, who attempted to imitate the designs of Western buildings using traditional Japanese construction methods. The resulting buildings have a distinctive combination of Eastern and Western design elements.

Many *giyōfū* elements can be seen in the building's façade. Sections of stonework along the lower portion of the first floor and at the corners of the building (called “quoining”) are oddly flat. In actuality, this “stone” and “brick” was fabricated from wood, stucco, and paint. Similar techniques were used to make the faux brickwork on the frontispiece and octagonal tower. This representation of one material with another is a defining trait of pseudo-Western architecture.

The Balconied Frontispiece

The balconied frontispiece at the main entrance is one of the most prominent features of the Former Kaichi School Building. It spans both stories of the structure, and its motifs exemplify the mixing of Japanese and Western elements that is common in pseudo-Western architecture. These are some of the uniquely *giyōfū* traits found in the frontispiece:

The lower level is decorated with carvings of waves and a dragon. It is thought that the dragon was taken from Jōrinji, a nearby Buddhist temple. This motif of a dragon surrounded by waves is distinctly Eastern in origin. It is likely an homage to the Chinese “Legend of the Dragon Gate,” in which a carp swims up a waterfall and is transformed into a dragon. The ferociousness of the carved dragon on the frontispiece presents a stark contrast to the delicate, curving lines of the metal light fixtures that are placed on either side of the entrance.

The balcony’s upper level is decorated with a more markedly Western motif: a pair of cheerful cherubs who hold a banner bearing the name of the school. The design was likely based on the logo of the *Tokyo Daily News* (*Tōkyō Nichinichi Shimbun*), a major newspaper that had a wide readership in Matsumoto. The cherubs are situated within the arch of a curved gable (*karahafu*). This type of gable would more commonly be seen at temples or shrines, and its presence here highlights the mix-and-match nature of *giyōfū* architecture.

Although there appears to be a door leading out to the balcony, this aperture is one of the windows of the lecture hall. The half-round transom window is made from pieces of imported colored glass, which was a rare building material in the 1870s. The elaborate pattern resembling a wrought-iron fence that surrounds the window is a characteristic trademark of the building’s designer, local master carpenter Tateishi Seijū (1829–1894). The “iron” was meticulously created using plaster.

Perhaps surprisingly, the frontispiece looked different for much of the building’s history. Most of the school building’s iconic *giyōfū* design elements were removed in the late 1890s, after the building was heavily damaged by flooding of the nearby Metoba River. The dragon, cherubs, curved gable, and intricate stucco designs were all replaced with a modest, triangular dormer gable on the roof. When the Former Kaichi School Building was relocated in 1964, the frontispiece was restored to its original appearance.

The Octagonal Tower

An octagonal tower is centered on the roof above the frontispiece. In the late nineteenth century, carpenters thought of rooftop towers as one of the defining features

of a proper Western-style building. At the time of its original construction in 1876, the Former Kaichi School Building's tower, with its weathervane and lightning rod, likely made the school one of the tallest buildings in the area alongside Matsumoto Castle. The school stood out against the surrounding landscape of lower-profile structures as a landmark of modernity and progress.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

旧開智学校校舎の擬洋風建築

旧開智学校校舎は、1870年代に流行した擬洋風建築の代表的な例である。左右非対称の2階建てで、木造建築でありながら、石造やレンガ造りを意識したデザインになっている。これは、西洋の建築物の美しさを木工技術で模倣しようとした日本の大工が編み出した融合様式である。その結果、東洋と西洋の要素が融合した独特の建築物が生まれた。

旧開智学校校舎のファサードには、この擬洋風の要素が多く見受けられる。1階床下や建物の角にある石積みの部分（「コイニング」と呼ばれる）は、妙に平らだ。実は、この「石」や「レンガ」は、木と石膏と塗料で作られたもの。また、正面壁や八角屋根の塔にも同様の手法でレンガ造りのフェイクが施されている。このように、ある素材を別の素材で表現することは、擬洋風建築の特徴である。

バルコニー付きのフロント部分

旧開智学校校舎を代表する建築物のひとつが、正面玄関に設けられたバルコニー付きのフロント部分だ。そのモチーフは、擬洋風建築によく見られる和洋折衷のもので、2階建ての建物の両端に設置されている。以下では、このフロント部分に見られる擬洋風の特徴を視覚的に説明する。

下層部には波と龍の彫刻が施されている。龍の彫刻は、近くの仏教寺院である浄林寺から持ってきたものと思われる。龍の周囲を波が取り囲むというモチーフは、明らかに東洋的なものである。鯉が滝を泳いで昇り、龍になるという中国の龍門伝説を想起させる。このような図像は、木製のパネル扉の内側に施された彫刻にも見ることができる。この龍の彫刻の猛々しさは、エントランスの両脇に配置された金属製の照明器具の繊細な曲線のラインと対照的なものとなっている。

バルコニー上段には、校名を記した旗を手にした元気なケルビムが描かれ、西洋的なモチーフがより鮮明に表現されている。このデザインは、松本で多くの読者を得ていた大手新聞社「東京日日新聞」のロゴマークを参考にしたものと思われる。ケルビムは唐破風のアーチの中に配置されている。このような唐破風は寺社仏閣に多く見られるもので、自由な組み合わせが可能な擬洋風建築の特徴をよく表している。

バルコニーに出るための扉があるように見えるが、実はこの開口部も講堂の窓である。この半円の欄間窓は、1870年代には珍しい建築材料であった輸入色ガラスの破片で作られている。窓を囲む鉄柵のような精巧な模様は、この建物を設計した地元の名工・立石清重（1829-1894）のトレードマークである。この「鉄」は、漆喰で丹念につくられたものだ。

意外なことに、この校舎の歴史において、このフロント部分にはさまざまな表情があった。1890年代後半、女鳥羽川の氾濫で大きな被害を受けたため、校舎の象徴であった擬洋風のデザインはほとんど取り払われた。龍、ケルビム、切妻、漆喰の複雑なデザインはすべて、屋根の上にある控えめな三角形の屋根破風に取って代わられた。1964年に旧開智学校校舎が移築された際、このフロント部分は元の姿に戻された。

八角形の塔

正面上部の屋根には、八角形の塔がある。19世紀後半、大工たちは屋上塔を洋風建築の象徴のひとつと考えた。1876年の竣工当時、風見鶏と避雷針を備えた旧開智学校は、松本城と並んでこの地域で最も高い建物の一つであったと思われる。周囲の低層建築の中で、近代化の象徴としてひととき異彩を放っていた。

003-071

Northwest Tower (*Inui Kotenshu*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 乾小天守 / 乾小天守と丸太柱
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Northwest Tower (*Inui Kotenshu*)

The Northwest Tower is a wooden structure with three external stories and four internal floors that stands approximately 13.9 meters above the stone-wall foundation. Although the tower stands to the north of the Great Keep, its Japanese name is written with a character that means “northwest” (乾). The character for “north” (北) carries the association of “defeat” or “retreat,” so the keep may have been deliberately named to avoid these negative connotations.

The Northwest Tower connects to the Great Keep by the multistoried Roofed Passage. These three structures were completed in 1594, when Matsumoto was governed by the Ishikawa family. The castle layout creates a strategic advantage: Matsumoto Castle is entered via the first floor of the Roofed Passage, between the Great Keep and Northwest Tower. This meant that enemy forces attempting to breach the castle doors would be exposed to musket fire on three sides.

Although built at the same time as the Great Keep, the Northwest Tower has some features that set it apart. In contrast to the square pillars of the Great Keep, many of the pillars in the Northwest Tower are round. The reason for this difference is unknown, but there are several theories: it is possible the pillars were reused from nearby temples; the builders may have taken less time to shape them in order to assemble the keep more quickly; or the team of carpenters who built the Northwest Tower may simply have been different from those who built the Great Keep. The pillars of the Northwest Tower have been roughly finished with an adze, creating a distinctive pattern that resembles fish scales.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

乾小天守

乾小天守は、石垣の基礎から約13.9mの高さに建つ外3階、内4階の木造建築である。「乾」とは「北西」を意味するが、この建物は、大天守の真北に位置する。「北」という字には「負ける」「退く」という意味もあり、それを避けるためにあえて誤記したのかもしれない。

乾小天守は大天守と多層式の渡櫓でつながっている。これら3つの建築物は、松本が石川家によって統治されていた1594年に完成した。松本城の入口は、大天守と乾小天守の間にある渡櫓の1階部分にあり、この配置は戦略的に有利である。大天守と乾小天守の間に位置するため、侵入しようとする敵は三方から火縄銃で攻撃されることになる。

大天守と同時期に建てられた乾小天守だが、いくつかの特徴的な点がある。大天守の柱が四角いのに対し、乾小天守の柱は丸いものが多いのだ。その理由は不明だが、近隣の寺院や家臣の荘園から柱を取り寄せたか、大天守閣を早く組み上げるために柱の形を整える作業を省略したか、あるいは大天守の大工とは別に乾小天守を築いたか、などの説があるようである。乾小天守の柱は、斧で荒々しく仕上げられ、魚の鱗のような独特の模様がある。

【タイトル】 国宝松本城 渡櫓2階 / 松本城の沿革
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The History and Preservation of Matsumoto Castle

Matsumoto Castle is one of the oldest castles in Japan, and its long history includes periods of prosperity and of decline. That history begins with the Ogasawara family, who built a fort on the site during the Warring States period (1467–1600).

The original castle structures (the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage) were constructed by the Ishikawa family in 1594. The Tokugawa shogunate (1603–1868) was established less than a decade later, marking the end of the widespread civil war that had characterized the sixteenth century. Matsumoto Castle became a center of local administration, and it was overseen by several different families in succession. Between 1633 and 1634, the Matsudaira family expanded the castle by adding the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower, creating a unique combination of peacetime and wartime architecture.

Following the Meiji Restoration in 1868, castles came to be seen as outdated relics of the country's feudal age. In an effort to modernize, many castles were torn down, moats were filled in, and the land was repurposed. Matsumoto Castle would have met a similar fate, but numerous individuals and organizations came to its aid.

By the end of World War II (1939–1945), many of Japan's remaining castles had been destroyed by air raids. Matsumoto Castle survived the war, but it was damaged during a large earthquake in 1945. Major repairs were undertaken from 1950 to 1955, after the castle's cultural importance was recognized by the Supreme Commander for the Allied Powers (SCAP). Matsumoto Castle was designated a National Treasure in 1952, and today it is one of only five castles to be protected under that status.

Castles Designated National Treasures:

Matsumoto Castle, Inuyama Castle, Hikone Castle, Himeji Castle, Matsue Castle

Castles Designated Important Cultural Properties:

Hirosaki Castle, Maruoka Castle, Bitchū Matsuyama Castle, Marugame Castle, Iyo Matsuyama Castle, Uwajima Castle, Kōchi Castle

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の歴史と保存について

松本城は、戦国時代（1467-1568）に小笠原氏が築城した日本最古の城の一つであり、長い歴史の中で繁栄と衰退の歴史を繰り返してきた。

1594年に石川家が築いた大天守、乾小天守、渡櫓が現在の城の原型である。1603年、徳川幕府が開かれると、松本城は16世紀の乱世に終止符を打ち、いくつかの家系が代々続いた地方行政の中心地となった。1633年、松平家は天守閣を増築し、辰巳附櫓と月見櫓を建てて、平時と戦時の建築様式を併せ持つ城となった。

1868年の明治維新後、城は戦国時代の遺物とみなされるようになった。近代化のため、多くの天守閣が取り壊され、堀が埋められ、土地は再利用された。松本城も同じような運命をたどるところであったが、多くの個人や団体の努力によって救われた。

第二次世界大戦（1939-1945）末期には、日本に残る多くの城が空襲で破壊された。松本城は戦災を免れたが、1945年の大地震で被害を受けた。その後、連合国軍最高司令官総司令部（SCAP）により文化的重要性が認められ、1950年から1955年にかけて大規模な修理が行われた。1952年、松本城は国宝に指定され、現在、国宝に指定されている5つの城のうちの1つとして保護されている。

国宝に指定されている城：

松本城、犬山城、彦根城、姫路城、松江城

重要文化財に指定されている城：

弘前城、丸岡城、備中松山城、丸亀城、松山城、宇和島城、高知城

003-073

Timeline of Matsumoto Domain

松本市

【タイトル】 国宝松本城 渡櫓2階 / 年表
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Timeline of Matsumoto Domain

This timeline describes some of the major events in Matsumoto domain that impacted the development of the castle and the daily lives of those who lived near it.

Matsumoto domain, which included what is now northwestern Nagano Prefecture, was controlled by a series of lords called “daimyos.” During the Edo period (1603–1867), Japan was divided into hundreds of such domains, and their daimyos lived in large castle complexes that served as the centers of local government.

Daimyos spent only about half their time in their domains. The ruling Tokugawa shogunate (1603–1868) required that all daimyos maintain separate residences near the shogun’s castle in Edo (now Tokyo). Each daimyo was required to make regular trips to Edo, where they might remain for as long as a year. Meanwhile, the daimyos’ wives and most of their children lived permanently in Edo, where they functioned as political hostages. This system was enacted to discourage individual daimyos from rebelling against the shogunate. Daimyos could not defy the shogun without putting their families in danger, and the costly trips they made to Edo drained them of money they might have used to raise armies and oppose the shogunate.

1594	大天守、乾小天守、渡櫓の3つからなる天守閣が、石川家の支配下で建てられる。	The three original structures of the castle (the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage) are built under the rule of the Ishikawa family.
1613	石川家が去り、代わりに小笠原家が入る。小笠原家は、徳川幕府と密接な関係を持つ松本大名の筆頭格である。	The Ishikawa family is replaced by the Ogasawara family. They are the first in a series of daimyos in Matsumoto who have close personal ties to the Tokugawa family.
1634	さらに、松平家により辰巳附櫓と月見櫓の2棟が増築される。	Two additional structures, the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower, are added to the tower complex by the Matsudaira family.

1686	北部の農民が、大名から課される高い年貢に抗議する。地方行政当局は、当初彼らの要求を受け入れるふりをした後、抗議のリーダーを捕らえ、はりつけにする。	Peasants in the north protest the high annual taxes levied on them by Matsumoto domain. Local administrators initially pretend to accept their demands, then capture and crucify the leaders of the protest.
1727	本丸御殿（城の本丸にある大名の住居兼管理所）が焼失する。大天守の屋根の下にある祭壇に祀られている二十六夜神が守ってくれたため、城には火が燃え移らなかったという。	The Honmaru Goten, the daimyo's residence and administrative center, burns down. The fire does not spread to the castle itself, and this is attributed to the protection of a deity named Nijūroku-yashin, who is worshipped at a shrine located just below the roof of the Great Keep.
1776	中町と呼ばれる城下町の一角で大火が発生。武家屋敷57棟を含む約1,200棟が焼失する。	A major fire breaks out in a section of the surrounding castle town called Nakamachi. Roughly 1,200 homes are destroyed, including 57 samurai residences.
1825	戸田家が100年目の節目を迎え、盛大に祝宴を開く。この年、松本市北部で米価の大幅な値上げに反対する数万人の農民の反乱が発生する。	The Toda family holds a large celebration to commemorate 100 years of uninterrupted rule. In the same year, another protest erupts in northern Matsumoto as tens of thousands of peasants rise up against a sharp increase in the price of rice.
1871	明治新政府により藩制が廃止され、松本藩は正式に松本県となる。1876年、周辺の地域と合併し、長野県となる。	The domain system is abolished by the new Meiji government, and Matsumoto domain officially becomes Matsumoto Prefecture. In 1876, it is merged with several surrounding prefectures to become Nagano Prefecture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本藩の年表

この年表は、松本城の発展や人々の暮らしに影響を与えた、松本藩の主な出来事を紹介したものである。

松本藩は、現在の長野県北西部を含む地域で、大名と呼ばれる領主によって支配されていた。江戸時代（1603～1867）、日本は何百もの藩に分割され、大名は大きな城郭に住み、地方行政の中心的役割を担っていた。

大名が領内で過ごす時間は、その半分程度であった。徳川幕府は、すべての大名に江戸（現在の東京）の将軍家の城近くの別邸に定期的に出向くことを義務づけていた。一方、大名の妻や子供たちは、政治的な人質として江戸に常住していた。この制度は、各大名が政治的、経済的に力をつけることを制限し、幕府に対する反乱を起ごりにくくするものであった。

003-074

Map of the Surrounding Town

松本市

【タイトル】 国宝松本城 渡櫓2階 / 松本城下絵図
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Map of the Surrounding Town

This map of Matsumoto Castle and its surrounding town was created in 1728 under the rule of the Toda family. In 1995, the map was designated an Important Cultural Property by the city of Matsumoto.

Since daimyos were frequently reassigned to different domains, maps were important tools of governance. An accurate map was useful for things like planning how to defend a castle, knowing where one's high-ranking retainers lived, settling land disputes, and identifying crucial resources such as rivers. Despite the relative simplicity of surveying techniques in the eighteenth century, this map aligns closely with modern maps.

The colored markings indicate critical infrastructure and the areas where different social classes were permitted to live. Major roads are marked yellow, moats are marked blue, and defensive embankments are colored dark green. The occasional small, bright-red squares are guard stations, and the white sections around the outskirts of the town are temples and shrines. The pale-red sections located in the third bailey and to the north of the castle are samurai residences. The area where commoners lived is represented by a light-green block that spans the southern and eastern sides of the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城下町の地図

この地図は、1728年に戸田家の支配下で作成された松本城とその周辺の町並みを描いたものだ。1995年、松本市の重要文化財に指定された。
大名は頻繁に転封されたので、地図は重要な統治手段であった。正確な地図は、攻め込まれたと

きの防御策を練るのに役立ち、上級家臣の居住地を記録し、土地争いを解決し、重要な資源の所在を把握するのに役立った。18世紀当時の測量技術は不安定であったが、戸田家が作成したこの地図は、現代の地図とほぼ同じである。

地図上の色分けは、重要なインフラと異なる社会階層が住むことを許された地域を示している。主要な道路は黄色、堀は青色、防備のための堤防は濃い緑色で表示されている。時折見える小さな明るい赤のマスは番所、町はずれの白い部分は寺社である。三の丸と城の北側にある薄紅色の部分は武家屋敷である。城の南側と東側に広がる薄緑色の区画は、民衆の住まいである。

【タイトル】 国宝松本城 渡櫓2階 / 歴代6家城主
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

The Six Ruling Families of Matsumoto Domain

Matsumoto domain was ruled by six families in succession, and each family left their mark on the castle and surrounding town. Some of the families were only briefly in power, but the duration of each family's rule did not dictate the extent of its impact.

During the Edo period (1603–1867), the Tokugawa shogunate (1603–1868) chose which daimyo governed each domain. These appointments could be granted or revoked at any time. Loyal daimyos were generally given more prosperous domains, or those located closer to the seat of power in Edo (now Tokyo). Conversely, daimyos who were perceived as threats to the shogunate were often reassigned to less-desirable domains or stripped of their positions entirely. Matsumoto was considered a desirable domain; the castle was in a key military location, and the daimyos who controlled it were typically related to the shogun by birth or marriage.

Ishikawa Family (1590–1613)

Ishikawa Kazumasa (d. 1592) was appointed lord of Matsumoto by Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), a great warlord and unifier of the country. One of Kazumasa's priorities as daimyo was the construction of a multistory keep, which could be used to monitor the surrounding territory. Kazumasa died during one of Hideyoshi's invasions of the Korean Peninsula, and the construction ultimately fell to his son Yasunaga (1554–1642). Under Yasunaga's leadership, the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage were completed in 1594.

Ogasawara Family (1613–1617)

Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the founder of the Tokugawa shogunate, removed the Ishikawa family and granted control of Matsumoto to Ogasawara Hidemasa (1569–

1615), who had married his granddaughter. Hidemasa and his successor, Ogasawara Tadazane (1596–1667), greatly improved the infrastructure of the castle town.

Toda Family (1617–1633)

When the Ogasawara family was moved to another domain, Toda Yasunaga (1562–1633) was appointed lord of Matsumoto. Yasunaga was married to a half-sister of Ieyasu, and his appointment demonstrates how daimyos who ingratiated themselves with the shogunate were often appointed to strategically important domains. During their appointment, the Toda family had each village in the domain choose a headman and alderman to oversee its affairs.

Matsudaira Family (1633–1638)

Although he was lord of Matsumoto for only a few years, Matsudaira Naomasa (1601–1666) played a significant role in creating Matsumoto Castle as it stands today. Naomasa expanded the castle by adding the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower. His decision to omit defensive features such as loopholes and *ishi otoshi* from these structures reflects the sense of peace and stability that pervaded during the rule of the Tokugawa shogunate (1603–1868). The expansion of existing castles was strictly prohibited at the time, but Naomasa, being a grandson of the shogun Tokugawa Ieyasu, likely received special permission.

Hotta Family (1638–1642)

The Matsudaira family was reappointed to a larger domain, and control of Matsumoto was given to Hotta Masamori (1609–1651). Political connections played a part in this appointment: Masamori's grandmother-in-law was Kasuga no Tsubone (1579–1643), who wielded significant political influence as the wet nurse of the third shogun, Tokugawa Iemitsu (1604–1651). Masamori never set foot in Matsumoto during his short reign, but he is believed to have ordered the construction of a rice storehouse in the Agetsuchi neighborhood, to the east of the castle.

Mizuno Family (1642–1725)

Mizuno Tadakiyo (1582–1647) and his descendants governed Matsumoto for 83 years, a markedly longer rule than those of the previous daimyos. In addition to conducting extensive land surveys, in 1724 the Mizuno family compiled the *Shinpu tōki*

(Compiled Chronicles of Matsumoto) a record of the domain's history, geography, and even yearly crop yields. Despite these contributions, the Mizuno family's appointment was swiftly ended after Mizuno Tadatsune (1701–1739) attacked another daimyo's son with a sword inside the grounds of Edo Castle.

Toda Family (1726–1869)

For a year after the Mizuno family was removed, the shogunate oversaw Matsumoto domain directly. Control was then returned to the Toda family, who had governed the domain roughly a century earlier. Toda Mitsuchika (1712–1732) and his younger brother Mitsuo (1716–1758), who succeeded him as daimyo, toured the entire domain in 1731 to win the hearts of the people. In 1793, the Toda also established a school called Sōkyōkan, which later became the renowned Kaichi School. Following the rapid political changes brought about by the Meiji Restoration in 1868, the last daimyo, Toda Mitsuhsa (1828–1892), relinquished control of the domain to the new government in 1869, and Matsumoto domain was formally abolished two years later.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本藩の6つの藩主家

松本藩は6つの家が代々支配し、城とその周辺に足跡を残してきた。中には短期間しか支配権を持たなかった家もあるが、支配期間の長短でその影響が決まるわけではない。

江戸時代（1603-1867）、徳川幕府が各領地を支配する大名を決めていた。この任命は自由に与えたり、取り消したりすることができた。忠実な大名には一般的に、より繁栄した領地や、江戸（現在の東京）の将軍の御殿に近い場所にある領地が与えられた。しかし、公の秩序を乱すような行為をした大名は、あまり好ましくない領地に移されたり、完全に領地を奪われたりすることもあった。松本は望ましい領地とされていた。松本城は軍事的に重要な位置にあり、その支配権を与えられた大名は、幕府と血縁関係にあることが多かった。

石川家（1590-1613）

石川数正（1593年没）は、徳川幕府成立以前に松本を支配していた豊臣秀吉（1537-1598）によって松本藩主に任ぜられた。数正は大名として、本丸に重層の天守閣を建てることを優先させた。この計画は、失敗に終わった秀吉による朝鮮攻めの最中に数正が亡くなった後、息子の石川康長（1554-1642）に託された。1594年、大天守、乾小天守、渡櫓の主要建築物が完成した。

小笠原家（1613-1617）

徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）は、家康の長男の娘に嫁いだ大名小笠原秀政（1569-1615）に松本の支配を委ねた。秀政の松本入国は、ある意味で里帰りであった。石川家が入国する以前から、小笠原家はこの地を支配していたのである。秀政とその後継者である小笠原忠真（1596-1667）は、交通網を大幅に整備し、各村から庄屋を選ぶ制度を導入した。

戸田家（1617-1633）

小笠原家の転封後、松本には戸田康長（1562-1633）が任命された。康長は家康の異母妹と結婚しており、幕府に忠誠を誓った大名が戦略的な領主に任命されたことを示す実例である。戸田は、徹底した検地を行い、作物の収穫を詳細に記録していた。

松平家（1633-1638）

松本城主としての在任期間は短かったが、松平直政（1601-1666）は、現在の松本城を築き上げる上で大きな役割を担った。直政は、辰巳館や月見櫓を増築し、城の規模を拡大した。彼の、狭間や石落などの防御的な要素を排除するという決断は、江戸時代の平和と安定を象徴するものであった。この時代、既存の城の拡張は厳しく禁じられていたが、直政は将軍・徳川家康の孫であるため、特別な許可を得ていたのであろう。

堀田家（1638-1642）

松本は、松平家の再大領化により堀田正盛（1609-1651）が支配することになった。この人事にもまた、婚姻政略が絡んでいる。正盛の義理の祖母は春日局（1579-1643）で、三代将軍徳川家光（1604-1651）の乳母として政治的に大きな影響力を持っていた。二の丸に米蔵を建てたのは正盛とされているが、正盛自身は松本に足を踏み入れたことはなかったと言われている。

堀田家（1642-1725）

水野忠清（1582-1647）とその子孫は、83年間にわたり松本を治めたが、これは歴代の大名に比べると明らかに長期間の統治であった。1724年には、新たな検地を行うとともに、藩の歴史と地理を記した『信府統記』を編纂した。しかし、水野忠恒（1701-1739）が江戸城内で他の大名の子息を刀で襲撃したことから、その支配は急速に終わりを告げた。

戸田家（1726-1869）

水野家が去り、幕府が松本藩を直轄していたが、戸田家が再任され、大名戸田光慈（1712-1732）がその任に就いた。光慈は弟の光雄（1716-1758）とともに、1728年に藩内を巡察し、民衆の心をつかんだ。また、戸田家は1793年、後に開智学校となる「崇教館」を設立した。1868年、明治維新による急激な政変で、1869年に最後の大名となった戸田光久（1828-1892）が新政府に藩政を委ね、1871年に松本藩は正式に廃藩となる。

003-076

Cantilevered Roof

松本市

【タイトル】 国宝松本城 渡櫓2階 / 桔木(はねき)構造
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Cantilevered Roof

The roofs of the Great Keep and Northwest Tower are held up by a series of cantilevers, which evenly bear the weight of the timber and tiles. The internal structures of these roofs are visible from the top floors of each building.

Cantilever technology was originally used in temple architecture beginning in the Kamakura period (1185–1333). The underlying principle is that of a lever. Here, the 20 massive timbers that support the roof rest on secondary pieces of wood that cushion them against the horizontal timbers of the keep wall (called “purlins”). These horizontal timbers act as fulcrums. The weight of the crossbeams below the roof presses down on the long ends of the beams, which in turn pushes their opposite ends upward, supporting the weight of the eaves. The opposing forces create a stable structure in which the weight of the tiles is distributed along the length of the timbers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

片持ち梁屋根

乾小天守は最上階に天井がなく、上に見えるのは片持ち梁の内部構造である。片持ち梁の技術は、もともと鎌倉時代（1185-1333）以降の寺院建築に用いられていた。大天守の屋根も同じような仕組みを採用している。

片持ち梁を使うことで、乾小天守の木組みは重い瓦屋根の重量を支えることができる。その原理は「てこ」である。天守閣の外壁を支点に、巨大な木材を副木で挟み込む。屋根の重みで、軒下に出ている材木の短い方の端が押される。その重みで、軒下から伸びた材木の短辺が押され、上方に伸びた材木の長辺が屋根の梁に押しつけられる。これにより、瓦の重さが材木の長さ方向に分散され、安定した構造となる。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 日本と火縄銃
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Guns in Early Modern Japan

The latter half of the sixteenth century was marked by widespread military conflict. The Ashikaga shogunate (1336–1573) had collapsed, and regional daimyos struggled to protect or expand their territory. It was the perfect environment for the spread of new weapons, and when European matchlock muskets were introduced in the 1540s, they brought about a sweeping shift in the methods of warfare.

Japanese smiths were soon able to reproduce the European weapons, and they added their own improvements. Japanese gunsmiths quickly began making matchlock muskets (also known as arquebuses) by the thousands. Matchlocks were gradually supplanted by newer designs in the West, but in Japan they continued to be the dominant firearm for more than three centuries.

Guns found their way into Japan through Tanegashima, a small island south of Kyushu that had long been a transit point for traders and smugglers. These events are described in a document called the *Teppōki* (literally, “Gun Chronicle”), which was completed in the early seventeenth century. In 1543, a ship carrying Portuguese traders sought refuge on Tanegashima during a storm. The Portuguese were given an audience with the island’s lord, Tokitaka (1528–1579), and they demonstrated the use of matchlock muskets they had brought with them. Lord Tokitaka immediately purchased two of the guns and ordered a local sword maker, Yaita Kinbei (1502–1570), to replicate them. Yaita became Japan’s first gunsmith, and *tanegashima* became a generic term for “matchlock musket.”

Guns played an important role in the civil wars of the sixteenth and early seventeenth centuries, which culminated in the establishment of the Tokugawa shogunate (1603–1868). War came to an end under the new shogunal government, and strict limits were placed on travel and trade. The shogunate also imposed tight restrictions on the manufacture and possession of weapons, including firearms.

Gunsmiths continued to supply the shogunate with weapons, but Japan did not develop the transformative innovations (such as flintlocks, percussion caps, and breech-loading cartridges) that revolutionized firearms in the West. Instead, gunsmiths in Japan continued to refine the designs of muzzle-loading matchlock muskets, which remained the sole type of handheld firearm until 1854.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

近世日本の鉄砲

16 世紀後半、日本では軍事的な対立が激化した。足利幕府（1336-1573）が崩壊し、各地の大名が領土をめぐる争っていた。このように多くの勢力争いがあったことは、新しい武器が普及するための絶好の環境であった。1540 年代にヨーロッパから伝わった火縄銃は、戦法に大きな転換をもたらした。

その後、銃器の国産化が進んだ。日本の鍛冶職人は、ヨーロッパの火器を再現し、独自の改良を加えていった。やがて、日本の鍛冶職人は、火縄銃（別名アークウィバス）を数千丁単位で生産するようになった。その後、西洋で新しい銃器が普及しても、火縄銃は 3 世紀以上にわたって主流であった。

鉄砲は、九州の南に位置し、古くから貿易商や密輸業者の中継地であった種子島を經由して日本に入ってきた。17 世紀初頭に完成した『鉄炮記』にその様子が描かれている。1543 年、ポルトガルの冒険家たちが乗った船が、嵐の中、種子島に避難してきた。ポルトガル人たちは、島の領主である時堯（1528-1579）に謁見し、持参した火縄銃の使い方を披露した。時堯は直ちにそのうちの 2 丁を購入し、地元の刀工、八板金兵衛（1502-1570）にその複製を命じた。八板は日本初の鉄砲鍛冶となり、種子島は"火縄銃"の通称となった。

鉄砲は、徳川幕府（1603-1867）の天下統一のための戦いで重要な役割を果たした。徳川幕府のもとで、内戦は終わり、旅行や貿易に厳しい制限が設けられた。幕府はまた、銃器などの武器の製造と所持に厳しい制限を課した。

鉄砲鍛冶は幕府に武器を供給し続けたが、日本は火縄銃、雷管式、連発式弾倉など、西洋の銃器に革命をもたらした革新的な技術を開発することはなかった。その代わりに、日本の鉄砲鍛冶は前装式の火縄銃の設計を改良し続け、1854 年に開国するまで、このタイプの銃器が唯一の銃器であった。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / からくり：平
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Hira-Karakuri: The Basic Matchlock Mechanism

The *hira-karakuri* is the most basic matchlock design. The mainspring of a *hira-karakuri* lock is a simple, U-shaped length of metal, usually iron or brass, that is mounted on the exterior of the gun's lock plate. The spring and serpentine arm are kept under tension by a lever called a "sear," which connects to the trigger. Pulling the trigger releases the sear, freeing the gun's serpentine arm to snap down onto the priming pan. The burning match cord ignites the priming powder, and the priming powder ignites the main charge inside the barrel, expelling the musket ball.

Most guns used in the sixteenth century had *hira-karakuri* locks. The locks were simple and relatively cheap to make, but their springs tended to weaken with repeated use.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

平からくり：基本的な火縄銃の構造

平からくりは最も基本的な火縄銃である。平からくりのゼンマイは、鉄や真鍮の単純な U 字型の金属で、からくりの外側に取り付けられている。バネとサーペンタイン・アームは、トリガーに取り付けられた「シア」と呼ばれるレバーによって張力が維持されている。引き金を引くとシアが解除され、銃のサーペンタイン・アームとそれにつながれている火のついた火縄が火皿に接触し、点火される。この火薬が銃身内の主砲を発火させ、弾を発射させるのである。

16 世紀の戦いで使われた鉄砲は、ほとんどが平からくりであった。このからくりは簡単で比較的安価に作ることができたが、繰り返し使用するうちにバネが弱くなる傾向があった。

003-079

Uchi-Karakuri: Internal Matchlock Mechanism

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / からくり：かにの目無き
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Uchi-Karakuri: Internal Matchlock Mechanism

Some guns were built with internal locks, which were housed inside their wooden stocks. Internal locks were less likely to be damaged by shocks or clogged by battlefield mud, but because their parts were more difficult to access, they were harder to fix when something went wrong.

The *uchi-karakuri* lock shown here is a type called *kani-no-me-naki*, meaning “no crab eye.” The name reflects the fact that this kind of lock uses a vertically mounted plate to keep its springs under tension, rather than a horizontal pin (known as a “crab eye”) that extends from the end of its sear lever.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

内からくり：内蔵タイプの火縄銃の構造

また、木製の銃床の中にバネなどの部品を収めた内からくり式の銃もあった。内からくりは衝撃で破損したり、戦場の泥で詰まったりすることは少ないが、部品が手に入りにくいいため、何かあったときに修理がしにくいという欠点があった。

この写真の内からくりは、「カニの目なき」と呼ばれるタイプである。このからくりは、バネの張力を保つために、炙りレバーの先端から「カニの目」と呼ばれる水平のピンを出さず、垂直に立てた板を使用することから、このような名前が付けられた。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / からくり：外記

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Geki-Karakuri: Double-Sear Matchlock Mechanism

Geki-karakuri are the most sophisticated Japanese matchlock mechanisms. Developed by Inoue Geki (d. 1646), a master gunner and gunsmith, these mechanisms used one or more coiled springs in addition to U-shaped mainsprings. *Geki-karakuri* locks were customizable, and the force required to pull the trigger could be set to several different levels. Unlike other mechanisms, *geki-karakuri* were virtually impossible to fire accidentally, but cocking the mechanism took more time.

Geki-karakuri locks were highly prized, but their many delicate components made them expensive to produce and finicky to maintain. As a result, they never fully replaced the simple *hira-karakuri* mechanisms that were used for most standard-issue military muskets.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

外記からくり：二つのシアを持つ火縄銃の構造

外記からくりは、日本の火縄銃構造の中で最も洗練されたものである。鉄砲鍛冶の名人、井上外記（1646年没）が開発したもので、U字型の主バネに加え、1本または複数本のコイル状のバネを使用したものである。外記からくりはカスタマイズが可能で、引き金の硬さ（引き金を引く力）を何段階かに分けて設定することができた。他の仕掛けと違って誤作動がほとんどない反面、発射のためのコッキングに時間がかかる。

外記からくりは非常に高価なものであった。しかし、繊細な部品が多いため製造コストが高く、メンテナンスも大変で、一般的な軍用火縄銃に使われている単純な平からくり完全に取って代わることはなかった。

003-081

Fortified Windows

松本市

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 突上戸, 武者窓, 水切り
【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Fortified Windows

The windows of the Great Keep were designed to protect defenders from attackers as well as the weather. The windows' thick frames and lattices offered a measure of cover from enemy fire, and they were also fitted with heavy shutters to keep out rain and snow.

Because dampness and moisture could lead to rot, rain could be as damaging to a wooden castle as a besieging army. To address this, the shutters could be propped open to let in air and light when circumstances permitted. As an additional countermeasure against rain, the sills of the windows are outfitted with gutters called *mizukiri* that have drainpipes to channel rainwater outside the building.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

強化された窓

大天守の窓は、敵の攻撃と風雨から身を守るために作られた。厚い枠と格子で敵の攻撃から身を守り、さらに重い雨戸を取り付けた。

雨や雪を防ぐだけでなく、状況に応じて雨戸を開けて風や光を取り入れることもできた。木造の城にとって、雨は軍隊が攻めてくるのと同じように、湿気は腐敗や構造の劣化につながる。そのため、窓枠には「水切」と呼ばれる排水管につながる樋を設け、雨水を建物の外に流すなどの対策が施されている。

【タイトル】 国宝松本城 天守2階 / 変わった鉄砲

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Concealed Firearms

These are examples of unusual firearms, including several that have been combined with other weapons. Guns like these were typically made for assassinations or other nefarious purposes, to avoid strict government controls on firearms, or simply because cleverly concealed guns were interesting novelties.

A small firearm, such as the one on the far right, could be hidden up a kimono sleeve using its attached clip. A firearm could instead be hidden in plain sight by incorporating a barrel and firing mechanism into a short sword, a dagger, or a policeman's cudgel (*jitte*). Firearms were carefully regulated, but short swords and *jitte* were common enough that they would not have drawn suspicion. Samurai wore a pair of long and short swords as a mark of rank, and they typically did not remove their short swords, even when indoors.

The object on the far left was likely not carried at all. Instead, it is designed to be used as part of a trap: its firing mechanism can be triggered by a tripwire attached to the lever at the end of its barrel.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

隠し銃

このケースには、他の武器と組み合わせられたものも含め、珍しい銃器が展示されている。このような銃器は、暗殺などの悪事を働くため、政府の厳しい銃器規制を避けるため、あるいは単に巧妙に隠された銃に興味深く目新しかったという理由で作られた。

右端のような小型の火器は、付属のクリップを使って着物の袖に隠すことができた。また、公然と携帯できる武器として、短刀や短剣、あるいは警察官が使用するフックのついた棍棒「十手」に銃身と

発射機構を組み込んだものもあった。武士は身分の証として長短二本の刀を差し、室内でも短刀を抜かないのが普通であったから、短刀や十手が疑われることはほとんどなかった。

左端にあるものは、おそらく全く携帯していなかったのだろう。その代わりに、霰の一部として使用されるように設計されている。銃身先端のレバーに取り付けられた仕掛けを引っ張ると、発射装置が作動する仕組みになっている。

展示されている隠し銃の多くは、発射装置に雷管式を使用しており、火縄銃に比べると比較的近代的な武器といえる。

【タイトル】 国宝松本城 本丸庭園 / 松本城戊辰出兵記念碑
 【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Boshin War Memorial

This stone monument commemorates the 261 samurai from Matsumoto who fought in the Boshin War (1868–1869), a conflict between the forces of the last Tokugawa shogun and revolutionaries who supported a return to imperial leadership. The Boshin War was the first stage of the Meiji Restoration, which brought about the end of the Tokugawa shogunate, initiated sweeping social and political changes, and ushered in the country's rapid industrialization.

For much of the late eighteenth and early nineteenth centuries, the Tokugawa shogunate had contended with famine, inflation, and peasant revolts. Dissatisfaction with the shogunate was high even among the samurai class, as many low-ranking samurai struggled to feed their families. Although they were nominally still the highest tier of society, samurai of all levels resorted to taking out loans from the thriving merchant class, their supposed social inferiors.

The Tokugawa shogunate was shaken further by the 1853 arrival of Commodore Matthew C. Perry (1794–1858) of the United States Navy, who brought a fleet of warships into Edo Bay and demanded that the shogunate open the country to American trade. In 1854, shogunal officials acceded and signed the first of several highly unequal treaties with foreign powers. Their concessions fueled further criticism of the shogunate.

This disapproval of the Tokugawa leadership, paired with anti-foreign sentiment, catalyzed a faction of discontented daimyos and dispossessed samurai (ronin) to overthrow the shogunate and reinstate the emperor, who for many centuries had held little to no political power. Seeing this growing opposition, the last shogun, Tokugawa Yoshinobu (1837–1913), resigned his position and transferred political authority to the emperor.

Even so, the imperial faction sought to strip the Tokugawa family of its titles and holdings. Samurai from the Satsuma family began a covert campaign of raids, arson, and murder in Edo to sow terror among the populace and undermine support for the shogun. In response, Yoshinobu dispatched soldiers to the imperial court in Kyoto with a letter of protest to the emperor. Yoshinobu's messengers were denied admittance by the revolutionaries, and fighting broke out. This was the start of the Boshin War.

While the imperial loyalists quickly gained support in western Japan, daimyos in central and northern Japan were more divided. The daimyo of Matsumoto was hesitant to choose a side, but on February 29, 1868, he pledged his support for the loyalist faction.

On May 3, 1868, Yoshinobu surrendered Edo Castle, the shogunate's center of administration, without a fight. Despite this, the war continued as the new government pursued the former shogunate's forces to the north and east. In the autumn of 1868, many of the strongest shogunal supporters were forced to yield, and the remnants fled to southern Hokkaido. Ultimately, the Boshin War ended on May 20, 1869, when these holdouts were caught in a surprise attack and compelled to surrender.

The battles fought by the Matsumoto forces in Hokuetsu, Aizu, and Utsunomiya (regions north and northwest of Tokyo) are described on the front of this monument. Inscribed on its back are the names, positions, and fates of the 261 samurai.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

戊辰戦争の記念碑

この石碑は、徳川幕府軍と王政復古を支持する新政府軍との間で起こった戊辰戦争（1868-1869）に参戦した松本藩士261名を記念するものである。戊辰戦争は明治維新の第一段階であり、徳川幕府を崩壊させ、社会と政治に大きな変化をもたらした。明治維新の急速な工業化の先駆けとなった。

18世紀末から19世紀初頭にかけて、徳川幕府は飢饉、インフレ、農民一揆と戦ってきた。幕府に対する不満は、武士階級の間でも高まっていた。下級武士の多くは困窮し、家族を養うのがやっとの状態であった。社会的地位が高いはずの武士が、劣るとされていた商人たちから借金をするようになった。

1853年、アメリカ海軍のペリー提督（1794-1858）が軍艦を率いて江戸湾に来航し、幕府にアメリカとの貿易の開放を要求すると、徳川幕府はさらに動揺した。1854年、幕府はこれに応じ、外国勢力との不平等な貿易協定の第一号に調印した。このような譲歩は、幕府への批判を高め

た。

徳川幕府への不信と反外国感情は、不満を持つ大名や没下級武士や浪人の一派を刺激し、幕府を倒し、何世紀にもわたってほとんど政治力を持たなかった天皇を復権させることを目指させることになった。このような動きを見て、最後の将軍である徳川慶喜（1837-1913）はその地位を辞し、政治的権限を天皇に移した。

しかし、それでも朝廷派は、徳川家から爵位や所領を剥奪しようとした。薩摩藩の武士たちは、民衆に恐怖を与え、将軍への支持を弱めるために、江戸での襲撃、放火、殺人などの密かな作戦を始めた。これに対し、慶喜は京都の朝廷に兵士を派遣し、天皇に抗議する手紙を出した。しかし、慶喜の使者は討幕派に拒否され、戦闘が始まった。これが戊辰戦争の始まりである。

西日本では朝廷側が急速に支持を広げたが、中部・北部の大名は分裂していた。松本の大名はどちらにつくか迷ったが、1868年2月29日、朝廷派を支援することに決めた。

1868年5月3日、慶喜は幕府の行政の中心である江戸城を戦わずして明け渡した。それでも戦いは続き、新政府軍は旧幕府軍を北と東に追撃した。1868年秋、幕府の強力な支持者の多くが降伏し、残党は北海道南部に逃れた。結局、戊辰戦争は1869年5月20日、旧幕府軍は降伏し、終結した。

この碑の表面には、北越、会津、宇都宮（東京の北と北西の地域）での松本勢の戦闘について記されている。裏面には261人の侍の名前、位置、運命が刻まれている。

003-084

Family Crests of the Matsumoto Lords

松本市

【タイトル】 国宝松本城 黒門 / 歴代城主の家紋

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Family Crests of the Matsumoto Lords

Historically, Japanese families have shown their familial connections using emblems called *kamon*. These family crests appear on anything from formal kimonos to battle standards, household possessions, and even houses. Often, the symbols chosen for *kamon* are drawn from nature, such as the imperial household's stylized chrysanthemum, or a combination of geometric figures, like the three-diamond logo of the Mitsubishi company.

Below are the *kamon* of the samurai families who ruled Matsumoto Castle. Several of these emblems can be seen on the circular end caps on the inner eaves of the Kuromon Gate.

Crest	Family Name	Crest Name	Description
	Ishikawa Family (1590–1613)	<i>sasa rindō</i>	Gentian flowers with five leaves resembling those of bamboo
	Ogasawara Family (1613–1617)	<i>sangai-bishi</i>	Three overlapping diamonds
	Toda Family (1617–1633)	<i>hanare muttsu-boshi</i>	Six stars spaced to represent a filled circle
	Matsudaira Family (1633–1638)	<i>maru ni mitsuba aoi</i>	Three leaves of <i>futaba aoi</i> (<i>Asarum caulescens</i>) enclosed in a circle
	Hotta Family (1638–1642)	<i>kuromochi ni tate mukkō</i>	Vertical bird's nest on a black mochi cake

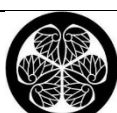
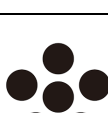
	Mizuno Family (1642–1725)	<i>maru ni tachi omodaka</i>	Vertical threeleaf arrowhead (<i>Sagittaria trifolia</i>) enclosed in a circle
	Toda Family (1726–1869)	<i>hanare muttsu-boshi</i>	Six stars spaced to represent a filled circle

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本藩主の家紋

日本の家紋は歴史的に見ると、「家紋」と呼ばれる紋章で家族のつながりを示してきた。家紋は、着物、軍配、家財道具、家屋など、あらゆるものに描かれている。家紋には、皇室の「菊」のように自然界にあるものをモチーフにしたものや、三菱の「スリーダイヤ」のように幾何学的な図形を組み合わせたものがよく使われる。

以下は、松本城を統治した各武家の家紋である。黒門一の門の枳形側の軒先の丸瓦の端に、それぞれの家の紋章がいくつか見える。

家紋	Family Name	家紋の名称	説明
	Ishikawa Family (1590–1613)	<i>sasa rindō</i>	竹に似た五枚の葉を持つリンドウの花
	Ogasawara Family (1613–1617)	<i>sangai bishi</i>	重なり合う 3 つのダイヤモンド
	Toda Family (1617–1633)	<i>hanare muttsu boshi</i>	6 つの星が塗りつぶされた円となって配置されている
	Matsudaira Family (1633–1638)	<i>maru ni mitsuba aoi</i>	丸に囲まれたフタバアオイの葉 3 枚
	Hotta Family (1638–1642)	<i>kuromochi ni tate mukkō</i>	黒い満月に縦長の花梨の花
	Mizuno Family (1642–1725)	<i>maru ni tachi omodaka</i>	丸に囲まれた縦長の三つ葉の沢潟。
	Toda Family (1726–1869)	<i>hanare muttsu boshi</i>	6 つの星が塗りつぶされた円となって配置されている

003-085

Floors of the Great Keep

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 天守 1 階～6階 概要

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Floors of the Great Keep

The Great Keep is a six-story wooden structure that functioned as a lookout tower, storehouse, and final bastion during a siege. It reaches a height of 29.4 meters and is believed to have been completed in 1594, along with the Northwest Tower and Roofed Passage.

First Floor

The first floor consists of a central platform surrounded by wide corridors where defenders could gather. Small holes in the pillars indicate that sliding partitions once divided the central platform into four rooms that may have been used to store rations, gunpowder, and weapons.

Second Floor

Although the second floor is similar in size and function to the first floor, its latticed windows provided defenders with broader lines of sight by which to fire down at enemy forces. Small holes in the pillars indicate that there were as many as eight rooms, which could have been used as storage space or for quartering troops in times of emergency. This floor now houses the Matsumoto Castle Firearm Museum.

Third Floor

The third floor is also known as the “dark floor” (*kurayamijū*), because the only source of natural light is a single, latticed dormer gable. Structurally, the third floor is hidden behind the hipped-roof eaves that project from the top of the second floor, making the inclusion of windows impossible.

The exact use of this floor is unknown. There is an opening in one corner of the ceiling that connects to the fourth floor, and it is thought that it may have been used for hauling supplies from the third floor to the fourth.

Fourth Floor

On the fourth floor and above, the castle's interior changes considerably. The ceilings are higher, there are more windows, and the pillars have all been planed smooth. Unlike on the lower floors, there are no small holes in the pillars here, but the open space is believed to have been divided into three rooms using curtains or folding screens.

The largest partition on the fourth floor is a sitting room for the daimyo, which he would have occupied during a siege. This room is separated from the rest of the floor by thin bamboo blinds, which indicate the high status of its intended occupant.

Fifth Floor

The fifth floor would likely have been used as a planning room in the event of an attack. The floor's wide, latticed windows face in each of the four cardinal directions, making it possible to monitor the area in and around the castle compound while safely behind cover.

One pillar located on the northern side has rope marks worn into it. These marks are said to have been made sometime between 1903 and 1913, when the pillar was used as an anchor point to adjust the Great Keep after it had begun to lean to one side.

Sixth Floor

The sixth floor would have been used as a headquarters for the daimyo in times of emergency. Its windows look over the surrounding landscape all the way to the mountains in the distance.

During repairs in the 1950s, it was discovered the sixth floor may originally have been designed as a smaller interior space surrounded by an outer veranda. Ultimately, the interior was expanded to include the entire sixth floor. This decision was likely made to account for Matsumoto's harsh winters and to prevent rainwater from seeping in and damaging the lower floors.

大天守の各階

大天守は、外5階、内6階の木造建築である。高さは29.4mで、乾小天守、渡櫓とともに1594年に完成したとされる。

1階

1階は中央のプラットフォームを広い廊下に取り囲んでいる。柱に開けられた小さな穴から、かつて中央のプラットフォームは4つの部屋に分かれており、食糧や火薬、武器などを保管していた可能性がある。

2階

2階は1階と同じような大きさと機能だが、格子窓があるため、守備側は敵軍を見下ろすことができ、より広い視界を確保することができた。また、柱に開けられた小さな穴から、最大8つの部屋があったことがわかり、倉庫として、あるいは非常時の兵舎として使用された可能性がある。この階は現在、松本城火縄銃コレクションとして公開されている。

3階

3階は「ダークフロア」とも呼ばれ、格子状の屋根破風からほのかに光が差し込むだけである。構造上、3階は2階上部から突き出た寄棟屋根の庇に隠れており、窓を設けることは不可能である。この階の正確な用途は不明である。一角に4階へ出入りするための開口部があるが、この開口部の用途は謎である。

4階

4階以上になると、城の内部は大きく変化する。天井が高くなり、窓が増え、柱はすべて滑らかに鉤掛けされている。下層階のように柱に小さな穴が開いているわけではなく、開放的な空間をカーテンや屏風で3部屋に仕切っていたと思われる。

4階の一番大きな間仕切りは、もし大名が籠城することがあれば、その居間になったと思われる。この部屋は薄いすだれで仕切られており、使用者の地位の高さを示している。

5階

5階は、敵襲時には作戦室として使用されたであろう。この階の窓は格子状で広く、四方八方に面しているため、城内や周辺を安全に監視することが可能である。

この階の柱はすべて16世紀の築城時に使用された当時の材木である。北側の柱には、ロープの跡が残っている。1913年、傾き始めた大天守を調整するための固定具として使用されたものと思われる。

6階

6階は有事の際には大名の司令部として使用されたであろう。パノラマ式の窓からは、周囲の景色が遠くの山々まで見渡せる。

1950年代の修理で、6階の外側が縁側として設計されていた可能性があることが判明した。松本の厳しい冬を考慮して、あるいは雨水が浸入して下の階を傷めることを恐れて、囲いを設けたのだろう。

003-086

Ōtemon Gate

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 大手門跡の看板

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ōtemon Gate

The Ōtemon Gate that once stood at this location was used by the lord of Matsumoto Castle and other high-ranking visitors. The gate divided the outer town, where commoners and low-ranking samurai lived, from the fortified district that encircled the castle. The Ōtemon Gate was torn down in the first decade of the Meiji era (1868–1912), but its position relative to the castle and the outermost moat is shown by the red circle on the map (upper right).

The Ōtemon Gate comprised two gates at opposite ends of an enclosed square called a *masugata*. A gate at the southwestern corner of the square connected it to the town, and a much larger and grander gate on the north side led toward the castle.

The square was almost completely surrounded by the outermost moat, making it difficult to scale or breach the walls. This design functioned to create a bottleneck, allowing a small number of defenders to hold off attackers attempting to force their way into the inner castle district.

When the gate was torn down, some of its stones were reused to build Sensaibashi Bridge to the south. Excavations in 2012 also uncovered a portion of the square's eastern stone wall. From this, researchers determined the original size and orientation of the gate. They also discovered roof tiles stamped with the crests of the Mizuno family, who ruled between 1642 and 1725, and the Toda family, whose latter period of rule lasted from 1726 to 1869.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大手門

かつてこの場所にあった大手門は、松本城の城主や上級の来客に利用されていた。庶民や下級武士が住む城下町と、松本城の城内を分ける門であった。大手門は明治時代（1868～1912）の最初の10年間のうちに取り壊されたが、城と最外周の総堀の位置関係は地図（右上）の赤丸で示されている。

大手門は、枡形とその両端にある二つの門で構成されていた。枡形の南西にある門は、枡形と町とつながっており、枡形の北端、天守の方へとつながる、より大きく立派な門である。

枡形は一番外側の総堀でほぼ完全に囲まれており、城壁を突破することは困難であった。そのため、城内に侵入しようとする敵を少数の守備隊で食い止めることができ、ボトルネックとなった。門を取り壊す際、石材の一部は南側にある千歳橋に再利用された。また、2012年に行われた発掘調査では、広場の東側の石垣の一部が発見された。そこから、門の大きさや向きが判明した。また、1642年から1725年まで統治した水野家と、1726年から1869年まで統治した戸田家の家紋が入った瓦も発見された。

【タイトル】 国宝松本城 / おもてなし隊の役
【想定媒体】 アプリQRコード

できあがった英語解説文

Omotenashi Squad

Characters dressed in traditional armor and clothing can often be seen walking the castle grounds. These performers are part of Matsumoto Castle's Omotenashi Squad. The word *omotenashi* means “hospitality,” and each of these historical figures is here to welcome you and enliven your visit to the castle.

Ishikawa Kazumasa

Ishikawa Kazumasa (d. 1592) was the first lord of Matsumoto Castle. He spearheaded the construction of its three oldest structures: the Great Keep, the Inui Keep, and the Roofed Passage.

Ishikawa was one of many warlords active during the decades of civil war called the Warring States period (1467–1600). He was a longtime ally of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the warlord who would eventually go on to establish the Tokugawa shogunate. However, in 1585 Ishikawa suddenly joined with Ieyasu's rival, Toyotomi Hideyoshi (1537–1598). Hideyoshi gave Ishikawa control of Matsumoto Castle in 1590, but Ishikawa died just a few years later, during one of Hideyoshi's invasions of the Korean Peninsula.

Ogasawara Hidemasa and Tokuhime

Ogasawara Hidemasa (1569–1615) was the first of two members of the Ogasawara family who ruled Matsumoto Castle between 1613 and 1617.

The Ogasawara family was given control of the castle by Tokugawa Ieyasu, the first of the Tokugawa shoguns. Ieyasu removed Ishikawa Yasunaga from Matsumoto Castle for his treachery (see above) and gave the domain to Hidemasa.

Tokuhime (1576–1607) was Hidemasa’s wife. Her story is an example of how warlords often used marriages to form alliances or strengthen their loyalties to one another. Tokuhime’s father was the eldest son of Ieyasu, and her mother was the eldest daughter of Oda Nobunaga (1534–1582), another powerful warlord of the sixteenth century. Her marriage to Hidemasa was arranged by Toyotomi Hideyoshi, demonstrating how three of the most powerful warlords of the time—Nobunaga, Hideyoshi, and Ieyasu—were involved in marriage politics.

Matsudaira Naomasa

Matsudaira Naomasa (1601–1666) was the only member of the Matsudaira family to rule Matsumoto Castle. He expanded the castle by adding two additional sections: the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower.

Under the rule of the Tokugawa shogunate (1603–1868), lords were not allowed to expand their castles, and any repairs had to be approved by the government. Matsudaira Naomasa, as a grandson of Tokugawa Ieyasu, was likely given special permission to expand Matsumoto Castle. In 1638, he was reassigned to Matsue Castle, in what is now Shimane Prefecture.

Akutagawa Kurōzaemon

You may spot a ninja named Akutagawa Kurōzaemon sneaking around the castle. “Kurōzaemon” was not the name of a single individual but rather a hereditary name passed down through generations of the Akutagawa family, one of the most notable families in the Kōka-ryū school of ninjutsu.

The Akutagawa family served the Toda family, who ruled Matsumoto Castle between 1617 and 1633 and again from 1726 to 1869. The fifth person to use the name was Akutagawa Yoshinori (1732–1810), who was said to be especially skilled. According to legend, while Yoshinori was chopping firewood one evening, an assassin sneaked

into his home. When the assassin ambushed Yoshinori, Yoshinori calmly severed his attacker's arm and then returned to chopping wood.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

おもてなし隊

伝統的な鎧や衣装を身にまとったキャラクターたちは、松本城のおもてなし隊の一員だ。おもてなしとは、お客様を歓待することで、歴史上の人物たちがお客様をお迎えし、お城を盛り上げてくれる。

石川数正

石川数正（1593年没）は松本城の初代城主で、松本城の最も古い3つの郭、大天守、乾櫓、屋根付通しの築城に携わった人物である。

石川は、戦国時代（1467-1568）と呼ばれる数十年にわたる争いの時代に活躍した多くの武将の一人であった。のちに徳川幕府を開くことになる徳川家康（1543-1616）の長年の盟友であった。しかし、1585年、石川は突然、家康のライバルである豊臣秀吉（1537-1598）に忠誠を誓い、豊臣秀吉のもとに加わった。1590年、秀吉は石川に松本城を与えたが、石川は数年後、秀吉の朝鮮半島への侵略失敗の最中に死去した。

小笠原秀政と徳姫

小笠原秀政（1569-1615）は、1613年から1617年にかけて松本城を治めた小笠原家の二人のうちの一人である。

小笠原家は、徳川将軍家の初代・徳川家康から城の支配権を与えられた。家康は石川数正を裏切り者として松本城から追い出し（前述）、秀政に城を与えた。これは小笠原家にとっての里帰りである。小笠原家は石川家が来る前からこの地を治めており、"松本"という名前をつけたのも彼らである。

徳姫（1576-1607）は、秀政の妻である。武将が結婚を機に同盟を結んだり、忠誠心を示したりすることはよくあることである。徳姫の父親は家康の長男、母親は織田信長（1534-1582）の長女だった。秀政との結婚は豊臣秀吉が仲介したもので、信長、秀吉、家康の三大武将が政略結婚を行ったことがわかる。

松平直政

松平直政（1601-1666）は、唯一の松平氏による松本城主である。松平直政は、辰巳附櫓と月見櫓を増築し、城の規模を拡大した。

徳川幕府（1603-1867）の時代には、大名による城の拡張は許されず、修理には幕府の認可が必要であった。松平は家康の孫にあたり、松本城の拡張を特別に許可されたのであろう。1638年、松平は松江城（現・島根県）に移封された。

芥川九郎左衛門

城内に忍び込む忍者、芥川九郎左衛門の姿を見かけることがあるかもしれない。「九郎左衛門」は一個人の名前ではなく、甲賀流忍術の名家である芥川家に代々伝わる世襲の名前である。

1617年から1633年、および1726年から1869年まで松本城主であった戸田家に仕えた忍者たちが、代々「芥川九郎左衛門」と名乗った。5代目の芥川義矩（1732-1810）は、特に戦闘能力に優れていた。ある晩、義矩が薪を割っていると、刺客が忍び込んだという伝説がある。義矩が薪を割ろうと斧を振りかざすと、その動作によって刺客の右腕が切断されてしまったという。

003-088

Welcome to Matsumoto Castle

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城へようこそ(パンフ)

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Welcome to Matsumoto Castle

Matsumoto Castle is one of the oldest castles in Japan. It was built in the last decade of the sixteenth century, a time when warlords battled each other for control of the country. The castle was nearly torn down in the nineteenth century, but it was saved through the efforts of dedicated local residents who campaigned for its preservation. The castle was designated a National Treasure in 1936 and redesignated under the revised system in 1952. Today, Matsumoto Castle is one of only 12 surviving castle structures that were built in or before the Edo period (1603–1867).

Among those 12 surviving castles, the design of Matsumoto Castle is unique. The castle's three main structures (the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage) were built in 1594 under the Ishikawa family. Two additional structures, the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower, were added in 1634 under the Matsudaira family. This two-phase building process is reflected in the castle's unique blend of wartime and peacetime architecture.

Meet the Omotenashi Squad!

Matsumoto Castle's Omotenashi Squad walks the grounds dressed in traditional armor and clothing. Scan the QR code to learn more about these historical figures and their connections to the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城へようこそ

松本城は、日本で最も古い城の一つである。戦国時代の16世紀末に建てられた。19世紀には

取り壊されそうになったが、地元住民の熱心な保存運動によって救われた。1936年に国宝に指定され、1952年の制度改正で再指定された。1500年代から1600年代初頭の城の時代から現在に至るまで現存する十数城の一つである。

現存する12城の中で、松本城の設計は独特である。大天守、乾小天守、渡櫓の三棟は、1594年、石川家の時代に建てられたものである。1634年、松平家の時代に辰巳附櫓と月見櫓が追加された。このように、戦時中と平時の建築様式が混在しているのが、この城の特徴である。

おもてなし隊に会いに行こう！

松本城のおもてなし隊は、伝統的な鎧や衣服に身を包み、城内を歩いている。QRコードを読み取ると、松本城にゆかりのある歴史上の人物について詳しく知ることができる。

【タイトル】 国宝松本城 / 日本のお城(パンフ)

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

What Are Japanese Castles?

Japan's towering castle keeps are products of the Warring States period (1467–1600), an era of bloody clashes between regional warlords. Beginning in the 1400s, the ruling Ashikaga clan began to lose control of the increasingly fractured country. Different factions spent the following decades battling to expand their territory, and Japanese castles developed greatly during this long period of near-constant warfare.

The presence of a great keep (*tenshukaku*) is a distinctive trait of castles from the late Warring States period. Castles of that time functioned as the administrative centers from which warlords controlled their territory. Fortified towns and strongholds had already existed for hundreds of years by that time, but these early “castles” were generally built atop mountains and encircled by earthen embankments or wooden barricades.

Mountaintop castles were easy to defend, but they were necessarily far from farmland and main roads. This made them unsuitable as centers of administration. Beginning in the early 1500s, castles were built on hills rather than mountains, and eventually, they were built on flatland as well. This gradual evolution produced the iconic great keeps for which Japanese castles are now known.

Built in the late sixteenth century, Matsumoto Castle was constructed using a mix of both new and old technology. The successively smaller levels of the Great Keep are similar to those of later castles. However, the architectural structure of the Great Keep, which can be described as one tower stacked onto another, is more indicative of earlier castles. Consequently, Matsumoto Castle represents a transitional phase of castle design.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本の城とは？

日本の巨大な城は、戦国時代（1467-1568）の産物である。1336年から続いた足利幕府の崩壊に始まり、その後数十年にわたり、さまざまな勢力が日本の支配権をめぐって争った。

戦国時代の城の特徴として、天守閣があり、そこを拠点に武将たちが領地を支配した。この時期までにすでに数百年にわたって城郭は存在していたが、初期の「城」は山の上に築かれ、土塁や木柵で囲まれているのが一般的であった。山上の城は防御しやすいが、農地や街道から遠く、行政の中心地としては不向きであった。1500年代初頭から、城は山ではなく丘の上に築かれるようになり、やがて平地にも築かれるようになった。この城郭建築の黄金時代には、日本の城の象徴である天守閣が誕生した。

松本城は16世紀後半に築城され、新旧の技術が混在した城であった。大天守の階層は、後世の城郭によく似ている。しかし、天守閣の全体的なデザインは、天守の上に天守を積み重ねたようなもので、より初期の城の特徴を示している。このように、松本城は城郭設計の過渡期を代表する城である。

【タイトル】 国宝松本城 / 戦時と平時の松本城(パンフ)
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

A Castle of War and Peace

One notable aspect of Matsumoto Castle is its contrasting combination of wartime and peacetime structures.

The castle was built with the expectation that it would someday come under attack, and it has many defensive features: the rectangular loopholes in the walls would have been used to shoot bows and muskets at enemy forces. If attackers managed to cross the moat and attempted to climb the stone foundation, defenders could repel them by attacking through the *ishi otoshi* openings that project from the castle walls.

Later additions to the castle were added with socialization in mind. For example, the elegant vaulted ceiling and vermillion-lacquered veranda of the Moon-Viewing Tower would have been a liability during a siege. This contrast can easily be seen in the overhang that projects from the Southeast Wing. Although it resembles an *ishi otoshi* from the outside, the opening is completely covered by the floorboards and would have been useless during an attack.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

戦と平和の城

松本城の特徴は、戦時中と平時の相反するデザインの建築が混在していることである。

松本城は、いつか攻撃されることを想定して築かれた城であることが、多くの防御構造からうかがえる。城壁にある長方形の穴は、敵軍に弓や火縄銃を撃つために使用されたのだろう。また、堀を越えて石垣の上に到達した敵は、石落と呼ばれる城壁から突き出た穴から撃退することが可能であった。

月見櫓の格天井や朱塗りの縁側は、攻城戦に耐えるためではなく、役人をもてなすために作られたものである。この対比は、辰巳附櫓の張り出しによく表れている。外見は石落のようだが、開口部は

床板で完全に覆われており、攻め込まれたときには役に立たない。

003-091

First Floor

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 天守1階、2階(パンフ)
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

First Floor

The first floor was used to stockpile supplies such as rations, gunpowder, and weapons. Its wide corridors and many loopholes allowed soldiers to quickly position themselves to defend the castle. This floor has displays related to the castle architecture, including a section of an underground post that was part of the original sixteenth-century foundation and a pair of fish-shaped *shachi* roof tiles that were believed to protect the castle from fire.

Second Floor

The second floor has additional storage space and an area that could have been used for assembling troops. The thick-latticed windows on the eastern, southern, and western walls gave defenders covered positions from which to fire down on enemy forces. This floor holds the Matsumoto Castle Firearm Museum, which includes a wide variety of both Japanese and Western firearms and accessories from the sixteenth through the late nineteenth centuries. The museum collection was donated by the late Akahane Michishige and his wife, Kayoko, a local duo of firearm enthusiasts.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

1階

1階は食糧や火薬、武器などの物資を備蓄する場所として使われた。通路が広く、狭間が多いため、兵士は城を守るために素早く身構えることができた。この階では、16世紀の基礎部分の地下柱跡や、火災から城を守ったとされる魚型の鯰瓦など、城の建築にまつわる展示を行っている。

2階

2階には倉庫があり、軍隊の集合場所として使用された可能性がある。東、南、西の各壁には厚い格子の窓があり、そこから敵軍を撃退するための屋根付きポジションとなっていた。この階には、地元の銃砲愛好家である故赤羽通重・か代子夫妻から寄贈された「松本城銃砲コレクション」が展示されている。このコレクションには、16世紀から19世紀後半にかけての和洋の銃器や小物類が幅広く収められている。

003-092

Third Floor

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 天守3階、4階(パンフ)
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Third Floor

The low-ceilinged third floor is illuminated only by a single latticed dormer, for which it is named the “dark floor” (*kurayamijū*). This floor is hidden from the outside by the tiled eaves above the second floor. As a result, Matsumoto Castle appears to have only five stories when viewed from outside, but it has six floors. While the purpose of the third floor is unknown, it may have been used for storage.

Fourth Floor

The interior appearance of the fourth floor is quite different from those of the lower floors. The ceiling is higher, and the pillars have all been planed smooth. The interior was likely divided into separate rooms using folding screens. The largest of these rooms was reserved for the castle’s lord. It is now demarcated by bamboo blinds.

Note: The staircases on the fourth floor and above are narrow and very steep.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

3階

天井の低い3階は、格子状の窓が1つだけあり、そのため「ダークフロア」と呼ばれている。この階は、2階の瓦葺きの庇の裏側に壁があるため、外からは見えない。このように、松本城は5階建てのように見えるが、実は6階建てなのである。3階の用途は不明だが、倉庫として使われていた可能性もある。

4階

4階の内装は、下層階とはかなり趣が異なる。天井は高く、柱はすべて平らに削られている。内部は屏風で仕切られていたようだ。最も広い部屋は城主の部屋で、現在はすだれで仕切られている。

注意：4階以上の階段は幅が狭く、非常に急である。

003-093

Fifth Floor

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 天守5階、6階(パンフ)
【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Fifth Floor

The fifth floor would likely have been used as a strategy room in the event of an attack. The roof gables on either side create small alcoves. The alcoves on each side of this floor are interior spaces created by the roof gables.

Sixth Floor

The sixth floor would have been used as a watchtower from which to spot attackers. Its wide windows face the four cardinal directions, and the view extends to the mountains on all sides. This floor has no ceiling, and the complex, cantilevered structure of the roof is visible. Set atop the perpendicular beams of the roof is a small shrine to a deity called Nijūroku-yashin, who is said to be a guardian of the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

5階

5階は、攻撃時の作戦室として使われたのだろう。この階の両側にある床の間は、屋根の破風によって作られた内部空間である。城内の多くの柱は時代とともに建て替えられていますが、この階の柱はすべて16世紀当時のままの木材を使用している。

6階

6階は見張り台として使われたようで、広い窓は四方八方に面し、四方の山々まで見渡すことができる。この階には天井がなく、複雑な片持ち梁の屋根の構造が見える。屋根の内側には、城の守護神とされる二十六夜神を祀る小さな祭壇がある。

【タイトル】 国宝松本城 / 本丸御殿, 二の丸御殿(パンフ)
 【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Remains of the Honmaru Goten and Ninomaru Goten

The black tiles on the lawn in front of the castle mark where the Honmaru Goten once stood. The Honmaru Goten was both the castle lord's residence and an administrative center where audiences were held and ceremonies were conducted. It covered roughly 2,320 square meters of the main bailey.

The Honmaru Goten burned down in 1727, but the flames did not spread to the castle. After the fire, the castle's administrative functions were moved to the Ninomaru Goten, a smaller building located in the second bailey. A century and a half later, this building also burned down. An excavation of the site was carried out between 1979 and 1984, and the objects unearthed there provide a picture of daily life at the castle. Some of these artifacts are displayed on the second floor of the Great Keep.

While the Honmaru Goten and the Ninomaru Goten no longer exist, recreations of these and other structures of the castle can be seen using the StreetMuseum smartphone app.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本丸御殿・二の丸御殿の遺構

城の前の芝生にある黒い瓦は、かつて重要な建物があったことを表している。本丸御殿は、本丸の約2,730平方メートルを占めていた。本丸御殿は、城主の居城であると同時に、租税や貿易などの行政の中心地でもあった。城とその周辺の領地を管理する日常業務の大半は、ここで行われていた。

1727年、本丸御殿が焼失したが、城には延焼しなかった。その後、城の管理機能は二の丸御殿に移された。この建物も1世紀半後に焼失した。二の丸御殿跡から出土した遺物から、城の日常生活がうかがえる。これらの遺物の一部は、大天守閣の2階に展示されている。

本丸御殿や二の丸御殿は現存しないが、スマートフォンアプリ「StreetMuseum」で城内の建造物の再現を見ることができる。

003-095

General Information

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城 観覧案内(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

General Information

Admission

	Adult	Children (ages 6–15)*	
Individual	¥700	¥300	
Group (cost per guest)	¥630	¥270	20–99 guests
	¥560	¥240	100–299 guests
	¥490	¥210	300+ guests

*Children aged 5 and under enter free.

Matsumoto residents may enter the Honmaru Garden free with proof of residence.
(Castle entry requires purchase of an admission ticket.)

Visitors with disabilities (plus one caregiver per visitor) may enter free with presentation of a disability certificate.

During the extended summertime hours (mid-August), visitors in *yukata* or other traditional Japanese clothing may enter the castle for free.

Hours

Matsumoto Castle is open year-round **except** between December 29 and 31.

Regular Hours	8:30 a.m. to 5:00 p.m. (last entry at 4:30 p.m.)

Golden Week Extended Hours	8:00 a.m. to 6:00 p.m. (last entry at 5:30 p.m.)
Summer Season Extended Hours	

On average, visitors spend between 45 and 60 minutes inside the castle.

During Golden Week (April 29–May 5) and the Obon holiday (mid-August), the castle can become very crowded. To ensure visitor safety, limits may be placed on the number of people allowed inside the castle at a single time. When waiting to enter, please adhere to the queue route that leads through the Honmaru Garden. Visitors touring the garden should be aware that some areas may be restricted due to the queue.

Matsumoto Castle's Omotenashi Squad

Between 8:30 a.m. and 4:00 p.m., figures dressed as nobles, ninja, and samurai can be seen strolling through the Honmaru Garden. This is the castle's Omotenashi Squad, a group of performers who represent some of Matsumoto's famous historical figures. Feel free to photograph them, have them photograph you, or even take a photo together as a souvenir of your castle tour. (Times are subject to change depending on the weather.)

Please Note:

- **The Great Keep is a six-story building with steep, narrow stairs and no elevator.** To preserve the castle's historic architecture, no accessibility features have been added. Reaching the sixth floor requires ascending approximately 140 steps with a maximum grade of 61°.
- **Shoes must be removed inside the castle.** Bags are distributed at the castle entrance, and guests should place their shoes in a bag and carry them while inside.
- **The red Uzumibashi Bridge at the rear of the castle is closed.** Visitors must enter the grounds through the Kuromon Gate in front.
- **Pets are prohibited in the Honmaru Garden and inside the castle.** This includes pets in carriers and bags. Certified service dogs are allowed, but permission must be obtained in advance from the castle management office.

- **Guests who leave the castle grounds will not be readmitted without paying for reentry.** Please do not attempt to come and go freely, even if you have paid the admission fee.
- **Please refrain from bringing outside food within the castle grounds.** Ice cream and cold drinks are available for sale at the castle's gift shop.

Gifts and Souvenirs

The castle gift shop is located in the Honmaru Garden. It offers a wide range of exclusive Matsumoto-themed foods, crafts, and apparel.

Castle Informational Pamphlet

上記解説文の仮訳（日本語訳）

一般情報

入場料

	大人	子供 (6-15 歳)*	
個人	¥700	¥300	
団体 (一人当たりの料金)	¥630	¥270	20-99 人
	¥560	¥240	100-299 人
	¥490	¥210	300 人以上

*5歳以下のお子様は無料。

松本市民：本丸庭園は身分証をご提示いただければ無料で入城可能。(入城には入城券が必要です。)

障がい者手帳をお持ちの方：障がい者1名とその介護者1名が無料で入園可能。

夏期開園延長期間(8月中旬)：浴衣などの和服でお越しの方は無料です。

開館時間

松本城は12月29日～31日を除き、年中無休です。

通常	8:30 a.m. to 5:00 p.m. (最終入城は 4:30 p.m.)

ゴールデンウィーク時間延長期間	8:00 a.m. to 6:00 p.m. (最終入城は 5:30 p.m.)
夏季時間延長期間	

城内の滞在時間は平均45～60分。

ゴールデンウィーク（4月29日～5月5日）、お盆（8月中旬）は混雑が予想されます。安全確保のため、一度に入城できる人数を制限する場合があります。入場待ちの際は、本丸庭園を通る行列のルートをご利用ください。また、本丸庭園を見学される方は、行列の関係で一部見学できない場所がありますので、ご了承ください。

松本城おもてなし隊

午前8時30分から午後4時頃まで、侍や忍者、公家に扮した人物が本丸庭園を歩く姿を見ることができかもしれません。これは松本城のおもてなし隊で、松本が誇る歴史上の人物に扮したパフォーマーです。写真を撮ったり、一緒に写真を撮ったり、お城めぐりの記念にいかがでしょうか。（天候により時間に変更になる場合があります。）

注意事項：

- **大天守は6階建ての建物で、急で狭い階段があり、エレベーターはありません。**建てられた当時のまを保存しているため、城のバリアフリー化は行われていません。6階までは約140段、最大傾斜61°の階段を上る必要があります。
- **城内では靴を脱いでください。**入口で袋を配布していますので、靴を袋に入れ、携帯してください。
- **城の裏側にある赤い橋「埋橋」は閉鎖されています。**正面の黒門から敷地内に入場してください。
- **本丸庭園と城内ではペットの同伴は禁止されています。**キャリーやバッグに入れたペットも同様です。ただし、介助犬については、事前に管理事務所で許可を得てください。
- **城の敷地を離れたゲストは、再入場料を支払わずに再入場することはできません。**入場料をお支払いいただいても、勝手に出入りすることはご遠慮ください。
- **城内への飲食物の持ち込みはご遠慮ください。**城のギフトショップではアイスクリームや冷たい飲み物を販売しています。

ギフトとおみやげ

本丸庭園にお城のギフトショップがあります。松本にちなんだ食品、工芸品、衣料品などを取り揃えています。

お城のパンフレット

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城の四季(webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Matsumoto Castle through the Seasons

The beauty of Matsumoto Castle and its surrounding gardens changes throughout the year. The cherry trees blooming around the inner moat present a quintessential image of spring, while in summer the castle is surrounded by greenery. In autumn, the trees lining the moats don brilliant colors, and in winter the towering black keep stands in stark contrast to the snow-covered Northern Alps. The castle moats are home to carp, swans, and ducks. The castle is visited in some seasons by rarer birds, like the jewel-toned Eurasian kingfisher and the northern boobook, a mottled brown owl with piercing yellow eyes. If you keep your eyes peeled, you may spot the ruddy orange wings of an Asian comma butterfly.

Each season has associated events and festivals, many of which celebrate the traditional culture of the Matsumoto area.

Spring

During cherry-blossom season, the castle and the blooming cherry trees on its grounds are lit up at night, creating an ethereal atmosphere along the moats and walkways. Later in spring, there are exhibitions of traditional arts and skills, such as flower arrangement and Edo-period (1603–1867) gunnery techniques.

Summer

In summer, the castle grounds host seasonal events, such as a *taiko* drum festival and a firelit Noh performance. For a period in August, admission is free for anyone wearing traditional Japanese clothing, such as a *yukata*.

Autumn

In autumn, the buckwheat harvest is celebrated with a soba noodle festival, and various historical reenactments are held around the castle. The week leading up to “Matsumoto Castle Day” on November 10 is marked by special exhibits and other events.

Winter

The arrival of the new year is marked by many customs and rituals: the Kuromon and Taikomon gates are decorated with winter greenery and sacred braided ropes (*shimenawa*), and religious rites are performed to “brush the dust” from the prior year and purify and sanctify the castle. On New Year’s Day, the castle grounds are specially opened to visitors as a way to welcome the coming spring. This period is one of the most popular times to visit the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の四季

松本城とその周辺の庭園の美しさは、一年を通して変化する。春は内堀に桜が咲き乱れ、夏は城が鮮やかな緑に包まれる。秋は堀の木々が色づき、冬は黒くそびえる天守閣と雪をかぶった北アルプスのコントラストが美しい。堀には鯉や白鳥、鴨などが生息する。季節によっては宝石をちりばめたような色合いのカワセミや、黄色い目をした斑点のある茶色のフクロウ、キタテハなど、珍しい鳥も見ることができる。目を凝らすと、オレンジ色の羽を持つキタテハに出会えるかもしれない。

また、季節ごとに松本の伝統文化にちなんだイベントや祭りが開催される。

春

桜の季節には、お城と桜並木がライトアップされ、堀や散策路に幻想的な雰囲気が漂います。春の終わりには、いけばな展や江戸時代（1603–1867）の砲術演武などの伝統芸能や技術の展示も行われる。

夏

夏には、太鼓祭りや薪能など、季節の行事が行われる。8月には、浴衣を着ていけば無料で入場できる期間も設けられている。

秋

秋には、そばの収穫を祝う「そば祭り」や、城内各所で歴史の再現が行われる。11月10日の「松本城の日」までの1週間は、特別展示やイベントが行われる。

冬

冬になると、城門をしめ縄で飾り、前年のほこりを落とす、すす払いの大掃除が行われる。元旦には、春を迎えるために城内が特別に開放される。この期間は、城を訪れる人が最も多い時期の一つである。

【タイトル】 国宝松本城 / ボランティアガイドの案内(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Matsumoto's Volunteer Guides

Three local volunteer organizations offer free guided tours of Matsumoto Castle. Guide services are available in Japanese and several other languages, some of which require advance notice. Tours are offered year-round unless otherwise noted.

For inquiries or to request a guide, visit the Guide Station at the entrance to Matsumoto Castle Park. Reservation requests can also be submitted online.

Alps Language Service Association

The Alps Language Service Association (ALSA) is a non-profit organization that conducts tours of the castle and its surrounding grounds in English, French, Spanish, Portuguese, and Chinese. ALSA also provides interpreters for public events in Matsumoto. Guide and interpretation services are offered free of charge, but visitors are asked to cover any transportation, food, or entry costs the volunteer guide may incur during a tour or event.

Guide services are unavailable between August 11–17 and December 26 to January 9.

Tel: 090-9669-3454

Email: npoalsa@gmail.com

<https://www.npo-alsa.com/home-en>

Matsumoto Castle Guide Group (Japanese only)

The guide group operates from April through early November. Guided tours are not available for the interior of the castle. Operations may be postponed or canceled due to

rain. (To apply for a guide, please fill out and send the form linked below.)

Email: s_koiwai1950@yahoo.co.jp

Application form:

[\[PDF \(146 KB\)\]](#)

[\[Word \(21KB\)\]](#)

Matsumoto Machinaka Tourist Volunteer Guides (Japanese only)

Operates year-round, but reservations must be made at least one week in advance.

Guides offer tours of central Matsumoto, including the castle, Nakamachi-dōri, and Nawate-dōri.

Tel: 0263-39-7176

Email: oote-info@po.mcci.or.jp

<https://visitmatsumoto.com/guide/guides/>

上記解説文の仮訳（日本語訳）

ボランティアガイドのご案内

地元の3つのボランティア団体が、松本城を無料でガイドしている。日本語のほか、多言語でのガイドが可能である。特に断りのない限り、通年で行っている。

お問い合わせやガイドのご依頼は、松本城公園入口にあるガイドステーションで受け付けている。また、インターネットでの予約も可能。

アルプス善意通訳協会

英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、中国語でお城とその周辺を案内する非営利団体。また、松本市内で行われるイベントの通訳も行っている。ガイドと通訳は無料だが、ボランティアガイドがツアーやイベント中に発生する交通費、食費、入場料などは、訪問者の負担となる。

8月11日～17日、12月26日～1月9日は、ガイドのサービスは利用不可。

電話番号：090-9669-3454

電子メール：npoalsa@gmail.com

<https://www.npo-alsa.com/home-en>

松本城案内グループ（日本語のみ）

4月～11月上旬に活動。城内のガイドツアーは実施していない。雨天の場合、延期または中止となることがある。（ガイドのお申し込みは、下記リンク先のフォームから）

メール：s_koiwai1950@yahoo.co.jp

申込書：

[\[PDF \(146 KB\)\]](#)

[\[Word \(21KB\)\]](#)

松本まちなか観光ボランティアガイド（日本語のみ）

年中無休だが、1週間前までに予約が必要。松本城、中町通り、縄手通りなど松本市の中心部を案内している。

TEL: 0263-39-7176

Eメール：oote-info@po.mcci.or.jp

<https://visitmatsumoto.com/guide/guides/>

003-098

About Matsumoto Castle

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 国宝松本城について(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

About Matsumoto Castle

Matsumoto Castle is one of the oldest castles in Japan. Fortification of the site dates back to simple wooden structures built during the Warring States period (1467–1600). The towering castle was constructed in 1594, and today it is the oldest surviving example of a castle with five external stories but six internal floors.

Matsumoto Castle was nearly torn down during the Meiji era (1868–1912) and was saved only through the work of local residents who fought for its preservation. In the years since, the castle has been designated a National Treasure in recognition of its historic value.

Map of the Castle Grounds

外堀	Outer Moat
内堀	Inner Moat
本丸御殿跡	Honmaru Goten Site
大天守	Great Keep
乾小天守	Northwest Tower
渡櫓	Roofed Passage
辰巳附櫓	Southeast Wing
月見櫓	Moon-Viewing Tower
埋橋	Uzumibashi Bridge
売店	Gift Shop
黒門	Kuromon Gate
観覧券売場	Ticket Office
太鼓門	Taikomon Gate

旧松本市立博物館	Former Site of the Matsumoto City Museum
二の丸御殿跡	Ninomaru Goten Site
御金蔵	Storehouse
二の丸裏御門橋	Ninomaru Ura-Gomon Bridge

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城について

松本城は、日本で最も古い城のひとつだ。戦国時代（1467-1568）に建てられた簡素な木造建築がその起源とされる。1594年に築城された天守閣は、現在、外層5階、内層6階という珍しい形式の城となっている。

松本城は明治時代（1868-1912）に取り壊されそうになり、地元の活動家たちが保存のために闘った結果、救われた。その後、松本城はその歴史的価値が認められ、国宝に指定された。

003-099

Layout of the Castle

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 天守とその構造『国宝に指定された大天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓の五棟』 + 『天守の特徴』(webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Layout of the Castle

Matsumoto Castle consists of five structures—the Great Keep, the Inui Keep, the Roofed Passage, the Southeast Wing, and the Moon-Viewing Tower.

The Inui Keep is a separate structure that connects to the Great Keep via the Roofed Passage. This arrangement is referred to as a “linked keep.” In contrast, the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower are attached directly to the Great Keep, which is called a “compound keep.” Matsumoto Castle is the only castle in Japan where both layouts can be seen together.

The castle was first designated a National Treasure in 1936, under the National Treasure Preservation Act of 1929. In the designation, Matsumoto Castle was noted as a rare and early example of a linked multi-structure (*renritsu*) design.

Following World War II (1939–1945), the 1929 act was replaced by the Cultural Properties Preservation Act in 1950, and Matsumoto Castle was redesignated a National Treasure in 1952.

Key Features of Matsumoto Castle

(1) A Flatland Castle

Matsumoto Castle was built 590 meters above sea level, on a flat plain east of the Northern Alps. Compared to the natural defenses of earlier castles that were built in the mountains, flatland castles needed additional fortification. Matsumoto Castle was originally surrounded by three moats and encircled with an elaborate system of earthen walls and gated entrances, and samurai lived within the castle's defenses so they could quickly respond to an attack.

(2) The Oldest Surviving Five-Story Keep

Matsumoto Castle is the oldest example of a keep with five external stories and six internal floors. Design of its three original structures (the Great Keep, the Inui Keep, and the Roofed Passage) is thought to have begun under the rule of Ishikawa Kazumasa (d. 1592), and construction was completed by his son Ishikawa Yasunaga (1554–1642).

The Ishikawa family were retainers of the powerful warlord Toyotomi Hideyoshi (1537–1598). It is said that Matsumoto Castle was one of the castles built to surround and monitor Edo Castle, which was the base of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), one of Hideyoshi's greatest rivals.

(3) Designed for War, Designed for Peace

The Ishikawa family built Matsumoto Castle in the late sixteenth century, during a long period of civil war. During this time, regional warlords called “daimyos” built networks of castles to monitor and control their territories.

Given the turbulent times, the three original structures of the castle were built to withstand an attack. The buildings are equipped with 115 loopholes and have 11 openings called *ishi otoshi* that protrude over the stone-wall foundation. These various openings allowed defenders to use bows and matchlock muskets to attack enemy forces. Aspects of the surrounding complex were also designed with matchlocks in mind: the inner moat is approximately 60 meters across, which was the greatest distance at which a matchlock would reliably pierce samurai armor. Furthermore, the walls on the first and second floors of the Great Keep were roughly 29 centimeters thick and impenetrable to musket fire.

The two newer structures, the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower, tell a different story. They were built when the castle was ruled by Matsudaira Naomasa (1601–1666), during the peace of the Edo period (1603–1867). The elegant vaulted ceiling and vermillion-lacquered veranda of the Moon-Viewing Tower, together with the lack of defensive features, show that the tower was instead designed for peaceful gatherings.

(4) Structural Innovations

Matsumoto Castle is built on an alluvial plain formed by the Metoba and Susuki Rivers. The soft, marshy soil of the plain made the castle difficult to erect, but its builders used innovative construction techniques to prevent the 1,000-ton Great Keep from slowly sinking into the ground.

Internal Support Structure

The internal support structure of the foundation was created using 16 posts of Japanese hemlock arranged in a four-by-four grid. Each post measured roughly 39 centimeters in diameter and 5 meters in length. The posts were connected with horizontal beams, creating a frame that helped to evenly distribute the weight of the castle across the foundation. The stone-wall foundation was built around this structure, which backfilled with soil as the construction progressed.

External Support Features

Prior to building the stone foundation, workers shored up the area that would become the base of the walls using a raftlike structure of 3-meter logs placed at intervals of roughly 50 centimeters. Additional logs were then placed on top of this structure parallel to the line of the wall, creating “pillows” to prop up the larger stones at the base. As a final measure, two rows of posts were driven vertically into the ground under the moat roughly 5 meters from the foundation. These posts were believed to act as anchors to prevent the foundation from slowly eroding.

城のレイアウト

松本城は、大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の5つの建物で構成されている。

乾小天守は、大天守と渡櫓でつながっている別棟の天守閣である。この配置を「連立式天守」と呼ぶ。これに対し、辰巳附櫓と月見櫓は大天守に直接取り付けられており、これを「複合式天守」と呼ぶ。松本城は、日本で唯一、これら2つの構造が同時に見られる城である。

1929年に制定された「国宝保存法」に基づき、1936年に初めて国宝に指定された。その際、松本城は連立複合式天守の珍しい例であることが取り上げられた。

第二次世界大戦後、1929年に制定された国宝保存法は1950年に文化財保護法に改められ、松本城は1952年に国宝に再指定された。

松本城の主な特徴

（1）平城

松本城は、北アルプスに囲まれた標高590mの平地に築かれた。山城に比べ、平城はより強固な守りを必要とした。松本城はもともと3つの堀に囲まれ、土塀や門構えで入念に囲まれており、武士は城内に住み、攻撃に素早く対応することができたのである。

（2）現存する最古の五層天守閣

松本城は外層5階、内層6階の天守閣としては最古の例である。大天守、乾小天守、渡櫓の三棟は、石川数正（1593年没）の時代に着工され、石川康長（1554-1642年）が完成させたものである。

石川家は豊臣秀吉の家臣であった。松本城は、秀吉の最大のライバルである徳川家康（1543-1616）の本拠地、江戸城（現在の東京都）を囲み、監視するために築かれた五城の一つであったと言われている。

（3）戦争のための設計、平和のための設計

石川家が松本城を築いたのは16世紀後半、長い戦乱の時代であった。この時代、大名と呼ばれる地方の武将たちは、領地を支配するために城のネットワークを構築していた。

そのため、大天守、乾小天守、渡櫓の3つの建物には、さまざまな防御設備が施されている。大天守は115の挟間を備え、石垣の基礎の上に11の「石落とし」と呼ばれる開口部が突き出ている。こ

これらの開口部からは、弓や火縄銃で敵軍を攻撃することができた。内堀の幅は火縄銃が正確に撃てる最大距離である60mを超えないようになっており、周囲の防御も火縄銃を意識して設計されている。さらに、大天守の1階と2階の壁は厚さ約29センチで、火縄銃で撃っても貫通することはない。

一方、辰巳附櫓と月見櫓の2つの新しい建造物については、また別の話がある。これらは江戸時代（1603-1867）の太平の世、松平直政（1601-1666）の時代に建てられたものである。月見櫓のアーチ型の天井や朱塗りの縁側は、防御的な要素がないことから、戦のための会議ではなく、平和的な会議のために建てられたことがわかる。

(4) 構造的な工夫

松本城は、女鳥羽川と薄川がつくる沖積平野に築かれている。この平野部の軟弱な湿地帯のために城の建設は困難であったが、1000トンの大天守が徐々に地中に沈んでいくのを防ぐために、建築技術者たちは革新的な工法を駆使した。

内部サポート構造

基礎の内部サポート構造には、16本のヒノキの丸太を4×4のグリッド状に配置した。直径約39cm、長さ約5mの丸太を礎石の上に設置し、その上に柱を立てた。この柱を水平の梁でつなぐことで、城の重量を均等に分散させるための骨組みができあがった。この構造は、周囲の石垣の建設が進むにつれて、土で埋め戻された。

外部サポート機能

石垣を築く前に、石垣の下地となる部分に3mの丸太を約50cm間隔で並べた筏のような構造物で補強を行った。その上にさらに丸太を壁のラインと平行に並べ、土台の大きな石を支える「枕木」を作った。さらに、基礎から5メートルほど離れた堀の下には、丸太を2列、垂直に打ち込んだ。これは土が滑らないようにするための固定材だと考えられている。

【タイトル】 国宝松本城 / 天守とその構造『石垣～野面積みと算木積み～』+『滴水瓦と捨て瓦』(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Stone-Wall Foundation

(1) Unworked Stone

The gently sloping stone-wall foundation of the Great Keep, the Inui Keep, and the Roofed Passage dates back to the original construction of the castle in 1594.

The stone-wall foundation was created using rough-hewn rock quarried from nearby mountains. Other contemporary construction methods involved cutting and setting the stones to fit together tightly, but the stones at Matsumoto Castle are largely unworked. This is called *nozurazumi*. Although walls of this rough style were considered less refined, they required less labor and could be completed more quickly. Builders could either lay the stones in orderly horizontal lines, referred to as *nunozumi*, or stack them in a haphazard way, called *ranzumi*.

(2) Interlocking Corner Stones

For added stability, the corners of Matsumoto Castle's foundation were finished using longer, rectangular stones interlocking in alternating directions. However, the stones are not arranged as neatly as comparable examples at other castles, so the corners at Matsumoto Castle may represent an early application of this technique.

Distinctive Tiles

(1) Rainspout Tiles

Located at the corners of the eaves, these triangular tiles are thought to have been designed to allow rainwater to drain more easily from the roof.

It is believed that the first castles to use these tiles belonged to allies of the powerful warlord Toyotomi Hideyoshi (1537–1598). Their design originates from similar tiles used in Korean architecture. It is said that Hideyoshi and his allies imported this technology from the Korean Peninsula after their unsuccessful invasions in 1592 and 1597. After Tokugawa Ieyasu (1543–1616) defeated Hideyoshi's allies at the Battle of Sekigahara in 1600, he took control of their castles and banished them to remote provinces far from the capital at Edo. This relocation likely helped to further spread the use of rainspout tiles to other regions.

(2) Protective Tiling

An additional layer of flat tiles was added to various parts of the roof during repairs in the 1950s. These disposable tiles were placed to protect the roof from snow and ice falling from the eaves above.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

石垣の基礎

(1)加工されていない石材

大天守、乾櫓、屋根付通路の石垣の基礎は緩やかな傾斜になっており、文禄3年（1594）の築城当初に作られたものである。

石垣の基礎は、近くの山々から切り出した荒削りの岩石で作られている。当時の建築工法は、石を切り出してはめ込み、強固に組み合わせたものであったが、松本城の石垣はほとんど加工されていない。この積み方は「野面積み」と言う。このような石垣は、洗練されていないとみなされる一方で、手間がかからず、早く完成させることができた。石垣には布積と呼ばれる横一列に並べる方法と、乱積と呼ばれる無造作に積み上げる方法がある。

(2) 隅石の組み合わせ

松本城の土台の角は、安定性を高めるため、長方形の石を交互に並べて仕上げている。しかし、他の城に見られるような整然とした石組ではないので、松本城の隅角部の石組は、この技法が早くから用いられていた可能性がある。

特徴的なタイル

(1) 雨どい瓦

軒先の隅にある三角形の瓦で、雨水を排水しやすくするために考案された。

豊臣秀吉（1537-1598）の傘下の城が最初に使用した。デザインは、朝鮮半島の建築に使われていた瓦を参考にした。失敗に終わった1592年と1597年の朝鮮出兵の際に秀吉とその軍勢が、朝鮮半島からこの技術を持ち帰ったと言われている。1600年、関ヶ原の戦いで秀吉の軍勢を破った徳川家康（1543-1616）は、秀吉の軍勢を城から引き離し、遠隔地に追放した。この移転により、雨落し瓦はさらに他地域の城に普及した。

(2) 防護瓦

昭和30年代の修理の際、屋根の各所に平瓦を追加で敷き詰めた。これは、軒先から落ちてくる雪や氷から屋根を守るために設置された使い捨ての瓦である。

003-101

The Great Keep

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 大天守：1 階(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Great Keep

First Floor

(1) Walls and Weatherboard

On the exterior of the keep, the upper portions of the white plaster walls have been left exposed, while the lower parts are covered by black-lacquered weatherboard. Plaster walls degrade relatively quickly when left exposed to rain and snow, and the weight of the structure above increased the risk of collapse. The siding was added to protect the parts of the wall that were outside the coverage of the roof eaves and exposed to the elements.

The photograph on the right shows a portion of the second-floor wall that was removed during repairs in the 1950s. The earthen walls beneath the white plaster were made by wrapping a wooden lattice frame in rope and coating the frame in layers of mud. At roughly 29 centimeters thick, the walls on the first and second floors would have been impenetrable to musket fire. The higher floors, which would only have been hit at an angle, have slightly thinner walls.

The additional thinner layer of wall that can be seen in the photograph was added as part of earlier repairs that were completed in 1913.

(2) *Ishi Otoshi*

The openings in the floor that protrude over the stone-wall foundation are defensive features called *ishi otoshi*. These openings allowed defenders to attack enemies who

attempted to scale the castle walls. The term *ishi otoshi* literally means “stone-dropping,” but the openings were more likely used to provide additional lines of sight for gunners defending the castle.

There are 11 *ishi otoshi* built into the first floors of the Great Keep, the Inui Keep, and the Roofed Passage. The openings are placed at the corners and midpoint of each wall to provide vantage points over the foundation below.

(3) Foundation and Corridors

The center section of the floor is approximately 50 centimeters higher than the surrounding corridors. This design was necessary to accommodate the double-layered structure of wooden beams that make up the foundation, which can be seen through the gaps.

Items on Display

Various objects removed from the castle during repairs in the 1950s are displayed along the corridors of the first floor.

Section of the Keep Wall

This portion of earthen wall was removed from the second floor of the Great Keep during repairs in the 1950s. It is approximately 29 centimeters thick. The wall was made by applying layers of mud plaster to a wooden frame that had been wrapped in rope, then adding a layer of white plaster as a final coat.

***Shachi* Roof Tiles**

Shachi are legendary creatures with the heads of tigers and the bodies of fish. Tiles shaped like *shachi* were placed on the roofs of castles because it was believed they would protect the buildings from fire. These *shachi* tiles once adorned the roof of the Great Keep. The open-mouthed male *shachi* was placed on the southern edge of the ridge, while the close-mouthed female was placed on the northern end.

Support Posts for *Shachi* Roof Tiles

These posts helped anchor the *shachi* tiles to the roof of the keep. The decorative tiles

would have covered nearly 80 centimeters of the 190-centimeter posts. Ink inscriptions on the posts indicate that they date to 1843.

Foundation Support Post

This post was one of 16 that made up the underground support structure of the foundation. The foundation was excavated during repairs in the 1950s, and it was found that every post had rotted but one. By the turn of the twentieth century, the Great Keep had begun to tilt, likely because the rotted foundation could no longer support its thousand-ton weight.

Gegyo Bargeboard Pendants

Wooden ornaments like these commonly adorn the gables of castles. The decorations, which were introduced from China, were originally shaped like fish and were thought to help protect a building from fire, which was an ever-present threat to the all-wooden construction of traditional buildings. The central element of this *gegyo* is shaped like a turnip, which was a popular design in Japan during the Edo period (1603–1867).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大天守

1階

(1) 壁と羽目板

天守閣の外壁は、上部は白漆喰、下部は黒漆喰の羽目板が露出している。漆喰壁は雨や雪にさらされると劣化が早く、また上部の構造物の重量で倒壊の危険性があった。そこで、屋根の庇の範囲外にある、風雨にさらされる壁の部分を保護するために、下見張りを追加した。

右の写真は、1950年代の修理の際に取り外された2階の壁の一部。白漆喰の下にある土壁は、木製の格子枠に縄を巻きつけ、泥を塗り重ねたものである。1階と2階の壁は厚さ約29センチで、火縄銃の攻撃は通さなかったと思われる。射程圏外となる高層階は、もう少し薄い壁になっている。

写真に写っている薄い壁は、1913年に完了した保存工事の際に追加されたものだ。

(2) 石落とし

石垣の基礎に張り出した床の開口部は、石落としと呼ばれる防御装置である。天守閣に侵入してきた敵を攻撃するためのものである。石落としとは、文字通り「石を落とす」ことだが、実際には城を守る鉄砲隊の視線を確保するために設けられたと考えられる。

大天守、乾小天守、渡櫓には11個の石落としが設けられている。各壁の角と中間に開口部を設け、基礎部分を見渡せるようにした。

(3) 基礎と廊下

床の中央部分は、周囲の廊下より約50cm高くなっている。これは、基礎を構成する木製の梁が二重構造になっており、それを隙間から見えるようにするために必要な設計である。

展示品

1階の廊下には、1950年代の修理で城内から運び出された様々な物品が展示されている。

天守閣土塀の一部

これは1950年代に行われた大天守の修理で、2階から取り外された土壁の一部である。厚さは約29cm。縄を巻いた木枠に泥漆喰を塗り重ね、最後に白い石灰漆喰を塗り重ねたものである。

鯨の屋根瓦

鯨は、虎の頭と魚の体を持つ神話上の生き物。鯨の形をした瓦を城の屋根に載せると、火災から守られると信じられていた。かつて大天守の屋根には、この鯨瓦が飾られていた。棟の南端には口を開けた雄の鯨、北端には口を閉じた雌の鯨が置かれていた。

鯨瓦の支柱

天守閣の屋根に鯨瓦を固定するための柱。190cmの柱のうち80cm近くが瓦に食い込んでいたことになる。柱には墨書があり、1843年のものであることがわかる。

土台支柱

この柱は、基礎の地下支持構造を構成していた16本のうちの1本である。1950年代の修理の際、土台を掘り起こしたところ、1本を除いてすべての柱が腐敗し、崩壊していることが判明した。20世紀に入ってから大天守が傾き始めたのは、腐った土台が千トンもの重さを支えきれなくなったためと思われる。

懸魚

城の破風には、このような木製の装飾品がよく飾られている。中国から伝わったもので、もともとは魚の形をしており、木造建築の多い伝統的な建築では、火災から建物を守ると考えられていた。この下駄は、江戸時代（1603-1867）に日本で流行した蕪をモチーフにしたものである。

【タイトル】 国宝松本城 / 大天守：2階(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Second Floor

(1) Latticed Windows

Three sides of the Great Keep's second floor are lined with vertically latticed windows through which gunners could fire down at attackers who attempted to cross the moat. Each slat of the lattices is roughly 13 centimeters wide and 12 centimeters thick to create safe cover while affording visibility.

(2) Carpentry Techniques

When different timbers are joined together to form a single ceiling beam, the spot where they connect is structurally weak. A boat-shaped bracket arm was added to the underside of each connected beam to reinforce the joint. Many of the pillars have also been partially repaired over time, and various methods for joining and reinforcing the pillars and beams can be seen throughout the Great Keep.

Matsumoto Castle Firearm Museum

The second floor of the Great Keep houses the Matsumoto Castle Firearm Museum. The museum's collection was donated by Akahane Michishige and Kayoko, a local husband-and-wife duo of firearm enthusiasts. Of the 141 firearms in the collection, 37 pieces are displayed at the castle alongside other armaments. More information on some of the pieces can be found on the Collections page.

Various Types of Firearms

The museum collection includes a wide variety of firearms, such as matchlock muskets produced at the renowned gunworks in Kunitomo (now Nagahama, Shiga

Prefecture); a massive, high-caliber matchlock weighing 16 kilograms; and firearms incorporated into other weapons. There are also panels explaining how firearms played a decisive role in several famous battles, such as the Battle of Nagashino in 1575.

Firing Mechanisms

One of the displays describes how matchlock firing mechanisms were manufactured. Different types of mechanisms have been disassembled to show how their intricate parts fit together.

Armor and Equipment

The collection includes the typical armor and equipment used by a samurai gunner in the sixteenth century. The set of armor shown here depicts a fully equipped warrior ready for battle: a sword at his waist, a bullet case dangling from his hip, a gourd-shaped gunpowder canister slung over his shoulder, and a ramrod at his back. Adding in the musket itself, the full kit would have weighed just under 20 kilograms.

Events Related to the Firearm Museum

Musket-Firing Demonstration

Twice a year, in spring and autumn, the Matsumoto Castle Gun Corps holds a firing demonstration on the castle grounds. Seeing and hearing the guns as they are loaded and fired, it is easy to imagine what a battlefield of the sixteenth century might have looked like.

Annual Guided Tour

A special tour is held every year. Participants are taught the history of matchlock muskets and Matsumoto Castle, after which they are given the opportunity to handle real muskets under the guidance of the Matsumoto Castle Gun Corps.

For more details on these activities, please see the Event Information page.

Excavations of the Ninomaru Goten Site

Between 1979 and 1984, archaeological excavations were conducted at the site of the Ninomaru Goten in the second bailey. The Ninomaru Goten was an administrative center and the residence of the castle lord, and the objects found in the excavation provide a picture of daily life at Matsumoto Castle.

Salt Pot

This ceramic pot was used to prepare and store a type of baked salt that was considered a luxury good. The inscription on the pot indicates it was produced in the southwestern part of Osaka Prefecture, which was a center of salt production until the Meiji era (1868–1912). Based on the characteristics of the ceramics, the pot is thought to date to sometime after 1726.

Food Remains

A large variety of animal remains were excavated from the Ninomaru Goten site, including the remains of shellfish and bones from fish, mammals, and birds. Some of the fish found at the site, such as yellowtail and sea bream, were caught in either the Sea of Japan or the Pacific Ocean and transported to Matsumoto.

Old Coins

A total of 119 coins were found during the excavations. The lord of Matsumoto Castle, Matsudaira Naomasa (1601–1666), received special permission from the shogunate to mint coins in Matsumoto beginning in 1637, but none of these coins were unearthed at the Ninomaru Goten site.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

2階

(1) 格子窓

大天守の2階の3面には格子窓があり、射撃手が攻撃者を撃ち落とすことができるようになっている。格子の1枚1枚は幅13cm、厚さ12cmほどで、火縄銃の弾を防ぐのに十分な強度がある。

(2) 大工の技術

異なる木材を組み合わせて1本の天井梁を作る場合、その接続部分は構造上弱くなる。そこで、

連結した梁の下側に舟形の留め具アームを付け、接合部を補強している。柱も経年変化で部分的に補修されているものが多く、大天守の随所にさまざまな梁の接合・補強方法を見ることができる。

松本城火縄銃コレクション

大天守の2階には、松本城火縄銃コレクションがある。地元で火縄銃を愛好する赤羽通重・か代子夫妻から寄贈されたもので、141挺の火縄銃とその付属品で構成されている。コレクションページでは、その一部を紹介している。

さまざまな種類の銃器

生産地であった国友（現・滋賀県長浜市）で作られた火縄銃、重さ16キログラムの大口徑火縄銃、擬装された火縄銃など、さまざまな火縄銃を収蔵している。また、1575年の長篠の戦いなど、有名な戦いで火縄銃が決定的な役割を果たしたことを説明するパネルも展示されている。

発射機構

火縄銃の発射機構がどのように作られたかを紹介する展示がある。さまざまな種類の火縄銃を分解して、その複雑な部品の組み合わせがわかるようになっている。

甲冑・装備品

16世紀当時の鉄砲隊の代表的な鎧や装備を展示している。腰には刀、腰には弾倉、肩には瓢箪型の火薬筒、背中には櫓杖と、万全の体制で戦いに臨む武士の姿が描かれています。火縄銃も含めると、その重さは20キログラム弱になる。

コレクションに関連したイベント

火縄銃射撃演武会

松本城鉄砲隊は、春と秋の年2回、城内で射撃の実演を行っている。鉄砲の装填や発射の様子を見することで、16世紀の戦場がどのようなものであったかを想像することができる。

年1回のガイドツアー

毎年9月に特別ツアーを開催している。日本の銃器の歴史を学び、松本城鉄砲隊の指導のもと、本物の火縄銃を扱うことができる。

これらのアクティビティの詳細については、イベント情報のページをご覧ください。

二の丸御殿跡の発掘調査

1979年から1984年にかけて、二の丸御殿跡で発掘調査が行われた。二の丸御殿は城主の居住空間であると同時に行政の中心でもあり、発掘された遺物は松本城の日常生活の一端を物語っている。

塩壺

高級品であった焼き塩を調理・保存するための陶製の壺。銘文から、明治時代まで塩の産地であった大阪府の西南部で生産されたことがわかる。陶磁器の質感から、1726年以降に使用されたものと推定される。

食物関係の遺物

二の丸御殿跡からは、貝類や魚類・哺乳類・鳥類の骨など、さまざまな動物の遺骨が出土している。ブリやタイなど、日本海や太平洋で獲れた魚が松本まで運ばれてきたものもあったようだ。

古銭

発掘調査では、合計119枚の硬貨が発見された。1637年、松本城主・松平直政（1601-1666）は幕府から特別に許可を得て、松本で銭貨を鑄造したが、二の丸御殿跡からは一枚も出ていない。

【タイトル】 国宝松本城 / 大天守：3, 4, 5階(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Third Floor

(1) The Floor without Windows

The third floor of the Great Keep, also called the “hidden floor” or “dark floor,” is concealed within the frame of the second-floor roof. The third floor of the Inui Keep is built in a similar fashion.

While the exact purpose of this floor is unknown, it may have been used for storage. Many of the pillars and beams on the third floor have been roughly finished with an adze, creating a pattern that resembles seashells or fish scales.

Given the low height of the ceiling, it is possible to see the small wooden slats that were added to cover the gaps between the wooden planks. These slats were intended to provide additional strength to the ceiling and prevent it from warping.

An opening in one corner provides quick access to the fourth floor, but its purpose is a mystery.

Fourth Floor

(1) Castle Lord’s Sitting Room

It is thought that the largest room on the fourth floor would have served as temporary quarters for the castle lord during a siege. Compared to the lower floors, the ceilings here are higher, and lavish materials were used to furnish it, such as Japanese cypress

timbers for the pillars. The lord's quarters are partitioned off from the rest of the floor using thin bamboo blinds hung from the lintels.

(2) Steepest Staircase in the Castle

The fourth floor reaches a height of just over 4 meters from floor to ceiling. Since the staircase is placed in a bay between two pillars, it was built at the incredibly steep angle of 61° to accommodate the high ceiling.

In comparison, the staircase on the fifth floor is two bays long and has a short landing in the middle. The fifth floor is around 40 centimeters taller than the fourth floor, which makes its staircase very steep. The landing was added to reduce the risk of a long fall, and the stairs were built across two bays to accommodate it.

Fifth Floor

(1) Council Room

The fifth floor of the Great Keep may have been used as a council room during an attack on the castle. The latticed windows and openings in the roof gables would have allowed generals to look out in all directions over the castle compound. The alcoves on this floor are actually located behind the large gables of the roof.

(2) Pillar Indentations

By the turn of the twentieth century, Matsumoto Castle had fallen into disrepair and had begun to lean. Fearing that the castle would collapse, Kobayashi Unari (1855–1914), the principal of the local middle school, helped establish the Matsumoto Castle Preservation Society in 1901. Repairs to the castle began in 1903 and were finally completed in 1913. According to legend, the workers straightened the Great Keep by hoisting it upright with ropes. Indentations possibly caused by these ropes can be seen on one of the pillars on the north side of the fifth floor.

Reports prepared during the large-scale dismantling and reconstruction of the castle in the 1950s posit that a different method was used: the Great Keep was likely leveled by strategically reducing the length of certain pillars.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

3階

(1) 窓のない階

大天守の3階は「隠し階」「暗闇重」とも呼ばれ、2階屋根の枠の中に隠れるように作られている。乾小天守の3階も同じような構造になっている。

この階の用途は不明だが、物置や攻撃時の避難場所として使われた可能性がある。3階の柱や梁の多くは手斧で荒く仕上げられ、貝殻や魚の鱗のような模様が描かれている。

また、天井の高さが低いため、天井の板と板の間の隙間を埋めるための小さな棧木を見ることができる。これは天井の強度を高め、ゆがみを防ぐためのものである。4階へ上がるための開口部もあるが、その用途は謎である。

4階

(1) 城主の居室

4階で最も広い部屋は、籠城の際の城主の臨時の居室として使用されたと考えられている。下層階に比べ天井が高く、柱には檜材が使われるなど、豪華な内装が施されている。藩主の部屋は、簾で仕切られ、他の階とは区別されている。

(2) 城内一の急階段

4階は床から天井まで4メートル弱の高さがある。この階段は、2本の柱の間の出隅に設置されているため、高い天井に対応するために61°というとてつもなく急な角度で作られている。

それに対して、5階の階段は2段にまたがっており、途中に踊り場が設けられている。5階の天井は4階より40センチほど高いが、階段の長さが2段になっているため、それほど急勾配にする必要はなかった。

5階

(1) 会議室

大天守の5階は、城攻めを受けた際の会議室として使用された可能性がある。屋根の破風にある窓や開口部からは、将軍たちが城内のあらゆる方角を見渡せたことだろう。この階の床の間は、実は屋根の大きな切妻の裏側にある。

(2) 柱のくぼみ目

20世紀に入ってから、松本城は老朽化し、西に傾き始めていた。城の崩壊を恐れた地元の中学校長、小林有也（1855-1914）は、1901年に松本城保存会を設立した。1903年から修理が始まり、1913年によく完成した。大天守を縄で吊り上げて直したという伝説がある。5階北側の柱には、このロープの跡と思われる凹みが見られる。

1950年代に行われた大規模な解体・再建工事の報告書では、大天守を水平にするために、特定の柱の長さを戦略的に短くする方法がとられた可能性が指摘されている。

003-104

Sixth Floor

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 大天守：6階(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Sixth Floor

(1) Guardian Deity of Matsumoto Castle

A shrine just below the roof of the Great Keep is dedicated to a deity named Nijūroku-yashin, who is said to be a guardian of Matsumoto Castle. Legend states that Nijūroku-yashin appeared before a castle guard one evening in the form of a beautiful woman. She declared that the castle lord would prosper if an offering of rice was made on the twenty-sixth night of each month. This practice is said to have begun sometime after Toda Yasunaga (1562–1633) was given control of the castle in 1617.

(2) Cantilever Roof

Cantilevers between the beams and upper rafters support the heavy weight of the tile roof. The underlying principle of this technology is that of a lever: as shown in the diagram, the cantilevers rest on the purlins of the exterior walls, creating a fulcrum. The load of the tiles is balanced by the effort applied through the crossbeams at the center of the roof.

This type of technology was used in temple architecture beginning in the Kamakura period (1185–1333). A smaller version of these cantilevers can also be seen on the fourth floor of the Inui Keep.

桔木	Cantilever
垂木	Upper Rafter
けしよう垂木	Purlin
テコ	Lever
力点	Effort

支点	Fulcrum
作用点	Load

(3) The “Missing” Balcony

During repairs in the 1950s, it was discovered that the outer portion of the sixth floor was originally designed as a veranda with railings. It was later enclosed, perhaps in consideration of Matsumoto’s harsh winters or the risk of damage from rain and wind.

Items on Display

National Treasure Designation Certificate from 1952 (Replica)

Although Matsumoto Castle was first designated a National Treasure in 1930, it was redesignated in 1952, when new cultural preservation laws were implemented following World War II (1939–1945). All five structures of the castle (the Great Keep, the Inui Keep, the Roofed Passage, the Southeast Wing, and the Moon-Viewing Tower) are included in the designation.

Petitions by Ichikawa Ryōzō (Replicas)

In the 1870s, Matsumoto Castle was at risk of being auctioned off and demolished. A local activist named Ichikawa Ryōzō (1844–1908) sent several petitions to the prefectural governor in an effort to save the castle. He argued that the sale should be postponed for 10 years in order to host public exhibitions on the castle grounds. As a result, five exhibitions featuring fine art, crafts, and new technologies were held between 1873 and 1876.

Ichikawa is one of two individuals commemorated on a monument near the entrance to the main bailey.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

6階

(1) 松本城の守護神

大天守の屋根の下にある祭壇には、松本城の守護神といわれる二十六夜神が祀られている。ある晩、見張りの前に現れた二十六夜神は、毎月二十六夜に三石、三斗、三升、三合、三尺の米（合計約500kg）を供えると城主が栄えると告げ、その通りにしたという伝説がある。この習慣は、1617年に戸田康長（1562-1633）が城主となってから始まったと言われている。これは東日本にあった康長の出身地に伝わる民間信仰と関係があったのだろうと考えられる。

(2) 桔木の屋根

瓦屋根の重い重量を支えるために、梁と上垂木の間に桔木を設ける必要があった。この技術の基本原理は「てこの原理」である。図のように、太い桔木が外壁の上に乗って支点となる。瓦の荷重は、屋根の中央にある支柱にかかる力によってバランスが保たれる。

このような技術は、鎌倉時代（1185～1333年）に始まった寺院建築に用いられた。乾小天守の4階には、この桔木を小型化したものも見られる。

(3) 消えたバルコニー

1950年代の修理の際、もともと6階の外側が手すりのついたバルコニーになっていたことがわかった。しかし、松本の冬の厳しさや雨風による被害を考慮してか、後に閉鎖された。

展示品

1952年の国宝指定証（レプリカ）

松本城は1930年に国宝に指定されたが、戦後の文化財保護法の施行に伴い、1952年に国宝に再指定された。大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の5つの建築物すべてが指定対象となった。

市川量造の懇願書（レプリカ）

1870年代、松本城は競売にかけられ、取り壊しの危機にさらされていた。市川量造（1844-1908）は、松本城を守るために県知事宛に嘆願書を送った。彼は、城の売却を10年以上先延ばしにすること、城内で公募展を開催することを主張した。その結果、1873年から1876年にかけて5回の美術展、工芸展、技術展が開催された。これらの懇願書の原本は、松本市立博物館に展示されている。

本丸入口付近には、市川ともう一人の人物に関する記念碑がある。

003-105

The Northwest Tower (*Inui Kotenshu*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 乾小天守(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Northwest Tower (*Inui Kotenshu*)

First Floor (currently closed for construction)

(1) A Mix of Round and Square Pillars

Although the pillars in the Great Keep are square, many of the pillars in the Northwest Tower are round. It is believed that these pillars may have been requisitioned from nearby temples or houses. The round hemlock pillar in the middle of the floor measures nearly 41 centimeters in diameter and dates back to the castle's original construction in the late sixteenth century.

Interestingly, the pillars in the Northwest Tower are spaced 182 centimeters apart, which is notably less than the 197 centimeters between the pillars in the Great Keep. The reason for this difference is unknown, but a separate team of builders may have been responsible for constructing the Northwest Tower.

(2) Stepped Bracket Complex

The additional timbers that connect to the ceiling beams and extend out through the exterior walls at various angles help support the weight of the tiled eaves sheltering the top of the first floor.

Second Floor (currently closed for construction)

(1) *Mizukiri* Rain Gutters

The thickly latticed windows (*musha mado*) on the second floor are fitted with *mizukiri* rain gutters. The gutters channel water to small holes in the windowsills that connect to drainpipes, which direct rainwater away from the walls and prevent it from accumulating on the windowsills.

(2) Rafter Covers

The rafter at each corner of the hipped-roof eaves above the first floor protrudes upward through the corner pillars of the second floor. Wooden covers were attached to protect the crosscut ends of the rafters.

Third Floor (closed to the public)

(1) The Pitch-Dark Floor

The third floor of the Northwest Tower is completely dark. The walls are part of the frame for the second-floor eaves, and there is no room for windows. A similar roof structure is present in the third floor of the Great Keep.

Fourth Floor (closed to the public)

(1) *Katōmado* Windows

The two bell-shaped windows on the fourth floor are called *katōmado* windows. The design was introduced from China during the Kamakura period (1185–1333). This type of window was most often used in Zen Buddhist temples. Despite the windows' origins in religious architecture, affluent warriors began including these elaborate *katōmado* in castles as well as their own houses.

More *katōmado* windows can be seen on the north and south sides of the Southeast Wing's second floor.

(2) Cantilevered Roof

The heavy weight of the tile roof required the addition of cantilevers between the beams and the upper rafters for support. This type of technology was originally used in temple architecture beginning in the Kamakura period (1185–1333). The roof of the Great Keep uses this same cantilevered design.

The underlying principle of this technology is that of a lever. The thick cantilevers rest on the exterior walls, which act as a fulcrum. The weight of the roof presses down on the long end of the cantilevers, which in turn pushes the short ends upward, supporting the weight of the tiled eaves. This balances the weight of the roof along the entire inner structure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

1階（現在工事中のため閉鎖中）

(1) 丸柱と角柱の混在

大天守の柱は角柱だが、乾小天守の柱には丸柱が多い。これは近隣の寺院から接收されたものと思われる。床中央にある直径41センチ近い丸柱は、16世紀末の築城当初のものである。

興味深いのは、乾小天守の柱の間隔が182センチで、大天守の197センチより明らかに短いことである。この理由は不明であるが、乾小天守は別工程で作られた可能性がある。

(2) 段差のある金具の組み合わせ

初重の屋根の垂木を受ける出桁を支えるために、太い腕木が一階天井隅に突き出ている。

2階（現在工事中）

(1) 水切

2階の格子窓（武者窓）には、水切が取り付けられている。この水切は、窓枠に開けられた小さな穴から排水管につながり、壁面から雨水を逃がし、窓枠に雨水がたまるのを防ぐ。

(2) 隅木の覆い

初重の隅棟を構成する隅木が、2階の角柱を突き抜けて内側に突き出ている。隅木の切り口を保

護するために、木製の覆いが取り付けられている。

3階（一般非公開）

(1) 真っ暗な階

乾小天守の3階は真っ暗である。壁は2階の軒先の骨組みの一部であり、窓を設ける余地はない。大天守の3階にも同様の屋根構造が見られる。

4階（一般非公開）

(1) 花頭窓

4階にある2つの鐘の形をした窓は、「花頭窓」と呼ばれるものである。このデザインは、鎌倉時代（1185-1333）に中国から伝来したものである。禅宗の寺院に多く見られた。宗教建築であるにもかかわらず、裕福な武士たちは、城や自分の家にこのような格式の高い窓を取り入れるようになった。

さらに辰巳附櫓2階の北側と南側にも花頭窓が見られる。

(2) 桔木の屋根

瓦屋根は重量があるため、梁と垂木の間に桔木を設けて支える工夫があった。このような技術は、もともと鎌倉時代（1185-1333）から寺院建築に用いられていたものである。大天守の屋根も、この桔木の設計を採用している。

この技術の根底にあるのは「てこ」の原理である。太い桔木が外壁にかかり、支点となる。屋根の重さで、軒先に伸びた桔木の短辺が押される。すると、桔木の長い方の端が上方に押し上げられ、屋根の中央で支持構造体に固定される。その結果、瓦の重量はバランスよく桔木に沿って分散される。

003-106

Roofed Passage (*Watari Yagura*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 渡櫓・辰巳付櫓・月見櫓(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Roofed Passage (*Watari Yagura*)

(1) Entrance to the Castle

Before the Moon-Viewing Tower was added in 1634, the entrance on the ground floor of the Roofed Passage was the only way to access the castle. The massive stone stairs at its entrance lead up to a hallway that connects the Great Keep and the Northwest Tower. The stairs are now covered by a wooden frame that includes handrails to improve safety, but this was only added once the castle was opened to the public.

(2) Curved Ceiling Beam

One of the ceiling beams on the second floor of the Roofed Passage has been left in the natural shape of the tree from which it was made. It was thought that leaving the timbers in their natural shape would allow the beam to flex and bend more easily during an earthquake. Similar curved beams can be seen at other castles, such as Hikone Castle and Kanazawa Castle.

The small bronze plaque on the beam describes the history of preservation efforts at Matsumoto Castle.

Items on Display

A small display on the second floor of the Roofed Passage contains roof tiles and nails that were removed during the deconstruction and restoration of the castle in the 1950s. Of the 84,672 tiles that were stripped from the castle roof at the time of the repairs, 22,396 were salvaged and reused.

Each time a lord of the castle made repairs to the roof, they used tiles decorated with their own family's crest. As a result, the crests of different families can be found side by side on the tiles of the castle roof.

Southeast Wing (*Tatsumi Tsuki-yagura*)

(1) The “Hidden” *Ishi Otoshi*

Viewed from outside, the Southeast Wing has an overhang that appears to be a defensive feature called an *ishi otoshi*. Normally, the overhang would have been open at the bottom, creating a space through which defenders could shoot bows and muskets. In this case, the opening is covered by floorboards.

The overhang was structurally necessary to ensure that the walls of the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower lined up. Had the structure been built during wartime, the floor likely would have been left open, but such defensive features were no longer a priority in the seventeenth century.

(2) Pillars from Wartime and Peacetime

The establishment of the Tokugawa shogunate in 1603 ushered in an era of relative peace, and daimyos no longer needed to prepare for the constant risk of invasion. This shift can be seen when comparing wartime and peacetime structures of the castle. At the threshold between the Great Keep and the Southeast Wing, pillars from each structure are positioned side by side. The pillars in the Southeast Wing were not built to withstand an attack, and they are only about half as thick as those of the Great Keep.

(3) *Katōmado* Window and *Mizukiri* Rain Gutter

The bell-shaped window in the Southeast Wing is called a *katōmado* window. This design originated in China and was often used in Zen Buddhist temples. *Katōmado* windows eventually became incorporated into castle architecture and samurai residences.

An opening called a *mizukiri* was added to the windowsill to prevent rainwater from pooling and damaging the sill. The *mizukiri* directs rainwater out onto the roof through a small pipe.

Items on Display

Containers for gunpowder and other objects from the Matsumoto Castle Firearm Museum are displayed on the second floor of the Southeast Wing. More information about some of these objects can be found on the Collections page.

Moon-Viewing Tower (*Tsukimi Yagura*)

(1) The Defenseless Tower

The Moon-Viewing Tower was added to the castle during the Edo period (1603–1867), a period of lasting peace. As a result, the tower lacks the defensive features of the older portions of the castle. Instead of sturdy walls, three sides of the Moon-Viewing Tower have been fitted with sliding wooden doors that can be removed to provide an outlook over the surrounding castle grounds and a sweeping view of the distant mountains. When gatherings were held, the floor was covered with woven tatami mats.

The Moon-Viewing Tower is said to have been built to host the third Tokugawa shogun, Tokugawa Iemitsu (1604–1651), who had planned to stay at the castle while traveling to Zenkōji Temple. However, a rockslide forced Iemitsu to take a different route, and he never passed through Matsumoto.

(2) Vaulted Ceiling and Vermillion-Lacquered Veranda

The Moon-Viewing Tower contains many elegant touches that would not have been included in a time of war. For example, the tower is encircled by a vermillion-lacquered veranda with handrails that gently curve upward at the corners, and the beams of the vaulted ceiling have been stained using a dye made from persimmon juice to give the wood a reddish glow.

渡櫓

(1) 天守への入り口

1634年に月見櫓ができるまでは、渡櫓の1階にある入り口が城への唯一のアクセス手段であった。入口の重厚な石段は、大天守と乾小天守を結ぶ廊下へと続いていた。現在、階段は安全性を高めるために手すりを含む木枠で覆われているが、これは一般公開が始まってから付け加えられたものである。

(2) 曲がった天井の梁

渡櫓の2階にある天井の梁のうち、1本は元の木の形状を残したままになっている。これは、地震時に伸縮しやすいようにと考えられたものである。彦根城や金沢城など、他の城でも同じような曲線の梁を見ることができる。

梁に取り付けられた小さな銅板には、松本城の保存活動の歴史が記されている。

展示品

渡櫓の2階にある小さな展示室には、1950年代の天守の解体・復元時に取り外された瓦や釘などが展示されている。修理の際に屋根から剥がされた84,672枚の瓦のうち、22,396枚が回収され、再利用された。

城主が屋根の修理をするたびに、自分の家の家紋を入れた瓦を使った。その結果、城の屋根の瓦には、さまざまな家の紋が並んでいる。

辰巳附櫓

(1)「消えた」石落とし

辰巳附櫓は外から見ると、石落としと呼ばれる防御施設と思われる張り出しがある。通常、この張り出しは底が開いており、防御者が弓や火縄銃を撃つことができる空間になっている。この場合、開口部は床板で覆われている。

この張り出しは、辰巳附櫓と月見櫓の壁を合わせるために、構造上必要なものであった。戦時に建てられたのであれば、石落としが設けられたのであろうが、17世紀にはそのような防御的な機能は優先されなくなった。

(2) 戦時中と平時の柱

1603年に徳川幕府が成立すると、比較的平和な時代が到来し、大名は常に侵略の危険に備え

る必要はなくなった。このような変化は、城の構造を戦時と平時で比較するとよくわかる。大天守と辰巳附櫓の間の敷居にはそれぞれの柱が並んでいる。辰巳附櫓の柱は攻撃に耐えられるような構造ではなく、大天守の柱の約半分の太さしかない。

(3) 花頭窓と水切

辰巳附櫓の鐘楼窓は「花頭窓」と呼ばれるものである。中国発祥のデザインで、禅宗の寺院に多く用いられていた。この窓が次第に天守や武家屋敷に取り入れられるようになった。

窓辺には水切と呼ばれる開口部が設けられ、雨水が溜まって窓辺が傷むのを防いでいる。この水切は、雨水が小さなパイプを通して屋根に流れ出るようになっている。

展示品

辰巳附櫓の2階では、松本城鉄砲蔵赤羽コレクションの装備品を展示している。詳しくは収蔵品のページをご覧ください。

月見櫓

(1) 無防備な櫓

月見櫓は、江戸時代（1603-1867）の平和な時代に増築された。そのため、旧来の天守のような防御機能は持たない。天守閣の3面には壁の代わりに木製の引き戸が取り付けられており、これを取り外すと本丸・二の丸と遠くの山々を一望することができる。床には畳が敷かれ、宴が行われた。

月見櫓は、徳川三代将軍・徳川家光（1604-1651）が善光寺参詣をする途中、この城に宿泊するために建てられたといわれている。しかし、家光は落石のため別の道を通り、松本を通過することはなかった。

(2) 船底天井と朱塗りの縁側

月見櫓には、戦時中ではありえないような優雅な演出が随所に施されている。例えば、塔の周囲には朱塗りの縁側があり、その角には緩やかなカーブを描く手すりがついている。また、船底天井は柿渋の染料で赤く染め上げられ、木が赤く輝いている。

【タイトル】 国宝松本城 / 黒門・太鼓門(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kuromon Gate

(1) Inner Gate (*Ichino Mon*)

The Kuromon Gate is now the only entrance to the main bailey. Prior to the late nineteenth century, however, this entrance was reserved for use by the castle lord and high-ranking visitors. A smaller gate located in the northeast of the main bailey would have been used by samurai and workers going about their daily activities.

The word *kuromon* literally means “black gate,” but this name was not necessarily chosen because of the structure’s color. Rather, it reflected the gate’s intended purpose. At the time the gate was built, the color black was associated with formal, public affairs. Buildings and rooms sometimes had “black” in their names to reflect their public-facing roles or uses.

The original Kuromon Gate was demolished in 1871, and the current inner gate was rebuilt in 1960. It is said that, because there were no surviving blueprints available, the architect Ichikawa Kiyosaku based the gate on one at Nagoya Castle. Roof tiles preserved from the castle repairs that took place in the 1950s were reused when constructing the inner gate in 1960. Many of these roof tiles bear the family crests of the different lords that ruled Matsumoto Castle over the centuries.

(2) Outer Gate (*Ni no Mon*) and Courtyard (*Masugata*)

The inner square of the Kuromon Gate was created as an additional defensive measure: enemies attempting to enter the main bailey would be completely exposed to musket fire while attempting to cross the square. The current outer gate was rebuilt in 1989.

Taikomon Gate

During the Edo period (1603–1867), the Taikomon Gate was the main entrance to the second bailey. Like much of the castle, the gate and portions of the surrounding stone wall were demolished in the Meiji era (1868–1912).

The current Taikomon Gate was built in 1999 based on an illustrated map of the castle grounds from the early 1700s. The cypress wood used for the gate is 400 years old, but 140-year-old pine timbers were used for the gate's large, horizontal beams. The gate's eastern side is equipped with loopholes and an *ishi otoshi*, through which defenders could shoot bows and muskets.

The construction date of the original Taikomon Gate is unknown, but it is believed that it was built between 1590 and 1613, when the castle was ruled by the Ishikawa family. Roof tiles covered in gold leaf dating from this period were discovered during excavations around the Taikomon Gate and are now displayed at the Matsumoto City Museum.

(1) Drum Platform

The original Taikomon Gate was named after the drum tower on its north side, which was the location of a *taiko* drum and a bell. These instruments were used to announce the time or alert the surrounding town in the event of an attack.

(2) The Genba Stone

The single largest stone at Matsumoto Castle, called the “Genba Stone,” is located at the corner of the Taikomon Gate. The stone measures 4.5 meters in height and 1.5 meters across and weighs an estimated 22.5 tons. It would have taken an incredible amount of manpower to transport the stone to the castle.

Legend says Ishikawa Yasunaga (1554–1642), the second lord of Matsumoto Castle, rode atop the Genba Stone as it was dragged from the mountains. When one of the laborers complained, Ishikawa dismounted the stone, cut off the man's head, and stuck it on the end of a spear. Climbing back up the rock, he hoisted the spear high in the air and yelled for everyone to start moving again. Thus, the Genba Stone is said to be named after Ishikawa, who served as the top official in a government office called the

上記解説文の仮訳（日本語訳）

黒門

(1) 内門（一の門）

黒門は現在、本丸への唯一の入口である。しかし、19世紀後半以前は、この門は城主や高位の訪問者が使用するためのものであった。また、北東にある小さな門は、武士や労働者が日常的に使用するものであった。

黒門とは、文字通り「黒い門」という意味であるが、必ずしもその色から名付けられたわけでない。むしろ、この門の目的を反映したものである。この門が建てられた当時、「黒」は公的なものを連想させる色であった。建物や部屋の名前にも「黒」がつくのは、公共的な役割や用途を反映したものである。

黒門は1871年に取り壊され、現在の内門は1960年に再建されたものである。現存する設計図がなく、設計者の市川清作は名古屋城の門を参考にしたと言われている。1960年の門の建設にあたっては、1950年代に行われた城の修理で保存されていた屋根瓦を再利用した。この瓦には松本城の歴代城主の家紋が描かれているものが多い。

(2) 外門（二の門）と中庭（枡形）

黒門の枡形は防御策として作られたもので、本丸に入ろうとする敵は、枡形で一の門を破る前に火縄銃の攻撃にさらされることになる。現在の外門は1989年に再建されたもの。

太鼓門

江戸時代（1603-1867）には、二の丸への主要な出入り口として太鼓門があった。明治時代（1868-1912）、城内の多くの施設と同様に、門と周囲の石垣の一部が取り壊された。

現在の太鼓門は、1700年代初頭に描かれた城下町の絵図をもとに、1999年に建てられた。門に使われているヒノキは樹齢400年であるが、門の大きな横木には樹齢140年の松材が使われている。門の東側には狭間があり、そこから弓やマスを射ることができる石落としも設置されている。

元の太鼓門の建築年代は不明だが、石川氏が城主だった1590年から1613年の間に建てられたとされる。太鼓門周辺の発掘調査により、この時代の金箔を貼った瓦が発見され、現在、松本市博物館で展示されている。

(1) 太鼓楼

北側門台上に太鼓楼があり、鐘と太鼓が備えられていたことから、太鼓門と呼ばれるようになった。太鼓と鐘は、時刻を知らせたり、非常時の合図を周囲の町に知らせたりするために使われた。

(2) 玄蕃石

松本城で最も大きな石は、玄蕃石と呼ばれ太鼓門の角にある。高さ4.5m、直径1.5m、重さ22.5tと推定される。この石を城まで運ぶには、大変な人手が必要であつたろう。

松本城二代目城主の石川康長（1554-1642）は、山から引きずり出された玄武岩の上に乗ったという伝説が残っている。石川は、玄武岩の上に乗し、山から引きずり出すときに、労働者の一人が文句を言うと、石を降りて、その人の首を切り落とし、槍の先に突き刺した。そして、石に登り返すと、槍を高く掲げて、皆に再び動き出すように叱咤激励した。このように、玄蕃石は、玄蕃頭の官職をもつ役所のトップを務めた石川にちなんで名づけられたと言われている。

003-108

Honmaru Goten Site

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 本丸御殿跡・二の丸御殿跡
(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Honmaru Goten Site

Black tiles on the lawn in front of the castle mark where the Honmaru Goten once stood. The Honmaru Goten served as the lord's residence and an administrative center for Matsumoto domain. The structure occupied roughly 2,730 square meters of the main bailey. Two separate, auxiliary structures (the Ninomaru Goten and the Kosanji Goten) were located in the second bailey.

The diagram to the right shows the layout of the Honmaru Goten. It comprised five wings and contained over 60 rooms. A fence surrounded the building, separating it from the castle to the west and a row of stables to the north.

The Honmaru Goten burned down in 1727. Despite its importance, the building was never rebuilt. A new lord, Toda Mitsuchika (1712–1732), had just been granted control of Matsumoto Castle the previous year, and he decided to reestablish his residence and the administrative offices in the Ninomaru Goten.

The southern part of the Honmaru Goten had many rooms for receiving guests. There was a stage for holding performances of Noh plays and various reception halls for holding audiences, ceremonies, or other formal gatherings. The rooms in the center of the structure were the offices of the highest-ranking officials.

The northern part of the Honmaru Goten was the private quarters of the castle lord. The farthest northern edge of the structure contained additional storage space and rooms for servants. A large kitchen was located to the east of this area. It is said that

one of the gardens contained a building with a Japanese-style clock, which marked the official time that was announced using the drum at the Taikomono Gate.

Ninomaru Goten Site

It is thought that both the Honmaru Goten and the Ninomaru Goten were built around 1594, along with the three oldest structures of the castle: the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage. However, some historical documents indicate the Ninomaru Goten may have been built later, around 1633, when Matsumoto Castle was ruled by Matsudaira Naomasa (1601–1666).

Covering 1,980 square meters and containing around 50 rooms, the Ninomaru Goten was smaller than the Honmaru Goten. Until the latter burned down in 1727, the Ninomaru Goten functioned as a secondary administrative hub for the castle. After the fire that destroyed the Honmaru Goten, the lord's residence and most of the offices were moved to the Ninomaru Goten. To account for the building's smaller size, some of the offices had to be relocated to the surrounding town.

The main entrance to the Ninomaru Goten was at its southern end, and there was another, less formal entrance at the middle of the eastern side. Entering from the south, visitors first arrived in a large hall that led to various smaller reception rooms. This layout was identical to that of the Honmaru Goten, but at two-thirds the scale. However, in the Ninomaru Goten, the lord's residential quarters were located past the reception rooms, and the offices for high-ranking officials were located at the northern end of the structure. This portion of the layout is the opposite of what had existed in the Honmaru Goten. The Ninomaru Goten also had a kitchen that spanned the building's northeast side.

Following the Meiji Restoration in 1868, the Ninomaru Goten served as the Chikuma Prefectural Office until it burned down in 1876. A series of archaeological excavations was carried out at the site beginning in 1979, which uncovered a variety of artifacts that provide a glimpse of daily life at Matsumoto Castle. Markings on the ground recreate the basic plan of the structure and give a sense of the layout.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本丸御殿跡

天守の前の芝生の中の瓦を使った仕切りは、かつて本丸御殿があった場所を示している。本丸御殿は、城主の居城であり、藩の行政の中心であった。本丸御殿の面積は約2,730平方メートル。二の丸には二の丸御殿と古山地御殿という2つの御殿があった。

右の図は、本丸御殿のレイアウトを示したものである。5つの棟からなり、60以上の部屋があった。西側には天守、北側には本丸裏口付近の馬屋があり、堀で囲まれていた。

本丸御殿は1727年に焼失した。重要な建物であったにもかかわらず、再建されることはなかった。前年に松本城の支配権を得たばかりの戸田光慈（1712-1732）は、二の丸御殿に居館と行政機関を置くことにした。

本丸御殿の南側には、賓客を迎えるための部屋が多数あった。能舞台をはじめ、接客や式典、評議などを行うための諸広間があったという。中央の部屋は高級官僚の執務室として使われた。

本丸御殿の北側は、城主の私室であった。本丸御殿の北側は城主の私室で、一番北の端には物置や使用人の部屋があった。また、この東側には大きな台所もあった。庭園には和時計の置かれている部屋があり、太鼓門の太鼓で時刻を知らせたと言われている。

二の丸御殿跡

本丸御殿と二の丸御殿は、大天守、乾小天守、渡櫓という城内最古の三つの建物とともに、1594年頃に建てられたと考えられている。しかし、二の丸御殿は、松本城が松平直政（1601-1666）の時代、1633年頃に建てられたとする史料もある。

二の丸御殿は、広さ1,980平方メートル、部屋数50ほどで、本丸御殿より規模が小さかった。二の丸御殿が存在した当時は、二の丸御殿は城の第二の行政拠点として機能していた。1727年に本丸御殿が焼失した後、城主の住居と役所の大半は二の丸御殿に移された。二の丸御殿は広くはないため、一部の役所は周辺の町内に移さざるを得なかった。

二の丸御殿の正面玄関は南端にあり、東側の中央部にも内玄関がある。南側から入ると、まず大きな広間があり、そこからいくつもの小さな応接室が続いている。この配置は、本丸御殿と同じであるが、規模は2/3である。しかし、二の丸御殿では、この次に藩主の住居があり、その北端に上級官僚の執務室があった。この部分は、本丸御殿とは逆の配置になっている。また、二の丸御殿の北

東側には台所もあった。

二の丸御殿は、1868年の明治維新後、1876年に焼失するまで筑摩県庁として使用された。1979年から行われた発掘調査により、松本城の日常生活を知ることができるさまざまな遺物が出土した。地面の印は、建物の基本的な図面を再現しており、レイアウトを知ることができる。

【タイトル】 国宝松本城 / 市川量造と小林有也のレリーフ
 (webサイト)
 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Portraits of Castle Benefactors

Two portraits in bronze relief depict Ichikawa Ryōzō and Kobayashi Unari, two Matsumoto citizens whose advocacy and fundraising saved Matsumoto Castle from destruction.

Ichikawa Ryōzō (1844–1908)

Ichikawa Ryōzō, shown on the left in traditional attire, was a merchant and town administrator born in Yokota, a town to the south of Matsumoto. In 1872, he learned that the national government had auctioned off the castle, which almost certainly meant that it would be demolished. Hoping to prolong the castle's life, Ichikawa petitioned the prefectural governor to delay the demolition for 10 years, during which Ichikawa would hold museum exhibitions inside the castle. Through these exhibitions, Ichikawa hoped to foster public education and give people a chance to experience an important part of Matsumoto's history. His petition was granted in 1873, and the first of five exhibitions was held in Matsumoto Castle that same year. The exhibition was massively popular, sometimes drawing thousands of visitors in a single day. Thanks to Ichikawa's efforts, the castle was ultimately saved from demolition.

Kobayashi Unari (1855–1914)

Kobayashi Unari, shown on the right in Western clothing, was born to a samurai family from what is now southwestern Osaka. He studied physics in Tokyo, then came to Matsumoto in 1885 as the first principal of its prefectural middle school.

By the start of the twentieth century, Matsumoto Castle had begun to lean, and parts of

its roof were in danger of collapsing. Although Ichikawa's efforts had saved the castle from demolition decades earlier, it was at risk of being destroyed by time and neglect. In 1901, Kobayashi took action by founding the Matsumoto Castle Preservation Society and launching a nationwide fundraising campaign. The society's efforts raised ¥20,000 in donations, a considerable sum at the time and enough to finance a major restoration.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

その他の見どころ

城の恩人の肖像画

市川量造と小林有也の2人の松本市民が、松本城の破壊を防ぐために資金調達を行ったのを顕彰した肖像のブロンズレリーフである。

市川量造(1844-1908)

左の写真の市川量造は、松本町の下横田町の商人であり町政を担当した。1872年、松本城が国から競売にかけられ、取り壊されることがほぼ確実となったことを知った。これを阻止するため、市川は県知事に対して、本丸内で博覧会を開くことを強く願い出た。1873年、この陳情が認められ、同年から1876年までに、松本城で5回にわたる博覧会が開催され、1日に数千人の市民が訪れた日もあったという。市川の尽力により、松本城は取り壊しの危機を脱したのである。

小林有也(1855-1914)

右の写真の洋装の小林有也は、大阪南西部の武士の家に生まれた。東京で物理学を学んだ後、1885年に松本の県立中学の初代校長として赴任した。

20世紀に入ると、松本城は傾き始め、屋根の一部が崩れ落ちる危険性があった。市川の努力で取り壊しは免れたが、このままでは朽ち果ててしまうかもしれない。1901年、小林は「松本天守保存会」を設立し、全国で資金集めを開始した。その活動により、当時としては破格の2万円もの寄付金が集まり、大規模な修復を行うことができた。

003-110

Stone Lantern Dedicated by Mizuno Tadanao

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 水野忠直奉献灯籠・戸田家の灯籠・
小笠原牡丹(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Stone Lantern Dedicated by Mizuno Tadanao

The ornate stone lantern on the southern side of the Honmaru Garden was originally a gift from Matsumoto's Lord Mizuno Tadanao (1652–1713) to Kan'eiji Temple in Tokyo. He donated it in 1681 in memory of the fourth Tokugawa shogun, Ietsuna (1641–1680). In 1953, the lantern was brought back to Matsumoto by a resident who purchased it from the temple.

Toda Family Stone Lanterns

Three stone lanterns and a stone washbasin stand in the perimeter of the Honmaru Garden. They originally stood on the grounds of a residence in Edo (now Tokyo) owned by the Toda family, who were lords of Matsumoto Castle between 1617 and 1633 and again between 1726 and 1869.

Ogasawara Peonies

The white peonies in the Honmaru Garden have nearly 500 years of history. In 1550, the Matsumoto region was ruled by the Ogasawara family, but the warlord Takeda Shingen (1521–1573) was moving to attack them from the south. Ogasawara Nagatoki (1514–1583) decided to flee, but he preserved his treasured white peonies by having them moved to Tosenji Temple. Over the centuries, the peonies were maintained and propagated by one of the temple's parishioner families, who later donated the flowers that now grace the castle garden.

Komatsunagi Cherry Tree

A cherry tree in the Honmaru Garden is associated with a colorful castle legend: in the

1590s, lord Ishikawa Yasunaga (1554–1642) hosted fellow daimyo Katō Kiyomasa (1562–1611) at Matsumoto Castle. At the end of Kiyomasa’s stay, Yasunaga offered him one of two peerless horses. Kiyomasa famously took both.

Kiyomasa is said to have tied his steeds to a cherry tree before departing, and the current Komatsunagi (“horse-tether”) Cherry Tree is the modern successor to the tree of legend.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

水野忠直奉献灯籠

本丸庭園南側の石灯籠は、松本城主水野忠直（1652-1713）が東京の寛永寺に寄進したものである。1681年、徳川4代将軍家綱の菩提を弔うために寄贈された。1953年、同寺から購入した住職が松本に持ち帰り、現在に至っている。

戸田家石灯籠

本丸庭園の外周には、3基の石灯籠と手水鉢が飾られている。元々は、1617年から1633年、1726年から1869年にかけて松本城を支配した戸田家の江戸（現在の東京）の屋敷の敷地内にあったものである。

小笠原牡丹

本丸庭園の白牡丹は、500年近い歴史を持つ。1550年、松本地方は小笠原氏の支配下にあったが、戦国武将・武田信玄（1521-1573）が南東から攻め入る動きを見せていた。小笠原長時（1514-1583）は逃亡を決意するが、大切にしていた白牡丹を兎川寺に移し、保存した。その後、寺の檀家が牡丹を管理・増殖し、そのうちの一人が現在の城の庭を飾る花を寄贈している。

駒つなぎの桜

本丸庭園の桜にまつわる城の伝説がある。1590年代、石川康長（1554-1642）が加藤清正（1562-1611）を松本城で歓待した。その際、康長は清正に2頭の名馬のうちの1頭を贈ろうとしたところ、清正が2頭とも連れ帰ったことは有名な話である。

清正は出発前にその馬を桜の木に繋いだと言われており、現在の駒つなぎの桜はその伝説の後継者である。

【タイトル】 戊辰戦争出兵記念碑・全国城郭管理者協議会加盟
の城写真(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Boshin War Memorial

This tall stone monument commemorates the 261 samurai from Matsumoto who fought in the Boshin War (1868–1869), a conflict between the forces of the last Tokugawa shogun and revolutionaries who supported a return to imperial leadership. The Boshin War was the first stage of the Meiji Restoration, which brought about the end of the Tokugawa shogunate (1603–1868), initiated sweeping social and political changes, and ushered in the country's rapid industrialization.

Matsumoto domain ultimately sided with the imperial loyalists, and on February 29, 1868, the daimyo sent troops to lend support in several regions north and northwest of Edo (now Tokyo). Their battles are described in the inscription on the front of the monument, and the name, position, and fate of each of the 261 Matsumoto samurai is recorded on the back.

Castles of the National Council of Castle Overseers

A long wall lined with castle photographs marks the southern border of the Honmaru Garden. The castles pictured there are all associated with the National Council of Castle Overseers, a coalition of local officials and castle administrators that oversees the operation of castles throughout the country.

Each photo is accompanied by information that includes the castle's name, any nicknames it may have, its location, its type (mountain castle, flatland castle, etc.), its builder, and the year of its construction.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

戊辰戦争記念碑

この高い石碑は、戊辰戦争（1868-1869）で戦った松本藩士261名を記念して建てられたものである。戊辰戦争は明治維新の第一段階であり、徳川幕府（1603-1868）の終焉、社会と政治の大転換、工業化の急速な進展のきっかけとなった。

松本藩は、1868年2月29日、江戸（現在の東京）の北西部に兵を派遣し、討幕派に味方した。碑の表面には戦いの様子が、裏面には261名の松本藩士の名前、立場、運命が記されている。

全国城郭管理者協議会加盟の城

本丸庭園の南側には、城の写真を並べた長い塀がある。ここに写っている城はすべて、全国の城の運営を管理する地方公共団体や城郭管理者の連合体である「全国城郭管理者協議会」に加盟している城である。

【タイトル】 国宝松本城 / 古山地御殿跡・若宮八幡跡
(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Kosanji Goten Site

The Kosanji Goten once stood to the south of the Kuromon Gate. It is believed to have been constructed in the late sixteenth century as a private retreat for Ishikawa Kazumasa (d. 1592), the first lord of Matsumoto Castle. The building was named after Kazumasa, who also went by the name “Kosanji.”

The Kosanji Goten was a small building of only 30 rooms. It covered roughly 587 square meters, only a quarter the size of the Honmaru Goten. Based on a drawing from around 1712, an area in the center of the building was left open as a garden. There were living quarters on its south side and facilities such as the kitchen on the north side. The inclusion of a bath, a tearoom, and space for keeping hawks for hunting indicates that the Kosanji Goten was primarily intended as a private recreation space for the castle lord.

After the Honmaru Goten burned down in 1727, the Kosanji Goten was later renovated and expanded by Toda Mitsuo (1716–1757), second lord of the castle during the Toda family’s latter appointment.

Former Site of Wakamiya Hachiman Shrine

Wakamiya Hachiman Shrine was located in the second bailey. It is said that the shrine was originally built in the early sixteenth century to honor Shimadachi Sadanaga (d. 1517), a retainer of the Ogasawara family. Shimadachi is credited with constructing Fukushima Castle, a defensive fortification that was the precursor to Matsumoto Castle.

Wakamiya Hachiman Shrine is now located on the grounds of Matsumoto Jinja Shrine, just north of the castle.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

古山地御殿跡

古山地御殿は、16世紀後半、松本城の初代城主である石川数正（1592年没）の私邸として建てられたとされている。建物の名前は、数正が "箇山寺" と名乗っていたことにちなんでいる。古山地御殿の跡地は、現在、旧博物館前広場になっている。

古山地御殿は、面積が約587平方メートルで、本丸御殿の4分の1、部屋数も30室と小規模なものであった。1712年頃の絵図をもとに、建物の中央に坪庭が設けられている。南側に座敷、北側に台所などの設備があった。風呂や茶室、タカの飼育室などもあり、古山地御殿は城主のプライベートな憩いの場として作られたことがわかる。

本丸御殿は1727年に焼失し、古山地御殿は当時の城主戸田光慈（1716-17357）によって改修・増築された。

若宮八幡神社旧社地

若宮八幡神社は、二の丸にあった。小笠原家の家臣である島立貞永（1517年没）を祀るために、16世紀初頭に創建されたのが始まりとされている。島立は、松本城の前身である深志城を築城したと伝えられている。

現在、城のすぐ北側にある松本神社の境内に若宮八幡神社がある。

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城の歴史：松本城築城以前
(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The History of Matsumoto Castle

Before the Construction of Matsumoto Castle

(1) Various Mountain Castles

Even before Matsumoto Castle was built in the late sixteenth century, the surrounding mountains were dotted with castles. During the many regional conflicts of the Warring States period (1467–1600), warlords called “daimyos” built networks of wooden or stone castles to defend their territories. These are a few representative examples of the fortifications that stood in the mountains surrounding the Matsumoto basin.

1. Hayashi Castle (Ōjō and Kojō)

Hayashi Castle was built by the Ogasawara family, who governed Shinano Province (now Nagano Prefecture), of which Matsumoto domain was a part. Hayashi Castle stood in what is now the Yamabe District of Matsumoto. It comprised two separate structures called “Ōjō” and “Kojō” that were located on opposite ends of a horseshoe-shaped mountain ridge. In 1550, the powerful daimyo Takeda Shingen (1521–1573) attacked the area, and the Ogasawara abandoned Hayashi Castle. Portions of the stone wall that surrounded the central bailey at Kojō still remain today.

2. Kiriwara Castle and Yamabe (Nakairi) Castle

These two castles were located deep in the mountains beyond Hayashi Castle. Kiriwara Castle belonged to the Kiriwara family and was positioned on a strategic mountain pass. Yamabe Castle, also called Nakairi Castle, belonged to the Yamabe family. Its 2.5-meter-high stone walls are still visible at the site today.

3. Haibara Castle

Haibara Castle was a large castle located in what is now the Nakayama District of Matsumoto. It is not known which warlord built this castle.

4. Shinagura Castle

Located in what is now the Okada District of Matsumoto, Shinagura Castle was controlled by the Gochō family.

5. Kokūzōsan Castle

Kokūzōsan Castle originally belonged to the Aida family and stood in what is now the Aida District of Matsumoto. Following the defeat of the Ogasawara family by the armies of Takeda Shingen in 1550, Kokūzōsan Castle occupied a frontline in the fighting between Takeda and his longtime rival, Uesugi Kenshin (1530–1578). Uesugi was based in Echigo Province (now Niigata Prefecture), to the north of Matsumoto.

6. Hirase Castle

Located in what is now the Shimauchi District of Matsumoto, Hirase Castle was controlled by the Hirase family. The Ogasawara family took refuge at Hirase Castle after being forced to flee Hayashi Castle in 1550. It was from Hirase Castle that the Ogasawara family planned their counterattack.

7. Inukai Castle

The Jōyama District of Matsumoto once belonged to the Inukai family, and they built a fort at this site in the 1400s. Today, the area is a popular place to view cherry blossoms in spring.

8. Igawa Castle

Unlike other castles in this region, Igawa Castle was built on the plains rather than in the mountains. It was the original base of the Ogasawara family until the construction of Hayashi Castle.

9. Shimizu Castle

It is thought that Shimizu Castle was controlled by the Shimadachi family, who were retainers of the Ogasawara family. The castle occupied what is now the Shimadachi

District of Matsumoto. Although little remains at the site today, Shimizu Castle is another example of a castle built on the plains, like Igawa Castle.

稲倉城	Shinagura Castle
伊深城	Ibuka Castle
平瀬城	Hirase Castle
早落城	Hayaochi Castle
横屋入城	Yokoyairi Castle
犬甘城	Inukai Castle (Jōyama)
桐原城	Kirihara Castle
深志城	Fukashi Castle
清水城	Shimizu Castle
林城	Hayashi Castle
中入城	Nakairi Castle
井川城	Igawa Castle
埴原城	Haibara Castle
小屋城	Koya Castle
赤木城	Akagi Castle
八間長者城	Hakken-chōja Castle

『わたしたちの松本城』P.58 から	Source: <i>Watashitachi no Matsumoto-jō</i> (Our castle, Matsumoto castle), p. 58.
井川城	Igawa Castle
若宮八幡跡	Former Site of Wakamiya Hachiman Shrine

(2) Fukashi Castle

It is thought that prior to the construction of Matsumoto Castle, the site was occupied by a smaller fortification called Fukashi Castle. However, little is definitively known about this earlier structure or how its layout might have influenced the subsequent layout of Matsumoto Castle.

During the early Muromachi period (1336–1573), the small township of Fukashi-gō was ruled by the Sakanishi family, and it is thought they had some form of fortified manor there. It was only later, in 1504, that a retainer of the Ogasawara family named Shimadachi Sadanaga (d. 1517) built Fukashi Castle.

The Ogasawara family controlled the area around Matsumoto for many years, but in 1550 a neighboring daimyo named Takeda Shingen (1521–1573) attacked Hayashi Castle and drove Ogasawara Nagatoki (1514–1583) to the north. Shingen then established his regional headquarters at Fukushima Castle, and it is likely that he made repairs and expanded the fortifications.

Shingen's descendants controlled Fukushima Castle until 1582, when the Takeda family was wiped out by Oda Nobunaga (1534–1582). The area then came under the control of the warlord Uesugi Kenshin (1530–1578), who placed Fukushima Castle in the hands of one of his retainers. Ogasawara Nagatoki's son Ogasawara Sadayoshi (1546–1595) later took back control of Fukushima Castle, and to mark the return of the Ogasawara family to the area, he gave the region a new name: "Matsumoto."

Despite their victory, the Ogasawara family did not remain in Matsumoto for long. In 1590, only eight years after their long-awaited return, they were relocated to eastern Japan. This relocation was ordered by Toyotomi Hideyoshi (1537–1598), the most powerful daimyo at the time, who granted control of Matsumoto to his ally Ishikawa Kazumasa (d. 1592).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の歴史

松本城築城以前

(1) さまざまな山城

松本城が築城される16世紀後半以前から、周辺の山々には城が点在していた。戦国時代の各地域の争いの中で、大名と呼ばれる武将たちは、領地を守るために城のネットワークを構築した。ここでは、松本盆地を囲む山々の城のうち、代表的なものを紹介する。

1. 林城（大城・小城）

松本がある信濃国（現在の長野県）を治めていた小笠原氏によって築かれた城。林城は、現在の松本市山辺地区にあった。林城は、馬蹄形の尾根の両端に位置する大城と小城の2つの城郭からなる。1550年、武田信玄（1521-1573）がこの地を攻め、小笠原氏は林城を放棄した。

小城の主郭には石積みの一部が現在も残っている。

2. 桐原城と山辺（中入）城

林城の対岸の山奥にある2つの城。桐原城は桐原氏の城で、戦略的に峠の道筋を押さえる地点に位置していた。山辺城は中入城とも呼ばれ、山辺氏の城である。高さ2.5mの石積みは現在も現地で見ることができる。

3. 埴原城

埴原城は、現在の松本市中山地区にあった大きな城である。どの武将が築城したかは不明。

4. 稲倉城

現在の松本市岡田地区にあった、後序家の居城。

5. 虚空蔵山城

会田氏の居城で、現在の松本市会田地区にあった。1550年、武田信玄が小笠原氏を破った後、信玄と、松本の北にある越後国（現在の新潟県）を本拠とする宿敵上杉謙信（1530-1578）の戦いの最前線となった。

6. 平瀬城

平瀬城は、現在の松本市島内地区にあり、平瀬氏が支配していた。小笠原氏は1550年に林城を追われ、平瀬城に逃れてきた。小笠原氏は平瀬城から反撃の計画を練った。

7. 城山城

松本市城山地区はかつて犬甘氏の領地であり、1400年代には犬甘氏がこの地に砦を築いた。現在では、春になると桜の名所として親しまれている。

8. 井川城

井川城は、この地域の他の城とは異なり、山ではなく平地に築かれた城である。林城が築かれるまでは、小笠原氏の本来の拠点であった。

9. 清水城

清水城は、小笠原家の家臣である島立家が支配していたと考えられている。この城は現在の松本市島立地区にあった。現在はほとんど残っていないが、清水城も井川城と同様に平地に築かれた城の一つである。

(2) 深志城

松本城築城以前、この地には深志城と呼ばれる小規模な城郭があったと考えられている。しかし、この深志城が松本城にどのような影響を与えたかについては、ほとんど分かっていない。

室町時代初期（1336-1573）、深志郷は坂西家によって統治されており、何らかの荘園を有していたと思われる。その後、1504年に小笠原家の家臣である島立貞永（1517年没）が深志城を築いた。

小笠原氏は長く松本周辺を支配したが、1550年、武田信玄（1521-1573）が林城を攻め、小笠原長時（1514-1583）を北に追いやった。その後、信玄は深志城に本拠を構え、城の修理や拡張を行ったと思われる。

武田家は1582年、織田信長（1534-1582）によって滅ぼされるまで深志城を支配した。その後、この地は戦国大名上杉謙信（1530-1578）の支配下に置かれ、謙信は家臣の一人に深志城を預けた。その後、小笠原長時の子、小笠原貞慶（1546-1595）が深志城を奪還し、小笠原氏の帰還を記念して、この地を「松本」と改名した。

勝利したとはいえ、小笠原家が松本に長く留まることはなかった。1590年、待望の帰還からわずか8年後、東日本に移封された。豊臣秀吉（1537-1598）は松本の支配権を彼の側近である石川数正（1592年没）に与えた。

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城の歴史：松本城の築城・江戸時代の松本(webサイト)
 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Construction of Matsumoto Castle

(1) The Arrival of the Ishikawa Family

Ishikawa Kazumasa (d.1592) was a longtime retainer of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the eventual founder of the Tokugawa shogunate. Kazumasa was even entrusted with guarding Okazaki Castle, where Ieyasu had been born. However, in 1585, Kazumasa suddenly deserted and allied himself with Toyotomi Hideyoshi (1537–1598). In reward, he was granted control of Izumi Province (now southern Osaka Prefecture). When Hideyoshi removed the Ogasawara family from Matsumoto Castle in 1590, he chose the Ishikawa family to replace them.

(2) Building the Castle Keep

Kazumasa and his eldest son, Ishikawa Yasunaga (1554–1642), improved the castle grounds and began work on Matsumoto Castle. Kazumasa died only three years after his arrival in Matsumoto, but Yasunaga oversaw the completion of the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage.

The initial stages of construction are described in an eighteenth-century text on the history and geography of the region called *Shinpu tōki* (Compiled Chronicles of Matsumoto):

“Kazumasa built [the Kosanji Goten] in the second bailey and started planning the layout of the castle. Yasunaga continued his father’s work: he erected the keep, dug the outermost moat, increased the height of the earthen embankments, then laid the stone foundation for the castle, built the Roofed Passage, Kuromon Gate, and

Taikomon Gate, repaired the walls, and built a tower above the gate to the third bailey. He built most of the plaster walls around the outermost moat and repaired the residences within the castle compound. He also built residences for his samurai retainers.”

Matsumoto Castle during the Edo Period (1603–1867)

(1) Lords of the Castle

During the Edo period, Matsumoto Castle was governed by 23 successive lords from six families. The castle was the administrative center of Matsumoto domain, which roughly corresponds to what is now the Chūshin region of Nagano Prefecture. At this time, the country was divided into hundreds of such domains, and daimyos were appointed to govern them by order of the Tokugawa shogunate. Daimyos who were loyal to the shogunate would often be relocated to more prestigious domains or given an increased stipend, which was measured in units of rice called *koku*. Matsumoto’s strategic location and subsequently large stipend made it desirable, and the daimyos that governed the domain were often closely related to the shogun or his family.

Family Name	Given Name	Period of Rule
Ishikawa	Kazumasa	1590–1592
	Yasunaga	1592–1613
Ogasawara	Hidemasa	1613–1615
	Tadamasa (Tadazane)	1615–1617
Toda	Yasunaga	1617–1632
	Yasunao	1633–1633
Matsudaira	Naomasa	1633–1638
Hotta	Masamori	1638–1642
Mizuno	Tadakiyo	1642–1647
	Tadamoto	1647–1668
	Tadanao	1668–1713
	Tadachika	1713–1718
	Tadamoto	1718–1723
	Tadatsune	1723–1725
Period of Direct Control by Tokugawa Shogunate		
Toda	Mitsuchika	1726–1732
	Mitsuo	1732–1756
	Mitsuyasu	1756–1759
	Mitsumasa	1759–1774
	Mitsuyoshi	1774–1786
	Mitsuyuki	1786–1800
	Mitsutsura	1800–1837

	Mitsutsune	1837–1845
	Mitsuhisa	1845–1869

Family	High-Level Government Positions	Stipend (<i>kokudaka</i>) 1 <i>roku</i> ≈ 180L	Previous Post	Next Post
Ishikawa	<i>Hōki no kami</i> (“Lord of Hōki Province”): Kazumasa <i>Genba no kami</i> (“Chief of Temples and Foreign Affairs”): Yasunaga	80,000 <i>roku</i>	Izumi Province	Stripped of rank, land seized
Ogasawara	<i>Shinano no kami</i> (“Lord of Shinano Province”): Hidemasa <i>Ukon no taifu</i> (“Fifth-Rank Magistrate of the Right”): Tadazane	80,000 <i>roku</i>	Shinano Province, Iida domain	Harima Province, Akashi domain (10,000 <i>roku</i>)
Toda	<i>Tanba no kami</i> (“Lord of Tanba Province”): Yasunaga <i>Sado no kami</i> (“Lord of Sado Province”): Yasunao	70,000 <i>roku</i>	Kōzuke Province, Takasaki domain	Harima Province, Akashi domain (70,000 <i>roku</i>)
Matsudaira	<i>Dewa no kami</i> (“Lord of Dewa Province”): Naomasa	70,000 <i>roku</i>	Echizen Province, Ōno domain	Izumo Province, Matsue domain (186,000 <i>roku</i>)
Hotta	<i>Kaga no kami</i> (“Lord of Kaga Province”): Masamori	100,000 <i>roku</i>	Musashi Province, Kawagoe domain	Shimōsa Province, Sakura domain (110,000 <i>roku</i>)
Mizuno	<i>Hayato no shō</i> (“Commander of the Hayato”): Tadakiyo and others <i>Dewa no kami</i> (“Lord of Dewa Province”): Tadamoto and others	70,000 <i>roku</i>	Mikawa Province, Yoshida domain	Land confiscated

	<i>Hyūga no kami</i> (“Lord of Hyūga Province”): Tadamoto (r. 1718–1723)			
Toda	<i>Tanba no kami</i> (“Lord of Tanba Province”)	60,000 <i>koku</i>	Shima Province, Toba domain	Abolition of the domain system (<i>haihan-chiken</i>)

(2) Major Events

This timeline describes some of the key events in the history of Matsumoto Castle and the surrounding domain.

Year	Event	Ruling Family
1504	Shimadachi Sadanaga constructs Fukashi Castle (according to available records).	
1550	Takeda Shingen attacks Fukashi Castle, forcing Ogasawara Nagatoki to flee. Shingen begins renovations of Fukashi Castle.	
1582	Oda Nobunaga defeats Takeda Katsuyori, functionally eradicating the Takeda family. After a brief clash between daimyos, Fukashi Castle is claimed by Ogasawara Sadayoshi, who renames the site “Matsumoto Castle.”	
1590	The Ogasawara family is transferred to eastern Japan. Toyotomi Hideyoshi awards Matsumoto Castle to Ishikawa Kazumasa.	Ishikawa
1593	Construction of the Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage progresses.	
1600	The Ishikawa family allies with Tokugawa Ieyasu at the Battle of Sekigahara.	
1613	Ishikawa Yasunaga is implicated in a tax scandal (the Ōkubo Nagayasu Jiken) and stripped of his rank by Ieyasu. Ogasawara Hidemasa is granted control of Matsumoto Castle.	Ogasawara
1614	The Ogasawara family fights alongside Tokugawa forces during the winter campaign of the Siege of Osaka.	
1615	Ogasawara Hidemasa and his eldest son, Ogasawara Tadanaga, die during the summer campaign of the Siege of Osaka.	
1617	Toda Yasunaga is granted control of Matsumoto Castle. He builds more residential areas for samurai to the north of the castle.	Toda

1633	Matsudaira Naomasa is granted control of Matsumoto Castle. He builds the Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower and repairs other parts of the castle.	Matsudaira
1649	Mizuno Tadamoto conducts a comprehensive land survey of Matsumoto Domain.	Mizuno
1686	Peasants in the north protest the high annual taxes levied on them by the domonial government. The protest leaders are captured and crucified.	
1725	The Mizuno family is removed from power after Mizuno Tadatsune attacks someone with his sword on the grounds of Edo Castle. In their absence, development of the castle town is completed.	
1726	Matsumoto Castle is briefly placed under the direct control of the Tokugawa shogunate, after which the Toda family is once again granted control of the castle.	Toda
1727	The Honmaru Goten burns down. Its functions are transferred to the Ninomaru Goten and the Kosanji Goten.	
1743	The shogunate grants the Toda family additional territory valued at 50,000 <i>koku</i> .	
1760	Shinano Province (of which Matsumoto is part) becomes embroiled in a legal dispute regarding sanctions on shipping by horseback along public roads.	
1775	A large fire breaks out in Matsumoto, and parts of the second and third bailey are damaged.	
1793	The domain school Sōkyōkan is opened.	
1803	Another fire breaks out in Matsumoto, and large sections of the city burn. Several samurai residences and temples are damaged or destroyed.	
1816	An irrigation canal called “Jikkasegi” is built in Azumino, a village to the north of Matsumoto Castle.	
1825	Protests erupt in northern Matsumoto domain as tens of thousands of peasants rise up against a sharp increase in the price of rice.	
1832	The Saigawa Canal is expanded to pass through Matsumoto.	
1854	A powerful earthquake damages many buildings at the castle and in the town.	
1862	A samurai from Matsumoto murders two British soldiers in Edo.	
1863	Matsumoto domain is ordered to help guard Uraga Bay.	
1864	Matsumoto domain is ordered to participate in the First Chōshū Expedition. Forces from Matsumoto are defeated by masterless samurai (ronin) from Mito domain at the Wada Pass.	
1865	Fire breaks out in Matsumoto, damaging residential areas in the south. Matsumoto domain is ordered to	

	participate in the Second Chōshū Expedition and dispatches troops to Hiroshima.	
1866	A protest erupts in the south of Matsumoto domain as peasants rally against rising rice prices.	
1868	Matsumoto domain allies with the new imperial government and participates in the Battle of Hokuetsu in Hokkaido.	
1869	Toda Mitsuhsa, the last daimyo of Matsumoto, surrenders his territory to the emperor.	
1870	An anti-Buddhist movement begins after an imperial edict separates the previously syncretic religions of Buddhism and Shinto.	
1871	The shogunal domain system is abolished, and Matsumoto domain becomes Matsumoto Prefecture. Several castle gates are demolished, and the castle is placed under the jurisdiction of the Ministry of War. Matsumoto Prefecture is soon renamed Chikuma Prefecture, and a prefectural office is established in the castle's second bailey.	

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の築城

(1) 石川家の入城

石川数正（1593年没）は、徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）の長年の家来であった。家康の生誕地である岡崎城の警備を任されていたほどである。しかし、1585年、数正は突然、豊臣秀吉（1537-1598）と同盟を結び、その見返りとして和泉国を治めることを許された。1590年、秀吉が小笠原氏を松本城から追い出すと、石川氏を後継者を選んだ。

(2) 天守閣の建設

数正と長男の石川康長（1554-1642）は、城下町を拡充し、松本城の整備に着手した。数正は入城からわずか3年で亡くなったが、康長は大天守、乾小天守、渡櫓を完成させた。

18世紀の松本の歴史と地理に関する書物『信府統記』には、築城の初期段階が描かれている。

「数正は二の丸に屋敷（古山地御殿）を構え、城の配置を考え始めた。天守閣を建て、最外堀を掘り、堤防を高くして石垣を積み、渡櫓、黒門、太鼓門を建て、堀を直し、三の丸の門に櫓を建てた。また、総堀の堀の大部分を築き、城内の屋敷も修造した。また、城の内外に武士の住宅を建設した。

江戸時代（1603～1867）の松本城

(1) 歴代城主

江戸時代、松本城は6家23代の城主によって統治された。松本城は、松本藩（現在の長野県の中信地区にほぼ一致）の行政の中心地であった。この時代、全国は数百の藩に分かれており、大名は幕府の命令によって支配者の任免が可能であった。幕府に忠実な大名は、より立地条件のよい領地に移封されたり、米の単位である「石高」を増やされたりすることがあった。松本藩は、その立地条件と俸禄の高さから、将軍家と密接な関係を持つ大名が多く配された。

名字	名前	統治期間
Ishikawa	Kazumasa	1590–1592
	Yasunaga	1592–1613
Ogasawara	Hidemasa	1613–1615
	Tadazane (Tadamasa)	1615–1617
Toda	Yasunaga	1617–1632
	Yasunao	1633–1633
Matsudaira	Naomasa	1633–1638
Hotta	Masamori	1638–1642
Mizuno	Tadakiyo	1642–1647
	Tadamoto	1647–1668
	Tadanao	1668–1713
	Tadachika	1713–1718
	Tadamoto	1718–1723
	Tadatsune	1723–1725
徳川幕府の直轄領時代		
Toda	Mitsuchika	1726–1732
	Mitsuo	1732–1756
	Mitsuyasu	1756–1759
	Mitsumasa	1759–1774
	Mitsuyoshi	1774–1786
	Mitsuyuki	1786–1800
	Mitsutsura	1800–1837
	Mitsutsune	1837–1845
	Mitsuhisa	1845–1869

家名	官位	石高 1 石≈ 180L	前職	次職
石川	伯耆守（伯耆国の守護）：数正 玄蕃頭（寺社奉行・外務奉行）：康長	80,000 <i>koku</i>	Izumi Province	改易除封
小笠原	信濃守（信濃国の守護）：秀政 右近大夫（右近の	80,000 <i>koku</i>	Shinano Province, Iida domain	Harima Province, Akashi domain

	第五位の判官）： 忠政			(10,000 <i>koku</i>)
戸田	丹波守（丹波国の 守護）：康長 佐渡守（佐渡国の 守護）：康直	70,000 <i>koku</i>	Kōzuke Province, Takasaki domain	Harima Province, Akashi domain (70,000 <i>koku</i>)
松平	出羽守（出羽国の 守護）：直政	70,000 <i>koku</i>	Echizen Province, Ōno domain	Izumo Province, Matsue domain (186,000 <i>koku</i>)
堀田	加賀守（加賀国の 守護）：正盛	100,000 <i>koku</i>	Musashi Province, Kawagoe domain	Shimōsa Province, Sakura domain (110,000 <i>koku</i>)
水野	隼人正（隼人の司 令官）：忠清およ びその他 出羽守（出羽国の 守護）：忠職およ びその他 日向守（日向国の 守護）：忠 幹 (1718-1723)	70,000 <i>koku</i>	Mikawa Province, Yoshida domain	改易除封
戸田	丹波守（丹波国の 守護）	60,000 <i>koku</i>	Shima Province, Toba domain	廃藩置県

(2) 主な出来事

以下は、松本城とその周辺の藩の歴史の中で起こった重要な出来事を記した年表である。

Year	出来事	領主

1504	島立貞永が深志城を築城する。	
1550	武田信玄、深志へ攻め込み、小笠原長時を撤退させる。信玄、深志城の改修に着手。	
1582	織田信長が武田勝頼（1546-1582）を破り、武田家を滅ぼす。小笠原貞慶が深志城を領有し、松本城と改名する。	
1590	小笠原氏、関東に転封。豊臣秀吉が石川数正に松本城を与える。	Ishikawa
1593	大天守、乾小天守、渡櫓の築造が進む。	
1600	関ヶ原の戦いで石川家が徳川家康に加勢する。	
1613	石川康長が公金横領にからむ幕府内の派閥争い（大久保長安事件）に巻き込まれ、家康によって権力の座から追われる。小笠原秀政が松本城を支配する。	Ogasawara
1614	小笠原家、大坂冬の陣で徳川方につく。	
1615	小笠原秀政と長男の小笠原忠長が大坂夏の陣で戦死。	
1617	戸田康長、松本城の支配権を獲得。城の北側に武士の居住地を作る。	Toda
1633	松平直政、松本城を任される。辰巳附櫓、月見櫓などの増築を行う。	Matsudaira
1649	水野忠元、松本藩の検地を行う。	Mizuno
1686	北部の農民が藩から課せられた高い年貢に抗議する。リーダーが捕らえられ、磔にされる。	
1725	水野忠恒が江戸城内で刀で人を斬りかかったため、水野家は改易する。水野家不在の間、城下町の整備が行われる。	
1726	松本城が一時幕府の直轄となり、その後再び戸田家が城主となる。	Toda
1727	本丸御殿が焼失。その後、二の丸御殿、古山地御殿にその機能を移す。	
1743	戸田家、幕府より5万石の幕府領を預かる。	
1760	信濃国（松本市を含む）において、中馬に対する取締りが問題となる。	
1775	松本で大火が発生する。二の丸、三の丸の一部が焼失する。	
1793	藩校「崇教館」開校。	
1803	松本で再び火災が発生し、街の大部分でも大火が発生。武家屋敷、寺院など数カ所に被害を受けたり、破壊されたりした。	
1816	松本城下の北方の安曇野に拾ヶ堰が造られる。	
1825	松本藩北部で、米価の大幅な値上げに反対する数万人の農民の騒動が起こる。	
1832	松本と信州新町間に犀川通船開通	
1854	大地震により城下町の多くの建物が倒壊する。	

1862	松本藩士が江戸でイギリス兵 2 名を殺害する。	
1863	松本藩、浦賀湾警備への協力を命じられる。	
1864	松本藩、第一次長州征伐への参加を命じられる。和田峠で水戸藩の浪士が松本藩の軍を破る。	
1865	松本で大火が発生し、南部の住宅地が被害を受ける。松本藩、第二次長州征伐への参加を命じられ、広島に兵を派遣する。	
1866	松本藩南部で米価の高騰に反対する農民の騒動（一揆）が起こる。	
1868	松本藩、新政府に恭順の意を示し、北越戦争に参加する。	
1869	松本藩最後の大名戸田光久、天皇に領地を明け渡す。	
1870	神仏分離令が出され廃仏毀釈が始まる。	
1871	国藩体制が廃止され、松本藩は松本県となる。城郭が取り壊され、陸軍省に移管される。松本県は筑摩県と改称され、城の二の丸に県庁が置かれる。	

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城の歴史：明治維新(webサイト)
 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Changes in the Meiji Era (1868–1912)

(1) The End of Matsumoto Domain

In 1868, daimyos across Japan are faced with the choice of aligning with one of two factions: the imperial government under Emperor Meiji (1852–1912) in Kyoto, or the Tokugawa shogunate (1603–1868) in Edo (now Tokyo). Imperial loyalists had already begun the march to Edo to overthrow the shogunate, and officials in Matsumoto domain found themselves in a predicament: imperial troops would soon be passing along a major road south of Matsumoto. Should the domain remain loyal to the shogunate, or should they join forces with the loyalists? After much debate, Matsumoto allied with the emperor and quickly implemented numerous military reforms.

The last daimyo of Matsumoto, Toda Mitsuhsa (1828–1892), proactively joined a movement to “return the lands and people to the emperor” (*hanseki hōkan*). Mitsuhsa surrendered his territory and position as daimyo in 1869 and was appointed governor of Matsumoto domain. Around the same time, an imperial edict separated the previously syncretic religions of Shinto and Buddhism, launching a movement for the eradication of Buddhism. Mitsuhsa was particularly aggressive in the suppression of Buddhism in Matsumoto: he abolished his own family temple, Zenkyūin Temple, and ordered that all his retainers should hold only Shinto-style funerals. As a result of this movement, many temples throughout Matsumoto were demolished or abandoned.

The autumn of 1870 brought the symbolic end of an era at Matsumoto Castle. Entry to the castle grounds had always been a privilege reserved for the social elite, samurai, or guests with special permission. For the first time, regular citizens were also permitted

to pass freely through the gates.

In 1871, the domain system was abolished. Matsumoto domain was renamed Matsumoto Prefecture, and Mitsuhsa was relocated to Tokyo. Control of Matsumoto Castle was transferred to the Ministry of War, and an official named Yamagata Aritomo (1838–1922), who would later serve twice as prime minister, was sent to seize the weapons stored in the castle.

(2) The Partial Destruction of Matsumoto Castle

After the second bailey of Matsumoto Castle became the property of the prefectural government, many of its gates, earthen walls, and towers were demolished, and the building materials were reused elsewhere. For example, it is said that lumber from a tower on the wall of the second bailey was used to build a police station in the third bailey, and stones from the Ōtemon Gate were used to build the Sensaibashi Bridge over the Metoba River. It is believed that several gates on the outskirts of Matsumoto originated from the castle grounds, but there is little evidence to support this claim.

Kinoshita Naoe (1869–1937), a social activist and author born in Matsumoto, witnessed the numerous changes to the castle grounds when he was a student at the Kaichi School. He recounted scenes from this time in his novel *Hakaba* (Graveyard):

“The stone walls of the gates, the large trees on the banks of the moats, everything was disposed of unceremoniously. That old tree on the bank, which they said a *mujina* had mischievously set on fire, where a three-eyed *ōnyūdō* demon had supposedly appeared, even it was quickly put to the axe. Anyone who heard the chopping came to a halt and gazed on from across the moat. None of us could stand to think that we were hearing its roots being hacked apart.”

In 2012, excavations were conducted at sites near the Ōtemon Gate courtyard and near a portion of the moat to the east of the gate. An unexpectedly large number of roof tiles were discovered, and it is believed that tiles from the Ōtemon Gate and the surrounding walls were simply dumped into the moat when the structures were destroyed in the early years of the Meiji era (1868–1912).

最後の藩主戸田光則	Toda Mitsuhsa, the Last Daimyo of Matsumoto
大手門枅形総堀発掘の様子	Excavations of the Ōtemon Gate Courtyard

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治時代の変化（1868-1912）

（1）松本藩の終焉

1868年、全国の大名は、京都の明治天皇（1852-1912）中心の明治政府と、江戸の徳川幕府のどちらにつくかの選択を迫られた。倒幕を目指す新政府軍が江戸へ向けて進軍を開始し、松本藩は苦境に立たされることになる。新政府軍はまもなく松本の南の主要道路を通ることになる。幕府に忠誠を誓うか、それとも新政府側につくべきか？議論の末、松本は新政府側につき、数々の軍事的改革も行った。

最後の松本藩主戸田光久（1828-1892）は、「天皇に領土と国民を返す」（藩政奉還）動きに主体的に参加した。光久は1869年に領地と大名の地位を返上し、松本藩の藩主に任命された。同じ頃、勅令によって廃仏棄釈の運動が始まった。特に光久は、菩提寺の全久院を廃止し、家臣の葬儀も神式に限るなど、積極的な仏教弾圧を行った。その結果、松本市内の多くの寺院が取り壊され、廃寺となった。

1870年の秋、松本城に一つの時代の終わりを告げる変化が訪れた。城内に入ることができるのは、上級身分の者や武士、あるいは特別な許可を得た客人だけであったのが、一般市民が初めて城内に入ることができるようになったのである。

1871年、藩制が廃止された。松本藩は松本県となり、光久は東京に移封された。松本城の管理は陸軍省に移され、後に首相を2度務めた山県有朋（1838-1922）が城内に保管されていた兵器を押収するために派遣された。

（2）松本城の一部損壊

松本城の二の丸が県の所有になると、門や土塀、櫓などの多くが取り壊され、建材は別の場所に再利用された。例えば、二の丸の櫓の材木は三の丸の交番に、大手門台の石垣の石は女鳥羽川に架かる千歳橋に使われたと言われている。松本市近郊のいくつかの門は、城下町に起源を持つと考えられているが、その明確な証拠はほとんど存在しない。

松本市出身の社会運動家・作家の木下尚江（1869-1937）は、開智学校在学中に城下の数々の変遷を目の当たりにしている。その時の様子を小説『墓場』で語っている。

「城門の石垣も、堀野土手の大木も、何もかも惜しげなく払い下げられた。ムジナがいたずらで火を

つけたとか、三つ目の大入道が出たとか言われたあの大木も、すぐに斧で切り倒された。斧の音を聞いた者は立ち止まり、堀の向こうから見守っていた。根を切る音が聞こえたかと思うと、誰一人としていたたまれない気持ちになった。」

2012年、大手門の中庭付近と、その東側の堀の一部で発掘調査が行われた。その際、非常に多くの瓦が出土したが、これは明治時代（1868-1912）の初期に大手門とその周辺の塀が破壊された際に、瓦がそのまま堀に捨てられたと考えられる。

003-116

Meiji Era (1868–1912) to Present Day

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城の歴史：現代まで(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Meiji Era (1868–1912) to Present Day

(1) Trial Site for the Matsumoto Agricultural Society

In 1880, a group of 50 local residents formed the Matsumoto Agricultural Society. This organization was granted permission to use a section of the castle's main bailey, which they turned into an agricultural trial site. There, the society experimented with growing new varieties of fruits and vegetables, which were distributed among its members.

According to a memoir written by poet Kubota Utsubo (1877–1967), from around 1891 to 1895, the middle of the main bailey was a vegetable field, the western side near the castle was an apple orchard, and the northern side was a vineyard. In order to raise funds, the society laid out tatami mats in the Moon-Viewing Tower and charged an admission fee to enter the Great Keep.

The trial site was later shut down when the government decided to reallocate the land to Matsumoto Middle School.

(2) Construction of Matsumoto Middle School

Matsumoto Middle School (equivalent to a high school today) was established as part of the Kaichi School on July 10, 1876. To accommodate the growing number of students, in 1885 the middle school broke off to form its own independent institution and moved to the former site of the Kōsanji Goten, in the second bailey of Matsumoto Castle. Matsumoto Middle School remained in the second bailey until 1935. The diagram below shows the layout of the school as it was in 1919.

In 1902, the school needed more recreational space, so the main bailey was converted into a sports field for the students.

松本中学校の開校時の錦 絵	A multicolored woodblock print of Matsumoto Middle School at the time of its opening in the second bailey
大正 8 年の松本中学校校 舎配置（出典：長野県 松本中学校 長野県松本 深志高等学校 九十年 史）	Layout of Matsumoto Middle School in 1919 (Source: <i>Nagano-ken Matsumoto chūgakkō</i> , <i>Nagano-ken Matsumoto Fukashi kōtōgakkō kyūjūnen-shi</i> 長野県松本中学校 長野県松本深志高等学校 九十年史)

(3) Castle Grounds as a Public Park

Matsumoto Castle was designated a National Historic Site in 1930. Management of the castle grounds was transferred to the Matsumoto City Government, which planned to convert the grounds into a public park. Matsumoto Middle School was moved away from the castle to the Arigasaki neighborhood in 1935. In 1938, the city government established a set of formal guidelines outlining the use of the castle and started drafting specific proposals for a park. World War II began the following year, however, and the project was put on hold.

Work on the public park resumed after the end of the war. In 1948, trees were planted in the second bailey, and other efforts were made to restore the plant life. A small zoo was set up in the southeast corner, near the City Museum, which had been relocated to the second bailey in 1937. A fountain was added to the outer moat. An amusement park for children was also opened in the northwest corner of the third bailey in 1957, and it operated until 1987. In 1968, the City Museum was renovated and reopened as the Japanese Folk Museum (now the Matsumoto City Museum).

(4) Filling in the Moats

With the expansion of the city and the opening of the castle grounds, it became impractical to maintain the three moats that surrounded the castle. The process of filling in the moats began in 1876, with the eastern section of the outer moat and the southern section of the outermost moat. In 1877, the land reclamation efforts began in earnest. A large area around the Ōtemon Gate was filled in, and in 1879, Yohashira

Jinja Shrine was erected on the newly reclaimed ground. When the Matsumoto Courthouse was built in the second bailey, an eastern portion of the outer moat was filled in to facilitate foot traffic. The fortified sally ports (*umadashi*) that had protected the entrances to the third bailey were completely removed by the late 1890s, and even part of the inner moat was filled in around 1905 to make more room for Matsumoto Middle School.

Removal of the moats continued into the Taisho era (1912–1926), when more sections of the outermost moat and the outer moat were reclaimed to expand residential areas. The last portion of the outermost moat was converted into a public swimming pool in the early Showa era (1926–1945).

However, it was eventually acknowledged that the moats were a fundamental part of the castle compound and an important aspect of the city's history. In 1997, an initiative was launched to restore the southern and western portions of the outer moat.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

明治時代から現代まで

（1）松本農事会の試験場

1880年、地元有志50人が集まり、松本農事会を結成した。この組織は、松本城の本丸跡の一部を農業試験場として使用することを許可された。そこで、新しい品種の野菜や果物を栽培し、会員に配布する実験が行われた。

詩人・窪田空穂（1877-1967）の手記によると、1891年から1895年頃まで、本丸の中央は野菜畑、天守に近い西側はりんご園、北側はぶどう園だったという。月見櫓に畳を敷き、天守への入場料を取るなどしていたようである。

しかし、松本中学校への払い下げが決定し、試験場は閉鎖された。

（2）松本中学校の建設

松本中学校は、1876年7月10日、開智学校の校舎の中に変則中学校が設立された。生徒数の増加に伴い、1885年に分離独立し、古山地御殿の跡地である松本城二の丸に移転した。松本中学校は、1935年まで二の丸にあった。下図は、1919年当時の校舎の配置図である。

1902年、学校はより多くの校庭を必要とし、本丸跡は生徒のための運動場として使われるようになった。

(3) 公園としての城郭

松本城は1930年に国史跡に指定された。城郭の管理は松本市に移管され、松本市は城郭を公園として整備することを計画した。1935年、松本中学校が城下から蟻ヶ崎に移転した。1938年、松本市は城の利用方針を定め、公園化の具体案を作成し始めた。しかし、第二次世界大戦の勃発により、この計画は具体化しなかった。

公園建設は終戦後に再開された。1948年、二の丸に木を植えるなど植物の再生に努めた。南東の角には、1937年に二の丸に移設された市立博物館の脇に小さな動物園が設けられ、二の丸内堀脇には噴水が設けられた。また、1957年には三の丸の北西部の一角に子供向けの遊園地がオープンしたが、1987年に閉鎖された。1968年、市立博物館を改修し、日本民俗資料館（現・松本市立博物館）として開館した。

(4) 堀の埋め立て

市街地の拡大や城域の開放に伴い、城を囲む三重の堀を維持することは現実的でなくなった。そこで、1876年から堀の埋め立てが始まり、外堀の東側と一番外側の南側の部分である。1877年には、本格的な埋め立てが始まった。大手門を中心に広い範囲が埋め立てられ、1879年、新たに埋め立てられた土地に四柱神社が建立された。二の丸に松本裁判所（現松本市役所）が建てられると、外堀の東側が埋め立てられて往来が便利になった。三の丸の出入り口を守っていた馬出しは1890年代後半には完全に撤去され、内堀の一部も1905年頃、松本中学校の校庭拡張のために埋め戻された。

堀の埋め立ては大正時代（1912-1926）に入っても続き、最外堀や外堀を埋め立てて住宅地が拡大された。昭和時代（1926-1945）の初めには、最外堀の最後の部分が市民プールとして利用されるようになった。

しかし、やがて堀は城郭の基本的な部分であり、街の歴史を語る上で重要なものであることが認識されるようになった。1997年、外堀の南側と西側を復元する取り組みが始まった。

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城伝説(webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Legends of Matsumoto Castle

Many legends, anecdotes, and folktales have developed over Matsumoto Castle's centuries of history. Some stories, like "The Carpenter Who Stretched the Castle Beam," center around aspects of the castle's architecture, builders, or materials. Others, like "A Parting at Sodetome Bridge," involve the various castle lords who have come and gone, or the exploits of historical figures who are connected to the castle in some way.

Many of these legends interweave historical fact with popular fancy. During the seventeenth and eighteenth centuries, the innermost castle complex was off-limits to all but the highest-ranking samurai families; most commoners could only stare over the moats at the soaring castle and imagine what happened there. Tales such as "The Leaning Castle" and "The Tragedy of Princess Matsu" have preserved the sentiments these commoners held toward the rich samurai elite.

Whether you believe these tales or not, each reveals some small facet of the castle, its history, and its cultural legacy in Matsumoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城伝説

松本城の歴史には、多くの伝説や、民話がある。「城の梁を伸ばした職人」のように、城の建築、大工、材料にまつわる話もある。また、「袖留橋の別れ」のように、歴代の城主や、城と何らかの関係がある歴史上の人物について描いたものもある。

これらの伝説の多くは、史実と民衆の空想が織り交ぜられている。17世紀から18世紀にかけて、城の最奥部には上級武士以外は立ち入ることができず、ほとんどの庶民は堀の向こうにそびえる城を見つめ、そこで何が起きているのかを想像するしかなかった。「傾いた城」「松姫の悲劇」など、庶民の武士に対する心情が物語として残されている。

そのいずれもが、松本城とその歴史、そして松本に残る文化遺産の一端を示している。

003-118

The Carpenter Who Stretched the Castle Beam

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 梁を伸ばした匠伝説(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Carpenter Who Stretched the Castle Beam

Over a hundred carpenters were hired during the construction of Matsumoto Castle's Great Keep (1593–1594). One of these carpenters seemed determined to avoid work; to the annoyance of his fellow workers, he loafed around, occasionally whittling the pegs that were used to join one piece of wood to another.

Finally, it came time to begin assembling the Great Keep, beginning with a vital step: setting in place the beam that would support the central ridgepole. But to the carpenters' dismay, the beam was about 15 centimeters too short.

The men were shocked and speechless. What could be done? At this moment, the do-nothing carpenter spoke up. "Let me try stretching the beam," he said, and directed the 100 other carpenters to split into two groups. He had one group stand to the east and the other to the west. Then, the do-nothing carpenter had the two groups tie ropes to either end of the beam. When everything was in place, he gave the order to pull. While all the other carpenters heaved on their ropes, he stood balanced at the very center of the beam, holding a huge wooden mallet. When he sensed the moment was right, he braced himself and struck the beam.

Once!

Twice!

Three times!

Then, jumping down, he dropped the mallet and pronounced, "There, that should be about 15 centimeters."

Sure enough, when the other carpenters checked, they found the beam was exactly 15 centimeters longer. Everyone was astonished by this miraculous feat, and thereafter the carpenter was revered as a master.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

城の梁を伸ばした職人

松本城の大天守（1593-1594）の建設には、百人以上の大工が動員された。そのうちの一人は、仕事から逃げるかのように、木材を接合するための釘を時々削る程度で、他の職人たちを呆れさせていた。

そして、いよいよ天守閣を建てるための最も重要な作業、中央の棟木を支える梁を設置する段階になった。ところが、この梁が15センチほど短くて、大工さんたちはびっくりしたという。

大工たちはショックで言葉を失った。どうしたらよいのだろう？その時、その何もしない大工が口を開いた。「梁を伸ばしてみるよ」と言いながら、100人の大工たちを二手に分けるように指示した。そして、100人の大工を東と西に分けた。そして、その何もしない大工は、それぞれのグループの梁の端にロープを結ばせた。そして、「引っ張れ」と指示を出し、皆がロープを引っ張る中、自分は梁の真ん中でバランスを取りながら立っていた。そして、ここぞとばかりに、大きな木槌で梁を一回、二回、三回と打ち鳴らした。そして、飛び降りるようにして木槌を落とし、「これで15センチくらいかな」と言った。

すると、梁の長さが15センチほど伸びているではないか。この奇跡的な出来事に誰もが驚き、それ以来、この大工は名工と呼ばれるようになった。

003-119

A Parting at Sodetome Bridge

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 袖溜橋（緑橋）伝説(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

A Parting at Sodetome Bridge

One kilometer due south of Matsumoto Castle Park, there is a modest stone railing with a plaque that marks Midoribashi Bridge. Before the current bridge was built in 1878, the river was spanned by a wooden bridge called Sodetome (“sleeve-catching”) Bridge. A tragic story surrounds the name of that original bridge.

Sodetome Bridge was the setting for a scene that occurred in the early seventeenth century. In 1615, the lord of Matsumoto Castle, Ogasawara Hidemasa (1569–1615), was summoned to fight at the Siege of Osaka, a final conflict between the Tokugawa shogunate and its dissenters. Hidemasa departed, and his two sons, Tadanaga (1594–1615) and Tadazane (1596–1667), were called to battle soon after.

Tadazane was only 18, and though he had clad himself in armor, beneath it he still wore the long-sleeved *furisode* robe of a young boy. His childhood nurse was bereft at his departure, crying, “He’s still so young! I can’t bear the thought of him dying in battle. I can’t stand to think I might never see him again.”

So saying, the nurse ran out of the castle and chased the departing procession. She caught up to Tadazane just as he reached the bridge over the Nagasawa River. Grabbing hold of his trailing sleeve, she refused to let go. Tadazane, too, was overcome with sadness, and for a while they stood there, reluctant to part. Finally, Tadazane said, “I must go.” He turned again for Osaka, but the nurse would not release his sleeve. Tadazane was forced to shake her hand away until the sleeve tore, and she was left standing on the bridge, still holding part of Tadazane’s sleeve as she watched

him go to war. It is from this “sleeve parting” that the bridge received its name.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

袖留橋の別れ

松本城公園から南に1kmほど行くと、緑橋の銘板（プレート）のついた質素な石の欄干がある。1878年に現在の橋が架かる以前、この川には袖留橋という木製の橋が架かっていた。この橋の名前の由来には、こんな話がある：

17世紀初頭、この橋はある悲劇的な出来事の舞台となった。1615年、松本城主の小笠原秀政（1569-1615）は、徳川幕府の天下分け目の大坂城に招集され、出陣した。秀政は出陣したが、彼の二人の息子、忠脩（1594-1615）と忠政（1596-1667）も間もなく戦場に召集された。

忠政はまだ18歳で、鎧を身にまといはいるが、その下はまだ成人していない少年の長袖の振袖を着ている。幼少の頃の乳母（母とも言われる）は「まだ若いのに！このまま戦死して二度と会えなくなるなんて、耐えられない」と嘆き、忠政の旅立ちを惜しんだ。

そう言うと、乳母は城を飛び出し、去っていく行列を追いかけた。忠政が長沢川に架かる橋にさしかかったところで追いつきました。忠政が長澤川に架かる橋にさしかかったところで追いつき、引きずる袖を掴んで離さない。忠政も悲しみに打ちひしがれ、しばらくは別れを惜しんで立ち尽くした。忠政は、「もう行かねばならぬ」と言った。忠政は立ち上がり、再び大坂を目指したが、乳母は手を離そうとしない。忠政は仕方なく袖を引いて彼女の手を振りほどき、彼女は橋の上に袖の一部を握ったまま立ち尽くした。

003-120

The Tragedy of Princess Matsu

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 松姫伝説(webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Tragedy of Princess Matsu

Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the first of the Tokugawa shoguns, had a problem: he could not find anyone willing to marry his half-sister Princess Matsu (1563–1587). The princess was terribly ugly, and even the prospect of having the shogun for a brother-in-law was not enough to tempt any suitors. Desperate to help, Ieyasu called an assembly of daimyos from around Japan and announced, “To the man who takes my sister as his wife and produces a son, I will award 100,000 *koku* of land.”

Even for a wealthy daimyo, 100,000 *koku* of land was an appealing incentive, but none of the daimyos hurried to accept the proposal. Only Toda Yasunaga (1562–1633), one of Ieyasu’s most trusted daimyos, gave Princess Matsu a shy grin. Seeing this, Ieyasu immediately declared their engagement. Toda Yasunaga was later made the fifth lord of Matsumoto Castle.

This account highlights Princess Matsu’s ugliness, but in fact, the entire story is a fanciful rumor invented long after her death. Princess Matsu was only five when she became engaged to six-year-old Yasunaga. Records state that she grew to be a very beautiful woman, and the couple produced a son, Nagakane (1580–1619).

Tragically, Princess Matsu died young, and her son was weak and sickly for most of his life. Yasunaga’s consorts later bore him two more sons: Tadamitsu (1598–1629) and Yasunao (1617–1634). In 1617, the family moved from Ueno (in what is now Gunma Prefecture) to Matsumoto, and Yasunaga assumed control of Matsumoto Castle. Nagakane died soon afterward. When Tadamitsu also died young, in 1629,

Yasunao became the family's official heir.

After Tadamitsu's death, the Toda family encountered many misfortunes. Yasunao suspected this unluckiness (and the death of Tadamitsu) were the work of Nagakane's vengeful spirit, who resented being supplanted as heir. Others whispered that the cause was the sorrowful ghost of Princess Matsu. Cruel stories were told about her, claiming that she had drowned herself, or that she had been an ugly woman in an unhappy marriage. Ultimately, the spirits of Matsu and Nagakane were enshrined at Matsumoto Jinja Shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松姫の悲劇

徳川家康（1543-1616）には、異母姉の松姫（1563-1587）と結婚してくれる人が見つからないという悩みがあった。松姫はひどく不細工で、将軍が義理の兄になるということですら、求婚者を引きつけるには十分ではなかった。家康は全国の大名を招集し、「妹を妻として男の子を生んだ者には、10万石の領土を与える」と宣言した。

いくら大名といえども10万石は魅力的な条件であったが、どの大名もすぐにその提案を受け入れようとはしなかった。ただ一人、戸田康長（1562-1633）だけは、松姫に恥ずかしそうに微笑んだ。それを見て、家康は即座に婚約を宣言した。戸田康長は後に松本城の5代目城主となる。

この話は、松姫の醜さを強調するものだが、実は松姫の死後、長い年月をかけて作られた空想上の噂である。松姫はまだ5歳で、6歳の康長と婚約した。松姫は美しく成長し、永兼（1580-1619）という男児をもうけたと記録されている。

しかし、残念なことに松姫は若くして亡くなり、松姫の息子も病弱であった。康長の側室は、その後2人の息子を産んだ。忠光（1598-1629）、康直（1617-1634）である。1617年、一族は上野（現在の群馬県）から松本に移り、康長は松本城を支配するようになった。永兼は間もなく死去。1629年、忠光も若くして没すると、康長は家督を継いだ。

忠光の死後、戸田家には多くの不幸があった。この不幸と忠光の死は、跡継ぎの座を譲り受けられなかった永兼の怨霊の仕業ではないかと康直は考えた。またある者は、その原因を松姫（まつひめ）の怨霊（おんりょう）にあると囁いた。松姫は溺死した、松姫は醜い女で不幸な結婚をした、などという残酷な話も聞かれた。

結局、松姫と永兼の霊は松本神社に祀られている。

003-121

The Leaning Castle

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 傾いた城伝説(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Leaning Castle

By the turn of the twentieth century, Matsumoto Castle had gone unused and neglected for decades. Its roofs had begun to crumble, and its exterior was badly worn. To make matters worse, the castle foundation had begun to decay, causing the Great Keep to tilt noticeably. This situation gave rise to one of the castle's most dramatic legends.

In 1686, a town headman named Tada Kasuke (1639–1686) led a protest of some 10,000 villagers demanding tax relief from the officials at Matsumoto Castle. Farmers in the area had recently suffered crop failures, and because taxes were paid in rice, many farmers could not pay their taxes without risking starvation.

The officials feared the protest might become a full-scale revolt, so they quickly acceded to Tada's demands and presented him with documents guaranteeing the repeal of the higher tax rate. Soon afterward, however, the officials seized and imprisoned Tada, members of his family, and around 20 of his followers. The documents, too, were confiscated.

On the day Tada was scheduled to be publicly crucified, a large crowd gathered and chanted prayers. Tada spoke to them, saying that he would still achieve the tax reduction they needed. With his final breaths, Tada repeatedly shouted the promised tax rate. According to legend, he turned his rage-filled, bloodshot eyes toward the castle one last time as he died, and the Great Keep tilted to the west with a terrifying rumbling of the earth.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

傾いた城伝説

20世紀に入ると、松本城はほとんど使われなくなり、放置されるようになった。屋根や外装の老朽化に加え、土台が腐り、大天守が大きく傾くという事態は、松本城の最も劇的な伝説のひとつを生んだ。

1686年、庄屋・多田加助（1639-1686）は、松本城代が課した増税の廃止を求めて1万人の村民を率いて抗議行動を起こした。この地域の農民は最近不作で、税は米で支払われるため、多くの農民は飢餓の危険を冒さなくては増税された税を支払うことができなかった。

一揆に発展することを恐れた行政側は、すぐに多田の要求を受け入れ、増税の撤廃を保証する文書を提示した。しかし、その直後、行政府は多田とその家族、それに従者20人ほどを拘束し、獄に入れた。書類も没収された。

多田が公開磔刑に処せられる日、大勢の人が集まり、祈りを唱えた。多田は「減税は実現する。」と語りかけ、処刑の直前に減税の約束が反故にされたことを知った加助は、最後の息で約束された税率を何度も叫んだ。そして、怒りに満ちた血走った目を最後に城に向けると、恐ろしい地響きとともに大天守が西に傾いたという伝説が残っている。

【タイトル】 国宝松本城 / 国宝指定と修理の歩み(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Preserving a National Treasure

Becoming a National Treasure

Matsumoto Castle was first designated a National Historic Site in 1930. Six years later, it was designated a National Treasure.

The National Treasure Preservation Act of 1929 established the criteria for qualification and the process of designation. This law was replaced during the restructuring of the legal system that followed World War II. As a result, any site designated under the previous framework is sometimes referred to as an “Old National Treasure” to prevent confusion.

Matsumoto Castle’s designation in 1936 was comparatively late. Sixteen castles had already been designated National Treasures in 1930, the year Matsumoto Castle was made a National Historic Site. The 16 castles that preceded Matsumoto Castle were Nagoya, Himeji, Okayama, Hiroshima, Fukuyama, Sendai, Kumamoto, Shuri, Maruoka, Kōchi, Uwajima, Inuyama, Kanazawa, Wakayama, Matsue, and Matsuyama Castles.

Sadly, many castles were destroyed by air raids during World War II, but Matsumoto Castle survived. A new “Cultural Properties Preservation Act” was established in 1950, and Matsumoto Castle was redesignated a National Treasure just two years later. Matsumoto was the second castle to receive this designation, after Himeji Castle. At the time of its designation, Matsumoto Castle was undergoing the most extensive repairs in its history.

Preserving Matsumoto Castle

(1) Expansion and Repairs in the Edo Period (1603–1867)

Expansion

The castle's Great Keep, the Northwest Tower, and the Roofed Passage were built in 1594 under the rule of the Ishikawa family. At this same time, the Ishikawa family also fortified the three concentric baileys that surround the castle. The Southeast Wing and the Moon-Viewing Tower were added to the castle 40 years later, under Matsudaira Naomasa (1601–1666).

The resulting castle consists of the Great Keep and two joined towers. The Northwest Tower is joined via a connecting structure (a “linked keep”) and the Moon-Viewing Tower and Southwest Wing are joined directly (a “compound keep”). This combination of designs is unique among the castles that survive today. It is said that Naomasa may have added an additional tower to the north of the Kuromon Gate, and he also constructed two large storehouses for rice in the second bailey, but those structures are no longer standing.

Repairs

It seems that repairs and upkeep of the castle were carried out quite frequently during the Edo period, but few detailed records of these repairs exist. For example, it is known that when Matsumoto was governed by the Toda family from around the middle of the Edo period onward, repairs were conducted in 1733, 1758, 1779, 1781, 1782, 1802, 1817, 1826, 1832, and 1842. However, the specifics of these repairs are unknown.

(2) Repairs in the Meiji Era (1868–1912)

Following the Meiji Restoration in 1868, Japan began to adopt many aspects of Western culture, including stone architecture. As a result, wooden castles such as Matsumoto Castle came to be seen as outdated relics of a war-torn age. Many castles throughout the country were torn down to make room for civic infrastructure or other new construction. Although Matsumoto Castle was spared, it quickly fell into disrepair: roof tiles cracked, walls began to collapse, and the distinctive, black-

lacquered weatherboard faded. The castle might have ultimately collapsed where it stood, if not for Kobayashi Unari (1855–1914), the principal of the local middle school. Witnessing the state of the castle, Kobayashi established the Matsumoto Castle Preservation Society. This organization raised funds and gained the necessary government approval to repair the castle.

Renovations began in 1903 and were completed in 1913, following a brief pause during the Russo–Japanese War (1904–1905). One of the master carpenters involved in the project, Sasaki Kijū, later went on to design the Yamabe School, a unique pseudo–Western style school building in Nagano Prefecture.

Detailed records of the castle repairs do not exist, but it is thought that workers restacked some of the interior stone stairs, added diagonal support beams and an additional layer of plaster to the walls, shored up the frame with metal supports, and corrected the tilt of the castle. As a result, the castle was saved from further dilapidation, although the addition of new windows meant that its appearance changed substantially. These repairs would not have been possible without the support of local residents, whose donations covered roughly 70 percent of the renovation costs.

明治修理の状況	Repairs in the Meiji era
明治修理後の天守	Matsumoto Castle after repairs in 1913

(1) Repairs in the Showa Era (1926–1989)

After the end of World War II, in the autumn of 1946, an advisor for the Arts and Monuments Division of the Civil Information and Education Section under the Supreme Commander for the Allied Powers (SCAP) visited Nagano Prefecture. His name was Charles F. Gallagher. Seeing the condition of Matsumoto Castle, Gallagher recommended that repairs be carried out as soon as possible.

Motivated by his recommendation, Ōoka Minoru (1900–1987), a director at the Tokyo National Museum, and Fujishima Gaijirō (1899–2002), a professor at the University of Tokyo, conducted preliminary surveys. In 1948, the Matsumoto Castle Scenic Landscape Preservation Society was formed, fundraising efforts were begun, and a petition to allow construction was submitted to the national government. As a result of their efforts, large-scale repairs began on June 8, 1950.

The project was unprecedented in its scope and involved the complete disassembly of Matsumoto Castle. The overall objective of the repairs was to restore the Edo-period appearance of the castle. However, the renovations also allowed the builders to conduct a thorough investigation of the foundation, and it was determined that the underground wooden posts should be replaced with reinforced concrete to improve the durability of the structure.

1950	June 8	Groundbreaking Ceremony
	August	Deconstruction begins
	August 15	Management of the project is transferred from the Matsumoto City Museum to the Matsumoto Castle Preservation and Construction Office
1952	June 11	<i>Chōna-hajime</i> (“first adze”) Ceremony, which marks the start of reconstruction
1953	October 3	Ridge-Raising Ceremony
1955	October 1	Completion Ceremony
	October 8	enshrinement of Nijūroku-yashin, a guardian deity of the castle, on the sixth floor of the Great Keep
	October 15	Continued management of the castle is transferred back to the Matsumoto City Museum

Partway through the project, the city government of Matsumoto reached out to staff at Himeji Castle and Matsue Castle and took the first steps toward establishing the National Castle Preservation Council. A provisional planning meeting was held on September 18, 1951. Later in November, other cities with castles joined the council, and its first full meeting was held in Himeji. While this organization was eventually dissolved, it served as the basis for the current Japanese Castle Management Council.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

国宝への道

松本城が国の史跡に指定されたのは1930年。その6年後、国宝に指定された。

1929年に制定された「国宝保存法」は、国宝に指定されるための基準や手続きなどを定めた法律である。この法律は、第二次世界大戦後の日本占領に伴う法体系の再編成の中で、置き換えられた。そのため、混同を避けるため、旧法指定されたものを「旧国宝」と呼ぶこともある。

1936年の松本城の指定は比較的遅かった。松本城が国の史跡に指定された1930年には、16

城が国宝に指定されていた。名古屋城、姫路城、岡山城、広島城、福山城、仙台城、熊本城、首里城、丸岡城、高知城、宇和島城、犬山城、金沢城、和歌山城、松江城、そして松山城が挙げられる。

残念ながら、第二次世界大戦中の空襲で多くの城が焼失してしまったが、松本城はそのような運命を免れることができた。1950年に「文化財保護法」が制定され、松本城はそのわずか2年後に国宝に再指定された。松本城は、姫路城に次いで2番目の国宝指定となった。指定された当時、松本城は歴史上最も大規模な修理が行われていた。

松本城の保存

(1) 江戸時代（1603～1867）の増築と修理

増築

1594年、石川氏によって大天守、乾小天守、渡櫓が築かれ、城を囲む三重の堀が整備された。その40年後、松平直政（1601-1666）の時代に、辰巳附櫓と月見櫓が追加された。

その結果、連結式と呼ばれる大天守と乾小天守が渡櫓でつながる形式に、辰巳附櫓と月見櫓が付く複合式とよばれる形式が加わって、連結複合式という現在の天守の配置が完成した。この組み合わせは、現存する城郭の中でも異彩を放っている。直政は黒門の北側にさらに櫓を追加し、二の丸には米を貯蔵する大きな倉庫を2棟建てたが、これらの建物は現存していない。

修理

江戸時代、城の修理や修繕はかなり頻繁に行われたようだが、その詳細な記録はほとんど残っていない。例えば、江戸時代中期以降、戸田家が統治していた松本では、1733、1758、1779、1781、1782、1802、1817、1826、1832、1842年に修理が行われたことが分かっている。しかし、これらの修理の具体的な内容は不明である。

(2) 明治時代（1868年～1912年）の修理

1868年、明治維新を経て、日本は石造建築をはじめとする西洋文化が多く取り入れられるようになった。その結果、松本城のような木造の城は、戦国乱世の遺物とみなされるようになった。多くの城が取り壊され、公共施設等に転用された。松本城は救われたものの、瓦が割れ、壁が崩れ、黒漆塗りの下見板張りが色あせるなど、急速に老朽化が進んだ。

松本城は、中学校長の小林有也（1855-1914）がいなければ、最終的には崩壊していたかもしれない。小林は天守の現状を目の当たりにし、松本天守保存会を設立したこの会は、松本城の修理に必要な資金を集め、政府から修理許可を受けた。

修理は1903年に始まり、日露戦争（1904～1905年）を挟んで、1913年に完成した。この工事に携わった棟梁の一人、佐々木喜重は、後に長野県のユニークな凝洋風校舎である山辺学校を設計することになる。

詳しい記録は残っていないが、内部の石段の積み直し、筋違の追加、壁の漆喰の塗り直し、金物による骨組みの補強、城の傾きの修正などが行われたと思われる。その結果、城の老朽化は避けられたが、新しい窓が追加され、外観は大きく変化した。この修理は、地元住民の支援によって実現したもので、修理費の約8割は住民の寄付によってまかなわれた。

(2) 昭和時代（1926-1989）の修理

戦後、1946年の秋、連合国軍最高司令官総司令部（SCAP）民間情報局美術顧問が長野県を訪れた。彼の名はチャールズ・F・ギャラガー（Charles F. Gallagher）。松本城の現状を見たギャラガーは、一刻も早く修理を行うよう勧告した。

この勧告を受け、東京国立博物館保存修理課長の大岡實（1900-1987）と東京大学教授の藤島亥治郎（1899-2002）が事前調査を行った。1948年、「松本城址風致地区保存会」が結成され、資金調達や文部省への陳情書の作成に協力した。その結果、1950年6月8日から大規模な修理が始まった。

これは、前例のない大規模なもので、松本城を完全に解体しての工事であった。その目的は、江戸時代の城郭の姿を取り戻すことであった。しかし、この改修工事で基礎部分を徹底的に調査し、地下の木柱を鉄筋コンクリートに変えて耐久性を向上させることが決定された。

1950	June 8	起工式
	August	解体開始
	August 15	松本市博物館から松本城保存建築事務所に管理が移管される
1952	June 11	大工による再建の始まりを告げる「新始式」
1953	October 3	上棟式
1955	October 1	竣工式
	October 8	大天守閣 6 階に城の守護神である二十六夜神を再祀
	October 15	城の継続管理を松本市博物館へ引き継ぐ

この事業の過程で、松本市は姫路城と松江城のある姫路市と松江市に働きかけ、1951年9月18日に「全国城郭保存協議会」の設立準備会を開いた。その後、11月には他の城郭都市も加わり、姫路で第1回目の協議会が開催された。この組織はやがて解散したが、現在の日本城郭管理者協議会の基礎となった。

【タイトル】 国宝松本城 / 住民が守った松本城(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Support from Local Residents

Saving Matsumoto Castle: Ichikawa Ryōzō and Kobayashi Unari

(1) Ichikawa Ryōzō (1844–1908)

After the Meiji Restoration in 1868, Matsumoto Castle faced two major threats: demolition and disrepair. It was able to survive only thanks to the large-scale efforts of Matsumoto residents.

With the widespread adoption of Western culture and institutions that began in the Meiji era (1868–1912), towering wooden castles quickly came to be seen as outdated relics. In 1871, control of Matsumoto Castle and its main bailey was transferred to the Ministry of War. The following year, it was reported in a local newspaper that the castle had been auctioned off and was scheduled to be torn down. As a branch of the Nagoya Army Garrison, Matsumoto Castle had been left standing while other castles were demolished, but it seemed as though it would finally be destroyed.

Fearing the loss of the castle, a local activist named Ichikawa Ryōzō petitioned the prefectural governor to delay the sale for at least 10 years. He also proposed that the grounds could be used to hold a public exhibition. His request was granted, and five exhibitions were held at the castle between 1873 and 1876.

The exhibitions proved to be popular. A local newspaper reported that the first exhibition received upwards of 5,000 visitors each day it was open. A wide variety of objects were displayed, ranging from fine art and handicrafts to fossils, tools, and

weapons. For many visitors, the exhibitions may have been the first time they had ever entered the castle, where previously only samurai and special guests had been allowed. The exhibitions, which were made possible through the cooperation of both public and private organizations, helped generate widespread interest in Matsumoto Castle.

(2) Kobayashi Unari (1855–1914)

Once the exhibitions had concluded, the prefectural government became occupied by other priorities, and the castle slowly fell into disrepair. Roof tiles cracked, the black-lacquered siding faded, and the wooden posts in the foundation continued to rot.

These rotting posts were a particularly serious problem for Matsumoto Castle. With the foundation no longer able to support the weight of the 1,000-ton Great Keep, the structure began to lean. A well-known photograph from the early 1890s shows the castle leaning at a significant angle. In actuality, distortion from the camera lens made the angle appear more severe, but the castle's foundation was nonetheless beginning to fail, resulting in a tilt. Some locals even said the tilt was caused by the curse of Tada Kasuke (1639–1686), a peasant who had been executed for leading a large protest in the seventeenth century.

At the turn of the twentieth century, the castle's second bailey was occupied by Matsumoto Middle School, and its principal was a man named Kobayashi Unari. Witnessing the state of the castle worsening on a daily basis, Kobayashi launched a repair effort. He established the Matsumoto Castle Preservation Society and began a fundraising campaign to cover the cost of the repairs. Repairs were completed in 1913, and Kobayashi passed away the following year.

Preserving Matsumoto Castle: Citizen Involvement

Since the castle grounds were first opened to the public in the 1870s, residents have continued to play a vital role in preserving Matsumoto Castle. Today, the castle is a frequent fieldtrip destination for local elementary schools, and its grounds and floors are cleaned annually by volunteers. As the number of tourists has increased, volunteer groups have formed to offer tours of the castle so that more visitors can learn about Matsumoto Castle's history.

An organization called the Matsumoto Kojō (“old castle”) Association was established

to help support annual events, conduct research on the castle, and find ways to increase tourism and improve the local economy. As a result of this group's activities, a committee was formed to work toward the goal of having Matsumoto Castle designated a UNESCO World Heritage Site.

市川量造	Ichikawa Ryōzō
小林有也	Kobayashi Unari
子どもたちによる床磨き	Children polishing the floor of the Great Keep

上記解説文の仮訳（日本語訳）

地元住民の支援

松本城の救済：市川量造と小林有也

(1) 市川量造（1844～1908年）

1868年の明治維新後、松本城は取り壊しと荒廃という二つの危機に直面したが、松本市民の大規模な努力によって存続することができた。明治時代（1868-1912）に入り、西洋の文化や制度が取り入れられるようになると、木造の城は時代遅れのものとみなされるようになった。1871年、松本城とその本丸跡は陸軍省に移管された。翌年、松本城は競売にかけられ、取り壊されることが地元紙に報じられた。のちに、名古屋陸軍駐屯地（鎮台）の支城として、他の城が取り壊される中、松本城は残されることになった。

城の喪失を恐れた地元の啓発家である市川量造の懇願書が県知事に提出され、少なくとも10年間は売却を延期するよう求めた。また、城内を公募展の会場として使用することも提案した。そして、1873年から1876年にかけて、5回の展覧会が開催された。

地元の新聞によると、最初の展覧会には1日に5,000人以上が訪れたという。美術品、工芸品、化石、道具、武器など、さまざまなものが展示された。それまでは侍や特別な客人しか入れなかった天守に、初めて足を踏み入れた人も多かっただろう。官民一体となって実現したこの展覧会は、松本城への関心を高めることにつながった。

(2) 小林有也（1855～1914年）

展覧会が終わると、県庁は他のことに追われ、城は荒廃していった。屋根瓦は割れ、黒漆塗りの下見板は色あせ、土台を支えていた木柱は腐り始めていた。

特に松本城で問題となったのは、この柱が腐ることだった。1,000トンの大天守の重さに土台が耐

えられなくなり、城が傾いてしまったのだ。1890年代前半に撮影された有名な写真には、松本城が大きく傾いている様子が写っている。実際には、レンズの歪みで傾いているように見えるのだが、それでも天守の土台が崩れ始め、傾いてしまったのだ。この傾きは、17世紀に大規模な一揆を起こして処刑された農民、多田嘉助（1639～1686）の祟りだと言う人もいた。

当時、城の二の丸には松本中学校があり、小林有也という人物が校長をしていた。小林は、日々悪化する城の状態を目の当たりにし、修復に乗り出した。小林は松本城天守保存会を設立し、修理費の募金活動を開始した。1913年、修理は完了し、小林はその使命を終えたかのように、翌年この世を去った。

松本城の保護：市民の参加

1870年代の開城以来、松本城の保存は市民の手によって行われてきた。現在、松本城は地元の小学校の遠足でよく利用され、毎年ボランティアによって城内や床が清掃されている。また、観光客の増加に伴い、松本城の歴史をより多くの人に知ってもらうために、城内を案内するボランティア団体も結成された。

また、松本城の観光振興や経済活性化のために、年中行事の支援や城を愛護保全する活動や、調査研究などを行う「松本古城会」が設立された。その結果、松本城をユネスコ世界遺産に登録することを目標に実行委員会が組織された。

【タイトル】 国宝松本城 / 松本城を残し伝える(webサイト)
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Preserving Matsumoto Castle for Future Generations

Historic Sites around Matsumoto Castle

Five buildings of Matsumoto Castle are designated National Treasures: the Great Keep, the Northwest Tower, the Roofed Passage, the Southeast Wing, and the Moon-Viewing Tower. However, in its heyday Matsumoto Castle was an elaborate complex of multiple baileys, moats, stone walls, and gated entrances. Many of these structures were designated National Historic Sites in 1930.

The grounds of Matsumoto Castle today consist mainly of the first and second baileys. During the Edo period (1603–1867), the castle was surrounded by a much larger third bailey that extended all the way to the Ōtemon Gate in the south, near to where Yohashira Jinja Shrine is located today. With the rapid modernization that marked the advent of the Meiji era (1868–1912), the local government decided that there were more beneficial uses for the expansive castle grounds. Workers filled in the moats and flattened the earthen embankments, turning the third bailey into a public, urban space.

The first and second baileys were protected as National Historic Sites in 1930 during the Showa era (1926–1989). However, much of the grounds was still occupied by non-protected buildings, such as a courthouse and a school. These other facilities were later relocated to protect the historical integrity of the site, after which the castle grounds were turned into what is now Matsumoto Castle Park. While very few sections of the moats remain, a section of the outermost moat and one segment of the earthen embankments are also preserved as National Historic Sites.

The image below was created by overlapping an illustrated map of the castle, created

in 1728, with a map used for urban planning created in 2004. Residential and commercial buildings now occupy most of the land reclaimed from the outer moat and outermost moat.

史跡標柱、昭和 5 年に指定されたことが書かれている	A marker commemorating the National Historic Site designation in 1930.
わずかに残された総堀	The last remaining section of the outermost moat.
西総堀土塁公園	Nishi-sōbori Dorui Park, a preserved segment of the earthen embankments.
『享保 13 年（1728）秋改松本城下絵図』による城郭と城下町の復元図（平成 16 年の都市計画図に重ねてある） 町名は同上絵図に載っている名称を主とし、絵図にない名称は（）で表記した	Note: A recreation of the <i>Kyōhō jūsan-nen aki aratame Matsumoto jōka ezu</i> (Map of the castle town, 1728) has been overlaid atop an urban planning map from 2004. The names of the various areas have been taken from the former, 1728 map; names that do not appear on that map are marked in parentheses.

Preservation of Historic Sites

After the Edo period ended in 1867, many structures at Matsumoto Castle were demolished. The buildings that remained included the five main structures of the castle, the Ninomaru Goten, and a tower located at the southern corner of the second-bailey wall. However, the Ninomaru Goten burned down in 1876, and the tower was eventually demolished as well, leaving only the castle itself and a few sections of the walls and moats.

In the 1950s, the five buildings of the castle underwent massive repairs, and portions of the walls of the Kuromon Gate and the inner moat were restored. The aim of these renovations and all subsequent work on the areas designated National Historic Sites has been to restore them to the way they looked between 1850 and 1860. Other major projects include the reconstruction of the inner portion of the Kuromon Gate in 1960 and the Taikomom Gate in 1999. The continuing efforts to preserve not only the parts of Matsumoto Castle that are designated National Treasures but also those designated National Historic Sites represent a collaboration between researchers, experts, and local staff.

Although the stone-wall foundation of Matsumoto Castle has stood for over 400 years, sections of it occasionally bulge out or collapse. Repairing the foundation is an important part of preserving the castle for future generations. In 2014, a portion near the Uzumimon Gate was repaired after having been damaged by an earthquake three years earlier. At that time, a part of the stone wall to the west of the Ninomaru Goten site was also repaired after the roots of a nearby zelkova tree intruded into it. Rebuilding the Edo-period walls requires considerable time and expense, but the work has been made possible with aid from the national and prefectural governments.

A large project is currently in the works to recreate the southern and western portions of the outer moat that were reclaimed in 1919. This is just one part of the continuing efforts to restore the castle to its nineteenth-century appearance.

平成 23 年の地震によって傷んだ埋門南側石垣の改修	Repairs to the stone wall near the Uzumimon Gate that had been damaged by an earthquake
ケヤキの根によって傷んだ内堀の二の丸御殿跡西側石垣を改修	Repairs to the stone wall near the Ninomaru Goten site that had been damaged by tree roots

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城を後世に残すために

松本城周辺の史跡

松本城は、大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の5棟が国宝に指定されている。しかし、最盛期の松本城は、いくつもの櫓や堀、石垣、門などが複雑に入り組んだ城郭であった。1930年、これらの建造物の多くが国指定史跡に指定された。

現在の松本城の敷地は、主に本丸と二の丸の部分である。江戸時代（1603-1867）には、城の周囲にさらに広い三の丸があり、南の大手門（現在の四柱神社付近）まで続いていた。明治時代（1868-1912）に入り、急速な近代化が進む中、行政は広大な城の敷地にもっと有効な使い道があるのではないかと考えた。そして、堀を埋め、土塁を平らにして、三の丸を公共の都市空間として整備した。

昭和時代（1926～1989）の1930年、本丸と二の丸は国の史跡に指定された。しかし、敷地の大部分には裁判所や学校などの保護対象外の建造物が残っていた。その後、城跡は現在の松本城公園として整備され、歴史的風致を守るためにこれらの施設は移築された。堀の部分はほと

んど残っていないが、一番外側の堀の一部と土塁の一部も国指定史跡として保存されている。

下の画像は、1728年に作成された城下町の絵図と、2004年に作成された都市計画用の地図を重ね合わせたものである。現在、埋め立てられた外堀と一番外側の堀の大部分を住宅や商業施設が占めている。

史跡の保存

松本城は、江戸時代末期の1867年、多くの建物が取り壊された。残された建物は、城内の5つの建物と二の丸御殿、そして二の丸南隅の天守閣である。しかし、二の丸御殿は1876年に焼失し、東北の櫓も取り壊され、天守と堀の一部が残るのみとなった。

1950年代には5棟の天守群の大修理が行われ、黒門や内堀の一部も復元された。これらの改修工事と、その後の国指定史跡の工事では、1850年～1860年代の外観を復元することを目指した。このほかにも、1960年に黒門、1999年に太閤門が復元された。松本城は国宝の天守だけでなく、国指定史跡も含めて、研究者、専門家、地元関係者が一体となって保存に取り組んでいる。

松本城の石垣は、400年以上の歴史があるが、時に石垣の一部が膨張したり、崩れたりすることがある。この石垣を補修することは、城を後世に残すための重要な取り組みだ。2014年には、3年前の地震で被害を受けた埋門付近の石垣の一部を補修した。その際、二の丸御殿跡の西側でも、近くのケヤキの根で壊れた塀の一部が修復された。江戸時代の塀の修復は、かなりの時間と費用がかかるが、国や県の補助によって実現されている。

現在、1919年に埋められた外堀の南側と西側を復元する大プロジェクトが進行中だ。このように、19世紀の城の姿を取り戻すための努力が続けられているのである。

【タイトル】 国宝松本城 / 収蔵品(webサイト)

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Collections of Matsumoto Castle

Usage Policy

Unauthorized reproduction of the following images is strictly prohibited. Individuals or groups wishing to use any of the images for either commercial or non-commercial purposes should contact the Matsumoto Castle Administration Office.

Maps of the Castle and Its Surroundings

Several maps of Matsumoto Castle and the surrounding town survive from the Edo period (1603–1867), particularly from 1642 to 1725, when the castle was governed by the Mizuno family.

「享保 13 年秋改 松本城下絵図」	<i>Kyōhō jūsan-nen aki aratame Matsumoto jōkamachi ezu</i>	Map of the Castle Town (1728)
「信州松本城之図」(起し絵付)	<i>Shinshū Matsumoto-jō no zu</i>	Map of the Main and Second Baileys with “Pop-Up” (<i>Okoshie</i>) Buildings (c. 1668–1713)
「信濃国松本藩領大絵図」	<i>Shinano no kuni Matsumoto hanryō dai-ezu</i>	Map of Matsumoto Domain (c. 1713–1725)
「後藤新門画 紙本墨画 松本城旧景図」	<i>Gotō Shinmon-ga shihon bokuga Matsumoto-jō kyū kei-zu</i>	Illustrations of Matsumoto Castle by Gotō Shinmon (c. 1897)
「維新前松本藩士族屋敷割図」(松本市立博物館所蔵)	<i>Ishin-mae Matsumoto han shizoku yashiki-wari zu</i>	Map of Samurai Residences around the Mid-Eighteenth Century (1911, Matsumoto City Museum)

Treasures of the Toda Family

The Toda family controlled Matsumoto Castle longer than any other family, and they only relinquished their position following the Meiji Restoration in 1868. Many of the Toda family's prized treasures are displayed at the Matsumoto City Museum.

『諸士出身記』並びに「出身書」「出身帳」	<i>Shoshi shusshin-ki narabi ni shusshin-sho, shusshin-chō</i>	Records of the Lineages and Achievements of Samurai Retainers of the Toda Family
徳川吉宗朱印状	<i>Tokugawa Yoshimune shuinjō</i>	Letter from Tokugawa Yoshimune Granting Land to Toda Mitsuchika (Lord of Matsumoto Castle from 1726–1732)
戸田家伝世の甲冑	<i>Toda-ke densei no kacchū</i>	Set of Armor Belonging to Toda Yasunaga (Lord of Matsumoto Castle from 1617–1632)
葵紋付筒	<i>Aoimon-tsuki-zutsu</i>	Case Containing Protective Charm for Children and Bearing the <i>Aoi</i> Crest of the Tokugawa Shogunate
松竹梅桐紋蒔絵乗物	<i>Shō-chiku-bai-mon makie norimono</i>	Lacquered Palanquin Decorated with Gold Leaf Floral Patterns
御実印 戸田光行	<i>Gojitsu'in Toda Mitsuyuki</i>	Official Seal of Toda Mitsuyuki (Lord of Matsumoto Castle from 1786–1800)

Matsumoto Castle Firearm Museum

A large collection of 141 firearms and related accessories was donated by Akahane Michishige and his wife, Kayoko, a local duo of firearm enthusiasts. A portion of the collection is displayed on the second floor of the Great Keep.

火縄銃 小筒	Small-Caliber Matchlock Musket (18 mm or smaller)
火縄銃 土筒	Medium-Caliber Matchlock Musket (18–25 mm)
火縄銃 大筒	Large-Caliber Matchlock Musket (26 mm and larger)
火縄銃 馬上筒	Matchlock Musket (Cavalry Carbine)
火縄銃 狭間筒	Long-Barreled Marksman's Matchlock Musket
管打式銃 短筒	Pistol (Percussion Cap Mechanism)
管打式銃 七首鉄砲	Firearm Incorporated into Knife (<i>Aikuchi</i>) (Percussion Cap Mechanism)

管打式銃 脇差鉄砲	Firearm Incorporated into Short Sword (<i>Wakizashi</i>) (Percussion Cap Mechanism)
指火式銃 変わり筒	Firearm Incorporated into Police Baton (<i>Jitte</i>) (Muzzle-Loading Mechanism)
指火式銃 大砲	Dutch Naval Cannon (Muzzle-Loading Mechanism)
管打式銃 短銃	Colt Navy Revolver (Percussion Cap Mechanism)
口薬入れ	Flask for Priming Powder
火薬入れ	Flask for Gunpowder
弾薬箱	Ammunition Box

Historical Documents from Matsumoto Domain

The Matsumoto City Archive stores over 17,000 historical documents, including a large collection of records that belonged to samurai or local headmen in Matsumoto. These documents can be viewed for research purposes by written application to the archive.

近藤家文書	Kondō Family Documents
寺島家文書	Terashima Family Documents
穂刈家文書	Hokari Family Documents
吉田家文書	Yoshida Family Documents
塩尻堀内家文書	Shiojiri Horiuchi Family Documents
会田堀内家文書	Aida Horiuchi Family Documents
芥川家文書	Akutagawa Family Documents
樋口家文書	Higuchi Family Documents
上條家文書	Kamijō Family Documents
鈴木家文書	Suzuki Family Documents
大岩家文書	Ōiwa Family Documents

Materials Related to Matsumoto Castle in Modern Times

Matsumoto Castle underwent significant renovations twice: once from 1903 to 1913 and again from 1950 to 1955. The following collection of photographs and illustrations provides a glimpse of the work and shows the appearance of the castle at the beginning of the Meiji era (1868–1912).

明治年間 農事試験場	Matsumoto Castle as Agricultural Test Site (c. 1868–1912)
明治 30 年頃 太鼓門跡	Remains of the Taikomono Gate (c. 1897)
明治末～大正 2 年頃 明治の修理	Renovations to the Castle (c. 1903–1913)
明治年間 松本裁判所（二の丸御殿跡）	Matsumoto Courthouse, Former Site of the Ninomaru Goten (c. 1868–1912)
明治 4 年 市川量造肖像	Portrait of Ichikawa Ryōzō (1871)
明治 6 年（1873） 筑摩県博覧会の錦絵	Chikuma Prefectural Public Exhibitions at Matsumoto Castle (Colored Woodblock Print Postcard, 1873)
昭和 25 年 昭和の修理前天守	Matsumoto Castle before Renovations (1950)
昭和の修理前天守内部	Matsumoto Castle before Renovations (Great Keep, Interior)
昭和 25 年（1950） 6 月 8 日 昭和の修理起工式	Groundbreaking Ceremony (June 8, 1950)
昭和の修理 天守北側四階五階部分	Matsumoto Castle during Renovations (Great Keep, North Side, Fourth and Fifth Floors)
昭和 25～30 年 天守足場	Scaffolding around Matsumoto Castle (c. 1950–1955)
昭和 28 年（1953） 10 月 3 日 上棟祭	Ridge-Raising Ceremony (October 3, 1953)
昭和 29 年 3 月 31 日 松本市立博物館付近から写す	Matsumoto Castle during Renovations, Viewed from near Matsumoto City Museum (March 31, 1954)
昭和 30 年（1955） 10 月 4 日 二十六夜神遷座祭の様子	Procession Re-enshrining Nijūroku-Yashin in Matsumoto Castle (October 4, 1955)
昭和 30 年（1955） 10 月 1 日 落成祭	Completion Ceremony (October 1, 1955)

Blueprints from Renovations in the 1950s

The following images are blueprints of Matsumoto Castle that were created during repair work in the 1950s. For ease of viewing, the originals have been converted to black and white.

Images with “survey” in the title were prepared prior to repairs, while those with “complete” in the title show the final state of the castle. “Plan” drawings show the buildings viewed from above, “elevation” drawings show the buildings viewed from the side, and “section” drawings show vertical cross sections of the buildings.

松本城竣功天守基礎平面図	Great Keep, Foundation: Plan (Complete)
松本城竣功天守一階平面図	Great Keep, First Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守二階・乾小天守三階・辰巳附櫓二階平面図	Great Keep, Second Floor; Northwest Tower, Third Floor; Southeast Wing, Second Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守三階・乾小天守四階平面図	Great Keep, Third Floor; Northwest Tower, Fourth Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守四階平面図	Great Keep, Fourth Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守五階平面図	Great Keep, Fifth Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守六階平面図	Great Keep, Sixth Floor: Plan (Complete)
松本城竣功天守各階柱真による平面図	Great Keep, All Floors, Interior Dimensions: Plan (Complete)
松本城竣功天守東立面図	Matsumoto Castle, East Face: Elevation (Complete)
松本城竣功天守西立面図	Matsumoto Castle, West Face: Elevation (Complete)
松本城竣功天守南立面図	Matsumoto Castle, South Face: Elevation (Complete)
松本城竣功天守北立面図	Matsumoto Castle, North Face: Elevation (Complete)
松本城竣功天守東西断面図	Great Keep: East–West Cross Section (Complete)
松本城竣功天守南北断面図	Great Keep: South–North Cross Section (Complete)
松本城配置図	Matsumoto Castle, Main and Second Bailey; Layout Plan
松本城竣功乾小天守一階・渡り櫓地階平面図	Northwest Tower, First Floor; Roofed Passage, Ground Floor: Plan (Complete)
松本城竣功乾小天守東西断面図	Northwest Tower: East–West Cross Section (Complete)
松本城竣功乾小天守南立面及び渡り櫓東西断面図	Northwest Tower, South Face: Elevation (Complete) / Roofed Passage: East–West Cross Section (Complete)
松本城竣功乾小天守及び渡り櫓南北断面図	Northwest Tower; Roofed Passage: South–North Cross Section (Complete)

松本城竣功乾小天守及び渡り櫓東西断面図	Northwest Tower; Roofed Passage: East–West Cross Section (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓土台伏及び月見櫓地階平面図	Southeast Wing, Foundation; Moon-Viewing Tower, Ground Floor: Plan (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓一階及び月見櫓一階平面図	Southeast Wing, First Floor; Moon-Viewing Tower, First Floor: Plan (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓及び月見櫓断面図	Southeast Wing; Moon-Viewing Tower: Sections, Various (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓南北断面図	Southeast Wing: South–North Cross Section (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓東立面及び月見櫓南北断面図	Southeast Wing, East Face: Elevation (Complete) / Moon-Viewing Tower: South–North Cross Section (Complete)
松本城竣功辰巳附櫓及び月見櫓東西断面図	Southeast Wing; Moon-Viewing Tower: East–West Cross Section (Complete)
松本城実測天守東立面図	Matsumoto Castle, East Face: Elevation (Survey)
松本城実測天守西立面図	Matsumoto Castle, West Face: Elevation (Survey)
松本城実測天守南立面図	Matsumoto Castle, South Face: Elevation (Survey)
松本城実測天守北立面図	Matsumoto Castle, North Face: Elevation (Survey)

上記解説文の仮訳（日本語訳）

松本城の収蔵品

利用規定

以下の画像の無断転載を禁じます。商用・非商用にかかわらず、利用を希望する個人・団体は松本城管理事務所までお問い合わせください。

松本城とその周辺の地図

江戸時代（1603～1867）、特に水野家統治下の1642～1725年の松本城とその周辺の町並みの地図がいくつか残されている。

戸田家の宝物

松本城を最も長く支配した戸田家は、1868年の明治維新を機にその支配を譲った。松本市博物館には、戸田家の貴重な宝物が多数展示されている。

『諸士出身記』並びに「出身書」「出身帳」	<i>Shoshi shusshin-ki narabi ni shusshin-sho, shusshin-chō</i>	戸田家家臣団の家系と功績の記録
徳川吉宗朱印状	<i>Tokugawa Yoshimune shuinjō</i>	徳川吉宗から戸田光親（松本城主・1726-1732）への領地付与の書状
戸田家伝世の甲冑	<i>Toda-ke densei no kacchū</i>	戸田康長（松本城主・1617-1632）所用甲冑一式
葵紋付筒	<i>Aoimon-tsuki-zutsu</i>	徳川幕府三つ葵紋子供護身符入箱
松竹梅桐紋蒔絵乗物	<i>Shō-chiku-bai-mon makie norimono</i>	金箔花模様漆塗駕籠
御実印 戸田光行	<i>Gojitsu'in Toda Mitsuyuki</i>	戸田光行（松本城主・1786-1800）御実印

松本城火縄銃コレクション

松本城には、地元の赤羽通重・か代子夫妻から寄贈された141挺の火縄銃と関連小物が多数収蔵されている。その一部を大天守の2階に展示している。

松本藩の古文書

松本市文書館には、旧武家や庄屋宅の記録をはじめ、17,000点を超える歴史文書が保管されている。これらの史料は、研究用として文書で申し込むと閲覧することができる。

近世の松本城関連資料

松本城は、1903～1913年と1950～1955年の二度にわたって大改修が行われた。以下の写真・図版集は、その作業の様子を伝えるもので、明治初期の城の姿を見ることができる。

1950年代の改修工事による設計図

以下の資料は、1950年代に行われた松本城天守の修理工事の際に作成された設計図である。見やすくするため、オリジナルを白黒に加工している。

タイトルに「実測」とあるものは修理前のもので、「竣功」とあるものは修理完了後の状態を示している。「平面図」は建物を上から見たもの、「立面図」は建物を横から見たもの、「断面図」は建物を垂直に切った断面を示したものである。

003-126

Roofed Passage (*Watari Yagura*)

松本市

【タイトル】 国宝松本城 / 渡櫓2階

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Roofed Passage (*Watari Yagura*)

The two-story Roofed Passage that connects the Great Keep to the Northwest Tower was built during the first phase of castle construction, between 1593 and 1594. The castle's main entrance is on the first floor of the Roofed Passage.

Oddly, the floor of the Great Keep does not align with that of the Northwest Tower. The first and second floors of the Roofed Passage and Northwest Tower are the same height, but those of the Great Keep are higher. Due to this difference, a person entering the castle on the first floor of the Roofed Passage must climb 1.4 meters to reach the first floor of the Great Keep.

One of the huge crossbeams on the second floor of the Roofed Passage has been left in the curved shape of the tree from which it was made. It was thought that keeping such beams in their natural shapes would allow them to flex and bend more easily during an earthquake.

The items on display in the Roofed Passage were found during repairs to the Great Keep. The display includes large nails and samples of wood used in the keep's construction, as well as an assortment of roof tiles. Several styles of ornamental roof tiles that were used to cap the ends of roof ridges (*onigawara*) are also displayed. These tiles were often decorated with the family crest of the current lord of Matsumoto or with the face of an ogre or demon (*oni*). The fearsome expressions depicted on the tiles were thought to protect the castle by warding off evil.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

渡櫓

大天守と乾小天守を結ぶ2層の屋根付き通路（渡櫓）は、築城当初の1593年から1594年にかけて建設された。天守の正面玄関は、この渡櫓の地下1階部分にある。

奇妙なことに、2つの天守とそれをつなぐ構造物の床は一致していない。渡櫓と乾小天守の1階と2階は同じ高さだが、大天守のそれは高い。そのため、渡櫓の1階から入城した人は、大天守の1階まで1.4メートルも上らなければならない。

渡櫓の2階にある巨大な横木のひとつは、その材料となった木の曲がったままの形で残されている。このような梁は、自然のままの形を保つことで、地震が起きたときに伸縮しやすくなると考えられていた。

渡櫓に展示されているものは、大天守の修理の際に発見されたものだ。天守閣の建築に使われた大きな釘や木材のサンプル、屋根瓦などが展示されている。また、屋根の棟の端に被せる装飾瓦（鬼瓦）も数種類展示している。鬼瓦には、松本藩主の家紋や鬼の顔が描かれていることが多い。鬼瓦の恐ろしい表情は、魔除けとして城を守ると考えられていた。

地域番号	004	協議会名	美濃市	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
004-001	本美濃紙 / 本美濃紙についての概要		501～750	WEB
004-002	本美濃紙 / 原材料－収穫と加工過程		～250	WEB
004-003	本美濃紙 / 繊維の加工		～250	WEB
004-004	本美濃紙 / 紙ができるまで		～250	WEB
004-005	本美濃紙 / 乾燥と選別		～250	WEB
004-006	本美濃紙 / 道具		251～500	WEB
004-007	美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 概要（ウェブサイト用）		251～500	WEB
004-008	美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 1階展示室		～250	看板
004-009	美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2		～250	看板
004-010	美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2		～250	看板
004-011	美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2		～250	看板
004-012	本美濃紙 / 生産地域		251～500	WEB
004-013	本美濃紙 / 本美濃紙		251～500	WEB
004-014	美濃手すき和紙		～250	WEB
004-015	美濃機械すき和紙		～250	WEB
004-016	本美濃紙 / 本美濃紙についての概要		251～500	WEB
004-017	本美濃紙 / 和紙の使用方法－障子、書簡、文化遺産の保存と補修など		～250	WEB

004-018	本美濃紙 / 職人の方々	251～500	WEB
004-019	美濃和紙の里会館 / 概要	～250	WEB
004-020	美濃和紙の里会館 / 紙漉き体験	251～500	WEB
004-021	旧今井家住宅・美濃史料館 / 概要	251～500	WEB
004-022	旧今井家住宅・美濃史料館 / 蔵	～250	WEB
004-023	美濃和紙あかりアート館 / 概要	～250	WEB
004-024	美濃和紙あかりアート館 / 美濃和紙あかりアート展について	～250	WEB
004-025	本美濃紙 / 和紙の未来	251～500	WEB
004-026	旧古田行三邸 / 概要	251～500	看板 WEB
004-027	サステナブルな美濃和紙	～250	WEB
004-028	勘兵衛さんの川屋 / 概要	～250	WEB
004-029	山口誓子の句碑 / 概要	～250	看板 WEB
004-030	川湊灯台 / 概要	501～750	WEB
004-031	美濃市 / 美濃市うだつの上がる町並み	251～500	WEB

004-001

Preserving an Ancient Craft for Future Generations

美濃市

【タイトル】 本美濃紙 / 本美濃紙についての概要

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Preserving an Ancient Craft for Future Generations

Washi (traditional Japanese paper) has been made in the Mino region since at least the eighth century. Hon-minoshi is the highest-grade washi produced in Mino. It is lightweight and translucent, with a delicate luster. It does not deteriorate or yellow with age, retaining its strength and beauty for generations.

From sutra copying to shoji

Washi from Mino was initially used in Buddhist temples for sutra copying, but it later became the standard for high-quality sliding screens and paper lanterns. In the twenty-first century, Hon-minoshi is used for art conservation in museums worldwide, valued for its fine texture and durability. The methods and materials for making Hon-minoshi have barely changed over the centuries, and the craft was added to the UNESCO Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity in 2014.

A deceptively simple art

In principle, making Hon-minoshi is straightforward. The pulped bast fibers of the paper mulberry are mixed with water. A viscous dispersant is added, which prevents the fibers from clumping and aids in even distribution of the fibers through the water. This pulp slurry is gently scooped and strained on a fine bamboo screen to capture a film of interwoven fibers. It is then pressed to remove excess liquid, and dried in the sun. The process, from preparing the raw materials and mixing the ingredients to the optimal consistency, to capturing a fine, even layer of paper pulp, can take years to master.

The essential materials and tools

A variety of materials are used to make washi, such as the bark of *kozo* (paper mulberry), *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*), and *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*). Hon-minoshi is made with the white bast fiber from the inner bark of *kozo* shrubs. The strips of *kozo* inner bark are sourced from Daigo in Ibaraki Prefecture (north of Tokyo), where *kozo* grows quickly, resulting in straight, slender stems that yield strong, flexible fiber.

A thick, viscous substance called *nebeshi* (also called *neri* in many parts of Japan) is added to a large tub of water and *kozo* pulp, to help the fine plant fibers disperse evenly through the water and prevent clumping. It also slows the drainage of the pulp slurry through the bamboo screen, allowing the maker better control over the thickness of the paper. *Nebeshi* is made by pounding the root of *tororoaoi* (sunset hibiscus), then soaking it in water to extract the clear, gelatinous substance.

Only handmade tools are used in the production of Hon-minoshi. Some, such as the chrysanthemum-patterned wooden mallets for pounding the *kozo* fibers, are unique to the Mino area. Each tool is made by a different specialist, but the number of tool makers is dwindling. There is only one artisan in the area who can make the delicate bamboo screens called *su* used for screening the paper. Each screen is composed of around 3,000 strands of split and shaved bamboo, bound with silk threads. It typically takes a week to make a single screen.

Keeping traditions alive

After World War II, the demand for sliding screens and traditional paper of various types has decreased. At the same time, rapid improvements in mechanization led to the production of high-quality paper at lower prices. At the start of the twentieth century, there were over 3,700 workshops making washi paper in Mino. Now there are fewer than 20 and, of those, just 6 make Hon-minoshi.

An association was formed to preserve and promote Hon-minoshi. Craft skills are typically passed down through family lines. However, the papermakers in Mino now take on apprentices to preserve the craft. Hon-minoshi is used for conserving books and artworks and to make contemporary lanterns. For example, Hon-minoshi was

selected for the sliding shoji panels and sculptural lighting features at the Kyoto State Guest House.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本美濃紙についての概要

和紙は、8世紀以前から美濃市で作られており、その最上級が本美濃紙と呼ばれています。本美濃紙は軽量かつ半透明で若干の艶があり、古くなっても劣化したり黄ばむことがなく、何世代も残る丈夫さを持ち合わせています。

写経から障子まで

美濃の和紙は本来お寺の写経に使われていましたが、その後、高級な障子や提灯の素材として標準的に使用されるようになりました。21世紀に入ってから、本美濃紙はその優れた手ざわりと丈夫さが評価され、世界各地の美術館で美術品の保存に使われています。本美濃紙の作り方や材料は何世紀もの間ほとんど変わっておらず、2014年にはユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されています。

見かけによらずシンプルなアート

基本的に、本美濃紙の作り方はシンプルです。まず、パルプ状になったカジノキの靱皮繊維と水を混ぜ合わせます。それから、粘性分散剤を加えて繊維の固まりを防ぎ、水中での繊維が均一に広がるようにします。パルプ状のどろりとした液体を丁寧にすくい、目の細かい竹簀で濾すと、繊維が織りなす膜を捉えることができます。その後、圧搾して余分な液体を取り除き、天日で乾燥させます。原料を準備し、薄くて均一な紙パルプの層を形成するのに最適な混合を行うまでの工程が習得できるまでには、数年を要することもあります。

必要な材料と道具

和紙の制作には、楮（こうぞ）の樹皮、ミツマタ、雁皮（アオガンピ属の低木）などさまざまな材料が用いられます。本美濃紙は、楮（こうぞ）低木の内皮から採れる白皮繊維でできています。本美濃紙用の楮（こうぞ）の内皮は茨城県大子（だいご）から調達されますが、そこでは楮の成長が速いため、幹が真っ直ぐで細く、丈夫で柔らかな繊維が得られるのが特徴です。

ねべしという（多くの地域ではネリとも呼ばれる）粘度の高い物質を、水と楮（こうぞ）のパルプを入れた大きな桶に加えると、細かい植物繊維が水中で均一に広がり、塊が形成されなくなります。竹簀を通るパルプ状の液体の水はけも遅くなるため、その間、職人が紙の厚さを調整しやすくなります。ねべしは、とろろあおいの根を砕いて水に浸け、透明な粘液を抽出することで作られます。

本美濃紙の制作に使われる道具はすべて手作りです。楮（こうぞ）繊維を手打ちで砕く菊の花模様の木製丸槌など、一部の道具は美濃地方独自のものです。道具の一つ一つをそれぞれ専門の職人が作っていますが、道具の作り手の数も減少しています。竹簀（たけす）と呼ばれる、紙を漉く際に用いられる目の細かい網を作ることのできる職人は、たったの1人しかいません。各竹簀は、竹を割り削って加工したものを3,000本組み合わせて、絹糸で縛ったものです。1つの竹簀を作るのに、通常、1週間を要します。

伝統を存続させる

第二次大戦後、障子など、昔ながらの紙の需要は減少しました。同時に、機械化の急速な改善により、高品質の紙が低価格で生産されるようになりました。20世紀初め頃、美濃市には3,700箇所和紙工房がありました。現在ではそれも20か所以下に減少し、そのうち本美濃紙を作っているのは6か所だけです。

本美濃紙を保全・宣伝するため、本美濃紙保存会が結成されました。職人の技術は、通常、家系で継承されます。しかし、美濃の和紙職人は、美濃紙の伝統を保全するため、現在、見習いを受け入れています。現在、本美濃紙は、本や芸術作品、近代的な提灯の制作に用いられています。例えば、本美濃紙は、京都迎賓館の障子や照明器具に採用されています。

004-002

Making Hon-Minoshi: Preparing the Raw Materials

美濃市

【タイトル】 本美濃紙 / 原材料－収穫と加工過程

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Making Hon-Minoshi: Preparing the Raw Materials

Washi paper is made from plant fibers mixed with clean water and a viscous substance that prevents the fibers from clumping. Fibers are processed from the inner bark of *kozo* (paper mulberry), *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*), and *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*). When wet, the fibers bind at a molecular level, forming paper that is durable and resistant to tearing.

Hon-minoshi uses the white inner bark of Daigo *nasu kozo* from the town of Daigo in Ibaraki Prefecture. The long, silky bast fibers result in greater translucency than other plant fibers and produce lightweight, smooth, strong paper suitable for covering shoji screens, making lanterns, and for use in art conservation.

Kozo branches are harvested annually during the winter before the bark becomes hard and brittle. Bundles of *kozo* are steamed for around 90 minutes to soften the bark. The outer bark is then peeled off quickly by hand before the wood cools and the bark hardens. One hundred kilograms of *kozo* branches will yield around 4 kilograms of paper. The discarded core stems can be used for firewood.

The white inner bark (*shirokawa*) is spread out in the shallows of the Nagara River to be cleaned in running water and bleached by sunlight for a few days. Now, many papermakers work in large outdoor water baths fed by natural spring water or river water. The *shirokawa* is boiled with soda ash for several hours until it softens and can be separated into fibers, then the fibers are picked over to remove impurities.

The other key material for making washi is *nebeshi*, a viscous substance that is extracted from the roots of the *tororoaoi* (sunset hibiscus, *Abelmoschus manihot*) plant. The *nebeshi* is mixed with water and the pulped fibers to help the fibers disperse evenly and prevent clumping. The *nebeshi* is made by pounding the roots of the *tororoaoi* with a mallet in a mortar and leaving them to soak in water for several days, allowing the viscous substance to seep out of the roots. The resulting mixture is then filtered before being stirred into the water used in papermaking.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

原材料－収穫と加工過程

和紙は、植物繊維ときれいな水に、粘度の高い物質を混ぜ合わせることで、繊維が塊にならないようにしてつくられます。繊維は楮（こうぞ）（カジノキ）、ミツマタ（ジンチョウゲ科）、雁皮（がんび）（アオガンピ属の低木）から加工されます。繊維は濡れると分子レベルで結束し、丈夫で破れにくい紙ができます。

本美濃紙には、茨城県大子の大子那須楮の白皮が使用されます。この長く光沢のある靱皮繊維のおかげで、他の植物繊維よりも透光性に優れ、障子や提灯、美術品の保全に適した軽量で、なめらか、かつ丈夫な紙ができます。

楮の幹は毎年冬に、樹皮が固く壊れやすくなる前に収穫します。楮の束を約90分蒸らし、樹皮をさらに柔らかくします。そして、木が冷えて皮が硬くなる前に、外皮を手で素早く剥きます。100キロの楮の枝から、約4キロの紙が生産されます。廃棄された茎の芯は、薪として用いることができます。

白皮（幹の内側の白い部分）は長良川の浅瀬に広げて流水で洗い、数日間日光で漂白します。今日では、多くの和紙職人が、天然の湧水や川の水を蓄えた屋外の大きな水桶で、この作業を行っています。白皮をソーダ灰と一緒に数時間煮て柔らかくし、繊維に分離させた後、繊維を念入りに選別して不純物を取り除きます。

和紙制作におけるもう一つの主要素材は、とろろあおい（黄蜀葵）の根から抽出される粘着物質、ねべしです。ねべしは、水とパルプ状になった繊維に混ぜて、繊維が水中で均一に広がり、塊にならないようにするためのものです。すり鉢の中で丸槌を使ってとろろあいの根を手打ちで砕き、数日間水に浸しておくと、根から粘液がにじみ出てきます。これがねべしです。こうしてできた混合物をろ過した後、水へと流し込んで紙を作ります。

004-003

Raw Materials: From Bark to Paper Fiber

美濃市

【タイトル】 本美濃紙 / 繊維の加工

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Raw Materials: From Bark to Paper Fiber

To prepare the plant fibers to make paper, the white inner bark (*shirokawa*) of the *kozo* (paper mulberry) tree is soaked in water, then boiled with soda ash for softening. The resulting fibers resemble silk. Impurities from the outer bark affect the appearance of the paper, so they are removed by hand in a process known as *chiritori*. The fibers are carefully rinsed and picked over under running water. Historically, *chiritori* was performed by workers crouching for hours over a stream, but modern papermakers sit at a raised tub supplied with running water. Experienced pickers can process 1 to 2 kilograms of fibers a day.

After removing the impurities, the papermaker pounds the clean fibers with two wooden mallets to separate the strands without significantly reducing their length through tearing or cutting. This is important because longer fibers create stronger, smoother paper. The tools for pounding vary by region, from long sticks to the thick mallets (*kizuchi*) used in Mino. They are made from sturdy pine, with a striking surface carved with a radial “chrysanthemum” pattern to efficiently separate the fibers and prevent strands from sticking to the face of the mallet.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

繊維の加工

植物繊維から紙を作るには、まず、楮（こうぞ）の白皮を水に浸し、ソーダ灰で煮て柔らかくします。こうしてできた繊維は絹のようになります。外皮の不純物がまだ残っている場合は、紙の概観に影響を与えてしまうため、塵取りと呼ばれる手作業で取り除きます。繊維は流水で丁寧に洗います。従来、塵取りは何時間も小川にかがんで行われる作業でしたが、現在では、清水が流れ込む

高めの水桶に座って作業が行われます。熟練した人なら、1日に1～2キロの繊維を確認することができます。

不純物を取り除いたら、きれいになった繊維を2本の木槌で叩いて、長さがあまり短くなりすぎないように気をつけながら、繊維を裂いたり切ったりして分離させます。繊維が長いほど丈夫で滑らかな紙ができることから、この工程はとても大切です。手打ち道具は地域により異なっていて、長い棒から美濃で用いられる太い木槌までさまざまです。丈夫な松の木からできていて、打面には菊の花模様が放射状に彫られていることから、効率よく繊維をほぐし、繊維が木槌の表面に付着しないよう工夫されています。

【タイトル】 本美濃紙 / 紙ができるまで
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Making Mino Washi: The Screening Process

The washi papermaking process is similar across Japan. In Mino, subtle differences increase the durability of the paper. Washi paper is made with a screening technique called *nagashizuki*. A mixture of plant fibers, water, and a viscous dispersant is scooped onto a deckle (frame) mounted with a fine bamboo screen.

Aligning the paper fibers

Three basic actions define *nagashizuki*. First, the papermaker dips the deckle in the slurry and scoops just enough pulp mixture to cover the surface of the screen, then quickly tips off the excess. This quick scoop-and-tip action, called *keshomizu*, lays a thin layer of fibers in one direction to form a smooth paper surface.

Intertwining the fibers

In the next steps known as *tateyuri* and *yokoyuri*, the papermaker scoops a larger quantity of the pulp mixture and rocks the frame back and forth to coat the entire screen cause the long *kozo* fibers to intertwine in several directions. This action is repeated several times until the paper reaches the desired thickness. In most washi-producing regions, this is a back-and-forth action, towards and away from the body. Mino papermakers also rock the mixture from side to side, creating more tear-resistant paper.

The final touch

The final action is *haraimizu*. Like *keshomizu*, this is a quick scoop and toss of the pulp mixture, to align the fibers in a single direction and form the outer surface of the

paper. As each sheet is screened it is carefully stacked. The stack is pressed overnight to remove excess water before the sheets are separated and dried on boards in the sun.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

紙ができるまで

和紙作りの工程は、日本全国で似ています。美濃では、微妙な違いが和紙の耐久性を高めています。和紙は「流し漉き」と呼ばれる漉き技術で作られます。植物繊維、水、そして粘性分散剤の混合物を、目の細かい竹簀の型枠ですくいます。

紙繊維の調整

流し漉きは3つの基本動作により構成されています。まず、職人が型枠を懸濁液に浸し、ちょうど竹簀表面を覆えるくらいのパルプをすくった後、素早く余剰分を流します。この型枠をすくっては傾ける作業を化粧水と言い、繊維の膜を一方方向に薄く敷くことで、滑らかな表面が形成されます。

繊維の絡み合い

次に、パルプを多めにすくって型枠を前後に揺らし、竹簀全体を覆う縦揺り・横揺りという作業では、長い楮の繊維があらゆる方向に絡み合います。作りたい厚みができるまで、この動作を数回繰り返します。和紙を作っているほとんどの地域では、この動作を前後方向、つまり身体の方に向かってから離すように往復させて行います。美濃の職人たちは、これを横方向でも行います。こうすることで、より破れにくい和紙ができます。

仕上げ

最後の作業は、払い水です。化粧水のように、この工程ではパルプを素早くすくっては捨てて、繊維を一方方向に揃えて和紙の外表面を形成します。漉いた紙は、一枚ずつ丁寧に重ねていきます。これを一晩圧縮して、余分な水分を絞り出した後、一枚ずつ天日で乾燥させます。

004-005

Finishing Touches: Drying, Sorting, and Trimming

美濃市

【タイトル】 本美濃紙 / 乾燥と選別

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Finishing Touches: Drying, Sorting, and Trimming

On sunny days in Mino, large wooden boards for drying paper are propped against beams in front of the washi studios. Each board is close to 2 meters long, a little over 60 centimeters wide, and weighs almost 20 kilograms. A drying board is made from a single plank of horse chestnut, which is a wood known for its fine grain, free of defects that might imprint on the paper. The trees that are large enough to yield boards of this size can be as much as 300 years old, and the drying boards are hard to replace.

The sheets are stacked together and pressed overnight to remove any excess water. Each sheet is then positioned on a drying board, gently brushed to remove any air bubbles or creases, and then moved outside. After several hours, the sheets are turned over to dry the other side.

Each sheet is held up to the light for inspection, and any paper with flaws such as tears, marks, or impurities is discarded.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

乾燥と選別

美濃では晴れた日に、和紙工房の外の梁に紙を干すための大きな木の板が立てかけられています。1枚の板は長さが2メートル近くあり、幅60センチ強、重さは約20キロもあります。乾燥板は、木目が細かく、紙に写り込むようなキズのないトチノキの一枚板でできています。このサイズの板が取れるほどの大木は、樹齢300年を超えていることもあり、乾燥板は交換が難しいものです。

和紙を積み重ねた状態で一晚圧縮を行い、余分な水気を取り除きます。その後、一枚ずつ乾燥板に載せ、優しく履いて気泡やしわを取り除いたら、屋外へ運びます。数時間後にこれを裏返して反対側も乾燥させたら、乾燥工程は終わりです。

一枚一枚を光にかざして検査し、破れや染み、不純物などの欠陥がある紙は廃棄されます。

004-006

Specialized Tools for Making Hon-Minoshi

美濃市

【タイトル】 本美濃紙 / 道具

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Specialized Tools for Making Hon-Minoshi

The tools for making Hon-minoshi have changed little over a thousand years, and some are specific to the Mino area. From the mallets to pound the bast fibers to the soft horsehair brushes for smoothing the paper sheets on drying boards, each tool is handmade, and many have been handed down through generations. The washi industry once supported many specialist toolmakers; now, the number of people with the skills to make these tools has dwindled.

The wooden mallet (kizuchi)

Holding a wooden mallet in each hand, the papermaker pounds processed *kozo* fibers to separate the strands, so that the fibers will disperse evenly through the water when preparing the paper slurry. The short-handled, thick mallets (*kizuchi*) are made from sturdy pine. The striking surface is carved with a radial “chrysanthemum” pattern to help separate the fibers and prevent the moist *kozo* pulp from sticking to the mallet.

The rake (maguwa)

A *maguwa* is a wide wooden rake used to mix the *kozo* fibers in making the pulp slurry. The fibers are added to a large wooden tank (*sukibune*) along with water and a scoop of *nebeshi*, an organic material that inhibits clumping of the fibers.

The bamboo screen (su) and deckle (keta)

Washi paper is made using a screen clamped to a wooden deckle or frame (*keta*). The deckle is made of Japanese cypress, which can stand up to repeated dunking in water. A specially prepared paper slurry is scooped up in the fine bamboo screen (*su*) and

drained to capture a layer of interwoven bast fibers. The process can be repeated multiple times to create a sheet of paper, but the finer the screen, the smoother the paper. Each screen is made of approximately 3,000 strands of split and shaved bamboo, bound with silk threads.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

道具

美濃紙を作る際に使用する道具は、千年以上にわたってほとんど変わっておらず、一部は美濃地方特有のものです。繊維を叩く木槌から乾燥板の上で用紙を滑らかにする馬毛ブラシまで、道具の一つ一つが手作りで、その多くが何世代にもわたって受け継がれてきたものです。和紙産業はかつて多くの専用道具職人を支えていましたが、今では、このような道具を作るためのスキルを持っている職人の数は減少しています。

木槌

両手に木槌を持ち、和紙職人は加工した楮（こうぞ）繊維をたたいて解し、パルプのとりとした液体を調製する際に水の中で均等に広がるようにします。取っ手が短くて太いこの木槌は、丈夫な松の木から作られています。打面には放射状の菊模様が彫られており、繊維の分解を助け、湿った楮のパルプが木槌に付着するのを防ぎます。

馬鍬（まぐわ）

馬鍬（まぐわ）とは楮繊維を混ぜてパルプのとりとした液体を調製する際に用いられる木製の鍬（くわ）です。繊維は、水と一杯のねべしとともに大きな木製の槽（漉き船）に加えられます。ねべしとは、繊維が塊になるのを防いでくれる天然素材です。

竹簀（す）と桁（けた）

和紙は、桁（けた）と呼ばれる木製の枠に目の細かい網（竹簀）をはめたものを使ってつくられます。桁はヒノキでできており、繰り返し水に浸しても耐えることができます。特別に調製したパルプのとりとした液体を目の細かい竹簀ですくっては流し、絡み合った繊維の層をつくります。この工程を数回繰り返して一枚の紙を作るのですが、竹簀の目が細かいほど滑らかな和紙に仕上がります。各竹簀は、竹を割り削って加工したものを約3,000本組み合わせて、絹糸で縛ったものです。

【タイトル】美濃和紙用具ミュージアムふくべ /
 概要（ウェブサイト用）
 【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi Tools Museum Fukube

Mino Washi Tools Museum Fukube records the traditional way life in the Mino area. The museum is housed in the former Kataji Elementary School, which closed in 2002 after the number of children in the area declined. Opened in 2018, the museum exhibits tools used for making washi paper, as well as tools used in local farming and sericulture. Several rooms of a farmhouse from the postwar period have been recreated, immersing visitors in the lifestyle of Mino's farmers and artisans. Several functioning items in the museum—including a water pump, a grindstone, and a rice-polishing machine—allow visitors to experience a bygone way of life.

The museum covers two floors of the former school. The first-floor exhibition, displaying tools for making washi paper, is free of charge. Historical photographs of papermaking and reproductions of illustrations from the Edo period (1603–1867) show that the papermaking process has changed little over the centuries.

An admission fee is charged for the exhibitions on the second floor, which has four rooms. Displays include papermaking tools and historical photographs, farming equipment, and a reproduction of parts of a 1930s farmhouse. The large number of tools for making washi attests to the fact that until the mid-twentieth century, the majority of households around the museum were papermakers. One room holds a collection of items from the twentieth century, including rotary telephones, tape recorders, record players, and cameras that may be nostalgic to some visitors and unfamiliar to others.

Mino Washi Tools Museum Fukube is open from 10:00 a.m. to 4:00 p.m. (closed Tuesdays). Volunteers are on hand to explain the exhibits (in Japanese). Some of the volunteers are retired papermakers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙用具ミュージアムふくべ

美濃和紙用具ミュージアムふくべは、美濃地方の伝統的な生活様式を紹介しています。このミュージアムは児童数の減少を理由に2002年に閉鎖された旧片知小学校の校舎を利用しています。2018年にオープンした同ミュージアムでは、和紙作りに使われる道具や、地域の農業・養蚕に使われる道具を展示しています。戦後の農家のいくつかの部屋を再現しており、来訪者は美濃の農民や職人の暮らしに触れることができます。館内には、水車、砥石、精米機など今でも使用可能な道具がいくつか置かれており、かつての生活を体験することができます。

ミュージアムは旧片知小学校の校舎の2階分を占めています。1階には和紙作りの道具が展示されており、見学は無料です。和紙作りの古い写真や江戸時代（1603～1867年）の絵図の複製をみると、何百年もたった今でもその製法はほとんど変わっていないことが分かります。

2階にある4つの展示室については、入場料が必要です。紙作りの道具や歴史的な写真、農具、1930年代の農家の一部を再現したものなどが展示してあります。和紙作りに用いられる多くの道具は、20世紀半ばまで、ミュージアム周辺の世帯の大半が和紙職人であったことを伝えてくれます。ある部屋には、ダイヤル式電話やテープレコーダー、レコードプレーヤー、カメラなど20世紀のコレクションが展示されており、訪れる人によっては懐かしく、また知らない人もいることでしょう。

美濃和紙用具ミュージアムふくべは、午前10時から午後4時まで開館しています（火曜日は休館）。ボランティアによる展示品の説明も行っています（日本語）。一部のボランティアは、元和紙職人です。

004-008

Tools and Machines For Making Washi

美濃市

【タイトル】美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 1階展示室
【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Tools and Machines For Making Washi

The tools for making washi have changed little over the past thousand years, and many processes are still done by hand. Beginning in the late nineteenth century, however, a few simple machines were introduced to assist artisans and make certain processes less labor-intensive.

The Hollander beater was developed by the Dutch in 1680. It originally used water to power rolling blades, to separate the bast fibers. Beating wood pulp to separate the bast fibers is one of the most labor-intensive processes in making washi. The Hollander beater was introduced in Mino in 1888 to support large-volume production at paper mills and workshops in the area. The technology was not widely adopted until the early twentieth century when electric engines were developed. Today, paper mills and some washi workshops use updated versions of a Hollander beater to process the bast fibers.

Triangular drying machines were introduced in the early twentieth century, ending the reliance on sunny weather for drying paper, and enabling makers to increase their production volume. Early machines were powered by a wood-fired boiler, producing steam to warm stainless steel drying plates. Now, electric versions are most common and can dry a sheet of washi in a few minutes. The difference between machine-dried and sun-dried paper is its pliability. Washi that is dried more slowly in the sun retains a more supple texture and is less likely to tear. Hon-minoshi is always dried in the sun.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙用具ミュージアムふくべ

和紙作りのための道具は、千年たった今でもほとんど変わらず、その工程の多くが今でも手作業です。しかし、19世紀後半になると、簡単な機械がいくつか導入され職人を支援するようになり、特定の労働工程が楽になりました。

ホルンダービーターは1680年にオランダで開発されました。もともとは水を動力として回転する羽根を動かし、靱皮繊維を分離するものでした。和紙作りの中でも、木材パルプをたたいて靱皮繊維を分解する作業は最も手間のかかる工程の一つです。ホルンダービーターは、1888年に美濃でも導入され、地域の製紙工場や工房での和紙の大量生産に役立ちました。この技術は電気エンジンが開発された20世紀初頭まで、広く使用されていませんでした。今日、製紙工場や一部の和紙工房では、ホルンダービーターの最新版を使って靱皮繊維の加工を行っています。

20世紀初頭には三角形の乾燥機が導入され、紙を乾燥させるために晴れの日を待つ必要がなくなり、工房は生産量を増やすことができるようになりました。初期の機械はボイラーに薪をくべて動かすもので、蒸気が発生するとステンレススチール製の乾燥板が温まるという仕組みでした。今では電気式のものが最も主流で、一枚の和紙を数分で乾かすことができます。機械乾燥と天日干しの違いは、その柔軟性にあります。太陽のもとでゆっくりと乾燥された和紙はよりしなやかな手触りで、破れにくくなります。本美濃紙の乾燥は、必ず天日干しで行われています。

【タイトル】美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2
 【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Preparing the Raw Materials

Mino washi is prized for its durability and light, blemish-free appearance. To achieve this quality, the papermaking process begins with the careful preparation of raw materials. On display is the equipment for preparing the bast fibers, along with examples of the raw materials at each stage of the process.

A large metal cauldron on display was used for preparing the white inner bark of the *kozo* (paper mulberry) or *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*), which are the main materials used for making washi. After the tough outer bark is steamed and peeled off the branches, the inner bark is boiled in the cauldron in a mixture of water and soda ash for around two hours. The soda ash helps to soften the bark fibers. Before soda ash was available, papermakers used ash made from rice husks and straw.

Next to the cauldron, branches of *kozo* and *gampi* are stacked, ready for boiling. Baskets of processed *kozo* inner bark strips and samples of beaten *kozo* pulp give a sense of the painstaking process involved in producing paper fibers.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙用具ミュージアムふくべ

美濃和紙は、その耐久性と、軽くて傷みの無い外観が人気の理由です。この品質を実現するため、紙づくりの工程はまず、原材料を慎重に準備するところから始まります。展示品には、靱皮繊維の加工用具や、各工程の原材料サンプルなどが含まれています。

和紙作りに用いられる主な材料である楮（こうぞ）の白い内皮―雁皮（ガンビ属の低木）―の加工には、展示されている大きな金属製の鍋が用いられていました。硬い外皮に蒸気を当てて枝から剥がした後、内皮をこの鍋の中で、水とソーダ灰と一緒に2時間ほどゆでます。ソーダ

灰は、繊維を柔らかくするのを助けます。ソーダ灰が入手可能になる前は、もみ殻や藁から作られた灰が用いられていました。

鍋の隣には、いつでもゆでられるように楮の枝と雁皮が積み上げられています。加工した楮の内皮の籠や叩き解した楮パルプのサンプルからは、紙繊維の生産工程の大変さが伝わってきます。

【タイトル】美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2
 【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Tools for Making Washi

Mino washi is renowned for its smooth, unblemished surface. Before the paper is made, impurities must be removed from the bast fibers in a process called *chiritori*. The fibers are placed in woven baskets and picked over by hand under running water and under plenty of natural light. Baskets for *chiritori* along with bamboo screens and frames for making paper are displayed along the back wall.

The fine bamboo screens (*su*) displayed on the wall were used to drain the pulp slurry, the key step in the papermaking process. Each screen is made of approximately 3,000 strands of split and shaved bamboo, bound with silk thread. The screen is clamped into a wooden frame called a deckle (*keta*). The deckle is made of Japanese cypress, which can stand up to repeated dunking in water without warping.

In front of the wall are different tools and machines to soften and separate the bast fibers of the *kozo* paper mulberry bark. Wooden mallets or long sticks were used to beat and separate the fibers by hand. In the early twentieth century, machines were introduced, using steam to power long blades to separate the fibers. When making Hon-minoshi there is a process wherein the bast fibers are beaten with a mallet (*kizuchi*) carved with a radial “chrysanthemum” pattern that prevents the fibers from sticking to the face of the mallet.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙用具ミュージアムふくべ

美濃和紙は、その滑らかで染みのない外観が有名です。美濃和紙を作るには、まず塵取りという作業の中で靱皮繊維の中から不純物を取り除かなければなりません。繊維は編んだかごの中に入れられ、十分な自然光のもと、流水を使って手作業で選別されます。塵取り用のかごや、紙漉き用の

竹簀が、後方に展示されています。

壁に展示されている竹簀（す）は、パルプのとりとした液体を流す紙づくりの重要な工程に用いられます。各竹簀は、竹を割り削って加工したものを約3,000本組み合わせて、絹糸で縛ったものです。網の部分は、桁（けた）と呼ばれる木製の型枠に固定されます。桁はヒノキでできており、繰り返し水に浸しても耐えることができます。

前方には、楮（こうぞ）の皮の繊維を柔らかく解すためのさまざまな用具や機械が並んでいます。手作業で繊維を解す際には、木槌や長い棒が用いられました。20世紀初頭には、蒸気を使って長い刃を回転させて、繊維を解す機械が導入されました。本美濃紙を作る際には、木槌を使って手作業で靱皮繊維の分解が行われます。この際に使用される木槌の表面には菊模様が彫られており、繊維が木槌に付着してしまわないようなデザインになっています。

004-011

Making a Bamboo Screen

美濃市

【タイトル】美濃和紙用具ミュージアムふくべ / 展示室2
【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Making a Bamboo Screen

One of the most important tools for making washi is the bamboo screen (*su*) used to form and drain the pulp slurry. Each screen is made of approximately 3,000 strands of split and shaved bamboo, bound with silk thread. It typically takes a week to make a single screen, and only one remaining artisan in the area is capable of making them.

The photographs here show the process of making a screen, along with the tools used to split and shave the bamboo. The bamboo strands are carefully joined along diagonal cuts to achieve the desired length, and bound with raw silk thread to create a smooth surface for the paper. Artisans sit on the tatami-mat floor to make the screens, which are fixed to a wooden board hung with dozens of bobbins of silk thread for binding.

Other tools on display include blades for cutting the bamboo used to make the screens and the steel draw plates and pliers used to reduce the circumference of the bamboo by drawing it through progressively smaller holes.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙用具ミュージアムふくべ

和紙作りでもっとも大切な道具の一つが、パルプのとりとした液体を形成し流すための竹簀

（す）です。各竹簀は、竹を割り削って加工したものを約3,000本組み合わせて、絹糸で縛ったものです。これを一つ作るのに、通常、1週間を要し、これを作ることのできる職人は、この地域には1人しか残っていません。

展示の写真には、竹簀の制作工程や、竹を割り削る道具が映っています。割いた竹は斜めの切り口に沿って丁寧に合わせ、紙の表面が滑らかになるよう絹糸で縛ります。職人は畳の上で竹簀を作るのですが、この竹簀は、絹糸のボビンがいくつもついた木板に縛りつけて固定されていま

す。

他にも、竹簀の材料となる竹を切る刃物や、竹に徐々に小さくなる穴を開けて円周を縮める鋼鉄製の引き板ややつこなども展示されています。

【タイトル】 本美濃紙 /生産地域

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

City of Mino: An Ideal Environment for Making Paper

The local environment plays an important role in the production of Mino's paper. The Nagara and Itadori Rivers carve wide valleys through the mountains surrounding the city of Mino. An abundance of water and ready access to raw materials make the area ideal for paper production.

Start with clean water

Water is used at every step of the papermaking process, so paper workshops are located close to rivers and springs. The process begins by peeling the hard outer bark from branches of *kozo* paper mulberry, revealing the white inner bark. The inner bark strips are stripped off and washed and left to soak for several days in the river or a water bath outdoors, where water and sunlight have natural bleaching effects. After boiling the inner bark strips to break down the fiber, the resulting mass is carefully picked over in flowing water to remove impurities. Finally, the pulp is mixed with a natural dispersal agent in a shallow tank of clean water; the slurry is strained through a bamboo screen to form thin sheets of paper. By this method, an experienced artisan can produce around 80 sheets of paper a day.

To create white paper free of discoloration, the water must be clean and free of pollutants and certain types of minerals that can damage the paper. Minerals such as calcium carbonate or magnesium carbonate can affect how the bark fibers bond and result in a paper that is weaker or uneven in thickness. Iron oxide in the water can act against the natural bleaching process and may appear years later as brown oxidation marks on the surface of the paper.

In the rays of the sun

Mino paper is famous for its naturally white appearance, which is enhanced through sun bleaching at both the early and final stages of the papermaking process. Both the inner fibers of the *kozo* bark and the finished sheets of paper are naturally bleached in sunlight. After the fibers are peeled from the white inner bark of the *kozo* shrub, they are spread out in the shallows of the river or a water tank and exposed to sunlight. In other parts of Japan, bleaching is done by laying the *kozo* fibers out on snow-covered fields or in rice paddies after the harvest.

After the fibers have been soaked and exposed to the sun, papermakers pick them over to remove impurities, which are most easily identifiable in natural light. Experienced pickers can process 1 to 2 kilograms of fibers a day. Papermakers also prefer natural light to judge the thickness of the paper as it forms, and paper workshops have large louvered windows that open up to views of the river and mountains. The paper is dried naturally in the sun on large wooden boards, which takes up to an hour in strong sunlight. The sun has a natural bleaching effect on the paper as it dries. Each sheet of Mino paper is thus the product of the natural materials, the surrounding environment, and the skills of the maker.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

生産地域

美濃紙の生産には、地域の環境が重要な役割を担っています。美濃市を囲む山々の大きな谷間には長良川と板取川が流れています。豊かな水と原料が入手しやすいこの一帯は、美濃紙作りに適した土地となっています。

清らかな水からはじまる

紙を作る工程の一つ一つで必ず水を使うため、和紙工房は川や泉の近くにあります。まずは、楮（こうぞ）の枝から硬い外皮をはがし、白い内皮を露出させます。この白皮を剥いで洗い、清流または屋外の桶に数日間浸し、水と日光による自然漂白を行います。内皮を煮て繊維をほぐした後、流水で丁寧に選別し不純物を取り除きます。最後に、綺麗な水を張った浅い漉き舟の中でパルプと天然の分散剤を混ぜ合わせ、竹簀で漉いて薄い和紙を作ります。この方法で、経験豊富な職人は1日に約80枚の和紙を作ることができます。

変色のない白い紙を作るには、紙にダメージを与える不純物や特定のミネラル成分を含まない、きれいな水が必要です。炭酸カルシウムや炭酸マグネシウムなどのミネラルは、樹皮の繊維の結合に

影響を与え、紙が弱くなったり、厚さが不均一になったりすることがあります。水中の酸化鉄は、自然漂白に逆作用し、数年後に紙の表面に茶色の酸化痕として現れることがあります。

太陽の光で

美濃紙はその天然の白さで有名ですが、製紙工程の前半と後半の両方で日光による漂白が行われ、これによりさらに美しい白色が引き出されています。楮（こうぞ）の内皮の繊維も、出来上がった紙も、どちらも日光で自然漂白されます。楮（こうぞ）低木の白皮から繊維をはがした後、川の浅瀬や水桶に広げて日光にさらします。日本の他の地域では、楮（こうぞ）の繊維を雪原や収穫を終えた水田に寝かせて漂白を行う場合もあります。

繊維を水に浸して日光にさらした後、職人が念入りに確認しながら不純物を取り除きます。不純物は自然光の中が最も確認しやすいと言われています。経験豊富な職人は、1日に1～2キロの繊維を処理することができます。また、紙の厚みを判断する際にも自然光が好まれるため、和紙工房には川や山々の形式が広がる大きなよろい窓が設置されています。紙は日光が強い場合で最大1時間、大きな木製の板の上で天日で乾燥させます。太陽には自然漂白効果があるので、乾燥の過程でさらに漂白されます。こうして、美濃紙の一枚一枚が、天然素材と、周囲の環境と、職人の技により作られていきます。

【タイトル】 本美濃紙 / 本美濃紙

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

What Is Hon-Minoshi?

Many types of washi paper are made in the Mino area, including handmade and machine-made papers. The highest-quality paper is Hon-minoshi, a lightweight washi valued for its strength, durability, smooth texture, and unblemished appearance. Washi labeled Hon-minoshi (literally, “genuine Mino paper”) must meet strict criteria. In 2014, the production techniques of three types of washi were added to the UNESCO Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity: Hon-minoshi from Gifu Prefecture, Sekishubanshi from Shimane Prefecture, and Hosokawashi from Saitama Prefecture.

Hon-minoshi paper meets the following criteria:

1. Daigo *nasu kozo* (paper mulberry) from Ibaraki Prefecture is the only raw material used for the pulp.
2. Production must use traditional methods and tools:
 - Boiling the white inner *kozo* bark with plant or soda ash
 - No use of chemical bleaches or added pigments
 - Pounding of the bast fibers by hand or a special machine
 - Sunset hibiscus (*tororoaoi*) used as the dispersant to prevent the fibers from clumping
 - *Kagitsuke* or *sogitsuke* bamboo screens
 - The rocking technique of *nagashizuki* must be employed to make paper with superior durability

3. The paper must have the characteristic color, luster, and texture of Hon-minoshi.

In addition, Hon-minoshi must be made in Mino by a member of the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking. All materials must be traceable, and the materials and manufacturing methods must not damage the environment or the health of the workers.

Hon-minoshi has played an important role in rural communities for generations by supporting the production of raw materials and ensuring the longevity of traditional tools and artistic techniques. Historically, Hon-minoshi has supported the economic development of Mino and helped to protect the area's natural environment through sustainable manufacturing.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本美濃紙

美濃地域では、手漉きや機械漉きなどでさまざまな和紙が作られています。その中でも最も上質なものが本美濃紙で、その軽い和紙の強くて耐久性があり、滑らかで汚れのない外観が人気となっています。本美濃紙と（文字通り）認められるためには厳しい基準を満たさなければなりません。2014年、ユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に、3種類の和紙の製法が追加されました。岐阜県の本美濃紙、島根県の石州半紙、そして埼玉県細川紙です。

本美濃紙は、以下の基準を満たしているものです。

1. 茨城県産の太子那須楮がパルプに使用されている唯一の原材料であること。
2. 生産には、以下の伝統手法と道具が用いられていること。
 - 植物灰またはソーダ灰とともに楮の白皮をゆでる
 - 化学漂白剤や色素剤を使用していない
 - 手作業または専用機械による靱皮繊維の叩解
 - 繊維が塊になるのを防ぐため分散剤としてサンセットハイビスカス（とろろあおい）を使用
 - 「かぎつけ」または「そぎつけ」の竹簀
 - 丈夫な紙を作るため、「流し漉き」の揺らし技法を使用
3. 紙には、本美濃紙特有の色、艶、質感が備わっていなければなりません。

また、本美濃紙は、美濃地方で、本美濃市保全協会の会員が作ったものとされています。すべての材料は追跡可能で、材料や製法が環境や職人の健康に害を与えてはなりません。

本美濃紙は、原材料の生産を支え、伝統的な用具や職人技を長く残すことで、何世代にもわたってこの地域で重要な役割を果たしてきました。本美濃紙は歴史的に、美濃の経済発展を支え、持続可能な製造を通して、この地域の自然環境保護に貢献してきたのです。

【タイトル】 美濃手すき和紙

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Tesuki-Washi: Handmade Washi

Most of the washi paper that you can see and buy in Mino is branded as Mino Tesuki-washi. Like Hon-minoshi, Mino Tesuki-washi must meet strict requirements to carry the Mino name. The basic processes for both Hon-minoshi and Mino Tesuki-washi are the same. However, while Hon-minoshi uses only the inner bark fibers of the *kozo* (paper mulberry) plant grown in Daigo, Ibaraki Prefecture, Mino Tesuki-washi can also be made with *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*) and *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*).

Drying by machine

Another key difference is that Mino Tesuki-washi can be dried by machine, while Hon-minoshi is always dried in the sun. This makes it easier for washi makers to produce paper year-round. Visitors to the Mino Washi Paper Museum in Mino can try their hand at making several types of handmade washi.

Types of Mino Tesuki-washi

There are three common types of Mino Tesuki-washi: water-patterned *rakusuishi*, non-bleached *kigami*, and coarse *unryushi*. Water sprinkled on sheets of washi before drying creates patterned paper called *rakusuishi*. To make *kigami*, the inner bark fibers are not bleached by the sun and water, resulting in a warmer color. When the bark fibers are less refined, they create attractive patterns, producing washi known as *unryushi*. These papers are commonly used to make lanterns and fans, and some writing paper.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃機械漉き和紙

美濃で見つけて購入できる和紙のほとんどは、美濃手漉き和紙というブランドです。本美濃紙のように、美濃手漉き和紙もまた、美濃を名乗るには厳しい基準を満たさなければなりません。本美濃紙と美濃手漉き和紙の基本的工程は同じです。ただし、本美濃紙が茨城県大子で育った楮（こうぞ）の内皮繊維のみを用いるのに対し、美濃手漉き和紙は、ミツマタ（ジンチョウゲ科）や雁皮（アオガンピ属の低木）でも作ることができます。

機械乾燥

もう一つの大きな違いは、美濃手漉き和紙の場合は機械乾燥できるのに対し、本美濃紙は必ず天日干しとなっています。こうすることで、和紙職人は一年を通して紙を生産することができます。美濃和紙の里会館（美濃市）では、数種類の手漉き和紙づくりを体験することができます。

美濃手漉き和紙の種類

美濃手漉き和紙は主に3種類あります。水模様の落水紙（らくすいし）、未漂泊の生紙（きがみ）、そして荒い雲竜紙（うんりゅうし）です。乾燥する前に和紙に水を掛けると、落水紙と呼ばれる模様ができます。生紙は、内皮繊維を天日と水で漂白しないため、より温かみのある色に仕上がります。樹皮の繊維を粗いままにしておくと、美しい模様が生まれ「雲竜紙」と呼ばれる和紙ができます。これらの和紙は、提灯や扇子、便箋にも用いられます。

【タイトル】美濃機械すき和紙

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Mino Kikaisuki Washi: Machine-Made Washi

Handmade washi is produced one sheet at a time, and skill and experience are required to make paper of consistent quality. The city of Mino is also home to a large paper industry, producing washi for use in commercial applications such as paper for shoji screens, lanterns, and even coffee filters and thread.

Making washi more cost-effective

Some washi artisans adopted machinery to produce washi more cost-effectively, and to compete with imported paper. Many of the processes of machine-made washi are automated versions of traditional techniques. The main material for *kikaisuki* washi (machine-made paper) is pulp including the bast fibers of plants such as *kozo* (paper mulberry), *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*), and *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*).

Processing the raw materials

A *naginata* beater is used to process the fibers. The long rotating blades pull the fibers apart rather than cutting it in short pieces, resulting in a strong product that is similar to handmade washi. A machine does the process of removing impurities from the fibers with a sieve-like screen. (Traditionally these impurities are picked out by hand.)

Making the paper

Another machine uses a large deckle, or frame, and mimics the side-to-side and back-and-forth scooping action of a human papermaker. The paper sheets are then compressed to remove excess water, passed through a drying machine, and cut to size.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本美濃紙 / 原材料－収穫と加工過程

手漉き和紙は一枚ずつ作られ、均一な仕上がりの紙を作るには技と経験が求められます。美濃市は製紙産業が盛んで、障子紙や提灯、コーヒーフィルターや糸など、業務用の和紙が生産されています。

コスト効率の良い和紙作り

一部の和紙職人は機械を導入し、和紙作りのコスト効率を上げ、輸入紙と競争できるようにしています。機械漉き和紙の工程の多くは、伝統的な技法を自動化したものです。機械漉き和紙（機械で作る和紙）の主な材料は楮（こうぞ）、ミツマタ（ジンチョウゲ科）、雁皮（がんぴ）（アオガンピ属の低木）といった植物からとれる靱皮繊維などのパルプです。

原材料の加工

繊維の加工には薙刀が用いられます。回転する長い刃が、繊維を短く切るのではなく引き離すことで、手漉き和紙のような丈夫な製品ができます。繊維から不純物を取り除く工程を、ふるいのような簀を用いて機械により行います。（従来はこれを手作業で行っていました。）

製紙

また、大きな簀（型枠）を使用し、和紙職人による左右・前後のすくい取り作業を模倣した機械もあります。その後、圧縮して余分な水分を取り除き、乾燥機にかけてから、サイズに合わせて裁断します。

【タイトル】 本美濃紙 / 本美濃紙についての概要
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi: Layers of History

The oldest known extant paper in Japan comes from Mino, in Gifu Prefecture. It was used for a family register from Mino, dated 702 CE. The paper is stored at the Shosoin Repository in Nara Prefecture, which houses ancient treasures and artifacts. The technique of making paper with hemp and bast fibers came to Japan from China. An account in the *Nihon shoki* (*Chronicles of Japan*), published in 720, mentions that the Chinese method of making paper was introduced to Japan by a Buddhist priest from Korea in 610, but papermaking may have been introduced earlier, with the arrival of Buddhism in the mid-sixth century.

The origins of washi

Hemp is difficult to break down into fibers, so techniques were developed locally using plants such as *kozo* (paper mulberry), *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*) and *gampi* (*Wikstroemia*). Paper made with these plants became known as washi (literally, Japanese paper). Making washi was a profitable activity for farmers during the winter. Over time, it grew into a key rural industry. The way of making Mino washi has changed little in over 1,300 years.

Paper and taxes

Along with commodities such as rice and salt, washi was used to pay taxes. Washi grew in importance as Buddhism spread throughout Japan. Mino washi was used from the Nara period (710–794) for the copying of sutras and for government records including family registers. Mino benefited from convenient access to Kyoto, the capital during the Heian period (794–1185) and beyond.

Demand for Mino washi grows

With the establishment of a Shogunate in Kamakura in Kanagawa Prefecture in twelfth century, Mino washi became popular among the samurai as a gift to present on formal occasions. The Toki family, who governed the Mino region from the fourteenth to the mid-sixteenth century, opened a paper market in Oyada (part of present-day Mino City). The market was held six times a month, selling Mino washi to merchants who sold it in Kyoto and Osaka.

Mino washi in battle

In 1600, samurai Kanamori Nagachika (1524–1608) who governed the Hida region in the mountains north of Mino, fought on the side of Tokugawa Ieyasu in the Battle of Sekigahara, at the end of the Warring States period. Their decisive victory signaled an end to over 100 years of civil war and social upheaval and united the country under the Tokugawa shogunate. A tassel of strips of Mino washi topped the baton (*saihai*) that Tokugawa Ieyasu used to convey orders to his troops. A replica of the black-lacquered *saihai* is in the collection of the Mino Washi Paper Museum. Mino washi became the official paper of the shogunate, and local makers were given official titles and exemptions on duties. For his loyalty, Kanamori was rewarded with the lands around Mino. He expanded the port on the banks of the Nagara River and developed the town as a center of the paper trade.

Protecting the future

The fortunes of Mino washi waned after World War II, increasingly replaced by printing machines and Western-style wood pulp paper. Lifestyles changed, and the market for washi for use in everyday items such as lanterns and shoji screens diminished. In the twenty-first century, Mino washi is used mainly for traditional crafts and restoration work. The number of papermakers in Mino has dropped from thousands in the late nineteenth century to a handful today who follow the same methods established over 1,000 years ago. Through local efforts, the techniques of making Mino washi continue as part of Japan's craft heritage. In 2014, the handmade washi techniques of Mino were added to the UNESCO Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本美濃紙の歴史

現存する日本最古の紙は、岐阜県的美濃のものです。紀元702年の美濃の家系図に用いられており、古代の宝物や工芸品を収蔵する奈良県の正倉院に保管されています。麻や靱皮繊維を使用した製紙法は、中国から日本に伝わりました。紀元720年に書かれた日本書紀には、中国の製紙法は紀元610年に朝鮮半島の仏僧により日本に伝えられたと記されていますが、紙漉きの技術は恐らく、これよりもさらに前の6世紀半ばに仏教伝来とともに日本に渡ったと考えられています。

和紙の起源

麻は繊維に分解させることが難しかったため、楮（こうぞ）（カジノキ）やミツマタ（ジンチョウゲ科）、雁皮（アオガンピ属）といった植物を使う技法が現地で発展していきました。こうして楮（こうぞ）や雁皮（がんぴ）で作られた紙が、和紙と呼ばれるようになりました。和紙作りは、農家にとって、冬の時期にも収入につながるものでしたが、やがて地方の主要産業へと発展していきました。美濃和紙の作り方は1300年以上前からほとんど変わっておりません。

紙と税

和紙は米や塩などの生活用品とともに、税金の支払いにも使用されていました。そして、日本各地で仏教が広まる中、和紙の重要性は増していきました。美濃和紙は、奈良時代（710～794年）より經典の写経や家系図などの政府の記録に用いられました。美濃は、平安時代（794～1185年）以降、都である京都へのアクセスが良かったことによる恩恵を受けていました。

美濃和紙の需要拡大

12世紀、神奈川県の鎌倉に幕府が開かれると、美濃和紙は武士の間で慶事用の贈答品として普及しました。14世紀から16世紀半ばにかけて美濃地方を治めた土岐家は、大矢田（現在の美濃市の一部）に紙市を開きました。紙市は月に6回開催され、そこで商人たちにより購入された美濃和紙が京都や大阪に売られていきました。

戦における美濃和紙

1600年、美濃の北の山間部、飛騨地方を治めていた武将、金森長近（1524-1608）は、戦国時代末期の関ヶ原の戦いで徳川家康側について戦いました。徳川軍の決定的な勝利は100年も続いた日本の内戦と社会的混乱に終止符を打ち、徳川幕府のもと日本は統一されることとなりました。徳川家康が軍令を伝えるために使用した采配には、美濃和紙の短冊を房にしたものが用いられました。美濃和紙の里会館には、黒漆塗りの采配のレプリカが展示されています。美濃和紙は徳川幕府の御用紙となり、現地の職人たちは御紙漉屋を名乗ることが許され、諸役免除の証文を受けました。金森氏はその忠義が買われて美濃周辺の土地が与えられました。金森氏は、長良川の土手にある港を拡大し、紙産業の中心としてそこに町を築きました。

未来を守る

第二次世界大戦後、美濃和紙は印刷機や洋紙に押され、衰退していきました。生活様式が変わ

り、提灯や障子といった日常品向けの和紙市場は消えていきました。21世紀の現在、美濃和紙は、主に伝統工芸品や修復作業に用いられています。1,000年前から同じ手法で紙を制作する職人の数は、19世紀末の数千人から現在ではほんの一握りの数にまで減少しました。現地の取り組みにより、美濃和紙の製法は日本の工芸遺産の一部として維持されています。2014年、美濃の手漉き和紙の製法は、ユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に追加されました。

【タイトル】 本美濃紙 /
和紙の使用方法—障子、書簡、文化遺産の保存と補修など
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi—A Versatile Material

Mino washi has long been valued for its durability and absence of impurities. Using high-quality natural materials and techniques that thoroughly intertwine the bast fibers, washi from Mino retains its strength and beauty for generations. The oldest known extant paper in Japan is from Mino. It was used for a family register dating from 702. As Buddhism spread throughout Japan in the eighth century, Mino washi was used to copy sutras and for government records.

During the Edo period (1603–1867), Mino washi was used by the Tokugawa shogunate for legal tender and in the production of high-quality goods for shogunate officials and court nobles such as paper for sliding screens and hand-painted Gifu lanterns. The demand for Mino washi increased significantly over the course of the Edo period, and Mino's paper merchants flourished.

Mino washi is still used for lanterns and shoji sliding screens and has found new markets overseas. In 2005, the Kyoto State Guest House ordered 5,000 sheets of Hon-minoshi for use on shoji screens and lighting fixtures. Hon-minoshi is sold to museums around the world for the conservation of artworks, books, and documents. The paper is lightweight but strong, does not yellow with age, and is not acidic, which means it will not damage the artifacts being conserved and repaired.

Mino washi was also used to make the paper certificates given to athletes at the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. It took the washi makers of Mino almost a year to produce the 17,600 sheets ordered for the games.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和紙の使用方法―障子、書簡、文化遺産の保存と補修など

美濃和紙は、長い間、その耐久性と不純物のなさから重宝されてきました。上質な天然素材と靱皮繊維をしっかりと絡ませる技法により、美濃の和紙は何世代にもわたりその丈夫さと美しさを保ち続けています。現存する日本最古の紙は美濃のもので、紀元702年の家系図に用いられたものでした。8世紀になると日本では仏教が広まり、美濃和紙は、経典の写経や政府記録に用いられるようになりました。

江戸時代（1603～1867年）、美濃和紙は、徳川将軍が法貨に使用し、また、障子や岐阜提灯など、役人向けの質の高いアイテムにも用いられました。江戸時代、美濃和紙の需要は大幅に高まり、美濃の紙商人は栄えました。

美濃和紙は今でも提灯や障子に使用されており、海外では新たな市場も見出しています。2005年、京都迎賓館では5,000枚の本美濃紙を発注し、障子や照明具にこれを使用しています。本美濃紙は、美術品や書籍、資料の保全用に、世界中の博物館で販売されています。本美濃紙は軽くて丈夫なうえ、時間が経っても黄ばまず、しかも酸性でないことから、保全や補修の対象となる遺物を傷つけることはありません。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技会では、選手に贈られる賞状用紙にも美濃和紙が使用されました。競技会用に発注された17,600枚の和紙を作るのに、美濃の和紙職人たちは実に1年近くを要しました。

【タイトル】 本美濃紙 / 職人の方々

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Hon-Minoshi Makers

Making Hon-minoshi is laborious, painstaking work. To make each feather-light sheet of blemish-free paper, artisans spend long days bent over clumps of bast fibers, picking out impurities; they spend hours on their feet screening pulp slurry to form sheets of paper. They carry the drying boards that each weigh around 20 kilograms to stand them in the sun. *Kozo* (paper mulberry) branches are harvested and processed in winter, and papermakers wash the inner bark fibers in icy river water or outdoor water tanks.

It takes at least 10 years for an apprentice to a member of the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking to qualify as a certified Hon-minoshi maker, and there are currently just six registered Hon-minoshi ateliers. Traditionally, papermakers in Mino passed their skills down through generations, and children would join the family business after high school. In recent years, aspiring papermakers have been welcomed from all over Japan. Some of the new Hon-minoshi makers left previous careers to devote their time to paper.

Mino City has established the Nurturing Successors of Hon-Minoshi Initiative, using public donations to help fund the training of new apprentices. Most artisans start their training at the Mino Washi Paper Museum, which offers a month-long course in making washi. After that, they need to find a qualified Hon-minoshi maker to start their apprenticeship.

Current members of the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking

are the Sawamura family, Mino Takekami Workshop (the Suzuki family), Kano Takeshi, Ishihara Hidekazu, Kurata Makoto, and Ieda Minako. Ateliers are generally not open to the public, but visitors can purchase Hon-minoshi at Mino Washi Paper Museum and shops in Mino.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

職人の方々

本美濃紙作りは手間のかかる大変な作業です。羽毛のように軽く傷のない紙をつくるために、職人たちは何日もかけて靱皮繊維の塊と向き合って不純物を取り除き、何時間も立ちっぱなしでパルプのとりりとした液体を漉いて紙を作ります。また、1枚20キロほどもある乾燥板を運び、日光が当たる場所に立てかけます。楮（こうぞ）の枝は冬に収穫・加工されるため、職人たちがその内皮繊維を洗うのは凍るように冷たい水の中、あるいは屋外の桶の中になります。

美濃和紙保全協会の見習い会員が本美濃紙職人として認定されるには、少なくとも10年かかります。また、現在、本美濃紙工房として登録されているのはわずか6軒です。従来、美濃の和紙職人は、代々その技を受け継ぎ、子供たちは高校を卒業すると家業に就くというのが伝統的なスタイルでした。近年は、和紙職人を目指す人々が日本全国から集まってきています。新しい本美濃紙職人の中には、これまでの仕事を捨てて紙作りに専念しようという人たちもいます。

美濃市では、義援金により、本美濃市継承者育成イニシアチブを発足し、新たな見習いの研修費用に充てています。多くの職人は、美濃和紙の里会館で研修を始め、そこで1か月間和紙作りについて学びます。その後、本美濃紙職人と認定されている職人を見つけて師事しなければなりません。

美濃和紙保全会の現在の会員は、沢村家、美濃竹紙工房（鈴木家）、鹿野武、石原秀和、倉田誠、家田美奈子です。工房は基本的に一般公開されていませんが、美濃和紙の里会館や美濃市内の店舗で本美濃紙を購入することができます。

004-019

Mino Washi Paper Museum

美濃市

【タイトル】 美濃和紙の里会館 / 概要
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi Paper Museum

Visitors to Mino Washi Paper Museum can learn about washi in Mino through displays of tools and materials, detailed dioramas, videos, and hands-on workshops. Many of the displays have English signage. Regular exhibitions feature artwork from around the world that uses washi.

The international history of writing materials from clay tablets to wood-pulp paper is explained through artifacts and illustrations. Replicas of historical artifacts, such as the earliest-known example of Mino washi from 702, give visitors an overview of the development of washi in Japan, with an emphasis on the Mino area.

Each step of the washi-making process is explained through dioramas, photographs, videos, and displays of the materials and equipment used. A large model of the Japanese archipelago has lanterns made of washi from each area, showing the differences in style and raw materials.

Several rooms are devoted to traditional and contemporary uses of Mino washi. Gifu lanterns and sliding shoji screens were made with Mino washi in the Edo period (1603–1867). Modern applications include washi yarns and audio speaker diaphragms.

Washi-making workshops, available through the museum, use the same materials and tools as professional papermakers. Participants can choose to make washi postcards or sheets of washi decorated with leaves, paper shapes, or water patterns. The workshops

take less than an hour and are held several times a day. Reservations must be made in advance.

Items made from Mino washi can be purchased at the museum shop. Meals and refreshments are available at the museum cafe.

Mino Washi Paper Museum is open daily from 9:00 a.m. to 5:00 p.m. (closed Tuesdays).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙の里会館

美濃和紙の里会館では、道具や材料の展示、詳細なジオラマ、映像、体験教室などを通して、美濃の和紙について学ぶことができます。展示品の多くには英語の説明が添えられています。常設展示では、和紙を使った世界各地の芸術品が展示されています。

粘土板から木材パルプ紙まで、筆記用紙の国際的な歴史が、遺物や図版を通して解説されています。現存するもので最も古い紀元702年の和紙など、歴史的遺物のレプリカを目にすることで、来訪者は美濃地方を中心とした日本の和紙の発展の概観を捉えることができます。

和紙作りの各工程は、ジオラマや写真、映像、使用する材料や道具の展示などを通して解説されています。日本列島の大きな模型には、各地の和紙で作られた提灯が飾られており、様式や原材料の違いを見ることができます。

いくつかの部屋では、美濃和紙の伝統的な使い方と近代的な使い方を紹介しています。岐阜提灯や障子は、江戸時代（1603～1867年）から美濃和紙で作られています。近代的な用途としては、和紙糸やオーディオスピーカーの振動板が挙げられます。

美濃和紙の里会館で開催されている和紙作りワークショップでは、プロの和紙職人の方々が使用しているものと同じ材料と道具が使われます。参加者は和紙を使ったポストカードのほか、葉っぱや紙型、水の模様が描かれた和紙シートを作ることができます。ワークショップは1時間弱で、1日に数回開催されます。事前予約が必要です。

美濃和紙を使った商品は、ミュージアムショップで購入することができます。館内のカフェでは、食事や軽食を楽しむことができます。

美濃和紙の里会館は、毎日午前9時から午後5時まで開館しています（火曜日は休館）。

【タイトル】美濃和紙の里会館 / 紙漉き体験

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Paper Experiences at Mino Washi Paper Museum

The best way to appreciate Mino paper is to make it. Visitors can experience the process at Mino Washi Paper Museum, using the same materials and tools as professional papermakers. Three papermaking workshops, each of which takes less than an hour, are held several times a day, with advanced reservation.

Mino-ban: making Mino paper

The Mino-ban workshop teaches basic papermaking. It begins with a demonstration of the process, from adding finely pulped *kozo* bark fibers and *nebeshi* (a viscous substance which helps disperse the fibers) to water to make the pulp slurry, to forming a sheet of paper using a fine bamboo screen. Participants can then make their own paper. A bamboo screen is clipped into a wooden frame, which is used to scoop up the pulpy water. The frame is rocked gently from side to side and then back and forth without spilling the water. The process is repeated several times until a fine layer of fibers is evenly deposited over the screen.

The paper is sometimes decorated with dried leaves or colorful paper shapes. The finished sheets are dried on a large metal heater. It takes about 20 minutes to produce a full sheet of paper (33 x 45 cm), and around 5 minutes for the paper to dry.

Rakusui-shi: creating water-patterned paper

This workshop follows the main steps for making Mino-ban paper. Before drying the paper, plain water is used to make patterns on it. Paper cutouts or a patterned metal screen can be used to partially mask the paper before spraying it with water.

The pulp becomes thinner where it is hit by water. Areas covered with paper cutouts, or the screen are left thicker, creating a reverse watermark or pattern. Simple water spray patterns can also be created without masking.

It takes around 30 minutes to make a piece of paper using the *rakusui* technique, and around 5 minutes for the paper to dry.

Hagaki: making postcards

Participants in this workshop make six washi postcards. The steps are the same as for Mino-ban paper except that a frame divided into postcard-size spaces is used.

The pulpy water is scooped and drained quickly, to allow a thicker layer of paper to form. The postcards can be decorated with dried leaves or colored paper shapes. More of the pulp liquid is ladled over the postcards to seal in the decorations.

The postcards are thicker than regular paper and take longer to dry. It takes around 40 minutes to make the cards and around 15 minutes for them to dry.

Deeper immersion

Mino Washi Paper Museum offers in-depth workshops and courses for those considering a career in papermaking. One-day workshops and one-month courses help participants refine their skills and learn more about the industry. Many of the professional papermakers in Mino got their start with a one-month course at the museum. Courses require Japanese-language ability.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙の里会館 / 紙漉き体験

美濃和紙を理解するには、作ってみるのが一番です。美濃和紙の里会館では、和紙職人が使うのと同じ原料と道具を使って紙漉き体験ができます。1日数回にわたり、1回1時間弱の紙漉き体験コースが3種類提供されており、事前予約で参加できます。

美濃判：美濃和紙をつくる

美濃判紙漉き体験では、紙作りの基本を学びます。まずは、パルプ状になった須楮（こうぞ）の繊維とねべし（繊維を分散させる粘性物質）を水に加えてどろどろにし、竹簀を使って紙を形成していくという工程の実演から始まります。その後、参加者は自分の紙を作ります。竹簀が木枠にはめ込まれているので、これを使ってパルプ状の水をすくいあげます。水が木枠からこぼれないようにしながら、縦、縦、横、横と、木枠を揺ります。薄い繊維の膜が竹簀上に均等に広がるまで、この工程を数回繰り返します。

できた紙は、乾燥した葉や色型抜き紙入りにすることもできます。これが終わると、大きな金属製の乾燥器の上で乾燥させます。1枚（33 x 45センチ）の用紙ができるまでに約20分、乾燥には約5分かかります。

落水紙：水模様をつける

このコースでは、美濃判の主な制作工程が用いられますが、乾燥させる前に、普通の水を使って用紙に模様をつけます。紙の型や模様付きの金網を使い、紙の一部を覆ってから、水をかけます。

用紙の水がかかった部分は、他よりも薄くなります。紙の型や金網で覆われていた部分は分厚いままになり、逆透かし模様が完成します。簡単なスプレー模様なら、用紙を覆わずに作ることができます。

落水紙法を使った製紙は約30分、乾燥には約5分かかります。

はがき：ポストカードづくり

このコースでは、はがきを6枚作ることができます。工程は美濃判と同じですが、はがきサイズに分割された枠を使用します。

パルプ状の水をすくって素早く流し、厚めの紙を成形します。はがきは、乾燥した葉や色型抜き紙入りにすることもできます。模様入りにした場合は、上からさらにパルプ状の水を流し込みます。

はがきは通常の紙よりも分厚く、乾燥に時間がかかります。はがきの作成は約40分、乾燥には15分を要します。

集中コース

美濃和紙の里会館では、和紙職人を目指す方のためのより詳細なワークショップやコースが用意されています。1日ワークショップや1か月ワークショップでは、技術を磨き、和紙産業のことをさらに知ることができます。美濃市の職人たちの多くは、美濃和紙の里会館の1か月コースから始めています。各ワークショップは日本語で行われます。

004-021

Former Imai Family Residence

美濃市

【タイトル】旧今井家住宅・美濃史料館 / 概要
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Former Imai Family Residence

The wholesale paper merchants of what is now the city of Mino became wealthy during the Edo period (1603–1867) at the end of the eighteenth century. The most prosperous were the Imai family, as evidenced by their large house in the center of Mino's historical district. Family members served as the *shoya* or head of Mino (similar to a mayor). Reflecting times when land taxes were determined by the width of a building's street frontage, the Imai family residence, built in the mid-Edo period, was the widest in town.

A house designed for work

The front of the house was for business use, with a wide entrance hall with a packed-earth floor. The hall ran the length of the house and was designed for accepting deliveries and receiving customers. While the average merchant house was approximately 6 to 10 meters wide, the Imai house is almost 22 meters wide. It was a sign of wealth, but it was also practical, as large horse-drawn carts that transported paper had to move to and from the storehouses at the back of the house. A wide, cantilevered front door could be latched to the ceiling and opened like a modern garage door, and the door sill could be removed to allow direct access for the horse carts through the entrance hall.

The living areas are elevated and have tatami-mat floors. Just inside the entrance, a narrow ladder leads to a small hatch to the upper floor. It was common in the Edo period for children as young as 10 to work in merchant houses as indentured apprentices or household servants, running errands, greeting customers, or helping with household chores. At night, the ladder was removed so that the apprentices, who

slept upstairs, could not run away.

Public and private spaces

Customers were invited to remove their shoes and step up from the entrance hall to the accounts room (*choba*), an open space next to the entrance with tatami mats, an accounting desk, and a hibachi charcoal burner. It was common for customers and merchants to sit next to the hibachi to relax and smoke before getting down to business.

Esteemed customers might be invited to a small tea room behind the accounts room. An entrance directly from the street was used by important guests, so that they did not have to enter the public area. The sliding doors in the tea room are made of Hon-minoshi paper.

Storehouses and gardens

Four storehouses (*kura*) at the back of the house served as storage for paper and other precious goods. The walls are thickly plastered as a fire retardant. The storehouses are now devoted to exhibitions documenting the history of the city of Mino through letters, paintings, photographs, and models. An enclosed garden separates the house from the storehouses.

Protection from fire

At the rear of the garden is a shrine dedicated to Inari, the deity of rice. The stone lanterns in front of the shrine are popular with visitors for their heart-shaped carvings. The carvings are *inome* motifs, said to resemble the eye of a wild boar. Wild boars were believed to be among the first animals to sense fire and run to safety. These heart-shaped marks are often seen at shrines and temples as a talisman against fire.

Merchants in the area built raised, plastered firewalls (*udatsu*) on both sides of their houses to prevent the spread of fire across rooftops. These firewalls became a sign of wealth, with increasingly elaborate decorations. The streets of the Udatzu Wall Historical District are wide, both to accommodate the carts that once carried paper to the nearby port and to prevent the spread of fire.

旧今井家住宅・美濃史料館 / 概要

現在の美濃市の和紙問屋は、18世紀後半の江戸時代（1603～1867年）から、膨大な富を築き上げました。美濃市の歴史的な地区の中心に位置する大きな住宅からも分かるように、中でも一番繁盛していたのは今井家でした。今井家は、美濃の庄屋または長（市長のようなもの）を務めていました。地租が建物の道沿いの正面幅をもとに決められていたこの時代、江戸時代中期に建築された今井家の住宅は、街一番の幅を誇っていました。

作業用に設計された住宅

土間仕様の幅の広い玄関となっている住宅の正面は、商いに使われていました。この空間が住宅の端から端まで続いており、配達や接客用に設計されたものでした。平均的な問屋の幅が約6～10メートルだったのに対し、今井家の住宅の幅は22メートル近くもありました。このことは裕福な証しただけでなく、住宅の裏側の保管庫で紙を輸送するための大きな馬車が入り出す際に実用的でした。幅の広い片持ち正面扉は天井にひっかけて現代のガレージ扉のように開くことができました。また、ドア枠は馬車が入るよう外すことができました。

生活空間は一段高くなっていて、畳が敷き詰められていました。玄関から入ってすぐのところにある狭いはしごは、上階へと続く小さな昇降口が続いています。江戸時代、10歳くらいの子供が年季奉公人や使用人として問屋で働き、使い走りをしたり接客をしたり、あるいは家事を手伝ったりすることは一般的でした。夜になると、上階で寝ている年季奉公人たちが逃亡できないように、はしごは外されていました。

公私の空間

客は、玄関で靴を脱ぎ、畳や帳机や火鉢が配された玄関のすぐ隣にある帳場へ上がるよう、案内されます。客や商人が火鉢のすぐそばに座ってくつろぎ、タバコを吸ってから作業に入るのが一般的でした。

お客様などは、帳場の裏の小さな茶室へと案内されることもありました。重要な客の場合は、公共部を通らずに済むよう、道路から直接入れる別の玄関が用いられていました。茶室の障子には本美濃紙が使われています。

蔵と庭

住宅の裏にある4つの蔵は、紙や貴重品などの保管に使われました。壁は、防火剤として分厚いしっくいでも覆われています。現在、蔵の部分は、手紙、絵画、写真、模型などを通して美濃市の歴史を伝える史料館となっています。中にある庭が、住宅と蔵を仕切っています。

防火

庭の後方には、稲荷神を祀る稲荷神社があります。神社正面にある石灯ろうは、ハート形の彫刻が観光客の間で人気です。この彫刻は、イノシシの目を表した猪目のモチーフです。イノシシは、火事を察していち早く安全な場所へ逃げる動物と考えられていました。このハート形の彫刻は、火事除けのお守りとして神社仏閣によく見られる動物です。

この辺りの商人たちは、住宅の片側にうだつ（漆喰を塗った防火壁）を建てて、火災時に屋根から火が移るのを防いでいました。この防火壁はやがて富の証となり、次第に精巧な装飾へと変化していきました。うだつの上がる町並みの道路は広く、付近の港へ紙を運ぶ馬車が通りやすくなりましたが、これは、炎が燃え広がりにくくするためのものでもありました。

【タイトル】旧今井家住宅・美濃史料館 / 蔵

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Warehouses at the Former Imai Family Residence

Four warehouses stand behind the Former Imai Family Residence, each clad in a thick layer of plaster for protection against fire. The Imai family were wealthy paper merchants in the Edo period (1603–1867) and into the early twentieth century who also served as the *shoya* or headmen of Mino (similar to a mayor). The warehouses (*kura*) were used for storing the family's merchandise and most precious possessions. Three of the warehouses now hold collections of artifacts and documents related to the history and architecture of the Mino area.

One warehouse displays photographs and reproductions of the raised fireproof walls (*udatsu*) that protect many merchant houses in the Udatsu Preservation District. Fireproof walls extend above the roofline and were designed to prevent the spread of fire across rooftops. Each *udatsu* is capped with roof tiles, and the front is decorated with a family crest or a demon-like talisman called *oni-gawara*. Building a house with *udatsu* was expensive, and over time they became a symbol of wealth.

Another warehouse holds an exhibition about Mino Nagashi Niwaka, a traditional form of entertainment that combines humorous stories and music, and is performed in the streets on evenings during Mino's spring festival. The display includes a full-sized replica of the musicians' drum cart decorated with glowing paper lanterns and mannequins dressed as musicians. The largest warehouse holds a collection of historical photographs and documents. Photographs capture historic scenes, including the first train to run between Nagoya and Mino in 1911 and the first suspension bridge across the Nagara River, completed in 1916.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

本美濃紙 / 旧今井家住宅倉

旧今井家の住宅の裏には4つの蔵があり、それぞれが防火用に分厚いしっくいで保護されています。今井家は、江戸時代（1603～1867年）から20世紀初頭にかけての裕福な和紙問屋で、美濃の庄屋または長（市長のようなもの）を務めていました。蔵（くら）は、一族の商品や最も大切な財産を保管するために使用されていました。現在、3つの蔵には、美濃地方の歴史や建築に関する遺物や資料のコレクションが収蔵されています。

また、蔵の1つには、うだつ保全地区の多くの商人の家を守ってきたうだつ（防火壁）の写真や復元物が展示されています。これらの防火壁は屋根よりも高い位置まで伸びており、屋根から隣の家へと火が燃え広がるのを防ぐためのものでした。うだつには瓦が乗っていて、前面には家紋や鬼瓦が付されていました。うだつ付きの家を建てるのにはお金がかかり、次第に富の象徴となっていきました。

また、別の倉庫では、美濃の春祭りの夜に道端で演じられる、愉快的な話と音楽を組み合わせた伝統芸能「美濃流し仁輪加」の展示も行っています。展示では、実物大の太鼓台のレプリカに煌びやかな和紙提灯が飾られ、囃子方に扮した人形が置かれています。一番大きな蔵には、歴史的な写真や資料が保管されています。展示されている写真は、1911年に名古屋と美濃を結んだ最初の電車や、1916年に完成した長良川の最初のつり橋など、歴史的な風景を捉えています。

004-023

Mino Washi Akari Art Museum

美濃市

【タイトル】 美濃和紙あかりアート館 / 概要
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi Akari Art Museum

Paper lanterns illuminate the streets of the Udatsu Preservation District during the month-long Mino Washi Akari Art Festival. The lanterns are made by artists, lighting designers, and amateurs from around Japan, using Mino washi paper. Many lanterns are displayed year-round at Mino Washi Akari Art Museum.

The second floor of the museum has been designed to resemble the streets of the historical district at night, with a large photographic backdrop of traditional merchant houses. The room is lit by the soft glow of dozens of lanterns, each using translucent Mino washi paper as a sculptural medium. On the first floor is a display of lanterns made by local schoolchildren. Visitors can also purchase fans, cards, lanterns, and many other washi products, including kits to make lanterns at home.

The museum is in the former Minomachi Industrial Hall. The two-story wooden structure was built in 1941 and is the largest surviving wooden building from the Showa era (1926–1989) in Mino. The building is a Registered Tangible Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙あかりアート館

美濃和紙明かりアートフェスティバルの際には、うだつ保全地区の通りは和紙提灯でイルミネートされます。提灯は、職人、照明デザイナー、日本各地のアマチュアが美濃和紙を使ってつくったものです。多くの提灯は、美濃和紙あかりアート館で一年を通して展示されています。

アート館の2階は、伝統的な商家を背景にした大きな写真が展示されるなど、歴史地区の夜の街並みが再現されています。半透明の美濃和紙で作られた数十個の提灯が、柔らかな光を放ちながら部屋を照らしています。1階には、現地の小学生がつくった提灯が展示されています。ここでは、扇子やカード、提灯などの和紙製品、あるいは自宅で提灯が作れるキットを購入することができます。

美濃和紙あかりアート館は、旧美濃町産業会館の中にあります。1941年に建てられた木造2階建てのこの建物は、美濃に現存する昭和時代（1926～1989年）の木造建築物としては最大のもので、有形文化財に指定されています。

004-024

Mino Washi Akari Art Museum

美濃市

【タイトル】 美濃和紙あかりアート館 /
美濃和紙あかりアート展について
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi Akari Art Museum

The Mino Washi Akari Art Festival is held over one month each year. The warm glow of hundreds of lanterns illuminates the streets of Mino's Udatsu Preservation District.

During the festival, the traditional Edo-period (1603–1867) merchant houses are illuminated by the soft light of paper lanterns, enhancing the period atmosphere of the historic district, which is free of powerlines and modern streetlights. Many of the shops in the area stay open late during the festival.

The festival began in 1994 as a way to promote the creative potential of Mino washi paper and to attract more visitors to the area. Mino washi was a key material in making lanterns, and Gifu Prefecture has been a center of lantern production (Gifu *chochin*). In more recent years, Gifu lanterns have become popular as a sculptural medium as much as a source of light.

The festival lanterns are displayed for only a short time, but selected lanterns from each year are on display at Mino Washi Akari Art Museum, year-round.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃和紙あかりアート展

美濃和紙あかりアート展は、毎年1か月間開催されます。何百もの提灯の明かりが、美濃のうだつ保全地区の街並みを優しく包み込みます。

フェスティバルの期間中、伝統的な江戸時代（1603～1867年）の商家が和紙提灯の優しい明かりでイルミネートされ、電線や近代的な街灯のない歴史地区の雰囲気盛り上げてくれます。フェスティバルの期間中は、周辺の多くの店が遅くまで営業しています。

この祭りは、美濃和紙の創造的な可能性を促進し、より多くの人に訪れてもらうために1994年に始まりました。美濃和紙は、提灯づくりの主材料で、岐阜県は提灯（岐阜提灯）生産の中心地でした。最近では、岐阜提灯が光源としてだけでなく彫刻媒体としても人気を博しています。

フェスティバルの提灯は短期間のみの展示ですが、美濃和紙あかりアート館では毎年厳選されたものが通年展示されています。

【タイトル】 本美濃紙 /和紙の未来
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Future of Washi in Mino

In 2014, the craft of Hon-minoshi drew international attention when it was registered on the UNESCO list of Intangible Cultural Heritage. The washi industry has seen a decline over the years, as the demand for handmade paper has dropped in favor of cheaper wood-pulp products, and young people opt for less traditional professions. In the 1960s, the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking was established to help preserve the traditional techniques of making washi and to accept trainees and provide technical guidance to papermakers.

It takes at least 10 years of working as an apprentice to a member of the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking to qualify as a Hon-minoshi maker. There are currently six registered Hon-minoshi ateliers, but the local and national governments are making efforts to increase these numbers and to promote Hon-minoshi as a traditional craft and a versatile material. Mino City has established the Nurturing Successors of Hon-Minoshi Initiative, using public donations to help fund the training of new apprentices, and the national government partly supports training for papermakers and toolmakers. The government also funds workshops for the public and exhibitions of washi artworks.

Hon-minoshi is currently used in the conservation of valuable artworks and books owned by international institutions including the Smithsonian Institution in the United States, the British Museum in the U.K., and the Louvre Museum in France. Mino washi makers supplied the paper for the official award certificates for the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games.

Washi paper is both eco-friendly and adaptable and has recently been used with new coatings and treatments to create waterproof paper, insulation materials, and electro-conductive paper. Making paper textiles was common in washi production regions in the Edo period (1603–1867). Gold and silver brocade was often made from strands of washi, gilded with gold or silver. The production of washi textiles declined in the Meiji era (1868–1912) due to the availability of cotton, silk, wool, and synthetic fibers. Recently, textile manufacturers are returning to using washi for its strength, flexibility, breathability, and smooth texture.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

和紙の未来

2014年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された際には、本美濃紙の技法が国際的な注目を集めました。ここ数年、手漉き和紙の需要が減り、安価な木材パルプ製品に押されて、若者は伝統的な職業に就かなくなり、和紙業界は衰退の一途をたどっていました。1960年代には、伝統的な和紙作りの技術を守り、紙漉き職人の見習いを受け入れて技術指導を行う「美濃和紙保全会」が設立されました。

美濃和紙保全協会の見習い会員が本美濃紙職人として認定されるには、少なくとも10年かかります。現在、本美濃紙工房として登録されているのはわずか6軒ですが、自治体や国の政府はその数を増やし、伝統工芸品や汎用性の高い素材として本美濃紙を普及させていくことに取り組んでいます。美濃市では、義援金により、本美濃紙継承者育成イニシアチブを発足し、新たな見習いの研修費用に充てたり、政府としては、和紙職人や用具職人の研修費を一部負担しています。また、政府は、一般向けのワークショップや和紙工芸の展示会にも資金を提供しています。

本美濃紙は、現在、スミソニアン博物館（米国）や英国博物館（英国）、ルーブル美術館（フランス）など、世界的な機関が所有する貴重な美術品や書籍の保全に用いられています。また、美濃紙職人は、2020年オリンピック・パラリンピック競技会の公式表彰状用に美濃和紙を提供しています。

和紙は環境に優しく適用性もあり、最近では新しいコーティングや加工を施して、防水紙や断熱材、導電紙などとしても用いられるようになりました。紙布の生産は、江戸時代（1603～1867年）、和紙生産地域で一般的でした。金や銀の錦は、しばしば金や銀を施した和紙糸から作られていました。明治時代（1868～1912年）に入ると、綿や絹、ウール、化学繊維が普及し、和紙織物の生産は衰退していきました。最近では、その強度や柔軟性、通気性、滑らかな肌触りなどから、繊維メーカーが和紙に回帰しつつあります。

004-026

Former Furuta Kozo Residence

美濃市

【タイトル】旧古田行三邸 / 概要

【想定媒体】看板 WEB

できあがった英語解説文

Former Furuta Kozo Residence

The paper workshops of Mino are private residences, and an introduction is required to visit them. However, the former home of Hon-minoshi maker Furuta Kozo (1923–1994) is open to the public. Like most paper workshops in Mino, it faces south for maximum sunlight and has a large yard in front of the house for drying paper on wooden boards.

The two-story residence was built in 1872 and retains some of its original furnishings. The main entrance hall has a tamped earth floor and leads directly into the workshop on the right. Visitors can see original tools and equipment for making washi. The workshop faces south to the Itadori River, and large windows let in sunlight, which was important for judging the thickness of the paper during the making process.

To the left of the entrance hall, visitors can remove their shoes and step up into two tatami rooms used for receiving guests. Large photographs show the Furuta family at work, from soaking *kozo* (paper mulberry) bark in the nearby river to screening the pulp slurry of *kozo* fibers. The family's living room and sleeping quarters are at the back of the house.

Upstairs is a storeroom for sericulture equipment. Many Mino papermakers engaged in other industries such as sericulture between April and September when they were not making paper. The *kozo* branches are harvested in winter and the mucilage for dispersing the bast fibers through water is most stable in cold weather, so winter is considered the best time for making washi. Mino washi is generally made from

October through March, leaving the rest of the year for other pursuits.

Furuta Kozo entered the family washi business after graduating from high school in 1936 and became the first chairman of the Association for the Preservation of Hon-minoshi Papermaking in 1968.

Most of the volunteer staff at the house are former washi makers. The Former Furuta Kozo Residence is around 8 minutes by foot from Mino Washi Paper Museum.

The residence is open on Saturdays, Sundays, and holidays, from March to November, from 10:00 a.m. to 4:00 p.m. Admission is free.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃手すき和紙の家旧古田行三邸

美濃の和紙工房は個人の邸宅であり、見学には紹介が必要です。しかし、本美濃紙職人の旧古田行三（1923-1994）邸は、一般公開されています。美濃の多くの和紙工房と同様に、日当たりのよい南向きで、家の前には木板の上で紙を干すことのできる広い庭があります。

2階建てのこの建物は1872年に建造され、当時の調度品の一部も残されています。玄関は土間づくりで、右側の作業場へと直接つながっています。和紙作り用の本来の道具や機械を、ここで見ることができます。作業場は板取川の南側に面しており、大きな窓から陽射しが差し込み、紙漉きの工程で紙の厚みを判断する際に重要な日光が十分に確保できます。

玄関の左側には畳の部屋があり、靴を脱ぐと客間に上がることができます。大きな写真には、近くの川で楮（こうぞ）の皮を浸したり、楮繊維のパルプを含むとろりとした液体を漉いたりする古田家の仕事ぶりが紹介されています。古田家の居間と寝室は、家の奥に位置しています。

上の階へ上がると、養蚕用具を保管する部屋があります。多くの美濃紙職人は、和紙作りが行えない4月から9月にかけて、養蚕など別の産業に従事していました。楮の枝は冬に収穫され、靱皮繊維を水に分散させる粘性物質は寒い季節に最も安定することから、和紙作りには冬が最も適していると考えられています。美濃和紙は10月から3月にかけて作られるのが一般的で、それ以外の期間は他の活動をすることができます。

古田行三は、1936年に高校を卒業してから家業である和紙作りを始め、1968年に本美濃紙保全会の初代会長に就任しました。

古田行三邸のボランティア職員のほとんどは、元和紙職人です。旧古田行三邸は、美濃和紙の里会館から徒歩で約8分です。

3月から11月にかけて、土・日・祝日の午前10時から午後4時まで開放されています。入場は無料です。

【タイトル】 サステナブルな美濃和紙

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Mino Washi: Sustaining an Ancient Art

One of the challenges for the paper industry worldwide is its environmental impact, from deforestation to chemical pollution. Washi paper uses fast-growing natural materials and has a relatively low impact. Hon-minoshi is made using traditional, chemical-free methods, using tools and processes that have changed little in over a millennium.

Low-impact processes and natural materials

The main shrubs for making the paper pulp are *kozo* (paper mulberry), *mitsumata* (*Edgeworthia chrysantha*), and *gampi* (several shrubs of the genus *Wikstroemia*), which all have a short growing cycle. *Kozo* yields an annual crop, while *mitsumata* and *gampi* reach maturity in three years. The papermaking process begins with softening the bark by boiling it with plant ash and soda ash (sodium carbonate). Neither of these substances have adverse effects on aquatic ecosystems.

The other key material for making washi is *nebeshi*, a viscous substance that is extracted from the roots of the *tororoaoi* (sunset hibiscus). *Nebeshi* is mixed with water and pulped bark fibers to help the fibers disperse evenly through the water and prevent clumping. Specialized growers prune the *tororoaoi* plants to encourage root growth. As the number of papermakers has decreased over the years, so has the number of suppliers of these raw materials.

Sustaining the papermakers

Just 6 papermakers are engaged in making Hon-minoshi. Making paper is repetitious and physically demanding and finding young people willing to carry on the craft is a major concern. Fewer washi makers also mean less demand for the specialized tools and equipment used in the process. Month-long courses for aspiring washi makers are offered at the Mino Washi Paper Museum, and the Hon-minoshi makers are open to taking on apprentices.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

サステナブルな美濃和紙

世界の製紙業界では、森林伐採や化学物質汚染など、環境に与える影響が課題の一つとなっています。和紙には急成長中の天然素材が使われていて、環境への負荷が比較的少なくなっています。本美濃紙は伝統的な化学薬品不使用の方法を使って、1,000年以上もの間ほとんど変わらない道具と工程で作られています。

低負荷の工程と天然素材

製紙用パルプの制作に用いられる主な低木は須楮（こうぞ（カジノキ）、ミツマタ、そして雁皮（アオガンピ属の低木）で、いずれも成長周期が短いものです。須楮（こうぞ）は一年生作物で、ミツマタと雁皮は3年で成木になります。製紙工程はまず、植物灰とソーダ灰（炭酸ナトリウム）を入れた湯で白皮を煮て柔らかくすることから始まります。これらの物質のいずれも水域の生態系に悪影響を及ぼすことはありません。

和紙制作におけるもう一つの主要素材は、とろろあおい（黄蜀葵）の根から抽出される粘着物質、ねべしです。ねべしは、水とパルプ状になった白皮繊維に混ぜて、繊維が水中で均一に広がり、塊にならないようにするためのものです。専門の栽培者がとろろあおいをふやけさせて、根の成長を促します。和紙職人の数が年々減少する中、このような原料のサプライヤーの数も減少しています。

和紙職人の維持

本美濃紙を作っている和紙職人はわずか6人です。紙漉きは繰り返し行う作業で、身体的にも負担が大きいので、若い後継者の確保が大きな課題となっています。和紙職人が減るということは、制作工程で用いられる専用の道具や設備の需要も減ることを意味しています。美濃和紙の里会館では、和紙職人を志す方々のための1か月コースを用意しており、本美濃紙職人による見習いの受け入れも行われています。

【タイトル】勘兵衛さんの川屋 / 概要
【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kanbei's Kaway

Removing impurities from the *kozo* (paper mulberry) bast fibers is one of the most important steps in making Hon-minoshi. The paper is renowned for its smooth, unblemished surface, so the work of *chiritori*, removing specks of dirt and damaged fibers, is exacting. The paper fibers are placed in a basket or sieve under running water and picked over by hand, with plenty of natural light to facilitate the task.

Most washi workshops in Mino have a sink with clean running water for this process. Until the Meiji era (1868–1912), however, there were over a thousand washi workshops in the Mino area, and large facilities were needed for *chiritori*. At the time, simple shelters over sources of spring water (*kaway*) were shared by the community of papermakers. Kanbei's Kaway is named after the family who used to maintain it. It is the largest of the remaining *kaway* in Mino.

The simple structure is open at both ends, with a corrugated metal roof supported by timber trusses, and windows along one side to provide ample natural light. Spring water flows constantly along a stone channel, around 13 meters long and 50 centimeters wide. At its peak, up to 30 people would have worked here, kneeling side by side on cushions on the ground, crouched over the water for hours. The shelter protected them from the elements, but not from the heat or cold. Although it is no longer used for *chiritori*, Kanbei's Kaway has been preserved to highlight the importance of clean water for making washi and the communal aspect of the craft. Local people now use the *kaway* to wash vegetables.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

勘兵衛さんの川屋

楮繊維から不純物を取り除く作業は、本美濃紙作りではもっとも重要な工程の一つです。本美濃紙は、その滑らかで染みのない表面で有名なため、汚れや傷んだ繊維を取り除く「塵取り」は非常に綿密な作業となります。和紙の繊維を籠やふるいに入れて流水で洗い、自然光を十分に当てながら手作業で選別していきます。

美濃の和紙工場の多くは、この工程のためにきれいな水が流れる流し台を備えています。しかし、明治時代（1868～1912年）までは、美濃地方には千軒以上の和紙工場が存在し、塵取りのための大きな設備が必要でした。当時、紙漉き職人たちは、湧き水のある水源（川屋）に簡易屋根を設けて、これを共有していました。勘兵衛さんの川屋は、その管理を行っていた一家の名前が残ったものです。美濃に残っている川屋の中でも最大のもので、

両端が開放されたシンプルな構造で、木材で支えられた屋根にはトタン板が用いられ、片側には窓を設けて十分な自然光が取り込めるようになっています。そして、長さ13メートル、幅50センチほどの石造りの水路に湧き水が絶え間なく流れています。最盛期には最大30人もの職人たちが地面に置いたクッションの上に並んで膝をつき、何時間も水の上にかがんで作業をしていたということです。川屋は風雨を防ぐことはできても、暑さや寒さを防ぐことはできませんでした。現在では、塵取りには用いられなくなったものの、勘兵衛さんの川屋は、和紙作りにおけるきれいな水の大切さや、共同作業という側面を伝えるために保存されています。現地の人々は、今では、野菜を洗う際にこの川屋を利用しています。

004-029

Yamaguchi Seishi Haiku Monument

美濃市

【タイトル】 山口誓子の句碑 / 概要

【想定媒体】 看板 WEB

できあがった英語解説文

Yamaguchi Seishi Haiku Monument

Two stone monuments next to the Itadori River commemorate a visit to Mino in 1956 by haiku poet Yamaguchi Seishi (1901–1994). Yamaguchi is considered one of the leading lights of twentieth-century haiku. His work is characterized by modern imagery drawn from daily life. His haiku poems often use colloquial language to create slices of life, like scenes from a movie.

While in Mino, Yamaguchi wrote a haiku about making washi. His words capture the dedication of the papermaker, who puts heart and soul into each sheet. This haiku is inscribed on one of the monuments:

*ichi-mai o
nenzuru gotoku
kami sukikeri*

*Sheet by sheet
Screened with
Heart and soul*

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山口 誓子碑石

板取川のほとりにある2つの石碑は、俳人・山口誓子（1901～1994年）が、1956年に美濃を訪れたことを記念して建てられたものです。山口誓子は、20世紀の俳句の第一人者として知られています。彼の作品は、日常生活から引き出されたモダンなイメージが特徴的でした。山口の俳句

には、映画のワンシーンのような、生活の様子を伝える話し言葉が頻繁に用いられていました。

美濃での滞在中、山口は和紙作りに関する俳句を書いています。山口の言葉は、和紙の一枚一枚を丹精込めて作る和紙職人の献身を捉えています。その俳句が、石碑の一つに彫られています。

一枚を

念ずるごとく

紙漉けり

Sheet by sheet

Screened with

Heart and soul

【タイトル】川湊灯台 / 概要

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kawaminato Lighthouse and the Former Kozuchi River Port

A timber lighthouse from the late Edo period (1603–1867) marks the site of Kozuchi Minato, a former port on the Nagara River that served Mino's merchant district. Kozuchi Minato was established by the samurai Kanamori Nagachika (1524–1608) at the beginning of the seventeenth century. Kanamori governed the Hida region in the mountains to the north of Mino and was given the lands around the city of Mino (then known as Kozuchi) as a reward for supporting warlord Tokugawa Ieyasu in the Battle of Sekigahara in 1600. Their decisive victory signaled an end to more than a century of civil war and social upheaval and ushered in the union of the country under the Tokugawa shogunate.

An invaluable transportation hub

Materials and products such as timber from the Hida region, knife and sword blades from Seki, and paper from Mino were loaded at Kozuchi Minato and shipped to wholesalers downstream, then on to markets in larger cities such as Osaka and Kyoto. The port had berths for 40 riverboats and was a major transportation hub until a rail line between Mino and the city of Gifu opened in 1911. Compared with road transportation through the mountainous inland region, the rivers offered a faster way to transport large quantities of goods to seaside ports on Ise Bay in Mie Prefecture.

Kawaminato Lighthouse

Rapids at various sections of the Nagara River could be deadly, particularly after heavy rains. Sumiyoshi Shrine was established at the port during the Edo period (1603–1867) and was used by river traders to pray for safe journeys. Kawaminato Lighthouse stands on the riverbank in front of Sumiyoshi Shrine as a beacon for boats

and to indicate the location of the shrine. The wooden lighthouse dates from the late Edo period and is still operational. It stands 9 meters high on a stone foundation. Cobblestone steps lead down from the lighthouse to the former boat moorings. The two large stone *toro* lanterns at the top of the steps date from the early nineteenth century.

Mino Bridge and Ogurayama Castle

A few minutes by foot from the lighthouse, a red suspension bridge crosses the river. Mino Bridge is the oldest extant modern suspension bridge in Japan, completed in 1916. When it was built, it was one of the longest suspension bridges in the country, with a span of 116 meters. Since the 1960s it has been closed to traffic and is restricted to pedestrians and cyclists.

Mino Bridge is located at the base of the former Ogurayama Castle, built in 1601 on Mt. Ogura as the retirement residence of Kanamori Nagachika (1524–1608). Kanamori died just seven years later, and when his only living heir, Nagamitsu, died in 1611 at the age of seven, the Kanamori line ended. Without an heir, the surviving family members lost their social standing as samurai and had to forfeit their property. An observatory on the top of Mt. Ogura affords views of the river on one side and the city of Mino on the other.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

川湊灯台

江戸時代（1603～1867年）後期、美濃の商人町として栄えた長良川の港、上有知湊（こうずちみなと）の跡地に建つ木造灯台。上有知湊は、17世紀初頭に、武士の金森長近（1524～1608年）が建造しました。金森は美濃の北の山間部、飛騨地方を治め、1600年の関ヶ原の戦いで徳川家康に協力した褒美に美濃市（当時は上有知）周辺の土地を与えられました。徳川軍の決定的な勝利は100年も続いた日本の内戦と社会的混乱に終止符を打ち、徳川幕府のもと日本は統一されることとなりました。

貴重な輸送の要衝

飛騨の木材、関の刃物、美濃の和紙などさまざまな材料や製品が上有知湊で積み込まれ、下流の卸問屋のもとへ輸送され、そこから大阪や京都などの大都市の市場へと運ばれました。1911年に美濃と岐阜を結ぶ鉄道が開通するまで、この港には40隻の川船が停泊し、交通の要衝として栄

えました。内陸の山間部を走る輸送路と比べ、河川は三重県の伊勢湾に面した海港へ多くの物資をより速やかに輸送することができました。

川湊灯台

特に大雨の後は、長良川のあちこちで急流が発生し、命にかかわるほど危険な状態でした。住吉神社は、江戸時代（1603～1867年）に、川商人たちの航海の安全を祈願して建てられた神社です。住吉神社前の川岸に建つ川湊灯台は、船の道しるべとして、また住吉神社の位置を示すための灯台です。この木造の灯台は江戸時代後期に建てられたもので、今でも稼働しています。石造りの土台の上に立ち、高さは9メートルあります。灯台から玉石の敷かれた階段を下りると、かつての係船場に出ます。階段の上にある2つの大きな石灯籠は、19世紀初めに置かれたものです。

美濃橋と小倉山（おぐらやま）城

灯台から数分歩くと、赤い吊り橋が川に架かっています。美濃橋は、1916年に完成した現存する日本最古の近代的吊り橋です。建設当時、日本では最も長いつり橋の一つで、その長さは116メートルあります。1960年代以降は、車の進入が禁止となり、歩行者・自転車専用となっています。

美濃橋は、金森長近（1524～1608年）の隠居所として1601年に小倉山に築かれた旧小倉山城の麓に位置しています。金森はそのわずか7年後に亡くなり、唯一の嫡男である長光も1611年に7歳で亡くなって、金森家の血筋は途絶えました。跡継ぎがいなければ、残された家族は武家としての社会的地位を失うこととなり、土地を捨てる他ありませんでした。小倉山の山頂にある展望台からは、川と美濃市街を一望することができます。

004-031

The Udatsu Preservation District

美濃市

【タイトル】 美濃市 / 美濃市うだつの上がる町並み
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

The Udatsu Preservation District

The Udatsu Preservation District covers two main streets running east-west and four side streets running north-south. The streets have a traditional appearance, with no visible powerlines or modern signage.

Protection against fire and symbols of wealth

The merchant houses in the area were built in the late Edo period (1603–1867) and early Meiji era (1868–1912), and many have fireproof walls on each side of the house that extend above the roofline. These *udatsu* walls are coated with fireproof plaster and capped with decorative tiles, and are designed to prevent the spread of fire. During the Edo period, most houses were built of wood, and if fire broke out, it could quickly spread from house to house along an entire street. Building a house with *udatsu* was expensive, and over time these raised walls became symbols of wealth.

The prosperous paper merchants of Mino competed with each other to install higher and more decorative *udatsu*. Each *udatsu* is topped with roof tiles, including those with the family crest or a demon-like talisman called *oni-gawara*. These fearsome demons are said to protect the home from fire, lightning, and evil spirits. Each *oni-gawara* in the Udatsu Preservation District has a distinct appearance. Not all merchant houses had these protective walls, but those that did typically shared them, so a single *udatsu* would serve two properties. The *udatsu* of the Hirata and Furukawa family houses are rare examples of separate but adjacent *udatsu*, each with different decorative motifs. The *udatsu* buildings in Mino were selected as National Important Cultural Properties.

Houses for business

The two-story merchant houses in the preservation district had shops at the front on the ground floor, with living spaces for family and staff at the back of the house and upstairs. Land tax was based on the width of the street frontage, so most merchant houses were long and narrow. Internal courtyards, latticed windows, and skylights encouraged air circulation and brought light to the interior, without compromising privacy.

The front rooms of many of the merchant houses in the area now function as shops, and the Former Imai Family Residence is completely open to the public. It is the widest of Mino's merchant houses, indicating the wealth and influence of the Imai family, who served as administrative heads of the town for generations. The Kosaka sake brewery was built around 1772 and is still in operation. It retains many original features, including a brick-paved floor that runs the length of the building to facilitate deliveries by horse-drawn cart, a courtyard garden, and a storehouse that is now used as an art gallery. Visitors can see historical photographs and artifacts, and purchase sake at the store at the front of the building.

記解説文の仮訳（日本語訳）

美濃市うだつの上がる町並み

うだつ保全地区は、東西に走る2本の大通りと、南北に走る4本の脇道で構成されています。これらの通りは電線や近代的な看板が目に入らない、昔ながらの街並みになっています。

防火と富の象徴

この辺りの商家は、江戸時代（1603～1867年）後期から明治時代（1868～1912年）初期にかけて建てられており、その多くの家の両側には、屋根よりも高く伸びる防火壁が設置されています。このうだつには耐火性の漆喰が塗られており、その上に装飾瓦が載せられて、延焼を防ぐための工夫が施されています。江戸時代の家屋は木造が多く、ひとたび火災が発生すると、通り一帯の家屋に瞬く間に燃え広がる可能性があります。うだつ付きの家を建てるにはお金がかかり、次第に、うだつは富の象徴となっていました。

美濃で繁盛している紙商人たちは、より高く、より豪華な装飾が施されたうだつを設置しようと、競い合っていました。うだつには瓦が載せられ、家紋や鬼瓦が付されることもありました。この恐ろしい見た目の鬼瓦は、火災、雷、悪霊などから家を守ると言われています。うだつ保存地区では、それぞれの鬼瓦が特徴的な形をしています。この防火壁はすべての商家にあったわけではなく、共有していた

家々は、1つのうだつで2つの家屋を守るのが一般的でした。平田家と古田家のうだつは、隣接する別々のうだつでありながら、それぞれ異なる装飾モチーフが施された珍しいものです。美濃のうだつ建造物は、国の重要文化財に指定されています。

商家

保存地区の2階建ての商家は、1階の手前に店舗があり、奥と2階に家族や従業員の居住スペースがありました。地租は道路の間口の広さを基準にしていたので、商家の多くは細長い形をしていました。中庭、格子窓、天窓は、プライバシーを損なうことなく、空気の循環を促し、室内に明るさをもたらしています。

現在、この地域の多くの商家の表側は店舗として機能しており、「旧今井家住宅」は全て一般公開されています。旧今井家邸は、美濃の商家の中では最も規模が大きく、代々町の行政のトップを務めた今井家の財力と影響力の大きさを示しています。小坂酒造場は1772年に建てられ、今でも営業しています。馬車で荷物を運べるよう建物の奥の方まで続くレンガ敷きの床や、中庭、現在ではアートギャラリーとして使用されている蔵など、当時の面影を多く残しています。建物正面の売店では、歴史的な写真や資料の閲覧、日本酒の購入が可能です。

地域番号	005	協議会名	名古屋鉄道株式会社	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
005-001	日本庭園 有楽苑 / 「日本庭園 有楽苑」について		501～750	アプリQRコード WEB パンフレット
005-002	日本庭園 有楽苑 / 有楽斎の生涯		251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-003	日本庭園 有楽苑 / 国宝茶室 如庵		751以上	アプリQRコード WEB パンフレット
005-004	日本庭園 有楽苑 / 重要文化財 旧正伝院書院（きゅうしょうでんいん・しよいん）		251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-005	日本庭園 有楽苑 / 有楽苑の茶道で使われる茶道具		251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-006	日本庭園 有楽苑 / お茶作法について		501～750	アプリQRコード WEB パンフレット
005-007	日本庭園 有楽苑 / 元庵		251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-008	日本庭園 有楽苑 / 弘庵（こうあん）		251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-009	日本庭園 有楽苑 / 岩栖門 含翠門		～250	アプリQRコード WEB パンフレット
005-010	日本庭園 有楽苑 / 唐門 萱門		～250	アプリQRコード WEB パンフレット
005-011	日本庭園 有楽苑 / 日本庭園 有楽苑の四季について		～250	アプリQRコード WEB パンフレット

005-012	日本庭園 有楽苑 / 有楽苑の花	251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-013	日本庭園 有楽苑 / 犬山焼きの歴史と特徴	251～500	アプリQRコード WEB パンフレット
005-014	日本庭園 有楽苑 / 茶室の美学・茶室周辺の 庭のデザイン	501～750	アプリQRコード WEB パンフレット

005-001

Welcome to Urakuen

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 「日本庭園 有楽苑」について

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Welcome to Urakuen

This garden was created for a single purpose: to serve as the setting for Jo-an, a priceless seventeenth-century tea house. Jo-an is a masterwork of tea house architecture and one of only three tea houses recognized as National Treasures. In 1971, Jo-an was acquired by the Nagoya Railroad Company, Ltd. (also called “Meitetsu”), which moved the tea house from Ōiso, Kanagawa Prefecture, to the city of Inuyama, Aichi Prefecture, where the garden was built. In building Urakuen, Meitetsu planners sought to create a garden that would embody the tastes of Jo-an’s architect, the tea master Oda Uraku (1547–1621). Even the name “Urakuen” literally means “Uraku’s garden.”

Jo-an, the Historic National Treasure at the Core of Urakuen

Oda Uraku was born in Owari Province (now western Aichi Prefecture) to the powerful Oda family, the samurai who built nearby Inuyama Castle. In 1618, Uraku withdrew from public life and constructed a residence, called the Shōdenin, on the grounds of Kenninji Temple in Kyoto. Uraku enjoyed holding tea gatherings, and he designed and built a tea house that adjoined his residence. The name he chose for this tea house was “Jo-an.”

Jo-an and its surrounding structures remained in Kyoto until the Meiji era (1868–1912). Thereafter, the buildings changed ownership and were relocated several times. Jo-an and part of the Shōdenin were eventually acquired by the Mitsui family, who had the structures moved to their private residence in Ōiso, Kanagawa.

In 1969, the Mitsui family sold these buildings to Meitetsu, along with objects from Jo-an’s tea garden (*roji*) and many other historical artifacts. Purchasing the buildings was the first step of Meitetsu’s plan to create a garden where the historic structures

could be preserved and their cultural legacy could be made available to the public.

Renowned architect and architectural historian Horiguchi Sutemi (1895–1984) was chosen to spearhead the garden project. Horiguchi had painstakingly collected old sketches, diagrams, and historical accounts related to Jo-an and other tea houses for decades prior to his appointment, and he had also authored several books on the topic. The chance to oversee the restoration of Jo-an and create a visionary garden to showcase it was the culmination of Horiguchi's life's work.

Construction of the Garden

Meitetsu chose to build Urakuen on the grounds of a former amusement park close to Inuyama Castle. Construction got off to a rocky start: on May 18, 1971, the day Horiguchi arrived in Nagoya, Meitetsu workers were on strike, and buses and trains had all stopped running. The trouble continued after Horiguchi arrived in Inuyama. On the morning of May 19, Horiguchi arrived to assess the site in the midst of a downpour. Workers had spent the past week laying string lines to mark the building locations based on plans Horiguchi had sent from Tokyo. After one look at the results, he flew into a rage, shouting that the lines were completely different from his design, and that the location for Jo-an was wrong. The next day, after some revisions, construction work began. Over the next year, a legion of restorers, masons, and carpenters under Horiguchi's direction reassembled and repaired the historic structures of Uraku, while gardeners crafted an intricate living landscape.

Despite being in his 70s, Horiguchi was a dedicated and tireless participant, often standing in the rain in a borrowed Meitetsu raincoat to oversee construction. He made a total of 21 trips to Inuyama, each time leaving a set of detailed instructions.

Achieving a Vision

Horiguchi Sutemi has been praised for his ability to incorporate the characteristics of natural materials into his designs. Rather than being bound by his initial vision of a garden, Horiguchi adapted his design to incorporate the individual qualities of each rock and tree.

In developing his plan for the restoration of Jo-an and the creation of the garden, Horiguchi used historical descriptions and a drawing of Uraku's residence from 1799. Everything was determined through careful scrutiny of these sources—not just the building positions, but the styles of the fences, the arrangements of the stepping stones, the locations of the pine trees, and the types of bamboo were all selected to evoke Jo-

an's original setting.

The 1799 drawing shows a low hill with a stone pagoda, and beside it, a pond spanned by a simple stone bridge. Instead of digging a pond, Horiguchi replicated the scene using a dry landscape garden (*karesansui*), in which water is represented by fine white gravel. He also recreated Uraku's square moon-viewing platform, called the Shōgetsudai. Throughout the garden, Horiguchi incorporated centuries-old gates, stone lanterns, and washbasins (*tsukubai*) and transplanted dozens of large trees and stones to imbue the garden with a sense of history.

Although Urakuen began as a simple relocation and restoration project, the garden as a whole grew into something much greater. Its design embodies the aesthetic sensibilities of a seventeenth-century tea master, the dedication and vision of a master architect, and the unflagging efforts of caretakers who preserve the garden's cultural heritage for generations to come.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「日本庭園 有楽苑について」

有楽苑へようこそ

この庭園は、17世紀の貴重な茶室「如庵」にふさわしい場所として、名古屋鉄道によって作られた。如庵は国宝に指定されている3つの茶室のうちの1つであり、茶道建築の最高傑作とされる。1971年、名古屋鉄道株式会社（以下、名鉄）が如庵を譲り受け、神奈川県から愛知県犬山市に如庵を移築し、この庭園が建設された。有楽苑の創設にあたっては、如庵の生みの親である茶人・織田有楽（1547-1621）の好みを取り入れた庭園を造ることを目指したのである。有楽苑という名前も、「有楽の庭」という意味である。

有楽苑の中核をなす歴史的国宝「如庵」

織田有楽は尾張国（現在の愛知県西部）で、犬山城を築いた有力武士である織田家に生まれた。1618年に隠居した有楽は、京都の建仁寺の境内に正伝院書院と呼ばれる屋敷を構えた。茶の湯を好んだ有楽は、邸宅に隣接して茶室を設計・建築した。この茶室を「如庵」と名付けた。この茶室とその周辺の建物は、明治時代（1868-1912）まで京都に残されていた。その後、建物は所有者が変わり、何度か移転した。最終的に、如庵と正伝院書院の一部は三井家が取得し、神奈川県大磯の私邸に移築された。

1969年、三井家はこれらの建物を、如庵の茶庭（露地）の品々やその他多くの歴史的遺物とともに名鉄に売却した。この購入は、歴史的建造物を保存し、文化遺産を公開する庭園を建設しようという名鉄の計画の第一歩でした。

その陣頭指揮を執ったのが、名高い建築史家でもある堀口捨己（1895～1984）であった。堀

口捨己は、赴任前の数十年間、如庵をはじめとする茶室に関する古いスケッチや図面、史料を丹念に収集し、如庵や他の茶室に関する著書も執筆していた。堀口はこの如庵の修復とそれを展示するための庭園づくりに携わり、ライフワークの集大成としたのである。

庭園の建設

名鉄が有楽苑を建設するのに選んだのは、犬山城にほど近い遊園地跡地であった。建設は前途多難な滑り出しであった：1971年5月18日、堀口が名古屋に着いた時、名鉄の従業員はストライキに突入しており、バスも電車もすべてストップしていた。堀口が犬山に到着した後も、トラブルは続いた。5月19日の朝、土砂降りの中、堀口は現地の様子を見に行った。堀口が東京から送った図面をもとに、この1週間、作業員たちは建物の位置を示すためのひもを張っていた。それを見た堀口は、「自分の設計した線と全然違う」「如庵の位置が違う」と激怒した。

翌日、急遽、修正を行い、工事を開始した。その後、堀口の指揮のもと、約一年間にわたって修復師、石工、大工が有楽の歴史的建造物を再建・修復し、庭師が生きた風景を作り上げた。堀口は70歳を過ぎても、雨の中、借りた名鉄のレインコートを着て工事に立ち会うなど、精力的に活動した。堀口は、犬山まで21回も通い、その都度、注意事項を書き残した。

ビジョンの実現

堀口捨己は、自然素材の特性をデザインに取り入れたことが評価されている。堀口は、最初に描いた庭のイメージに縛られることなく、岩や木の個性を生かしながら設計を進めた。

堀口は如庵の復元と庭園造成の計画を立てるにあたり、史料と1799年の有楽邸の絵図を参考にした。建物の位置はもちろん、垣根の形、飛び石の配置、松の木の位置、竹の種類など、すべてこの資料に基づいて決定され、当時の如庵の姿を想起させるものである。

1799年の絵図には、石塔のある低い丘、そしてそれらを結ぶ簡単な石橋が描かれている。堀口は池を掘る代わりに、水を細かい白砂で表現した枯山水でこの風景を再現した。また、有楽の四角い月見台「嘯月台」も再現した。庭の随所に数百年前の門や石灯籠、手水鉢を配し、数十本の木や石を移植して、歴史を感じさせる庭園に仕上げた。

有楽苑は、当初は簡単な移転・修復工事から始まりましたが、その後、庭園全体がより大きなものに成長しました。17世紀の茶人の美的感覚、巨匠建築家の献身とビジョン、そしてこの文化遺産を次の世代のために維持する管理人のたゆまぬ努力が結集されている。

005-002

The Life of Oda Uraku

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 有楽斎の生涯

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

The Life of Oda Uraku

Oda Nagamasu—more commonly known by his tea name, “Uraku”—was born in 1547 in Owari Province (now western Aichi Prefecture). He was the eleventh son of Oda Nobuhide (1511–1549), head of the powerful Oda samurai family that controlled the region. Uraku’s older brother, Oda Nobunaga (1534–1582), later became the first of three great warlords whose campaigns to unify the country culminated in centralized rule under the Tokugawa government. Uraku also associated with the second and third of these unifying warlords, Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) and Tokugawa Ieyasu (1543–1616).

Despite his ties to such powerful martial figures, Uraku is best remembered as a man of culture more than combat. He studied tea under the most influential tea master in Japanese history, Sen no Rikyū (1522–1591). During the tumultuous decades of the late sixteenth and early seventeenth centuries, Uraku often used tea gatherings as a setting for brokering peace between warring factions. He eventually retired to the seclusion of a Buddhist temple in Kyoto, where he built his masterpiece, the tea house Jo-an.

Early Years

Relatively little is known about Uraku’s youth. In 1567, at age 20, he joined his brother Nobunaga in the city of Gifu, which Nobunaga had just conquered. In 1581, Catholic missionaries came to the area and baptized several hundred people. Although no reliable records remain, anecdotal sources claim Uraku was among those baptized, and that he took the baptismal name “João” (Portuguese for “John”), which in Japanese is pronounced “Jo-an.” He would later bestow this name on his tea house.

In 1582, disaster struck. While Uraku and Nobunaga were visiting Honnōji Temple

in Kyoto, Nobunaga was betrayed by one of his generals, Akechi Mitsuhide (1528–1582), whose forces surrounded the temple. Rather than be captured, Nobunaga committed suicide. Reportedly, Nobunaga’s eldest son, Oda Nobutada (1557–1582), was wavering over whether to join his father in suicide or to flee. At Uraku’s advice, Nobutada remained and committed ritual suicide, but Uraku himself departed.

Mediation through Tea Gatherings

Uraku studied under tea master Sen no Rikyū during Rikyū’s tenure as instructor to the Oda household, which lasted until the death of Oda Nobunaga. Uraku became Rikyū’s student again some years later while the tea master was employed by the Toyotomi family. Some records even list Uraku as one of the “Seven Great Disciples” of Rikyū.

Uraku’s study of tea played an important role in the political affairs of the time. As part of his wider peacemaking efforts, he attended tea gatherings in the role of mediator at several key points in the latter half of the sixteenth century. In 1585, he negotiated an accord between Nobunaga’s former general Toyotomi Hideyoshi and Oda Nobukatsu (1558–1630), Nobunaga’s second son and successor. Shortly thereafter, Uraku attended tea gatherings with Hideyoshi and Tokugawa Ieyasu, Hideyoshi’s former lieutenant and advisor. Uraku achieved a peace agreement between the two rising warlords in 1586.

Conflicting Loyalties

When Hideyoshi died in 1598, Tokugawa Ieyasu moved to fill the power vacuum. A struggle began between Ieyasu and Hideyoshi’s successors and retainers, and Ieyasu’s decisive victory at the Battle of Sekigahara in 1600 secured his position as shogun. Uraku had acted as one of Ieyasu’s generals at Sekigahara, and he was awarded sizeable landholdings for his participation.

By 1614, Ieyasu had subdued Hideyoshi’s remaining allies, with the exceptions of Hideyoshi’s consort, Yodo-dono (1567–1615), and his young heir, Hideyori (1593–1615). The two had encamped at Osaka Castle and had begun recruiting supporters. Uraku, who was Yodo-dono’s uncle, repeatedly urged her to seek peace with Ieyasu. Finally, frustrated by the continuing hostilities, Uraku left Osaka in early 1615. That June, Ieyasu attacked the castle, and Yodo-dono and Hideyori committed suicide.

Retirement

Perhaps discouraged by his experience in Osaka, Uraku retired to Kyoto the same year. In 1617, he negotiated with Kenninji Temple for permission to rebuild one of its dilapidated worship halls and construct a residence in which to retire. He moved into the newly finished complex, called the Shōdenin, in 1618. Uraku died three years later, at age 75, and was buried on the grounds of his residence.

Uraku's Legacy

The school of tea carried on by Uraku's heirs and followers is known as Uraku-ryū, and it continues to be practiced today. The fifteenth head of the Uraku-ryū school, Oda Nagashige (1918–1992), came to see the construction of Urakuen on March 23, 1972.

For Uraku, the primary concern in tea practice (*chanoyu*) was heartfelt hospitality and the comfort of his guests. Uraku was critical of tea practitioners who copied what great tea masters did without truly understanding it or employing any thought or innovations of their own. Uraku's independence of spirit is evident in the design of Jo-an, which reflects the teachings of his mentor without being bound by them.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「有楽斎の生涯」

織田有楽の生涯

茶名「有楽」で知られる織田長益は、1547年、尾張の国（現在の愛知県西部）に生まれた。この地を支配していた織田家の当主、織田信秀（1511-1549）の11男である。有楽の兄、織田信長（1534-1582）は、後に三大武将の一人目となり、この三大武将は天下統一を成し遂げ、徳川幕府の中央集権化を実現させた。有楽は、2番目、3番目に天下統一した豊臣秀吉（1537-1598）、徳川家康（1543-1616）とも親交があった。

このような強力な武闘派との繋がりにも関わらず、有楽は武道よりも文化人としても知られ、日本史上最も影響力のある茶人である千利休（1522-1591）に茶の湯を学んだ。16世紀末から17世紀初頭の激動の時代、有楽はしばしば茶会を通じて諸派の和議を成立させた。やがて京都の寺に隠棲し、彼の重要な作品である『如庵』を建てた。

初期

有楽の少年時代は、ほとんど知られていない。1567年、20歳のとき、兄の信長と合流し、信長が征服したばかりの岐阜の地に赴いた。1581年、カトリックの宣教師がこの地にやってきて、数百人に洗礼を授けた。確たる記録は残っていないが、その中に有楽も含まれており、日本語では「ジョアン」と発音する、受洗名の「João」（ポルトガル語で「John」）を名乗ったとの説もある。この名前

は、後に茶室にも付けられることになる。

1582年、災難に見舞われた。有楽と信長が京都の本能寺を訪れたとき、信長は武将の一人である明智光秀（1528-1582）に裏切られ、その軍勢に本能寺を包囲されてしまったのだ。信長は捕まることなく、自害した。伝えによると、信長の長男である織田信忠（1557-1582）は、自害するか逃げるか迷っていたという。信忠は有楽の勧めで、そのまま自害したが、有楽は退却した。

茶会を通じての調停

有楽は、織田信長の死によって幕を閉じた織田家の指南役であった茶人・千利休に師事していた。数年後、豊臣家に茶人が雇われていた頃、有楽は再び利休に師事している。また、有楽を利休七哲の一人としてあげている記録もある。

有楽の茶の研究は、当時の政局にも大きな影響を及ぼしている。16世紀後半のいくつかの重要な局面で、和平工作の一環として、有楽は茶会に出席して調停役を務めた。1585年、信長の元将軍・豊臣秀吉と、信長の次男で後継者の織田信勝（1558-1630）との間の和議を取りまとめた。その後まもなく、秀吉や秀吉の側近であった徳川家康との茶会に参加した。1586年、有楽は両者の和議を成立させた。

対立する忠誠心

1598年に秀吉が死去すると、徳川家康は権力の穴を埋めるために動き出した。家康と秀吉の後継者、家臣団との間で争いが始まり、家康は1600年の関ヶ原の戦いで勝利を収め、将軍の座を確保したのである。有楽は関ヶ原で家康の将兵の一人として振る舞い、その功績で大きな領地を与えられた。

1614年までに、家康は秀吉の側室・淀殿（1567-1615）と、その幼い嫡男・秀頼（1593-1615）を除く秀吉の残りの同盟国を制圧した。二人は大坂城に陣を構え、支持者を募り始めた。淀殿の叔父にあたる有楽は、家康との和睦を何度も勧めた。ついに交戦に業を煮やした有楽は、1615年初頭、大坂を去った。その6月、家康によって城は攻撃され、淀殿と秀頼は自害した。

隠居

大坂での経験に失望したのか、同年、有楽は京都に隠棲した。1617年、建仁寺と交渉し、老朽化した塔頭正伝院のひとつを再建し、隠居屋を建てることを許可された。1618年、完成した正伝院に移り住んだ。3年後、有楽は75歳で亡くなり、邸宅の敷地内に埋葬された。

有楽の遺志

有楽の後継者や弟子たちが受け継いだ茶の流派は「有楽流」と呼ばれ、現在でもその流派は受け継がれている。1972年3月23日には、有楽流の第15代宗家である織田長繁（1918-1992）が、有楽苑の建設に立ち会った。

有楽にとって茶の湯は、客をもてなし、快適に過ごしてもらうことが第一であった。また、茶人たちが大家のやり方を真に理解せず、独自の考えや工夫をしないで模倣することに批判的であった。このような有楽の独立心は、師匠の教えにとらわれずに、その教えを反映させた「如庵」のデザインに表

れている。

005-003

Jo-an

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 国宝茶室 如庵

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Jo-an

The creation of Jo-an is considered Oda Uraku's pinnacle achievement, and its design expresses both his personal tea aesthetic and his individuality of spirit. In many ways, Jo-an's design is a departure from the conventions of tea house architecture laid down by tea masters like Sen no Rikyū (1522–1591). But in spite of this (or perhaps because of it), Jo-an was considered a masterwork. The acclaimed artist Ogata Kōrin (1658–1716) so admired the tea house that he commissioned a copy for himself, which is now at Ninnaji Temple in Kyoto. It is said that Jo-an has been replicated more often than any other tea house in the world.

Early History

After Uraku's death in 1621, his estate ultimately passed into the care of Kenninji Temple. The temple maintained the estate through donations until 1872, when the new Meiji government took measures to decrease the power and influence of Buddhist institutions across the country. The temple's land and other holdings were forcibly auctioned off, and ownership of Uraku's residential complex—including the Shōdenin Shoin, Jo-an, and its attached tea garden (*roji*)—was transferred to Kyoto's Gion district. The complex was renamed “Urakukan” (literally, “Uraku Hall”), and its buildings were used for various purposes, such as processing tea leaves. In 1908, the district sold off the buildings to various buyers from different parts of the country. One of those buyers was a man named Mitsui Takamine.

The Mitsui Family

Mitsui Takamine (1857–1948) was the tenth-generation head of the lead branch of the Mitsui family, one of the most prominent and wealthy merchant families of the late

nineteenth century. Mitsui was a lifelong student of tea and a connoisseur of traditional architecture. He purchased the Shōdenin Shoin along with Jo-an and its tea garden, and in 1908 he had them moved to his residence in the Azabu neighborhood of Tokyo. In 1938, Mitsui decided to retire to the family villa at Ōiso, in Kanagawa Prefecture, and he had the structures moved there. Mitsui wished to devote more of his time to the study of tea during retirement, and he was worried about the ever-present danger of fire amid the densely clustered neighborhoods of Tokyo. Thanks to him, the buildings were no longer in Tokyo when the city was leveled by firebombing during World War II.

The Move to Inuyama

In 1951, not long after Mitsui Takamine's death, Jo-an was designated a National Treasure. In 1969, Meitetsu (Nagoya Railroad Company, Ltd.) acquired rights to the Mitsui family's Ōiso estate along with many of the structures and artifacts there. This set the stage for the creation of Urakuen.

The preparations to move Jo-an to Inuyama began in early 1971. First, the building was closely studied. Its walls and supports were X-rayed to determine their condition—an innovative technique at the time. As disassembly began, careful drawings and measurements were taken, and the pieces were numbered. Each piece was wrapped in padding and waterproof coverings, and the entryway section (the earthen vestibule and its surrounding walls) was then set inside a timber framework for further structural support. Workers loaded the sections onto large trucks equipped with vibration-dampening devices. At 1:30 a.m. on March 31, 1971, Jo-an departed Ōiso with NHK reporters in tow.

The journey had one notable incident: at a highway toll gate along the way, one of the trucks was stopped because the top of its cargo had very slightly grazed the clearance barrier. No harm was done to the tea house, but the toll gate employee refused to let the truck through until one frustrated Meitetsu employee finally persuaded him.

Reconstruction and Restoration

Jo-an arrived safely in Inuyama, and restorers began the work of reassembling it. Some repairs to the tea house were necessary, primarily due to water damage from roof leaks, but great effort went into preserving the original building. Damaged structural components, like the partially rotted support posts, were reinforced with

synthetic resin that was textured and painted to look like wood. Anything that had to be replaced, such as the roof's shingles, was remade using the same methods and materials as the original.

Restorers took the opportunity to undo changes that had been made to Jo-an over the years. In contrast to how the buildings had been positioned at Ōiso, Jo-an and the Shōdenin Shoin were rejoined in accordance with historical accounts of how they had been arranged at Uraku's Kyoto residence. At Ōiso, the buildings had been connected by an exterior walkway that extended from the southeast corner of the Shoin. At Urakuen, workers removed this walkway and positioned the buildings close enough that Jo-an could be entered directly from the veranda of the Shoin.

Architectural Features

Guests attending a tea gathering at Jo-an would enter from the covered vestibule on the building's southwest side. Before entering, samurai would remove their long swords and place them on a rack in the alcove behind the papered sliding doors. All guests would remove their footwear and crawl through the small, low entrance (*nijiriguchi*) into a narrow room. Jo-an's main room has only 3.5 tatami mats of floor space (about 6.2 m²). This is larger than the two-mat rooms Sen no Rikyū is said to have favored, but still within the limit of 4.5 mats that defines a "small" tea room (*koma*). Uraku's emphasis on the comfort of the guests can be seen in the more spacious design of his tea houses.

Uraku also preferred tea rooms to be comparatively well lit. To this end, Jo-an has a hinged panel in the roof that can be propped open like a skylight. It also has two windows on the eastern wall called *urakumado*, or "Uraku windows," that are unique to Jo-an. The windows have square, semi-translucent panels made of thin, vertical bamboo branches that are closely spaced together. When the windows are open, light enters through the space between the branches, and sliding the paper shoji closed produces an elegant shadow effect on the paper.

Another type of window can be seen on the front wall and opposite the low *nijiriguchi* entrance. These are *shitajimado*, meaning "understructure windows." These windows are made by leaving a section of the wall unplastered, exposing the bamboo-and-reed lattice underneath.

One highly unusual feature of Jo-an's decoration is not visible from the outside. The bottom third of the tea house's walls are papered in old calendars, some of which date back as far as 1629. This decorative technique, called *koyomibari*, is intended to

evoke the rustic simplicity of a hermitage, where common objects are repurposed and nothing is wasted.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「国宝茶室 如庵」

如庵

織田有楽の最高傑作といわれる「如庵」は、彼の茶の美学と個性の表現である。千利休（1522-1591）のような茶人たちが築いた茶の湯建築の定石から、様々な意味で逸脱したデザインであるが、それにもかかわらず（あるいはそれゆえに）、如庵は名作として名声を保ってきた。名画画家の尾形光琳（1658-1716）は、この茶室を賞賛し、自分用に複製を注文し、（現在は京都の仁和寺に保存されている。如庵は、世界で最も多く複製されている茶室と言われている。

初期の歴史

1621年、有楽の死後、その遺品は建仁寺が管理下に置かれた。1872年、明治新政府が全国の仏教施設の力と影響力を低下させる政策を取るまで、寺は寄付によって維持された。建仁寺の寺領などは強制的に競売にかけられ、有楽邸の正伝院書院、如庵、茶庭（露地）などの所有権が京都・祇園に譲渡された。建物は「有楽館」と改称され、茶葉の加工など様々な用途に使われた。1908年、祇園はこの建物を全国の業者に売却した。その中に三井高棟という人物がいた。

三井家

三井高棟（1857-1948）は、19世紀末の富裕な商家である三井家の10代目当主であった。生涯にわたって茶の湯を学び、伝統的な建築物にも造詣が深かった。正伝院書院と如庵、そしてその茶庭を購入し、1908年に東京・麻布の自邸に移築させた。1938年、三井は神奈川県大磯の別邸に隠居することを決め、建造物を移築させた。三井は、老後は茶の湯に専念したいと考え、密集した東京の街では火災の危険が常につきまことを懸念していた。そのおかげで、第二次世界大戦で東京が焼け野原になった東京には、この建物はもうなかった。

犬山に移転

三井高棟の死後間もない1951年、如庵は国宝に指定された。1969年、名鉄（名古屋鉄道）は三井家の大磯邸の権利と建造物、美術品などを取得した。これが、有楽苑の設立のきっかけとなった。

1971年初め、「如庵」を犬山に移すための準備が始まった。まず、建物を徹底的に調査した。当時としては画期的なレントゲン撮影を行い、壁や支柱の状態を確認した。分解が始まると、丁寧に図面と寸法が取られ、部品に番号が振られた。それぞれを中綿と防水カバーで包み、玄関部分（土製の前庭とその周囲の壁）は、木製の骨組みの中に入れて、さらに構造的に支えた。作業員は振動吸収装置を取り付けた大型トラックに積み込み、1971年3月31日午前1時30分、如

庵はNHKの取材班を乗せて大磯を出発した。

途中の高速道路の料金所で、積荷が、高さ制限をかすかに超えたため、1台のトラックが止められるという大きなハプニングがあった。茶室に被害はなかったが、料金所の職員はトラックを通そうとせず、業を煮やした名鉄の社員がようやく説得した。

復元と修復

如庵は無事犬山に到着し、修復師たちによって再建作業が開始された。屋根の雨漏りなどによる浸水などの影響もあり、茶室には修理が必要な部分もあったが、元の建物を保存することに力を注いだ。部分的に腐った支柱など、傷んだ構造部分は合成樹脂で補強し、木のような質感を出すために塗装を施した。また、屋根の板材など、交換が必要なものは、当時の工法と材料で製作した。この機会に、修復師たちは長年にわたって行われてきた如庵の改造を元に戻した。大磯では建物の配置が変わっていたのに対し、如庵と正伝院書院は、有楽の京都邸の配置の史料に基づき、再び接合された。大磯では、書院の南東角から外廊下で結ばれていた。有楽苑では、この通路を撤去し、書院の縁側から直接如庵に入れるような配置にした。

建築の特徴

茶会の客は、建物の南西側にある屋根付きの玄関空間から入室する。侍は、刀を抜き襖の奥の小室にある刀掛けに刀を納める。客は全員履物を脱いで、低い位置にある小さな入口（にじり口）から這うようにして狭い部屋に入っていく。如庵の茶室はわずか3.5畳半（約6.2平方メートル）しかない。これは千利休が好んだとされる2畳間よりは広いが、小間の限度である4.5畳の範囲内である。有楽が客人の快適さを重視したことは、茶室をより広々とした設計にしたことにも表れている。また、有楽は比較的明るい茶室を好んだ。そのため、如庵の屋根には天窓のような突き上げ窓がある。また、東側の壁には「有楽窓」と呼ばれる、如庵独特の窓が2つある。この四角い窓は、細い竹が垂直につめ打ちされている。窓を開けておくと竹の隙間から光が入り、障子を閉めると竹の影が映し出され、上品な陰絵ができる。

正面の壁と低いにじり口の反対側には、別の形式の窓が見える。これは下地窓と呼ばれている。この窓は、壁の一部を漆喰で仕上げることなく、その下にある竹と葦の格子を露出させたものである。如庵の装飾で非常に珍しいのは、外からは見えないところにある。茶室の壁の下3分の1は古い暦で埋め尽くされており、中には1629年までさかのぼるものまである。これは「暦張り」と呼ばれる装飾技法で、身近なものを再利用し、無駄なものを一切使わない庵の素朴さをイメージしている。

005-004

Shōdenin Shoin

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 重要文化財 旧正伝院書院
(きゅうしょうでんいん・しょいん)
【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Shōdenin Shoin

Like Jo-an, the Shōdenin Shoin was constructed in 1618 as part of Oda Uraku's residence at Kenninji Temple. It is only one part of the original whole, which was called the Shōdenin. The Shōdenin complex functioned as a sub-temple within the larger Kenninji grounds, and it contained a Buddhist worship hall in addition to Uraku's private chambers, gardens, and tea house. The Shoin, or "study," of the Shōdenin was a part of the residence where Uraku could entertain guests, read, or relax.

Different parts of the Shōdenin complex were sold to various buyers in 1908. The Shoin was sold to Mitsui Takamine, who also acquired Jo-an. As part of the creation of Urakuen, both buildings were relocated to Inuyama and restored to look as they did in Uraku's day. Even the relative positions of the buildings are faithful to the initial layout of Uraku's residential complex.

Restorations

During the 1971 reconstruction, architect Horiguchi Sutemi relied upon a 1799 illustration of Uraku's residence to restore the Shoin to its original appearance. He removed the covered walkway that the Mitsui family had added between the Shoin and the tea house, and he restored the low handrail on the Shoin's south veranda. Horiguchi also commissioned an unusually long, rectangular stone step for the south side. Next came the roof: when Meitetsu acquired the Shoin, it was roofed with ceramic tiles set in a wave pattern, but the old drawing showed flat wooden shingles. Horiguchi opted to use copper shingles that were similar in shape but far more durable.

Architectural Features

The main entrance of the Shōdenin Shoin is on the north side, beneath a gently curving

eave (*karahafu*) that is traditionally associated with refinement and prestige. In addition to the tiled entryway, the building contains six rooms and a kitchen-like area called a *mizuya* on the western side. It is likely that in Uraku's day this room was not a *mizuya* but part of a hallway that connected the Shoin to the Shōdenin's worship hall.

From the entryway, dramatic bars of white can be seen on the interior walls. These lighter places show the locations of the building's wooden beams and support posts. Over time, manganese (which is naturally present in the mud plaster) leaches to the wall's surface. There it oxidizes, staining the outermost layer a brownish black. This effect is reduced, however, in areas where there is wood framing inside the walls.

Fusuma Paintings

The rooms of the Shoin are separated by large, decorative sliding panels called fusuma. Like folding screens, fusuma are often decorated with landscape paintings that span multiple panels. The Shoin's fusuma were decorated by some of the most skilled painters of Uraku's day. The central room once had fusuma paintings by Hasegawa Tōhaku (1539–1610), the founder of the eminent Hasegawa school. Each of the eight panels was decorated with a painting of one of four flowers—lotus, orchid, chrysanthemum, and plum blossom—that are a common theme in classical Chinese painting. The trees, rocks, and figures in the paintings all display Hasegawa's distinctive style, and the fusuma were likely painted during his middle years. (This would have been before the Shōdenin was constructed, so the paintings were likely brought from one of Uraku's previous residences.)

Other fusuma in the Shoin were painted with ink landscapes (*sansui*) by several members of the Kanō school—perhaps the most famous school in the history of Japanese painting. Due to the extreme age and fragility of the paintings, most of the fusuma have been removed from the Shoin for preservation. The two chrysanthemum panels by Hasegawa are not owned by Urakuen, but are thought to be in a private collection.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「重要文化財 旧正伝院書院」

正伝院書院

正伝院書院は、如庵と同じく1618年に建仁寺の有楽邸の一部として建てられたもので、正伝院と呼ばれていたものの一部に過ぎない。正伝院は建仁寺の塔頭寺院で、有楽の私室や庭園、茶

室などのほか、仏殿を備えていた。書院は、有楽が客人をもてなしたり、読書をしたり、くつろいだりできる場所であった。

1908年、正伝院のさまざまな部分が、さまざまな業者に売られた。書院は如庵も買収した三井高棟に売却された。有楽苑の創設に伴い、両建物は犬山に移築され、有楽当時の姿に復元された。建物の位置関係も、有楽邸の当初の間取りを忠実に再現している。

復元工事

1971年の再建では、建築家の堀口捨己は1799年に描かれた有楽邸の絵図を参考に、書院の外観を復元した。書院と茶室の間に三井家が増築した屋根付き通路を撤去し、書院の南縁側にあった低い手摺を復元した。さらに堀口は、南側に異様に長い長方形の石段を注文した。屋根は、名鉄が書院を取得した当時、棧瓦葺であったが、古い図面には木製の平板が描かれていた。堀口は、形は似ているが耐久性のある銅板葺きを選んだ。

建築の特徴

正伝院書院の正面玄関は北側にあり、伝統的に上品で格式のある意味を持つ緩やかな曲線を描いた庇（唐破風）の下にある。書院は、瓦の土間のほか、6つの部屋と建物の西側に水屋と呼ばれる台所のような空間がある。有楽の時代には、この部屋は水屋ではなく、書院と正伝院の仏殿をつなぐ廊下の一部であったと思われる。

玄関から内壁を見ると、白のラインが印象的である。これらの色の薄い箇所は、建物の梁や柱の位置を示している。泥漆喰に含まれるマンガンが、時間の経過とともに壁の表面に溶け出す。これが酸化して、最表層が茶色く黒く変色するのである。ただし、壁の内側に木枠がある場合は、この影響は少なくなる。

襖絵

書院の部屋は、襖と呼ばれる大きなスライドする化粧板で仕切られている。屏風と同じように襖も複数の板に渡って風景画が描かれることが多い。書院の襖は、有楽の時代の最も優れた画家たちによって装飾された。中央の部屋には、かつて長谷川派の創始者である長谷川等伯（1539-1610）の襖絵が描かれていた。8枚のパネルに、中国古典絵画に共通する4つの花、蓮、蘭、菊、梅が描かれている。樹木、岩、人物など、いずれも長谷川独特の画風で、襖絵は彼の中年期に描かれたものと思われる。（正伝院が創建される前なので、有楽のかつての住居から持ち込まれたものであろう。）

書院の他の襖は、日本画史上最も有名な狩野派の画家たちによって描かれた水墨山水である。これらの襖絵は非常に古く脆いため、現在ではそのほとんどが書院から取り出され、保存されている。長谷川が描いた2枚の菊の襖絵は、有楽苑に保管されておらず、個人の所有物の様である。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 有楽苑の茶道で使われる茶道具

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Tea Utensils

The bowls, water containers, kettles, and other items used in serving tea are collectively called *chadōgu*, meaning “tea implements.” The tea utensils used at a gathering may vary considerably depending on the tea school, the type of tea gathering, and the time of year. Even so, nearly all procedures for serving matcha-based tea involve the following items.

Tea Bowls (*Chawan*)

The host at a tea gathering prepares matcha in a bowl called a *chawan*. Prior to the sixteenth century, most tea bowls were elegant pieces imported from China. By the early sixteenth century, Japanese tea masters had begun to prefer the more rustic look of vessels from Korea (*kōrai*). These bowls, particularly the type called *ido-jawan*, exemplified an aesthetic of tranquil simplicity (*wabi*) that would come to dominate the practice of tea. In fact, some of today’s most priceless tea bowls began as inexpensive dishes for daily use. Over the course of the sixteenth century, Japanese kilns began to produce their own tea ware, which Sen no Rikyū and his student Furuta Oribe (1544–1615) helped to popularize.

Tea bowls often have a “front” side that is determined by the bowl’s form, shape, or primary decoration (anything from an intricately painted flower to an eye-catching aspect of the glaze). Tea bowls come in a great range of shapes, designs, and sizes. Those intended for use in winter are often thick-walled and deep, to maintain the warmth of the tea. Summer bowls, on the other hand, are often broad and shallow so that the tea cools more quickly.

Containers for Thin Tea (*Usuchaki*)

At tea gatherings, guests are served what is called “thin tea” (*usucha*). The powdered green tea, or matcha, used to make *usucha* is stored in an airtight vessel until just before the gathering, when an appropriate amount is transferred to a tea container called an *usuchaki*. When making tea, the host scoops matcha powder from the tea container into the tea bowl.

Tea containers can be highly decorative and are often made of lacquered wood. They come in a variety of shapes, the most common of which is called *natsume*, meaning “jujube fruit.” This name reflects the vessels’ similar shape: rounded cylinders that taper at the bottom.

Tea Scoops (*Chashaku*)

Tea scoops are thin, flat utensils with a gentle curve on one end. They are used by the host to scoop matcha powder from the tea container into the tea bowl—usually two scoops per serving. Most tea scoops are made of bamboo, but they may also be made of other types of wood, ivory, tortoiseshell, or even precious metals.

Tea Whisk (*Chasen*)

Prepared matcha is often whisked with a bamboo tea whisk to give it a frothy, airy texture. After adding matcha powder and hot water to the tea bowl, the host whisks the mixture briskly until the powder is completely dissolved and foam gathers on the surface of the tea.

Different tea schools prefer tea whisks with straighter or more rounded tines.

Uraku’s Tea Utensils

Oda Uraku had one of the most valuable collections of tea utensils of his day, and much of it is now kept in museums and private collections. After Uraku’s death, some prized items were entrusted to his friends, and some were given to Kenninji Temple to pay for future memorial services. Uraku also created his own tea utensils, including nearly a dozen *chashaku* tea scoops.

Tea utensils are often given poetic names that reflect their creators or famous owners. One *ōido*-style tea bowl that bears Uraku’s name inspired a particularly fierce bidding war in 1937. It is now in the Tokyo National Museum.

Another of Uraku’s utensils was a valuable *chaire*, a type of tea container used in making thick tea. Uraku gave the *chaire* to Toyotomi Hideyori (1598–1615),

Hideyoshi's heir, in 1612. After Osaka Castle was attacked and burned in 1615, Tokugawa Ieyasu ordered the *chaire* recovered from the ashes, and it became an heirloom of the Tokugawa family.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「有楽苑の茶道で使われる茶道具」

茶道具

茶を点てるための道具である茶碗、水指、釜などを総称して「茶道具」という。流派や茶会の種類、時期によって、使用する茶はかなり異なる場合がある。しかし、抹茶を使ってお茶を点てる手順は、ほぼすべての茶道で次のような道具が使われる。

茶碗（ちゃわん）

茶会では、亭主が茶碗と呼ばれる器に抹茶を点てる。16世紀まで、茶碗の多くは中国から輸入された精巧なものであった。16世紀初頭までには、日本の茶人は朝鮮（高麗）の素朴な味わいの茶碗を好むようになる。それらの茶碗、特に井戸茶碗と呼ばれるものは、後に日本の茶の湯を支配することになる静謐な簡素さである「わび」の美学を例証するものであった。実は、現在最も高価な茶碗のいくつかは、日常的に使用する安価な食器として作られたものである。16世紀に入ると、日本の窯元では独自の茶器を作るようになり、千利休やその弟子の古田織部（1544-1615）らが普及に努めた。

茶碗には「正面」があり、それは茶碗の形状、形、あるいは主要な装飾（複雑に描かれた花や目を引く釉薬など）により決定される。茶碗の形やデザイン、大きさは実にさまざまである。冬に使用されるものは、茶の温度を保つために肉厚で深いものが多い。一方、夏用の茶碗は、茶を早く冷ますために、広く浅いものが多い。

薄茶器（うすちゃき）

茶会では、薄茶と呼ばれるものが出される。薄茶の材料となる抹茶は密閉容器に入れ、直前に薄茶器と呼ばれる茶筒に適量を移し替える。お茶を点てる時、亭主は茶筒から抹茶をすくい茶碗に入れる。

茶筒は非常に装飾的であり、漆塗りの木で作られていることが多い。形はさまざまだが、最も一般的なのは「棗（なつめ）」と呼ばれるものである。ナツメの実を指すこの名前は、丸みを帯びた円筒形で、底が細くなっている容器の形が似ていることに由来している。

茶杓（ちゃしゃく）

茶杓は薄くて平らな道具で、片方の端がゆるやかに曲がっている。それらは亭主によって、茶入から茶碗に抹茶をすくうのに使われるが、通常は1杯につき2杯。茶杓は竹製のものが多いが、違う種

類の木、象牙、べっ甲、貴金属製のものまでもある。

茶筴（ちゃせん）

抹茶の泡立ちをよくするために、竹製の茶筴で泡立てることが多い。茶碗に抹茶と湯を入れた後、亭主は抹茶が完全に溶けて泡が立つまで、勢いよく泡立てる。

茶道の流派によって、茶筴の先がまっすぐなもの、丸みを帯びているものなどがある。

有楽の茶道具

有楽は、当時としては貴重な茶道具のコレクションを持ち、その多くは博物館や個人のコレクションとして残されている。有楽の死後、貴重な作品の一部は知人に託されたが、一部は建仁寺の供養料として贈られた。また、有楽は茶杓など十数点の茶道具を自らも制作している。茶道具には、作者や名主にちなんだ詩情豊かな名前がつけられることが多い。1937年には、有楽の名を冠した大井戸茶碗が、激しい入札合戦を引き起こした。現在、東京国立博物館に所蔵されている。

また、有楽の道具の中で貴重なのが濃茶を練るための茶入である。1612年、有楽は秀吉の嫡男・豊臣秀頼（1598-1615）にこの茶入れを献上した。大坂城が攻撃されて焼失した後、徳川家康は灰の中から茶入を回収するよう命じた。以後、徳川家の家宝となった。

005-006

A Taste of *Chanoyu*: Tea Service at Urakuen

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / お茶作法について

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

A Taste of *Chanoyu*: Tea Service at Urakuen

Visitors to Urakuen can experience a traditional-style tea service at Kō-an. Tea is served in the main reception room, which looks out at a secluded garden of moss and artfully placed stepping stones. The tea service at Urakuen is an abbreviated version of a tea gathering, and certain steps, such as the preparation of the tea, are omitted. The service at Kō-an includes only the receiving and drinking of tea, which is done using the same ritualized gestures of a formal tea gathering.

Each step of the tea service is given below, along with a short explanation.

1. Take your seat.

Guests at tea gatherings typically sit on their feet with their legs folded underneath them (a position called *seiza*). However, it is also acceptable to sit cross-legged or with legs to one side.

2. A staff member will offer you a plate with a traditional sweet.

The sweet will come with a wooden pick (*kuromoji*).

3. With your left hand, lift the plate. Then use the pick in your right hand to cut the sweet into bite-sized pieces before eating it.

The sweet is intended to balance the flavor of the matcha to come; try to finish it before the tea arrives.

4. A staff member will place a bowl of matcha in front you, then bow. Place the fingertips of both hands together on the floor in front of your knees and return the bow.

During a formal tea gathering, you would also bow to your neighboring guest (who has not yet received tea) and apologize for drinking first.

5. Lift the bowl with your right hand, with your thumb against the rim and fingers near the base, then place the bowl in the palm of your left hand.

6. Hold the bowl at waist height and turn it 90 degrees clockwise.

At a formal tea gathering, the host places each bowl so that its “front” (usually the side with the main decorative element) faces the guest. This is a sign of respect. In return, the guests show humility by not drinking directly from the front side of the bowl.

7. Drink.

This preparation of matcha, called *usucha* (“thin tea”), is made using less tea powder than *koicha* (“thick tea”). *Koicha* is generally served only after a meal at full-length tea gatherings, where multiple bowls of tea are served.

8. Once you have finished, use the index finger and thumb of your right hand to wipe the rim of the bowl where you drank.

Wiping the tea bowl is a symbolic gesture of cleansing. It arose from styles in which participants drink sequentially from the same bowl.

9. Rotate the bowl counterclockwise so that the front faces fully away from you, then place it back on the floor.

Some guests use this time to look closely at the bowl and admire its shape or decoration. Because many of the bowls used in tea gatherings are quite valuable, hold the bowl close to the floor while examining it.

10. After you have finished your tea, a staff member will explain the meaning of the scroll and flower arrangement in the room’s tokonoma alcove.

Each of these decorative elements is specially chosen for the season, and they often

convey a mood or message that the host of the tea gathering wishes to share.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「お茶作法について」

茶の湯を味わう：有楽苑の茶道体験

有楽苑では、「弘庵」で伝統的な茶の湯を体験することができる。お茶は、苔と飛び石が美しく調和するひっそりとした庭園を望む大広間で提供される。有楽苑のお茶席は、お茶を点てるところなどいくつかのステップは省略された略式の茶会である。弘庵の茶事は、お茶をいただくところから始まり、正式な茶会と同じように、儀式化された所作で行われる。

以下、お茶の作法の各ステップと簡単な説明は下記の通りである。

1. 席に着く。

茶会の客人は、足を下に折り畳んで座る（正座と呼ばれる座り方）が一般的であるが、あぐらをかいたり、横すわりでもよい。

2. スタッフが伝統的なお菓子がのったお皿を差し出してくれる。和菓子には木の楊枝（黒文字）が付く。

3. 左手でお皿を持ち上げる。右手で黒文字を使って和菓子を一口サイズにカットして食べる。 このお菓子は、これからいただく抹茶の味とのバランスをとるためのものなので、抹茶が来る前に食べきるようにしましょう。

4. スタッフが抹茶碗を目の前に置き、一礼する。両手の指先を膝の前の床に合わせ、お辞儀を返す。

正式な茶会では、隣の客（まだお茶をいただいていない客）にも一礼し、先に飲んでしまったことを詫げる。

5. 右手で茶碗を持ち上げ、親指を縁に、指を底に近づけ、左手の手のひらに茶碗を乗せる。

6. 腰の高さで碗を持ち、時計回りに90度回転させる。正式な茶会では、亭主はそれぞれの茶碗を「前」（通常、主な装飾要素のある側）を客に向けるように置く。これは、尊敬の印である。その代わり、客は茶碗の表側から直接飲まないことで、謙虚さを示す。

7. 飲む。

抹茶は薄茶と呼ばれ、濃茶に比べ茶葉の量が少ない。濃茶は一般に、何杯も茶碗を並べる本格的な茶会では食後にのみ供される。

8. 飲み終わったら、右手の人差し指と親指で、飲んだ茶碗の縁を拭う。

茶碗を拭くのは、清めの象徴的な仕草である。同じ茶碗で順番に飲むスタイルから生まれた。

9. 茶碗の正面が自分の反対側に向くよう、反時計回りに、ボウルを回転し、床に置く。

この時、茶碗をじっくりと見て、形や装飾を鑑賞する人もいる。茶道でつかわれる茶碗は貴重なものが多いので、茶碗を床に近づけて観察するのが望ましい。

10. お茶を飲んだ後、床の間に飾られている掛け軸や花の意味をスタッフが説明する。

これらの飾りは、それぞれ季節に合わせて特別に選ばれたもので、お茶会の主催者が共有したい気分やメッセージを伝えていることが多い。

005-007

Gen-an

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 元庵

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Gen-an

The tea house called Gen-an is a modern reconstruction. It is based on surviving plans for a tea house Uraku built at his earlier residence in Osaka—one which Horiguchi Sutemi believed may also have been called “Jo-an.” During the construction of Urakuen, an official name was needed for the tea house that would be built using these plans. Horiguchi suggested the name “Gen-an,” which means “original hermitage.”

To piece together the history of this earlier tea house, Horiguchi used a clue hidden on one of the artifacts now associated with Jo-an: the name plaque that hangs on its southern side. Although this plaque is inscribed with the name “Jo-an,” it is dated 1599—long before the Shōdenin and Jo-an were built in Kyoto. Horiguchi concluded that the plaque must have been created for an earlier tea house with the same name, and that Uraku took the plaque with him when he left Osaka. Presumably, Uraku then reused it and the name for the new tea house he built in Kyoto.

Uraku lived in the Tenma area of Osaka, just northwest of Osaka Castle, until the winter of 1614. Three years later, Uraku’s former residence was absorbed by the newly founded Kawasaki Tōshōgū Shrine. His tea house was preserved as part of the shrine until both were destroyed by fire in 1837. In 1871, the newly founded Japan Mint was built on the site. A single part of the original tea house survives in one corner of the mint grounds: the *kutsunugi-ishi* (“shoe-removal rock”), where guests would pause to remove their shoes before entering. During the reconstruction of Gen-an, Horiguchi negotiated to have this rock relocated to Urakuen, but he was unsuccessful.

When the reconstruction of Gen-an was complete, it needed a name plaque. Rather than use new materials, Horiguchi selected wood with a distinguished pedigree: a door panel that had once hung in Kikōji Temple in Nara and had been reused in the Mitsui family villa in Ōiso. Urakuen officials took the wood to Kyoto and presented it to Mujin Sōsa (1901–1979), the thirteenth head of the Omotesenke school of tea. Mujin

inscribed the plaque with the chosen name and officially bestowed the name “Gen-an” on the newly finished tea house.

Gen-an is larger than Jo-an, and many of its interior features are equally unconventional. Several show Uraku’s clear departure from the preferences of his mentor, Sen no Rikyū. For example, Uraku used bamboo—a material Rikyū disdained—for many of the finishings in the room, such as the wooden frames of the *shōji* windows. There is also a bamboo pillar that separates the host’s seating area from the guests. Furthermore, Rikyū preferred to give the guests a direct view of the scroll and flower arrangements chosen for the gathering, but for Gen-an, Uraku positioned the tokonoma alcove behind the host instead.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「元庵」

元庵

元庵という茶室は、現代に再建されたものである。かつて有楽が大阪の旧居に建てた茶室の図面が残っており、堀口はそれが「如庵」と呼ばれていたのではないかと考えている。有楽苑の建設にあたり、この図面をもとに建設される茶室の正式名称が必要となった。堀口は、「元庵」と名付けることを提案した。

堀口は、この茶室の歴史を紐解くために、現在、如庵にまつわる遺物の一つ、南側に掲げられている扁額を参考にした。この額には「如庵」の名が刻まれているが、その日付は正伝院や如庵が京都に建てられるずっと以前の1599年である。堀口は、この扁額は以前からあった同名の茶室のために作られたもので、有楽が大阪を離れる際に持ち帰ったものであり、京都に建てた新しい茶室でこの扁額と名前を再利用したと推測している。

有楽は1614年の冬まで、大阪城のすぐ北西にある天満に住んでいた。その3年後、有楽の旧居は新たに設立された川崎東照宮に吸収された。1837年に火災で焼失するまで、有楽の茶室は神社の一部として保存されていた。1871年、この地に造幣局が新たに設立され、その敷地の一角に当時の茶室の一部で、客が入る前に靴を脱ぐために立ち止まる「沓脱石」が残されている。堀口は、元庵再建の際、この石を有楽苑に移設するよう交渉したが、実現しなかった。

元庵の再建が完了すると、扁額が必要になる。堀口は由緒ある木材を選んだ。新しい材料ではなく、かつて奈良の喜光寺にあり、大磯の三井家別邸で再利用されていた扉板を有楽苑の職員が京都に運び、表千家第13代宗匠の無盡宗左（1901-1979）に贈呈した。そして、無盡が扁額に選んだ名前を刻み、完成した茶室に「元庵」の名を正式に授けたのである。

元庵は如庵より大きく、内装も同様に型破りなものが多い。その中には、有楽の師である千利休の好みから明らかに逸脱したものもある。例えば、障子窓の木枠など、この部屋の仕上げには利休が嫌った竹を有楽は多用した。また、亭主の席と客の席を仕切る柱も竹でできている。さらに利休は、

茶の湯の際に選んだ掛け軸や生け花を客に直接見せることを好んだが、有楽は床の間を、亭主の背後に配置した。

005-008

Kō-an

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 弘庵（こうあん）

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Kō-an

Unlike Jo-an and Gen-an, the tea house called Kō-an was not designed by Oda Uraku. Rather, it is a modern design by Masao Nakamura and the Kyoto Traditional Building Technology Association, and it was built in 1986, more than a decade after Urakuen opened. Although the two historical tea houses are usually closed to visitors, Kō-an is the venue for Urakuen's tea service and regularly hosts large tea gatherings of up to 20 people.

Kō-an was named in honor of Meitetsu's president at the time, Takeda Kōtarō (1916–1991). The name plaque that hangs in the building's entryway was created by Jimyōsai (1938–), the fourteenth head of the Omotesenke school of tea and successor to the man who inscribed the plaque for Gen-an.

Kō-an has two reception rooms. The main room (*hiroma*) has an area of 15 tatami mats, or roughly 24 square meters—quite large when compared to intimate tea houses like Jo-an. One part of its large, central tokonoma alcove bears special mention: the ceiling of the alcove is made of reused planks of cedar that date to the early eighth century.

The smaller room (*yoritsuki*) is 8 tatami mats (13 m²) in size and is used primarily as the waiting area for tea gatherings held in the main room. Although gatherings are not usually held in the smaller room, it has the necessary features: a sunken hearth (*ro*) and a tokonoma alcove. Compared to the tokonoma in the main room, the one in the small room has a rustic air. The right-hand pillar is crafted from a log of red pine that retains its bark except for a small wedge carved from the bottom. This triangular slice is a decorative touch called a “bamboo face” (*takenomen*) because it is shaped like a fresh bamboo shoot. One of the alcoves in Gen-an also has this feature.

The path that leads to Kō-an passes a stone washbasin with a hidden musical device

known as a *suikinkutsu*. The pebbles surrounding the washbasin conceal a buried ceramic jar that creates a hollow space in the earth. When water is poured from the dipper onto the pebbles, droplets drain through and fall into the jar, resonating like the notes of a koto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「弘庵」

弘庵

この茶室「弘庵」は、「如庵」「元庵」と異なり、有楽が設計したものではない。有楽苑の開苑から10年以上経った1986年に、中村昌生と京都伝統建築技術協会の設計で建てられたものである。建てられたものである。歴史ある2つの茶室は普段は立ち入り禁止だが、弘庵は有楽苑の呈茶サービスの会場となっており、定期的に20名までの大寄せ茶会が開催されている。

弘庵は、当時の名鉄社長・竹田弘太郎（1916-1991）にちなんで命名された。玄関に掲げられている扁額は、元庵の扁額を刻んだ人物の後継者である表千家14代家元、而妙斎（1938-）が制作したものである。

弘庵には二つの応接室がある。広間は15畳、約24平方メートルと、如庵のようなこじんまりした茶室と比べるとかなり広い。その中でも特筆すべきは、中央の大きな床の間の天井で、これは8世紀初頭の杉板を再利用したものである。

寄付は8畳（13平方メートル）で、主に広間で行われるお茶会の待合室としても機能している。通常、寄付は茶会の場として使われないが、床の間や炉など、必要な設備は揃っている。寄付の床の間は、広間の床の間に比べて素朴な雰囲気がある。右側の柱は、赤松の丸太を皮付きのまま加工したもので、底には小さな楔が彫られている。この三角形の切り込みは、筍の形に似ていることから「筍面（たけのめん）」と呼ばれる装飾である。元庵の床の間にもこのようなものがある。

弘庵に続く道は、水琴窟と呼ばれる音響装置が隠された石の手水鉢を通る。手水鉢を囲む小石は埋められた陶製の壺を隠し、地中に空洞が作られている。柄杓で水を注ぐと、水滴が壺の中に落ち、まるで琴の音のように響く。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 岩栖門 含翠門

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Iwasumon and Gansuimon Gates

Iwasumon Gate

The elegant main gate of Urakuen dates to the early seventeenth century. Like the other gates at Urakuen, it was previously owned by the Mitsui family and stood in the garden of their Ōiso villa. It was relocated to Urakuen along with Jo-an.

The gate's roof has a bell-like curve that is most visible from the side. Gates with this type of curved roof are called *karamon*, and this gate is a *hira karamon*, meaning that the roof's central ridgeline runs perpendicular to the direction of entry.

The gate is roofed with cypress bark and has a "boat-bottom ceiling" (*funazoko tenjō*), so called because the wooden planks form a concave curve that resembles an inverted boat.

Gansuimon Gate

Little is known about the age and origin of the Gansuimon Gate, but it was also owned by the Mitsui family. In choosing where to place the gate at Urakuen, Horiguchi Sutemi made use of its clean, geometric lines—like the borders of a hanging picture scroll—to create a framed view of the inner garden. As seen through the gate, a long, straight path of neatly fitted cobblestones leads through a tunnel of trees and lush moss to the western side of the Shoin, which peeks out from the foliage at the far end of the path.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「岩栖門・含翠門」

岩栖門

有楽苑の荘厳な正門は、17世紀初頭に建てられた。他の門と同様、三井家の所有で、大磯別邸の庭にあったものである。その後、如庵とともに有楽苑に移築された。

この門の屋根は釣鐘状に湾曲しており、横から見ると最もよくわかる。このように屋根が湾曲している門を唐門というが、この門は屋根の中央の棟が進入方向に対して垂直である「平唐門」である。

この門の屋根は檜皮葺きで、船底天井と呼ばれる、板を凹状に曲げ、船を反転させたような形をしている。

含翠門

含翠門の年代や由来はほとんどわかっていないが、三井家の所有物であった。堀口は、この門の配置を決めるにあたり、絵巻物の縁取りのようなすっきりとした幾何学的なラインを生かし、内庭を額縁のように眺めることができるようにした。門をくぐると、石畳が整然と敷き詰められた長い道が続き、木々や苔が生い茂るトンネルを抜けると、その奥に書院の西側が顔を覗かせる。

005-010

Tokugenji Karamon and Kayamon Gates

名古屋鉄道株式会社

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 唐門 萱門

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Tokugenji Karamon and Kayamon Gates

Tokugenji Karamon Gate

This gate was once part of Tokugenji Temple, a Zen temple near Nara. The temple was built in 1632 by Oda Takanaga (1590–1674), Uraku's grandnephew, for private use by the Oda family. Eventually, Tokugenji fell into disrepair, and by the start of the Meiji era (1868–1912), only this gate remained. It was purchased by the Mitsui family in 1941.

The ceiling of the gate has carvings of peonies, and the door panels are ornamented with an unusual ribbed pattern. The gate is thought to be made of zelkova wood, a material which—along with the *karamon* shape itself—was generally associated with refinement and nobility.

Like the Iwasumon Gate, this imposing wooden entrance is a *karamon*. Specifically, it is a *mukai karamon*, meaning that the roof has broad, bell-shaped gables, and its central ridgeline runs parallel to the direction in which someone would pass through the gate.

Kayamon Gate

This rustic gate differs markedly from the other gates at Urakuen. Its pillars are roughly worked tree trunks, and its roof is covered with thatch instead of cypress bark. The lintel is low, requiring visitors to lower their heads modestly as they enter.

Both the gate's simple construction and low entryway express the *wabi* aesthetic established by Sen no Rikyū (1522–1591). As it happens, the Kayamon Gate is a replica of a gate owned by the Sen family. The replica was commissioned by Mitsui Takamine (1857–1948), who practiced the Rikyū-derived Omotesenke style of tea.

The gate has an additional feature that is not readily apparent when the large wooden door stands open: a second, much smaller door called a *kugurido*. When the main door is shut, this smaller door can be opened, compelling guests to stoop even lower to enter. The *kugurido* would have been used during tea gatherings to remind guests that they were entering a different, humbler world.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「唐門・萱門」

徳源寺唐門

この門は、かつて奈良近郊の禅寺である徳源寺の一部であった。徳源寺は、1632年に有楽の兄の孫である織田高長（1590–1674）が、織田家のために建てた私寺である。やがて徳源寺は荒廃し、明治（1868–1912）に入るとこの門だけが残された。1941年、三井家に買い取られた。

門の天井には牡丹の彫刻が施され、門扉には珍しい畝（うね）模様の装飾が施されている。この門はケヤキ材で造られていると推測されるが、一般的にケヤキ材は唐門の形とともに、上品で高貴なイメージを与える材料である。

岩栖門と同様、この威厳ある木造の門も唐門である。屋根の中央の棟が門の入口に沿い、切妻の特徴的な釣鐘状の湾曲が入口に面しているのが向唐門の特徴である。

萱門

この素朴な門は、有楽苑の他の門とは著しく異なっている。柱は木の幹を荒々しく加工し、屋根は檜皮葺ではなく、茅葺きである。まぐさは低くされており、来客は頭を低く下げて入らなければならない。

この門は、シンプルな造りと低い入口が千利休（1522–1591）が確立した侘び寂びを表現している。実は萱門は、千家が所有していた門のレプリカである。この門は、利休の教えに基づく表千家の茶人であった三井高棟（1857–1948）の要望で作られたものである。

この門には、大きな木製の扉を開けた状態ではわからない、潜戸と呼ばれるもうひとつの小さな扉がある。正面の扉を閉めると、この小さな扉が開き、客はさらに身を低くして中に入ることができる。この潜戸は、茶の湯の際に、客によりつつましい別世界に来たことを感じさせるために使われたのであろう。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 日本庭園 有楽苑の四季について
【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

The Seasons at Urakuen

As in many traditional arts, the seasons are an important element of tea practice. Tea gatherings are often held to mark seasonal events, and seasonal symbolism dictates the host's selection of decorations and tea utensils. Likewise, Japanese gardens are designed to show the beauty of the changing seasons throughout the year. At Urakuen, the seasons are expressed in ways as subtle as the color of a bean-paste sweet or as stunning as a cherry tree in full bloom.

In the conventions of traditional Japanese poetry, the year is divided not just into four seasons but also into 24 separate periods, each with its own seasonal flower, fruit, bird, or other hallmark of that time of year. For instance, plum blossoms and Japanese bush warblers are associated with early spring; the full moon and waving tufts of silvergrass are symbols of early autumn. At a tea gathering, these symbols appear most prominently in the hanging scroll and flower arrangement displayed in the tokonoma alcove. The scroll may be a painting that depicts a seasonal image, or it may be calligraphy that references a seasonal event. The flower arrangement will include a flower or other plant that reflects the time of year.

The Chabana-en, or "Tea-Flower Garden," of Urakuen is a special area where tea flowers bloom year-round. This secluded area of the outer garden lies east of Kō-an, where a shaded path crosses a stone bridge and passes a waterfall. The water flows from the top of an artificial hill, which gives a sense of depth to the landscape. The garden is planted with many varieties of camellia—Uraku's favorite—as well as fragrant snowbell, wintersweet, and bridal wreath spirea.

During tea gatherings, more subtle reflections of the season can be seen in the kimonos worn by hosts and guests, the shape and decoration of the tea bowls, and the types of sweet served with the tea. At Urakuen, guests receive sweets with borders lightly tinted in one of four colors: pink in spring, green in summer, orange in autumn,

and white in winter.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「日本庭園 有楽苑の四季について」

有楽苑の四季

多くの伝統芸術と同様、茶道においても季節は重要な要素である。茶会は季節の行事として行われることが多く、亭主によって、季節の要素を取り入れた飾り付けや茶道具の選択が行われる。それと同じように、日本庭園も一年を通じて四季の移り変わりの美しさを楽しめるように設計されている。有楽苑では、あんこのお菓子の色や満開の桜の木で季節を感じたりすることができる。

日本の伝統的な詩歌は、1年を四季だけでなく24の期間に分け、それぞれに花やくだもの、鳥などその季節の特徴を表現している。例えば、梅やウグイスは早春の象徴であり、満月やススキは初秋の象徴である。茶会では、床の間に飾る掛け軸や生け花にその象徴が最も顕著に現れる。掛け軸は、季節のイメージを描いた絵画であったり、季節の行事にちなんだ書であったりする。生け花は、その時期を反映した花や植物を生ける。

有楽苑の「茶花園」は、一年を通じて茶花が咲いている特別な場所である。外苑の中でもひっそりとしたこの場所は、弘庵の東側にあり、木陰の道が石橋や滝とともに続いている。人工的な丘の上から水が流れ、風景に高低差を与えている。有楽の好きだった椿をはじめ、ハクウンボク、ロウバイ、シジミバナなどが植えられている。

茶会では、亭主や客が着る着物、茶碗の形や飾り、茶菓子に季節を感じることができる。有楽苑では、春はピンク、夏は緑、秋はオレンジ、冬は白の4色の縁取りが施されたお菓子が提供される。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 有楽苑の花

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Notable Plant Life of Urakuen

Urakuen is a living monument to Oda Uraku (1547–1621) and the beauty of Japanese tea gardens. Each of its trees, shrubs, grasses, and mosses was carefully selected, arranged, and cultivated by Horiguchi Sutemi and a landscaping company to create a garden that Uraku would have admired. Its flowering cherry trees and camellias add splashes of color, its stands of tall bamboo screen out the surrounding city, and its ferns and mosses lend a sense of age and dignity to the stonework. Every plant in the garden contributes to the whole, but a few of them are worthy of special note.

Uraku Camellias

The Uraku camellia (*Camellia uraku*) is a hybrid of the Japanese camellia (*Camellia japonica*) and camellias introduced from China between the fourteenth and sixteenth centuries. Uraku had a particular fondness for camellias, and he is said to have cultivated and planted these hybrids near Jo-an. Uraku camellias have medium-sized pink blooms with a single layer of petals surrounding prominent yellow centers. They bloom in March and April and are widely used in flower arrangements for tea gatherings. At Urakuen, they grow along the western wall of the northern Shoin's garden.

Chinese Fringetree

The Chinese fringetree (*Chionanthus retusus*) produces clusters of lacy, fragrant, white blooms in mid-May. The species is relatively rare in Japan, and the Ministry of the Environment's Red Data Book of Endangered Species lists the fringetree's status as Vulnerable (VU). A grove of wild fringetrees that grows just outside of Inuyama was designated a Natural Monument in 1923.

The species has several names in Japanese, including *nanjamonja*, a name that tickled Horiguchi so much that he gave the tree a prominent place in the northern Shoin garden.

Tortoiseshell Bamboo

Tortoiseshell bamboo (*Phyllostachys heterocycla* f. *heterocycla*) is a tall, thick-walled bamboo with nodes that slant in alternating directions, creating a zig-zag pattern reminiscent of tortoiseshell. It is a natural variant of moso bamboo (*Phyllostachys edulis*). Historical accounts and illustrations of Uraku's residence indicate that it was surrounded by moso bamboo, so the species was planted throughout Urakuen. The tortoiseshell variant grows in a single patch near the entrance to Gen-an.

Living Unkin (Cherry and Maple)

The *unkin* ("cloud-brocade") motif seen in Inuyama ware has a living counterpart at Urakuen. Just north of the white plaster wall near Kō-an, a cherry tree is growing by the path. Its trunk splits into several branches at roughly head height, and in their midst—growing out of the trunk of the cherry—is a Japanese maple tree.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「有楽苑の花」

有楽苑の注目すべき植物

有楽苑は、織田有楽(1547–1621)と日本の茶庭の美しさを伝える生きたモニュメントである。有楽が愛した庭園を目指し、堀口と造園業者が、樹木、草木、苔の一つひとつを厳選し、配置、育成を工夫したものである。桜や椿の花が彩りを添え、竹林が周囲の市街地を遮り、シダや苔が石組みに重厚感と古さを与えている。どの植物も庭園全体に重要な役割を果たしているが、その中でも特に注目すべき植物を紹介する。

有楽椿

有楽椿は、14世紀から16世紀にかけて中国から渡来したツバキと日本のツバキの交配種である。特に椿をこよなく愛した有楽が、如庵の近くで栽培・植栽したとされる。有楽椿は中輪のピンク色の花を咲かせ、花弁は一重で、黄色の中心が際立つ。3月から4月にかけて咲き、茶席での生け花に多く用いられる。有楽苑では、書院の北庭の西壁に沿って植えられている。

ヒトツバタゴ

ヒツバタゴは、5月中旬にレース状に香り高い白い花を咲かせる。日本では比較的珍しい種であり、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧種（VU）に指定されている。犬山市郊外に自生するヒツバタゴは、1923年に天然記念物に指定された。

この木には「ナンジャモンジャ」などいくつかの和名があり、堀口はその名前に惹かれ、北の書院の庭のひととき目立つ場所に植えた。

キッコウチク

キッコウチクは背が高く、肉厚の竹で、節が交互に傾斜してジグザグ模様になることから亀甲を連想させる。孟宗竹の変種とされる。有楽邸の史料や絵図によると、孟宗竹に囲まれており、この種が有楽苑のあちこちに植栽されていたことがわかる。亀甲型は元庵の入り口付近の一画に生育している。

生きた雲金（桜・楓）

犬山焼のモチーフである「雲金」は、有楽苑に存在する。弘庵のそばにある白漆喰の壁のすぐ北側、小道の脇に桜の木が生えている。その幹が頭の高さくらいで枝分かれし、その真ん中に楓の木が幹から伸びているのである。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 / 犬山焼きの歴史と特徴

【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Inuyama Ware

At Urakuen, tea is served in fine ceramic bowls of Inuyama ware, a local ceramic lineage with over 200 years of history. In the early nineteenth century, the lords of Inuyama Castle supported the founding of local kilns and began to attract skilled potters to the area. Various styles and methods have evolved over the subsequent centuries, but three Inuyama kilns continue to produce tea bowls, cups, and vases using traditional techniques and traditional designs.

Early Modern Inuyama Ware

Pottery was first produced in the Imai area of Inuyama in the mid- to late eighteenth century. Okumura Denzaburō, the founder of the first kiln, used techniques he had learned in Mino Province (now southern Gifu Prefecture). His pottery—called Imai ware—consisted of simple pieces for daily use finished with a glossy brown glaze. Okumura’s successors maintained the Imai kiln until 1781, when the third owner died.

In 1810, a local merchant named Shimaya Sōkurō (dates unknown) worked to revitalize ceramic production in the area. He petitioned the lord of Inuyama Castle, Naruse Masanaga (1782–1838), and was granted permission to open a kiln in the Maruyama district. This marked the beginning of what is now called Inuyama ware.

There are few surviving records of the first decade, but it is known that in 1817 a new kiln master took over, and by 1822 potters had arrived from other regions, bringing techniques from the nearby areas of Seto and Shidami. By 1831, local artists had begun making both blue underglaze pottery (*sometsuke*) and red-enameled overglaze pottery (*aka-e*).

Lord Masanaga was pleased, and in 1836 he increased funding to the local kilns. Masanaga died two years later, but his successor, Naruse Masazumi (1812–1857),

continued the patronage. He also requested the production of what would become one of Inuyama ware's most popular and characteristic designs: the combination of cherry blossoms and red maple leaves known as *unkin-de* (cloud-brocade style).

Inuyama ware continued to thrive as new kilns were opened and ceramicists refined their painting methods and designs. However, production of ceramics came to a stop in the early 1870s, following the abolition of the samurai class and the transition to the Meiji era (1868–1912).

Modern Inuyama Ware

Despite this lull, the production of Inuyama ware resumed roughly a decade later. Many of the same craftsmen took up their work (sometimes even at the same kilns) in 1883 under the auspices of the Inuyama Pottery Company. The company was dissolved when the kilns were severely damaged in the Nobi Earthquake of 1891, but several potters continued to produce Inuyama ware. During the early twentieth century, some kilns were forced to temporarily switch to making roof tiles to stay in business. However, a rise in the popularity of tea in the late twentieth century helped spark a renewed interest in fine ceramics.

Three kilns in Inuyama—Ozeki Sakujūrō Tōbō, Gotō Tōitsu Tōen, and Ōsawa Kyūjirō Tōen—continue to produce traditionally designed tea bowls, vases, teacups, wind chimes, and many other ceramic creations. Complex *aka-e* (red and green) designs and the *unkin-de* motif still feature prominently alongside pieces with highlights of gold, iridescent metallic swirls, or textured glazes. The shop at Urakuen offers a selection of fine Inuyama-ware tea bowls in a variety of designs, and a much broader range of pieces is sold at the kilns themselves.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「犬山焼きの歴史と特徴」

犬山焼

有楽苑では、200年以上の歴史を持つ犬山焼の茶碗でお茶が提供されている。19世紀初頭、犬山城主が地元の窯元の設立を支援し、優秀な陶工を呼び寄せたのが始まりである。その後何世紀にもわたって、さまざまな作風や製法が変化しながらも、犬山市の3つの窯元では、伝統的な絵柄の茶碗や湯呑み、花瓶などが今も作られている。

初期の犬山焼

犬山市今井地区で初めて陶器が作られたのは、18世紀半ばから後半にかけてのことである。初代窯元・奥村伝三郎が美濃国（現在の岐阜県南部）で学んだ技法を用いた。奥村の今井焼と呼ばれる陶器は、光沢のある褐色の釉薬で日常使いのための素朴な作品である。1781年に3代目が亡くなるまで、彼の後継者たちが今井焼の窯を維持した。

1810年、地元の商人・島屋宗九郎（年代不詳）は、陶磁器生産の復興に取り組んだ。彼は、犬山城主の成瀬正壽（1782-1838）に嘆願し、丸山地区での開窯を許可されたのである。これが、現在の犬山焼きの始まりである。

最初の10年間の記録はほとんど残っていないが、1817年に新しい窯元が就任し、1822年、瀬戸や師段味から技術を持ちこんだ陶工が他地域からやってきたことが分かっている。1831年までには、この地域の職人によって染付と赤絵が作られるようになった。

これを喜んだ正壽は、1836年、窯元への資金援助を強化した。その2年後に正壽は亡くなったが、後継者の成瀬正住（1812-1857）が、正壽の意志を引き継いだ。そして、後に犬山焼の代表的なデザインになる桜と紅葉を組み合わせた「雲錦」の制作を窯元に依頼した。

犬山では、その後も新しい窯が開かれ、絵付けやデザインに磨きがかかり、隆盛を極めた。しかし、1870年代初頭の廃藩置県や明治時代（1868-1912）への移行に伴い、生産はストップしてしまう。

近現代犬山焼

この中断を経て、犬山焼の生産はおよそ10年後に再開される。1883年に犬山陶器会社が設立され、多くの同じ職人たちが（ときには同じ窯で）仕事を再開するようになった。1891年の濃尾地震で窯が大きな被害を受け、会社は解散したが、数人の職人が犬山焼を作り続けた。20世紀初頭には、一時的に瓦を焼くようになった窯元も多くあった。しかし、20世紀後半になると、茶の湯の人气が高まり、高級陶磁器が再び注目されるようになった。

犬山では現在も3つの窯元、尾関作十郎陶房、後藤陶逸陶苑、大澤久次郎陶苑が、伝統的なデザインの優美な茶碗や花器、湯呑み、風鈴など多くの陶磁器を生産している。複雑な赤絵（赤と緑）のデザインや雲錦のモチーフは、金の装飾や虹色のメタリックの渦、質感のある釉薬が施されており、今でも際立って特徴的である。有楽苑では、様々なデザインの茶碗を販売しているが、窯元ではより幅広い種類の作品を販売している。

【タイトル】日本庭園 有楽苑 /
茶室の美学・茶室周辺の庭のデザイン
【想定媒体】アプリQRコード WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Building a Hermit's Retreat: Tea Houses and *Roji*

Wabi-cha: An Aesthetic of Simplicity

In the sixteenth century, Japan's most powerful elite began to use the narrow, rustic confines of tea houses to meet with fellow warlords and broker alliances. Men who could afford every luxury crawled through low doorways and sat around tiny hearths inside rooms built to resemble the crude huts of woodland hermits. These powerful leaders were pursuing an aesthetic called *wabi-cha*.

Until the sixteenth century, the ritualized drinking of tea was mainly practiced by priests, aristocrats, and high-ranking samurai. Tea gatherings were held in the luxurious reception rooms of high-class residences or in temple halls, and the preference was for ornate tea utensils imported from China. *Wabi-cha*, however, emphasized simplicity and austere refinement—humble craftsmanship using plain materials and minimal ornamentation.

The movement first arose with a priest named Murata Jukō (1423–1502), whose ideas were adopted by the wealthy Osaka merchant Takeno Jō-ō (1502–1555) and passed on to his student, Sen no Rikyū (1522–1591), who would go on to become one of the most influential tea masters in history. Perhaps through Rikyū's powerful samurai patrons, the popularity of *wabi-cha* spread to the samurai class and today it is the dominant aesthetic in the practice of tea.

Tea Houses: Rikyū's Ideal

Rikyū and other tea masters believed that a tea house should evoke the atmosphere of a cottage in the mountains. For this reason, the suffix *-an* (庵), meaning “retreat” or “hermitage,” is used in the names of many tea houses. Rikyū favored a design concept called *yamazato*, or “mountain hamlet.” To replicate this rustic setting, Rikyū created

tea gardens that would surround his tea houses, integrating the two as a single conceptual space.

Rikyū's ideal tea house was a tiny, free-standing hut. Guests entered by crawling through a small, square opening. Inside, the low-ceilinged room was unfurnished and minimally decorated. The entire structure was made of largely unprocessed natural materials, and the roof was humble thatch.

The garden, too, played a role in Rikyū's aesthetic vision. He believed that detached tea houses should have a *roji*—a small garden with a path of stepping stones. Before the start of a tea gathering, which in formal settings would follow a multicourse *kaiseki* meal, guests would assemble in the outer area of the garden beneath a covered waiting area called a *machiai*. Once it was announced that the host was ready to begin (often with the sound of a gong or another signal), the guests would approach the tea house along the *roji* path. The path typically led past a washbasin (*tsukubai*) where they would stop and rinse their hands.

Uraku's Tea Houses

As a student of Rikyū, Uraku was influenced by his mentor's preference for *wabi-cha* and small, detached tea houses. On the other hand, Uraku's style retains some of the hints of luxury that are associated with tea styles practiced by samurai. In addition to being larger than many of Rikyū's tea houses, Jo-an and Gen-an are roofed with shingles, not thatch. Inside, the tokonoma alcoves of both tea houses have black-lacquered framing that Rikyū would have considered too ornate.

Jo-an's *Roji*

The stepping stones, washbasin, well cover, stone lanterns, and other substantive parts of the *roji* were sold to the Mitsui family together with Jo-an in 1908. Architect Horiguchi Sutemi used a 1799 illustration of the Shōdenin complex to reconstruct the position of each element. He also planted black pines and Japanese maples to match trees shown in the drawing.

The round well cover in the southwestern corner was made as an homage to one owned by *wabi-cha* progenitor Murata Jukō (also known as “Shukō”). Uraku greatly admired Jukō, and he had helped to restore Jukō's original well cover; afterward, he created a replica for his own garden and inscribed it “1615, ninth month, second day, Uraku.”

Another notable object in the *roji* at Jo-an is the stone *tsukubai*, or washbasin, which is named Fuzankai—the Japanese name for the Sea of Busan. The name comes from the stone’s origin, the coast of Busan (southern South Korea). In 1592, when Toyotomi Hideyoshi’s forces invaded Korea, the unusual stone was brought back and given to Hideyoshi, who then gave it to Uraku. The central hollow in the stone was formed naturally by waves, making it an ideal washbasin in the *wabi-cha* aesthetic.

Gen-an’s *Roji*

The *roji* at Gen-an was reconstructed based on a diagram from the mid-Edo period (1603–1867). It has a covered waiting area (*machiai*) south of the tea house. From there, stepping stones lead to a small, cubic washbasin. According to the diagram, the original washbasin was carved with images of the Buddha on each side. Washbasins of this type were called “four-sided Buddha washbasins” (*yohō-butsu-chōzubachi*) and were made from the bases of disassembled stone pagodas. Horiguchi was unable to find a suitable washbasin of this type for Gen-an, so he chose one that was simply cube-shaped. He also surrounded the basin with small oak trees and nandina, as it was in Uraku’s day.

Please note: In some areas of the garden, pathways may be blocked by rocks tied with black rope. These are *tome-ishi* (“stop stones”), and they indicate that the area beyond is off-limits to visitors.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

「茶室の美学・茶室周辺の庭のデザイン」

隠居所づくり：茶室と路地

侘び茶：簡素という名の美学

16世紀、日本の有力者たちは、茶室という狭い空間で要人たちとの会談や同盟を結ぶようになった。贅を尽くした男たちが、低い戸口をくぐり、森の奥の隠者の粗末な小屋に似せて作られた部屋で、小さな囲炉裏を囲んだ。これらの強力な指導者たちは、侘び茶と呼ばれる茶道の美学を追求していた。

16世紀まで、お茶を飲む儀式は主に僧侶や貴族、上級武士が行っていた。茶会は上流階級の屋敷の豪華な応接間や寺のお堂で行われ、中国から輸入された豪華な茶器が好まれた。しかし、侘び茶は、シンプルな素材と最小限の装飾による、謙虚な職人技で、簡素で洗練されたものに重

点を置いていた。

村田珠光（1423-1502）の思想を、大阪の豪商・武野紹鷗（1502-1555）が取り入れ、その弟子である千利休（1522-1591）が受け継ぎ、歴史上最も影響力のある茶人の一人となったのである。利休の有力な武士のパトロンを通じ、侘び茶は武士階級に普及し、現在では日本の茶道の主流となっている。

茶室：利休の理想

利休をはじめとする茶人たちは、茶道は野山にある小屋のような雰囲気であるべきだと考えていた。そのため、多くの茶室の名前には「隠れ家」や「静養所」などを意味する「庵」がついている。利休は「山里」という設計思想を好んだ。そのため、利休は茶室を囲むように茶庭を設け、両者を一体化した空間とした。

利休が理想とした茶室は、小さな独立した庵であった。客は、小さな四角い開口の入り口から這うように入っていく。天井の低い部屋には家具がなく、装飾も質素である。屋根は質素な茅葺きで、ほとんど加工されていない自然素材が使われている。

庭もまた、利休の理想の一翼を担っていた。離れの茶室には、飛び石を敷いた小さな庭「露地」があるべきと考えたのである。正式には、懐石料理の後に行われる茶の湯が始まる前に、客は庭の外側にある待合と呼ばれる屋根付きの待機スペースに集まる。亭主の準備が整ったことを知らせると（しばしば銅鑼の音や他の合図で）、客は露地に沿って茶室に向かう。その道には、手を洗うための蹲踞があるのが一般的である。

有楽の茶室

利休の弟子である有楽は、利休の好んだ侘び茶や小さな一戸建ての茶室の影響を受けている。しかし、その一方で、武家茶道の贅を尽きた作風を残している。如庵、元庵は、利休の茶室のほとんどよりも規模が大きいことに加え、屋根は茅葺きではなく、板葺きである。内部は、両茶室とも床の間の縁が黒漆塗りで、利休であれば華美過ぎると考えたであろうものとなっている。

如庵の露地

飛び石、蹲踞、井筒、石灯籠などの必要な部材は、如庵とともに三井家に売却された。建築家の堀口捨己は、1799年に描かれた正伝院の絵図をもとに、各要素の配置を復元した。また、絵図に描かれている樹木に合わせて、黒松や楓を植えた。

南西の隅にある井筒は、侘び茶の祖である村田珠光のものを模して作られたものである。有楽は珠光を尊敬しており、彼の井筒を復元した後、自分の庭にも模造し、「元和元年（1615）九月二日、有楽」と刻んでいる。

もう一つ、如庵の露地には、「釜山海」と名付けられた石の蹲踞がある。これは石の産地が釜山（韓国南部）の海岸であることに由来する。1592年、豊臣秀吉軍が朝鮮半島を侵略した際、この珍しい石を持ち帰り、秀吉に献上した後、有楽に贈られた。この石の中央のくぼみは波によって自然にできたもので、侘び茶の美学に基づいた理想的な蹲踞である。

元庵の露地

元庵の露地は、江戸時代（1603-1867）中期に描かれた絵図をもとに復元されたものである。茶室の南側に待合がある。そこから飛び石を渡っていくと、小さな立方体の蹲踞がある。絵図によると、元々の蹲踞は両側に仏像が彫られていた。石塔の台座を分解して作られた「四方仏手水鉢」であったことがわかる。堀口は、元庵に適したこの種の蹲踞が見つからなかったため、シンプルな立体型のものを選んだ。手水の周囲には、有楽の時代と同じようにカシの小木やナンテンが植えられている。

注意：庭園の一部には、黒い紐で結ばれた石が通路をふさいでいる場所がある。これは「留め石」といって、その先が立ち入り禁止であることを示している。

地域番号	006	協議会名	日吉大社	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
006-001	日吉大社/西本宮		150	看板
006-002	日吉大社/東本宮		150	看板
006-003	日吉大社/金銅装神輿		250	Web
006-004	日吉東照宮/東照宮		150	看板
006-005	唐崎神社/唐崎神社(唐崎の松)		150	看板
006-006	唐崎神社/唐崎神社(唐崎の松)		251-500	Web
006-007	日吉大社/牛尾神社・三宮神社（奥宮）、金大巖		250	看板
006-008	日吉大社/大宮橋		150	看板
006-009	日吉大社/日吉大社概要		251-500	Web
006-010	日吉大社/西本宮		251~500	Web
006-011	日吉大社/牛尾神社・三宮神社（奥宮）、金大巖		251-500	Web
006-012	日吉大社/東本宮		501~750	Web
006-013	日吉大社/日吉三橋：大宮橋、走井橋、二宮橋		250	Web

006-001

Nishi Hongū (Western Main Shrine)

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/西本宮

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Nishi Hongū (Western Main Shrine)

Nishi Hongū is the highest ranking of the seven shrines that make up Hiyoshi Taisha Shrine. It enshrines the deity Ōnamuchi no kami, one of the protectors of Japan, and occupies the site of the first permanent religious structure erected on Mt. Hiei. The shrine was built in approximately 668 in conjunction with Emperor Tenji's (626–672) construction of a new palace near Lake Biwa.

The current main sanctuary was built in 1586, after the armies of the warlord Oda Nobunaga (1534–1582) burned the original structure to the ground in 1571. The architectural style used, called *hie-zukuri*, has several characteristics rarely seen at other shrines. For example, the main sanctuary's first floor is high enough above the foundation to allow for a low-ceilinged room below. This room was used for Buddhist worship until the second half of the nineteenth century, but is now only used occasionally for special services.

The main sanctuary is designated a National Treasure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

西本宮（にしほんぐう）

西本宮は、日吉大社を構成する7つの神社のうち、最高位の神社である。日本の守護神である大己貴命（おなむちのみこと）を祀っている。比叡山に初めて建てられた恒久的な宗教施設の跡地で、668年頃、天智天皇（626-672）の勅願により建立された。

現在の本殿は、1571年に織田信長の軍勢によって焼失した後、1586年に建てられたものである。日枝造りと呼ばれる建築様式は、他の神社ではあまり見られない特徴を持っている。例えば、本殿の1階は基礎から十分に高い位置にあり、その下に天井の低い部屋がある。この部屋は19世紀後半まで仏教の礼拝に使われていたが、現在は特別な礼拝のために時々使われるだけである。本殿は国宝に指定されている。

006-002

Higashi Hongū (Eastern Main Shrine)

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/東本宮

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Higashi Hongū (Eastern Main Shrine)

The main sanctuary of Higashi Hongū, which ranks second among the seven shrines at Hiyoshi Taisha Shrine, enshrines the deity Ōyamakui no kami, who is the protector of Mt. Hiei. The deity has been worshipped here since the reign of the legendary Emperor Sujin (conventionally 97–30 BCE). It is unclear when the first permanent structure for Ōyamakui was built here, but it followed the construction of Nishi Hongū (Western Main Shrine) in the late seventh century.

The current structure was built in 1595 in the *hie-zukuri* style. *Hie-zukuri* has several unique features, such as the low-ceilinged room beneath the main hall. This room was used for Buddhist worship until the latter half of the nineteenth century. The two wooden wands with zigzag paper streamers (*gohei*) placed in front of the doors are offerings to Ōyamakui, and they indicate that the hall is a sacred space.

The main sanctuary is designated a National Treasure.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

東本宮（ひがしほんぐう）

日吉大社七社第二殿の東本宮には、崇神天皇の時代から比叡山を守護する大山咋神（おおよまくいのかみ）が祀られている。大山咋神のための最初の恒久的な建物がここに建てられた時期は不明だが、7世紀末の西本宮の造営に続いて建てられたとされる。

現在の建物は1595年（文禄4年）に建てられた日枝造り様式のものである。日枝造りの特徴は、本殿の下にある天井の低い部屋である。この部屋は19世紀後半まで仏教の礼拝に使用されていた。扉の前に置かれた2本の木製の杖にジグザグの紙垂（ごへい）が付いているのは、大山咋神への供物であり、この堂が神聖な空間であることを示している。

本殿は国宝に指定されている。

006-003

Mikoshi Portable Shrines

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/金銅装神輿

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Mikoshi Portable Shrines

Mikoshi are temporary shrines for deities and are used to carry them from one place to another. Hiyoshi Taisha Shrine is thought to be the first place where *mikoshi* were used, following the gift of two palanquins by Emperor Kanmu (737–806) in 791. Before the Emperor's gift, deities were transported on sacred tree branches.

Each of the seven shrines of Hiyoshi Taisha has a *mikoshi*. They are adorned with animal motifs, crests, hanging mirrors and bells. Dragons, phoenixes, *shishi* lions, and monkeys are thought to be messengers and servants of the deities.

The *mikoshi* used today are replicas of ones made in the late 1500s. The older *mikoshi* have been designated Important Cultural Properties and are kept in a storage facility near the trail to the summit of Mt. Hachiōji. The facility is open to public viewing in November.

The modern *mikoshi* are the same size as the originals but significantly lighter. They weigh about 800 kilograms compared to their predecessors' 1,500 kilograms. It takes about 30 people to carry one *mikoshi*. Each one is maintained by a different team of townspeople living near the shrine, and it is these teams who carry the *mikoshi* on their shoulders during the Sannō Festival held each spring.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

神輿

神輿とは、神様を一時的にお祀りするためのもので、神様を運ぶために使われる。日吉大社は、791年に桓武天皇から2台の輿が贈られたことをきっかけに、神輿が使用された最初の場所とされる。それ以前は、神様の移動は神木の枝に乗せていた。

日吉大社には7つの社殿にそれぞれ神輿がある。動物や紋章、鏡や鈴が飾られている。龍、鳳凰、獅子、猿は神の使いとされ、神のしもべとされている。

現在使われている神輿は、1500年代後半に作られたものを複製したものである。古い神輿は重要文化財に指定され、八王子山頂への登山道近くにある収蔵庫に保管されている。11月には一般公開される。

現代の神輿は、大きさは同じだが、重量がかなり軽い。重さは1,500キログラムから約800キログラムになった。1基の神輿を担ぐのに約30人。毎年春に行われる山王祭では、神社の近くに住む町民がそれぞれのチームを組んで、神輿を担ぐ。

006-004

Hiyoshi Tōshōgū Shrine

日吉大社

【タイトル】 日吉東照宮/東照宮

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Hiyoshi Tōshōgū Shrine

Hiyoshi Tōshōgū Shrine enshrines Tōshō Daigongen, the deified avatar of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), founder of the Tokugawa shogunate (1603–1868). Tōshō Daigongen is the divine protector of Enryakuji Temple, which had close ties with Hiyoshi Taisha until 1868. Enryakuji is the headquarters of the Tendai school of Buddhism in Japan.

Hiyoshi Tōshōgū was established in 1623 by the influential Tendai monk Tenkai (1536–1643). It was rebuilt in 1634, and the new building was a prototype for the ornate Nikko Tōshōgū Shrine in Tochigi Prefecture, where Ieyasu is enshrined.

The shrine is one of the earliest examples of *gongen-zukuri* shrine architecture, which is characterized by a single roof over the worship hall, main sanctuary, and the connecting passageway in between. Although the building's exterior is faded and worn, the colors and gold leaf of the interior remain vivid and bright.

The shrine building, gate, and fence are all designated Important Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日吉東照宮

日吉大社は、徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）を神格化した東照大権現を祀っている。東照大権現は、1868年まで日吉大社と密接な関係にあった延暦寺の総鎮守である。延暦寺は、日本における天台宗の総本山である。

日吉大社は、1623年、天台宗の高僧・天海（1536-1643）によって創建された。1634年に再建された新社殿は、家康を祀る栃木県の日光東照宮の原型となった。

拝殿、本殿、その間の連絡通路を一枚の屋根で覆うという特徴を持つ権現造りの神社建築の最も初期のものの一つである。外観は色あせているが、内部の色彩や金箔は鮮やかである。

社殿、門、塀はいずれも重要文化財に指定されている。

006-005

Karasaki Jinja Shrine

日吉大社

【タイトル】唐崎神社/唐崎神社(唐崎の松)

【想定媒体】看板

できあがった英語解説文

Karasaki Jinja Shrine

This is the legendary spot where Ōnamuchi arrived by boat from Nara, revealed himself to be a deity, and convinced a warrior named Koto no Mitachi Ushimaru to build a shrine and serve there as priest. That shrine is now Nishi Hongū (Western Main Shrine) of Hiyoshi Taisha Shrine. Karasaki Jinja, which was established in 692, enshrines Ushimaru's wife, Wakesuki-hime no Mikoto. She is renowned for healing gynecological disorders.

The pines of Karasaki have been celebrated in Japanese poetry and art for centuries. The first-generation tree is mentioned in the eighth-century poetry collection *Man'yōshū*. The second-generation pine is depicted in one of the iconic *Eight Views of Ōmi* by Utagawa Hiroshige (1797–1858) and in a haiku poem written by Matsuo Bashō (1644–1694) which is inscribed on a wooden plaque near the large, third-generation tree that stands behind the shrine.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

唐崎神社

奈良から船でやってきた大己貴命が神であることを明かし、流浪人・ことのみたちうしまるを説得して社殿を建てさせ、神官とした伝説の場所である。その神社が現在の日吉大社西本宮である。692年に創建された唐崎神社は、牛丸の妻である和気媛命を祀っている。婦人病を治すことで有名である。

唐崎の松は、古くから日本の詩歌や芸術の中に謳われてきた。8世紀の歌集『万葉集』には一代目の松が詠まれている。二代目の松は、歌川広重（1797-1858）の近江八景のひとつに描かれ、松尾芭蕉（1644-1694）の俳句にも詠まれ、神社裏の三代目の大木のそばにある木札には、この松が刻まれている。

006-006

Karasaki Jinja Shrine

日吉大社

【タイトル】 唐崎神社/唐崎神社(唐崎の松)

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Karasaki Jinja Shrine

Karasaki is a small promontory on the western shore of Lake Biwa, not far from where the imperial court was located from 667 to 672. According to legend, the deity Ōnamuchi landed ashore here one day in a fishing boat, having traveled from Miwa (in present-day Nara Prefecture). He asked Koto no Mitachi Ushimaru, a warrior who lived on Karasaki, where he could find a suitable dwelling place. Ushimaru told Ōnamuchi that the lapping of the waves sounded like the murmuring of verses from the *Nirvana Sutra*. Ōnamuchi sailed out into the lake to hear the waves for himself, and when he returned, he flew his boat up into the boughs of a large pine tree. Seeing this miracle, Ushimaru suggested that Ōnamuchi would find a suitable location on Mt. Hiei, and that he, Ushimaru, would follow him there, build a shrine for him, and serve as the shrine's priest. The hall built by Ushimaru was the first structure to enshrine a deity on Mt. Hiei. Other deities were already believed to dwell on the mountain, but they were enshrined in natural objects such as large boulders or trees. Over the next 1,400 years, that first hall was rebuilt many times and is now the main sanctuary of Nishi Hongū (Western Main Shrine) and part of Hiyoshi Taisha Shrine.

Karasaki Jinja Shrine was established in 692 on the Karasaki promontory. Although it is separate from Hiyoshi Taisha, it has a special relationship to the shrine as the site of the divine revelation that led to Hiyoshi Taisha's founding.

Karasaki Jinja enshrines Ushimaru's wife, Wakesuki-hime no Mikoto. She is known for healing gynecological disorders and sexually transmitted diseases. The shrine precincts are the location for one of the closing events of the three-day Sannō Festival in April. During this event the seven Hiyoshi Taisha *mikoshi* portable shrines are brought to Karasaki Jinja by barge, reenacting the arrival of Ōnamuchi.

Behind the shrine stands a remarkable pine tree. It is believed to be the third-generation descendant of the tree from whose branches Ōnamuchi spoke to Ushimaru. The pines of Karasaki appear across Japanese art and poetry, including in a poem from the eighth-century collection *Man'yōshū* and in the works of the haiku poet Matsuo Bashō (1644–1694). Bashō's poem about the second-generation pine is inscribed on both a stone stele and a wooden plaque posted near the current tree. The second-generation tree was also the subject of one of the iconic *Eight Views of Omi* by Utagawa Hiroshige (1797–1858).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

唐崎神社

唐崎は琵琶湖の西岸にある小さな岬で、667年から672年まで朝廷が置かれた場所に近い。De 伝承によると、ある日、三輪（現在の奈良県）からやってきた大己貴神が釣り船でこの地に降り立った。そして、唐崎に住む流浪人・ことのみたちうしまるに適当な住処はないかと尋ねた。うしまるは、波の音が涅槃経の一節のように聞こえることを告げた。そこで大海原に出て波の音を聞いてみると、大きな松の木の上に舟が飛び上がった。この奇跡を見たうしまるは、大海人皇子が比叡山に適当な場所を見つけ、そこに自分もついでに祠を建て、神官となることを提案した。うしまるが建てたお堂は、比叡山で初めて神を祀る建造物であった。比叡山には他にも神が宿っていると信じられていたが、それらは大きな岩や木など自然のものに祀られていた。その後、1400年の間に何度も建て替えられ、現在は西本宮の本殿と日吉大社の社殿の一部になっている。

唐崎神社は、692年に唐崎の岬に創建された神社である。日吉大社とは別の神社だが、日吉大社創建のきっかけとなった神の啓示を受けた場所であり、特別な関係にある。

唐崎神社は、うしまるの妻であるわけすきひめのみことを祀っている。婦人病や性病を治すことで知られる。境内では、4月の3日間の山王祭を締めくくる行事のひとつが行われる。日吉大社の7基の神輿が舁（はしけ）で唐崎神社に運ばれ、大己貴（おおなむち）の降臨を再現する。

神社の裏手には、ひときわ目を引く松の木が立っている。この松は、大己貴がうしまるに語りかけた松の三代目の子孫といわれている。唐崎の松は、万葉集の歌や松尾芭蕉（1644-1694）の句など、日本の美術や詩の中に登場する。芭蕉の二代目松の句は、石碑に刻まれ、現在の松の木のそばに掲げられた木札にも記されている。また、歌川広重（1797-1858）の代表的な近江八景のひとつにも二代目の木が選ばれている。

006-007

Great Golden Rock

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/牛尾神社・三宮神社（奥宮）、金大巖

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Great Golden Rock

This rock reflects the light of the morning sun, and its golden glow is visible from the town below. It was originally considered the abode of the deity Hachiōji, but the deity presently enshrined in the rock is Ōyamakui no kami. The boulder near the road was once part of the Great Golden Rock; it broke off during an earthquake in 1662.

Sannomiya Shrine and Ushiogū Shrine

The deities Kamotamayorihime and Ōyamakui are enshrined in Sannomiya Shrine (left) and Ushiogū Shrine (right), respectively. These mountaintop deities are thought to be violent manifestations of their gentle counterparts enshrined below.

Kamotamayorihime is enshrined at Jugegū Shrine which is located within the Higashi Hongū (Eastern Main Shrine) compound, and Ōyamakui is in the main sanctuary of Higashi Hongū.

These two deities are believed to be betrothed, but they meet only once a year at the Higashi Hongū during the Sannō Festival. Their *mikoshi* portable shrines are carried up the mountain on the first Sunday in March, marking the beginning of a symbolic courtship period. The *mikoshi* remain inside these two shrines until April 12, and lanterns on the exterior of both shrines are lit during this period.

Both shrines are designated Important Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

金大巖

朝日を反射して黄金色に輝くこの岩は、下の町からも見える。もともとは八王子神の住処とされていたが、現在は大山咋神がまつられている。道路近くの巨石は、もともと金岩の一部だったが、1662年の地震で割れたという。

三宮神社・牛尾宮神社

三宮神社（左）には賀茂玉依姫命、牛尾宮神社（右）には大山咋神がまつられている。山頂の神々は、山麓の穏やかな神様の激しい姿を現したものと考えられている。賀茂玉依姫は東本宮の樹下宮に、大山咋神は東本宮の本殿に祀られている。

この二神は夫婦神とされているが、年に一度のみ、東本宮の山王祭で渡御する。3月の第1日曜日には、両神社の神輿が山を登り、求婚の儀式が始まる。神輿は4月12日まで両神社に鎮座し、この間両神社の外壁に提灯が灯される。

両社とも重要文化財に指定されている。

006-008

Ōmiya Bridge

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/大宮橋

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Ōmiya Bridge

This bridge crosses the Ōmiya River on the approach to Nishi Hongū (Western Main Shrine), which was formerly called Ōmiya Shrine. The river plays an important role in the founding legend of the shrine. According to the legend, the warrior Koto no Mitachi Ushimaru built a shrine here in the seventh century and became its priest after a fateful meeting with the deity, Ōnamuchi. He erected the shrine along the river about five kilometers northwest of Karasaki where the ripples of the water were said to murmur passages from the *Nirvana Sutra*. Today, a canal surrounds Nishi Hongū to ensure the sound of the running water will always be heard.

The current granite bridge was built in 1669 and is patterned faithfully on an earlier wooden bridge. It even replicates the mortise-and-tenon joinery in the columns although they are no longer structurally necessary. Two other bridges cross the river downstream. All are designated Important Cultural Properties, but Ōmiya Bridge is the largest and most elaborate of the three.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大宮橋

西本宮（旧称：大宮神社）の参道、大宮川を渡る橋。この川は、西宮神社の創建伝説に重要な役割を担っている。7世紀、流浪人・ことのみたちうしまるがこの地に社を建て、大己貴神と運命的な出会いを果たし、神官となったという。唐崎の北西約5キロの川沿いに社殿を建て、水の波紋が涅槃経の一節を奏でるという。現在、西本宮の周囲には水路が巡らされ、水の流れる音が絶えることはない。

現在の花崗岩の橋は1669年に架けられたもので、以前の木橋を忠実に模しており、構造上不要になった柱もほぞ穴を再現している。下流には他に2つの橋が架かっている。いずれも重要文化財に指定されているが、大宮橋は其中でも最も大きく、精巧に作られている。

【タイトル】 日吉大社/日吉大社概要

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Hiyoshi Taisha Shrine

The Hiyoshi Taisha shrine complex contains forty individual shrines in total—seven major shrines and thirty-three lesser shrines. The first record of religious practice in the area is found in the eighth-century chronicle *Kojiki*, which notes that the deity Ōyamakui no kami dwelled in a rock near the summit of Mt. Hachiōji, a foothill along the eastern side of Mt. Hiei. Over time, many more deities came to be enshrined in what was once the largest shrine complex in Japan.

Syncretism

For centuries, religious practice on Mt. Hiei was a syncretic fusion of Buddhism and Shinto. Hiyoshi Taisha has a long association with Enryakuji Temple, which was established in 788 and is the head temple of Tendai Buddhism. The shrines of Hiyoshi Taisha gradually became part of the Enryakuji religious complex and remained so until 1868.

Enryakuji was one of the largest and most influential Buddhist institutions in Japan until 1571, when the warlord Oda Nobunaga (1534–1582) had the entire temple complex burned to the ground, including the shrines of Hiyoshi Taisha. Nobunaga's successor Toyotomi Hideyoshi (1537–1598) supported the rebuilding of the seven major shrines, and all were completed by 1601.

Sannō Ichijitsu Shinto

The buildings of Hiyoshi Taisha were not the only things that had to be reconstructed after the fire. All the shrine records were lost, and only one priest survived who still remembered the traditional rites.

After the fire, the shrine became closely associated with *Sannō ichijitsu* Shinto practices, which were created by the influential monk Tenkai (1536–1643). Tenkai oversaw the rebuilding of Enryakuji after the temple was destroyed in 1571 and used *Sannō ichijitsu* as the foundation for the burial and deification rites of Tokugawa Ieyasu (1543–1616), the first shogun of the Edo period (1603–1867). The Tōshōgū Shrine at Hiyoshi Taisha was the prototype for the magnificent Tōshōgū Shrine in Nikkō where Ieyasu is enshrined.

Today, Hiyoshi Taisha is the head of nearly 4,000 shrines throughout Japan.

Hiyoshi Taisha Today

Many features of present-day Hiyoshi Taisha—from its physical placement and hierarchy of major deities to its rites, including the Sannō Festival—were reconfigured beginning in the latter half of the nineteenth century. An 1868 government edict ordered the separation of Shinto and Buddhism, leading to the removal of Buddhist objects from shrines throughout the country. At Hiyoshi Taisha, more than 1,000 items, including statues of Buddhist deities, bells, and sutra scrolls, were destroyed on April 1, 1868.

The policy of Shinto-Buddhist separation also changed the hierarchy of the deities at Hiyoshi Taisha. During the centuries of combined Buddhist and Shinto worship, Shinto deities were believed to be manifestations of Buddhist deities. The Buddhist aspect often determined the placement and hierarchies of deities. After the separation edict was issued, four of the seven primary deities at Hiyoshi Taisha were moved to reflect a new hierarchy of deities independent of their previous Buddhist counterparts. This reorganization of deities also resulted in a reimagining of the Sannō Festival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日吉大社

日吉大社には、7つの大社と33の小社の合計40の神社がある。古事記には、比叡山東麓の八王子山の山頂近くの岩に大山咋神が宿ると記されているのが最初の記録である。その後、多くの神々が祀られるようになり、日本有数の神社群となった。

異種混交

比叡山では何世紀もの間、仏教と神道が融合した宗教が行われてきた。日吉大社は、788年に創建された天台宗の総本山である延暦寺と長い関わりを持っている。日吉大社の社殿は次第に延暦寺の宗教施設の一部となり、1868年まで延暦寺の宗教施設として存続した。

1571年、織田信長（1534-1582）が日吉大社を含む伽藍をすべて焼き払うまで、延暦寺は日本で最大かつ最も影響力のある仏教施設の一つであった。信長の後継者である豊臣秀吉（1537-1598）は、主要な7つの神社の再建を支援し、1601年までにすべての神社を完成させた。

山王一実神道

火災で再建しなければならなかったのは、日吉大社の建物だけではありません。神社の記録はすべて失われ、祭祀を覚えている神官も一人しか残っていなかった。

火災後、この神社は天海僧正（1536-1643）によって創始された山王一実神道と密接な関係を持つようになった。天海は、1571年に焼失した延暦寺を再建し、徳川家康（1543-1616）の埋葬と神葬のために山王一実を使用したのである。日吉大社の東照宮は、家康公を祀る壮大な日光東照宮の原型となった。

現在、日吉大社は全国に約4,000社ある神社の総本社となっている。

現在の日吉大社

現在の日吉大社は、その配置や主祭神の序列、山王祭などの儀式に至るまで、19世紀後半に再編成されたものである。1868年の神仏分離令により、全国の神社から仏具が撤去された。日吉大社では、1868年4月1日に仏像、鐘、経巻など1,000点余りが焼失している。

仏教からの分離は、日吉大社の神々の序列にも変化をもたらした。神仏習合の時代には、神道の神は仏教の仏の化身と信じられており、仏教的な側面から神々の配置や改装を決めることが多かった。日吉大社では、神仏分離令が出された後、七柱の主祭神のうちの四柱が移され、それまでの仏教から独立した新しい神格体型が形成された。この神々の再編成は、山王祭を再構築することにもなった。

006-010

Sannō Festival

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/西本宮

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Sannō Festival

The Sannō Festival is held every spring against a backdrop of cherry blossoms at Hiyoshi Taisha Shrine. It is a celebration of birth and new life through the veneration of the shrine's seven main deities.

The festival begins on the first Sunday in March, when the *mikoshi* portable shrines for the deities Kamotamayorihime and Ōyamakui no kami are carried up Mt. Hachiōji to Sannomiya Shrine and Ushiogū Shrine. More than a month later, on the evening of April 12, the deities are carried back down the steep path to Higashi Hongū (Eastern Main Shrine).

The deities Kamotamayorihime and Ōyamakui are considered to be husband and wife. They dwell separately in their own shrines and only meet once a year during this festival. After the deities arrive at the worship hall of the Higashi Hongū, the poles of their *mikoshi* are tied together, symbolizing the physical union of the couple. During the night, it is believed a divine conception occurs.

The next morning (April 13), the two *mikoshi* are transported to a nearby hall called the Ōmandokoro along with two more *mikoshi* bearing the deities of Higashi Hongū and Jugegū Shrine. Celebratory events are held throughout the day in anticipation of the imminent birth, including a flower parade, an offering of tea grown in Hiyoshi Taisha's sacred tea field, and the presentation of gifts from worshippers, many of which are children's toys.

That evening, all four *mikoshi* are rocked back and forth with great energy and vigor for about two hours, symbolizing the labor of Kamotamayorihime. Finally, upon a signal, the poles of all four *mikoshi* are slammed forward, indicating the birth. The *mikoshi* are then carried at breakneck speed to Nishi Hongū (Western Main Shrine), where they join the *mikoshi* of the other three shrines.

On the following day (April 14), Buddhist monks from Enryakuji Temple on Mt. Hiei visit Hiyoshi Taisha. The monks place offerings before Nishi Hongū, and the chief abbot recites the *Heart Sutra*.

During the afternoon, a huge *sakaki* tree branch is pulled up the road to Hiyoshi Taisha, symbolizing the arrival of Ōnamuchi, the deity of Nishi Hongū. The seven *mikoshi* then depart the shrine precincts for the shore of Lake Biwa, where they are carried by barge to nearby Karasaki Jinja Shrine. After a brief sojourn there, the *mikoshi* wind their way through the local neighborhoods on their return to Hiyoshi Taisha. In the evening, the *mikoshi* are all returned to their storehouses at their respective shrines.

This series of events is the culmination of the efforts of hundreds of local people, and serves to maintain and strengthen community ties, in addition to celebrating the deities of Hiyoshi Taisha and a heavenly birth.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

山王祭

毎年春、日吉大社の桜を背景に開催される「山王祭」。日吉大社の七柱の主祭神を崇敬し、誕生と新生を祝う祭りである。

祭りは3月の第1日曜日に、賀茂玉依姫神と大山咋神の神輿が八王子山から三宮神社と牛尾宮神社に担ぎ込まれるところから始まり、それから1ヶ月余り経った4月12日の夜、再び険しい道を下って東本宮に戻る。

賀茂玉依姫と大山咋神は夫婦とされている。それぞれの神社に別々に祀られ、年に一度、この祭りの時だけ会うことができる。東本宮の拝殿に到着すると、神輿の竿が結ばれ、夫婦の絆が象徴される。その夜、神が宿ると信じられている。

翌朝（4月13日）、2基の神輿は、東本宮と樹下宮の神輿と一緒に近くの大政所と呼ばれるお堂に運ばれる。この日は、花傘巡行、日吉大社の茶畑で栽培された茶の奉納、参拝者からのプレゼント（多くは子供のおもちゃ）の贈呈など、誕生を前にした祝賀行事が終日行われる。

その夜、賀茂玉依姫の労苦を象徴するように、約4基の神輿が約2時間にわたって勢いよく前後に揺らされる。そして、合図とともに4基の神輿の棹を前に打ち出し、出産を告げる。その後、神輿は猛スピードで西本宮に運ばれ、他の3つの神社の神輿と合流する。

翌14日には、比叡山延暦寺の僧侶が日吉大社に参拝する。西本宮本殿の前で供物を捧げ、住職が般若心経を読み上げる。

午後には、日吉大社への参道を巨大な榊の枝が曳かれ、西本宮の御祭神である大己貴命が到着したことを示す。その後、7基の神輿は琵琶湖畔の唐崎神社に舁（はしけ）で運ばれる。しばらくの間そこで過ごした後、近隣の町並みを巡りながら日吉大社に戻る。夕刻、神輿はすべて各神社の倉庫に戻される。

この一連の行事は、日吉大社の祭神と天寿を祝うだけでなく、地域の絆を維持・強化するために、何百人もの地域住民の努力の結晶である。

006-011

Great Golden Rock, Sannomiya Shrine, and Ushiogū Shrine

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/牛尾神社・三宮神社（奥宮）、金大巖

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Great Golden Rock, Sannomiya Shrine, and Ushiogū Shrine

The boulder near the summit of Mt. Hachiōji was named the “Great Golden Rock” because of the way it glows in the morning sun. The name first appears in the eighth-century chronicle *Kojiki*. Originally, the rock was the abode of the deity Ōyamakui no kami, and it is considered the first place where a deity was enshrined within the Hiyoshi Taisha shrine precincts. During an earthquake in 1662, a large piece of the rock face broke away and rolled down the mountain to its current location near the road that leads up to the summit of Mt. Hachiōji.

Flanking the Great Golden Rock are two shrines built on top of platforms projecting from the side of the mountain, much like Kiyomizudera Temple in Kyoto. The shrines were built in a modified *gongen-zukuri* style, in which both main sanctuary and worship hall are joined under a single roof. The shrines look out over Lake Biwa, and on clear days, Mt. Mikami (nicknamed Ōmi Fuji) can be seen in the distance beyond the lake.

The two shrines are believed to be the dwelling places of the violent manifestations of two deities. Left of the rock is Sannomiya Shrine, where the female deity Kamotamayorihime is enshrined. People pray to her for safe childbirth, the well-being of children, good health, and a long life. To the right is Ushiogū Shrine, where the male deity Ōyamakui is enshrined. People pray to him for the protection of mountains and forests, flood control, civil engineering, and for household health and prosperity. The deities’ gentle counterparts are enshrined in Jugegū Shrine and Higashi Hongū (Eastern Main Shrine), respectively.

These two deities are thought to be betrothed and are brought together once a year during the Sannō Festival, when they are reunited at Higashi Hongū. In preparation for the festival, their portable *mikoshi* shrines are carried up the mountain and placed in these two halls on the first Sunday in March. This marks the beginning of a symbolic “courtship period,” and lanterns on the exterior of each shrine are lit during this time. On the night of April 12, the two *mikoshi* are carried down the mountain at breakneck speed to Higashi Hongū.

Both Sannomiya and Ushiogū are designated Important Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大金岩・三宮神社・牛尾宮神社

八王子山の山頂付近にある巨石は、朝日に照らされて輝くことから「大金岩」と呼ばれるようになった。その名は8世紀の『古事記』に初めて登場する。もともとは大山咋神が祀られており、日吉大社の境内で初めて神を祀った場所とされている。1662年の地震で岩肌が大きく割れ、山を転がって八王子山の山頂に続く道の近くに現在の場所がある。

大金岩の両脇には、京都の清水寺のように、山の側面から突き出た台座の上に建てられた2つの神社がある。この神社は、本殿と拝殿を一つの屋根で結合する「権現造り」という様式を改良したものである。琵琶湖に面し、晴れた日には湖の向こうに三上山（愛称：近江富士）を望むことができる。

この二つの神社は、二神の激しい姿が宿る場所と信じられている。岩の左側にあるのが三宮神社で、女性の神である賀茂玉依姫が祀られている。安産、子宝、無病息災、長寿を祈願する。右側は牛尾宮神社で、男神の大山咋神を祀っている。山林の守護、治水、土木、家内安全、商売繁盛を祈願する。また、樹下宮と東本宮の本殿には、それぞれ穏やかな性格の神様が祀られている。

この二神は夫婦神とされ、年に一度、山王祭で東本宮の拝殿に渡御する。この祭りのために、3月の第1日曜日に神輿が山から運ばれ、2つの本殿に納められる。この時期、それぞれの神社の外壁に提灯が灯され、「求愛の期間」が始まる。4月12日の夜、2基の神輿は猛スピードで山を下り、東本宮へと運ばれる。

三宮神社と牛尾宮神社はともに重要文化財に指定されている。

【タイトル】 日吉大社/東本宮

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Seven Shrines

Hiyoshi Taisha's seven major shrines are divided into two groups, one clustered in the west portion of the shrine precincts and the other in the east. The names of the shrines and identities of the deities enshrined within have changed on several occasions over the centuries. The current configuration of shrine names and deities dates from approximately 1869, following an edict to “clarify” religious sites by separating Shinto from Buddhism. Shinto and Buddhism were previously practiced together at religious sites throughout Japan, including at Hiyoshi Taisha. Under the separation edict, Buddhist practices were banned, and Buddhist objects were removed from Hiyoshi Taisha and destroyed, leading to a reconfiguration of the deities and a reimagining of ritual practices.

The Number Seven

The major shrines are not the only things at Hiyoshi Taisha that total seven. There are seven steps in each of the staircases of the main sanctuaries, and all the *komainu* guardian dogs in front of the halls have seven tails.

According to Tendai Buddhism, the seven shrines of Hiyoshi Taisha are a manifestation of the seven stars that make up the Big Dipper constellation. The Big Dipper is thought to determine the life spans of emperors and all other sentient beings.

Western Cluster

The western cluster contains the highest-ranking shrine at Hiyoshi Taisha, Nishi Hongū, along with two smaller shrines: Usagū Shrine and Shirayamahime Shrine. The

area is the main location for ceremonies held on the last day of the Sannō Festival. Monks from Enryakuji Temple on Mt. Hiei visit Nishi Hongū to present offerings, and the chief abbot recites the *Heart Sutra* before the Hiyoshi Taisha deities.

Nishi Hongū (Western Main Shrine)

Until 1868, this shrine was called Ōmiya Shrine, or “great shrine,” and it is still the highest-ranking shrine at Hiyoshi Taisha. The deity enshrined in the main sanctuary is Ōnamuchi, also known as Ōkuninushi, the leader of the earthly deities and a descendant of Ōyamakui no kami, the deity enshrined in Higashi Hongū (Eastern Main Shrine). Ōnamuchi, who has been venerated in the Yamato region (now Nara Prefecture) since the seventh century, has strong ties to the ancient Japanese court and is considered one of the divine protectors of Japan.

The main sanctuary is designated a National Treasure.

Usagū Shrine

Usagū Shrine is located just to the east of Nishi Hongū. The deity venerated there is Tagorihime, the wife of Ōnamuchi, the deity enshrined in Nishi Hongū. The same Tagorihime is enshrined at Usa Hachimangū Shrine in Oita Prefecture, where she is venerated along with her two sisters. All three are children of the deities Susanoo and Amaterasu.

Tachibana orange trees, which are considered a symbol of perpetual youth and longevity, stand to either side of the main sanctuary. A *tachibana* tree paired with a cherry tree is a customary decoration among the tiered rows of dolls displayed on Girls’ Day (March 3).

Shirayamahime Shrine

Just east of Usagū Shrine is Shirayamahime Shrine, where the deity Kukurihime is venerated. Kukurihime is the deity of Mt. Hakusan on the border between Gifu and Ishikawa Prefectures. She appears in the eighth-century chronicle *Nihon shoki* as the intermediary during a clash between the creator deities Izanagi and Izanami.

Eastern Cluster

The eastern cluster comprises four shrines: two near the summit of Mt. Hachiōji and two on the plain below. The deities enshrined are a divine couple who have gentle and violent manifestations. The violent manifestations are enshrined on the mountaintop, while the gentle versions are in the shrines below. The two deities are considered betrothed, and their union, along with the birth of their divine child, is the focus of the Sannō Festival held in April.

Higashi Hongū (Eastern Main Shrine)

Higashi Hongū is the second-highest-ranking shrine at Hiyoshi Taisha. It is sometimes called by its earlier name, Ninomiya, meaning “second shrine.” The deity enshrined in the main sanctuary is the gentle manifestation of Ōyamakui, an ancestor of the deity Ōnamuchi.

The main sanctuary is designated a National Treasure.

Ushiogū Shrine

Ushiogū Shrine is located near the summit of Mt. Hachiōji. The enshrined deity is the violent manifestation of Ōyamakui, whose gentle manifestation is enshrined in Higashi Hongū.

Jugegū Shrine

Jugegū Shrine is located on a site that was considered sacred long before shrine structures were ever built on the mountain. The main sanctuary was built over a natural spring at the base of Mt. Hachiōji. The mountain itself is considered a *shintaisan* (a mountain where a deity dwells), and the deity Hachiōji is thought to reside in a rock near the summit.

The deity enshrined in the main sanctuary of Jugegū, however, is not Hachiōji but the gentle manifestation of Kamotamayorihime, a daughter of the chieftain of the Kamo

shrines in Kyoto and mother to Kamo Wakeikazuchi, Ōyamakui's son.

Sannomiya Shrine

Sannomiya Shrine is located near the summit of Mt. Hachijōji. The enshrined deity is the violent manifestation of Kamotamayorihime.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

7つの神社

日吉大社の七つの主要な神社は、境内の西側と東側に分かれている。社名や祭神は幾度か変遷してきた。現在の社名と祭神は、1869年頃、神仏分離令により宗教施設が明確化されたことに由来する。それまでは、日吉大社をはじめ、日本各地の宗教施設で神仏習合が行われていた。分離令により、仏教の信仰が禁止され、日吉大社から仏具が撤去・破壊されたため、祭神が再編成され、祭祀のあり方も見直されたのである。

7という数字

日吉大社で合計7つであるのは、主要な神社だけではない。本殿の階段はそれぞれ7段であり、本殿前の狛犬はすべて7本の尾を持つ。

天台宗では、日吉大社の7社は北斗七星を構成する7つの星の現われであるとする。北斗七星は、天皇や衆生の寿命を決めると考えられている。

西側

日吉大社の最高位である西本宮と、宇佐宮と白山姫宮という小さな神社が2つある。山王祭の最終日に行われる祭典の中心地である。比叡山延暦寺の僧侶が西本宮を訪れ、供物を捧げ、住職が日吉大社の神前で般若心経を読誦する。

西本宮

1868年までは大宮神社と呼ばれ、現在も日吉大社で最高位の神社である。本殿の祭神は、東本宮の祭神である大山咋神の後裔で、地上の神々の総帥である大己貴命である。7世紀頃から大和地方（現在の奈良県）で崇拝されてきた大己貴命は、朝廷との結びつきが強く、日本の守護神の一人とされている。

本殿は国宝に指定されている。

宇佐宮神社

西本宮のすぐ東にある神社。祭神は西本宮に祀られている大己貴命の妻、田心姫神。大分県の宇佐八幡宮にも同じ田心姫神が祀られており、二人の姉妹と一緒に祀られている(3人ともスサノオとアマテラスの子供である)

本殿の両脇には、不老長寿の象徴とされる橘の木が立っている。3月3日のひな祭りに飾られる雛段には、桜と対になった橘が飾られるのが通例となっている。

白山姫神社

宇佐宮の東にある白山姫神社は、ククリヒメを祭神とする神社。ククリヒメは、岐阜県と石川県の県境にある白山の神である。8世紀の日本書紀に、イザナギとイザナミの創造神対決の仲介役として登場する。

東側

東側は八王子山頂付近に2社、下に2社の計4社からなる。祀られているのは、穏やかな姿と激しい姿を持つ神々の夫婦である。山頂には荒々しい姿を、下の神社には穏やかな姿をお祀りしている。この二神は夫婦神とされ、四月の山王祭では二神の渡御と、神の子の誕生を祝う。

東本宮

日吉大社で2番目に格の高い神社。旧称の二宮と呼ばれることもある。本殿に祀られているのは、大己貴命の祖先である大山咋神の穏やかな姿である。

本殿は国宝に指定されている。

牛尾宮神社

八王子山の山頂にある神社。祀られている御祭神は大山咋の荒々しい姿である。大山咋の穏やかな姿は、東本宮に祀られている

樹下宮神社

樹下宮は、山に社殿が建てられる以前から神聖視されていた場所にある。本殿は、八王子山麓の湧水を利用して建てられた。八王子山は神が宿る山とされ、山頂付近の岩に八王子神が宿るとされる。

しかし、樹下宮の本殿に祀られているのは八王子ではなく、京都の賀茂神社の総鎮守の娘で、大山咋神の子である賀茂別雷神の母、賀茂玉依姫の優しい姿である。

三宮神社

三宮神社は八王子山の山頂付近にある。祭神は賀茂玉依姫の荒々しい姿である。

006-013

Ōmiya Bridge, Ninomiya Bridge, and Hashirii Bridge

日吉大社

【タイトル】 日吉大社/日吉三橋：大宮橋、走井橋、二宮橋

【想定媒体】 Web

できあがった英語解説文

Ōmiya Bridge, Ninomiya Bridge, and Hashirii Bridge

The Ōmiya River marks the southern border between Hiyoshi Taisha Shrine and the outside world. The three historic bridges that span the river—Ōmiya Bridge, Ninomiya Bridge, and Hashirii Bridge—mark the entrances to the sacred area.

All three were originally made of wood, but they were replaced with granite structures in 1669. The granite replacements faithfully replicate the original wooden bridges. All three bridges were collectively designated Important Cultural Properties in 1917.

Ōmiya Bridge

15.3 meters long, 6.7 meters wide

This is the largest and most elaborate of the three bridges at Hiyoshi Taisha. It stands on the approach to Nishi Hongū (Western Main Shrine), formerly called Ōmiya Shrine. It is used in many of Hiyoshi Taisha's festivals.

Ninomiya Bridge

15.3 meters long, 5.7 meters wide

This bridge stands on the main approach to Higashi Hongū (Eastern Main Shrine), formerly called Ninomiya Shrine. It is now used only during the Sannō Festival in April.

Hashirii Bridge

14.5 meters long, 4.6 meters wide

Unlike the other two, this simple bridge has neither railings nor decorative elements. It runs parallel to Ōmiya Bridge, only a few meters away, and is used by those who require purification before entering the shrine grounds, especially during important shrine rituals and events. It takes its name from Hashirii spring, which is located near the northern foot of the bridge. Purification rites are held in the river near the bridge at the beginning of the Sannō Festival.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大宮橋・二宮橋・走井橋

日吉大社と外界との南の境界は大宮川である。この川に架かる大宮橋、二宮橋、走井橋の3つの橋が、神域への入口となる歴史的な橋である。

いずれも当初は木造であったが、1669年に花崗岩製に改修された。花崗岩の橋は、木造の橋を忠実に再現している。1917年に3橋がそろって重要文化財に指定された。

大宮橋

長さ15.3メートル、幅6.7メートル

日吉大社の三橋のうち、最も大きく、最も精巧な橋。西本宮（旧称：大宮神社）の参道に架かっている。日吉大社の祭礼の多くで使用される。

二宮橋

長さ15.3メートル、幅5.7メートル

東本宮（旧二宮神社）の表参道に架かる橋。現在は4月の山王祭の時のみ使用される。

走井橋

長さ14.5メートル、幅4.6メートル

他の2つの橋とは異なり、手すりも装飾もないシンプルな橋である。大宮橋と平行して架かっており、神事や行事の際、境内に入る前にお祓いをするために利用される。橋の北詰にある「走井泉」がその名の由来である。山王祭の始めには、橋の近くの川で清めの儀式が行われる。

地域番号	007	協議会名	人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会	
解説文番号	タイトル		ワード数	想定媒体
007-001	人吉について		～250	WEB
007-002	人吉の歴史について		～250	WEB
007-003	人吉城		～250	WEB
007-004	青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について		～250	看板
007-005	願成寺		～250	WEB
007-006	永国寺		～250	WEB
007-007	観蓮寺		～250	WEB
007-008	三十三観音巡り		～250	WEB
007-009	球磨川 / 新しいリバーアクティビティ		～250	WEB
007-010	球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵		251～500	WEB
007-011	球磨焼酎 / 焼酎の楽しみ方		～250	WEB パンフレット
007-012	鍛冶屋町通り / 城下町の歴史、鍛冶屋について		251～500	WEB パンフレット
007-013	青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について		251～500	WEB
007-014	大村横穴群		～250	WEB
007-015	人吉温泉 / 歴史や泉質・効能について		～250	WEB
007-016	青井阿蘇神社 / 三大祭と球磨神楽		～250	看板 WEB
007-017	日本遺産 / 民俗文化と球磨焼酎		251～500	WEB

007-018	球磨川 / 球磨川の交通・輸送の歴史と球磨川くだり	～250	WEB パンフレット
007-019	青井阿蘇神社 / 旧青井家住宅母屋・西蔵・東蔵・門、襖橋（登録有形文化財）	～250	WEB
007-020	日本遺産 / 相良700年のストーリー	～250	パンフレット
007-021	日本遺産 / 仏教美術と三十三観音巡り	～250	パンフレット
007-022	球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵	～250	パンフレット
007-023	鍛冶屋町通り / ウンスンカルタ、味噌醤油・茶	～250	WEB パンフレット

007-001

Hitoyoshi Kuma (Introduction)

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 人吉について

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hitoyoshi Kuma (Introduction)

In the heart of southern Kyushu, the area centered around the city of Hitoyoshi Kuma abounds with historic sites and cultural treasures, and ancient styles of art and architecture survive in its shrines and temples. Buddhist statuary dates from as early as the eighth century. The river and its tributaries are dotted with recreation and leisure spots, where tour operators offer whitewater rafting, wooden rowboat rides, and SUP paddle board experiences. Distilleries in the area carry on rich traditions of rice shochu distillation to produce Kuma Shochu, a single-distillation brand protected by a Geographical Indication (GI). Hitoyoshi Kuma flourished under the rule of the Sagara family between the twelfth and nineteenth centuries, and their legacy can still be felt today in cultural treasures and traditions such as Aoi Aso Jinja Shrine and the biannual Sagara 33 Kannon Pilgrimage.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

人吉について

九州南部の中心にある人吉・球磨エリアには、歴史的な名所や文化財がたくさんあり、伝統的な芸術品や建築物が神社仏閣のいたる所に残っています。仏像などは、18世紀にまで遡ります。川やその支流にはレジャースポットがあちこちに点在しており、旅行会社が急流下り、木造船体験、SUPパドルボード体験などを提供しています。この地域の蔵元は、米焼酎の蒸留という豊かな伝統を受け継いでおり、「球磨焼酎」を作っています。球磨焼酎は、「地理的表示」で保護されている単式蒸留の銘柄です。人吉・球磨は、12世紀から19世紀にかけて、相良家の統治のもとで繁栄しました。相良家の遺産は、青井阿蘇神社や年に2度行われる相良三十三観音巡りなど、文化財や伝統の中に今なお感じられます。

007-002

Hitoyoshi Kuma (History)

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 人吉の歴史について

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hitoyoshi Kuma (History)

Hitoyoshi Kuma is a microcosm of pre-modern Japanese history, ranging from sites that reveal ancient burial practices, to those that tell the story of the rise and fall of the samurai class. Most of the sites are connected with the Sagara family, who ruled this area continuously for nearly 700 years.

Ancient society in the area developed early and burial sites from the Yayoi (ca. 300 BCE–300 AD) and Kofun (ca. 250–552) periods hint of local class hierarchies and the centralization of power. Traditions passed down at Aoi Aso Jinja Shrine date from the Heian period (794–1185), and sites like the Kajiyamachi former blacksmith district and Hitoyoshi Castle are reminders of the rise and fall of samurai culture. Hitoyoshi Kuma's rich history is evident in its sacred sites, Buddhist artwork, Edo-era streetscapes, and recreational activities on the Kuma River.

Many of the historical sites and activities offer insights into the Sagara family and their contributions to the economic and cultural development of the region. The family ruled from the twelfth to the nineteenth century, and their legacy is preserved through regional traditions such as distillation of Kuma Shochu liquor, the biannual Sagara 33 Kannon Pilgrimage, and cultural treasures that include National Treasures and Important Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

人吉の歴史について

人吉・球磨は、古代の埋葬習慣がわかる遺跡から、武家の盛衰を伝えるものまで、近代以前の日本史の縮図が分かるエリアです。ほとんどのスポットは、700年近くもの間この辺りを治めていた相良家にまつわるものです。

人吉・球磨エリアの古代社会は早くから発展し、弥生（ca. 300 BCE–300 AD）時代や古墳（ca. 250–552）時代の墓地遺跡からは、現地の階級や中央集権を想像することができます。青井阿蘇神社で受け継がれている伝統は平安時代（794–1185年）にまで遡るもので、旧鍛冶屋町や人吉城などは侍文化の盛衰を彷彿させます。人吉・球磨の聖なる場所、仏教芸術、江戸時代の町並み、そして球磨川でのレクリエーションアクティビティからは、人吉の豊かな歴史を感じることができます。

史跡やアクティビティの多くは、相良家について、またこの地域の経済・文化の発展に対する相良家の貢献について、知見を与えてくれます。相良家は、12世紀から19世紀にかけて統治しました。その遺産は、球磨焼酎の蒸留、年2回の「相良三十三観音めぐり」、そして文化財（国宝や重要文化財など）といった、この地域の伝統によって保存されています。

【タイトル】 人吉城

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hitoyoshi Castle Site

The stone ramparts with original sections from the late sixteenth century, and the reconstructed parapets, battlements, and gates convey a sense of Hitoyoshi Castle as it appeared between 1589 and 1871. Visitors can explore the grounds, including the Ninomaru (“second enclosure”) complex where there was a palace for the family of the ruling lord. The Ninomaru grounds command unobstructed views of the city and the Kuma River.

The Sagara family ruled Hitoyoshi Kuma for 37 generations, from the late twelfth to late nineteenth century. The castle began as a hilltop fortress that relied on natural topography as its main means of defense and was modified over the centuries. The most significant changes were made by Sagara Nagatsune (1469–1518), the twentieth lord. Nagatsune commissioned defensive stone ramparts, added fortifications, and expanded the castle to connect it to the Hitoyoshi Kuma river.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

人吉城

16世紀からそのまま残っている石でできた城壁、再建された胸壁、狭間胸壁、門などは、人吉城（1589–1871年）の当時の雰囲気を与えています。人吉の相良領主の御殿があった二の丸など、城敷地内を散策することができます。二の丸からは、遮るもののない町と球磨川の景色を見渡すことができます。

相良家は、12世紀末から19世紀末にかけて、37世代にわたって人吉・球磨を治めました。人吉

城は、自然の地形を生かした天然の城壁に守られた丘陵上の要塞として始まり、それから数世紀の間に何度も改築を繰り返してきました。その中でも最も大きな変化は、人吉の第12第当主相良長毎によるものでした。長毎は、石垣工事や物見やぐらの強化を指示し、人吉球磨川に繋がる形で城を拡張しました。

007-004

Aoi Aso Jinja Shrine

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について

【想定媒体】 看板

できあがった英語解説文

Aoi Aso Jinja Shrine

Aoi Aso Jinja dates from 806 and is the oldest extant shrine in the Hitoyoshi Kuma region. Most of the current shrine buildings date from 1610 and are a blend of different architectural styles with some unusual decorative details. These styles and details are used consistently across the structures, creating a distinct aesthetic that can be observed in later shrines throughout southern Kyushu. This consistency of design is uncommon among historic shrines since most shrines include buildings dating from different periods. The romon gate, the haiden worship hall, the heiden and honden halls, and the corridor connecting them are collectively designated a National Treasure.

The Sagara family, who ruled Hitoyoshi Kuma between the twelfth and nineteenth centuries, adopted Aoi Aso Jinja as their tutelary shrine after being appointed to govern the region by the shogun.

The romon gate is one of the shrine's most distinctive buildings. The two-story structure is 12 meters high and has pairs of carved white faces peering out from beneath the eaves at the four corners of its thatched roof. Representing pleasure, anger, sorrow, and joy, they are the only known carvings of their kind in Japan. The transoms of the halls and the romon gate are carved with images of the Twenty-Four Exemplars of Filial Piety from Confucian teachings. The ornamentation is opulent in the style of the Momoyama period (1573–1615) and the design uses elements common in Zen temple architecture of the twelfth and thirteenth centuries.

Aoi Aso Jinja enshrines three deities: Takeiwatatsu-no-Mikoto, the grandson of Jinmu, Japan's first emperor; Takeiwatatsu's wife, Asotsuhime-no-Mikoto; and their child, Hayamikatama-no-Mikoto.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について

青井阿蘇神社は806年に建造されたもので、人吉球磨地方に現存する最古の神社です。この神社の現在の建物のほとんどは、1610年にさかのぼるものですが、いくつかの建築様式を融合したもので、装飾の細部は珍しいものです。青井阿蘇神社の意匠はたいへん統一されており、独特な美学があります。

この美しさは、九州南部一帯にその後建てられた神社にも見ることができます。青井阿蘇神社における建物の統一性は、歴史のある神社には稀なものです。ほとんどの神社では、異なる時代の建物が混在しているからです。楼門、拝殿、幣殿、本殿、およびこれらをつなぐ廊はすべて、国宝に指定されています。

12世紀から19世紀にかけて統治した相良家は、人吉・球磨を統治するよう将軍から任じられた後、この神社を氏神として選びました。

楼門は、この神社の最も特徴的な建築物の一つです。2階建ての楼門は高さ12メートルで、茅葺屋根の四つ角のひさしの下からは、白い鬼の彫刻が顔をのぞかせます。これらは喜怒哀楽を表したもので、この種の彫刻としては日本で唯一知られているものです。各殿と楼門の欄間の彫刻には、儒教的な一連の教えである「二十四孝」が描かれています。その装飾は、華やかな桃山様式（1573～1615年）で、12～13世紀の禅寺建築に一般的な要素が用いられています。

青井阿蘇神社は、3柱の神々を祀っています。3柱の神々とは、日本の初代天皇である神武天皇の男孫である健甕龍（たけいわたつ）、健甕龍の妻である阿蘇津媛（あそつひめ）、およびその子である速甕玉（はやみかたま）です。

007-005

Ganjoji Temple

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 願成寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Ganjoji Temple

The Sagara family governed the Hitoyoshi Kuma region for nearly 700 years, promoting peace and prosperity and successfully navigating the ups and downs of history. Their legacy is preserved at Ganjoji, the Sagara family temple.

The temple was built in 1233 by Sagara Nagayori (1177–1254), founder of the Sagara family. Nagayori had the temple built to the northeast of Hitoyoshi Castle. Temples were often built to the northeast of palaces and castles to protect against ill fortune, since evil was believed to flow from this direction.

Thirty-seven generations of the Sagara family governed the region, and most are buried in the cemetery behind Ganjoji's Main Hall. Paths through the expansive, leafy burial grounds meander past graves marked by stone stupas and miniature pagodas, whose designs differ according to the era.

The Kiyomizu Kannon Hall on the grounds of the temple is the first worship site on the Sagara 33 Kannon Pilgrimage, which was popularized in the Edo period (1603–1867). The pilgrimage includes 35 worship sites dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion. The image of Kannon enshrined in the Kiyomizu Kannon Hall dates from the early seventeenth century and is displayed twice a year during the pilgrimage periods. The statue depicts the deity standing on a lotus flower and wearing an ornate headdress.

Ganjoji houses several other important works, including a Heian-period (794–1185) wooden image of Fudo Myoo (one of Buddhism’s Wisdom Kings), a depiction of Amitabha Buddha from the early Kamakura period (1185–1333), and a Mandala of the Two Realms from the fourteenth century. These are generally displayed only on special occasions.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

願成寺

相良家は、700年近くにもわたって人吉・球磨を治め、平和と繁栄を促し、歴史の栄枯盛衰をうまく生き抜いてきました。その遺産は、相良家の願成寺に残されています。

この寺は、相良家の初代当主である相良長頼（1177～1254年）が1233年に建立した寺です。相良長頼は、願成寺を人吉城の北東側に建造させました。この時代、不運から城を守るため、悪魔がやってくると考えられていた方角である北東（鬼門）側に寺院を建造するのが一般的でした。

この地域は相良家が37代にわたって治めており、そのほとんどが、願成寺本殿裏の墓地に埋葬されています。時代に合わせて変化していった様々な石造りの仏舎利塔や仏塔が並ぶ墓地を過ぎて小道を進むと、緑豊かな広い敷地が広がっています。

境内にある清水観音堂は、江戸時代（1603-1867年）に人気を博した相良三十三観音めぐりの1番目の寺です。三十三観音めぐりでは、観音様を祀った35箇所を巡ります。清水観音堂に納められている観音様は17世紀初期にまで遡るもので、年に2度の観音めぐりの際に展示されます。観音像は、蓮の花の上に立ち、凝った装飾の頭飾りを付けています。

願成寺には、平安時代（794-1185年）の木造不動明王、鎌倉時代（1185-1333年）初頭の白水阿彌陀堂、14世紀の両界曼荼羅など、他にも複数の重要な作品が納められています。これらは、通常、特別な行事の際にのみ展示されます。

【タイトル】 永国寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Eikokuji Temple

Eikokuji is known for tales of ghosts, a picturesque pond, and the events of the famous Satsuma rebellion. The temple belongs to the Soto school of Zen Buddhism and was founded in 1408.

Among Eikokuji treasures is a hanging scroll depicting a ghost-like female figure, with contorted hands and flowing robes, floating against a backdrop of reeds. The spirit is said to have appeared at the temple pond behind the Main Hall to ask for help from the temple's first priest. According to legend, she had been the mistress of a powerful local man and, driven to despair by the man's wife, had drowned herself in a river. Unable to pass into the next life, she had been trapped as a vengeful ghost. The priest is said to have painted the scroll to show the once beautiful woman her new form and to help the ghost on her way. The scroll displayed in the Main Hall is a copy.

The temple pond can be reached through the Main Hall, and visitors are welcome to sit and enjoy the view from the Audience Hall. Flowering plants, such as wisteria and hydrangea, as well as trees like cherry, pine, and maple, reflect the varied colors of the changing seasons in the waters of the pond.

Artifacts from the Satsuma Rebellion are displayed in the Main Hall. These include an artillery shell and a hanging scroll with calligraphy by the famous samurai Saigo Takamori (1828–1877). In 1877, nine years after a new government was established under Emperor Meiji (r. 1868–1912), Saigo led disaffected samurai in a rebellion against the imperial government. The rebels battled the imperial army across Kyushu,

and after failing to take control of the castle in Kumamoto to the north, Saigo retreated to Hitoyoshi Kuma. His army made its headquarters at Eikokuji, staying for 33 days before being driven out by pursuing government forces.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

永国寺

永国寺は、幽霊談、絵に描いたような美しい池、有名な薩西南戦争などで有名です。曹洞宗曹洞禅のお寺で、1408年に建造されました。

永国寺の宝物としては、ねじ曲がった手に流れるような衣をまとった幽霊のような女性が、アシの草を背景に描かれている掛け軸が有名です。この幽霊は、本殿裏の池に表れて、寺の住職に助けを求めたと言われています。伝説によると、その幽霊は地元の権力者の愛人で、その妻によって絶望に追いやられ、川に身を投げました。しかし、来世に生まれ変わることができず、復讐に燃えた幽霊の姿でさ迷うようになりました。住職は、かつて美しかった女性に今の姿を見せて、来世に生まれ変わることができるよう、この掛け軸を描いたと言われています。本殿に展示されている掛け軸は複製です。

寺の池は本殿からアクセス可能で、正院の縁側に座って外の景色を楽しむことができます。池には、藤、アジサイ、桜、松、カエデなど、池を取り囲む草花の移り変わる景色が投影されます。本殿には、西南戦争時の埋蔵品の一部が展示されています。中には、大砲の砲弾や西郷隆盛（1828-1877年）が描いた掛け軸などもあります。明治天皇（1868-1912年）率いる新政府が立ち上げられてから9年後の1877年、西郷隆盛は不満を抱いていた侍たちを率いて、新天皇政府に対して反乱を起こしました。薩摩藩と天皇側は、人吉を含む九州で内戦となり、隆盛は熊本城を奪うことができず、人吉・球磨へと撤退しました。隆盛の軍は、永国寺を本部と定め、33日間粘ったのちに、政府軍により追い返されました。

【タイトル】 観蓮寺

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Murayama Kannon Hall

A carved wood figure of the Thousand-Armed Kannon is permanently displayed in the Murayama Kannon Hall of Kanrenji Temple. The many arms of the bodhisattva represent all-encompassing compassion. The image stands on a lotus flower with three pairs of arms extending forward and numerous others extending from behind the body in a radial pattern. The twelfth-century figure has the soft flowing lines and gentle curves characteristic of the era. The deity is surrounded by carved wooden figures of the Four Heavenly Kings, guardians of the cardinal directions.

Murayama Kannon Hall is the ninth worship site on the Sagara 33 Kannon Pilgrimage, which includes sites in Hitoyoshi and the surrounding towns and villages. It is one of just a few halls on the pilgrimage route to display its image of Kannon to the public all year round. The Thousand-Armed Kannon, the Four Heavenly Kings that surround Kannon, and the hall itself are Designated Cultural Properties.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

観蓮寺

観蓮寺の村山観音堂には、木造の千手観音像が常時展示されています。無数に伸びる腕は、観音様のあらゆるものに対する慈悲心を表しています。観音菩薩様は蓮の花の上に立ち、6本の腕が前方へ、その他無数の腕が身体後方から放射状に延びています。12世紀にまで遡るこの千手観音像は、この時代の特徴である流れるような柔らかい線で表現されています。観音様を取り囲むのは、四方を守る木造の四天王です。

村山観音堂は、人吉・球磨エリア各所にある観音様や周辺の町をめぐる、相良三十三観音めぐりの9番目の寺です。三十三観音巡りのなかでも、一年を通して観音様を展示している数少ない寺の1つです。千手観音、観音様を取り囲む四天王、そしてそれらが納められている本殿は、指定文化財となっています。

007-008

Sagara 33 Kannon Pilgrimage

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 三十三観音巡り

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Sagara 33 Kannon Pilgrimage

The Sagara 33 Kannon Pilgrimage includes 35 worship sites dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion, in the Hitoyoshi Kuma region. The statues are all carved from wood, and some are gilded. They depict Kannon in a wide variety of artistic styles, sometimes seated or standing, with hands clasped in prayer or held in other symbolic poses. The oldest figures date from the Nara period (710–794).

Some of the Kannon images are displayed all year round, but the majority can only be viewed for a few days surrounding the spring and autumn equinoxes. One of the sites in Hitoyoshi to offer year-round viewing is the Murayama Kannon Hall at Kanrenji Temple, the ninth site on the pilgrimage. That Thousand-Armed Kannon is depicted standing on a lotus flower with arms extending forward, as well as reaching out from the body in a radial pattern. The many arms represent Kannon's all-encompassing compassion. The figure dates from the twelfth century and has soft flowing lines characteristic of the era.

The pilgrimage was popularized in the Edo period (1603–1867) and continues today. It is held on the day of the spring equinox and for seven days over the autumn equinox. During the pilgrimage periods, members of the community share food and drinks with their neighbors and with visiting pilgrims.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

三十三観音巡り

三十三観音めぐりでは、観音様を祀った人吉・球磨エリアの 35 箇所を巡ります。観音像はすべて木造で、中には金めっきが施されたものもあります。観音様は、座った姿や立った姿、また合掌しているものなど、様々な芸術的表現により描かれています。最古の像は、奈良時代（710～794 年）にさかのぼります。

観音像のいくつかは一年中開帳されていますが、多くの観音像は、毎年春と秋のお彼岸の数日間のみ見ることができます。人吉で年中見ることができる観音様が納められている寺としては、三十三観音巡りの 9 番目の寺・観蓮寺の村山観音堂が挙げられます。蓮の花の上に立つ千手観音が描かれており、その腕は、前に伸びているものもあれば、身体から放射状に伸びているものもあります。多くの腕は、すべてを包む観音の慈悲を表しています。この像は 12 世紀にさかのぼり、当時の特徴である柔らかな流れる線を有しています。

三十三観音巡りは江戸時代（1603～1867年）に広がり、今日でも行われています。春には春分の日、そして秋には秋分の日を含む7日間にわたって行われます。相良三十三観音めぐりの期間中、地域社会の人々は、近隣の人や訪れる参拝者と飲食物を分かち合います。

【タイトル】球磨川 / 新しいリバーアクティビティ

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

River Activities

Riding rapids in inflatable rafts, approaching the massive stone ramparts of Hitoyoshi Castle on wooden pleasure boats, or perfecting your balance on a guided stand-up paddleboard tour are some of the many ways to experience the scenery and history of the Kuma River.

The river was the heart of the Hitoyoshi Kuma region during the Edo period (1603–1867), facilitating trade and agriculture. Over time, the river has become a destination for recreational activities, from rafting to canyoning. Tour operators in the Hitoyoshi Kuma region offer half- and full-day rafting as well as other river activities. Some packages include lunch, a hot-spring bath, or accommodation. Reservations are generally needed for these activities and can be booked directly through the tour operators. A list of local operators is available on the [Kumagawa Rafting Association](#) website (in Japanese only).

上記解説文の仮訳（日本語訳）

球磨川 / 新しいリバーアクティビティ

空気注入式のゴムボートにのって急流を下り、人吉城の石の城壁を遊覧船で周り、あるいはガイド付きスタンドアップ・パドルボード・ツアーで自分のバランス感覚を高めましょう。球磨川の景色と遺産を楽しく体験する方法はたくさんあります。

江戸時代には、球磨川は売買や農業を可能にした人吉・球磨エリアの活力源でした。時は移り変わり、球磨川は、ラフティングからカヌーまで、レクリエーション・アクティビティの目的地へと発展してい

きました。人吉・球磨エリアのツアー会社は、半日/一日ラフティングツアーや他の川でのアクティビティを案内しています。また、昼食や温泉、宿泊もセットになったパッケージツアーも用意されています。アクティビティや体験には、通常、予約が必要ですが、ツアー会社を通して直接予約することができます。現地のツアー会社一覧については、[球磨川ラフティング協会](#)のホームページで見ることができます（日本語のみ）。

007-010

Kuma Shochu—Distillation and History 人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵

【想定媒体】WEB

できあがった英語解説文

Kuma Shochu—Distillation and History

Shochu is a distilled spirit that was originally made from rice, though it is now also made using sweet potatoes, barley, and brown sugar. Shochu made from rice has been produced in the Hitoyoshi Kuma region since the early sixteenth century. The master distillers of Hitoyoshi Kuma have preserved the traditional production methods and ingredients. They continued to use rice when other distillers were switching to more affordable alternatives in the late Edo period (1603–1867).

What is Kuma Shochu?

Kuma Shochu is a premium shochu brand with protected by a geographical indication (GI). It is a single-distillation spirit made entirely from rice. Only spring water from the Hitoyoshi Kuma region is used for mashing and fermentation, and all phases of distillation and bottling are carried out within Hitoyoshi Kuma. Flavor profiles vary depending on the mash, distillation process, cask aging, and other factors, but most Kuma Shochu can be broadly categorized as light and refreshing (“Light Type”), fruity and floral (“Flavorful Type”), rich and aromatic (“Character Type”), or heavy and full-bodied (“Rich Type”). The alcoholic strength (alcohol by volume, or ABV) can range from 25 to around 44 percent.

How is it made?

The process begins by adding koji mold to rice that has been washed, steamed, and cooled. Koji is a specific type of mold used in the production of miso, soy sauce, sake, and other essential Japanese culinary products. The koji-rice mix is typically left for about three days.

Yeast and water are added to the rice mixture to create a mash. Many distillers use yeast strains developed specifically for Kuma Shochu. The mash is fermented in two stages. Once the first round of fermentation is complete, the mash is topped up with more water and steamed rice. The total fermentation process takes about three weeks and produces an end mash with an alcohol strength (alcohol by volume, or ABV) of about 18 percent. This makes it possible to produce a spirit with 40 percent ABV or higher in a single distillation. By comparison, the mash for Scotch is typically only 7 percent ABV, and the distillation process must be repeated multiple times.

All Kuma Shochu is single distilled using either atmospheric distillation or vacuum distillation. Atmospheric distillation is carried out at regular atmospheric pressure, and the mash is subjected to higher temperatures and boiled for longer periods, resulting in a rich and intense flavor and aroma. Vacuum distillation is performed under reduced pressure to lower the boiling point of the mash and expedite the distillation process, and produces a milder flavor and more delicate aroma. Kuma Shochu was traditionally distilled at atmospheric pressure over a wood fire using a wooden barrel-like still.

Kuma Shochu is typically matured for six months after distillation to allow the aroma and flavor to stabilize. Some distillers create more complex flavor profiles by maturing their shochu in casks, such as those that have been used for sherry.

How can I learn more?

There are 27 distilleries in Hitoyoshi Kuma, each with its own distinct lineup of Kuma Shochu. Many offer tours (reservations required), and some include tastings.

Information about the distilleries and more is available at [Kuma Shochu](#), the official website of the Kuma Shochu Makers' Association.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵

焼酎とは、本来米から作られる蒸留酒ですが、今ではサツマイモ、麦、黒糖からも作られています。人吉球磨地方では、16世紀初めから、米で焼酎がつくられてきました。人吉・球磨エリアの蔵元は、焼酎の伝統的製法を守ってきました。他の蔵元が江戸時代（1603-1867年）終わり頃により手ごろな原料への切り替えを行っていく中、人吉・球磨エリアの蔵元は米の使用を続けました。

球磨焼酎とは？

球磨焼酎は、地理的表示（GI）で保護されている高級焼酎ブランドです。米だけを使って、単式蒸留機で作られた焼酎です。製麹と発酵には人吉・球磨エリアの湧き水のみが使用され、蒸留と瓶詰めすべての工程は、人吉・球磨地域内で行われています。風味は、もろみ、蒸留工程、樽熟成などの要因に左右されますが、多くの球磨焼酎は、軽くてすっきり（「ライトタイプ」）、フルーティで華やかな香り（「フレーバータイプ」）、芳醇で香り高い（「キャラクタータイプ」）、熟成のコク（「リッチタイプ」）の、大きく4種類に分類することができます。アルコール度数（ABV（アルコール含有量））は、25～45パーセントのものまで幅広く存在します。

製法は？

洗浄、蒸し、冷却を施した米に麹を加えることから、その工程は始まります。麹とは、味噌、醤油、酒、その他日本の料理に欠かせない調味料を作る際に用いられる特殊な菌です。麹と米を混ぜたものは、通常、3日ほど寝かせます。

それから酵母と水を加えて、もろみができます。多くの蔵元では、球磨焼酎専用に開発された酵母菌株が用いられています。もろみは、2段階で発酵させます。一次発酵が終わると、もろみに水と蒸した米をさらに加えます。3週間かけて発酵の全工程を終えると、アルコール度数（ABV（アルコール含有量））約18%のもろみが仕上がります。これにより、単式蒸留でABV40%以上の焼酎を製造することが可能になります。例えば、スコッチ用のもろみのABVは7%しかなく、蒸留工程を何度も繰り返す必要があります。

球磨焼酎はすべて、常圧蒸留または真空蒸留による単式蒸留が用いられます。常圧蒸留では常圧で蒸留が行われ、もろみを高温で長時間ゆでることで、濃厚な味と香りが生まれます。一方の真空蒸留では、減圧によりもろみの沸点を低くし、蒸留工程を短縮することで、優しい風味と繊細な香りが生まれます。従来、球磨焼酎は、木製樽のような蒸留器を使って、炭火により常圧で蒸留されていました。

球磨焼酎は、通常、蒸留後6か月間貯蔵・熟成させることで、風味を安定させます。一部の蔵元では、シェリー酒などに使われた樽で焼酎を熟成させることで、より複雑な風味を生んでいます。

もっと詳しく教えてほしい？

人吉・球磨エリアには27の蔵元があり、それぞれが独自の球磨焼酎のラインナップを提供しています。多くの蔵元では、予約によりツアーに参加することができ、試飲ができるツアーもあります。蔵元などに関する情報については、球磨焼酎酒造組合の公式ホームページ[球磨焼酎](#)で確認できます。

007-011

Kuma Shochu—Types and Characteristics

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】球磨焼酎 / 焼酎の楽しみ方

【想定媒体】WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Kuma Shochu—Types and Characteristics

There are 27 distilleries in Hitoyoshi Kuma, each with its own distinct range of Kuma Shochu. These distilleries combine the rich traditions of rice shochu distillation with new techniques and innovations to create a wide range of single-distilled, premium shochu.

The flavor profiles of Kuma Shochu are determined by a variety of factors, including the type of rice and koji mold used for the mash, the yeast used in the fermentation process, the pressure at which distillation takes place, and the period of aging. Kuma Shochu can range from light and refreshing, to fruity and floral, to rich and full-bodied. The four categories are Light Type: crisp and delicate, produced through vacuum distillation; Rich Type: intense, full-bodied flavor and aroma, distilled at atmospheric pressure; Flavor Type: defined by the aroma, typically fruity or floral; and Character Type: aged or with a very distinctive flavor produced through non-traditional methods.

Kuma Shochu can be enjoyed straight, on the rocks, with water or soda water, or in a cocktail. The Flavor and Light types are often served on the rocks or with soda water, and many Flavor types are used in citrus-based cocktails. Character and Rich types may be served straight or on the rocks, and Rich types are also typically enjoyed with warm water. The alcohol strength (alcohol by volume, or ABV) of Kuma Shochu can range anywhere between 25 and around 44 percent.

More information on Kuma Shochu, including the different types, drinking styles, and food pairing advice, is available at Kuma Shochu (kumashochu.or.jp), the official website of the Kuma Shochu Makers' Association.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

球磨焼酎 / 焼酎の楽しみ方

人吉・球磨エリアには27の蔵元があり、それぞれが独自の球磨焼酎のラインナップを提供しています。これらの蔵元では、米焼酎蒸留の豊かな伝統と新技術や革新を融合させることで、単式蒸留の幅広い高級焼酎を生み出しています。

球磨焼酎の風味は、もろみに用いられる米と麹の種類や、発酵工程で用いられる酵母、蒸留圧、熟成期間など、さまざまな要素で決まります。球磨焼酎は、軽くてすっきりな風味やフルーティで華やかな風味から熟成のコクが感じられるものまで、さまざまな風味の物をそろえています。多くの球磨焼酎は、4種類に分類することができます。真空蒸留でつくられる、軽くてすっきりした「ライトタイプ」。常圧蒸留でつくられる、熟成されたコクがある「リッチタイプ」。フルーティで華やかな香りが特徴の「フレーバータイプ」。新しい製法でつくられる、芳醇で香り高い「キャラクタータイプ」。

球磨焼酎は、ストレート、ロック、水割りまたはソーダ割に加え、カクテルとしても楽しむことができます。フレーバータイプとライトタイプは、ロックやソーダ割で飲むのが一般的です。フレーバータイプは、シトラス系カクテルにも使われます。キャラクタータイプとリッチタイプは、ストレートまたはロックで楽しむことができます。リッチタイプは、お湯割りで楽しむのが一般的です。球磨焼酎のアルコール度数（ABV（アルコール含有量））は、25～44パーセントくらいまでとなっています。

球磨焼酎の種類、飲み方、フードペアリングに関する情報については、球磨焼酎酒造組合の公式ホームページ球磨焼酎（kumashochu.or.jp）で確認できます。

007-012

Blacksmithing and the Forges of Hitoyoshi

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】鍛冶屋町通り / 城下町の歴史、鍛冶屋について

【想定媒体】WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Blacksmithing and the Forges of Hitoyoshi

Blacksmithing flourished in Hitoyoshi Kuma, peaking during the Edo period (1603–1867). Records from that time indicate there were 60 smithies operating in the Hitoyoshi castle town. Most were making and repairing agricultural tools as well as tools and hardware for farms, homes, and local industry.

Hitoyoshi's forges were located in the artisan quarter of the town, across the river from the castle in a district known as Kajiyamachi (literally “blacksmith town”). The name and boundaries of the district have been preserved, but no working blacksmith forges remain there. Visitors can walk the old district and get a feel for how it was laid out.

Modernization reduced Hitoyoshi's smithing industry to a handful of families. They preserve Hitoyoshi's smithing heritage for future generations and continue to forge tools by hand, without automated machinery, relying on exacting techniques and practiced expertise.

Hoes, sickles, and scythes for farming, as well as machetes, axes, and sledgehammers for forestry, were among some of the most common tools forged by Hitoyoshi blacksmiths. However, demand for such traditional tools has decreased with the advent of power tools and modern agricultural machinery, and the remaining smiths typically specialize in kitchen knives, leisure knives, and other cutting tools, including scissors. Most of these blacksmiths sell products directly from their workshops, so it may be possible to observe part of the forging process.

鍛冶屋町通り / 城下町の歴史、鍛冶屋について

人吉・球磨エリアでは、江戸時代（1603–1867）を絶頂期に、鍛冶屋が繁盛しました。当時、人吉の城下町には、60軒ほどの鍛冶屋が並んでいたという記録が残っています。そのほとんどは、農業で使う工具やその他の道具の製造・修理や、牧場、家庭、工業向けの金物を取り扱っていました。

人吉の鍛冶屋町は、川を挟んで城の向かい側にある職人地区にありました。鍛冶屋町の名前や境界は今も保全されていますが、現在も営業している鍛冶屋は残っていません。ここでは、当時の様子を想像しながら古い街並みを散策することができます。

近代化により、人吉の鍛冶産業はほんの一部の家系に減少していきました。これらの鍛冶屋では、未来の世代のために人吉の鍛冶の伝統を保全しており、自動化された機械に頼らず、鍛錬により磨かれた技術だけで道具を製造しています。

農業用のくわ、かま、大鎌や、林業用のなた、おの、金槌などは、人吉の鍛冶屋がつくるものの中でも最も一般的な道具でした。しかし、このような伝統工具の需要は、動力工具や農業機械の台頭により減少し、残った鍛冶屋は、通常、台所包丁、レジャーナイフ、ハサミといった、その他の刃物を専門に扱っています。今も残っている鍛冶屋の多くでは、作業場から商品を直接販売しているので、鍛造の工程を一部見学することもできるかもしれません。

【タイトル】 青井阿蘇神社 /
 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について
 【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Aoi Aso Jinja Shrine

Aoi Aso Jinja is the oldest extant shrine in the Hitoyoshi Kuma region. It dates from 806 and bears similarities in layout to the imperial palace of that time in Heiankyo (now Kyoto), which was built in 794. Most of the current shrine buildings date from 1610 and are a blend of several architectural styles with some unusual decorative details. These styles and details are used consistently across the structures, creating a distinct aesthetic that can be observed in later shrines throughout southern Kyushu. This consistency of design is uncommon among historic shrines since most shrines include buildings dating from different periods. The *romon* gate, the *haiden* worship hall, and the *heiden* and *honden* halls and the corridor connecting them are collectively designated a National Treasure.

Example of cultural refinement

The shrine is laid out on a north-south axis with mountains to the north, a river to the east, a pond to the south, and a road to the west. This follows the principles of the five elements (*wuxing*), the ancient conceptual scheme forming the basis of Chinese geomancy and feng shui. Heiankyo (Kyoto) had been built 12 years earlier, following the same principles. These shared traits demonstrate an unusual level of cultural sophistication for a territory so far from the capital.

An iconic symbol of the shrine

The approach to the worship hall passes through the two-story *romon* gate. The gate is 12 meters high, with a steeply angled thatch roof. The transoms are decorated with dynamic carvings, including episodes from a series of Confucian teachings (the

Twenty-Four Exemplars of Filial Piety) and a pair of carved white faces at each of the four corners. The carved faces are the only known carvings of their kind in Japan and represent the emotions of pleasure, anger, sorrow, and joy.

Dynamic carvings

Confucian themes are continued across the worship hall and the other structures. They appear alongside carvings of mythical lions frolicking among peonies, dragons emerging from clouds, and delicate renderings of wisteria and other blossoms. The imagery is opulent and auspicious, in a style common during the Momoyama period (1573–1615).

A rare confluence of styles

The Momoyama aesthetic blends with design details popular during the flourishing of Zen Buddhism in the twelfth and thirteenth centuries. These include cusped oval panels, the stepped bracket systems supporting tail rafters extending far into the eaves, and ornamentation at the ends of tie beams. Motifs from Shingon Buddhism appear on the doors of the *honden* main hall, and panels around the sides of the shrine's halls are decorated with crossed wood battens, a feature not commonly seen in shrine architecture outside of the Hitoyoshi Kuma region.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について

青井阿蘇神社は、人吉球磨地方に現存する最古の神社です。この神社の歴史は806年にさかのぼり、その設計は794年に建てられた平安京（現在の京都）に似ています。この神社に現存する建物のほとんどは、1610年にさかのぼるものですが、複数の建築様式を融合したもので、装飾の細部は珍しいものです。青井阿蘇神社の意匠はたいへん統一されており、独特な美学があります。この美しさは、九州南部一帯にその後建てられた神社にも見ることができます。青井阿蘇神社における建物の統一性は、歴史のある神社には稀なものです。ほとんどの神社では、異なる時代の建物が混在しているからです。楼門、拝殿、幣殿、本殿、およびこれらをつなぐ廊は、国宝に指定されています。

文化の洗練

この神社は南北を軸に配置されており、北には山々、東には川、南には池、西には道があります。これは、「五行」の原則に従ったものです。「五行」とは、古くからの概念枠組であり、中国の占いと

風水の基礎になっています。平安京（京都）は、同じ原則に従って、この神社よりも12年前に建てられました。これらの特徴が共有されていることは、都からはるか遠くのこの地域において、稀な水準まで文化が洗練されていたことを示しています。

神社の象徴

拝殿への道は、2階建ての楼門を通して続いています。楼門は高さ12メートルで、屋根は急な角度の茅葺屋根です。欄間の彫刻には、儒教の教えである「二十四孝」が描かれており、四つ角には4対の白鬼が顔を覗かせています。この白鬼の彫刻は、この種の彫刻としては日本で唯一知られているもので、喜怒哀楽を表しています。

活き活きとした彫刻

この儒教の教えは、拝殿および他の建物にわたって続きます。牡丹に囲まれて戯れる神話上の獅子の彫刻、雲から現れる龍の彫刻、また藤や他の花々を繊細に表した彫刻とともに、儒教の教えが描かれています。これらの構図は、華やかで縁起のよいものであり、桃山時代（1573～1615年）に一般的だった様式を用いています。

複数の様式の珍しい組み合わせ

この桃山様式の美学が、禅宗が栄えた12～13世紀に人気のあった細部の意匠と組み合わせられています。これらの意匠には、とがった楕円形の板、ひさしへと遠く伸びる尾垂木を支える「斗拱」(ときょう。段をつけて肘木を組み合わせたもの)、つなぎ梁の端の飾り、といったものがあります。本殿の扉には、真言宗のモチーフが描かれています。また、幣殿と本殿の側面の壁板には、木を交差させた当て木があります。これは、人吉球磨地方以外の神社建築では、あまり見られない特徴です。

【タイトル】 大村横穴群

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Omura Burial Caves

Twenty-six burial chambers are carved into a cliff at the Omura archaeological site behind Hitoyoshi Station. They date from the late sixth century and provide insight into the early history of the Hitoyoshi Kuma region and the reach of the political influence of the Yamato court, which was established in Yamato Province (present-day Nara Prefecture) in the fourth century.

The lateral burial caves have narrow openings that lead to dome-shaped interior chambers which are approximately 2 meters deep. No remains or burial items have been discovered in the caves, but the effort required to carve them into the cliffside suggests they were for influential and well-respected people.

The caves continue horizontally across 800 meters of the cliffside, and several have openings decorated with carvings in relief. The designs include geometric patterns, horses, horse bells, knives, arrows, and arrow quivers. Some of the motifs have weathered almost beyond recognition but are illustrated on signage at the site.

The burial caves and their decorations suggest similarities with the burial methods and iconography of the Kofun tomb mound period (ca. 250–552) and the culture prevalent in regions under Yamato rule. The caves are among the most southerly burial sites discovered to date that have such similarities. The formation of a centralized state in the Japanese archipelago began with the Yamato court, and the Omura Burial Caves suggest Yamato influence extended as far south as Hitoyoshi Kuma by the late sixth century. The entirety of Kyushu did not come under centralized rule until the eighth

century.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

大村横穴群

人吉駅裏にある大村遺跡群には、26基の玄室が崖面に彫られています。これらは、16世紀末にまで遡るもので、人吉・球磨エリアの初期の歴史や、14世紀に大和地域（現在の奈良県）で始まった大和朝廷の政治的影響力をうかがい知ることができます。

横穴式古墳の狭い入口は、深さ約2メートルのドーム型の空間につながっています。古墳群から残骸や埋蔵品は発見されていませんが、崖面を掘るために必要だったと思われる労力から、ここに埋葬されていた人物は権力者であったことがうかがい知れます。

古墳群は崖面を800メートルにわたって横に続いており、うち複数の入口には彫刻による装飾が施されています。デザインには、幾何学模様、馬、武具、弓矢などの武器などが含まれています。中には本来の姿が分からないほど風化したモチーフもありますが、敷地内の標識には元々の姿を描いたものが展示されています。

この古墳群には、古墳時代（ca. 250-552年）の埋葬方法や図像、大和朝廷の支配下にあった地域の文化との類似性を見ることができます。大村横穴古墳群は、今日までに発見されている、このような類似性が見られるものの中でも、最も南方に位置する墓地の1つです。日本の中央集権的国家は大和朝廷より始まっており、大村横穴古墳群は、6世紀末までには南部の人吉・球磨エリアにまで、大和の影響が及んでいたことを示しています。九州全体としては、8世紀になるまで中央集権統治されませんでした。

【タイトル】 人吉温泉 / 歴史や泉質・効能について

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Hitoyoshi Hot Springs

Hitoyoshi has been popular as a hot spring (onsen) town since the 1940s, but people have enjoyed hot-spring bathing in the area since at least the late fifteenth century. Records indicate Sagara Tametsugu (1447–1500), the twelfth Sagara lord of Hitoyoshi Kuma, bathed in a hot spring at a local temple for his health. While there, he composed a waka poem recording his experience and expressing reverence to Kannon, the bodhisattva of compassion.

Each of the bathing facilities in Hitoyoshi has its own hot-spring source. The water from these springs tends to be slightly alkaline and may contain carbonates, which is a combination said to leave the skin feeling silky smooth. There are around 30 hot-spring facilities ranging from large open-air pools in garden surroundings to lively neighborhood baths in rustic bathhouses. Some have private baths that can be reserved for a fee. Public baths are segregated by gender, and bathing is without swimsuits. Some facilities have policies prohibiting tattoos, so please check in advance.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

人吉温泉 / 歴史や泉質・効能について

人吉は、1940年代より温泉町として人気でしたが、温泉自体は、少なくとも15世紀終わり頃より楽しまれていました。人吉の第12代藩主・相良為統（1447-1500年）が、湯治のため地元の寺にある温泉を訪れていたという記録があります。入湯時、為統は、自身の体験を記し観音への尊敬を表した和歌を詠んでいます。

人吉にある温泉施設には、それぞれ別の温泉源があります。この辺りの湧き水は弱アルカリ性で炭酸塩を含んでいる場合があり、お肌をすべすべにしてくれると言われています。庭園に囲まれた広々とした露天風呂から素朴な銭湯まで、この辺りには約30軒の温泉が立ち並んでいます。一部

の温泉施設には、有料で予約可能な貸切風呂もあります。公衆浴場は男女別になっており、水着の着用はありません。タトゥーを禁止する温泉施設もあるため、訪れる前にご確認ください。

007-016

Annual Events at Aoi Aso Jinja Shrine 人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 青井阿蘇神社 / 三大祭と球磨神楽

【想定媒体】 看板 WEB

できあがった英語解説文

Annual Events at Aoi Aso Jinja Shrine

There are regular festivals held at Aoi Aso Jinja to celebrate good fortune, health, and the harvest, and to express gratitude to the enshrined deities who protect the region. The largest and oldest celebration is the Okunchi Matsuri, or Okunchi Festival. It marks the anniversary of the shrine's founding and runs from October 3 to 11. Rituals performed over the course of the festival include ceremonial processions and Kuma Kagura, a regional form of *kagura* dance offered in worship to the deities.

The Okunchi Festival

The highlight of the festival is the procession on October 9, the anniversary of the shrine's founding. The shrine's deities are transferred to *mikoshi* portable shrines and carried through the streets of the town, accompanied by Shinto priests, flag bearers, and lion dancers. On the eve of the shrine's founding, Kuma Kagura is performed in the *haiden* worship hall on a stage designed to symbolize the cosmos. This ancient form of *kagura* is unique to Hitoyoshi Kuma. It is designated a Nationally Important Intangible Folk Cultural Property.

Other annual celebrations at Aoi Aso Jinja

The Nagoshi Matsuri is a period for purification that has been observed at Aoi Aso Jinja since the fourteenth century. Purification rituals include passing through a standing circle made of bamboo. The rituals provide participants with an experience of spiritual cleansing and are typically held at the end of June.

The Hatsuuma Taisai is generally held in early March at the Inari Shrine on the grounds of Aoi Aso Jinja. People come to pray for bountiful harvests and commercial success in the year ahead. The tradition began at Aoi Aso Jinja in the eighteenth

century when the Inari Shrine was founded.

The dates of the Nagoshi Matsuri and the Hatsuuma Taisai vary in accordance with the lunar calendar.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

青井阿蘇神社 / 三大祭と球磨神楽

青井阿蘇神社では、幸運・健康・豊作を祝い、ここに祀られている地域を守る神々への感謝を表すため、一年を通して定期的に祭が開催されます。最も大きく、最も古いお祭りは、「おくんち祭」です。おくんち祭は、この神社の創建記念日を祝って、10月3日から11日にかけて開催されます。この祭りの間に行われる儀式には、神幸行列や球磨神楽があります。球磨神楽とは、神々に祈って捧げられる神楽踊りの、地域的な一形態です。

おくんち祭

このお祭りのハイライトは、青井阿蘇神社の創建記念日である10月9日の行列です。この神社の神々は神輿に移されて、街の通りを運ばれていきます。それに、神職、旗持ち、獅子舞が同行します。この神社の創建前夜には、拝殿の舞台で球磨神楽を踊ります。その舞台は、宇宙を象徴しています。この古代の神楽は、人吉・球磨に固有のものとなっています。球磨神楽は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

青井阿蘇神社の他の年間祭事

夏越祭（なごしまつり）は、14世紀以来、青井阿蘇神社で清めの儀式として行われてきました。清めの儀式には、竹でできた垂直の輪を境内に立て、それをくぐる、といったものがあります。これらの儀式は、参加者を霊的に清めるもので、通常、6月末に行われています。

初午大祭は、青井阿蘇神社境内の稲荷神社で、通常3月初めに行われます。人々は、これから1年間の豊作と商売の成功を祈りに来ます。初午大祭は、稲荷神社が建造された18世紀に、青井阿蘇神社で始まりました。

夏越祭と初午大祭の正確な日付は、陰暦に従って変わります。

007-017

Customs and Traditions of Hitoyoshi Kuma

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 日本遺産 / 民俗文化と球磨焼酎

【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Customs and Traditions of Hitoyoshi Kuma

The Sagara family ruled the Hitoyoshi Kuma region continuously for nearly 700 years. They provided stability and contributed significantly to the economic growth of the region. Their legacy can be felt through tangible cultural heritage that includes artwork and historical sites, as well as through the customs and traditions that still permeate daily life today. These include the distillation of shochu from rice; Unsun Karuta, a unique card game with roots in the sixteenth century; and the Sagara 33 Kannon Pilgrimage, a practice that the local community has preserved since the Edo period (1603–1867).

Kuma Shochu: a regional spirit distilled from rice

Shochu distilled from rice has been produced in the Hitoyoshi Kuma region since the early sixteenth century. Master distillers maintained traditional production methods at a time when other distillers were turning to cheaper alternatives such as sweet potatoes and barley. They were able to continue to use rice despite its high cost largely because of efforts made by the Sagara to improve the local yield, which included the adoption of irrigation systems. Shochu distilled from rice is popular throughout the Hitoyoshi Kuma region, and a strong culture has developed around it that includes traditional drinking games and songs. Today, shochu from Hitoyoshi Kuma is protected by a Geographical Indication (GI) and is sold as Kuma Shochu, a premium, single-distillation brand.

Unsun Karuta: a 500-year-old card game

Unsun Karuta is played with 75 cards across five suits. The game evolved from a game

introduced by Portuguese traders in the sixteenth century and became popular throughout Japan. It was outlawed under a series of conservative measures (the Kansei Reforms) implemented in the late eighteenth century by the Edo shogunate, because the game can be used for gambling. Unsun Karuta died out everywhere in Japan except Hitoyoshi Kuma, suggesting the Sagara were sympathetic to the people and their pastimes.

Sagara 33 Kannon Pilgrimage

Each year on the day of the spring equinox and for seven days over the autumn equinox, people visit worship sites dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion, on the Sagara 33 Kannon Pilgrimage. The pilgrimage was popularized in the Edo period (1603–1867), and the worship sites were selected from over 100 candidates by Iguchi Takechika, a Sagara retainer. For the duration of the pilgrimage period, members of the community celebrate with their neighbors and with visiting pilgrims by sharing food and drink.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

日本遺産 / 民俗文化と球磨焼酎

相良家は、700年近くもの間、人吉球磨地方を統治し続けました。相良家は、人々に安定を与え、この地方の経済成長に大きく貢献しました。相良家の遺産は、芸術品や史跡といった形のある文化遺産を通して感じられるとともに、現在の日々の生活に浸透している慣習と伝統を通して感じられます。これらの慣習・伝統には、米焼酎の蒸留、ウンスカルタ（16世紀に起源のある独特なカルタ遊び）、「相良三十三観音めぐり」といったものがあります。「相良三十三観音めぐり」は、地域の人々が江戸時代（1603～1867年）から守ってきた慣習です。

球磨焼酎—米から作るこの地域の蒸留酒

人吉球磨地方では、16世紀初めから、米から作る焼酎の蒸留が行われてきました。他の蔵元がサツマイモや麦などのより手ごろな原料への切り替えを行っていく中、人吉・球磨エリアの蔵元は、焼酎の伝統的製法を守り続けました。コストが増加したにもかかわらず、人吉・球磨エリアで米の使用が続けられたのは、相良藩主が灌漑システムなどの戦略を採用したことで、米の生産高が増加したおかげでもありました。米から蒸留される焼酎は、人吉球磨地方全域で人気があります。酒席での伝統的な遊びや唄など、球磨焼酎を中心に力強い文化が発展してきました。現在、人吉・球磨の焼酎には「地理的表示」で保護されており、単式蒸留の高級銘柄である「球磨焼酎」として販売されています。

ウンスンカルター500年の歴史があるカルタ遊び

ウンスンカルタは、5組・計75枚のカルタを用いて遊びます。ウンスンカルタは、16世紀にポルトガルの商人たちがもたらした遊びが進化したもので、全国で人気を博しました。このカルタ遊びは、賭けに使われる可能性があったため、18世紀末に行われた一連の保守施策（寛政の改革）のもと、幕府により禁止されました。ウンスンカルタは全国で廃れましたが、人吉は例外でした。これは、相良家が、人々とその娯楽に同情的だったことを示唆しています。

三十三観音巡り

毎年、春分の日と秋分を含む7日間、人々は、「相良三十三観音めぐり」で、慈悲の菩薩を祀った祈りの場所を訪れます。相良三十三観音めぐりは、江戸時代（1603～1867年）に広がりました。祈りの場所は、相良家の家臣である井口武親が、100を超える候補から選びました。相良三十三観音めぐりの期間中、地元の人々は、近隣の人や訪れる参拝者と飲食物を分かち合って、これを祝います。

【タイトル】球磨川 / 球磨川の交通・輸送の歴史と球磨川くだり

【想定媒体】WEB パンフレット

できあがった英語解説文

The Kuma River

Hitoyoshi is surrounded by mountains, and while they provided a natural defense for the castle town, they made transport and trade difficult. In response, in the late seventeenth century, the Kuma River was developed as a major waterway and helped spur economic growth in the region.

Natural obstructions were cleared and the river was improved for boat traffic under the direction of Sagara Yoritaka (1641–1703), the 22nd head of the Sagara family. The project took several years and was finished in 1664. Boats were then able to pass safely between Hitoyoshi and Yatsushiro, a castle town and trading post at the mouth of the river, around 50 kilometers northwest of Hitoyoshi.

The development of the river benefited the Sagara and ordinary people in many ways. Travel to the capital, Edo (now Tokyo), became easier and quicker. Communities could deliver their annual tributes (taxes paid in rice) to the Sagara lords directly to the castle gate that faced the river, and beyond which were two rice-storage houses. The Sagara also commissioned irrigation systems to channel river water to rice fields further inland. More land for rice farming led to increased yields, which further contributed to the power of the Sagara and the economic wealth of the region.

From the late nineteenth century, Japan modernized rapidly, and widespread development created an increased demand for timber. Logging became a lucrative industry along the river, and timber was transported downstream in the form of log rafts. The industry ultimately declined as modern construction materials became more readily available. However, this coincided with the growth of the domestic tourism industry, and timber rafts were gradually replaced with pleasure boats and, more recently, with whitewater rafts and stand-up paddle boards.

球磨川 / 球磨川の交通・輸送の歴史と球磨川くだり

人吉を囲む山々は、城下町にとっては天然の防衛手段となった一方で、移動、貿易を困難にしました。17世紀末になり、球磨川は主要な水路として発展し、人吉球磨地域の経済成長を一気に促しました。

相良家第22代藩主の相良頼喬（1641-1703年）の命令により、自然の障壁が取り除かれて球磨川は開放され、船が通りやすくなりました。開発計画には数年を要しましたが、1664年に遂に完了しました。球磨川河口の城下町と貿易拠点であり、人吉から北西へ50キロ進んだところにある八代と人吉の間を、川舟が安全に行き来することができるようになりました。

球磨川の開発は、相良家と一般の人々に多くの面で恩恵をもたらしてくれました。首都である江戸（今日の東京）へは、はるかに容易で速く移動できるようになりました。相良藩の川に面した城の門をくぐると米蔵が2棟建っており、各地域の人々は、相良藩へ直接年貢を届けることができました。また、相良藩は、灌漑システムを導入し、川の水をより内陸の田んぼへと引けるようにしました。稲作農業が可能な土地が増えると、生産量は高くなり、それにより相良藩の勢いは増し、地域は経済的に豊かになりました。

19世紀末になると、日本は急速に近代化が進み、開発の拡大により、木材の需要も高まりました。林業は川沿いのもうかる産業となり、木材はいかだを使って下流へ運搬されました。そのうち現代の建築資材が利用しやすくなると、林業は衰退していきました。しかし、これが国内旅行産業の成長と重なり、木造のいかだはレジャー用ボートに取って代わられ、また、より最近では、ラフティングボートやスタンドアップ・パドルボードに取って代わられました。

007-019

Former Aoi Family Residence

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 青井阿蘇神社 /
旧青井家住宅母屋・西蔵・東蔵・門、禊橋（登録有形文化財）
【想定媒体】 WEB

できあがった英語解説文

Former Aoi Family Residence

Fifty-eight generations of the Aoi family served as head priests of Aoi Aso Jinja and lived within its precincts between the early ninth and late nineteenth centuries. The Former Aoi Family Residence dates from the Edo period (1603–1867) and complements the shrine’s halls and other structures that date from the same era.

Several scholars and other notable guests have stayed at the residence, including Takayama Hikokuro (1747–1793), a samurai and historian influential in political theory of the late Edo period. In 1877, the residence served as a base for Hitoyoshi troops supporting samurai Saigo Takamori (1828–1877) in his unsuccessful uprising against the Meiji government, known as the Satsuma Rebellion. A sword mark on a wooden pillar in the home’s tea room is believed to date from this time.

Guests were accommodated in the *keishoden*, a formal tatami room with views of the garden on two sides. An illustrated four-panel set of sliding doors depicts wild geese flying against a backdrop of the moon and ducks sheltering among reeds, imagery popular in Japanese art and literature. The grounds of the residence include storehouses with displays of artifacts connected with the shrine and its festivals, an ancient well, and a traditional garden with evergreen shrubs, plum trees, and rock arrangements.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

青井阿蘇神社 / 旧青井家住宅母屋・西蔵・東蔵・門、禊橋（登録有形文化財）

青井家は、9世紀初めから19世紀末まで、58代にわたって青井阿蘇神社の宮司を務め、境内で暮らしていました。旧青井邸は江戸時代（1603～1867年）にさかのぼり、同じ時代の神社各殿と他の建物を補完するものです。

この旧青井邸には、複数の学者や著名人が滞在してきました。そのひとり、江戸時代末期の政治論において影響力があった、武士であり歴史家の高山彦九郎（1747～1793年）です。1877年、この住宅は、武士の西郷隆盛（1828～1877年）が明治政府に対し反乱を起こした際に、西郷を支持した人吉隊の拠点となりました。西南戦争として知られるこの反乱は、失敗に終わりました。茶室の木材の一部には、この時のものだと考えられる刀傷があります。

継承殿は、客人が宿泊したところで、二面に庭園の眺めを楽しむことができる畳の部屋です。4枚1組の引き戸には、月を背景に飛ぶ雁と、葦の間に隠れる鴨が描かれています。これは、日本の芸術や文学で人気のある題材です。この住宅の敷地には蔵があり、青井阿蘇神社とその祭りに関するものが展示されています。また、古い井戸や伝統的な庭園もあります。庭園には、常緑低木、ウメの木、また飾りの石があります。

【タイトル】 日本遺産 / 相良700年のストーリー

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

The Sagara Family

The Sagara family ruled the Hitoyoshi Kuma region continuously for nearly 700 years after being appointed to govern Hitoyoshi by the Kamakura shogun Minamoto no Sanetomo (1192–1219). They were patrons of Buddhist culture, and adopted new practices and technologies in line with the times. Their measured rule and contributions to economic growth through public works such as irrigation systems brought prosperity and stability to the region. This stability has sustained a rich cultural heritage and protected cultural properties on par with some of the country's ancient capitals, such as Kyoto.

Properties and artwork of significant cultural value at locations throughout the Hitoyoshi Kuma region tell the story of the Sagara family. They include Buddhist imagery from the Nara period (710–794) and sites of worship such as Aoi Aso Jinja Shrine, which dates back to the ninth century. The Sagara rule did not begin until the twelfth century, but the existence of these and many other cultural assets from the Nara and Heian (794–1185) periods are a testament to the family's commitment to preserving local culture.

Most of the Sagara family members were buried at Ganjoji Temple. The temple was built in 1233 by Sagara Nagayori (1177–1254), the founder of the family. Visitors can also explore the site of Hitoyoshi Castle, from where the Sagara family ruled Hitoyoshi Kuma. In addition to stone ramparts with original sections from the late sixteenth century, the reconstructed parapets, battlements, and gates convey a sense of the castle as it appeared between 1589 and 1871.

日本遺産 / 相良700年のストーリー

相良家は、鎌倉の将軍・源実朝（1192～1219年）によって人吉球磨地方に任じられて以降、700年間近く人吉地方を統治し続けました。相良家は仏教文化を重んじ、新たな手法や技術を時代に合わせて取り入れました。相良家は、慎重な統治を行い、かんがいなどの公共事業によって経済成長に貢献し、地域に繁栄と安定をもたらしました。この安定により、京都のような国の古都に匹敵する、様々な文化財と豊かな文化遺産が守られてきました。

人吉の各地にある重要な文化的価値を持つ芸術品や財産は、相良家の物語を伝えてくれます。これらは、奈良時代（710～794年）の仏像や、9世紀にさかのぼる青井阿蘇神社などの祈りの場といったものです。相良家の統治がはじまったのは12世紀ですが、これらのものや、奈良時代や平安時代（794～1185年）にさかのぼる多くの文化財が存在していることは、相良家がこの地域の文化を保護しようと努めてきたことの証しです。

相良一族のほとんどは、願成寺に埋葬されています。この寺は、相良家の初代当主である相良長頼（1177～1254年）が1233年に建立した寺です。相良家の人吉・球磨を治めていた人吉城を散策することもできます。16世紀からそのまま残っている石でできた城壁、再建された胸壁、狭間胸壁、門などは、人吉城（1589-1871年）の当時の雰囲気を与えています。

007-021

Buddhist Artwork and a Legacy of Cultural Preservation

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】 日本遺産 / 仏教美術と三十三観音巡り

【想定媒体】 パンフレット

できあがった英語解説文

Buddhist Artwork and a Legacy of Cultural Preservation

Numerous faiths and beliefs have taken root in the Hitoyoshi Kuma region and are still maintained as part of the area's cultural heritage. The Sagara family who ruled Hitoyoshi Kuma continuously for nearly 700 years brought stability to the region and fostered a strong culture of preserving the region's wealth of cultural assets, including shrines, temples, and Buddhist artwork, some of which date from the Nara (710–794) and Heian (794–1185) periods.

The Sagara were originally from the area of present-day Shizuoka Prefecture and were appointed to govern Hitoyoshi by the Kamakura shogun Minamoto no Sanetomo (1192–1219). Rather than imposing an entirely new set of values and beliefs, as many regional rulers did in pre-modern Japan, the Sagara protected and preserved the existing local culture. A strong tradition of cultural preservation developed in the region and is evidenced by the volume and quality of cultural assets, as well as community-driven traditions such as the Sagara 33 Kannon Pilgrimage.

The pilgrimage is held on the day of the spring equinox and for seven days over the autumn equinox. It actually includes 35 worship sites dedicated to Kannon, the bodhisattva of compassion, although certain sites share the same pilgrimage circuit numbers, which run from 1 to 33. The pilgrimage sites include worship halls on the grounds of temples and miniature halls beside rice fields and in woods, many of which are maintained by the local community. The pilgrimage periods are very festive as members of the community share food and drink with their neighbors and with visiting pilgrims.

日本遺産 / 仏教美術と三十三観音巡り

人吉球磨地方には数々の信仰が根づいており、この地域の文化遺産の一部として保持されています。700年近くにわたり人吉・球磨を納めた相良家は、地域に安定をもたらし、一部には奈良（710-794年）・平安（794-1185年）時代にも遡る神社仏閣、仏教にまつわる芸術品など、非常に多くの文化遺産を保全する強力な文化を育みました。

相良家はもともと現在の静岡県出身で、将軍・源実朝（1192-1219年）に任ぜられて人吉を治めるようになりました。前近代の日本では、藩主がまったく新しい価値観と信仰を押しつけることが一般的でしたが、相良家は、この地方の既存の文化を保護・保存しました。この地域では、文化を保護する強力な伝統が発展しました。この伝統の証拠となるのは、文化財の量と質であり、「相良三十三観音めぐり」といった地域社会の伝統です。

三十三観音巡りは、春には春分の日、そして秋には秋分の日を含む7日間にわたって行われます。観音様が祀られている場所は実際には35箇所ありますが、複数の箇所に同じ番号が用いられて場所もあることから、番号は1～33番になっています。観音巡りの場所には、境内にある拝殿や、田んぼ沿いや林の中にある小さなお堂などがあり、その多くは地元の人々が管理しています。相良三十三観音めぐりの期間中、地域社会の人々は、近隣の人や訪れる参拝者と飲食物を分かち合い、祝いムードになります。

007-022

Kuma Shochu—Distillation and History 人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵

【想定媒体】パンフレット

できあがった英語解説文

Kuma Shochu—Distillation and History

Shochu made from rice has been produced in the Hitoyoshi Kuma region since the early sixteenth century. The spirit can also be distilled from sweet potatoes, barley, and brown sugar, but the rice variety is the original base. The traditions of making shochu have been maintained by the master distillers of Hitoyoshi Kuma, who continued to use rice when other distillers were switching to more affordable ingredient alternatives in the late Edo period (1603–1867).

Kuma Shochu is a premium shochu brand protected by a Geographical Indication (GI). It is a single-distillation shochu distilled entirely from rice. Only spring water from the Hitoyoshi Kuma region is used in the mashing and fermentation processes. There are 27 distilleries in Hitoyoshi Kuma, each with its own distinct range of Kuma Shochu. Many distilleries offer tours, some of which include tastings. Reservations are required.

Kuma Shochu was traditionally distilled at atmospheric pressure over a wood fire, using a wooden barrel-like still. Today, distillers use both atmospheric distillation and vacuum distillation (reduced pressure) methods to produce Kuma Shochu with a wide variety of flavor profiles. Atmospheric distillation tends to result in a rich and intense flavor and aroma. In contrast, vacuum distillation typically produces a milder flavor and more delicate aroma.

Rice was a highly valued commodity throughout Japan, and shochu made from rice was thus a luxury reserved for the ruling classes in most areas. In Hitoyoshi Kuma, however, the ruling lords accumulated a significant surplus of rice, allowing rice shochu to be produced in much larger quantities. They accomplished this by implementing irrigation systems and other strategies to improve rice yields. The wide availability of the spirit fostered its popularity and contributed to the strong Kuma Shochu culture that developed in the region.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

球磨焼酎 / 歴史と焼酎蔵

人吉球磨地方では、16世紀初めから、米で焼酎がつくられてきました。この蒸留酒はサツマイモ、麦、黒糖からも蒸留することができますが、米でできたものが本来の姿です。人吉・球磨エリアの蔵元は焼酎の伝統的製法を守っており、他の蔵元が江戸時代（1603-1867年）終わり頃に、より手ごろな原料への切り替えを行っていく中、米の使用を続けました。

球磨焼酎は、地理的表示（GI）で保護されている高級焼酎ブランドです。米だけを使って単式蒸留機で作られた焼酎です。もろみづくりと発酵には、人吉・球磨エリアの湧き水のみが使用されます。人吉・球磨エリアには27の蔵元があり、それぞれが独自の球磨焼酎のラインナップを提供しています。見学ツアーを提供している蔵元も多く、一部では試飲もできます。予約が必要です。

従来、球磨焼酎は、木製樽のような蒸留器を使って、炭火により常圧で蒸留されていました。現在、幅広い風味を有する球磨焼酎の製造には、常圧蒸留と真空蒸留（減圧）の両方が用いられます。常圧蒸留では、濃厚な味と香りが生まれる傾向があります。一方の真空蒸留では、優しい風味と繊細な香りが生まれます。

米は全国で大変貴重な存在であったため、米でできた焼酎は上流階級のみが楽しめる高級品でした。しかし、人吉・球磨では、藩主が大量の余剰生産分の米を貯めていたことで、より多くの米焼酎を作ることができました。これは、領主が灌漑システムなどの戦略を採用したことで米の生産高が改善されたためでした。焼酎が広く楽しまれたことから人気が上がり、この地域で球磨焼酎文化が発展していきました。

007-023

Kajiyamachi—Exploring Hitoyoshi's Traditional Blacksmith District

人吉市多言語解説整備支援事業検討協議会

【タイトル】鍛冶屋町通り / ウンスンカルタ、味噌醤油・茶

【想定媒体】WEB パンフレット

できあがった英語解説文

Kajiyamachi—Exploring Hitoyoshi's Traditional Blacksmith District

The sharp ring of hammers striking iron once filled the air of Kajiyamachi, the blacksmith district of Hitoyoshi in the Edo period (1603–1867). Although there are no working forges in Kajiyamachi today, the district has been preserved, and the main street is now lined with traditional family-run businesses. Signs (mostly in Japanese) along the street and in some of the properties explain the distinguishing features of merchant homes and aspects of local culture, such as Unsun Karuta, a traditional card game once played by Hitoyoshi's blacksmiths.

Touring a soy sauce brewery

Kamada Jozoyo is a soy sauce and miso producer operating out of a merchant home from the Taisho era (1912–1926). The property has been renovated over the years but retains many of its original features and design elements. Visitors can take a free tour of the brewery to learn about the production of soy sauce and miso.

Tea and cultural experiences

Tateyama Shoten is a historic merchant home and tea shop with a tasting space overlooking a traditional teahouse garden. The Tateyama family have been purveyors of tea since 1877. They offer tea brewing workshops, ikebana flower arranging, matcha tasting, and tea ceremony experiences that can include wearing a kimono.

Unsun Karuta, the ancient card game

Visitors to Kajiyamachi can learn about Unsun Karuta, a game played with 75 cards

across five suits. Unsun Karuta evolved from a game introduced by Portuguese traders in the sixteenth century. The card game became popular across Japan, but due to the gambling potential of the game, it was outlawed under a series of conservative measures (the Kansei Reforms) implemented in the late eighteenth century by the Edo shogunate. Despite these measures, Unsun Karuta continued to be played in Hitoyoshi Kuma and has survived to this day. At Unsun Karuta no Ie in Kajiyamachi, visitors can play and learn about the game, which is designated an Important Intangible Folk Cultural Property.

上記解説文の仮訳（日本語訳）

鍛冶屋町通り / ウンスンカルタ、味噌醤油・茶

江戸時代（1603-1867年）、人吉の鍛冶屋町では、鉄を打つ金槌の鋭い音があちこちで鳴り響いていました。今日、鍛冶屋町で営業している鍛冶屋はもういませんが、地区の保全が行われており、大通りには現在、伝統的な家族経営の店が軒を連ねています。道沿いや一部の建物にある標識（主に日本語）には、商人の家の特徴や、人吉の鍛冶屋たちがかつて遊んでいたウンスンかるたなど、地元の文化が紹介されています。

醤油蔵見学

釜田醸造所は、大正時代（1912-1926年）の商人の屋敷で営業を行っている、みそ・しょうゆ蔵です。建物は何度か改修が施されているものの、本来の特徴やデザイン要素の多くが今でも残されています。醸造所は無料で見学可能で、みそ・しょうゆの生産工程を学ぶことができます。

お茶と文化体験

立山商店は、古い商人の屋敷であり、伝統的な茶屋庭園を見渡すことのできるテースティングスペースのある茶屋です。立山家は、1877年よりお茶の御用商人でした。お茶の淹れ方ワークショップ、生け花、抹茶のテースティング、着物の着付け付き茶会体験などを提供しています。

伝統的なウンスンカルタ

鍛冶屋町では、5組み75枚からなるウンスンカルタについて学ぶことができます。ウンスンカルタは、16世紀にポルトガルの商人たちがもたらした遊びから進化したものです。このカルタ遊びは、日本中で人気になりました。しかし、この遊びは賭けに使われる可能性があったため、18世紀末に行われた一連の保守施策（寛政の改革）のもと江戸幕府により禁止されました。これらの施策にもかかわらず、人吉・球磨ではウンスンカルタが遊び続けられ、現在まで生き残っています。鍛冶屋町にあるウンスンかるたの家では、ウンスンかるたで遊んだり、ウンスンかるたについて学ぶことができます。ウンスンかるたは、重要無形民俗文化財に指定されています。